
KING
キング
十月號







諸葛孔明の神智

（世界史上の華繪卷　その二十二）＝裏面參照

伊東紅雲筆



孔明は衛兵に向つて云つた。
『十五萬は愚、二十萬三十萬、物の數ではない。おぬし等はすぐさま武裝を解いて百姓に姿をかへよ』
衛兵はびつくりした。が、外ならぬ孔明の命令。忽にして俄農夫となつた。
『各二十人づつ、城中の四門に出でて、水を撒き、塵を拂ひ、何氣なき體にとりつくろひ、敵が迫り來ようとも動くなよ』
かたく申渡して、彼自身は道士の被る頭巾を戴き、淸楚な鶴氅を身にまとひ、城の高樓に上つた。
金鼓の響、轟々として地を動かし、今ぞ大軍どつともみにもんで押寄せ來る。この旗指物を眼下に見て、孔明は騒がず焦らず、端然として香を焚き琴を彈いた。その聲瀏喨として城の內外に水のやうに流れる——。
遙かにこれを望み見て、驚いたのは敵將司馬懿。
『伏勢があるぞ、引返せ』とばかり、さつと陣を引いた。危機一髮のところで、孔明は身を全うした。
火傷をした小兒は赤い布片を見ても恐怖するといふ。司馬懿は、幾度か孔明と戰つて、幾度か孔明の謀に陷つて居たので、此時も輙く早呑込をしたのだが、孔明がそれをねらつた玄機、鬼神も測り難き處。それにしても、かゝる大事に臨んで、從容迫らざる孔明の態度は、眞にこれ稀世の雄である。

ドモリ

自宅療法 無代進呈

實地矯正に入る事の出來ない人々に社會奉仕の一端として院長名にて送呈す。希望者は住所氏名を明記し申込あれ。

本院の矯正法は本院長世界的發明の無口形吃音矯正法と申して、相手に笑はれる様な見苦しい口形は一切用ひない、普通人同様の話振りで治す矯正法であります。本院の實地矯正に入つた者は十六日間の短期間に、演説は元よりモツト六かしい、キップを買ふ時、初對面、口答試問、其他すべての場合に普通人同様にスラスラ話せる様に治つて居ります。斯の如き偉大なる成績は吃音矯正上の一大革命として目下斯界の注目の的となつて居ります、本院では本法を廣く世に傳へんが爲め一般に公開して居りますから矯正法の參觀を希望致します。

東京市神田駿河臺十四（中央大學前）

東京吃音學院

斯界の權威

醫學博士 小林先生藥效御證明
ドクトル 高木先生藥效御證明

月やく おろし 專門藥

滞りて、他薬を用ひても效なく、御心配の方は前記兩先生から特に本劑のために御證明下さいました私方の秘藥で一日も早く御安心下さい。キット通經の御滿足を得て戴きます。三錢切手封入御手紙下さい。詳しくお知らせします。

大阪市南區高津三番丁一〇
月やくおろし 家傳藥本家 **和田山たつゑ**

鼻すぢが骨から高くなる

◇鼻骨發育促進器◇鼻骨矯正起隆器



人體は何れの部分でも刺戟運動に依り發育し矯正に依り正化する。殊に鼻は大部分軟骨で有るから此刺戟と矯正の二原理を適當に施さへすれば高くも良形にも當然出來る。此原理が即ち本器〔最新特許〕となつたので◇總低鼻◇鞍鼻◇段鼻◇猪鼻◇鱶廣鼻◇短鼻◇曲り鼻其他の形狀が自宅に於て根本より隆起整形出來得るのである。鼻を高く正しくする程美顔に効ある方法は無し。少しにても不備ある者は「キング」と記入申込次第詳細説明書無代封送す。

東京本所兩國二丁目七番地

藤澤研究所

鳥印 腰美帯



皆様存じですか？

腰美帯を用ひますとどんな肥滿した方でも見違へるほど細そり美しい容姿になります。下腹部のふくらみも程よく締りスッキリと浮き出た様な美しさを作ります。然も夏は汗除け冬は保温、伸縮自在ですから活動に便利誰方にも使用が出來ます。

普通型二円三十錢
特ゴ型二円五十錢
送料内地十八錢領土五十錢

大日本雄辯會講談社代理部
（振替東京六六二九番）

說明書進呈

小學校卒業生は必ず本會へ入會せよ!!

◁通信教育界のオーソリチー▷

內容完備せる世界第一のコレスポンデンス・スクール



本會の全景

▽創立廿八週年第五十五回新學期開講△

▽無代進呈・檢定試驗總覽つき獨學成功案內

會長 前文部大臣 正三位 尾崎行雄
女學部監 前愛國婦人會長 從三位 下田歌子

藍綬褒章を拜受せる

本會の三大講義錄

國民中學講義錄
◎獨學で中學卒業の學力が得られる
◎一ケ年半卒業◎月三回發行◎一ケ月會費壹圓廿錢

高等女學講義錄
◎獨學で高女卒業の學力が得られる
◎一ケ年卒業◎月二回發行◎一ケ月會費八拾錢

實業補習講義錄
◎獨學で立派に補習教育が受けられる
◎一ケ年卒業◎月二回發行◎一ケ月會費五拾錢

▽此の際入會者へ大特典提供△

今が入會するのに一番好い時だ

◎大至急入會を斷行せよ

◎通學者(好評)の自習參考書

本會の十大特長

▼基礎が固い▼會費が廉い
▼信用が厚い▼卒業が早い
▼學制が正しい▼指導が良い
▼內容が新しい▼教授が巧い
▼講師が偉い▼成功が確い

◎獨學成功案內
◎各科入會案內
つき
講義錄見本 規則
—申込次第進呈す—

いつ入會しても講義は第一號から毎號順序よく發送する

藍綬褒章拜受 創立廿八週年

◉東京駿河台 **大日本國民中學會**

電話神田一一一一番一一一二番一一一三番 振替東京四二〇〇番

北畠顕家



東京・村田由藏氏所藏

磯田長秋筆

陸奥靈山に據れる北畠顯家

賊將足利尊氏を湊川に防いだ官軍は正成討死し、義貞又退いて、畏くも後醍醐天皇は再び比叡山に行幸せられること、なつた。

かくして後醍醐天皇よりの勅書は、陸奥守として陸奥の靈山にあつた北畠顯家のもとへ屆けられた。

『朕、今吉野に在つて諸國勤王の義士を促して京都回復を期す。卿速かに官軍を率ゐて西上せよ。天下の平定は卿の力を俟つこと多し』と。忠君愛國の至誠に燃ゆる顯家其他の將士、勅書を拜して如何ばかり感激したことか。

而して、顯家は只獨り裏山にのがれて、尊氏討伐の畫策に耽るのであつた。乍然、凶賊等は山を圍んで發足の機を得ず、惱ませ給ふ宸襟の程を拜察し奉りては、只鎧の袖を絞るのみであつた。

其の時、偶と顯家が耳にしたのは聞き慣れない鳥の聲。目を擧げて見れば一羽の鷹がさながら何かを暗示するもののやうに、行きつ、戻りつ、同じ方向を幾度も往復してゐるのであつた。

顯家は我知らずハタと膝を叩いた。その鷹の行手にこそ、斷崖絕壁を傳はつて、即ち敵の腹背を突くべき意外の間道があつた。顯家が再び飛び去る鷹の姿に眼を移した時、心なしか金色まばゆく、神の御使かと思はれた。

顯家が義良親王を奉じて、西上の途に上つたのはそれから間なくの事であつた。

此の名畫は、靈山の風景と、南朝の忠臣顯家卿の忠節に感激した磯田長秋氏が、或は靈山に籠り、或は寫生の爲に妙義山へ登るなど、苦心慘憺、文字どほり心魂を籠めた結果に成るもの。宜なるかな此の作品の帝展に出品されるや、畫壇は擧げて推賞し、直ちに氏は帝展委員の榮擧をかち得たのであつた。歷史的な意味からも當代に誇るべき名畫の一つと云へよう。

秋まき草花は數百種あるが、其の中で栽培が容易で、そして殊に美しい花を開く草花十五種を選定し、其の種子を左記の通りお安くお分ち致します。

秋蒔草花種子 十五種

一、矢車草 二、デジー 三、フロックス 四、ポッピー 五、小町草 六、スヰートピー 七、アスター 八、金盞花 九、春車菊 十、石竹 十一、花菱草 十二、ヘリクリサム 十三、忘レナ草 十四、パンジー 十五、ルピナス（まき時九月末より十一月迄）

以上十五種十五袋栽培法の本一册付特別割引一圓二十錢、ハガキにて秋まき草花十五種送れと御申込次第代金引替にて送ります。

東京神田小川町一
花の會（振替東京二〇八番）

花の會發行圖書

◉面白い草花の栽培（秋の卷）
定價金三十錢（送料不要）

秋種をまいて來年早々美しい草花を咲かせる草花數十種を選び其の種のまき方から栽培法一切を説明した良書であります。秋まきの草花は殊に美しい花をさかせるものですから是非栽培をおすゝめ致します。

◉球根草花の栽培（春の卷秋の卷）
定價金三十錢（送料不要）

來年の春に西洋草花の美しいのを咲かせて見ようとすれば今の內に本書を御覽になり九月末からおそくも十二月中に球根を植込まねばなりません。本書は小册子ではあるが球根の栽培を誰にも分る様に書いてあります。振替貯金で御注文下さい。二錢切手十五枚でもよし。

◉菊の作り方秘訣 全一册
定價金五十錢（送料不要）

菊を見て菊作らうと思ひけりで、來年こそは立派な菊花を作つて見ようと思ふ方は速に本書を御一讀下さい。菊の根分から用土の作り方栽培等一切を親切丁寧に説明した良書であります。

東京神田小川町一番地
花の會出版部
電話神田二三一四番・振替東京二〇八番

草花雜誌無代進呈

●本會は全國の草花愛好者の團體であります。草花の栽培をしてゐると種苗が餘つて捨てるにも捨てられぬ程出來ますから、會員相互に其の餘り種や餘り苗を交換したり分與し合つたりして樂しく交際して居ります。故に本會へ入會すると種苗屋から高い種苗を買はなくとも珍らしい草花の種苗が無代でもらう事が出來ます。

●本會は右の外に會員に對し毎月一袋宛の種子を頒布いたします。それから美しい草花雜誌を發行して會員に送ります。雜誌には草花栽培の研究や經驗談など面白い記事が滿載せられ質問應答なども親切にお答へして居ります。それ故草花のお好きの方は是非とも本會へ御入會下さる様おすゝめ致します。

●本會へ入會するにはどうすればよいか。本會で發行する草花雜誌はどんな雜誌かお知りになりたい方はハガキで御申越下さい。月おくれの雜誌を一冊無代で進呈いたします。この雜誌を見れば入會の手續や草花種苗の無代進呈の事などよく分ります。

●花を愛する人に惡人なしと申します。草花を作る樂しみは何物も及びますまい。是非本會へ御入會下さる様おすゝめ申し上げます。

東京神田小川町一番地
花の會

秋植草花球根 卅六球

今は西洋草花の內でも球根類の栽培が非常に流行してゐます。それは美しい花を見るばかりでなく球根が高く賣れるからであります。本會では左記有望の種類を皆様におすゝめ致します。

一、アネモネ五球 二、クロッカス一〇球 三、ヒヤシンス三球 四、ナーシッサス一五球 五、リリウム三球 六、チウリップ一〇球

（植込は九月末より十一月中旬まで）

合計三十六球箱代送料共一圓七十錢にてお分ち致します。（栽培法の本一冊無代進呈付）

ハガキにて御申越次第代金引替にて御送りいたします。

東京神田小川町一
花の會（振替東京二〇八番）

（Bノ三）

川柳漫畫の大集成!!

此の內容にして
此の人氣あり!

開卷先づ笑の爆發!
再讀!其の妙味に感嘆!
三讀!とても手放し難し!

何としても面白い いくら見ても見飽かぬ名著!


給仕また社長の椅子で考へる

谷脇素文畫
いのち

味ひ盡きぬ名句名畫 どなたもぜひ〳〵御一讀下さい

▲浮世行進曲 ▲未來の大人物 ▲娘 ▲天眞らんまん ▲當世婦人氣質 ▲家庭レビュー ▲若夫婦 ▲むかつ腹 ▲その道々 ▲サラリーマン

▲思案の外 ▲無我夢中 ▲天下國家 ▲モダン小景 ▲煩悶解決 ▲機轉 ▲乙女ごころ ▲成功する迄 ▲新しき女舊き女 ▲てれかくし

▲亭主 ▲馬鹿野郎 ▲男心女心 ▲相對性戀理 ▲切齒 ▲太い奴 ▲得意滿面 ▲後悔 ▲幻滅 ▲五分の魂

▲新婚當時 ▲かくし妻 ▲母性愛 ▲スポーツ ▲若盛り ▲心の中 ▲生意氣 ▲多聞佛心 ▲忠魂義膽 ▲裏の裏

▲當意即妙 ▲孤獨の悲哀 ▲オベッカ ▲慾の皮 ▲柳暗花明 ▲倦怠 ▲金の世の中 ▲居候 ▲顏面筋肉 ▲未成品

▲珍無類 ▲春夏秋冬 ▲街頭百景 ▲義理人情 ▲道樂くらぶ ▲世帶風景 ▲夫婦げんくわ ▲朝寢ひるね 等々いろ〳〵

ー百數十項ー

(8ノ二)

伯編並畫

素文畫伯裝幀
四六判ポプリン表紙
瀟洒美本函入

の洗濯



不動貯金銀行頭取 牧野元次郎氏曰く

川柳も大家名家の川柳の面白さは又格別の味があるが、更にそれに添へるに素文畫伯の絵が加はると、丁度延壽太夫の保名に菊五郎の踊りを添へた樣に興趣數倍する

大笑會長 曾我廼家五九郎氏曰く

各御家庭に此の一本を御備へになれば、たえず春風に吹かれ喜劇を見て被居るやうなお心持になる事は私が受合ひます。

小説家 山中峯太郎氏曰く

どの頁を見ても自分がゐる、家族の誰かゞ生きてる、親類の誰彼が動いてる、友人に至つては無數……『アハヽ、これは内藤の叔父さまだぜ』『ウン、見ろ見ろ、ここに鈴木君がゐるよ』『あら、どうしませう、この人田中さまの奥樣そつくりですわ』など、えらい騒ぎだ。これは笑ひのみの作品でない。讀み樣によつては人生の萬華鏡だ。鏡として十分に反省させられる。云々……

◉誰が見ても面白い！

大好評！

超高速度の賣行!!

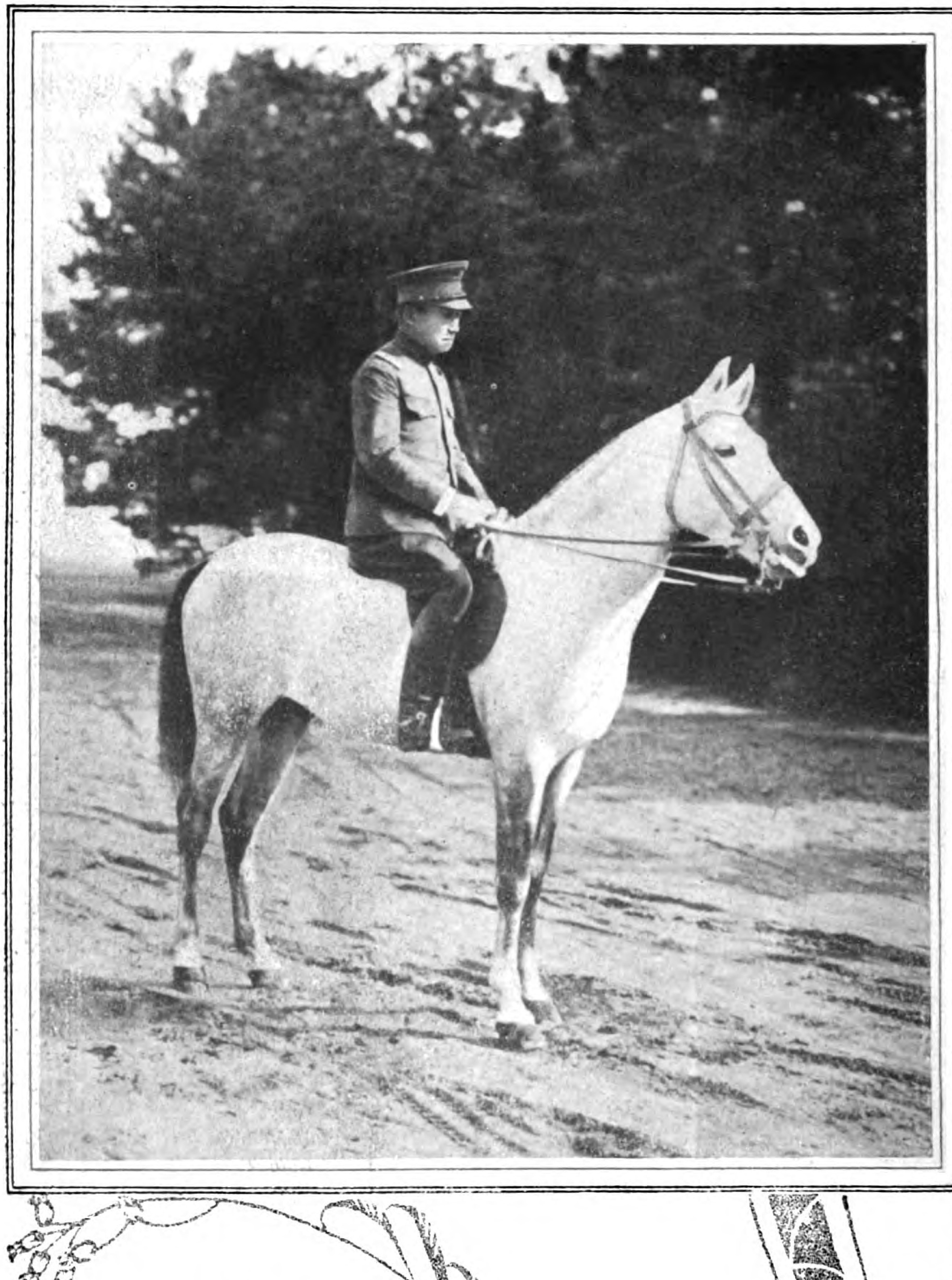
名川柳
壹千數百句
是に配するに
獨特の名畫
尚大家畫讃の
口繪十六枚



定價 一圓八十錢 送料二十錢 （全國書店に有ます）

京市本郷 大日本雄辯會講談社 振替東京三九三〇

馬上の御英姿



御愛馬ムウサー號に召させられる歩兵第五旅團長東久邇宮稔彦王殿下。

樂しき

團欒！休息と平和との樂しき團欒にこそ人生の眞の悦びがあります。謹嚴な父、多忙な母も、こゝでは親切な家庭教師であると共に又面白いお伽噺の語手であります。(1)は松竹合名會社々長大谷竹次郎氏の御家庭。大谷氏は人も知る芝居王國の主人としてお忙しい方でありますが、寸暇を偸んでは子供部屋へ出向かれるとのことです。(2)親子の娛樂はなるべく同じでありたいと云はれる東京辯護士會長塚崎直義氏の御家庭。









見るからに樂しさうなまどゐではありませんか。(3)散歩も御家族一緒なら、買物も家族全體と云つた風の、とても御家庭圓滿な東京音樂學校々長乘杉嘉壽氏の御家庭。(4)彫刻界の權威建畠大夢氏も家では良いお父さんです。蓄音機を中心にして夕食後の一時間をお子供さん達と共に過されます。



天嶮を航く

千古の昔より傳統の美と幾多の神秘を包むアルプスの峻峰。霧はいま名殘なく霽れて山の氣はいよ〱清く、谿谷には雪崩の音が轟々と響く。而して、讃ふべきは又人智の力、見よツエッペリンは悠々世界の屋根アルプスを征服して過ぐ。偉なるかな大自然の姿、壯なるかな人間の努力！

父兄母姉



非常に爲になる、非常に面白い、
良い雜誌を御愛兒方にお與へ下さい！

お子樣方を一日一日と良くし、立派にし、其將來の立身出世を望まれる方は、何を措いても信用のある、健全な有益な雜誌を選んでお與へになることが一番大切です。

それには、大日本雄辯會講談社發行の「少年倶樂部」「少女倶樂部」を

大確信を以て御奬めいたします

少年の爲めの＝少年倶樂部

少女の爲めの＝少女倶樂部

どちらも、名士敎育家多數の御賛助、御指導の下に出てゐる日本一の少年少女雜誌です

こんどの十月號は讀書の好季節に際し、特に大奮發大努力素晴しい大附錄がつく特大號です

◎十月號は九月十日頃賣り出されます。

◇今から書店に御申込置き下さい◇

どこまでも敎育的で少年を善導する課外讀物！

畏くも澄宮殿下毎號台覽の榮を賜り、敎育家父兄各方面名士より好評嘖々！

の皆様へ切願!!

少年倶樂部

十月特大號の素晴しい大附錄

帝國陸海軍大寫眞帖

この大附錄は、我國の陸海軍の大事な寫眞ばかりを選り拔いた、非常に珍らしい寫眞勇ましい見るからに胸の躍る樣な痛快な寫眞であります。陸軍と海軍と兩方の寫眞をこれ程によく集めた寫眞帖は容易に手に入れる事は出來ません。立派なものです!

この外、極彩色の口繪や面白い勇ましい讀物澤山あります

◇十月號は特大號でもやつぱり五十錢です◇

少女倶樂部

面白くて美しくて爲になる模範的少女雜誌!

各學校では少女倶樂部を課外讀本として指定され、父兄教育家間に評判高し!

十月號は素敵な大附錄が三つつきます。

▲第一ふろく **聖諭繪かゞみ**
教育勅語御下賜四十周年記念の美しい橫一米以上の折本、又と得難き大切なものです

▲第二ふろく **日本國產漫畫地圖**
日本のどこから、どんな國產品が出るか一目見ればわかる、面白くて大切な地圖です

▲第三ふろく **暗記自在ぐるま**
圓板を一周りさせるうちに知りたいと思ふ事が何でも覺えられる不思議な暗記板です

この外、美しい口繪上品で優美な讀物澤山!

ヤッパリ五十錢



燃ゆる花

菊池幽芳

信重の許に届けられた謎の手紙。日本からの誰とも分らない女文字のその手紙は、意外にも愛妻恵美子の不行跡の密告書であつた。

信重渡佛後の恵美子の身邊は、彼女を取巻く多くの人達との間に面白からぬ噂が立つてゐると云ふ事、就中、恵美子と彼女の舞踊の師であるロジニーとの關係は只ならぬものであることをすら匂はせてあつた。

馬鹿ッ！　恵美子を信じて疑はない信重も、此の眞しやかな手紙を見ては流石にこみあげる憤激の情をどうすることも出來なかつた。

（詳細本文をごらん下さい）

小早川清畫



黄金假面

江戸川亂歩

日光山中の鷲尾侯爵邸の附近ではあのいまはしい黄金假面出沒の噂が頻りとこの邊の人達を脅かしてゐた。いや噂どころではない。現に附近の百姓達が三人まで、森の中で、あのゾツとする程無表情な黄金假面の顔を見たとさへ云ふではないか。

其の夜、侯爵家の應接室では侯爵とフランス大使とが美術論に打興じてゐた。と、その席へ、無禮にも、轉がるやうに駈け込んで來たのは、侍女



の小雪であつた。

『御前さま、大變でございます。お姫さまが、胸を刺されて……お湯殿で……』

主客とも色を變へて立上つた。侯爵は、客を殘して、小雪の案内で湯殿へと馸けつけた。

湯殿へ來て見ると、美子姫は、半身を大理石の浴槽につけて、のけざまに、空を摑んで絶命してゐた。その胸のムツクリと高い乳房と乳房の谷間には、黄金の柄の立派な短劍が眞直ぐに突き立つて、その傷口から、まだドク〳〵と、美しい深紅の泉がふき出してゐた。

（詳細本文をごらん下さい）

吉邨二郎畫



關口彌太郎

大河内翠山

『城下一の美人、井上一徹齋の娘おしづを打負かした者は彼女を嫁に貰へるさうだ』と云ふ噂は、若侍達を可なり騒がした。その噂は間もなく『あの娘に勝つた者こそ當藩第一の達人であらう』と云ふ噂に變つた。若侍中誰一人として彼女に勝つ者が無かつたのである。此の噂に奮然立つたのが關口賴母の一子彌太郎。今や彼等が名譽を賭けての試合は始まつた。雨か風か？ この結果こそ見物である。（詳細本文を御覽下さい）

近藤紫雲畫

信州天龍峽谷の秘物 專賣特許 マムシ液

盬澤家天龍館 精力之基

三百年來秘法

養命酒



養命酒創始者
十八代前の祖盬澤宗閑先生

盬澤家では家族一同より使傭人に至るまで家風として毎日三度の食事前に必ず合掌して『南無宗閑様』と唱へてから箸を取る習慣を三百年來續けて居ります

南信濃の素封舊家で明治維新まで帶刀御免の大庄屋であつた盬澤家では家傳の養命酒を金では賣らず人助けに施してゐたが瀕死の病人さへ一時は生返るとまで云ひ傳へられ十里二十里の遠方から險しい山坂越えてまで三拜九拜して貰ひに來る人々に竹筒に入れて分ち與へて居りましたが年々其の數が激增するので現在では東京より全國の希望者へ分讓する事に致しました。盬澤家よりは現職海軍少將も出て居ります。

養命酒は强精無比の赤マムシの絞り汁に高山靈草七種を加へて造り込み藏の中に幾年も貯へられアルコール分は少なくなり酒にして酒にあらず赤蝮の精分は高山藥草の靈氣と十二分に相和し相熟して幾層倍の効能となり高尚なる香氣と美味は上等の葡萄酒類を飲むのと何の變りなく瓶の中に蝮の形は入つて居ないが實際は一瓶の中に赤蝮の活精分を充分含有する貴重飲料で精分極めて强き故朝晩小盃に一杯づつでよい。

不思議な効能

- 神經衰弱の人
- 虛弱貧血の人
- 根氣薄弱の人
- 精力喪失の人
- 肺病肋膜の人
- 心臟胃弱の人
- 性的衰弱の人
- 慢性胃腸の人
- 老衰血管の人
- 婦人諸病の人
- 感覺缺乏の人
- 病氣衰弱の人

携帶用 一圓廿錢
凡二十日分 三圓
凡三十日分 四圓
＝送料＝
内地 三十五錢
領土 六十五錢
代引實費、携帶用廿錢

◇超科學的靈能を實驗せられよ

精力の給源となつて身體の眞底からメキメキと强味を生じ良き血を增し血行をよくし活氣を盛んにし肉を付け體力が根本的に丈夫になり抵抗力を强め病に打勝ち藥效に勝る自然靈能により恢復力が付く又精力が滿潮的に充實する自然の結果として性的機能も强健になり七十の老人さへ青春的血液に若返つて子を儲けた最近の實例もある健康者も腦力精力を增進し活動的元氣を根本から强め氣分が快活になり一種言外の春の氣分を感得す凡そ世の中で精力活力を强むること此の右に出づるものなしと驚嘆せられ、屢々貴顯へも獻納し、各博覽會で金牌賞を受領せる世にも稀なる靈物にて橫濱醫學博士、平澤醫學博士は來患者に親しくすすめられつゝあります。

△近來歸朝の支那通の話に一支那では女の子が生れると一種の藥草を加へたマムシ酒を造り甕の口を密閉して土中に埋め置き其の女の子が妙齡に及び之れを掘出して嫁入りの費用を辨ずる風習があるが此の酒が養命酒に良く似て居る爲一夫人が二大人を始め十數人の妻妾を御するとて大官や不老長春を欲する紳商は密かに之を愛飲するので非常に珍重され一瓶數十圓でも尙得難いと……一

東京、大阪、京都市内は各百貨店食藥種店にあり。全國各地は知名藥店にあり、品切の節は發賣元東京市外澁谷町神宮通り一丁目一五ノ三 **養命酒本舖出張所** 電話青山五三九八番 振替東京六八八五五番へ御申込下さい。

見本小瓶無代進呈 ハガキで發賣元へ御申込み下さい無代送付す

笑(わらひ)ころげる面白い讀物

家の讀み物はこれに限る！

佐々木邦先生の八名著

親鳥子鳥

敏感で非常に利口な少年源太郎ま面白い少年だ。それに源太郎少年のお父さん、お母さん、妹、從姉等、入り交つた愉快な明るい家庭の有樣を描いたとても面白い小說です。

四六判、函入　羽二重美裝
定價二圓（送料十二錢）

世間相人間相

ゴンドラ村、文學青年の話、百圓紙の人々、首席と末席、大女の話、小問題大問題、美人論、昭和派出男會、等々佐々木邦先生が眼に觸れ耳にした物を片端から快筆で描いた諧謔小說。

四六判、函入布裝
定價貳圓三十錢（送料十四錢）

次男坊

村第一の素封家堀尾家の次男坊正晴君の奇想天外の脫線振り、これに熱張村長、良友、美人を配し、社會の種々相を遺憾なく描いた名小說・佐々木邦先生の名作中の名作として面白い事天下一品。

四六判、函入クロース裝
定價二圓（送料十二錢）





主權妻權

四六判、函入 羽二重美裝 定價二圓二十錢（送料十二錢）

この物語の主人公は、女性禮讃の時代精神を一人前以上も持ち合せてゐる靑年で、美人は生きた國寶だと云つて、初めはあらゆる女に敬意を表し次に唯一人の美人に集中すといつた面白い物語。

愚弟賢兄

四六判、函人 布裝 定價二圓（送料十二錢）

貢一君は賢兄である。貢二君は愚弟である。賢兄なるが故に貢一君は貢二君の世話をやく。貢一君の妻君貞子さんは賢兄の妻君だけに賢明で怜悧である。此の二人の各々を面白く描いた小說です。

脱線息子

四六判、函入美本 定價二圓（送料十二錢）

大學出のお坊ちやん新太郎君と、快活で美しい現代型の令孃秀子さんの戀を中心に、愉快な人物が續々現れて滑稽百出！ とても面白くてたまらぬ快小說!!

新家庭双六

四六判、函入 布裝 挿繪澤山 定價壹圓七十錢（送料十二錢）

樂天家でのん氣者の里見君と新妻德子さんの新家庭の有樣を描いた全く吹き出さずには居られない面白い！ 皮肉がひらめく、諷刺が飛び出す、上品で明るい名小說。

苦心の學友

四六判、函入 布裝 定價一圓三十錢（送料十二錢）

華族樣の三男照彥を主人公としてその學友内藤君、安齋先生、亂暴な尾崎少年等の活躍、面白い内に泣ける少年滑稽小說！ 面白いばかりでなく爲になる小說です。是非お子樣にお與へ下さい。



右の八大名著は何れも、好評嘖々！家庭絶好の讀物です。誰方も是非御求め下さい。全國の書店にあります。

—發行所・東京本郷 大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

登録商標

獨逸ベルツ博士

SUZUKI NIPPON-SEIYAKUSHA

病毒と體毒を治癒する

内服薬「ベルツ丸」の確効

◇捨て置けぬ梅毒性の諸症

四季を通じ顔色蒼白にして季節の變り目毎に頭、顏、手、足、又は身體全體に吹出物や腫物が出來た子供を澤山見受けます。これは親の不品行が罪もない子供に報いたので遺傳梅毒と云つて居ります。又神經衰弱に似た頭痛を覺え腰と言はず頭と言はず倦怠疲勞、全く仕事どころか身體の置場所もない程いやな氣持で每日過して居る方々の多くは梅毒性に因由する諸疾患ですから一日も早く適當の方法で治療せねばなりません。黴毒は自分一個の病氣に止まらず妻を苦しめ子を泣かし身を害ね一家を擧げて破滅に導くのみならず遂には國家をも亡すと言ふ恐ろしい亡國病であります。昔ローマの倒れたのも此の病氣だと言はれて居ります。

◇病毒、體毒唯一の内服薬

前記の如く黴毒や體毒の治療法は注射薬以外にはベルツ丸のみであります。

ベルツ丸の主薬は本年四月大阪に開催された日本醫學大會に出席された獨逸ボン大學教授ホフマン博士に依つて最も古くから梅毒の内服薬として效果絶大なりと發表されましたホ博士は今から二十五年前梅毒菌を發見された權威者であります。ベルツ丸は實にかうした權威薬でありますから黴毒、體毒、下疳、しつ毒、黴毒性リウマチス、ひえ毒、脊髓、悪性ニキビ吹出物、又は身體に毒がある爲め、常に頭腦が重いとか便秘性にて苦しむとか其の他凡て黴毒から來た諸疾患に思ひ當る方は一日も早くベルツ丸を服用下さい。不知不識の間に血液や淋巴液中にある諸毒は大小便に依つて體外に排泄されてしまひます。試みに四五回服用すれば直ちに心身の氣力は恢復し頭腦は輕くなり、胃腸は強健になつて食慾は增進し、何の苦もなく病根治癒の目的を達します。尚ベルツ丸服用後一應血液檢査をすれば如何に偉大の效果あるかゞ知れます。次はベルツ丸實驗者の禮狀です。



＝隨分苦しんだ身體がベルツ丸で救はる＝

先日は色々御親切有難う御座いました。御蔭樣でベルツ丸服用後大分工合良く引續き服用いたす考へで御座いますから五圓分至急代金引替にて御送り願上げます。私も隨分あれこれと苦しみましたがベルツ丸程効果の早いものはありません。何卒よろしく御願ひいたします。（五月八日）

若松市　福田利平

＝ベルツ丸服用後無毒と證明された＝

御〻御發賣のベルツ丸服用いたしました御蔭で全快致し助かりました。先日或病院にて血液檢査をいたしました處全快との通知がありました。行きつまつた世の中から、新天地に來た樣な氣がします。取り急ぎ厚く御禮申上げます。

東京淺草　鈴木宏吉

＝ベルツ丸二ケ月の服用で惡性黴毒が全快＝

前文御免下さい、私事ベルツ丸重症用二ケ月間ばかり連服致しました處、黴毒はすつかり治り今では樂しくうれしい日を送つて居ります。厚く御禮申上げます。尚少々眼が惡い人がありますからベルツ眼薬三十錢分一箇御送り下さいます樣御願申上げます。（五月十三日）

熊本縣天草郡　阪木昇

藥價は輕症用三圓、重症用五圓、頑固用十圓、常服根切用二十圓、特別大德用三十圓。送料内地十八錢、領土六十五錢代金引替切手卅錢封入の事

東京市日本橋區濱町三ノ四（新大橋下車）

鈴木日本製薬所

電話浪花一〇六番振替東京一〇五番

◎講談社代理部（振替東京六三〇番）にもあり

キンググラフ



いとし子を吾が膝にのせ
おのづから笑ましき母よ
人をゑましむ

膝におく吾が子のからだ
ささへつつ心はるなり
ほほ笑みながら

寫眞は上村松篁畫伯夫人
種子さまと令孃祥子さま。
和歌は今井邦子先生。

秋深し



風清く梢ゆすりて木のもとに帚とる手もすがすがしけれ

佐佐木信綱



赤城やま秋風吹けば放牧の馬相寄りて耳たてて聴く

窪田空穂



野仕事もいまはをはりに近づきぬ
こゝろよいかな夕ぐれの風

尾上柴舟

秋深し



風清く梢ゆすりて木のもとに帚とる手もすがすがしけれ

佐佐木信綱



赤城やま秋風吹けば放牧の馬相寄りて耳たてて聴く

窪田空穂



野仕事もいまはをはりに近づきぬ
こゝろよいかな夕ぐれの風

尾上柴舟

お國名



(1) 佐渡相川の『辨慶挾み岩』辨慶が大力にまかせて投げこんだものだといふ傳説は少々愛嬌があるが兎も角珍しいものです。



(2) 京都八坂神社の祇園祭。昔から京都名物として又日本三大祭の一として有名ですが、結構壯麗な山鉾と云ひ、祇園囃子賑かな行列と云ひ、流石に盛大なものであります。（吉田光峰氏寄）



(3) 朝鮮の名物でもあれば、有數の物産でもある朝鮮瓶です。變つた名物ですが、兎も角土地の人達がその瓶を背負つて賣歩くさまは矢張り朝鮮獨特の風景です。（田中波浪氏寄）

物くらべ



(4) 群馬縣から信州の境にかけて聳ゆる白根山は有名な活火山であります。舊噴火口跡の池は、今も熱湯を湛へて濛々たる蒸氣を噴出してゐます。（小林全治氏寄）



(5) 宮崎縣の帶踊です。首から二重に垂れた帶を巧に操つて踊るのですが、優美なる踊りではありませんか。（尾崎定美氏寄）



(6) 源頼光が大江山で鬼を退治したのは昔の話。これは昭和の鬼退治です。拵へた惡魔の的を射て惡魔を退治すると云ふ岡山縣上道郡地方の風習であります。（高島安次氏寄）

世界の

(1) ボーイスカウトの本場英國では、最近更に少年の消防訓練を初めました。寫眞は少年の消防夫が救難索の使用法を實習してゐる光景です。

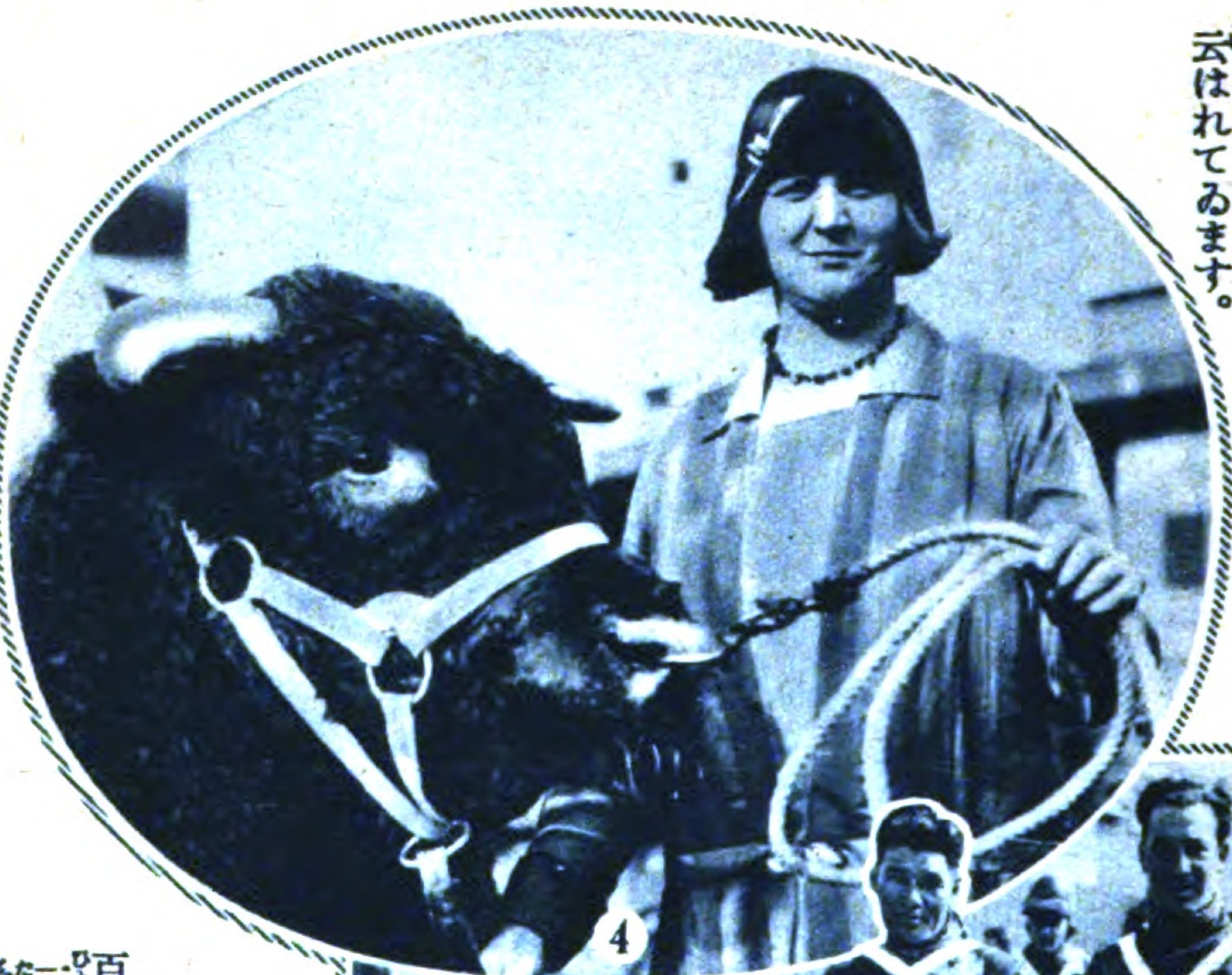


(2) 一年餘のアフリカ旅行を終へた米國探檢旅行家ボルトン氏が新しく發表した珍寫眞の一つ。子供を負ぶつた土人の女が、子供に瓢簞の日覆を被ぶせて仕事に出かけるところです。



(3) 日本の鐵道界では超特急が珍しがられてゐる時、米國では車內の設備に異常の進歩ぶりを示しつゝあります。これは展望車ですが其の設備の立派さには驚かされます。而もその窓は日光のうちの有益な光線だけ通過するヴァイタ硝子張りださうです。





(4) オーストリアで評判の、スクライムジャー夫人。夫人は牛の飼養や調練に就ての權威者で、今では世界一の調馴師と云はれてゐます。



(5) 英國マン島の自動自轉車競走は世界的な大會として有名であります。寫眞は數百の各國選手の中にあつて、唯一人日本帝國の爲に氣を吐いた多田選手（左）です。



(6) アフリカのアルジエリヤ國では、佛國領となつて今年が百年目に當るので盛大なる祝典をあげました。寫眞は駱駝に乗つたアルジエリヤ騎兵が、佛國大統領の面前で競技を演じてゐる光景であります。

海の小英雄



（上）海洋少年團の若き水兵達が、練習船忍路丸に乘りこんで實地練習中のところです。若くして海に鍛へられた彼等こそ、島帝國をして益〻光輝あらしめる未來の英雄達であります。



（中）新作の軍歌を練習中の英國少年水兵達。希望に燃えたその瞳、そして誇らしげな顔、如何にも嬉しさうではありませんか。



（下）米國ワッツ商船學校の生徒達が、食堂に集つてゐるところです。流石に自由の國らしい明るさと、平和の空氣にみちた狀景。

時代の尖端を行くハーモニカ現る

愈々産業合理化さる——此の品——此の値段

トンボのKKK（サンケイ）ハーモニカ

到る處大評判のトンボのKKKは益々大衆の支持する處となり賣行又明日を俟たず其の姉妹品として處女的値段の新KKK發賣さる將にハーモニカ界に異つた衝動を與ふ——どうぞ新KKKハーモニカを御試し下さい

トンボの新KKKハーモニカ（二十穴）金壹圓 宣傳中 送料不要

乞ふ魂への糧に一圓を割愛して音樂より來る清新なる感情を味覺されよ——學窓に親む青年達も職業人も筋肉勞働の士も元氣轉換の爲に……

求めた日から名手になれる新樂器

KKK（サンケイ）のハーモニホン

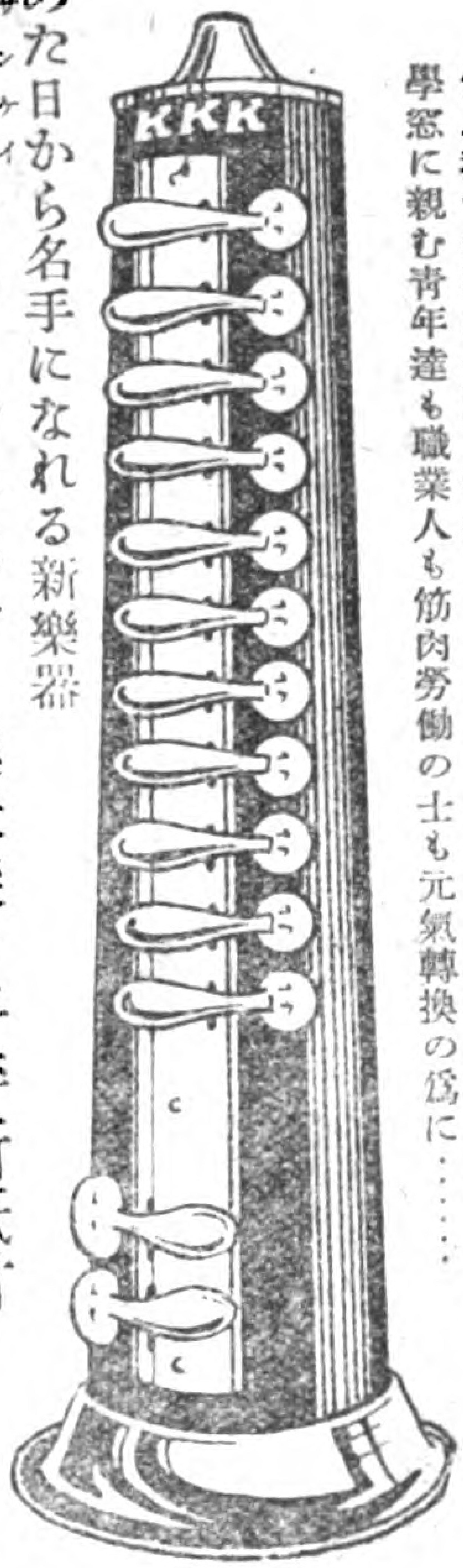
趣味深々好評折紙付

ハーモニカより簡單で多趣味で直ぐ玄人になれる新樂器はハーモニホン

KKKのハーモニホンは樂器愛好者の進出？

定價 一號 三・五〇　五號 二・五〇　三號 一・五〇　四號 一・〇〇

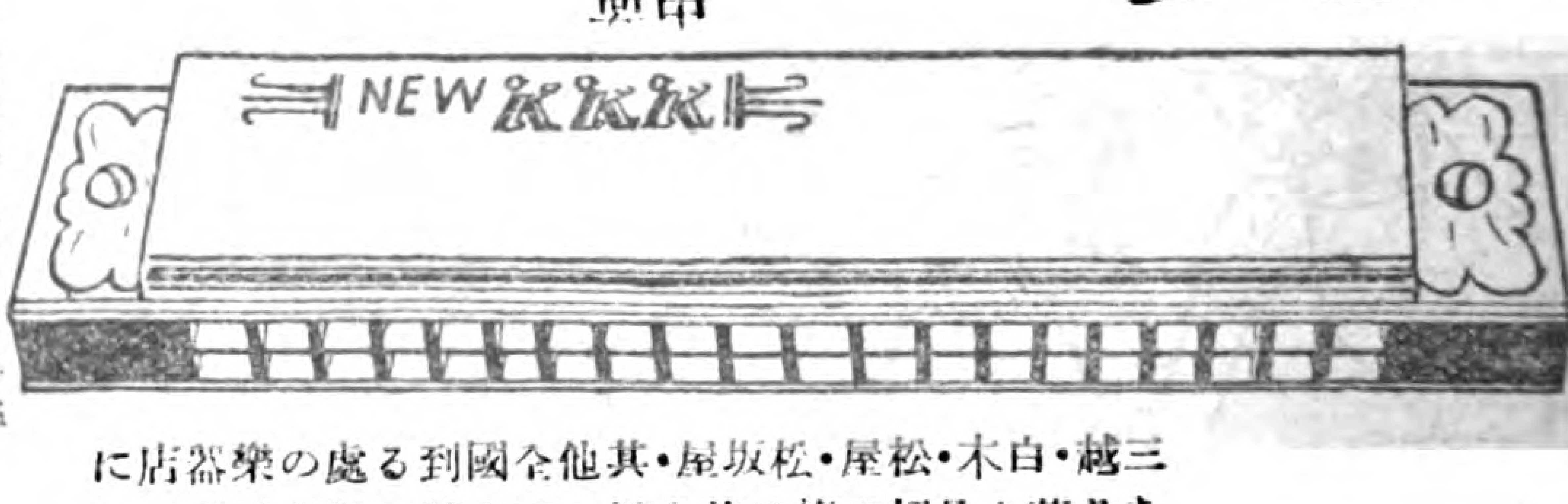
送料（内地十六錢 鮮臺四十錢）



トンボの改良KKKも好評

トンボのKKK（二十穴 一・五〇　二十一穴 一・六〇　二十三穴 二・〇〇）

送料（内地十二錢 領土三十錢）



三越・白木・松屋・松坂屋・其他全國到る處の樂器店にあり若し品切の節は前金添へて本舖へ御申越下さい

東京淺草藏前　**西村合名會社**　振替東京一四五七五五

來年は鬼の番が代りませう

ナゼ？

ダッテ此の奥さんがマイさんと仲よくなつてしまひますものを!!

マイさんと人氣の正體……

マイさんとは昨今大評判の痩身劑マイフォリンの略語です。先づその正體を調べて見ますと、此藥の原料は二人の醫學博士の實驗推奬があり製藥者が學理を基礎とした組織的の頭で最も合理的に完成されたものです。ですから内服して蛋白質の分解を亢進し脂肪の燃症作用を旺んにして新陳代謝をよくして過分の脂肪を調和してスッキリとしたスタイル美を作り上げます。常に美容の尖端を行く名優達の愛用する痩身劑も矢張りマイフオリンで敏感な近代人は選擇力にも敏感であります。

知名藥店にて販賣　品切の節は本社代理部へ

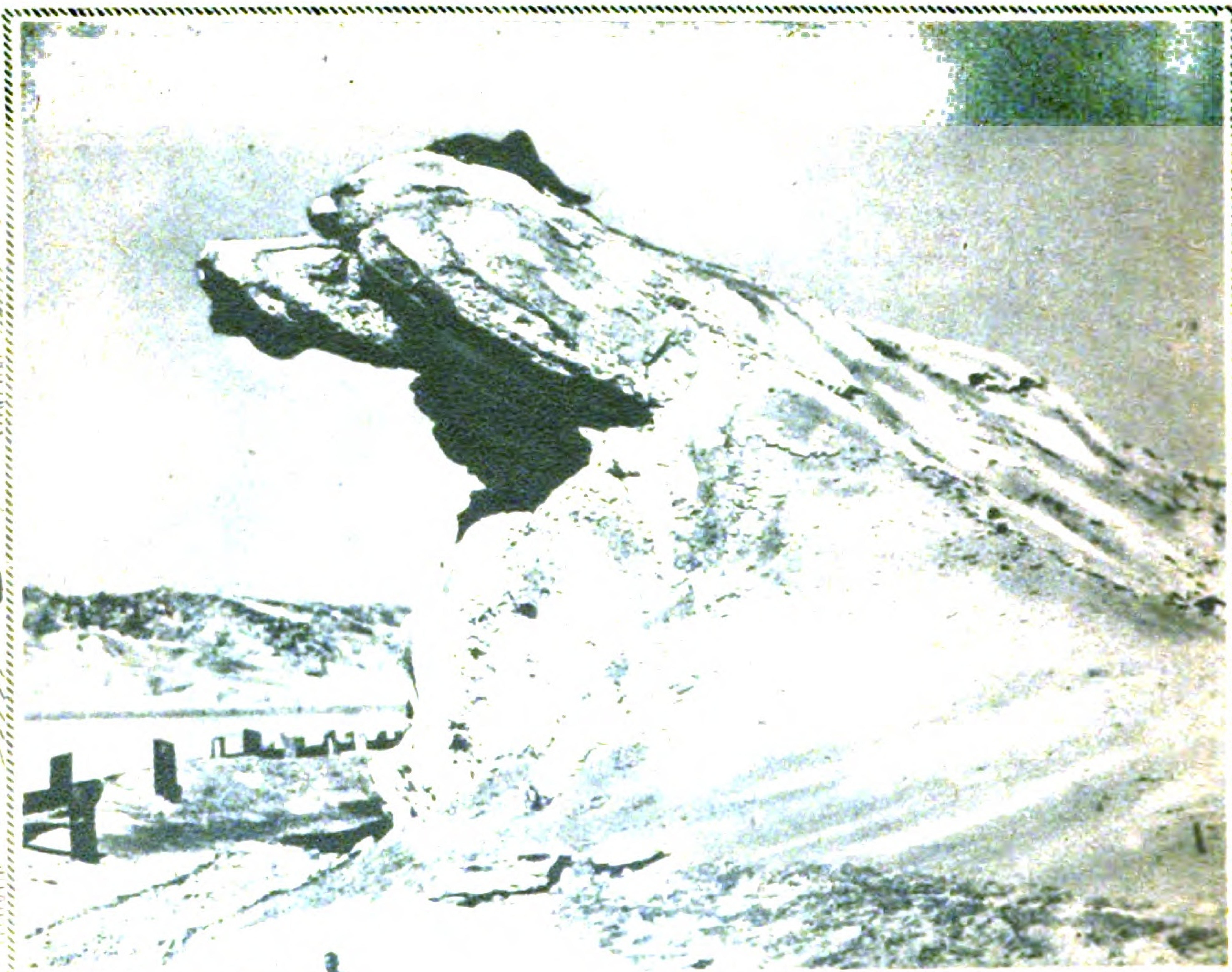
やせる藥 マイフオリン

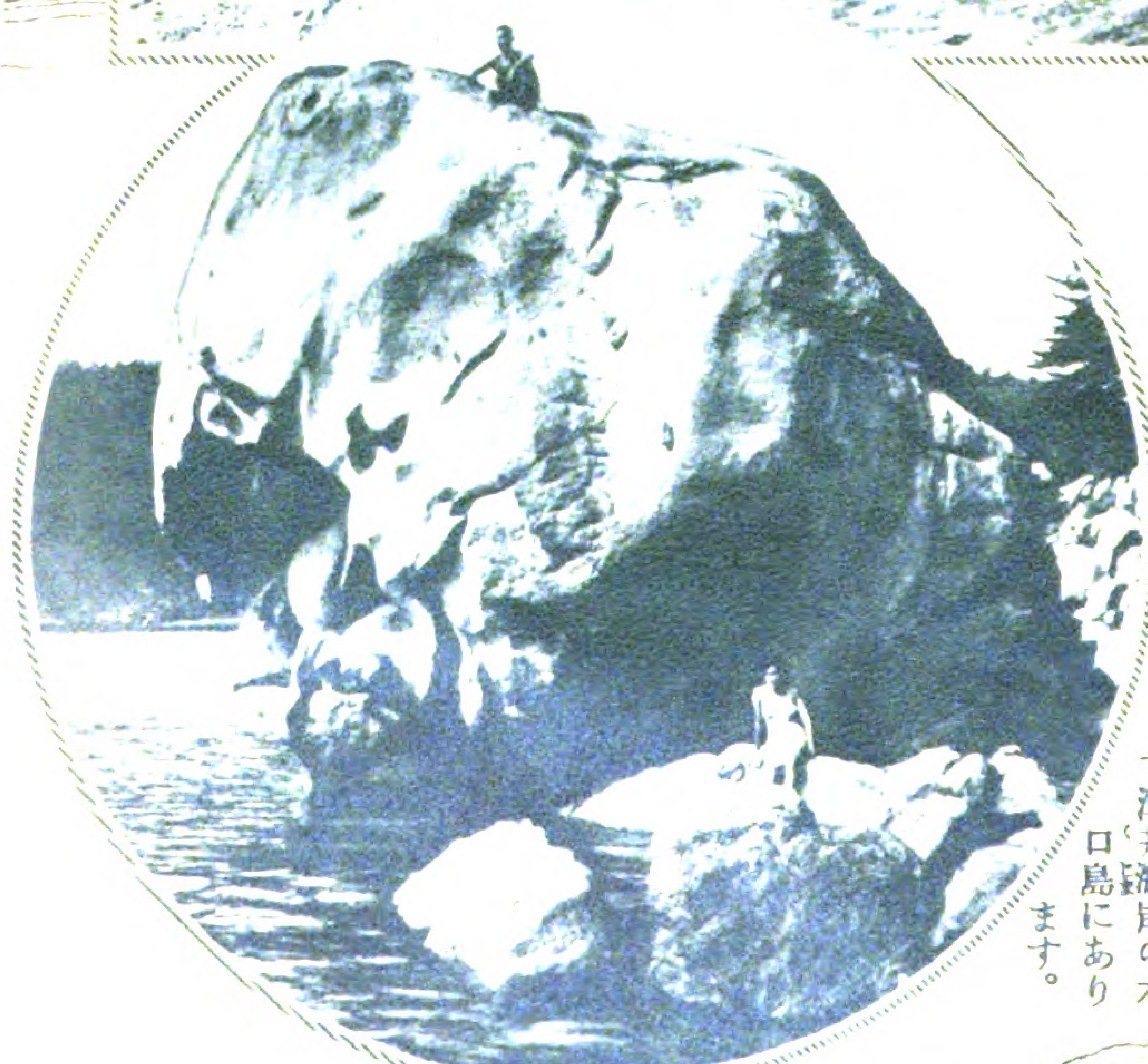
廿日分 六圓
四十日分 十圓

説明書進呈



象岩と犬岩





（上）似るも似たり、まるで犬そつくりの岩ではありませんか。これは、主人の身代りとなつて健氣な最後を遂げた忠犬が、今尚國境を守つて、敵國を睥睨してゐる姿であると云ふ傳説をもつた露國コーカサスの『犬岩』であります。

（下）これも又、古代の大象が木乃伊になつたものとでも云へさうな、象そのまゝの『象岩』です。岡山縣下津井海岸の六口島にあります。

繪筆に

(1) 荒木月畝女史門下の有馬澄子さん。獨特な畫風に將來を囑目されてゐる人。有馬賴寧伯の令孃であります。





(2) 熊岡美彥氏に師事して洋畫に精進される白根きみ子夫人。宮內省庶務課長白根松介氏の夫人であります。

親しむ

(3) 陸軍少將久世爲次郎氏令孃トキ子さん。蔦谷龍岬氏門下の花形として將來の活躍を期待されて居る人です。



(4) 大阪、久保郁藏氏の令孃松峰さん。五六年前より上村松園女史のもとに美人畫を研究中の人、關西女流畫壇の花形であります。



變つた

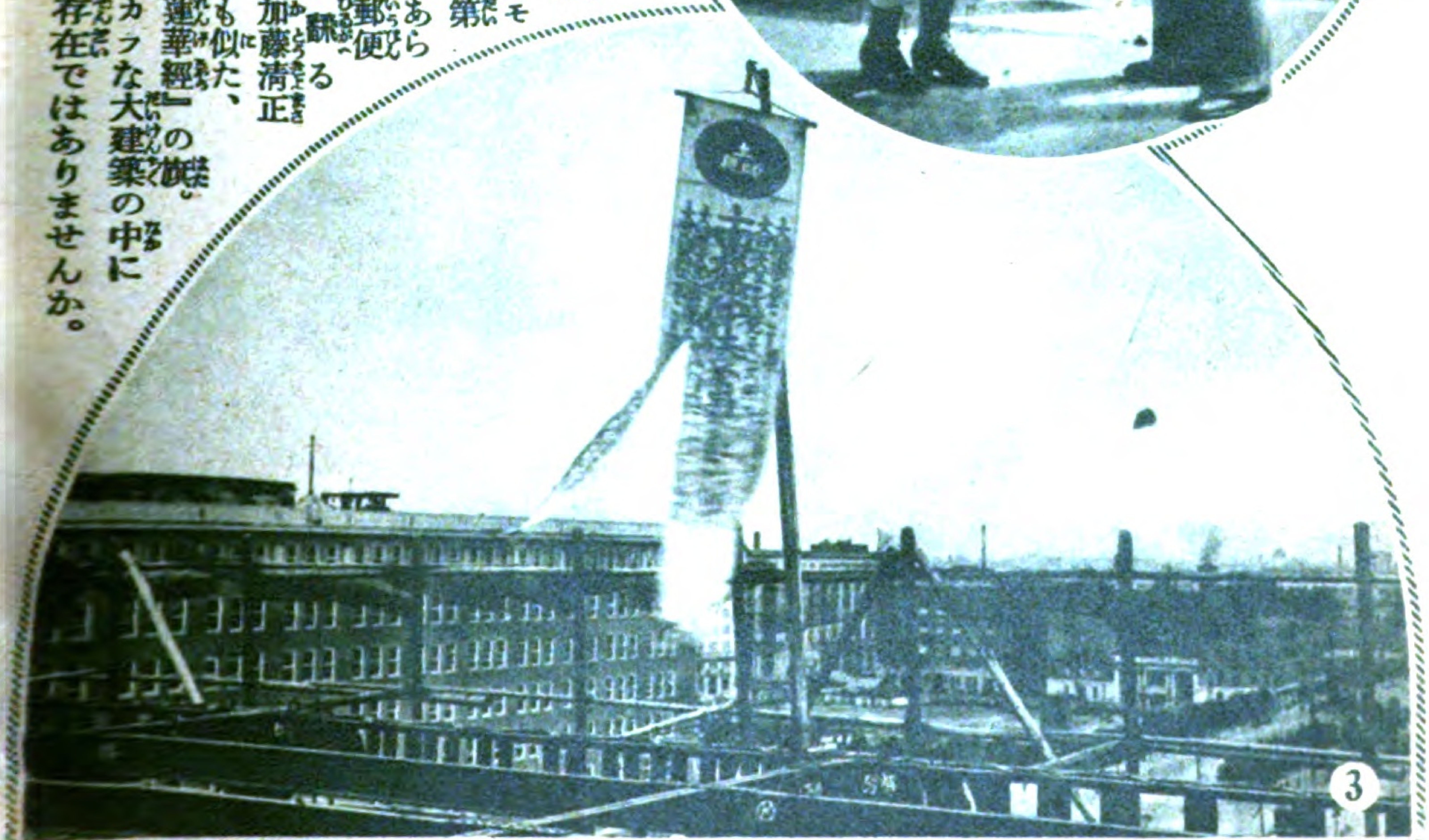
(1) 近代生活を象徴するモダン家屋の前にこれは又餘りに古風な虚無僧姿。彼が吹く尺八の妙音に家人も耳傾けて――と思つたら間違ひ。中からは皮肉にもピアノのメロデイが流れてきます。

(2) 時代の尖端を行くモボとモガさんが、所もあらうに街頭易斷所の前で何の御相談? 尖端人にもやはり心の惱みや惑ひはあるのでせう。





(3) 近く落成の曉はモダン廳舍の第一を誇るであらう東京中央郵便局の屋上に翻へるは、珍しや加藤清正の旗指物にも似た、『南無妙法蓮華經』の旗。周圍のハイカラな大建築の中に何と變つた存在ではありませんか。





(4) 現代文化のあらゆる貴重品、あらゆる流行物を集めた三越、貴婦人や富豪令孃達の憧れの的である三越、その屋上に鎭座まします神樣がお稻荷さまとは何と面白いではありませんか。

(5) 公園で仲好く飼れてゐる犬と猫、それを取り卷くやうにして、多くの人達が羨ましさうに見てゐます。不景氣だ、生活難だと騒いでゐる人達だから面白いではありませんか。





(6) 寫眞は此處から『銀ブラ』が始まらうと云ふ京橋です。ところで、その京橋の下を御覧下さい。頬冠りに襯衣一枚の船頭さんが荷舟を漕いでゐます。橋上の電車や銀ブラの人達と比べて、これは又何と古風な風景でせう。

お食事



(2) 可愛い子猿が、ミルクで育てられてゐるところ。息をも吐かずに、如何にもお美味さう。



(1) 婦人の持つた鯖の切り肉を目がけて、ペンギン鳥どもは大喜び。焦らさないで早く下さいようと云つてゐるやうです。



(3) 獰猛な熊の子供も、お嬢さんの御馳走の前ではとても温和です。



(4) これは又百獸の王ライオンの仔、ヨチヨチと手を取られてオッパイをいたゞいてゐます。なんと可愛い赤ちゃん振りではありませんか。



(5) 親切なお孃さんが差し出した食物を、高い塀も何のその、麒麟は長い首をさし伸べて見事御馳走にありついてゐます。



(6) これは世界で最大と云はれてゐる海象です。怪異な恰好に似合はず、園丁の運んで來た御馳走を見て鼻をクン〱鳴らしながら甘えておるところは存外愛嬌があります。

讀者だより





キングの口繪は雜誌界の白眉として毎號大好評、之をいろいろの形にして保存されつゝありますが、玆に掲げたのもその一例で、態々讀者の方から送つて來られたものです。

上はキング口繪で出來た見事な屛風と八島氏（北海道八島武平氏寄贈）

下は額になつたキングの口繪（長野縣佐藤淸吉氏寄贈）

（此の種の寫眞歡迎）

◆體驗者 加藤港述■■■

はい病の全快法

社會奉仕・再生記念

無代進呈

御安心下さい肺病は必ず治ります。私の治つたが何よりの證據です私は數年前から猛烈な肺病にかゝりあれこれと隨分金も使ひ有名な先生にも見ていたゞき人がいゝと云われる藥や療法は勿論木の實草の根、虫やけものゝ**キモ**に至るまで數限りなく試みましたが何れも一向に**キゝメ**なく日増にやせ衰へ家人には恐れ嫌われ只死を待つばかりの心細い身の上となりました所、フトした動機から發見した合理的療法により僅か二ケ月半の後には立派に元の身體になる事が出來ました。

昔から「**病んで醫者になる**」の諺通り今では肺病の事なら專門家も及ばぬ程體驗による實際の智識を得ました爲に近頃世間に發賣してゐる色々な賣藥の內幕や療法なども悉く知つて居ます無論藥は必要ですが此の病氣ばかりはどうしても服藥をすると共に養生を合理的にしなければ決して早く完全に治るものでありません。

この合理的療法により完全に治つた私の現在は御覽の通り人一倍元氣に働くやうになり今では僅か乍ら蓄財も出來恵まれた家庭の中に樂しく暮して居ます。

それにつけても全國に百萬人以上も現に肺病で惱んでゐる人達があると聞くにつけ私の苦んだ當時を思出し氣の毒でなりませんので此のたび貯蓄の一部をさいて病氣當時の實驗談や藥の選び方を初め息切れ、セキの止方咯血した時の手當法、肺病を治すに何より大切な食物等を委しく記述した肺病全治の極意とも云ふべき寫眞入で約五十頁の書物を作り私の治つた御禮の意味で人助けのために無料で差上げて居りますから御病人は勿論其の御家族の方でも此の記事に目がついたのが幸です御遠慮なく近所の方は私宅へ、遠方の人は手紙で「**肺病の全快法**」を記述した書物を送れと御申込下さいドナタにも無料でスグ送つて差上げます。

東京下谷上根岸町九六 **皆統寮內 加藤生**

長篇寄稿家・家庭アルバム



放任主義

菊池寛

僕の家庭は、妻包子（32）娘ルミ子（13）息英樹（8）娘ナヽ子（6）の五人である。妻は、溫良着實僕をして後顧の憂なからしめる。その着實振りは、雜誌社新聞社に絕對に寫眞をとらしめず、記者と面會しない事で分る。偶ゝ問ひ合せの回答などに名が出てゐるのは、僕が代りに答へたのである。娘ルミ子、女子大の附屬高女の一年生である。少し變人である。『キング』の爲に寫眞を撮ると云つても出て來ないのである。父に似て唱歌や繪が下手であり、又父と似ず綴り方が下手である。數學が得意だから、そんなに頭がわるい子ではない。ランニングの選手で、將來は體操の先生になると云つてゐる。英樹は高師の附屬小學の一年である。これは、入つたばかりだから、未だ頭がいゝかわるいか分らない。家庭は、放任主義であり、父親の權威は全然ないと云つてもよい位である。――

寫眞は菊池先生と英樹君。



大小七人

山川秀峰

兩親と私達夫婦に三人の子供。即ち大小七人の者が集つて私の家庭をつくつてゐる。賑かと云へば賑か、殺風景と云へば殺風景だが、私は家庭に惠まれてゐると思つてゐる。住居は上野の寛永寺前、博物館、美術館、圖書館等は百歩の近きにあつて、何かと研究に便利である。又子供達は近くの動物園を始め、公園一帶を自分達の庭園とし、遊戯場として自由に遊び廻つてゐる。樹木もあり、花園もありそれに空氣はよし眺めはよし先づ子供を育てる上にも好適地と云へよう。この上の望を云へば、家内一同益〻元氣に、妻は良妻賢母に、女の子は愛らしく、男の子は快活に育つて行つて貰ひたいことだ。

——寫眞向って右より綾子夫人、嘉巳君、山川先生、美奈子様、母堂しな子様、喜佐子様、嚴父玄治郎氏。

明るく浄く面白く

前田曙山

私は苦學もしなかつたが、樂學もして來ない。然し子供達には樂學をさせようと思ひました。其爲野菜のモヤシが出來たかも知れぬが、品性だけは或は歪形にならないらしく考へられます。將來どんな者になるか知らないが、志望に於て親の眞似をして吳なかつたのを幸福と信じます。家庭の空氣は只明るく浄く面白くが第一です。整理と掃除は細君の趣味です。

私は植木の手入庭掃除を受持ち、私のやうに運動不足に成り勝のものには、之がよい屈伸運動で一擧兩得です。其爲夏などは朝から晩まで裸で暮す事が有る。從つて着物の汚れる率が少ないとすると三得になります。態〻魔のさした佛樣のやうな體操などをせずとも、水撒き掃き掃除池の掻掘り、保健には之が第一、只少し損が行くのは食慾が增進して、臺所に影響する事です。——寫眞向って右より前田先生、勇夫君、利春君、富士子夫人。





古さ加減

細木原青起

何しろ一番最初に生れた子（是れは逆兒で生れる時に死んだ）が達者で居ると二十といふ娘盛り。今頃は婿がね探しで若い青年を物色する時代である――と思ふとわれ〳〵夫婦の古さ加減が判る。處が妙なもので二十幾年來毎に顔を見合はして居ると何方も少しも齡を取つて居ない。只年々歳を取つて行くのは子供丈けだ。尤も新婚當時の寫眞でも目の前に置いたら大に自負心に傷がつき、何方が年を餘計に取つたかで夫婦の口論が始まるかも知れないが殘念ながらそんなものは何處へ仕舞ひ込んだか所在不明で、年取り加減の證明が立たず有り難き幸福である。是が新婚當時とでもいふのなら甘い感想も書けるが、古さ加減を發表して了つた以上幾程甘く書いても澁く見られよう。――寫眞向つて右より茂直君、美智樣、純子樣、細木原先生、逸代夫人。

惠まれてゐる

佐々木邦

兩親と私達夫婦に二男三女。私は家庭に於て惠まれてゐる。五十近くで兩親の揃つてゐるものは極く稀だ。二人とも疾うに古稀を越して矍鑠、先頃から沼津の方へ隱居してゐる。私は總領で弟が三人ある。是も缺けない。三人とも丈夫で夫れ〲有效な働きをしてゐる。私達の子供五人も皆丈夫で育つ。長男は慶大の文科二年、世の中へ出て生活の奮鬪を始める日が近い。長女は高女卒業、次女三女も一年置きに卒業する勘定になる。三人の娘を嫁にやれば息子がもう三人出來る。長男と次男に嫁を貰へば娘がもう二人出來る。私達夫婦は兩親に安穩な餘生を送らせ、子供の將來の幸福を計らふ外に野心も何もない。因みに三女は沼津へ行つてゐて、この寫眞に入つてゐない。——寫眞向つて右より佐々木先生、あや子樣、ふさ子樣、小雪夫人、仙一君、英二君。



好々爺好々婆

菊池幽芳

私の家庭は賑やかな若い時代を經過して、生活の淋しい末期に入つて居る。自然の方則が順調に行はれて居るので、致し方もないが、私達夫妻の時代は先がないと思ふと心細い。長女次女次が長男と生れたので、上の娘二人には既に七人の孫がある。長男は慶大に、三女は昨秋他に嫁し、次男が今尼崎中學に居る。で、現在の家庭には次男が居るばかりの淋しい三人暮しで、たゞ時々近所に住んで居る次女の孫達三人が出かけて來て家庭を賑はすだけである。この夏には東京に嫁してゐる長女の孫共が押かけて來るので非常に賑やかになる。私共の現在は家庭的に惠まれた好々爺好々婆である。――寫眞向つて右より菊池先生、玉枝夫人、女婿山縣吾一氏、美代子樣、お孫樣太郎君、文子樣　澄子樣。





製作を中心に

小早川　清

昨日も明日も繪畫のことで暮してゐる私だ。朝起きると同時に、一日の仕事のプランを立てなければ氣がすまない。家族は階下に、私は終日二階のアトリエだ。だから、私の家庭と云へば自然製作を中心とした家庭である。子供までも、二階に上つて來ては僕の傍らで凝乎と僕の仕事を見守つてゐてくれる。世間の親達の言葉として『子供には自分と同じ仕事はさせたくない』と云ふやうな事をよく聞くが、自分は子供に少しでも才能があれば、やはり畫家にしたいと思つてゐる。何故ならば子供は他の何事よりも朝晩見てゐる繪の事が詳しいに違ひないからである。——寫眞向つて右から登久江夫人、清一君、小早川先生。



子供がすべて

野村愛正

子供は可愛いものです。親となれば誰でもいふことですが、ほんたうです。

僕は、いつも家の中で人に會つたり、仕事をしたりしてゐるせゐか、家庭といふものに對する概念がだん／＼事務所化されて來たやうに思はれる。この點で『家庭が仕事場』でない他の家庭とは大いに違ふ。家内には不平もあるやうだが、どうにも仕方がない。

その中にあつて、眞に家庭を家庭らしく感じさせるのは二人の子供達です。笑つてゐても、泣いてゐても、惡戯をしても、子供のゐるところには家庭がある。子供は嬉しい。有難い。おめでたい親馬鹿殿になりすましてゐる時だけに自分の家庭表現があるやうに思はれます。

――寫眞向つて右より野村先生、ナナ子様、いづみ様、まつ子夫人。野村愛正氏は天狗太郎の筆名で『噫無情』を書いて居られます。



自然人

近藤紫雲

自然の好きな私は、庭の草木ものびるにまかせて、自然のありのまゝの姿を樂しむ。萩、芒、藤ばかま、野菊、葉鷄頭、芹、毒だみに至るまで空地をふさいで茂つてゐる。

夕暮れ方ほのかに明るくなる様な月見草、古池には河骨の花を動かす鮒の子、夜々鳴く蛙の聲も東京附近では珍らしいと訪ふ人も喜んでくれる。蛇も可愛い小さな奴が二三疋居る様子で、飛石のまはりへ出て來て蛙と喧嘩をして居る。

この前年から朝顔づくりを始め、今年は可なり手に入つた。しかしこれは大輪咲き故自然にそむく事になるかも知れない。萬事斯くの如く、人間も自然人で、子供達も泣く、喚く。

——寫眞向って右よりうた子夫人、領雄君、富士子樣、富美子樣、近藤先生。



無産階級の家庭

江戸川亂歩

母と、女學校三年生の妹と、女房と、小學四年生の男の子供との五人暮しです。極めて平凡な無産階級の家庭です。

母は眼の弱い外は誠に健康で丸々太つてゐます。女房は僕の我儘に耐へてよく働いてゐます。

妹はお嫁さんを理想としてゐる非モダーン娘です。繪が好きな外に、近頃は少々モダーンぶつて、ダイギング初歩をやり始めてます。息子は、機械氣違ひで、科學の本や雜誌に讀耽つたり、方々の工場を見に出かけたり、おもちやのモーターやトランスフオーマーを作つたりして夢中です。

それで僕が氣むづかし屋の小説書きでなくて團欒好きの人並なお父さんだと、仲々理想的な家庭なんですが。――寫眞向つて右より令妹玉子樣、江戸川先生、隆太郎君、隆子夫人。

健康第一

齋藤五百枝

家庭の唯一の寶は、家族が揃つて健康であることだ。いま妻と三女とが健康を害して伊豆の温泉に行つてゐるが、さう云ふことは、矢張り一家の不安と、寂寥を感じさせて、家庭的に不健全である。

私は元來畑いぢりを好む。畑いぢりと云ふよりも、實は土が好きなのだ。何も栽培しないでも、土を掘つたり均したりすることに無限の興味を感じる。

春から秋の末まで、郊外の早曉は特に氣持がよい。まだ明けやらぬ近くの街道筋に、荷馬車の眠たげな轆轤の音を聞きながら獨り露深い草を踏んで、鍬を揮ふ時の氣持は何とも云へない。だがしかし、さう云ふ快適の場合でも家族に病人があると云ふことは、その關心のために心の平和を持することが出來ない。此頃は特に健康第一と云ふことを痛感する。健康へ！　それが私達家族の現在の何よりの希望である。——寫眞向つて右より齋藤先生、百譽樣、一也君、千別君、母堂すて子樣、文子樣、大典君。





我儘を許しあふ

岩田專太郎

両親と私達夫婦に妹一人、平凡だが無事安穏、慾を云へば限りはあるまい。兎も角僕は家庭に感謝してゐる。

小さな子供の居ない僕の家庭は、子供の居ない所爲でもあるまいが皆大人の子供だ。子供のやうに、みんなが我儘を云つたりしたりしてゐる。然し私の家庭ではこの各自の我儘を許しあふことにしてゐる。この意味からも、我儘者の私は家庭に惠まれてゐる譯だ。だが然し、他の者の輕い意味での我儘が家庭に自由と明るさの何かしら新しいものを漂はせてゐることは認めるが、さて、僕の我儘の影響はと思ふと流石に慚愧に堪へない。——寫眞向って右より菊江夫人、岩田先生、厳父鋼太郎氏、令妹京子様。

無事平穏

土師清二

主人當年三十八歳、妻三十二歳、長女十四歳の三人きり。ノンキな家庭に候。

いくら集めて見ても三人の事故、一家打揃うて團欒といふ快擧を企てるにも及ばず、集めて見ても集め榮えがせぬことに候。

寫眞のごとき光景は稀有のことに候。キング誌寫眞班氏の演出に依る一場景のみ。

御覧のごとく貧弱ながら無事平穏、至極ノンキな毎日を過し居り候。

ノンキなるは、これ天の惠か。平凡を欲することの習ひ性となれるためか。――寫眞向って右より和子様、土師先生、春野夫人。





子供の教育

磯田長秋

今迄の私は、文字どほり只精進の繪筆を握りしめて來ればよかつたのです。藝術の爲には家庭の面倒を見なくてもまづ〳〵許されて來ました。然し、妻きよとの間に三男二女の五人の子供を持つ今日、昔みたいに呑氣に畫室に閉ぢこもつてゐる事は許されなくなりました。さうして昨年の初冬、永年住み慣れた千葉縣船橋の閑寂境を捨てゝ子供の教育の爲に上京して來ました。

繪畫の研究は勿論ですが、子供の教育、彼等の無事なる成長に努力する事も又今後の私に殘された大きな事業の一つであると考へてゐます。

——寫眞向つて右より、きよ子夫人、磯田先生、文子樣、三子君安紀子樣、延年君、光海君。



藝術的な雰圍氣

本田美禪

寫眞では羽織袴に、扇子などを斜に構へ、謹嚴らしい顏してゐますが、家庭における私は是れで案外に軟派なんです。妻にしろ伜にしろ、家政を手傳つて貰ふ人にしろ、その意志にまで立ち入つて干渉などは決してしません。たゞ朝寢と外泊とは禁じてあります。其れをしなければならないやうな事情用件のある時の外、許さぬ事にしてゐますので、兎もするとカフエーやダンスホールへでも浸け込みたい伜共には些と窮屈かも知れません。が、何にしろ文士の生活、あらゆる趣味を取り込んで、藝術的の雰圍氣中に自分も住み、人も住ませて、のんびり生き行かうといふのが私の本來の主義なんですから、伜共にしたとこで外よりは家庭の方が却つて居心が好い筈なのです。私は然う信じて居ります。

——寫眞向つて右より萬喜雄君、はる子夫人、本田先生、武彥君。



六疊の書齋

田中良

老父は二階の書齋で研究に沒頭。私は畫室とも書齋とも居間ともつかない六疊でこつ／＼畫を描いてゐます。その他は妻を初め三人の子供達皆女です。そこで、私の家庭は男二人に女四人、數に於て女の家庭と云へませう。

茶園の彼方から聲樂家ばかりの歌が聞えるかと思ふと、突如としてピアノが鳴り出す。それは文字どほり賑かな家庭です。そして私も又、その團欒の雰圍氣を好ましいものとして彼等と共に樂しんでゐます。ですから、子供達も私が畫を描いてゐようとゐまいと遠慮なく私の書齋へ集つて來ます。その私の部屋での團欒、それは私の家庭での一番樂しい幸福なまどゐであります。――寫眞向つて右より文子夫人、芳子樣、房子樣、田中先生、秀子樣。

はい病は必ずなほる

無料で私の治つた自宅療法を教ふ

第三期患者の心配御無用、私の治つたのが何よりも證據です。數年前ひどい肺病に冒された私は世間にありふれた賣藥や療法に莫大な金を無益に使ひ、有名な先生にも見て戴きましたが死を待つ許りの重病な私は安心して居られず全く命懸けにあらゆる全快法を研究致しました。研究空しからず一時は明日の命も危うかつた私は遂に二ヶ月後には以前よりも健康な體となる事が出來ました。『私に最も良く効いた肺病特効藥』其他病氣當時の實驗談、『藥の選び方』『息切れ』『セキの止め方』『喀血處置』『食料品の選擇』等一切の肺病手當秘訣を一々懇切叮嚀に無料でどなたにもお敎へ致します。肺病肋膜肺尖カタルでお惱みの方は此の記事を見付けたのが何よりも幸ひです。一日の迷ひが百年の悔とならぬ中此の雜誌名記入の上一時も早く『肺病全快法無料送附を請ふ』とお申送り下さい。又直接御出を願へれば結構です。

私は出雲大社敎々導職に在り專ら思想善導其他社會事業に奉仕して居る者です。これも人助けの爲にやつて居るのですから何卒御安心の上遠慮無く御問ひ合せ下さい。

道順は東京市小石川區大塚仲町市電停留場下車護國寺へ向ひ約一丁程坂を下りますと左側に竹屋があります。竹屋に付いて左へ曲り突當りの右側です、自動車は門前迄參ります。

△色々と藥を服んでも治らぬ人は

△よい藥とよい養生を知りたい人は

はい病・ろくまくで

△熱の下らぬ人は
△セキの止らぬ人は
△ねあせをかく人は
△いきぎれする人は
△血たんある人は
△喀血する人は
△肩のこる人は
△ねむれぬ人は
△毎日やせる人は
△胃腸惡しき人は
△頭痛のする人は
△體の重苦しい人は
△むねこし痛む人は
△ふし節の痛む人は

――御問合せ下さい――

東京小石川區
東青柳町二三
松島敎正

講談

大飛躍！大發展！眞に面白い傑作揃ひ

問題のモデル小說いよ〳〵發表！

▲傷ける人魚（近藤經一）

世界的に有名な某スポーツ選手と、東京一のダンサー姉妹と、魔の樣な魅力をもつ有閑婦人をめぐる哀しく惱ましき愛の葛藤を描いた長篇大傑作



▲大衆小說 處女爪占師…吉川英治

▲武勇講談 尼子十勇士…一龍齋貞山

▲奮鬪小說 王冠…中村武羅夫

▲諧謔小說 負けない男…佐々木邦

▲美男快俠 珊瑚重太郎…白井喬二

▲現代小說 火の翼…加藤武雄



▲殺人犯の公判…

善良な良人が美しい愛妻を殺すまでの血を吐く樣な愛慾の葛藤！六十枚の大長篇讀切

～～佐藤紅綠～～



▲昭和出世鑑…

小僧から身を起して千萬長者となつた關西實業界の奇傑寺田甚與茂氏の金儲け物語

～～谷孫六～～

慢性胃腸病は胃擴張から

進んだ藥。新らしい療法。小川氏胃擴錠の出現



慢性胃病で胃擴張だと云はれ、大金をかけたが、治らない人は、モウ考へる餘地はない。夏はロがまづく、食れば直ぐ胸に支へ腹が脹れる、腹なりがする、時々嘔氣を催する、食べ過ぎてねると惡夢に襲はれる、胸やけがする時々は腹痛も起る、食事をして腹の空く頃になつてから具合が惡くなる、妊娠して直ぐ胃が惡くなる嘔氣を催する、顔色惡く頭の重い人等は殆んど胃擴張になつて居ます。日本人は常に白米を食べて居るから澱粉が過剩する爲此病氣にかゝり易い。それで胃病と云へば胃擴張だと云ふ位です。小川氏胃擴錠はザラにあるオギナヒ藥と違ひ其病源を斷つと云ふ所に強い信頼を得て居ります。早く胃病を癒して愉快な生活を送りませう。永年の胃擴張が此藥で治り一手販賣を始めた本舗主人……製造者、ドクトル・ファーマシー小川龜重先生、藥名小川氏胃擴錠。（申込次第說明書無代進呈）

（小川氏胃擴錠）定價
百二十錠入 金二圓
三百四十五錠入 金五圓
七百六十錠入 金十圓

御註文は振替で、代金引換廿七錢增 送料内地十八錢、海外四十五錢

東京府井荻町上井草一四四四番地
一手販賣所 鳩三堂藥房（振替東京七九〇三〇番）

（全國有名藥店にありますが講談社代理部振替東京六六二九番でも御註文を受けます。）

ニキビ

なら心配御無用



マーシーはドクトル・オブ・ファーマシー小川龜重先生の責任製劑で日本人にも西洋人にも支那人の如く多く油氣を喰べる人種にも黑人の如き熱帶に住む人々にもキク藥學上から見て世界的の良藥です、ニキビあらば明日と云はず今すぐお求め下さい。▼マーシーは全國到る處の有名藥店にて販賣されて居りますが未だ發賣早々なるに賣行き非常によきため全部の藥店に迄は渡り兼ねます、若し御問合せの店になき時は他の間に合せ藥に迷はず直接發賣元小川研究所へ御申込下さい。雜誌キング愛讀者なる旨を書き添へ御申込次第小川先生著『ニキビの根本的治療法』一冊無代進呈す。

内用マーシー
- 七日分 七拾五錢
- 十五日分 壹圓弐拾錢
- 四十五日分 四圓
- 特別難症用 拾圓

外用マーシー
- 試用形 五拾錢
- 中形 壹圓
- 大形 貳圓
- 特大形 參圓

△送料内地十八錢海外四十五錢代金引換小包は代金へ二十七錢を加へて申し受く海外代引御斷り

代理店 東京・横濱・名古屋・大阪・京都・九州 各卸大問屋

東京中野町東中野南大通九七七
製造發賣元 小川研究所
電話四谷二七九八番
振替東京六四四二〇番

代理販賣所 大日本雄辯會講談社代理部
振替東京六六二九番



意志の力

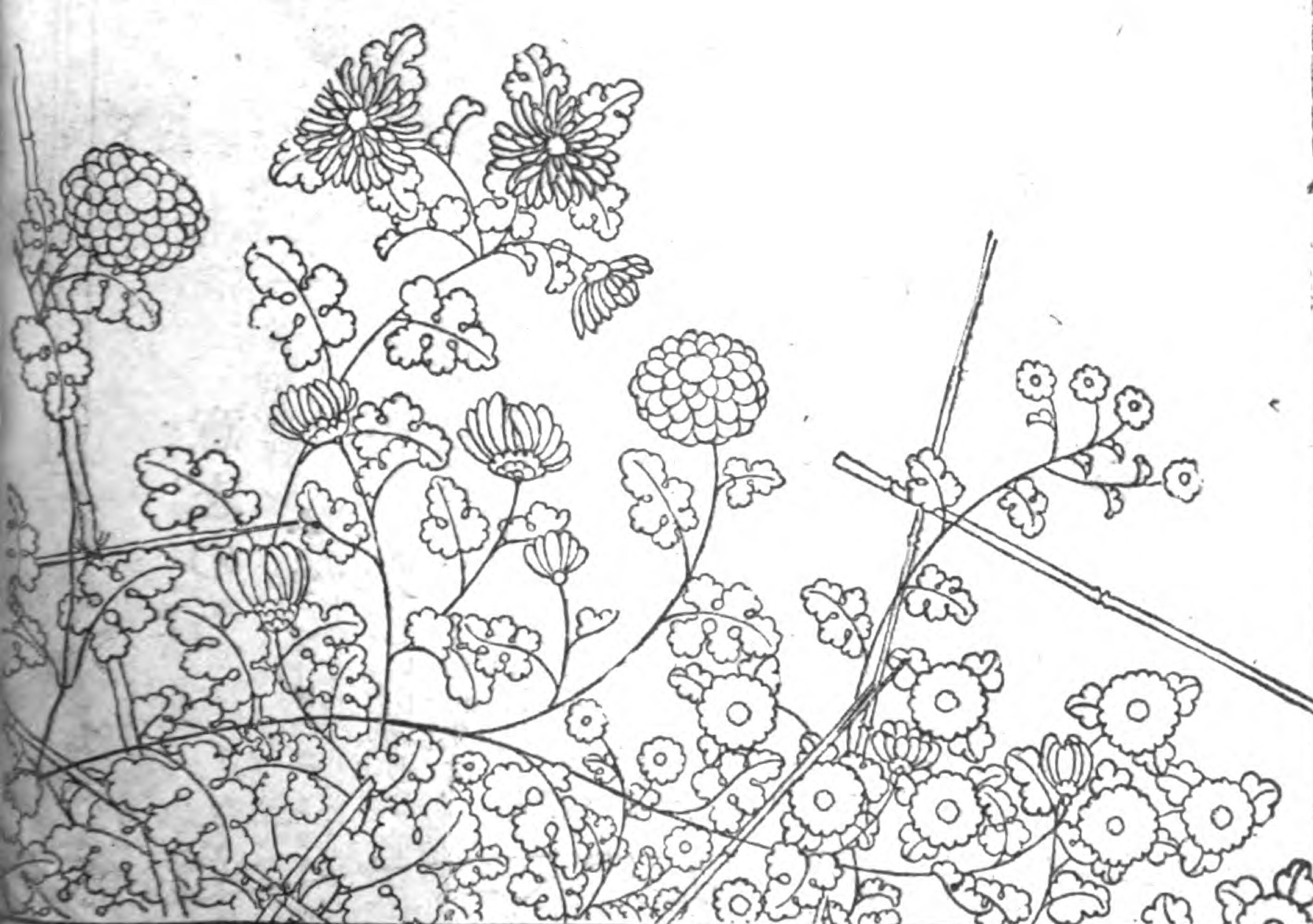
ムッソリニ

予は決して嚴めしい由緒ある名門の出ではない。予の祖先は、汗にまみれて畑を耕す土百姓であつた。予の父は、灼熱せる鐵を金床の上で打ち鍛へ、たゝき曲げる鍛冶屋であつた。幼少のころ、予はこの父の勞働の手傳をしてゐた。そして今は、もつと困難な辛酸な役目を身に帶びてゐるのだ。それは全國民の精神を打ち鍛へ、叩き直すことである。意志だ。強い強い大磐石のやうな意志だ。たゞこの強い意志の力をもつてこそ、吾人はいかなる障害にも打ち勝つことができるのである。

菊

中西悟堂

麗かな菊の園を私はあるきまはる。
高貴な花の間を
優雅な香の中を
皇子のやうに
爽やかにあるきながら
私は日本の花の王を讃へる。
何といふ清淨な誇らかさ
何といふ美しい淑やかさであらう。



純白の花、黄ろい花、
伸びた花びら、巻かれた花びら、
花は花に隠れ、花は花から秀でて
鮮やかに、優しく
寶石のやうに日のひかりに浮ぶ。
清潔な祭のやうな、神聖な彫刻のやうな
尊い、畏い、日本の花よ。
あゝ、鶴のやうな心になつて
この日本の花の王の宴の中を
秋の日の宴の中を
爽やかに私はあるきまはる。

蕗谷虹兒畫



愛情を吝む勿れ

エーベリー卿



エーベリー卿

エーベリー・ジョン・ラボック卿の名は「人生の快樂」「人生の妙用」其他數多の名著を通して、汎く我國にも知れ渡つてゐる。卿は實に英國が生んだ二十世紀初頭の大政治家であり、大科學者であり、大銀行家であり、大教育家であつた。議會に、大學に、銀行に、各種自然科學協會にと、行くとして可ならざるなき我が巨人の足跡は、遂に英國永遠の誇りとなつて愈々その輝きを增して居る。加之、卿はまた卓越せる思索家、哲人でもあつたのである。卿は一九一三年ケント州の一邑キングスゲート・カツスルに八十年の生涯を終へたのであるが、今其間、深遠なる學識に倚り、尊き經驗を通じて、人生を語つた名著が數々日に殘されて居る。此に揭げる小篇は即ち、それ等名著を涉獵し、光りある大精神の片鱗を傳へようと試みたものである。

親切な一言

時計の針が後れたり止つたりしたからといつて、直にその時計を叩きつけ滅茶滅茶に壞して了ふ人は先づあるまい。

それだのに他人の一寸した缺點や過失に對し、一々之を拾ひ上げては嘲笑つたり、怒つたりする人の何と多いことであらう？

壞れた時計は、時計屋に賴んで修繕し油をさして貰へば、忽ちコチ〳〵と嬉しさうな音を立て、前よりも圓滑に動き出すことを知つてゐる人が、何故、他人の缺點

や過失に對しては、温かな同情と親切を以て修繕してやらうとしないであらう？
ルーベンスは、その繪筆の一刷毛で、泣き顔をした小兒の肖像を、忽ち可愛い笑顔に變へたといふ。他人を喜ばせ、力づけるには何等の手數を要しない。親切な一言で澤山である。本當にタッタ一言で澤山であるのに。

光と影

赤ん坊に對して怒る人はない。赤ん坊には誰しも同情を持つからである。『自分は生れつき怒りつぽい性質であるから』といふ人があつたら、私はその方に尋ねたい。『貴君の怒りつぽいのは、怒りつぽい性質の強きに非ず、寧ろ同情心の薄きが故に非ざるか？』と。

私自身、昔は一方ならぬ癇癪持ちであつた。その爲私は隨分自身を不幸にした。同時に他人をも不幸にした。中年にしてその愚に心づき、之が矯正に努めたのであつた。矯正――難しいことはない。只同情を以て見るのである。同情の光のさすところ、怒りの影は忽ち消える。始めは光と影が毎日々々戰つてゐたが、いつしか光ばかりの日がつゞくやうになつた。

愉快は之を得るための困難に比例する。

悍馬を乗りこなした時の快味は、のろ〳〵した驢馬に乗つた時の比でない。怒り

つぽい性質も、それが強ければ強いほど、之を制御した後の心の平和は、何ともいへぬ幸福感にみち〳〵てゐる。

無用の重荷

調馬の名人テリー氏は、『馬を叱りつけると、その脈搏が一分間に十以上も増す』といつてゐる。馬に於て然り、況や萬物の靈長たる人間に於ては、他人の不快な顏色一つでも、堪へ難い重荷だ。

それで無くても、事業の蹉跌とか、知人の別離とか、肉親の死とか、さまざまの悲哀は避け難いのであるのに、その上に、更に斯うした心の重荷を互に負はされねばならぬとは、何といふ不幸な人生であらう。

『アリス鏡中旅行記』と云ふお伽噺に出て來る愚なる騎士は、旅の用意には、寢具や食料だけでももう一杯の重荷であるのに、彼は、途中二十日鼠に逢つた時の鼠取りとか、蜜蜂の群に逢つた時の蜂の巣とか、實に無用な重荷を山のやうに背負つて出掛けるが、それはお伽噺のことだとのみ笑つては居られない。お互がそれにも似た悲慘な滑稽を演じて居るのではあるまいか。

愛は盡くることなし

ロングフエロー曰く、「智は限りあるが、愛情は無限であつて、決して種切れとなることは無い」

同情や親切は、無盡藏である。與へれば與へる程、ます〳〵殖えて來る。

昔、雅典では、自分が火を點した蠟燭を有ち乍ら、他人の蠟燭に火を移す事を拒む者には、死刑の宣告を與へた。一寸した親切で、いくらでも此の世が樂しい住みよい所となるのに、それすらも吝むやうな人は、人の住まない北極にでも行つて、氷と嵐に向つて怒つてゐるがよい。

幸福の鍵

金錢は、生活に必要な品々、飲食物、着物、住居を買ふことは出來るが、ニコニコ嬉しさうな顏を買ふことは出來ぬ。

愛や、慈善や、心の平和は無くとも、我々は金持にはなれる。健康にもなれる。有名になる事も出來る。けれども幸福にはなれないのである。

愛が無ければ、天國ですらもが、毫も天國では無くなるだらう。それが有る所は、賤が伏屋も宮殿と化す。

「何人も眞に人を愛すれば尊くなるものである」と、テニソンは云つて居る。

友

○　若山喜志子

父母も夫もなき身は年ごろの親しき友におもひよるなり

年ふけてやうやく骨身に沁むおぼえかたじけなしよ友の心根

とりわきて親しき友を持つことは罪悪ぞとも思ふ時あれど

○　星野麥人

時に猿を友として秋惜みけり

木の實落つる音を友なる閑居哉

句の友は月や今宵の草の友

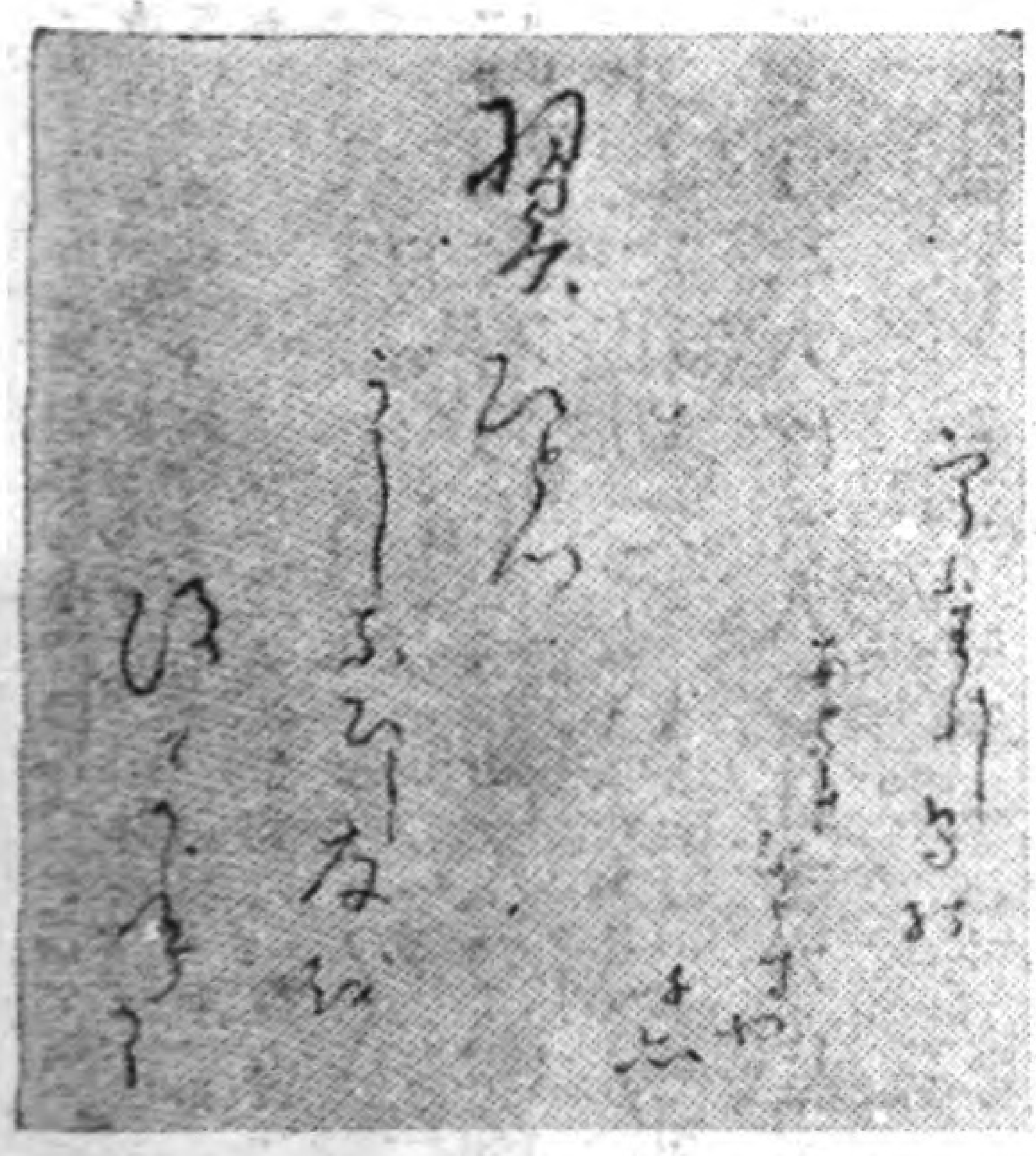
○　吉井勇

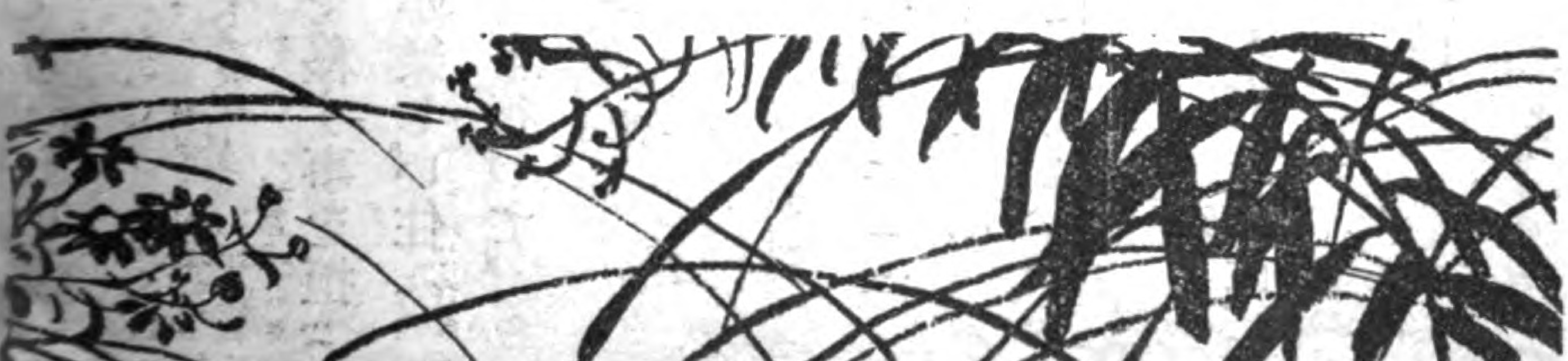
誰か知るいまの李白とわが呼びし友なき後の秋の深さを

われ醉へどともにこの世を憤る友もなければ酒も寂しき

十年まへともに筑紫に往きし友いまこの世にて會ひがたき友

翼ひとつ失ひし友をすてかねてうたれし鳥のあはれならずや　石榑千亦





○　中田信子

朝だきのつめたき麥に、
香ひとつ梅ぼし一つ、
貧しきままの澁茶すゝめて、
友なればこゝろおきなし。

珍客の來るといへば、
貧しきは貧しきなりに、
何くれとわがこゝろさわぎいたむを、
友なればこゝろおきなし。

○　高木角戀坊

碁敵の友を返して雨を聽き
友達でゐてとは切れる女の氣
又一人友達に成る醤油樽

友よ　野口雨情

友よ友達よ
秋が來た山に
見ますョ白雲が
山に立つ
雲の秋だよ
友達よ友よ
見ますョ白雲が
山隠す

○　老鼠堂機一

夜半の秋言葉敵の猶戀し

○　杉浦翠子

高原に夏をよそにし暮らしながら逢ひたかりけり歌語る友に

我が前にも友ゐたり後にも友ゐたり花野が原を通る細路

○　村田周魚

友達の無い子悲しくけふも暮れ
淋しくも呑友達の通夜を醉ひ
惡友も賴りに思ふ失業苦





命令以上

本社々長 野間清治

一 命令以上とは

命令以上の事をするのは實に難かしいものである。私もだんだん人を使つて見て、始終この點を注意して居るが、命令の三分の一、或は二分の一をするに止まるのが普通であつて、命令の八割なり九割なりを實行するものは餘程見上げた人である。況んや命令の全部を行ふといふことは、非常に困難なことであつて、そんな人は先づ少い。更に況んや、命令以上を考へる、命令以上を行ふといふやうな人は、それは〳〵極めて稀である。從つて偶〻これあれば、敬服と言つてよいか、感嘆と言つてよいか、如何なる辭を以て之を賞してよいかに迷ふ位である。蓋し、人の思考や實行が命令以上に及ぶのは、其人の資質が優秀であるばかりでなく、其心掛が卓絕してゐるのであるといはねばならぬ。

二 鑿と言はゞ槌

此間私共で揉療治の先生を招いた。少年に、『先生がお見えになつたよ』と言ふと、彼は早速案内をして座布團をすゝめ、煙草盆や煙草を出す。その他色々をやる。けれども、『先生がお見えになつたよ』と言ふ一語を聞いて、それに關する必要な仕事の全部を果すものは誠に少い。全部とは何を言ふか。座布團をすゝめること、煙草、煙草盆を出すこと、燐寸を添へること、お茶を差上げること、お菓子を持つて來ること、暑い時であるならば其邊の硝子戶を開くこと、團扇をすゝめること、主人の橫になつて揉んで貰ふ其布團を敷くこと、頭を揉んで貰ふのに必要な手拭を持つて來ること、主人が汗をかくから團扇、西洋手拭を備へること、それから療治の後に手を洗ふ水や石鹼、綺麗な手拭を用意すること、療治が濟んだ時分には、又來てお茶を出すなりお菓子をすゝめるなりすること、その他それ

相當な仕事が澤山あらうといふものです。

斯様にして『先生がお出でになつた』と言ふ一語を聞いて、それに關聯した仕事の一切を、完全にやり了せるのには、誠實であることも必要であり、頭のよい事、氣轉の利くことも必要であり、いろ〱の特性が綜合されて、始めて完全を致すのであるが、それが餘程難かしいものと見えて、なか〱出來ない。

或者は知つてゐても勞苦を厭うて全部をやらぬことがあらう。或者は誠實ではあるが、氣が利かぬ爲めに完全を期し得ぬこともあらう。或者は全部をやるにはやるが、誠にまだるツこしいと言ふのもあらう。或者は前にすべきこと、後にすべきことを取違へることもあらう。斯様にして『先生がお出でになつたよ』と言ふ一語の下に、爲すべく平素命令してあることを、或は六割或は七割或は八割まで行ふと言ふのが精々であつて、九割又は十割を實行する様なものは甚だ鮮い、其日其日の天氣の具合などで様々やり方が違はねばならぬこと迄よく心得ねばならぬ。



三　百尺竿頭一歩を進む

これはほんの一例に過ぎないが萬事がさうである。何か用事があつて座敷へ來た序に、そこの煙草盆の汚いのを持つて行つて綺麗にするとか、其邊に散らかつて居る物を取片付けるとか、それがなか〱出來にくい。例へばお客がお出でになつたとき、それを御案内申すだけでは可かぬ。これに關聯した仕事が澤山殘されてゐる。自動車に乘つて來られたならばその自動車の運轉手に對する待遇がある。お客の下駄を揃へると言ふこともある。そこまでも氣を配つて、痒い所へ手の屆く様にするのは決して容易な事ではない。その容易でないこと、即ち難きを人に責めることは、使ふ方でも斟酌しなければならぬが、使はれる者の方から言へば、そこを何處までも心を配つて、完全にすることを理想としなければならぬ。それが義務であり道德である。否之が本當に頭が練れ人物が磨ける實に肝腎要の事である。

更に進んでは一命令を完全に仕終せることを以て足れりとせず、その命令以上に及んで、百尺竿頭更に一歩を進むるの覺悟と工夫があつてこそ、始めて偉いと稱することが出來るのである。而して心誠に之を求むるならば、必ず事々に命令以上に出で得るものであると私は確信する。

四　行爲の三階段

細君が陰膳を据ゑると言ふ事がある、その陰膳に蠅のたかるのを追ひく〳〵して、夫の歸りを待つに至つては、是は命令以上の事で、實に『誠』の積極的發動である。『誠』さへあれば、一時は氣の利かぬ者であつても、遂には氣が利いて來る、そして何處までも其人の働きは進んで止まないであらう。

斯樣にして、人間のする仕事には、どうやら斯うやら出來たと言ふ程度と、誠に工合よく出來たと言ふ程度と、更にそれ以上の微妙な精神的價値ある光輝の程度迄つまり三階段があると言ふことを考へねばならぬ。



『手拭を絞つて持つて來い』ぐつしより汗をかいた主人が斯う命令した。その時、そこには水道もあり、井戸もあり、少し離れて清泉もあるとする。水道の水で手拭を浸して來ても惡いのでは無いが、井戸の水であればなほ結構である。それが少し離れて清泉がある場合之に浸して來る所まで行くには、誠が無くては出來ない業である。尤も早くせねばならぬ場合は最も早い水道の方がよい事もあるのは勿論の事である。更にその家の生活程度によつては、或は其手拭を容器に收めて來るとか、香水をふつて來るとか、或は其手拭をすすぐ時に、一度ではもとの汗臭いのが取れぬから、二度三度すゝいで來るとか言ふことになると、それは命令以上に出た優れた仕事である。更にバケツに一杯、清水を汲んで、主人の必要を見越して、金盥と共に手近の所まで持つて來て、もう一度すゝいで差出すと言ふことになれば、それは既に命令以上、餘程立派な働きである、細君が主人の歸りを待つために、膳を備へて置くので、普通はよいとしてあるが、それに蠅がたかつて汚いと言ふので、これを追ひく〳〵してゐると言ふ處に、何とも言へない眞情の美しさがあ

る。無論現今では蔽ひ被ぶせるものも出來てゐるが、以上は一つの例話である。

それは形以上の事である。命令以上の事である。『至誠』の發露である。人に向つて叩頭するとき、形に於ては結構お辭儀になつてゐるが、之に加ふるに心の底から眞に其人を敬する所あつて、衷心からのお辭儀をすることになれば、それはもう形以上である。この形以上の事をすることが大切だ、此の考へを以てすれば、一人にして二人の働きが出來る、一人にして三人四人の働きが出來る、十人前二十人前の働きも出來るに至る筈である。

五　命令以上の價値

斯う言ふ考への人ばかりが集つて一社を成す時、その社は振ひ興らざらんとするも能はざるものである。簡單な仕事たる雜巾掛をするにしても、矢張り善い人は上手で、さうでない人は下手だ。背中を流させて見ると、此の人はと思ふやうな人は、矢張り流し方も上手で、然らざるものは、矢張り下手である。使ひを言ひ付けても、電話を掛けさせても、皆さうだ。一事が萬事で、善い人は何をさせてもよいのが、大體に於て間違ない眞理である。是はその心根に關係することである。いつも命令以上にやらうと心掛けて行くのは、さうした心根を養ふ所以であると同時に、其人の將來の爲に、どんなにか幸運が開け、どんなにか出世が出來ることであらう。若し此考へなくして、其場逃れに、人の見て居る時と見て居ない時とを別け隔てをなし、明暗によつて行を異にするが如き所謂奉公人根性を以てするならば、其人の人格は、終に成就する所なく、主人の爲にもならぬは勿論、世の中の爲めにも、有つて益なき人となり下つて了ふ。無論其人の將來や亦知るべきのみである。(終)

本誌愛讀者皆樣に御願ひ

小社野間社長が、報知新聞の社長となりましたことは、既にお知らせしました通りでありますが、皆樣の特別な御後援によりお蔭樣でその後『報知新聞』は發行部數日毎に萬を以て增加するといふ有樣であります。何たる喜び、何たる感激、社長はもとより同社社員一同は感涙に咽び、更に更に勇躍奮起、良い新聞、面白い新聞、爲になる新聞を作るべく、報知新聞社三千の社員は、總動員で大活躍を續けて居ります。

『日曜報知』の無代添付

野間社長就任第一の讀者奉仕として「日曜報知」を添ふるや、到る處非常な評判です。

この大奉仕計畫を第一として次々に驚くべき大計畫を色々と研究してをります。どうぞ小社同樣の御後援を、報知新聞社にも賜はらんことを切望致します。

漫畫

育ちのユーモア

その五＝隣人愛の育ち篇

田中比左良

一、引越そば

『ちよつと貴郎、お隣りからの引越そば、たつた一ツきりですのよ、いくら不景氣でもずゐぶん不景氣ねえ』

『さう言へばお隣りの神さん不景氣さうな顔してたよ』

引越そばの數で惡評を擅にすることほど左樣に最初は赤の他人である。



二、隣人愛の芽

一月經つた。遊びに往來を始めた、子供はお隣りを自分の家庭の延長と心得てるのでお隣りの主婦にダヽを捏ねたりする、主婦はずゐぶん腹では癪に觸ること等も有るけれど結句己が子と仲よく遊ぶ子供は可愛ゆくなつて種々なものを與れたりする、このお禮の言葉が町の錢湯で取交される、こんなところから隣人愛の芽は出て來る。



三、簡單服のお揃ひ

二月經つた。主婦同士の仲が可なり密接して來た。何時の間にか二人約束して同じ柄の簡單服を着こんでゐる。

『まア奧樣はスラリとお姿が好いから好くお似合ひですこと』

『アラ御冗談を、貴女樣こそ現代式の御樣子でらつしやるからピッタリお似合ひですのに』



四、近所へ強盜



近所へ強盜が入つた。さア大變、各々の主人は徹宵警戒だ、緣臺の上で安直な酒宴、

『斯うなると御隣家が力頼みですな、あつしやア大丈夫ですが家内共が顫へましてねアッハヽヽ』

『いや全く御近所が有ればこそですよ、震災の時なんぞもツク〴〵さう思ひましたよ、さア御返盃です』これが三月目で主人同士の仲好しになる機會だつた。

五、一寸融通

『オヤ、何うしてそんなお金が急場に拵へられたんだい？　一六銀行かい？』

『いゝえ、あのお隣りの奥さんに一寸融通して貰つたんですの、ほんとに遠い親戚より近い他人ですのよ』

『まつたくだ』

家計のヤリクリを打明けるほど隣人愛は育つてゐた。これが四月目。



六、泣きの涙で



六月目、都合で引越すことになつた、泣きの涙で別れを惜しむ。

『折角お馴染になつたのに、もうお別れするなんて、あたし泣けて〳〵……』

『ほんとでございますわ、第一子供同士が可哀さうでございまして……』

肉身の別れと變りはない。

隣人愛の育ちよ、お前は案外な深刻さと案外なスピードを持つてゐた。皆の隣人愛が斯うとも言へないが斯うあらせたい。



戲曲　聞多と春輔

眞山青果
齋藤五百枝畫

第一幕

時――元治元年六月下旬のある日、午後。

處――横濱居留地に於ける何某ホテル館。

ホテルは俗に英吉利ホテル館と呼ぶ。その位置海岸通に近く且つ英國居留地域內にありしためなりといふ。舞臺に見ゆるところはその二階、廣き廊下を利用して應接所に使用せらるゝ邊の一部。

正面に扉をとざしたる客室三室ほど連りて見ゆ。前は廊下にて、折廻して鍵の手となり上手の露臺に出づるやうになりゐる。廊下は下手に通りそこに階段ありて階下の玄關に通ずるやうになる。又別上手奧にも一箇の狹き階段ありて、事務室その他階下への通路となる。露臺には諸種の盆栽植木類など置き、籐椅子數脚小卓などを其間に据ゑ、海面をわたり來る淸風に涼を入るゝための設備あり。廊下の曲角その他二三箇所にも椅子を置いて、適宜なる涼み場所を設けたり。軒のそこゝゝに外人好みらしき支那提灯、日本の切篭燈篭などをつるし壁面には漆繪の粗末なる風景繪など貼付けあり。



ホテルの經營者は外國人なれども、家屋の建築者は本邦人なれば、その構造裝飾等には初期模倣時代の洋館建築らしき特徴及び手法あらはる。

幕明く——。日は漸く西に傾き、海の風涼しく吹入らんとする時刻なれば、一日の炎暑に苦しみたる外人旅客等はみな室外に出でて談笑に耽る。シガアをくゆらして大股に廊下を散歩する者あり、樹陰に立つて切りに話し合ふ青年あり、寢椅子にもたれて上海新聞を讀みゐる商人らしき肥滿の老人あり。又四五人は露臺の欄干にもたれて、その外方の道路にて演奏する大道藝人の三味線太鼓にてはやし立つる卑猥なる流行歌を聞きて笑ひゐる。その間をホテルの給仕二三名、千草色の股引半纏にて髮を丁髷に結びたるが、盆栽に水を與へたり。客に飲料など搬ぶ者もありて、夕食前の一時を急がしげに周旋す。その名タメイ、ヒコ、ロクラなどみな外國人の轉訛のまゝの發音にてわが名を呼び合ふ。

やゝ間ありて、ロクラと呼ばれたる若き給仕人の一人、十二號室と記せる一室に、鉢植の花石榴を持ちて入りしが、内部にて何やら爭ふ聲聞えて、ロクラは、宿泊人のポルトガル人ゴンサロ・ピレロに押出され來る。ピレロは年齡三十歳ほど。歐羅巴人としては、背も高からず、顏貌無表情にして、沈欝にも見ゆる男。自らは、リスボンの貿易商人と稱すれども、態度偏屈

にして衆人の前に出るを悦ばず、終日室内に閉籠りゐる。服装は粗悪なるのみならず、その着方なども不恰好にて、顔色はなはだ東洋人に似たり。

ロクラ （びつくりして押出されながら）何んですく、何をする……。

ピレロ （給仕人を睨み、興奮してたゞ叫ぶ）否々、否、否。

ロクラ 何が否々だ。（手真似を加へて）盆栽……植木鉢を入れるんですよ。（室内に又入らんとする）

ピレロ （両手を擴げて戸口に立塞り）否々！否、否！

ロクラ （やゝ穏かに鉢植を示し）ねえ、プラント、ツレイ。ね、ジヤクロのボンサイ、部屋に置きます。（室に入る）

ピレロ （東洋式に給仕の襟がみを掴んで引戻し）否々、否！

ロクラ 痛えく、これ、何をするんだ、痛えよう！

ピレロ 否々！ 否！（嚇として怒り、給仕人を突き倒す）

ロクラ、大力に突きのめされて籐椅子に新聞を讀みゐたる亞蘭商人の前に倒る。商人、驚いて立つ。露臺の人々も一時びつくりして、此方を見る。仲間の給仕トメイ、ヒコ等用事を置いて側に走り寄る。

ロクラ （怒りの暴状にむツとして、立ち上り）何をしやがる。ふざけやがつて——。さ、毛唐、何が否々だ。

ピレロ （室内を指差し、給仕を睨みつけて）オ、否、否！

ロクラ （腕まくりなどして）さ、何んで人を突き倒した。何が否々だ。それを云へ、云へ！（突ツ掛りゆく）

ピレロ （幾分か自分の短氣を悔みつゝも、たゞ叫ぶ）オ、否、否！

ロクラ ふざけやがつて、江戸ツ子だぞ。

ロクラ、ピレロに組付かんとす。ピレロ、怒つて又突き倒す。新聞を讀みゐたる外國商人もその亂暴を見かねたるもの、如く、何か自國語にて呟きながらピレロの力に近付く。ピレロ、その人と話すを好まぬもの、如く、やゝ狼狽して自室に入り、内より開く戸を鎖す。外國商人は苦笑しつゝ、又籐椅子に新聞を讀む。露臺の旅客等も一笑してもとの光景に復す。

ロクラ おゝ痛え、畜生！（口を尖らし、臂などさすりながら）糞力を出しやがつて……、口で云へば分るちやねえか。貧乏神！（ブツく呟きながら植木鉢の破片などを拾ふ）

ヒコ 何うしたんだよ、ロクラ。何か粗相でもしたのか。

ロクラ 粗相どころか……、何が何んだか分らねえ。おらあ植木を持つて入つて行つたんだ。（餘憤まだ止まず忿々しつつ）奴、テーブルにもたれて何か矢立をつかつて、何か字を書いてゐたつけ。突然飛び上つて來て、おれを突き倒めしやがつたのだ。

トメイ 矢立？ ちや日本の文字を書いてゐたのか。

ロクラ （初めて氣が付き）然うだ。何うも……日本の字らしかつたぜ。確かに矢立を置いて、筆で書いてゐた。

トメイ 可笑しいちやないか。野人が矢立をつかふなんて……

ヒコ　何んでもこの毛唐は食はせもんだよ。自分ちや葡萄牙商人だなんて云ふが、服の着こなしから持物まで商人らしいところは見えねえぜ。第一、錢づかひがみみつち過ぎらあ。

トメイ　面付が第一歐羅巴ぢやねえ。ホルトガルなんて云つてるが、事によつたら瓜哇あたりの、黒白の間の子かもわからねえぜ

ロクラ（室を睨め、擦疵を撫でつゝ）貧乏毛唐！　ヒリ〳〵すらあ！

ヒコ　そしてロクラ、もう一人の毛唐は何うしたんだ。

ロクラ　あいつは昨日晝過ぎに出たつきり、まだ歸つて來ねえ。それで餘計こいつが（頤にて部屋を示し）ジリ〳〵するかも知れねえ。

ヒコ　あの方がまだそれでも人間らしい。人の顏を見りやニコニコするぐらゐの藝は知つてるやうだ。

ロクラ　こつちの化物と來たら、全く手にあますよ。高が二皿か三皿の食事を、番きり部屋にはこばせやがるんだ。それも好いが、出すものツて云へば握り拳だ。こんな大ベラボウの異人をおらあ扱つたことがねえ。

トメイ　何日まで逗留する氣だ。さつさと立ちやがれればいゝ。

給仕等ブツ〳〵呟きつゝ又用務にかゝる時、階下なる食堂の方にて晩餐の銅鑼の音聞え來る。旅客等はその音を聞いて、ソロ〳〵と食堂の方に歩み去る。籐椅子の商人も給仕ヒコに何か小聲に用事を云置きたる後、食堂へ下り行く。

給仕等その後に殘りてその邊を整頓し、掃除する。日は沈んで、夕闇次第に深かくなる。

十二號室の葡萄牙人ビレロ、手に一封の嚴格なる書翰を捧ちて室を出て來る。給仕トメイを見て、それに近付く。

ビレロ（書狀を出しつゝ）英吉利領事館、ミストル・エルネスト・サトウ。

トメイ、聞えぬ振りして側を離れる。ビレロ、むツとせしが、仕方なく給仕ロクラの方に來る。

ビレロ　この手紙、急ぐ。ミストル・エルネスト・サトウ。

ロクラ、ビレロを見上げて答へず。向ふの方へ掃いて行く）

ロクラ　――。（相手を睨めて突ツ立ちゐる）

ビレロ、その態度にむつとして、威嚇的に足踏みする。ロクラ、已を得ず書狀を引奪りて階下に歩み去る。

ビレロ（又トメイの側に近付き）ムスクイトネツト（蚊帳）ムスクイトネツト。早く、下さい。

トメイ（わざと空惚けて）え、え、何んです。ムスクイト――？

ビレロ（ポケツトよりハルマ辭書を出し、急しく繰りつゝ）蚊帳、蚊帳。日本の言葉蚊帳、早く、下さい。

トメイ　蚊帳を何うするんです。（突慳貪に掃きゐる）

ビレロ　蚊、澤山ゐます。蚊帳、下さい。

トメイ　贅澤云つてらあ。（給仕ヒコに向つて）この異人、蚊帳

だとよ。

ヒコ　昨夜ッから頼んでやがるんだ。穴のあいたのでも探して來て、仕方がねえ、吊つてやれよ。

トメイ　吝つたれの癖に、勝手なことを云つてけつかる。(叮嚀に頭を下げながら) 今吊つてやるよ。少し日本の蚊に、食はれて見るのもいゝだらう。(ブツ／＼呟きながら去る)

ビレロ、自ら嘲る如き苦笑を洩らしてわが室に退かんとする時、遠く夕闇をかすめて尺八の奏音、微かに聞え來る。

ビレロ　(歩を止めて、思はず流暢なる日本語にて) 何んだ、尺八か――？ (と呟きしが、そこにヒコの立ちゐるに氣が付き、外國人らしき發音にて) 何んですか、あれ、何んですか。

ヒコ　尺八だよ。(煩さゝうに答ふ)

ビレロ　尺八――！　尺八――！　然うですか。

ビレロ、急に感慨深き聲にて、そこにある椅子に腰を下し、靜かに暮れゆく海面を凝つと見詰める。

ヒコ、格別それを怪しむ態もなく掃除を續ける。

ヒコ　(暫くしてビレロに心付き) ミストル、ミストル、ミストル。エブニングミイル、もう初つてる。食事部屋、開いてゐる。お前さん、今日も食ふ氣か、食はん氣か。ミストル、ミストル、ミストル！

ビレロ　――。(腕を組んで無言。何か沈思に耽る)

ヒコ　ちよいと、お前さん。今日も食ふ氣か、食はん氣か。ちよいと、ちよいと。(掃き寄せながら自然と言葉に節をつけ、そのアクセントに誘はれて、いつとなく鼻歌がかりに歌ひ出す) 奴さんはえゝ、何故おそい……、草鞋がきれたか、御門止めか……。

給仕トメイ、日本武士今村某、高岡某の兩名を案内して入り來る。兩人共輕裝して表面は奥州某小藩の勘定方下役と稱し居れども、實は幕府外國方の役人にて、銃器買入並びに他の機密要務のために、當ホテル止宿の英國商人ケセウヰツキを訪問せるなり。

トメイ　ケセウヰツキの旦那は、只今食事部屋でございます。暫時これに、お待受けを願ひます。

今村　毎度世話になるの。(幾何かの紙包を握らせ) ケセウヰツキは、毎日在宿か。取引用で客が多いだらう。

トメイ　(紙包の効めを明かに示しつゝ) いゝえ、この頃は一向……諸藩の御方もお尋ねはございません。

高岡　薩摩人が盛んに居留地に入込んで、異人どもに近付いてゐるといふ風聞だが、そんな形勢は見えないか。

トメイ　いゝえ、一向に聞きません。薩摩の御藩なれば、私どもにも氣がつく筈でございます。

今村　(今少し言葉を密めて) 西國訛りに注意して、若し胡亂と見たなら、そつと役所まで知らせてくれないか。

トメイ　へ、御役所？

高岡　(名札を渡しつゝ) 棚倉藩と云つてゐるが、我々は斯ういふ者だ。公儀への御奉公になる、油斷なく勤めろ。殊に追追と、長州者が入り込んで來るに相違ない。御用に立てば、

一旗の手柄だぞ。

トメイ　旦那樣。長州藩と關東方と、京都で合戰が初まるといふは、全くの事でございますか。

ピレロ、長州といふ言葉にギツクリして顏を上げ、不安さうにこちらの對話を聞く。

今村　確とは申されんが、風說とばかりは云はれまい。それに就いて、異人仲間では何のやうに噂を致してゐる。

トメイ　異人仲間の評判には、どうで一合戰免かれないものとして、昨今のところでは、どちら方に勝味があるか、その賭事に大金を張り合つて居ります。

ピレロ、不安さうに立上る。

高岡　賭事——？　國家の大事を、博奕にするとは怪しからん奴等だ。

今村　（相手の高聲を目もて制しつゝ）それで、賭の步合は、どの邊のところだ。

トメイ　然やうでございます。先づ四六……七三といふには、少し弱氣のやうに思はれます。

高岡　（少しあせつて）何方が三分で、何方が七分なのだ。

トメイ　そりや旦那、異人だつて知つてゐますよ。長州の田舍ツぺえが何う鯱子ばつたつて、こつちは權現樣以來の御武運でございます。それに會津樣、桑名樣、一橋樣、御手が揃つてゐます。京都へ押登せる長州勢は、今に一人殘らず皆殺しでございませう。

ピレロ、むつとして傍にありし陶器の灰皿を摑む。

トメイ　長州浪人どもは、やゝともすると禁裡樣を笠に着て、攘夷の鎖港のと異人だちを目の敵にして亂暴をしたが、今ぢやその禁裡樣にまで見放されて、死者狂ひの體といふぢやございませんか。毛利家三十七萬石もいよ〳〵今度は沒落の時が來て、大膳大夫親子の首が、今に鹽漬になつて江戶へ下りませう。はゝはゝゝ。

ピレロ、聞くより赫として灰皿を給仕に投付けんとせしが、ふと何か思ひ返して、いきなり灰皿を床板に叩き付ける。

三人はびつくりしてその方を見る。ピレロ、憤怒に身を顫はし、暫くは給仕の顏を睨みつけゐしが、やがてカラカラと大笑して、英國俗歌らしきものを口笛に吹きながら、大股にバルコニイを步み廻る。

今村　（驚き、且つ怪訝さうにその後姿を眺めつゝ）何アんだい、あいつは——。氣違ひか。

トメイ　何うも少し……變かも知れません。（共に仰天しつゝ）爲ることが、總て人並みぢやございません。

高岡　樣子はそつくり我國人らしいが……、何者だ。

トメイ　二三日前から逗留して自分ぢやポルトガルと申してゐますが、どうせ碌な者ぢやございません。上海から乘るのに、蒸氣船の路銀を惜んで、荷物船の帆前に乘つて來るやうなやつでございます。南州あたりの黑奴の血を引いてゐるや

つでございませう。

今村　然し、長州侯の悪口を聞いて、急に激昂したやうだ……
……。

高岡（笑ひ出して）　偖はやつめ、なけなしの錢を長州方にでも、賭けてゐるのぢやないか。はゝはゝゝ。

今村　いや、大きに、その邊かも知れんて、はゝはゝゝ。

トメイ（氣が付いて）　食事部屋が濟んだ頃でございます。ミストルに然う申して參りませう。暫時何うか……

トメイ、走り去る。食堂の方より微かに奏樂の音聞ゆ。

高岡　兎に角、外國人等の信頼心が幕府にむかつてゐることは事實だ。

今村　そりや云ふ迄もない。長州も薩摩も昨年以來攘夷の行動をとつて、關門通過の外國船を何回となく砲擊してゐるのだ。外國人が薩長兩藩を憎むのは、もとより當然なる話だ。

高岡　然し薩摩と英國との問題は、昨年の英國軍艦鹿兒島襲擊でほゞ解決をつけてゐるから、今度は長州藩砲擊に外國政府の意志が一致してゐる。幕府の親征を待たなくとも、長州は、四箇國聯合艦隊の攻擊をうけて、必ず絕滅の運命に瀕してゐるのだ。

今村　貴公また輕率に說を立てるが……。その安心は油斷として侮まれる時が來るだらう。長州の處分問題はそんな輕いことぢやない。

高岡　又貴公の持重說か。はゝはゝゝ。些と勝麟太郎にかぶれ過ぎてゐるよ。兎に角目下の急務は、暴論過激の薩長を懲しめて、德川政府の威力を中外に示さなければならない時だ。

ビレロ、然りげなく步み廻はる間にも、長州毛利等の名の口にせらるゝ度に、敏感にその對話に注意する。

今村　そりや無論、云ふまでもないことだが……。

高岡　なら、誰の力で滅しても、長州さへ滅亡すれば目的は達するだらう。

今村（苦々しげに橫を向き）　またそれを始める。

高岡　そりやおれの方でいふ言葉だ。長州は攘夷實行を口實に、再三外國船に損害を與へてゐるのだ。外國人と長州と合戰になれば、德川家は手を濡さずしてその利益を領めるだらう。

今村　馬鹿なこと、云ふもんぢやない。長門は何處の國なのだ。

高岡　然し、長州は事每に幕府の節度に反抗して、一國の主權さへも傷けようとしてゐるではないか。何者の力を借りようとも、先づ長州を膺懲するのが眼目だらう。長州の跋扈する間は、到底德川家の威令が天下に行はれるものぢやない。

今村　誰か來るやうだ。異人にでも聞かれると、恥辱だぞ。

高岡　貴公は然う、體面のみ考へてゐるから埒が明かん。

今村　國にして體面を失はゞ、いづくに存在の實を求めるか。われ〳〵は德川家の臣下たると共に、日本の國民だ。

先に籐椅子にもたれて新聞を讀み居たる外國商人、食事を

揃りて食堂より歸り來る。同人は英國ジャーヂマッチソン會社の横濱支店を經營するケセウヰツキといふ者なり。

ケセウヰツキ （兩人握手しながら、流暢なる日本語にて）お、大層お待せ致しました。年寄の食事、時間がかゝります。ははゝゝ。

高岡 一昨日の話、江戸屋敷へ戻つて篤と重役の者と協議いたして參つたが、代物は慥かに、約束の數だけとゝのへますか。

ケセウヰツキ 五千五百挺でしたね、お引受け致しませう。

高岡 今日約定金を渡せば、現物は何日頃受取渡しになりますか。

ケセウヰツキ それは貴方の方、御入用の日まで、お間に合はせます。

今村 品物は現在、何處に保管されてありますか。

ケセウヰツキ （惚けたやうな態度）品物、倉庫にあります。（團扇など使ひゐる）

今村 然し、目下横濱中の倉庫には、當方の注文品の貯へは見受けないやうに思はれるが……。

ケセウヰツキ 横濱の倉庫、調べましたか。（笑つて）兎に角、御入用の日まで、間に合はせませう。

高岡 然し莫大の價格だ。現物を見ないうちは不安に思ふ。

ケセウヰツキ サンプルお目に掛けました。大丈夫です。

今村 當方には至急入用品だが……品物は慥に有りますか。

ケセウヰツキ 御安心なさい。上海支店の倉庫にあります。

高岡 （當惑さうに今村と顔を見合せつゝ）上海支店――？

ケセウヰツキ 大丈夫です。間に合ひますよ、間に合ひます。（笑つてゐる）

高岡 （腹立しさうに）貴公が保證しても、それではこつちが困る。

ケセウヰツキ いや、大丈夫。わたくし日本歩兵の行軍力、研究してゐます。

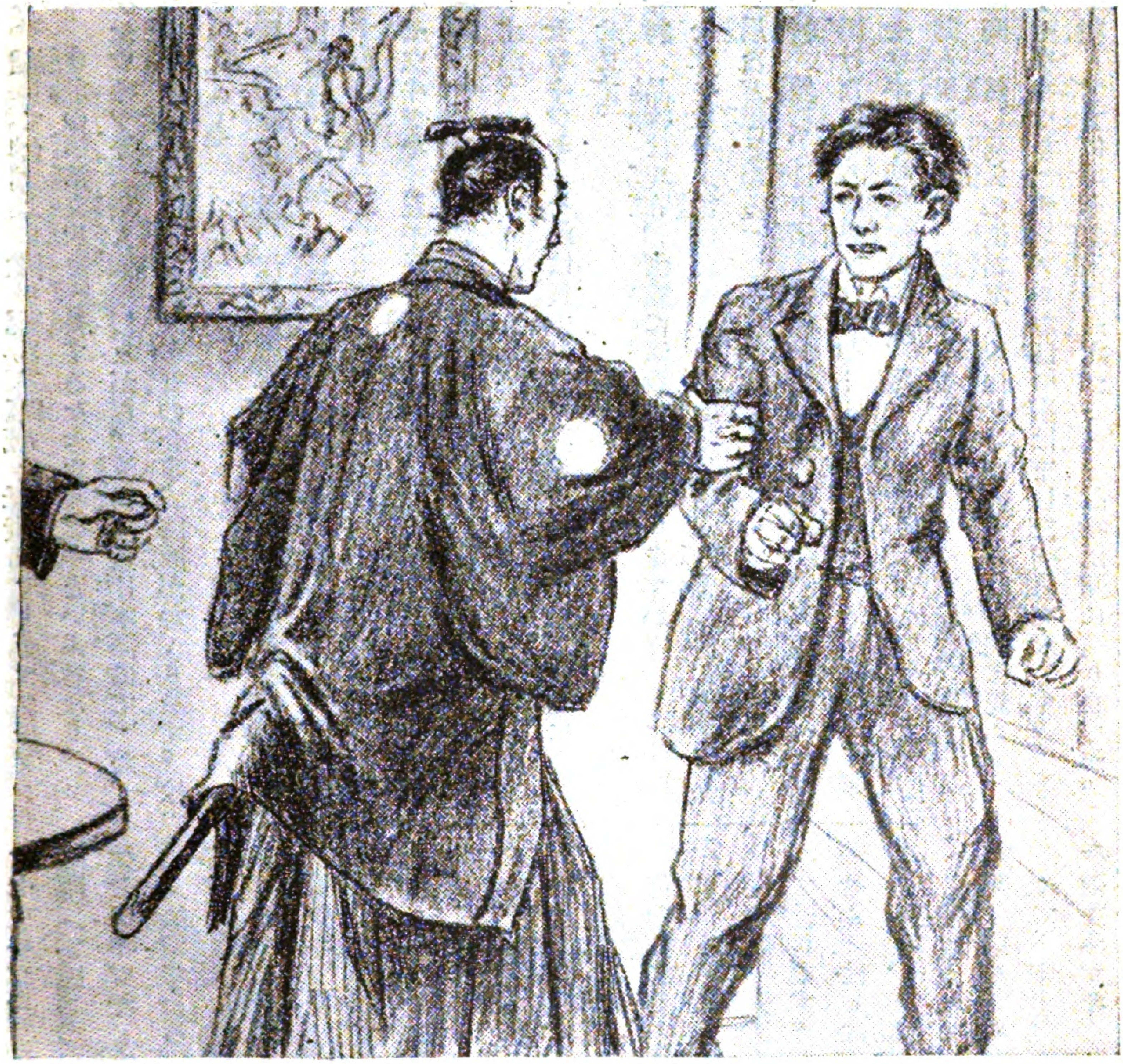
今村 （ギックリして）日本歩兵の行軍力――？

ケセウヰツキ 一日二十哩、行軍むつかしいです。わたくし今日上海へ、蒸氣船差立てる。（一々指を折りて見せつゝ）到着の航海、三日かゝります。スナイドル銃の積込み一日、歸りの航海二日半、兵庫又は大阪に着きます。都合六日半です。その間に公方樣の歩兵隊、神奈川泊り、小田原泊り、三島泊り、……（伏せたる指を一本づつ起して）やうやく濱松到着の頃、鐵砲もはや伊勢桑名、名古屋、お望みの土地、着いて居ります。大丈夫、長州征伐間に合ひます。御心配ありません。はゝはゝ。

ビレロ、長州合戰と聞きツカ〳〵と側に來り聞く。今村、不審さうにビレロの態度に注意する。

高岡 飛んでもない、それは怪しからん。吾々は藩命によつて……。

ケセウヰツキ 可けません〳〵、知つてゐます。一橋慶喜樣、



公方様の代理、長州と戰爭、京都に初まります。そのため幕府歩兵隊、出發します。

高岡　怪しからん、怪しからん……。

ケセウキツキ　長州の諸隊、みな新式の鐵砲持つてゐます。幕府のゲヘール、役に立ちません。このスナイドル銃、大變必要です。はゝはゝゝ。

今村（ツカ〳〵とビレロの前に進み）貴公は何者だ。何を聞いてゐる。

ビレロ、答へず、知らぬ顔して立去らんとする。

今村　待て〳〵。先刻からの様子、甚だ胡亂極まる。（相手の腕を掴んで）貴公、日本人であらう。

ビレロ（腕を振り放して、英語）何故紳士に無禮するか。

今村　確に日本人だ、日本人に相違ない。何故に、他人の秘密を立聞くのだ。日本語で答へろ、日本言葉で云へ。

ビレロ（忌々しげに今村を睨めたる後、英語）知らん、お前の云ふことは分らん。

（呟きて立去らんとする）



今村（又手頸を摑んで）いや、日本人に相違ない。さつきから吾々の話を聞いて、或は激し、或は頷いてゐた。日本語の分らぬ者が、吾々の密話を偷み聞く筈はない。

ビレロ（英語）否々、知らん〳〵、日本語知らん。

ケセウキツキ（同じく怪訝さうに立つて、ビレロに近付く）君、君……。

ビレロ、ケセウキツキの話しかけるのを恐るゝものゝ如く、慌てゝ手を振りきつて逃げ出さんとする。今村、その手を摑つて放さず、高間も又その前に立塞がる。

ケセウキツキ（英語）君、君、ポルトガルの紳士。わたしは先刻から君に注意してゐたが、君は何かわれ〳〵の秘密に……。

ビレロ（英語）知らん、知らん。英語は話し得ない。

ケセウキツキ（英語）不十分ではあるが、私はフランス語ならば……。

ビレロ（英語）知らん〳〵、僕は英語は分らん。

ビレロ、苦しさうに叫んで振り切つて去らんとして相爭ふ時、給仕頭の六兵衛、他の用事にて來かゝる。人々の爭論するを見て、慌しくその間に入る。六兵衛は六十二三歳、腰など少しかゞみて、白髮の老人。

六兵衛（今村の手を放させつゝ）申し、お武家樣。このお客樣が、何か失禮でもございましたか。代つてお詫を申し上げます。

今村 いや、この男に不審がある。役所まで引立てゝもらひたい。

六兵衛 それは御難題でございます。當居留地内には、わが國

の御法度は通用いたしません。

今村　只損つたら拙者腹を切る。日本人に相違ない。

六兵衛　いゑ、それは飛んでもないことで、こなたはホルトガルの商人に相違ございません。

今村　然し、やつの小額を見ろ。髷にあれは面擦れの痕だ。

六兵衛　パッスポルチとか申す旅手形も、手前確に見て居ります。ホルトガル、リスボンの交易商人に相違ございません。手荒なことを遊ばして、後で面倒になつては御奉行所の御難儀になります。

高岡（半信半疑ながら）御前樣に旅行手形を見たのか。

六兵衛　見た段ではございませぬ。手形はたしか……英吉利領事館にお預りの筈でございます。御詮議なれば、取調べて參りませう。

今村　だが、それにしても先刻からの模樣が何うも………。

六兵衛　治外法權とやら申しまして、居留地內で萬一旦那樣にお目違の場合には……。後々ともに事の外に面倒になります。

今村　それも然うだ……。ケセウキツキさん、貴方の部屋で、只今契約を取極めたいと思ふが、如何であらう。

ケセウキツキ（ビレロを見て何か考へたる後）それが好しい。御案内しませう。

ケセウキツキ、高岡、今村を導きて自分の室に去る。日は既にトツプリと暮れて。舞臺にはビレロと六兵衛の二人殘る。

六兵衛（周圍を見廻はしてから、小聲）旦那樣、お氣をお付けなさらなければ可けませんよ。お身の上の大事になります。

ビレロ　――？（ハッとして六兵衛を凝視せしが、素知らぬさまにて口笛を吹きその邊を步む）

六兵衛　あなたは見事化け通してゐるお積りでも、こちらから見ては透間だらけでございます。今に大事になりますよ。

ビレロ　――。（口笛を張り上げて、無闇に濶步する）

六兵衛（その可笑しさを怺へつゝ）お前樣には無理だ。お前樣といふ方は、餘ッ程不器用に出來てゐる方だよ。

ビレロ（少し狼狽しつゝも、飽迄外國人らしき態度にて、英語）給仕。蚊帳の用意はまだ出來ないのか。

六兵衛　大抵になさるがいゝ。英吉利言葉にまで長州訛りが出ます。

ビレロ（英語）給仕、蚊帳は何う――。

六兵衛　はゝはゝ。まだやつて御座る。私に芝居は要りませぬ。

ビレロ（呆れたやうに相手の顏を見て、小聲）お主、知つてるのか。

六兵衛　領事館の書記役、サトウ樣からお頼みがありまして、老爺はそれとなく、お二人樣のお身を護つて居ります。

ビレロ　エルネスト・サトウがお主に話したのか。何アんだ、

それぢや駄目な筈だ。はゝはゝゝ。(幾らかがツかりせる聲、苦笑ひしつゝそこに腰掛ける)

ホルトガル人ゴンサロ・ビレロと稱せるは、實は長州藩士井上聞多(後の馨)なり。前年文久三年の六月、同志伊藤春輔(後の博文)外三名と共に、密かに藩地を脫走して、海軍修業のため英吉利に洋行したるものなるが、その後故國の形勢を傳へ聞くに、長州藩は今なほ攘夷鎖國の舊主張を捨てず、昨年來數回にわたりて外國船を砲擊したるため、英米佛蘭の四箇國はその暴狀を怒りて、近く四國聯合の艦隊を編成して、近く下關砲臺を攻めて開戰せんとする實狀にありとの通信を聞きて驚き、同志伊藤春輔と共に倉皇としてロンドンを發足して、三日以前に橫濱に到着したるなり。されど二人は亡命者なるのみならず、服裝頭髮等も異樣なれば、通路危險にして長州に還る能はず、且つ四國艦隊の下關攻擊の延期を英國領事に歎願するため、ホルトガル人と僞りて三日以前よりこのホテル館に止宿せるなり。

六兵衛 (態度を改めて) 然しそれにしても、御苦勞でございます。お國の大事と聞いて、わざわざ英吉利倫敦からお駈付けなさる御苦勞は一通りではございますまい。エルネスト・サトウ樣もそれを仰しやつて、お二人樣の忠義には感心しておいでゝございました。今の世界に、長州樣薩摩樣が何う御盡力なされても、攘夷などの行はれるものではございませぬ。異人の學問開明は、とても日本などの及ぶところぢやない。軍艦と申せ、大砲と申せ、合戰などは、とても及ばぬことでございます。

聞多 然う襃められては、面目ない。(苦笑) 實はわれわれが、藩廳の御用金を無斷拜借して、同志と共に英國に洋行したのは、それほど先見の明があつたのぢやないよ。二三年西洋で航海砲術の學問を修業したら、日本に歸つて立派に斷行しよう、異人を打攘ふぐらゐは何んでもないと考へて行つたが、船が三日目に上海に着いて、上海市街の文明を見た時、あ、こりや可かんわいと思つた。それから佛蘭西を見、倫敦を見て、ますます學問技術の發達の恐るべきことを悟つた。吾々はいかに憤り慨いても、この文明に甲乙のある間は、到底攘夷などは行はれるものぢやないと思つた。

六兵衛 然し、今度四國の軍艦が長州を攻めて合戰になるといふ評判は、日本うちでもまだ端々の者は存じませぬ。何處で、何うしてそれを、西洋にゐてお聞きなされました。

聞多 倫敦の新聞で讀んだ。外國にはテレグラフの通信といふものがあつて、日本人が國內の出來事を知る前に、彼等は倫敦にゐて日本の事情を、日本人より先に知つてゐる。この一事だけでも、到底日本は外國を敵として戰爭は出來るものぢやないよ。(ホツと溜息を洩らす)

六兵衛 長州樣は攘夷御大名のうちでも急先鋒とか申して、殊に昨今は、人氣が殺立つてゐると聞きました。お二人樣

が、その中へ飛び込んで、若しや萬一のことでもございましては……。

聞多　その覺悟は倫敦を發する日に、二人とも極めてゐる。（寂しく微笑して）たゞ心配なのは、無事に長州まで歸り着けるか何うか、それだけに當惑してゐるよ。

六兵衛　然やうでございまするな。その姿では道中とも……。

聞多　信州に佐久間象山といふ學者がある。松代まで落ちのびれば、後は何うなり、先生の庇護をうけて歸藩の方法もあるだらうと思ふが、その信州までの道路さへ、今のところ工夫がつかなかつた。

六兵衛　その佐久間樣と仰しやるのは、先年ペロリが參つた時、この横濱を御固めに御出張なされた佐久間修理樣ではござりませぬか。

聞多　（悦ばしさうに顏を上げ）お主、知つてゐるか。

六兵衛　今朝、異人がたの話にチラと聞きました。佐久間樣は五六日あと、京都三條木屋町通りとやらで、長州御藩の攘夷黨のために切られて、即死なされたさうでござります。

聞多　え、佐久間先生がやられた……！（思はず叫び、茫然たる態度にて）そいつは損害だ、そいつは損害だ、損害だ！日本帝國のために、飛んでもない人を殺した！（卓に突ッ伏し暫く顏を伏せたが、屹と顏を上げ、卓を打つ）それだから……攘夷の馬鹿者！　この、この損失を、將來、何うしようと思ふんだ！　馬鹿！　馬鹿！　馬鹿者共……！（ハラハラと頰に涙を流す）

六兵衛、周圍を憚りて警戒する時、カラ〳〵と大笑して階段を上り來る伊藤春輔の聲聞ゆる。春輔、この時二十四歲、軀幹健康さうに肥りて、音聲態度ともに極めて快濶にして、天眞の流露するところあり。このホテル館にては同じくホルトガル人と稱し、名をデボナといふ。昨日來外出して歸らざるため井上の癇癖を恐れて、わざと幾分か諧謔の樣子を加ふ。手に大きなる風呂敷包を持つ。

六兵衛、伊藤の歸り來りし音に、その場を離れて露臺に行き、何か用事をなしゐる。

春輔　イエス〳〵。オーライ〳〵。（下の者と賑かに笑ひつゝ、トン〳〵と階段を上り來る。わが室に入らんとして、井上の憮然たる姿を見る。英語）おゝビレロ。何うした、何うかしたか。

聞多　（忌々しさうにジロリと睨んで）日本語で話せ！

春輔　（周圍を見廻はし、小聲）大丈夫か。給仕がゐるよ。

聞多　臭い！（顏をそむけ）また飲んで來たな。

春輔　（口を撫でつゝ）ほんの少しだ。久しぶりで、白馬をかぶつてみた。

聞多　昨夜は何處だ。

春輔　江……江戸に泊つた。方々奔走して夜が深けて、夜駕を雇はうと思つたが、それもこの際無駄と考へて……。江戸に泊つた。



聞多　その姿で、よく宿屋が泊めた。

春輔（クスッと笑つて風呂敷を指差し）そこに拔目はない。古浴衣に木刀一本買つて、醫者坊主の風になつた。（わが頭髮に手をあて）紫紐で髻をくゝると、丁度京上りの弟子醫者が、髮の生やしたてぐらゐに見えたよ。平氣な顏で、屋臺店にも首を突込むし、繩暖簾もくゞつてやつた。誰も氣が附かん、大丈夫だ。はゝゝゝ。

聞多（苦々しい表情）何んのため

春輔 に、江戸をうろつくのだ。貴公の言付ぢやないか。佐久間先生の動靜を探索に行つたのだ。

聞多 何か、得るところあつたか。

春輔 有つた。佐久間先生は當年四月迄、國元蟄居を命ぜられてゐたが、幕府よりの急御召出しで目下京都に在勤中なさうだ。

聞多 それで?

春輔 それで――?（井上をチラと見てから）吾々の所置には困ることだが……、然し佐久間先生が中央に乘り出すやうな機運になつたのは、日本開國の將來のために、非常によろこぶべき事と思ふ。

聞多 それで?

春輔 それでとは――?

聞多 （持前の癇癪に、少しジリジリしつゝ）それで佐久間先生は、何うしたと聞くんだ。

春輔 先生は京都だよ。それから先のことは知れるもんか。

聞多 その先は知らないのだな。

春輔 無理を云つちや困るよ。江戸へ探しに出て、京都のことが分るもんか。君は大體我儘者で、他人の骨折を認められない男だ。江戸へ出ても、藩の屋敷には寄り付けず、と云つて知人を訪問する譯にもゆかない。これだけの情報をもたらすのでも、おれは可なり苦勞してゐるのだ。（プンとして不平さうに、向ふの椅子に足を組む）

聞多 （強ひて激昂を抑へつゝ、靜かに）然うか、君の奔走を犒はなかつたのは僕が惡るかつた。この通り、謝まつて置く。

春輔 いや、別に、その謝まれと云ふ譯ではないが……。

聞多 その風呂敷包のなかに、何か折詰のやうなものが見える。

春輔 （ツイ釣込まれて）うん、これか。君が好物だつたから、穴子の蒲燒を少し詰めさして來た。

聞多 折角の御親切だ。それでは頂かうかな。

春輔 （周圍を憚り）然し、こゝは可けまい。自室にしよう。

聞多 客はみな奏樂を聞いてゐる。心配ないよ。

春輔 （折詰を出しつゝ）西洋料理も結構だが、日本も亦惡くはないな。おれあ昨日海岸通を散歩してゐるうちに、鮪の脂身……あのブツ切りといふやつを思ひ出して、耐らなくなつた。濱ぢや食へんし、やつぱり米河岸の屋臺店だ。無斷で行つては惡いと思つたが、ツイ何うも鮪にひかれて日本橋まで出掛けたよ。はゝはゝ。

聞多 （折詰の燒印を見て）お土産の穴子は、品川だの。

春輔 （何んの氣も付かず）あ、然うだよ。

聞多 この初音屋といふのは、吾々がよく遊んだ土藏相模から三軒目のうちだ。よく僕も、茶屋に命じて、屋敷の土産に包ませたものだ。（鋭く、伊藤を睨み付ける）然うだらう、然うだらう。

春輔　(少し底氣味悪るく)あ、然うだよ。君が好物と思つて、僕……。

聞多　お波は變ることもないか。

春輔　お波？　お波といふと……。

聞多　恍けるな。お前の相方の名だ。

春輔　(狼狽しつゝ)實に君、憎いもんだ。足元を見て、横濱まで、籠賃が三分二朱といふ、そんな法外の値段が、君……。

聞多　瀧屋の話は聞いてゐない。土藏相模だ。

春輔　だからよ、その、何んだ……。夜は深けるし、三分二朱は拂はれない、仕方がないから……泊つたよ。土藏相模に、泊つた。

聞多　この――。(思はず掴みかゝらんとする)

春輔　(慌てゝ避けながら)何、何をするんだ……。

聞多　この――。(ガチ／＼齒を嚙みながら、睨む)

春輔　然う……然う興奮しちや、話が出來んよ。

聞多　貴樣のやうな奴に、云ふだけ無駄だ。が、が、吾々は何んのために斯く苦しんで、この危難を冒しつゝあるのだ。家が大事、國が大事、長州一藩の滅亡、臣子として默止するに忍びざるためではないか。それに、それに何んだ。品川が何んだ。土藏相模が何んだ。

春輔　然う激しちや、話にやならんよ。(ついと立つ)

聞多　見ろ、見ろ、あれは何んだ！(伊藤の腕を掴んで窓の方に引張り來り、港内を指差し示して)英吉利、佛蘭西、亜米利加、阿蘭陀、四國軍艦はあの通り勢揃ひして、舳先を途換へ石炭を焚き、明日にも、今にも、命令一下直ちに長州を攻撃せんとして、百事の準備が既に整頓してゐるのだ。(足踏みして)伊藤、おれ達は何んのために、倫敦から千里漂蕩して歸つて來たのだ。藩を救ひ、長州を救ひ、故國同胞のために、この國難を無事に濟はんがためではないのか。(ハラ／＼と泣く)

春輔　そりや知つてゐるよ、分つてるよ。

聞多　然し、現在横濱まで歸り着きながら、何うして、何うして長州まで歸るんだ。通路は塞がり、音信は絶えてゐる。空しく急り苦んでも、策のほどこすべき處なく、見す／＼われ等の故郷を攻める艦隊の出動を、こゝに見送つてゐなければならないのか！

春輔　だから俺は、江戸へ行つて佐久間先生の消息を探つたのだ。

聞多　(思はず大喝)馬鹿！　象山はもう娑婆の人ぢやない！

春輔　え、佐久間先生が――？(流石に顔色を失ふ)

聞多　攘夷黨に殺された。(ボロ／＼と泣き)吾々の友人等に、京都で、佐久間先生は、暗殺されてゐる。

春輔　然うか、然うか……。それは知らなかつた……。

聞多　吾々には既う、藩地に歸還すべき希望はなくなつたのだ。(感傷せまつて、兩手に顔を掩うて泣く)

春輔　うむ……。(茫然自失して、低く呻きゐるのみ)

聞多（又顔を上げて）それに何んだ。貴樣といふやつは——。

春輔 惡かつた〱。謝まる、謝まる。（素直に心から頭を下げて）君一人に苦勞をまかせて濟まなかつた。おれは然うとは知らず、ツイ口腹の慾情に馳られて、まことに面目ない。謝まるよ、謝まるよ。

聞多（親友が心より悔悟して、眞面目に謝罪するを見ては、幾分その怒りも和らぎつゝ）元來貴公は、澹々無爲を標榜して、ものに熱中せざるを自慢にしてゐるらしいが、それは淡泊でも冲靜でもない。貴公は元來、人事に冷淡なのだ。

春輔 何んと……云はれても仕方がない。（率直に委れて）僕は、君のやうに、奮然としてものに熱することが出來ないのだ。以來、氣を付けよう。

聞多 打算に明か過ぎるためだ。世事に、利口過ぎるのだ。

春輔 然う……ばかりでもなからうが、兎に角、氣を付ける。

聞多 吾々の洋行費だつて、どんな窮策を用ひて調達してゐると思ふんだ。大村益次郎を囮に使つて、藩政府の軍器費を五千兩、云はゞ盜んだのだぞ。騙つたのだぞ。藩公の前は勿論、郷里にも郷黨にも、堂々と面を顯はせる人間ぢやないのだ。（井上の性癖として、憤怒の餘り言語次第に愚痴ッぽくなる）

春輔 そりや何日も聞くことで、僕にもよく分つとる。

聞多 分つてゐるならば、こんな馬鹿なことを爲る筈が……。

春輔 だからそれは、今謝つてゐるではないか。君の小言も、少し娓いよ。

聞多 小言が娓い？（むッとして）僕は、小言を云つてゐない。

春輔 小言ぢやなからうが、僕にも分かりきつてることだよ。（井上の性癖をやゝ煩さゝうにして云ふ）

聞多 君は全體、倫敦にゐる時はそれ程でもなかつた。歸國の船のなかゝら、何うも樣子が一變したと思ふ。

春輔（多少そら嘯く氣味にて、卓子の團扇など取上げる）僕に云はせると、君こそ船の中から、急に態度が變つたやうに思ふよ。

聞多 おれの態度が變つた？ 何う、何う變つたのだ。

春輔 そんなら僕は、何う變つたのだ。

聞多 君から聞かう。僕は、僕は何う變化したのだ。

春輔 又ビジョ〱小言を云はないなら云はう。君は印度洋を過ぐる頃から、又急に君侯、毛利家、長州、御先祖樣、關ケ原、陰德太平記の文句が、次第に多くなつて來たよ。

聞多 こつちが云へば、その反對だ。君は上海を出る頃から、しきりにおれに突ッかゝつて來る。おれが藩地の心配をすればする程、君は次第に冷淡になり、寧ろ僕を冷嘲するやうにさへ見える。

春輔 然うぢやないよ。それこそ反對だ。はゝはゝゝ。

聞多（むつとして）何が反對だ。

春輔 又怒つちや厭だよ。僕に云はせると、君はね、故郷に一歩づつ近付くに随つて、おれが――が強くなつたのだ。おれの君侯、おれの長州、おれの毛利家、それだからおれが心配する――と云ふ意識が、猛烈に旺盛して来たのだ。おれの長州だからおれが心配する――傍から見てゐると、實に利己的で、排他的で、寧ろ可笑しくなるやうな君の態度だ。倫敦の客舎に、遥かに故國をしのびつゝ話し合つた頃の君とは、人間がまるで違ふやうに見える。考へて見たまへ、考へて見たまへ。はゝはゝゝ。

聞多 (相手の笑聲にさへむつとするやうに) 然うぢやない。極論すれば君はこの頃、毛利家の恩といふものを考へまいとしてゐる。その點は、洋行前の君とはまるで違つてゐる。(伊藤の顔を指差し) それ、それ、僕が毛利家をいふと、貴公の顔に一種の微笑が浮ぶ。その微笑は僕の目から見ると、非常に不快な、陰悪な、冷笑とも嘲弄とも思はれるのだ。娓いことは云はん、暗夜熟考して見たまへ。

春輔 (何か考へて、また微笑) 然うだな、この問題は互に考へるとして、今日は止さう。たゞ一言云つて置くが、君は歴とした士族に生れて、先祖代々、一朝事ある時は、君國の大事に任ずるといふ義務心と權利心とを養成されてゐる人だ。僕等はテンで置かれた境遇が違ふ。君の憂ふるところを同様に憂へよと云つても、それは或は違ふかも知らんな。

聞多 (柔らぎたる目をキラリと光らして) 何んだつて。

春輔 止さう、又議論になりさうだ。(立つ) 人が怪しむと可かん。

多 伊藤、君はまだその僻み根性が抜けないな。

春輔 僻み――? (屹と井上を見て) 僻みとは、酷過ぎよう。僕は人間の實情について話してゐるのだ。

聞多 然し君は、代々毛利家の恩を受けないとは云はれまい。

春輔 (その邊を歩みつゝ) 西洋の文明を見てから、僕はその返事に困つてゐるのだ。恩と云へば、なるほど……恩かも知れないよ。

聞多 君は養子の身分だが、養家伊藤家は代々何によつて衣食した。その生活の背後には、必ず毛利家の名があるだらう。

春輔 同時に、代々を通して受けた侮蔑もある。恩が重いか、侮蔑が重いか。君にしても分らない筈はあるまい。

聞多 (思はず叫ぶ) 足輕根性!

春輔 何? 何んと云つた? (別人の如く、屹として井上を睨む)

聞多 足輕根性と云つた! 僻みと云つた! 貴様、それで、――それでおれに、反抗の爪を磨くのだな。

春輔 畜生――!

伊藤、猛然として躍りかゝり、井上の椅子の脚を引く。不意をさらはれて、井上、後に倒るゝ。

聞多 (意外の態度に仰天しながら) 何をする。人が來る、人が來る……。

春輔　（心頭より憤怒を發して、井上を捩ち伏せ馬乘りになりつゝ）誰でも來い、誰でも來い。畜生、畜生！　もう我慢がならない！

聞多　日本人と知れると　伊藤、伊藤……靜かにせい。

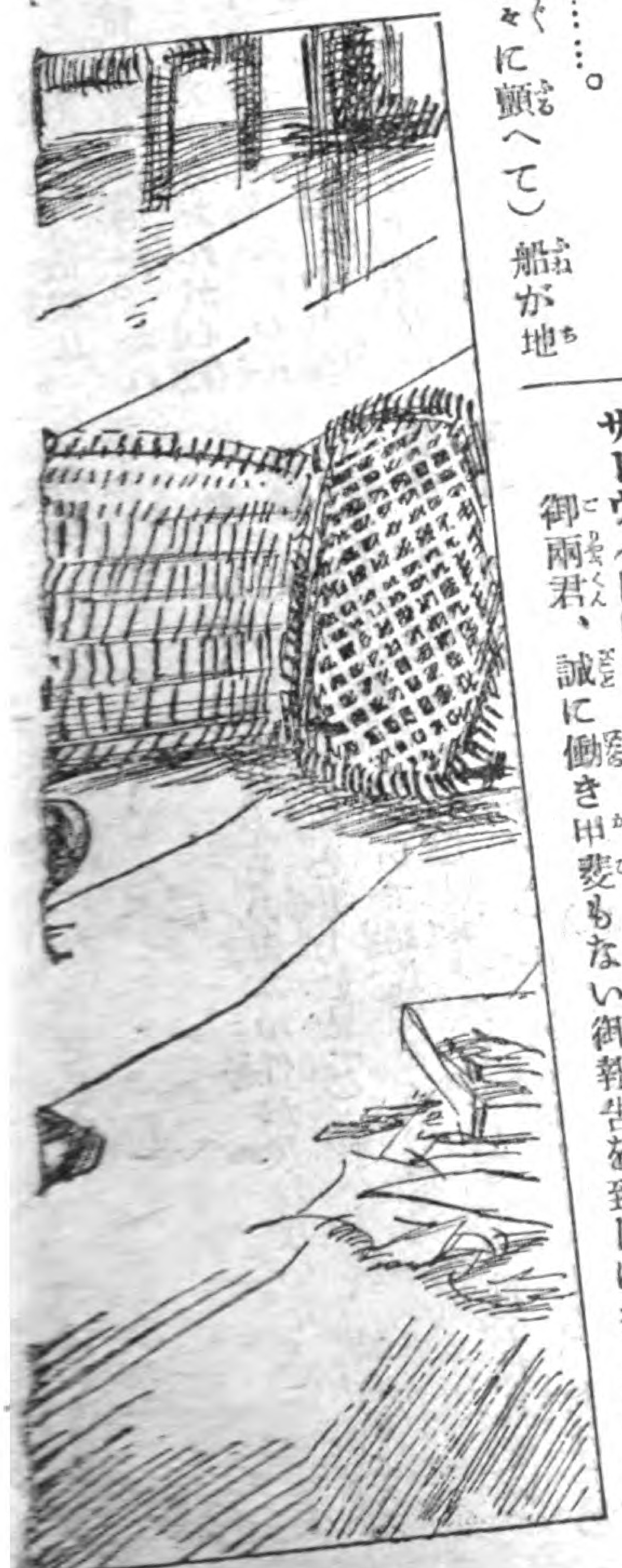
春輔　ロンドン、セントゼイムスの公園から、遙かに國會議事堂の建築を望んで、人の上に人なく、人の下に人なし、人間に種別なく階級あるべからずと、心から、心から、吾輩の手を握つたのは誰だ！

聞多　伊藤、伊藤……、　誰か上つて來るやうだ……。

春輔　眞實の國家を作り、まことの人類社會をつくるには、先づこの階級を打破しなければならない。君も働け、おれも働く。人間のために、人類のために、共に苦しまう働かうと云つて泣いた者は誰だ！

聞多　伊藤、日本人と知れる。　伊藤、伊藤……。

春輔　然るに、然るに貴樣は……。（聲も切々に顫へて）船が地中海を出て亞細亞洲の圏内に入ると共に、次第に昔の封建思想にかへつて、人類も人間も忘れてゐる。日本から長州、長州から萩、貴樣の言行は、次第に一日づつ、舊弊の思想に逆戻りしてゐる。さ、倫敦の言葉が眞實か、今おれを足輕と罵つた言葉が眞實か、云へ、



云へ、云つて見ろ。

聞多　惡るかつた。今のは失言だ。手を、手を放せ！

春輔　おれは毛利侯に反逆するんぢやない。又長州に背く氣があるのでもない。（ホロ〳〵と泣きながら）貴樣、親友、井上、井上聞多の目に、まだ、まだ足輕としておれの姿が映じてゐるか。それを聞きたい。見ろ、見ろ、おれはまだ足輕か、足輕か！

聞多　惡かつた。謝罪する……！

伊藤、やうやく手を放して起ち、傍の椅子にベタリと腰掛ける。井上、半身を起して伊藤を見上ぐる。兩人、互ひの目を睨み合つて、疲れはてたる人のごとく、暫くヘトヘトの呼吸を整ふる時、給仕頭六兵衛に案内せられて、英國領事館の書記官エルネスト・サトウ入り來る。

サトウ　（目にて六兵衛を遠慮させたる後、極めて巧なる日本語）御兩君、誠に働き甲斐もない御報告を致しに參りました。

伊藤、井上、ギッとしてサトウの顔を見詰むる。

サトウ　不思議なる御縁で、昨年御兩君が洋行なさる時にも、わたくしは領事館書記の官吏をはなれて、一個人サトウとして多少の盡力いたしました。今度兩君の歸朝せられた嘆願についても、わたくしは出來得る限りの斡旋を四國公使の間に試みました。然し、それも徒勞です。四國公使の意志は鐵のやうに固く、到底動きません。艦隊はもはや砲門を露はして、拔錨の命令を待ちつゝあります。明後日の午後は、必ず關門海峽の中心にあらはれるでせう。

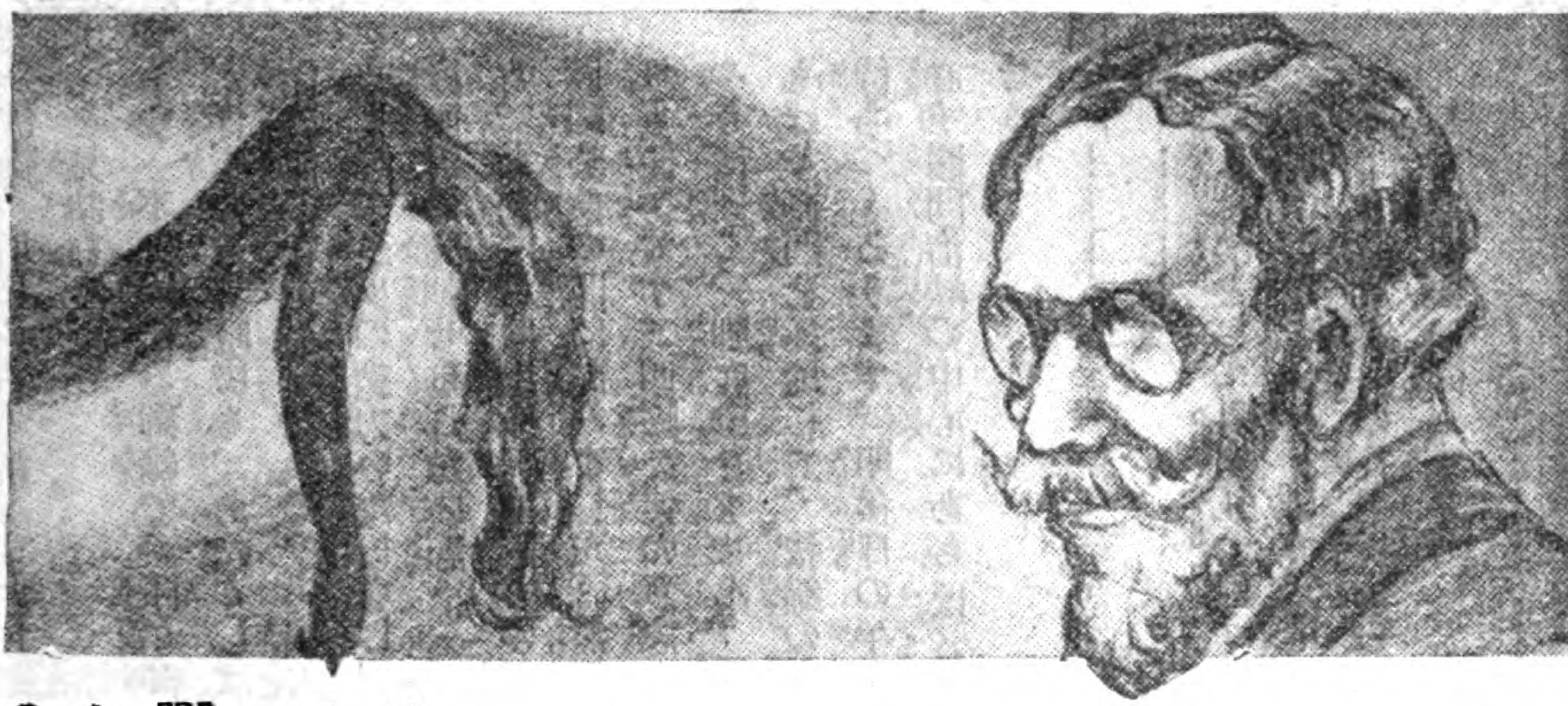
聞多　…………。

春輔　…………。

兩人茫然として目を見合はすのみ、無言。この時突如として、港内の軍艦より海軍奏樂の音、折から風につれて明らかに聞え來る。

（幕）――つゞく――





果然、素晴しい大評判!!
面白い、實に面白い探偵小説

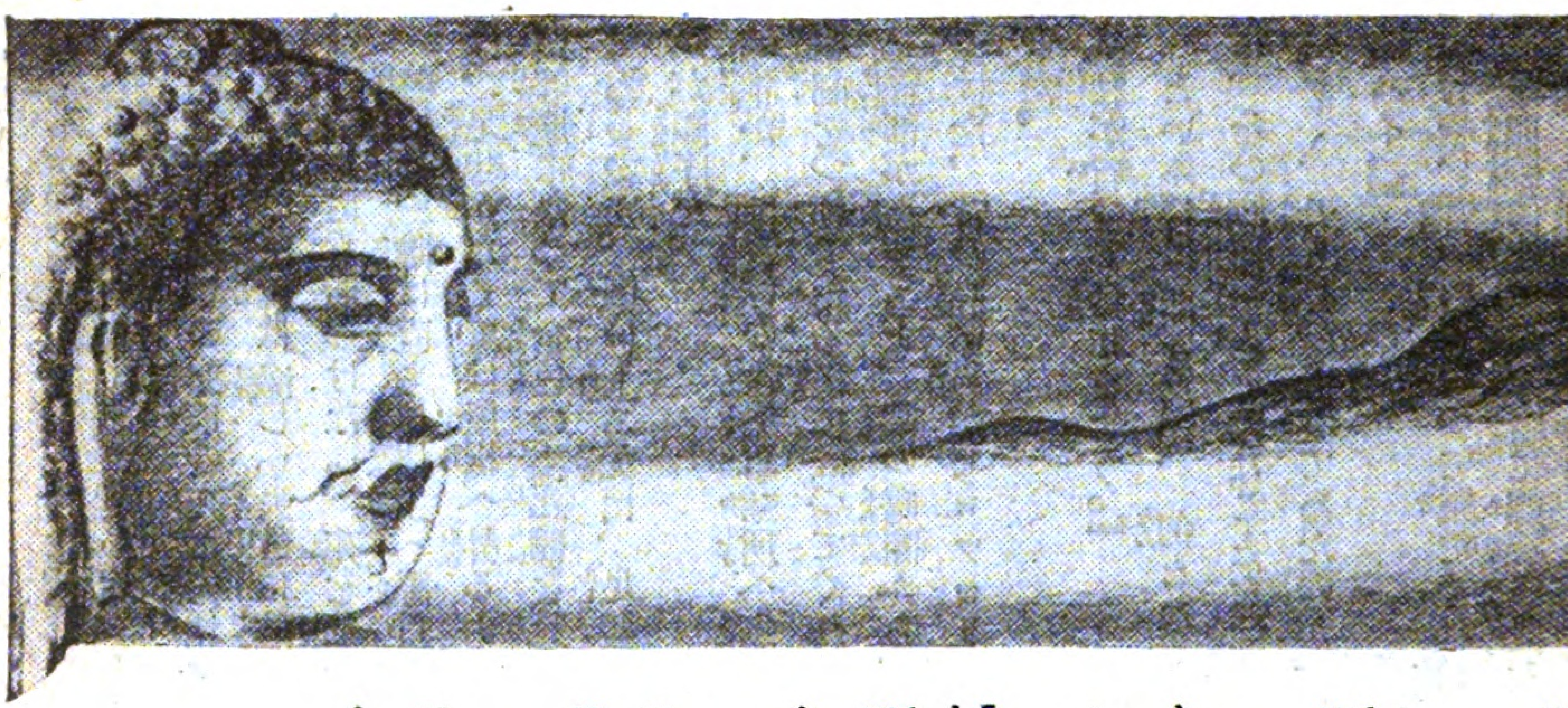
黄金假面

江戸川亂歩
吉邨二郎畫

大空の縊死體

一九――年、大都會東京市の怪談、三日月型の唇から糸の樣な血を吐いて笑ふ黄金假面の噂は、十數人の實見者があつたにも拘らず、市民も警察も、餘りの荒唐無稽に、容易にそれを信じようとはしなかつた。

だが、四月某日、怪物はその人造人間の樣ないまはしい姿を、所もあらうに、上野公園に開かれた、大博覽會場に現はし、陳列場の大眞珠『志摩の女王』を奪つて逃げ去らうとした。彼はあらゆる機智を弄して、群集を僞瞞し、巧みに會場を脱出せんとしたが、たつた一つの手拔りから、眞珠陳列の臺座に電鈴仕掛けのあることに氣づかなかつた爲、場内に鳴り



響く非常電鈴は、遂に彼を窮地に陥れた。

怪物は逃れ逃れて、會場内の百五十尺の高塔の頂上、とんがり帽子みたいな、何の手がかりもない急傾斜の屋上によぢ昇つた。塔をとり巻く警官隊、青年團、一般群集、彼等はこの怪物の離れ業に、アレヨ／＼と驚くばかりで、どう手のつけやうもない。

尖塔上の金色怪物と、地上の大群集との睨み合ひはいつ果つべしとも見えなかつた。間もなく博覽會場は、夜の幕にとざされ、塔上の怪物も闇の中に溶け込んで、その金の守宮みたいな姿を見ることが出來なくなつてしまつた。

一警官の機轉で、場内の探照燈が、塔の頂上に向つて固定された。白銀の圓光の中に浮び上る、白堊のとんがり帽子、だが、群集はその塔上を一目見るや、どつと鬨の聲を上げた。黄金假面は塔上から姿を消してしまつたのか。イヤ／＼さうではない。それは絶對に不可能なことだ。では、何がそんなに群集を驚かせたのか、といふ所で前章を終つた。

『產業塔』をとり圍んでゐた數千の群集は、その時、探照燈の白光の中に、白い蜃氣樓の樣に浮び上つた尖塔上の、非常に印象的な、美しくも奇怪なる光景を、長い後まで忘れることが出來なかつた。

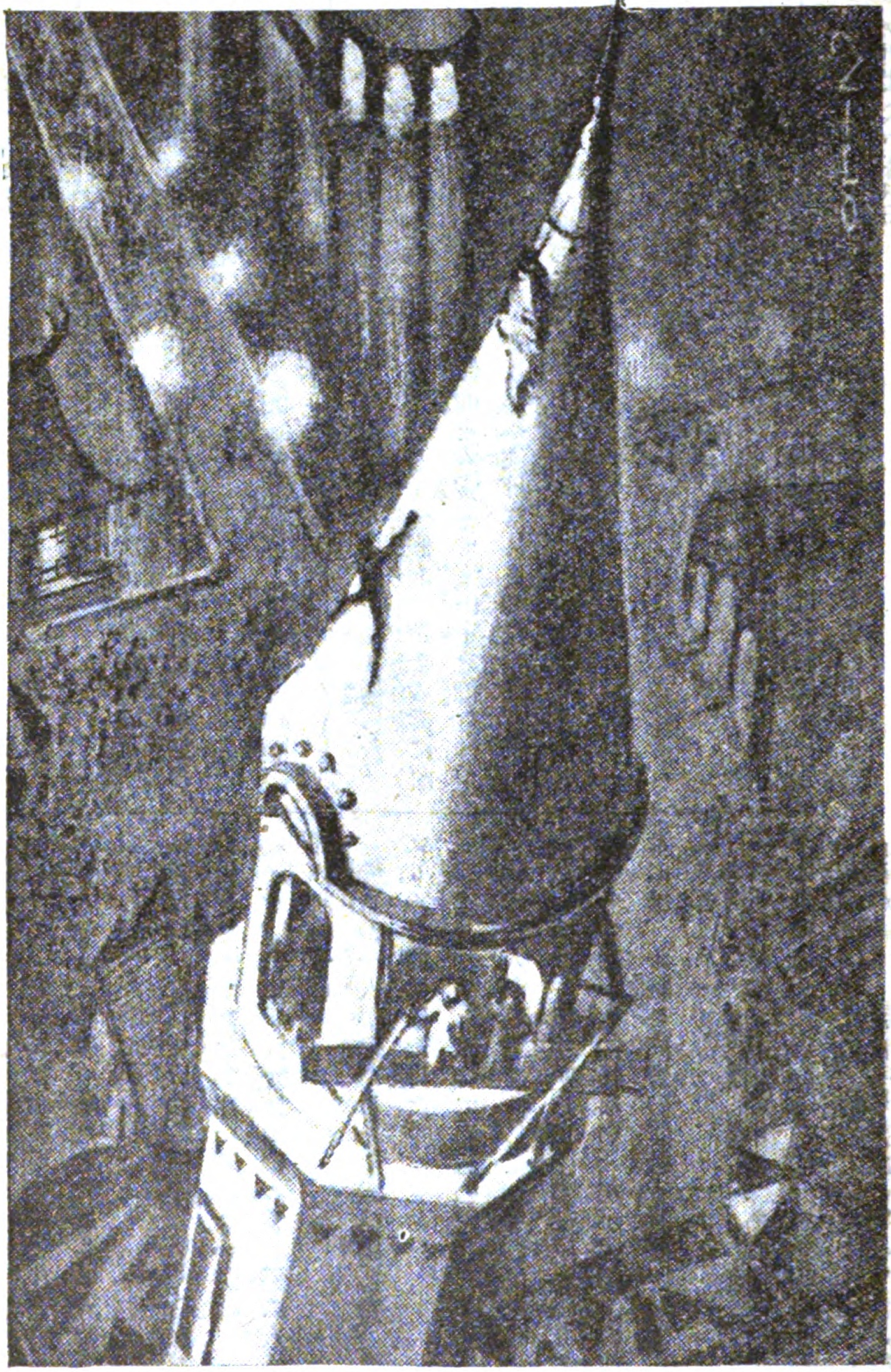
屋根の頂上の金色の棒から、ブランと下つて、巨大な時計の振子みたいに、右に左に搖れてゐる、黄金の守宮、その鍍金佛の樣な、假面の口邊には、おびたゞしい鮮血が、ギラギラと輝いてゐる。

塔上に追ひつめられて、進退谷つた怪物は、おめ／＼降伏せんよりは、寧ろ死を選んだのである。彼は黄金假面、黄金衣裳のまゝ、身につけてゐた革帶を頂上の棒にかけて、魔界の勇士にふさはしく、はれがましき縊死をとげた。彼は顏から胸から一面の血を吐いて、苦しさの餘りに、時計の振子みたいにもがき廻つてゐるのだ。

『死んだ。』『死んでしまつた。』
數千の群集の口から、同じ言葉が、どよめきとなつて響き渡つた。彼等はこの惡魔の死に安堵を感じたのか。イヤ〳〵さうではない。彼等は激しい失望に襲はれたのだ。この金色の英雄の、餘りにもあつけない、死を痛む歎息だ。
警官の一隊は直ちに塔上へ驅け上つたが、怪物ならぬ彼等には、足場がなくては屋根へ昇る力はない。イヤ、屋根の出張りが邪魔になつて金色の縊死體を見ることさへ出來ぬ。何を慌ててゐるのだ。驅け上る先に、足場を拵へる仕事師を呼びに走るのが順序だ。
『誰か、博覽會の建築事務所へ走つて、足場の材料を持つて仕事師をつれて來る樣に云つてくれ給へ。』
警部が命ずると、隅の暗闇から、博覽會使用人の制服制帽をつけた、背の高い男がヒョツコリ出て來て、モグ〳〵と何か云つた。
『私が行つて參りませう。』
といふ樣に聞えたが、何となく人間離れのした聲音だ。併し、その際誰一人そんなことを注意するものはなかつた。
『ア、君も昇つて來てゐたのか。探照燈の係だね。』
『ハイ。』
『ぢや、君一走り行つて來てくれ給へ。』
探照燈係は、飛ぶ樣に螺旋階段を降りて行つた。
殘つた警官達は、イラ〳〵しながら、手持無沙汰に佇んでゐたが、ふと氣がつくと、探照燈係りの道具箱のそばに、一挺のピストルが光つてゐた。
『ア、あいつ、ピストルをこんな所へ落して行つたのだな。』
一人の警官がそれを拾ひ上げて一同に示した。
『ナアンだ。それぢや、屋根へ昇つた時には、あいつ、ピストルを持つてゐなかつたんだ。何もビク〳〵することはなかつたんだ。』
他の警官が呟いた。
『オヤ、變だぞ。』ピストルをひねくり廻してゐた警官が頓狂な聲で云つた『オイ、諸君。僕たちがあんなにおどかされた、このピストルは、君、おもちやだぜ。』
檢べて見ると、確かにおもちやのピストルだ。賊は芝居の樂屋にあつた小道具のピストルを持出して、さも本物らしく振廻してゐたのだ。
警官達の間に低い笑聲が起つた。だが、その笑聲は何か氣まづい相に、ぢきやんでしまつた。何十人といふ警官隊が、このたつた一挺のおもちやのピストルの爲に、思ふが儘に飜弄されたかと思ふと、馬鹿々々しさ、口惜しさに、笑ひどころではなかつたのだ。
仕事師がなか〳〵やつて來ぬので、又一人の警官が事務所へ走つた。そして、愈々足場が出來上つたのは、それから一時間もたつた時分であつた。
賊の死骸を取りおろす役目は、管内の消防夫頭さんといふ、

威勢のいゝ、梯子乘りの名人であつた。

瀧石商賣柄、粂さんは、何の危なげもなく、急傾斜の屋上へ昇つて行つた。屋根の下へ張り出された足場には、二人の仕事師が、死骸を受取る爲に待ち構へてゐる。



粂さんは何の危なげもなく急傾斜の屋上へ昇つてゆく……

地上の群集は、待遠しかつた足場がやつと出來上り、土地の人氣者粂さんの姿が、探照燈の圓光の中に現はれると、ドツと歡呼の聲を上げた。

闇の中空に浮いた、巨大な白いとんがり帽子を、これは黒蜥蜴の樣に見える粂さんが、頂上にぶら下つた金守宮に向つて這上つて行くのが、活動寫眞の樣に眺められた。

粂さんは遂に頂上に達した。黄金

假面の死體に手が掛る。と見ると、これはどうしたといふのだ。この消防夫は氣でも違つたのか。金色の死體を革帶からはづすや否や、擇々と一振り振廻して、ポイと、その百五十尺の上空から、地上目がけて投げつけたのである。

黄金の衣裳は、キラ〳〵とまるで不思議な花火みたいに飜へつて、探照燈の圓光をはづれ、闇の中を、流星の樣に、群集の目の前の地上に落ちた。

落ちたと見ると、ワッといふ鬨の聲と共に、警官、青年團の提灯が、そのまはりに群がり寄つた。一警官が、ツカ〳〵と近づいて、金色の衣裳をつまみ上げた。グル〳〵と振り廻した。衆さんが投げつけたのも道理だ。この黄金假面、黄金衣裳には中身がないのだ。つまり賊は假面と衣裳とで案山子を拵らへ、首を吊つたと見せかけて、どこかへ逃げてしまつたのだ。假面や衣裳の芯には、賊の着てゐた上衣やズボンやシャツなどが丸めて括りつけてあつた。

怪しき聲

賊はまんまと逃げ去つた。だが、どこから？　どうして？不可能だ。塔のまはりは群集の垣、階段の下には警官隊が見張つてゐた。翼でもない限り、如何な怪物とても、この重圍を逃れる術はない筈だ。

塔内に潜伏してゐるのではないかと、嚴重な搜索が行はれたがどこの隅にも影さへ見えぬ。

警官達は搜索の手段も盡きて、一同塔の階段の下に、ボンヤリ佇んでゐた。

『しかも、あいつは眞裸體で逃げ出さなければならなかつたのだ。なぜと云つて、着てゐた服もシャツも、皆、衣裳の芯に使つてしまつたのだからね。』

『變だね。これ丈けの群集が、いくら夜だと云つても、眞裸體の男を見逃がす筈がないぢやないか。』

『イヤ、あいつは變裝用の衣裳を手に入れることが出來たかも知れないぜ。』

警官の一人が變なことを云ひ出した。さい前、おもちやのピストルを發見した男だ。

『君は一體何を云つてゐるのだ。』

他の一人がびつくりして相手の顏を眺めた。

『あいつは、屋根から頂上の部屋へ降りる時は、如何にも眞裸體であつたかも知れない。だが、頂上の部屋まで來れば、あすこには、お誂へ向きの變裝衣裳が置いてあつた。』

『どこに？』

『探照燈係の道具箱の中さ。あの中に、博覽會の使用人の制服が入れてあつたといふのは、あり相なことぢやないか。』

『想像に過ぎない。確めて見なければ、……』

『確める？　無論さ。見給へ、あすこへ探照燈係の男がやつて來た。あれに聞けば直ぐ分ることだ。オイ、君、君、君はこゝの探照燈係だらう。』

『エ、、さうです。』
相手の制服の男が答へた。
『探照燈室の道具箱の中に、君の着換へかなんか入れてなかつたかね。』
『エ、、私のではありませんが、もう一人の男の制服制帽が這入つてます。』
『その男は。』
『今日は病氣で休んでゐるのです。』
何だか話が變梃になつて來た。人々の注意がこの問答に集つた。
『では、さつき、塔の上から建築事務所へ仕事師を呼びに行つたのは、一體誰だつたのだらう。君ではなかつたね。』
『エ、、私は一度も塔の上へ昇りません。』
『ア、、ひよつとしたら。……兎も角、あの道具箱を檢べて見よう。』
探照燈係を引つぱる樣にして、一警官が塔上へかけ上つた。道具箱を開いて見ると、果して、そこにある筈の制服制帽が消えてなくなつてゐる。
果して、果して、大膽不敵の怪賊は、又しても警官隊と群集を小馬鹿にして、彼等の注意力の盲點を巧みに利用し、まさかと思ふ探照燈係その人に化けて、まんまと重圍を脱出してしまつたのだ。黄金假面の字引には、恐らく『不可能』といふ文字がないことに相違ない。

直ちに、警官隊、青年團が八方に飛んで、場内を隈なく搜査したが、無論手おくれだ。あの敏捷な怪物が、一時間以上も危險な場内にウロ〱してゐる筈はない。
警官達は、半日以上の大骨折りの末、やつと塔上に追ひつめた怪物を、もう一息の所で取逃がした無念さに、足ずりをしてくやしがつた。せめても、探照燈係りに化けた賊の顏を見覺えてゐるものはないかと探したが、塔上の小暗い部屋ではあつたし、あとで考へて見れば、怪物は制帽をまぶかにして、胡散らしくうつむき勝ちにしてゐたから、それに、まさかそいつが賊だとは誰一人疑つても見なかつたので、殊更ら注意して顏を眺めた者もなく、たゞ非常に脊の高い發音の曖昧な男といふ外には、何の記憶も殘つてゐなかつた。
『道理で變でしたよ。僕が建築事務所へ行つた時に、まだ誰も知らせに來たものはないといつて、皆、變な顏をしてゐました。』
二度目に仕事師を呼びに走つた巡査が云つた。探照燈係に化けた賊は、無論、事務所などへ立寄りはしなかつたのだ。
翌朝の各新聞は、地方新聞に至るまで、全國的に、すばらしい大見出しで、上野博覽會場に於ける前代未聞の大活劇を、詳細に報道した。少々ボンヤリしてゐたが、氷さんが足場から尖塔へと這ひ上つてゐる寫眞などは、新聞效果所謂百パーセント。天下の讀者をヤンヤと云はせた。
だが、少くも東京市民は、その記事を、單なる興味を以て讀過する譯には行かなかつた。今までは新時代の怪談に過ぎなか

つた黄金假面が、遂に姿を現はし、場所もあらうに、博覽會の大群集の面前で、不氣味にもすば拔けた離れ業をやつてのけたのだ。しかも、何十人といふ警官の包圍を易々と脫出した怪物は、恐らく市內のどこかに潜伏してゐるに相違ないのである。

黄金假面の下に隱された、賊の正體が何物であるのか、全然不明なことが、一層人々を怖がらせた。又、敏感な讀者達は、新聞記事の一警部の談話中に含まれた、一種身震ひの出る樣な不氣味な一節を、どうしても忘れることが出來なかつた。その一節といふのは、

『探照燈係りに化けた賊は、たゞ脊が高いといふ特徵の外に、何も記憶してゐないが、その時たつた一口物を言つた、あいつの聲を聞くと、何とも云へぬ變な感じがした。言葉も非常に曖昧だつたが、それよりも、聲の調子が、何といつてい〻か、どうも我々と同じ人間の口から出たものとは思はれぬ樣なものであつた。云々』

これは抑も何を意味するのか。恐ろしい程無表情な黄金假面、鋼鐵機械の樣に傍若無人で正確無比の腕力、その上にこの不思議な聲だ。まさか、生命のない人造人間が、あんなに自由自在に活動する筈はないのだが。

怪物は、大眞珠『志摩の女王』を奪ひ取つた丈けで鳴りをひそめてしまふだらうか。イヤ〳〵、それは考へられぬ事だ。彼は必ず、再びあの不氣味な姿を、どこかに現はすに違ひない。いつ？　どこへ？　そして何を？　彼の目的物が常に財寶に限られてゐるとは極まらぬ。若しや、あの人間離れのした無敵の腕力を振つて、恐ろしい殺人罪を目論む樣なことはないであらうか。氣の弱い人達は、ふとそれを考へたばかりで、もう眞青になつて、どう防ぐすべもない大恐怖に、戰慄しないではゐられなかつた。

美子姬

この東京市民の恐怖は、當つてゐたし、又當つてゐなかつた。といふのは、怪賊は果して、僅々數日の後再び聞くも恐ろしい大犯罪を企てたが、その場所は、何といふ出沒自在、意外にも東京から遠く離れた日光山中の、鷲尾侯爵家の宏壯な別邸內であつた。

鷲尾侯は北國大藩の大名華族、本邸は東京にあるのだけれど、當主正俊氏は日光山中C湖畔の別邸を好んで、殆んど一年中そこに住み、同侯の有名な道樂、古美術品を納めた小美術館も、この別邸內に建てた程である。

十九歲の美子姬は、侯爵の一粒種、婦人雜誌、寫眞畫報などで、姬の容姿に接したものは、その名狀し難きあどけなさ、不思議な魅力をたゝへた、夢見る如きまなざしに、うつとりせぬ者はなかつた。

その日、姬は書齋の窓に凭れて、眼下に橫はる、眠つた樣な湖水を眺めながら、物思ひに耽つてゐた。

思ふは、遠き異境に遊學中の背の君千秋さんの上である。千

秋さんは、侯爵の亡き實妹が殘して行つた、けだかき、孤兒、近く英京の遊學を終へて歸朝の上は、美子姫と結婚式を上げることに内定してゐるのだ。

眼に浮ぶは、いつかあちらから送つて來た、千秋さんのクリツケツト遊戯の勇ましい姿、續いて同じ大學の有名なボートレースのこと、そして、かぐはしき洋酒と西洋煙草の香り漂ふ、漠然たるヨーロッパ大陸の聯想。

それにつけても心に懸るは、今日、父侯爵の古美術蒐集品を觀賞する爲に、東京から遙々自動車を飛ばして、御出で遊ばすといふ、フランス大使ルージエール伯爵様のこと。西洋のお方、しかも大使といふ樣な要職にあるお方をおとりもちするのは始めての經驗だ。妙なことをして笑はれてはいけない。だが、もつと心配なことが外にある。といふのは、あのいまはしい黄金假面の怪賊が、この二三日、邸の近くを徘徊するといふ噂。いや噂どころではない。現に附近の村の百姓達が三人まで、森の中であのゾッとする無表情な黄金の顔を見たとさへ云ふではないか。

すぐ目の下の塀の外にうろ／＼してゐる背廣服の男。あれは警察からよこしてくれた私服刑事達だ。一人二人三人、表門丈けでも三人の見張り番だ。裏門にも同じ人數、その外邸内には、態々東京の警視廳から來て下すつた波越警部とかいふお方を初め、十人に近い人數である。でも、聞く所によると黄金假面は、數千人の群集に取り圍まれながら、悠々と逃げ去つた程の不敵の曲者、この位の防備で充分なのであらうか。私達一族のものは災難とあきらめもせよ。大使ルージエール樣の御身に若しものことがあつたら、國際關係にも累を及ぼす大問題だ。

父侯爵は萬一を氣遣つて、大使の御來遊延期を申出でたけれど、ルージエール伯は、歐洲大戰にも參加され、シャンパーニユの激戰では、一時戰死を傳へられた程の勇士故、可愛らしい日本人の盜賊など、物の數とも思召さず、今日の豫定を御變更にならなかつた。で、邸内のこの物々しい警戒も、大使の身邊を護衛申上げる爲に、父侯爵がお取計ひなされたことなのだ。

そこへ突然、眞青な顔をして駈け込んで來たのは、姫の御氣に入りの侍女の小雪だ。彼女は姫と一つ違ひの二十歳。侯爵家舊重臣の家の娘で、十七歳の時からずつと姫の侍女を勤め、時には友達の樣な口も利き合ふ仲である。

『御孃さま、わたくし、もう／＼、こんなゾッとしたことはございません。どうしませう。どうしませう。』

『マア、小雪、どうおしなの。』

『わたくし、今、御部屋に生ける花を探しに、築山の奥の方へ參りましたの。』

『エ、それで。』

『あの小暗い森の中を、何氣なく見たのでございます。』

『エ、。』

『すると、お孃さま。』小雪は震へ聲で、囁く樣に『私見ましたの。アレを……………』

『金色の………』
姫はゾッとして思はず立上つた。
『黄金假面……』
『お前、本當に御覧なの。』
『エヽ、森の茂みの奥から、あの、三日月型の口で笑つてゐる樣に見えたのでございますの。』



美子姫の心にかゝるは、邸の近くを徘徊するといふ黄金假面のことである。

『で、お父さまに申上げて？』
『御前さまにも、警視廳のお方にも申上げました。今警視廳の方々が、築山のうしろを検べてお出でなさいます。』
心臓のしびれてしまふ樣な恐怖に、二人はおびえ切つた目と目を見合はせて、黙り反つてゐたが、やがて姫が獨言の樣に呟く。

『一體そのものは、こゝで何をしようと企らんでゐるのでせう。盗みでせうか、それとも、もつと外に何か恐ろしい目的があるのではないでせうか。』
氣の毒な美子姫は、怪物黄金假面と彼女自身の運命とが、恐ろしいつながりを持つてゐるようなどとは知る由もなく、たゞ漠然とした恐怖に、唇の色を失つて、打震へるばかりであつた。
そこへ父侯爵の姿が見えた。
『ア、お父さま。』
『小雪が喋つたのか。』
侯爵はその場の樣子を見て取つて、お喋りの侍女を叱る樣に云つた。



『お父さま、警察の人達は、そのものを捕へまして?』
『イヤ、殘る隈なく檢べさせたが、どこにもそんなものはゐない。小雪が、餘り怖がつてゐるものだから、きつと幻を見たのだ。』
　とは云ふもの〻、侯爵とても、一抹の不安を隱すことは出來なかつた。
『決して、御前さま。幻やなんかではございません。わたくし、いくら何でも、そんな臆病者ではございませんわ。』
　小雪の抗議を聞き流して、侯爵は、話題を變へた。
『美子、もう御客さまの見えるに間もあるまい。御出迎への用意をしなければなりません。』
『でも、邸内にまで、そんなものが這入り込んで來ますのに、お客さまをお迎へ申上げても、よろしいのでせうか。』
『それは、私も氣がつかぬではない。併し、今更らどうする譯にも行かぬのだ。もう先刻大使館をお出ましになつたといふ電話が來てゐるし、ルージエール伯爵は豪膽なお方だ。それに、いくら怪賊にもせよ、大使に、御迷惑を及ぼす樣なことを仕出來す氣遣ひもあるまいではないか。』
　侯爵は寧ろ自から慰むるが如く、力をこめて云ふのであつた。

小美術館

　それから一時間程たつて、フランス大使ルージエール伯爵

は、秘書官と通譯を作つて、大使館紋章入りの大型自動車を鷲尾侯爵邸の車寄せに横づけにして、侯爵、美子姫、執事の三好老人其他一同の出迎へを受け、無事洋風大廣間に入られた。

ルージエール伯は、その年二月下旬、信任狀を捧呈せられたばかりの新大使であつたが、當時帝國ホテルで朝野の歡迎宴を張つた際、鷲尾侯も出席して、今日の御訪問も、その時からの御約束が延び延びになつてゐた譯だ。侯爵伯爵は、今二ケ月ぶりの再會である。

伯爵は、この國を訪れた外國人の例に漏れず、いやその中でも殊更らに、日本古美術の非常な愛好者であつた。彼はこの二ケ月の間、要務の餘暇には、京都奈良の博物館、神社佛閣を巡覽して、東洋美術の賞美に日も足らぬ有樣であつたが、さうした公共の場所丈けでは滿足が出來ず、名家の珍藏にかゝる名畫佛像等の觀賞を思立ち、鷲尾侯爵家は、そのプログラムの第一に選ばれた譯である。

美術館は母屋から離れて、新しく建てられた、コンクリート造り二階建ての、百坪に餘る建築だ。先づ三好執事が持參の鍵を以て、入口の大扉を開くと、侯爵を先頭に、大使一行、美子姫、三好老人の順序で、館内に這入つて行く。

土藏風の建物で窓が小さい爲に、館内は晝間でも電燈が輝いてゐる。高い天井、冷え冷えとした空氣、防虫劑のほのかな匂ひ、その中に立ち並ぶ異形の佛像、今にも動き出すかと怪しまれる甲冑の列、樣々の刀劍類、千年の夢を通はす繪卷物。何とやら肌寒き感じである。

侯爵は先頭に立つて、一歩美術館に足を踏み入れた時、異樣な恐怖を感じないではゐられなかつた。先刻小雪が見たといふ怪しのものと、場内にニヨキ／＼立並ぶ、不氣味な佛像とが、奇怪なる聯想を生じて、彼をおびやかしたのである。

『若しや怪賊は、この貴賓來訪の時を待構へてゐたのではあるまいか。どういふ手段かは分らぬ。だが、この虛に乘じて、美術館内の寶物を盜み出さうと目論んでゐるのではないだらうか。』

さう思ふと、侯爵は、小暗い物蔭が氣になつて、伯爵への受け答へさへ、おろそかになり勝ちであつた。

だが、ルージエール伯は、思ひもかけぬ素ばらしい觀賞家であつた。彼は日本支那の美術史にも詳しく、通譯官を通じての批評、悉く肯綮に當るばかりでなく、最も侯爵を喜ばせたのは、幾百萬の金錢にも換へ難き名寶として珍藏せる、藤原時代の極彩色佛畫『閻魔天像』と、同時代の作、木造塗箔の阿彌陀如來坐像との前に、伯爵は最も長く立止り、垂涎おく能はざる體に見えたことである。

一行は徐々に進んで、二階への階段の下に達した。その階段の裏の三角形の暗所に、ふと見るとハッとおびえないではゐられぬ一物がある。比較的新しい時代の、金色燦爛たる、等身大の鍍金佛だ。それが、ほの暗い電燈に、異樣な光輝を放つて、ニヨツキリと突立つてゐるのだ。

美子姫は、美術館へ這入つた時から、遠くの隅の、その鍍金

佛を、目も離さず見つめてゐた。黄金の顔、……黄金の衣、…………若しやあの佛像は生きてゐるのではないかしら、といふギヨッとする様な妄想に、彼女はおびえ切つてゐた。

近づくに従つて、その大男程もある佛像が、金箔の内側で、ひそかに、ひそかに、呼吸をしてゐる様にさへ思はれる。アア、今にも、今にも、あの柔和な口が、キユーッと三日月型に曲つて、糸の様な血を吐きながら、ニタ〳〵と笑ひ出すのではあるまいか。と思ふと、ゾーッと總毛立つて、いきなり大聲でわめきたい衝動を感じるのだ。

父侯爵も、娘程ではないけれど、同じ思ひに惱まされてゐた。彼は鍍金佛の前に近々と顔を寄せ、突き通す様な恐ろしい目で睨みつけてゐたが、突然、ヒヨイと手を出して、佛像の腕を力まかせに掴んで見た。若しやそれが、生きた人間の腕の様に、生温く、柔いのではないかと考へたからだ。

『アハハハ……』ルージエール伯は、侯爵の心持を察して笑ひ出した。『では、「金の假面」と云はれてゐる盗賊は、まだ捕縛されないのですね。恐らくその賊は、この佛像みたいな顔をしてゐるのでせう。キッとさうでせうね、侯爵。』

侯爵は大使の言葉に、臆病過ぎた所業が極り悪く、ソッと手を引いた。

その時である。突如として、美子姫の口からほとばしつた、絹を裂く様な悲鳴。人々は不意をつかれて、飛び上つた。姫の飛び出す程見開かれた兩眼が、鍍金佛の背後の小窓に、釘着けになつて、顔色は紙の様に白く、今にも卒倒せんばかりである。

見るとその小窓に奇怪な人間の顔。咄嗟にヒヨイと隠れてしまつたが、確かに何者かゞ大使の一行を覗いてゐた。しかも全く見覺えのない異様の人物、邸内の召使でもなければ、警戒中の刑事でもない。

侯爵はいきなり小窓へ飛んで行つて、ガラス戸を開いた。

軒下を辷る様に逃げて行く人影。背の高い、髪を女の子の様に長髪にして、黒木綿の紋つきに、黒セルの袴をはいた、何とも形容の出來ない變てこな姿である。

『君、一寸待ち給へ。』

侯爵が怒鳴ると、男はクルッと振返つて、ニヤ〳〵笑ひながら一禮した。肩まで垂れた長髪の上に、アイヌの酋長みたいな、顔中髭だらけの、薄氣味悪い人物だ。

『君は、一體誰です。今何をしてゐたのです。』

侯爵の詰問に、相手の男が答へる前に、突然横合から口を出したのは、執事の三好老人だ。

『木場さん。こんなことを仕出來して下すつては、私が困るぢやありませんか。もう一日もお泊めして置くことは出來ませんぞ。……イヤ、御前様、何とも申譯がございません。あの男は、實は、……』

『分つた、分つた。君の信仰してゐる天理教の教師だね。』侯爵は、怪人物の素情が分ると、安堵して云つた。『だが、再びこんな粗相のない様に、君からよく云つて置く方がよい。』

三好執事は天理教の狂信者で、門内の彼の住居には、時々說教旅行の教師が泊り込んで行く。木場さんといふのもその一人で、見ず知らずではあつたが、教會の確かな紹介狀を持參したので、三好老人は安心して泊めて置いたのだ。どうして覗いたりしたのかと尋ねて見ると、新任のフランス大使閣下の御顏を一目見たかつたのだと答へた。

さてそれからは別段の出來事もなく、大使一行の美術品巡覽は主客とも充分の滿足を以て終つた。

浴場の怪人

美子姫は毎夜ベッドに這入る前に、湯殿で身體を淸める習慣があつた。今日は御一泊なさる大使一行のおもてなしで就寢時間がひどくおくれたけれど、身分あるお客さまへの氣疲れと、その上黄金假面の恐怖に、心身ともへト／＼になつてゐたので、氣分を落ちつける爲にも、入浴を省略する氣にはなれなかつた。

姫が侍女の小雪に手傳はせて、着物を脫ぎ、大理石の浴槽に身をつけたのは、もう十二時を過ぎてゐた。



金色火然たる等身大の鍍金佛、その後の小窓にチラと見えた人の顏！

純白の大理石に照り映る、まばゆいばかりの電燈。それに氣丈者の小雪が、大タオルを手にして見張り番を勤めてゐてくれるので、深夜の湯殿ではあつたが、姫はのび／＼とした氣持で、肌にしみ入る溫湯を樂しむことが出來た。

透明な湯の中に、平べつたく浮上つて見える、ねつとりと白い肌。姫も世の多くの女達の例に漏れず、我れと我が肉體の美しさに見とれる娘であつた。我が肌の不可思議な魅力の恥しさ

は、やがて、遠き異郷の懐しき背の君への、云ひ難きあこがれであつた。

うつとりと物思ひに耽つてゐる内に、姫はふと襲ひかゝる樣な深夜の靜けさにおびえて、小雪に話しかけようと、うしろを振向くと、いつの間に立去つたのか、侍女の姿は消えてゐた。

『どこへ行つたのかしら、きつと着換の寢間着を取りに行つたのでせう。』

と心待ちに待つてゐても、小雪はなか／＼歸つて來ぬ。

耳をすますと、しんと靜まり反つた、夜の中に、幽かに、幽かに、あるかなきかに聞えて來る、裏山の夜鳥の聲、姫は湯の中ながら、ゾッと鳥肌立つ思ひで、おびえた目は自から庭に開いた窓に注がれる。その曇りガラスの扉の外に、ソツと忍びよる人の足音さへ聞える樣な氣がするのだ。

浴槽を出るのはおろか、湯の中で身體を動かすことさへ憚られ、破れる樣に高鳴る胸を押へて、ぢつと身をすくめてゐると、アヽ、何といふことだ、この窓の扉が、ひとりでに、一分



づつ一分づつ、じり／＼と開いて行くではないか。

幻覺だ。でなければ、惡夢を見てゐるのだ。夢なら覺めよと祈つたが、覺めるどころか、扉の隙間は見る見る擴がつて、その向ふから、吹き込む冷かな夜氣と共に、眞黒な夜がパアと覗いてゐる。

姫は身動きは勿論、喉がふさがつて、聲を立てる氣力もな

い。だが、目丈けは、目に見えぬ糸で引張られてゐる様に、扉の隙間に固定して動かぬのだ。アヽ、今にも、今にも、あの眞黒な隙間から、無表情な金色の顔が、覗くのだ。覗くに極つてゐる。とおびえる心が、そのまゝ形となつて現はれる様に、そこから、その黄金假面が、三日月型の口で笑ひながら、本當に、ヒヨイと現はれたではないか。

姫はその刹那、半ば意識を失つて、その黄金假面の怪物に向つて、まるで仲よしのお友達ででもある様に、ニツコリと笑ひかけた。極度の恐怖が――泣くことも叫ぶことも出來ぬ程の恐れが、遂に人を笑はせたのであらうか。

怪物は、姫の不思議な笑顔に誘はれた様に、窓をのり越えて、ツカ／＼と湯殿の中へ這入つて來た。顔は黄金假面、後頭部は黒布にすつかり包まれてゐる。身には、例のダブ／＼の金色外套だ。

姫は生命の危險を感じた。『早く／＼、逃げなければならぬ。』消えて行く意識を取戻さうと、死にもの狂ひの戰ひだ。やつとの思ひで、浴槽を出た彼女は、乙女の羞恥も忘れ、むき出しの赤はだかで、よろ／＼とドアに走つた。

だが、黄金假面は燕の素早さだ。姫が半ばも走らぬ内に、彼奴は已にドアの前に立ちはだかつてゐた。見ると怪物の右手には、黄金マントの下に隠し持つてゐた、鋭い短劍がギラ／＼と光つてゐる。

素つぱだかの、花はづかしい姫君と、全身金色に輝く怪物の、いとも奇怪なる睨み合ひ。怪物は又しても、例の三日月の唇で、顔一杯の笑ひを笑つた。と見る間に、パツと飜へる黄金マント。彼は一飛びで、姫の白い肉塊を組み敷いてしまつた。

怪物は姫のふくよかな胸を狙つて、短劍をふりかぶつた。か弱き女性の、斷末魔の悲慘なる抵抗。もがきにもがく姫の手が、近々とのしかゝつて來る怪物の顔を、發止と打つた。そのはずみに、どうしたことか、ポロリと落ちた黄金假面！咄嗟の場合、姫は怪物の正體を、まさ／＼と見て取つた。

『マア、おまへ！』

姫の驚愕と憎惡の絶叫。正體を見られた怪物は、物狂はしく短劍を振り下した。針の様な切先が、純白の肌にサツと通る。飛び散る血潮、ギヤツといふうめき聲、そして、宙を引掻く、眞白な指………。

丁度その頃、鷲尾侯爵とルージエール伯とは、まだ寝もやらず、晩餐から引き續いての美術論に打興じてゐた。書記官も通譯も同席して、聽手の役を勤めてゐる。

この席へ、無躾にも、轉がる樣に駈け込んで來たのは、侍女の小雪だ。

『御前さま、大變でございます。お姫さまが、胸を刺されて、

「……お湯殿で……」

主客とも色を變へて立上つた。侯爵は、客を殘して、小雪の案内で湯殿へと驅けつけた。騒ぎを聞いた書生もあとに續く。湯殿に來て見ると、美子姫は、半身を大理石の浴槽につけて、のけざまに、空を摑んで絶命してゐた。その胸のムックリと高い乳房と乳房の谷間には、黄金の柄の立派な短劍が、眞直ぐに突き立つて、その傷口から、まだドク／＼と、美しい深紅の泉がふき出してゐた。

侯爵はスリッパのまゝ浴槽に近づいて、姫の死體を抱へながら、

『オイ、三好を呼ぶんだ。それから波越警部にも知らせるのだ。』

と命じた。

書生が走る。やがて波越警部を先頭に、刑事や召使など、殆ど家内中のものが、殺人現場へ集まつて來た。

調べて見ると、姫は心臓をゑぐられて、全くこときれてゐる。最早や手のほどこし様がない。

短劍はどうして盗み出したのか、書齋に置いてあつた、侯爵秘藏のスペイン製のものであつた。

賊の出入口は、庭に面した湯殿の窓の外にはない。波越警部は部下を引連れて庭に廻り、一足の足駄の跡をたよりに、庭の奥、塀の外まで隈なく檢べたが、何の得る所もなかつた。足駄の跡は窓から五間程で固い地面に消えてゐたので、賊の逃走した方角を定めることも出來ぬのだ。

流石の侯爵も、一人娘の非業の最期に氣も顚動して、大切なお客さまルージエール大使一行のことも忘れ、前後の處置も考へず、たゞ美しい姫のなきがらに取り縋つて、涙にくれてゐたが、波越警部達が空しき捜索を切上げて引返して來た時、やつと氣を取直して、かういふ折は、老練な三好執事の智惠を借りる外はないと、召使達の間にその姿を探したが、どうしたものか老人の影さへ見えぬ。

『三好は、三好はどうしたのか。』

侯爵の聲に應じて、三好老人の妻女が、おづ／＼顔を出した。

『三好が、何だか變なのでございます。それから、家に泊つてゐます木場さんも。二人共一間に横になつて、グー／＼寢込んだまゝ、いくら起しても目を覺まさないのでございます。どなたか、一度見に來て下さる譯には……』

『眠つてゐるつて、それは變だ。』侯爵の頭に麻睡劑といふ考へがひらめいた。『波越さん、一つ見てやつて下さらんか。』

警部が三好老人の住居へ驅けつけて見ると、如何にも奥の一間に、老人と、長髪の怪人物とが、腕枕でグー／＼と寢入つてゐる。突いても叩いても、死んだ様に他愛もない。寢入る前にお茶を飲んだと見えて、枕下に茶器が出てゐる。恐らく賊は同家の勝手元に忍び込んで、茶器の中へ麻睡藥を入れて置いたものに相違ない。だが、彼は一體何の爲にこの二人を睡らせなけ

れぱならなかつたのであらう。
色々手當を加へたが、藥が利き過ぎたのか、兩人共、夜の白白あけまで目を覺まさなかつた。
一方ルージェール大使一行は、この思ひもかけぬ椿事に滯在どころではなく、夜があけるのを待つて、侯爵に鄭重な悔みの挨拶を殘し、例の紋章入り大型自動車を驅つて、東京へと引上げて行つた。

A・Lの記號

波越警部は、朝裁判所の連中が來着するまでに、この不可思議な兇行の動機なり、犯人の手掛りなりを摑まうとあせつた。もう一度足跡を綿密に檢べ廻つたり、短劍の指紋を探したり、小雪を捕へて姫の日常を尋ねてゐるかと思ふと、三好老人の住居へ飛んで行つて、家中を探し廻つたり、朝八時頃まで、探偵の仕事に沒頭してゐたが、やがて、土地の警察署長が遠くの町から到着した時分には、彼は已に若干の物的證據を蒐集したらしく、やゝ得意の面持で、署長と共に侯爵の前に現はれた。
『三好執事の家に泊つてゐる木場といふ天理教の教師は、御見知り越しの人物でございませうか。』
警部が意味ありげに尋ねる。
『イヤ、昨日見たのが初めてです。三好も見知らぬ男の樣です。たゞ教會の確かな紹介狀を持つてゐたので、泊めたと申すことです。』
『では、あの男をこゝへ引出して、一應質問を致して差支ございませんか。』
『いゝですとも。わしもあの男は何だか妙な奴だと思つてゐた位です。』
そこで、やつと痲睡から覺めた長髮長髯の怪人物が、この臨時法廷へ連れ出された。
『君は昨夜十二時頃、どこにゐたのですか。』
警部が、臨時被告の住所姓名其他を聞訊した後、先づおだやかな第一矢を放つた。
『十二時少し前、三好さんと御茶を呑んでゐました。それからあとは、御承知の通り、何も知りません。犯人は何ぜ私の樣な者を睡らせる必要があつたのかと、怪しむばかりです。』
『君は、お茶を呑んだのが十二時前だといふのですね。併し、三好さんも三好さんの奥さんも、確かな時間は記憶がない。三好さんがお邸から歸つて來たのが、多分十二時頃だつたと云つてゐます。とすると、あなた方がお茶を呑んだのは、十二時を餘程過ぎてゐたと考へなければなりませんね。』
『私も確な記憶はありませんが、若し十二時過ぎであつたとすると、どういふことになるのでせうか。』
『君が自分で入れた痲睡劑で睡りこけてしまふ前に、湯殿へ忍び込む時間があつた。といふことになります。』
『つまり、私が令孃の下手人だとおつしやるのでせうか。で、何か證據でも。』

木場は平氣で云つてのけた。

『オイ、君は、まだ、證據が發見されないと高を括つてゐるのかね。ソリヤ駄目だ。先づ第一の證據は君の朴齒の下駄だ。この邸には朴齒の下駄を穿いてゐるものは一人もない。ところが、湯殿の窓の外の足跡は、君の朴齒とシツクリ當てはまるのだ。』

長髪の男は、何の抗辯もしなかつた。そればかりか、こののつぴきならぬ證據に、ひどく驚いてゐる樣にさへ見えた。

『それ丈けではない。もつと確かな證據がある。』波越氏はこゝぞと居丈高になつて『これを見るがいゝ。この金色のおもちやは、君の行李の中から發見されたのだ。』

警部の手にあるのは、金色の假面と、金色のマントである。怪賊黄金假面の衣裳だ。すると、先日來、世の中を騒がせてゐた怪物はこの男であつた。

木場は、それを見ると、又一層驚きを増した體であつたが、暫らく無言で考へ込んでゐたのち、

『ア、仕方がない。』

と嘆息を漏らしながら、つと波越警部の耳元に口を寄せて、何か一言囁いた。

警部の顔に、サツと上る驚愕の色。

『嘘だ。嘘だ。……………』

彼は駄々子の樣に唸つた。

『波越君、君はたうとう僕の邪魔をしてしまつた。そんなに疑ふならこれを見給へ。』

木場は、頭に手をやつたかと思ふと、いきなり長髪をかなぐり捨て、次には、顔中の髭をむしり取つた。その下から現はれたのは、

『ア、明智君。まさか君の變裝とは知らなかつた。』

波越警部の叫び聲。驚くべし、天理教の布教師と見えたのは素人探偵明智小五郎であつたのだ。

一座の人々は、この劇的情景に少なからぬ興味を覺えた。新聞を讀む程の人で、名探偵明智小五郎を知らぬ者はない。鷲尾侯とても、その例には漏れぬ。波越警部は、今し方の失策を忘れたかの如く、やゝ誇らしげに、この名高い友人を紹介した。

『だが明智さん。肝腎の時に眠らされてしまつたのは、少々手拔かりでしたね』

地方の署長が、ある反感を含めて、皮肉に云つた。

『エヽ、併し、恐らくシヤーロツク・ホームズだつて、僕と同じ失策をやつたでせう。なぜと云つて、昨夜、殆どあり得ないことが起つたのです。僕の想像が間違つてゐなければ、歴史上に未だ曾つて前例のない椿事が起つたのです。僕はそれを口にするのも恐ろしい程です。無論、僕にもまだ眞相がはつきり分つてはゐないのですが。』

明智は眞から恐ろしい相に、謎の樣なことを云つた。

『といふと、何だかあなたは、昨夜の犯人を御存知の樣ですな。』

署長は明智の難解な言葉を、てれ隱しと邪推して、なほも皮

肉をやめなかつた。

『昨夜の犯人とおつしやると、お孃さんの下手人のことですか。』

『云ふまでもありません。』

鈍感な署長は、明智の質問の奥に隠れた意味には無感覺で、肯いた。

『多分、存じてゐます。多分といふ意味は、……波越君、昨夜からの捜索の結果は？』

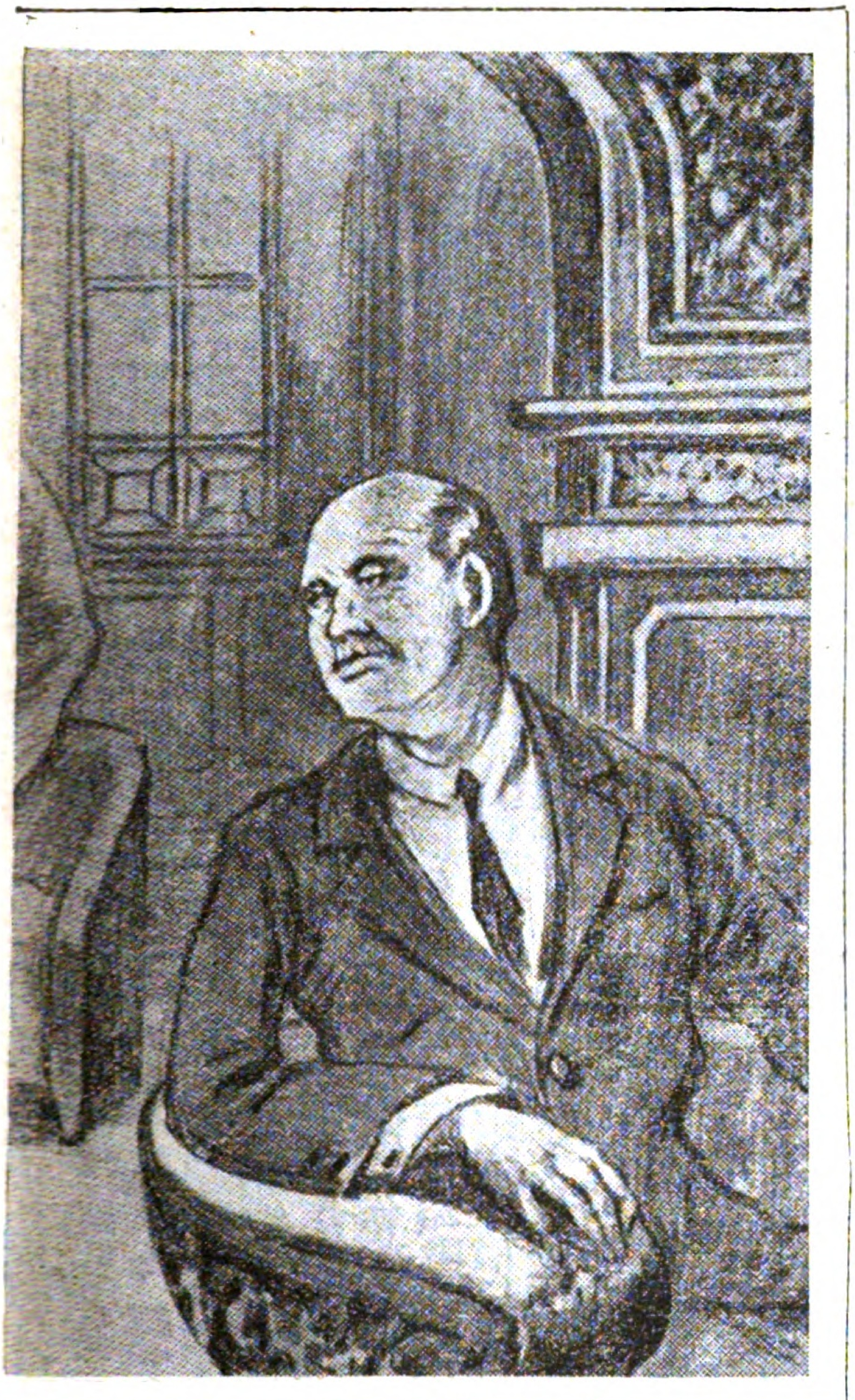
『皆無だ。君自身が犯人でないとすれば。』

『さうでせう。では、僕はハッキリと申上げることが出來ます。この犯人は、數日來私の目ざしてゐた人物です。』

『明智さん、それは誰です。その男の名前を云つて下さらんか。』

たうとう、侯爵がイラ〳〵して口を出した。

『イヤ、侯爵、その前に、あなたにとつてお孃さんの御死亡と、殆ど同じ位重大な問題があります。私は、一刻も早くそれを確めたいのです。』



『といふのは、ア、、若しや君は、……』

『エ、、國寶にも比すべき、御蒐集の美術品です。大使御訪問の折も折、どうしてかうも、樣々の兇事が重なり合つて突發したのでせうか。賊は滅多に開かれぬ、美術館の大戸が、昨日大使一行の爲に開かれるのを待ち構へてゐたのではありますまいか。その證據には、例へば、……』

『例へば？』

『例へば、三好さんは何ぜ麻睡劑を呑まされたかといふことです。失禮ですが、三好夫人は目も耳もうとい

御老人です。賊は三好さんの眠つてゐる隙に、隱し戸棚にしまつてある、美術館の鍵を取り出して、又人知れず元の場所へ返して置くことも出來たのです。若し賊が、その隱し戸棚を前以て知らなかつたとすれば、昨日の樣に、たま〳〵美術館の開かれる日を待つて、その隱し場所を確める外はないではありませんか。』



驚くべし、天理教の布教師と見えたのは名探偵明智小五郎であつた。

『明智さん、來て下さい。美術品を改めて見ませう。』

古美術のことゝなると氣違ひの樣な鷲尾侯爵は、もう心配に青ざめて、明智をせき立てた。

侯爵は三好老人から鍵を受取つて、明智、波越警部、警察署長の三名を伴ひ、美術館に這入つて行つた。

だが、一巡歩いて見た所では、別段紛失した品物もない。

『明智さん、少し取越苦勞だつたね。』

侯爵はホッと安堵して云つた。

『ですが、侯爵、この佛像は?』

『藤原時代の木彫阿彌陀如來像です。』

『イヱ、私の云ふ意味は、……』

明智は長い間如來像を凝視してゐたが、何を思つたのか、突如、拳を固めて如來樣の横面をはり飛ばした。

『コラッ、何をする。貴樣、氣でも違つたのか。』

侯爵が激怒して馳け寄つた時には、已に如來樣は臺座を辷り落ち、固いコンクリトの床で、粉々に割れてゐた。

『侯爵、御覽なさい。これが藤原時代の木像でせうか。』

見ると明らかに石膏細工の僞物だ。

ア、何といふ見事な模造品。賊はいつの間にこの樣な石膏像を用意することが出來たのであらう。侯爵は昨日大使を案內した時は、それが決して僞物でなかつたことを記憶してゐた。

明智は何氣なく、如來像の底部に當る、石膏の一片を拾ひ上げて、ひねくり廻してゐる內に、その表面に、A・Lといふ何かで引搔いた樣な文字が記されてゐるのを發見した。

A・Lとは一體何の記號であらう。まさかこんな犯罪用の僞物に、作者が署名をする筈はない。とすると……。

明智は何か、心の奥の奥から、秘密の解釋を探り出さうとするものゝ如く、ぢつと考へ込んでゐたが、やがて、何を思ひ當つたのか、流石の名探偵も、すつかり相好が變つてしまふ程も、深い深い驚きと恐れに打たれた樣子である。

侯爵は侯爵で、絕望の餘り、目の前の空間を見つめて默り込んでゐたが、どう氣を取直したものか、突然力なく笑ひ出して、

『イヤ、寶物の方は、大して心配することはない。あれ程の品を、人知れず處分するなんて不可能なことだ。又、さう急に買手がつくものでもない。やがてありかが知れる時もあるでせう。だが、娘は、もう永久に歸つて來ることはないのです。………』

と言ひさして、侯爵は憤怒に耐へぬものゝ如く、

『明智さん、君はさつき、娘の下手人を知つてゐると云ひましたね。』

と、まるで詰問である。

『エ、存じてゐます。侯爵とてもよく御存知の人物です。』

『誰です。そいつは一體何者です。』

侯爵は日頃のたしなみを忘れて、素人探偵につめ寄つた。

明智は將に兇賊の正體を發かんとしてゐる。新時代の幽靈、黃金假面とは果して何者であつたか。殺人の動機は何。美子姫の死と名寶紛失とに如何なる關係があつたのか。イヤそれよりも、いぶかしきは、明智小五郎の謎の如き言葉だ。彼は一體何を考へてゐるのか。又、彼は、僞佛像に刻されたA・Lの記號を見て、何ぜなれば、彼にも似げなく、あの樣に驚き恐れたのか。さては又、黃金假面の怪物と、名探偵明智小五郎の爭鬪は如何に火蓋が切られるのか。それらは凡て、しばらく讀者諸君の御想像に御任せする外はない。

（つゞく）

熱狂せる讀者の聲

◇待ちに待つた亂歩先生の傑作　それにしても之は何と云ふ面白さだ!!　恐ろしいと云ふか、面白いと云ふか、痛快と云ふか、氣狂ひのやうになつて一氣に讀みました。次號はどうなるでせう。（奈良　中村　清）

◇何と云ふ素晴しさだ！　面白いどころのさわぎでは濟まぬ、此の一篇を呼吸のつまるおもひで讀まされて、全身ヌラ〳〵氣味の惡い油汗の湧き出るのに、一驚を喫した。甲賀三郎氏ならずも一體どうなるのだ!!　次號が待たれてならぬ。（岩手縣　江戸川ファン生）

◇出た、出た!!　あゝ何と云ふ素晴しい小說だらう!!　私はもう讚美の言葉を知らない。亂歩先生もう少し長く載せて貰ふわけにはゆきませんか。もう次號が待遠しくてなりません。（鹿兒島　川本　猛夫）



歐米各國お國氣質

東京市長 永田秀次郎

私が歐米漫遊から歸つて、かれこれもう半年以上にもなるが、

『洋行土產に、お前は何を持つて來た？』

と今だによく訊かれる。

顧みて大した收穫もなかつたが、たゞ二つ、第一には我が日本國民が萬世一系の皇室を戴く事のいかに有難いかを沁々と感じたことと、第二には歐米各國がそれ〴〵に異つた特長を持ち、それ〴〵に自分の道を行つてゐることを如實に見たことがある。

前の問題については、他日の機會を俟つことゝし、茲には其の各國民氣質を觀て行くことにしよう。

○碁から見た獨逸人

伯林で獨逸人三人と碁をやつた。

一人は獨逸の本因坊と云はれるデュポール博士、一人はラスカー博士、も一人は大學生の某君だつた。

碁を通じての獨逸人の性格、これが又なかなか面白い。

第一、彼等は勝負に拘泥する。戰ふ以上は飽くまで勝たなくてはならぬといふ押しが馬鹿につよい。これは到底、日本人の比ではない。

第二には、熱心で他事を考へない。勝負のつく迄は無言で、苦蟲をつぶしたやうな顏をしてやつてゐる。

第三に、手を下ろす迄に熟慮に熟慮を重ね、一石にも沈思默考する。

第四に、責任感とでも云ふか、一旦石を下ろした以上、一切それに手を觸れない。

換言すれば、獨逸人は粘り強く、緻密、熟慮な、そして責任感の強い國民といふ事が分る。併し、其の反面には、遲鈍とか、快活を缺くとか利害に執着するとかいふ事が窺はれる。

私のこの判斷は、碁を通して歸納した結論だから、或は暴斷

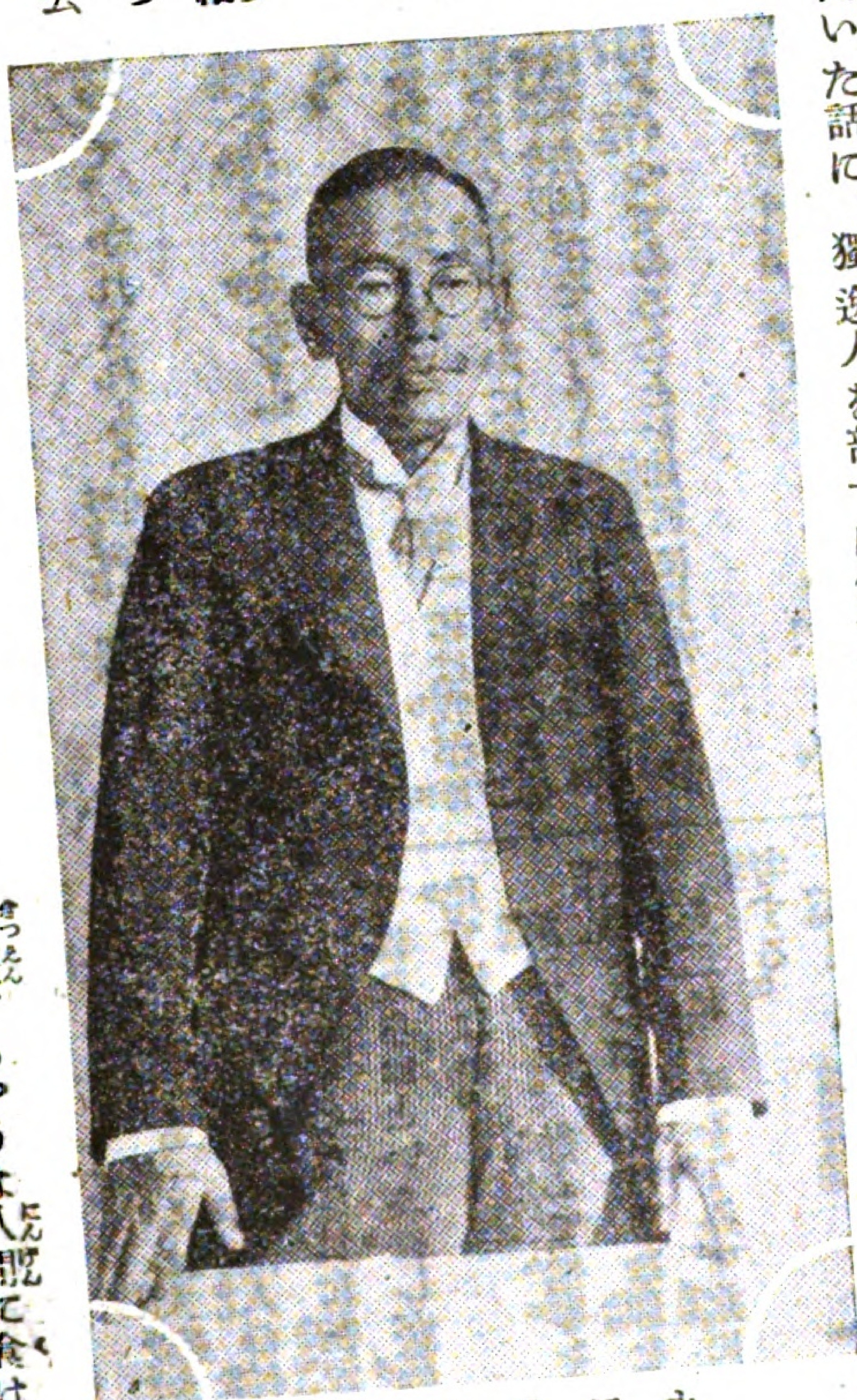
に過ぎるかも知れぬが、凡そ人の性格とか國民性とか云ふものは、日常、茶飯事、不用意の間に現れる一些事にこそ、却つて其の眞相を隱さずに告白するものだ。ことによると、これが眞相に近くはないかとも思つてゐる。

伯林で日本人から聞いた話に、獨逸人を部下に使つて見ると、グヅで間に合はぬ事が多いさうだ。鳥渡した調査事項の結果を報告するにも、序論、總論、各論と順序を追うて言はねば承知しない。面倒くさいから、『結論だけ云へ』と云つても、どうしても云へない。

『簡單には云へません』と云ふ者が多い。

だから、獨逸人は間違ひはないが、取引には間に合はない。商賣は下手だ——と云つてゐた。

○世界一のフランス料理



永田秀次郎氏

佛蘭西の料理は世界第一の評判がある。

前年、米國の代表的實業家が大勢巴里を訪問した時のこと。巴里の市長は、晩餐會を催して一行を招待した。其の時、市長は料理番を呼んで、

『今日は大切なお客様だから、十分腕に撚りをかけて御馳走するやうに……』と命令した。ところが、料理番がお客樣の米國人を見てゐると食前の休憩室で盛んに喫煙してゐる。元來、喫煙は味覺を害して食慾を減らすものとして、食前の喫煙は料理人が最も忌む所、此のお客樣の樣子を見て、料理番は頗る憤慨してしまひ、

『我々の作る料理は、食前に喫煙するやうな人間に食はす料理とは違ふのだ』

と云つたさうである。

私は此の話を聞いて、非常に興味を感じた。嘗つて織田信長が足利氏を滅ぼして京都に出た時、三好、松永等の料理番をした者に料理をさせたことがある。と、信長は一口食つて、

『こんな水臭い料理は食はれない。是でも日本一の料理人か』と云つて怒鳴りつけた。料理番は恐縮して、更に他の料理を作つて出した所、一箸つけて見て信長は、
『佳味、佳味、流石は天下第一』と賞讃した。料理人は外へ出て來てから、
『前に出したのは、一等料理、後から出したのは三等料理だ。矢張り田舍武士には、料理の味は分らないのだ』と、舌を出して笑つたさうだ。此の話は有名な話だが、つまり米國人のやうな成金風情には、巴里の上等料理の味はわからない。併し今一歩深く考へて見ると、一等料理を味はつてゐた三好、松永や、足利將軍は、三等料理の信長に滅ぼされた。
今日、巴里の料理がわからない成金風情の米國人に、佛蘭西人は頭の上らぬ事が多い。玆に私は一種の重大なる教訓を發見した。

○人間味たつぷりな倫敦見

松平大使の招待會の食後、私は大使夫人からこんな話を聞いた。
『米國に駐在中は、召使の數は極めて少かつたが、料理人でも其の下働きでも、皆自分持の自動車を持つて働いてゐた。だから大使館邸には毎時も七臺以上の自動車があつた。そして彼等は、總て能率本位で、一定の時間丈働くといふやり方であつた。
所が、ロンドンでは、召使の數が倍もあつて、皆それぞれ仕事を分擔して、ゆつくり誠實に働いてゐる。主人が起きてゐれば、寢ろといつても寢ないで、いつまでも起きてゐる。而も給料は米國などとは比較にならぬほど安い――』
私は、英國人の召使が、主人が寢なければ何時までも起きて居るといふやうな氣分を、頗る興味を以つて聞いた。
米國の能率主義に對して、この鈍重主義の善惡は暫く別問題とし、かゝる情味が段々と世界から失はれてゆく傾向に對して、此の人間味をロンドンで聞き得たのは、いかにも嬉しい事であつた。

○ペトロの足を舐める伊太利人

伊太利へ行つて豫想外に感じたのは第一に文化の低い事だ。丁度、支那が古い國で文化が低いと同樣だ。
サンペトロの寺に行くと、ペトロの大きな腰かけ姿の銅像がある。銅像の拇指の爪先が端に出てゐるが、そこへ參詣する人は必らず拇指にキツスして行く。だからピカピカ光つて磨り減つてゐる。なかなかよく舐めたものと見える。
『世界に於ける尊き御親のサンパウル第五世の法皇の御足を、

奥州の舘に於て伊達政宗謹んで吸ひ奉り候』

これは法皇廳に保存されてゐる伊達政宗の手紙の文句だ。これによると政宗もなか〳〵居が長かつたと見える。

兎に角、伊太利には斯うした昔からの迷信的な風習が殘つてゐて、壯丁なども半分位は文字が書けないと云ふ。文化の低いことは、これ丈でもわかる。

それから、もう一つ意外のことは、フランスと仲の惡い事だ。

伊太利人は『佛蘭西人は可哀想なものだ。フランスがファッシストの政治をやつたら、もう少し幸福になるだらう』と斯ういふ事を云ふ。一方、佛蘭西人は『伊太利人は可愛想だ。自由も何もない、政治の事を一口云へば殺されてしまふ。議會があつても無いのも同樣だ。可愛想なものさ』と云つてゐる。すると伊太利人がそれを聞いて、

『議會政治が何だ、議會政治つ位、世の中に馬鹿々々しいものはない。あれは惡人共が集つて善人の守る法律を拵へる所だ——』

と罵つてゐる。私はこの批評を一種の趣味のある痛快な批評だと思つて聞いた。

○天氣豫報のやうな馬の名前

米國人は何が好きかと云へば、第一が活動寫眞、その次が野球、蹴球、拳鬪、競馬といふ順序だらう。私は、その競馬を見る爲に、ワシントン市から一時間以上かゝる郊外へ出かけて行つた。競馬場に女の見物の多いのに驚いた。日本では馬劵を買つた事がないが、こゝでは試みに買つて見ようと思ひ、馬の名前を讀んで見て、その奇拔さに一驚した。日本では馬の名前といへば、池月とか磨墨とか云ふ優雅なものか、さもなくば鬼鹿毛とか、隼とかいふ元氣のよいものが多い。所がアメリカの馬の名前となると、どれもこれも變なものばかり。曰く、『ハット・ブラッシュ』(帽子の刷毛)曰く、『ペンシルバニヤ・ストリート・ナンバーワン』(ペンシルバニヤ街一番地)曰く『レイニー・オア・シャイン』(雨天か晴か)といつたやうな天氣豫報のやうなものや、住所の番地のやうなものがある。

其の奇拔な無趣味な、非文學的な名前をつけて平氣でゐる。出鱈目な所に米國人の氣分が躍如として現はれてゐる。

○江戸ッ兒氣質の米國人

米國仕込の日本人が、兎角、拜金であるからといつて、米國人をケチンボと思ふのは早計だ。

私達親子(令息亮一君)がロサンゼルスへ着いた時、迎へてくれた二人の大學生などの氣合つたら全く江戸ッ子風だ。自動

車へ一緒に乘つて行く途中、アイスクリームなどを買ふ。右側に貴子が來れば、右側のものが金を拂ふ。左側に貴子が來れば左側の者が拂ふ。遊樂場の入場券なども先に行つたものが買つて、決して精算なんてしない。實に恬淡な無邪氣なものだ。所謂、米國人の拜金といふ事は、活動を意味して、吝嗇を意味してゐない。米國人の本色は「俺達やあ、宵越しの金は使はねえよ」といふ江戸ツ子式なのかも知れない。要するに彼等はうんと働いてうんと儲け、うんと使はうと考へてゐる。だから米國では終身保險が絶對多數で、養老保險などは甚だ少い。苟しくも生きてゐる間は何でも働くから、養老保險の必要なんて毛頭ない。保險は唯死ぬ時だけ必要なものだと云つてゐる。——これは保險業者の話だから間違ひあるまい。若い中、働いて、年とつてから樂隱居なんて考へてゐる國の人にはよい藥だ。

○

斯うして書くと、歐米各國、全く別世界のやうだが、又一面、共通のところも少くない。殊に最近の交通機關の發達、と文物の交易は、世界を著しく狹くした。殊に歐洲諸國に於いて然りである。飛行機で飛べば、一日で何處へでも飛んで行ける。まして、モスクワから佛蘭西に至る間、まるで平野續きだ。少し了簡を大きくして觀るならば、畢竟、歐羅巴は亞細亞大陸の一半島、唯、歐羅巴といふ一國に過ぎなくなる。その一國の中に獨逸あり、佛蘭西あり、伊太利あつて相爭ふ事、丁度それは支那の國内に於て、蔣介石とか馮玉祥とか、閻錫山とかが鎬を削るにさも似たり。英國が一寸離れて存在するのは、猶、張學良が奉天に居るやうなものだ。事實、佛國外相ブライアンを始め、歐洲聯盟を提唱する者は少からず、今や一大輿論たらんとしてゐる。南北亞米利加は北米合衆國が代表し、日本が亞細亞を代表して、歐羅巴と亞米利加と亞細亞と、三大勢力の鼎立となるの日は遠くはあるまい。

然るに、亞細亞の現狀は尙此鼎立の形勢を成す上に於て心細い點が多い、特に日本國民の奮起を促す次第である。（完）

ひかりの歌

ひ。ひかりさす
ふ。ふじのねも
み。みえそめて
よ。よべあけぬ
い。いまうらつ
む。むれゆくほ
な。なるろおと
や。やちわたに
こ。こぎはせん

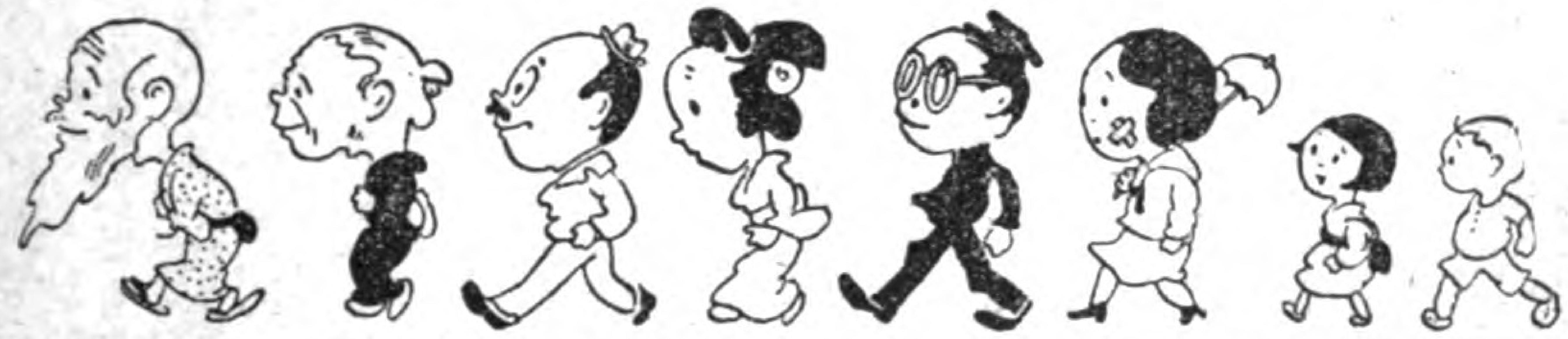
光さす
富士の根も
見え初めて
夜邊明けぬ
今浦津
群れ行く帆
鳴る艪音
八千海に
漕ぎ馳せん

附記　これは、假名四十八字のうち、「い・ゐ」「え・ゑ」「お・を」[illegible]思ひます。

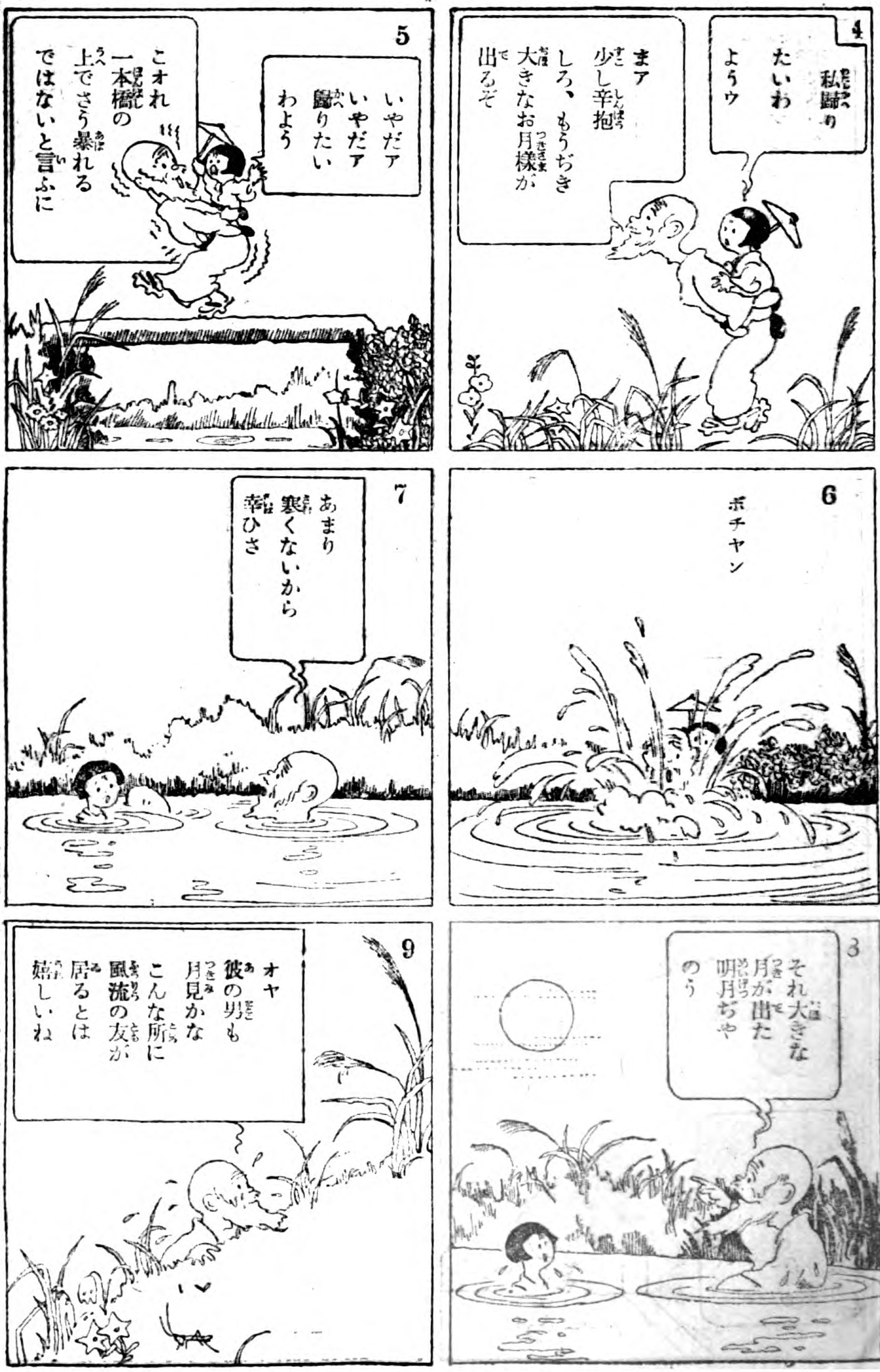
（昭和五年七月三日記　粂川定一）

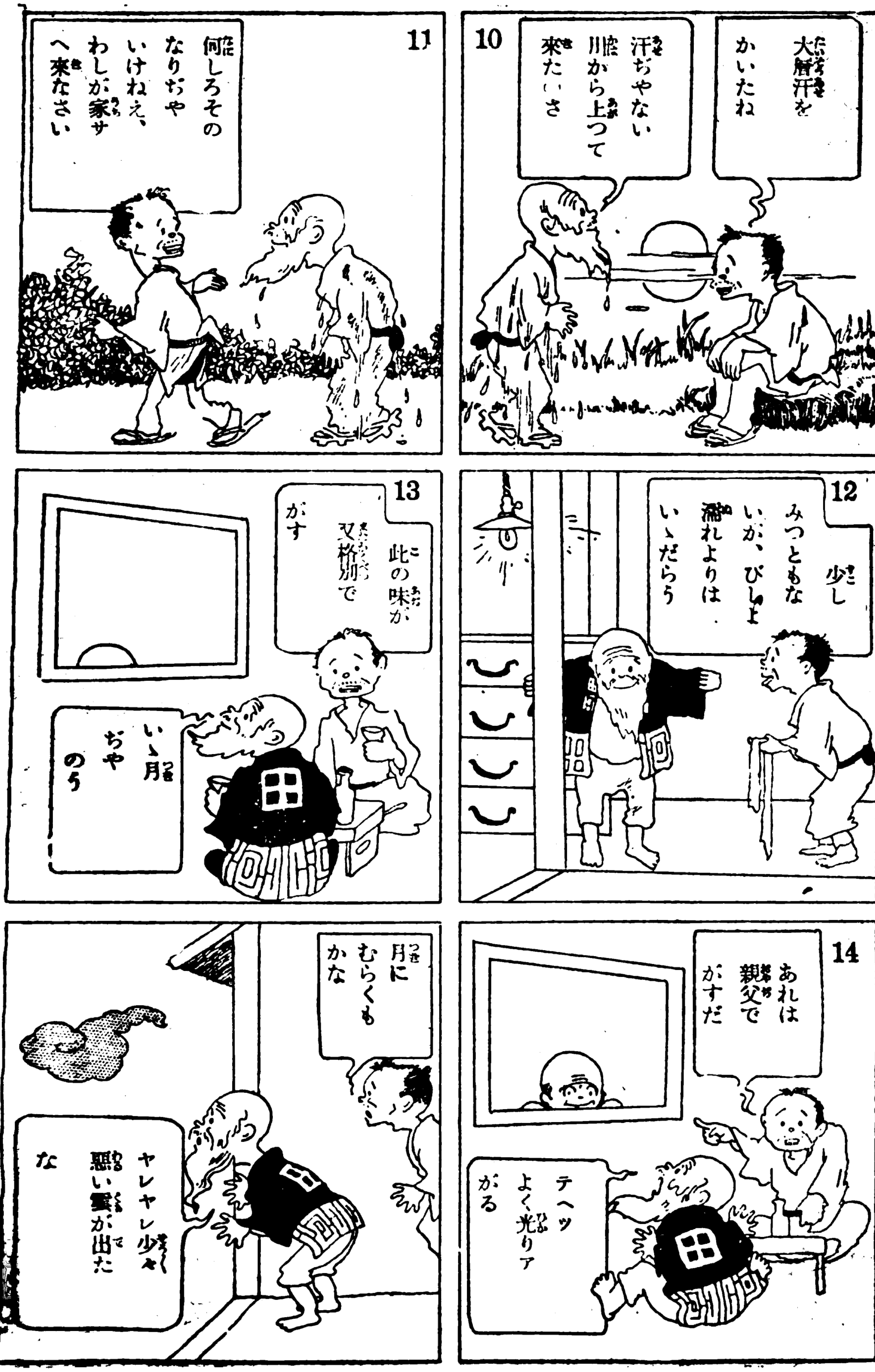
愉快な連中

連載漫画　田河水泡






私歸りたいわようウ
まア少し辛抱しろ、もうぢき大きなお月様が出るぞ
いやだアいやだア歸りたいわよう
こオれ一本橋の上でさう暴れるではないと言ふに
ボチヤン
あまり寒くないから幸ひさ
それ大きな月が出た明月ぢやのう
オヤ彼の男も月見かなこんな所に風流の友が居るとは嬉しいね


10
大層汗をかいたね
汗ぢやない川から上つて来たいさ
11
何しろそのなりぢやいけねえ、わしが家サへ来なさい
12
少しみつともないが、びしよ濡れよりはいゝだらう
13
此の味が又格別でがす
いゝ月ぢやのう
14
あれは親父でがすだ
テヘツよく光りアがる
月にむらくもかな
ヤレヤレ少々悪い雲が出たな


では私は歸るよ、月がかくれたから
ポツポツやつて來たな
すつかり降られちやつたよ
オヤマア何と言ふ淺間しいなりでせう
おかへりなさい
あのうダア子はどうしましたかしら
さうさうすつかり忘れちまつた
お爺さんずゐぶんひどいわ
mizawa

隨感隨想

世田ケ谷美談

廣津和郎



葛西善藏君が死ぬ前、自分は彼に轉地を勸めたことがある。彼が住んでゐた世田ケ谷の家は、何と云つても地面が低くて、健康に取つてよろしい筈がない。もともと田圃を埋めて出來た住宅地であるし、それに南が高く、北が低く下つてゐるのか、尚更よろしくない。『こんなに痩せてなあ』と彼がその痩せた腕を捲つて見せる度に、自分は云つた。

『土地が悪いんだよ。こんな北下りの土地に住んでゐたら、どんな健康な人間でも、病氣になつてしまふよ』

『うん。それでは何處かに移轉するとするかな』彼はさう云つてじつと考へてゐるが、『併しいづれにしても、この近邊から去りたくないんだ。といふのは、他でもないが、例の酒屋の爺さんから離れたくないんでね。――俺は君も知つてゐる通り、東京に親戚と云つても一人もない。あの酒屋の爺さん位面倒を見てくれるものは一人もない。それでどうしても爺さんの側を離れたくないんだ』

話がそこまで行くと、自分は默らないわけに行かなかつた。成る程、この爺さん位、葛西君の事を親身に世話してやつてゐるものは外には一人もないと云つていい。實際、親身でもあれ程までに世話は出來ないかも知れない。

その爺さんといふのは、世田ケ谷三宿の信州屋といふ酒屋の爺さんである。その姓名は丸山助一郎さんといふ。

どうして丸山助一郎さんと葛西君とが知己になつたかといふ事は、自分は詳しくは知らない。が、恐らく、葛西君が世田ケ谷に住むやうになつてから、助一郎さんの店から酒を買つたのがもとだらうと思ふ。



葛西君は人も知る通りに、一生貧苦に惱まされ通して死んだ作家だつた。彼は十年の作家生活に、いくらも創作を發表しなかつた。感興が湧かなければ、一年でも二年でも筆を執らなかつた。それでゐて、一日も盃を手からはなすことの出來ない性來の酒家だつた。――今後はかういふ風な藝術家はだんだん尠くなるし、如何に藝術家でも、そんな風にしては生活が出來なくなつて行くので、勢ひ彼のやうな生き方では、生きて行けなくなるだらうが、彼はその意味でも、いはゆる『清貧に甘んじた種類の作家』の最後の人だらうと思ふ。

その貧乏な作家葛西善藏を、丸山助一郎爺さんは、死ぬまで庇ひ通したのである。爺さんはどんなに葛西君の拂ひが悪くとも、イヤな顔ひとつせずに酒をはこんで行つた。――三年間にそれは九百[illegible]十圓、殆んど一千圓近い額に上つてゐた――それはかりではない。

酒を飲むと少々亂暴になる貧しいこの作家に、家の貸し手がなくなつた時には、爺さんは自分自身の名で家を借りて、そこに葛西君を住はせた。それが葛西君が息を引取つたその家なのである。

更に葛西君の弟が死んだ時に、その香奠返しの世話まで、すつかりしてくれたのも、やはりこの爺さんだつた。

葛西君の病氣がひどくなり、終に彼が死ぬまで、爺さんは葛西家の最も親しい相談相手であり、葛西君の歿後も尙葛西君の遺族を爺さんは自分の持家に住はせて、何や彼やと世話をしてくれてゐる。

葛西君が死んだ時、相當の香奠が集まつた。その額を聞くと、爺さんは涙ぐみながら喜んだ。

『あゝして貧乏して亡くなられても、やつぱりえらかつたお方だから、皆さんがそんなにして下さつたのだ』

生前貧しい故に、近隣の者から侮られてゐた葛西君のために、爺さんはさういつて辯護して歩いた。

科學的常識

宮内省文書課長　渡部信



嘗て露國大使館へ晩餐會に招かれたことがあつた。

その時露國の書記官夫人が僕の席へ來て、リキウル酒を頻りにすゝめる。もう十分頂戴しましたと斷ると、『渡部さん、これは弱いのです。十二ですよ』といふ。十二とは何のことか、一寸見當がつかなかつた。漸つと、アルコオルの含有量が十二パーセントだなと考へついた。そこで直ぐ樣反問して見た。『有難う存じます。時に、ウオツカは幾つでしたか』『ウオツカは三十七です』。夫人は言下に答へられた。これは一例に過ぎないが、彼等の科學的常識は全く驚くほど發達してゐる。

南洋珍談

南洋協會幹事　飯泉良三



『木に緣つて魚を求める』と云ふことは、日本では、到底不可能のことを望むと云ふ譬になつてゐるが、シヤムでは事實さう云ふ事が出來る。

メナン河を舟に乘つて上ると、その流域にある樹に、魚が樹にゐる虫を取らうとして、水面高く飛びあがつてゐるのを屢ゝ見受ける。そして、子供などはその飛上つた所を網の中に入れて捕へてゐる。

それと云ふのも、シヤムは魚の多い土地だからで——何故魚が多いかと云ふと、それは佛教の所謂五戒の一つである『殺生』の戒が、魚を捕ることを少なからしめた爲めである。

一生に一度、僧侶にならなければ天國に行けぬ——それがシヤム全國民の頭を支配してゐる信仰で、僧侶の數は全國民の三分の一に及んでゐるとさへ云はれる。



僧侶讀誦

魚の多いのも、から云ふ佛教の信仰がもたらした現象の一つである。

シヤムのパイリンドル（植物園）に入ると、直ぐの左側に珍らしい草がある。

此の草は人間の丈ぐらゐあるが、不思議にも高さ一尺、直徑一寸五分位の袋のやうなものを方々へブラ下げてゐる。そして、その袋の一方の口はいつも開いてゐる。この袋の近くからは香りの高い分泌物が出るが、虫類はその香りに釣られて、つい袋の入口から入ると、忽ち袋の口はパタリと音をたてゝ閉ぢられるのである。それが、一つの袋につき、一日に三四回繰返され、捕へられた虫の體は、三、四時間で分解され、吸收されて了ふ。學者の云ふところによると、地面から營養物をとるよりも、その袋によつてとる營養物の方が分量的に多いさうである。

砂鐵

帝國大學教授　梅津　七藏



我國に鐵鑛が乏しいといふことは、國家の一大憂ひとされてゐる。事實、支那の大冶並びに鞍山等から年々莫大の原鐵を輸入して製鍊してゐることは人のよく知るところである。然し、我國にも砂鐵鑛ならば澤山ある。或る人は數億噸と計算してゐる。昔しは鐵の原料といへば先づこの砂鐵であつた。南部鐵瓶などはこの砂鐵で出來てゐるのである。



近頃どうしてこの砂鐵が使用されないかといふと、それは、この砂鐵には普通の鐵鑛の成分以外にチタンと稱する元素を多量に含み、このチタンが精鍊に際し多くの惡影響を及ぼすからである。然るに、最近科學の進歩はこのチタンが意外に各種の有益な材料となることを發見した。飛行機の空中防禦に用ふる煙幕やチタン白粉を始め續々と廣大な用途が發見されつゝある。從つて砂鐵からこのチタンを巧妙に分離する時は、優良なる莫大の鐵鑛を得ると同時に、又各種の有益なる化合物を得ることゝなり、所謂一擧兩得三得で、桂工學博士の歸朝談によれば、歐米の學者は目下頻りに我國の砂鐵に注目してゐるとの事である。獨逸はあの戰爭中、各種原料の輸入が途絶するや、國内に捨てられたものから之を採ることに成功した。我國の如きも、徒に原料の不足を嘆ぜず、我國にあるものを有益に利用する方法を研究すべきであると思ふ。

職工で一千圓献金

大阪工廠火砲製造所長陸軍大佐　内藤喜三郎



職工の身分で、一外債償還の爲、千圓の献金をした篤行家があります。陸軍造兵廠大阪工廠火砲製造所の職工で徳田保治といふ人であります。

長者の萬燈よりも貧者の一燈と云ふことはあるが、之は貧者の萬燈とも云ふべきでありませう。而も其の金は決して所謂一攫千金の『あぶく錢』でなく、同君が大正三年九月大阪工廠へ入廠以來、日給四十四錢時代から、十數ケ年の永い間、所謂爪に火を點す樣にして貯へた金であります。

同君は妻女と二人の男の子（十二歳と七歳）の四人暮しであるが、家賃七圓五十錢の六疊一間に家族四人が起居し、半ケ月間の[illegible]

所要費用の豫算は肴代三圓、野菜代二圓と云ふ緊縮振りであります。無論娯樂費などの豫算は一文もなく、家族の誰れもが未だ一回の活動寫眞も見たことがないといひます。又結婚以來十三ヶ年間に夫婦が揃つて外出したのは、先達の御大禮跡の御所拜觀のタッタ一度だ相です。

現在の貯金は一千九十一圓五十一錢だ相ですが、一千圓を献上した爲に殘りは僅に九十一圓五十一錢しか殘らないのです。

これは、他人の献金した新聞記事などを見て流行的に人の眞似をしたものでもありません。その證據には、是迄にでも次の樣に公共的事業に醵金を出して居るのであります。

大正十三年
村の小學校へ　一〇〇圓
村の氏神樣へ　一〇〇圓
村の忠魂碑建立に　二〇圓
村の寺へ　五〇圓
村の妙見宮へ　三〇圓
昭和二年
氏神樣へ　五〇〇圓
昭和三年
寄宿地の郷社　三〇圓

今回、どうして、此の樣な多額な寄附をする氣持になつたか、同君はいつて居ります。

「私の亡くなつた母は、よく、お國の大事には、男は身を捧ぐるか、金を捧ぐるものだと申してをりました。それが少年時代から、頭に喰ひ込んで居りますので、目下の經濟國難に、及ばずながら母の教への一端を行ひたいと考へまして……」といつて居ります。

同君は又、其子供の教育に於ても、見上げた考へを持つて居ります。即ち同家にては米は工廠から買つて居るのですが、六錢の配達料を出せば自宅まで配達して呉れるのを、態よ自分が肩にかついで歸る相です。そして米をかついで歸つた日にはどんなに夜遲くならうとも子供は決して寢かさずに起して置き、米を肩にして歸つた自分の樣子を見せるのだ相です。斯樣にして子供達の爲めに親が苦勞して居るといふことを、子供の頭に染み込まして置くのが子孫に千金や、美田を殘すよりも遙かに有效であるといふのです。

尚又、斯樣な思ひ切つた献金は主人許りの意見で實行が出來るものではない。同君の夫人も、全く同心一體で、平素裁縫の内職などしながら家計を助けてゐますが、此の献金なども、夫人から勸めてやつた位だといひます。

手さげ



岡部　隆次

電車の中での話。美しく着飾つた一人の夫人、小さい手さげを開けて蟇口を出し、手さげを閉ぢて蟇口を開け、蟇口から十錢を出して蟇口を閉ぢ、手さげを開けて蟇口を入れて、手さげを閉ぢた。それから十錢を車掌に渡して三錢の釣を貰つた。再び手さげを開けて蟇口を出し、手さげを閉ぢて蟇口を開け、三錢を入れ、蟇口を閉ぢて手さげを開け、蟇口を入れて手さげを閉ぢた。そこへ車掌が切符を呉れた。之を受取ると、又もや手さげをあけて蟇口を出し、手さげを閉ぢて蟇口をあけ、そこへ切符を入れ、それから蟇口を、手さげを――あゝくたびれた。

……とに角切符を手さげに入れ終るか終らぬかに電車は目的の停留所に着いた。それから又手さげを……蟇口を切符を――もしやくしやしながら、夫人はあたふたと出て行つた。



花井卓藏博士

模範的式辭挨拶卓上演說例

東京辯護士會々長 塚崎直義

多數の先輩を措置きまして誠に非禮とは存じますが幹事からの指名が御座いましたので僭越ながら一言御挨拶申上げます。

明治初年代言人制度が設けられまして以來同業者の數は實に萬を超え、一代の俊髦秀才綺羅星の如く輩出致しました。現に國務大臣として廟堂に立つたものも九名の多きに上つてゐるのでございます、然しながら花井博士の如く辯護士として、其の盛名を中外に謳はれた人は未だ嘗て一人もございません。今より廿五年前私が大學生の時代に流行した家族合せの骨牌の内に辯護士花野卓藏と云ふのがあつた事を記憶して居りますが、これは云はずもがな花井博士を指してゐるのでありまして、當時已に、如何に世上に喧傳されてゐたかが判ります。爾來辯護士花井の名は三才の兒童すら知らぬ者なき狀態でありまして、花井と云へば直ちに辯護士を思ひ、辯護士と云へば花井博士を聯想する程有名であります。

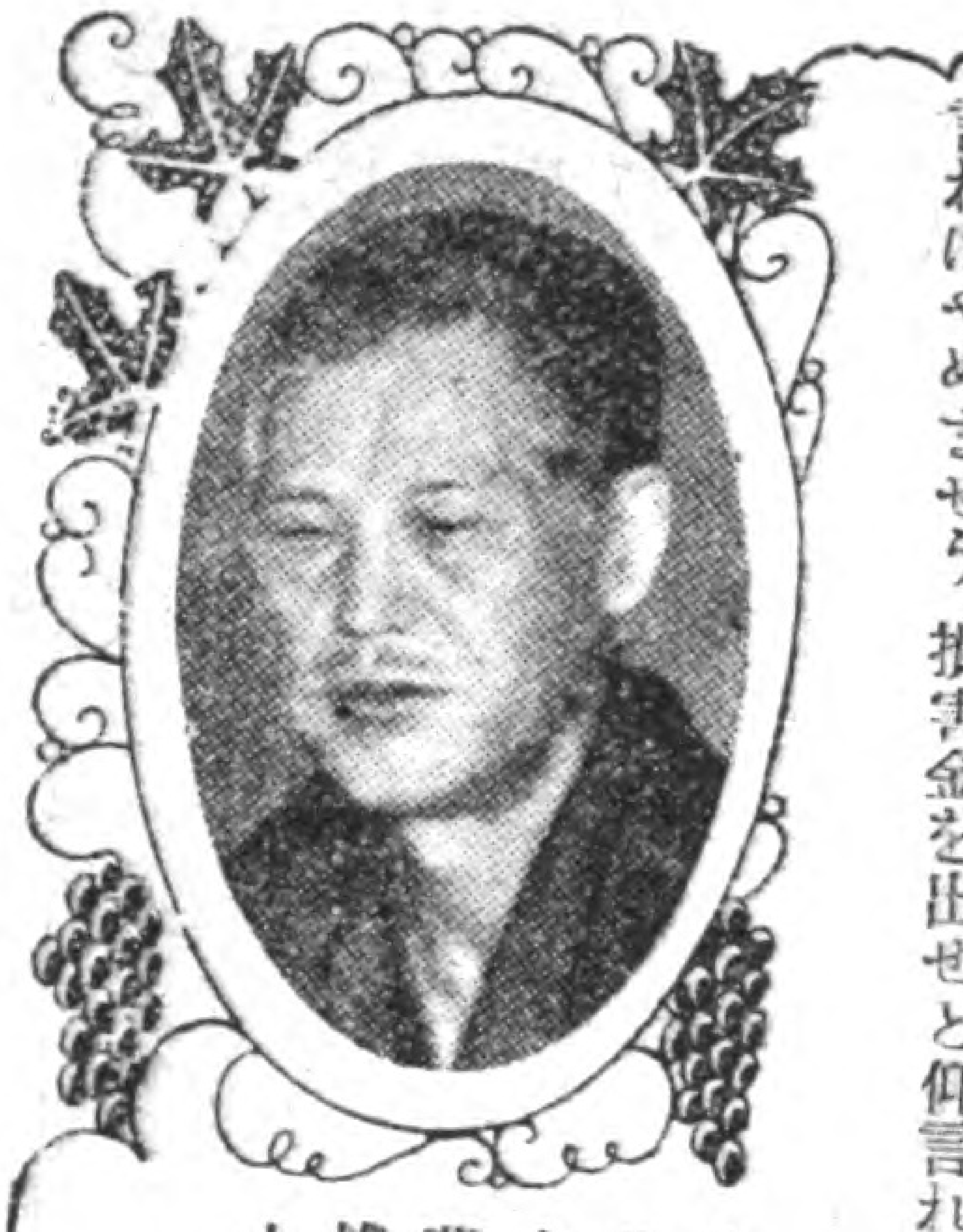
然し私共後輩とし此際考へなければならぬ事は何が博士をして斯く大成せしめたのであるか、此の點につき私の見る處を少しく申し上げて見たいと思ひます。御暑い時で御迷惑とは存じますが暫くの間御許しを願ひたい。

第一に博士は職務に非常に熱心であらせられました。私は今日まで博士と御一緒に、何十回となく辯護に參りましたが、博士は汽車の中でも能く記錄の調査を怠られなかつた。宿についても長旅の疲れを意とせず、博士は必ず午前一時二時迄も机に向つて研究してゐられると言ふ有樣であります。又如何なる小事件に對しても大事件に對すると同じく、全力を傾け眞摯な態度で辯護されるのでありました。實に職務に對する燃ゆるが如き此の熱誠、武士が戰場に於けるが如き緊張味に對しまして、私共は幾度か感嘆した次第でございます。

第二に博士は辯護を天職と心得、樂しみとしてゐられました。生活の爲の辯護、辯護を好む底の人は數多くありませうが、是を樂しみとしてゐる人は洵に稀であります。博士は少々位の風邪や下痢は辯論すれば直ぐに治るとの事であります。斯樣な事は私共には到底想像の出來ない境地と存じます。好レ之者、不レ如レ樂レ之者。と孔子が言つてゐますが博士の如き無念無想の境地は我我の理想とする所で、凡人の容易に到達する事の出來ない貴い境地であると存じます。

第三に博士は非常に責任觀念の強い方であります。それについては一つの挿話がご

ざいます。四十年の間に博士が取扱はれた事件は萬にも達して居ませう。その中で博士がたつた一度失敗された事があります。それは或刑事々件の上告を依頼されたが、事務員の不注意から上告趣意書の提出期間を過つて經過させた。博士はその事を事務員より聞きまして愕然色をなし、旅裝もとかず其の足で直に上告人（被告人）の住所地山形縣の片田舍へと急行されたのであります。博士は依頼者に一應の御詫を申された上『嘸かし御腹立ちの事と思ふ、この上は貴下の氣持の治る樣に存分にしてもらひたい。辯護士をやめろと仰言ればやめませう、損害金を出せと仰言れば

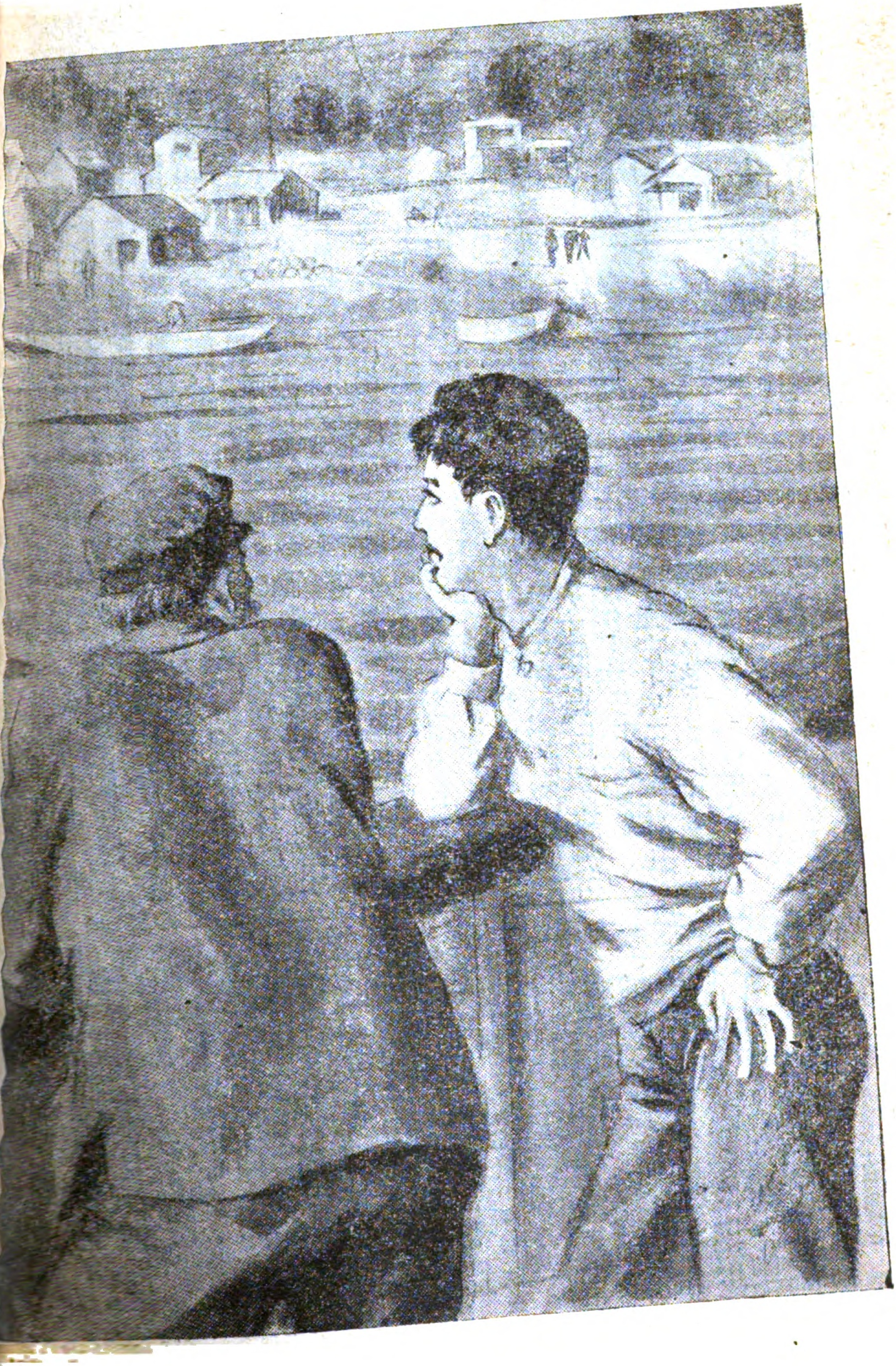


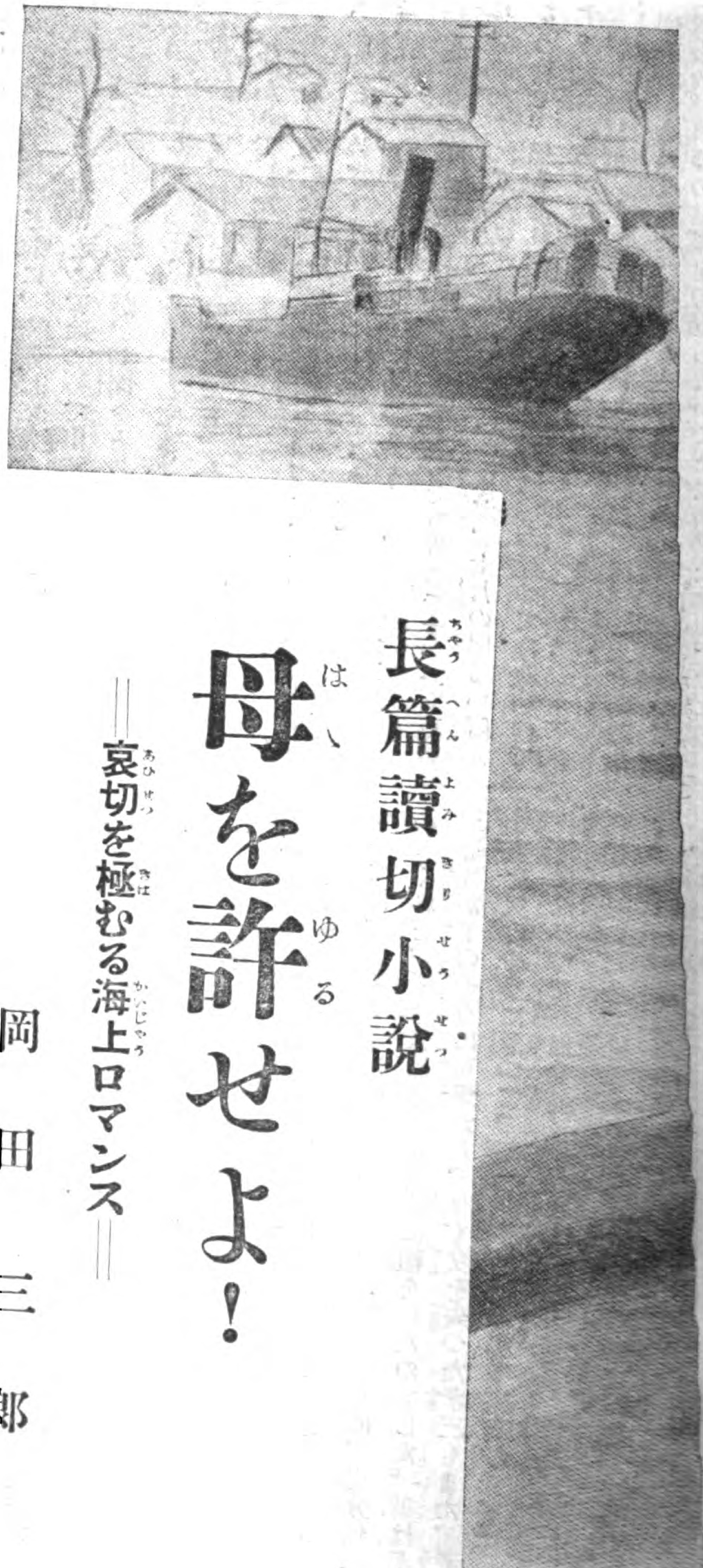
花井卓藏博士

夫れも出します』と誠意を籠めて話されました。所が依頼者の方では却て恐縮して『いやこれも運命です、どうか御氣に留めない樣に』と非常の歡待をしたとの事であります。更に博士のその頭腦の明晰な事は世間已に定評があるので今更此處に申すまでもありません。其推理力の透徹せる、其記憶力の旺盛なるは正に天下一品とでも申しませうか、博士は以上申した樣な長所を持たれて而も職務に熱心、一路精進せられたのでありまして、博士の今日あるは宜なるかなで御座います。博士の歩んで來られました長い道程の一擧手一投足は私共後進の大いに學ぶべき所であり、又辯護士界に於ける指南者として萬人の敬仰措く能はざる所であります。かくの如く博士は十年一日の如く人權擁護の爲め全努力を傾注されましたが、同時に他方面に於ては我國の立法上に偉大なる功績を顯はされたので御座います。御存じの如く數多い現行法中、博士の御手を煩はさぬものはないのであります。博士こそは眞に辯護士としての國寶であると申しましても敢て過言ではございません。羅馬の古賢が『人は法に生れ、法に活動し、法に死す』と云うてをりますが、わが花井博士こそは實に辯護士に生れ、辯護士として活動せられたのでありまして、どうか今後とも辯護士として終始一貫して頂きたかつたのでありますが今や辯護士界を去られたのは返す〴〵も遺憾の極みで我々法曹として云ひ知れぬ淋しさを感ずるのであります。然しながら博士は辯護士をやめられても全く辯護士界と絶縁されるのではなく、大に蘊蓄を傾けてこれ迄御取扱になつた大事件の辯論を整理編纂されるとの事でありまして、この過去の總決算は私共後進にとつて重大なる意義があると存じます。從て私共は此際寧ろ博士が辯護士界を去られるのを喜んで御送り致しませう。どうぞ博士におかせられましては、自重自愛益々邦家の爲御盡し下され、又私共の爲に引續き御指導御誘掖賜はる樣切に切に御願ひする次第でございます。

（法曹有志聯合主催花井博士招待會席上）

72　丹を許せよ！





長篇讀切小說

母を許せよ！

――哀切を極むる海上ロマンス――

岡田三郎

挿繪　野崎貞雄

一

およそ三十年前の、七月のことでした。北海道の、日本海に面した或る港、波しづかな防波堤内へ、今しもはひつて來たのは一隻のトロール船でした。ながい航海をつづけて來たことは、そのみすぼらしい外觀にも解るのでしたが、堂堂たる大汽船の碇泊する間を、彼女はすこしも臆する氣色なく、舳に波をたてて進みました。

が、灣内にはひつて、いきほひ船の進みが鈍くなるにつれ、索具に身を寄せながらいらだつて、唇を嚙みしめ、ぢつと陸

上に眼をこらす若者がゐました。彼は山路孝三と云ふ、二十歳の青年でした。

その港の町には、彼のたゞ一人の母親がゐるのでした。彼は半年の間、全然母親とは音信をなし得ない狀態にあつたのです。彼ばかりではありません。そのトロール船の乘組員ことごとくがさうでした。なぜと云つて、彼等は通信機關の設備を持たない絕海で漁業に從事してゐたからです。

やうやう半月ほど前に、南航して來た彼等は或る小さな漁村に船を寄せました。そこではじめて山路孝三は、母の住む港の町の大火を知りました。が、新聞をとる者さへまれなその漁村では、くはしいことを知らうとしても不可能でした。母の住む町名を云つて、村人に訊ねて見ても、みんなあやふやな返事をするばかりでした。

不安のうちになほ二週間の航海をつづけ、やつとのことで今ちやうど、めざす港に歸つて來たのでした。自分の家のある町は、遠くからでも孝三には解ります。うしろに切りたての赤土山を脊負つて、海岸まで段段に家が並んでゐるのです。が、古い家並の町だつた筈なのに、眞新しい家家が、七月の明るい陽光をうけて、然もそれが、ところどころにしか建つてゐないのです。大火のあつたのは六月でした。

他の船員達も、そちこちにかたまりあつては、陸上を眺めながら話しあひました。彼等も大半は、この港町に家を持つてゐました。火事の結果を心配しないことはありません。けれども彼等は、荒荒しい海上生活に馴れてゐるせゐか、驚きと云ふやうな感情を容易に起さない習慣になつてゐます。山路孝三は、これまで近海の漁業にはしばしば出ましたが、遠洋は最初の經驗でした。然も半年の間、母の安否も知ることの出來ないやうな境遇に身をおいたことは、嘗つてなかつたのです。ほかの人達が笑ひ半分聲たかだかと、陽氣に話しあつてゐるのに、孝三はたつた一人、索具にもたれて母の安否を氣づかひながら、陸上を眺めてゐるのでした。

その時、下からあがつて來たのは、皺のたるんだ赤黑い顏に、白い髭を生やした老人の水夫でした。

彼は陸上の廣大な燒跡町を、憂はしげにひとわたり眺めてから、孝三のそばへ寄つて來ました。

二人は無言で顏を見あはせました。

この老水夫は、獨身者の氣樂な身の上でしたが、かねがね孝三の母とも知合の仲でした。今度はじめて孝三が遠洋に出るについては、將來立派な一人前の船乘になれるやうに、充分仕込んでくれと、老水夫は孝三の母親に賴まれたのでした。彼は孝三を我が子のやうに可愛がり、早く父を失つた孝三もまた、老水夫を父のやうに思つて、船乘の修業をつんで來たのです。

港にはひつて燒跡を遠く眺めやつた老水夫も、孝三と同じく彼の母親のことが案ぜられました。が、强ひて元氣づけるやうに、笑ひながら云ふのでした。

「燒けたものは燒けたで、仕方がないさ。それに、燒けぶとり

と云ふこともあるんだし、……』

『焼けぶとりつて云つたつて、……』と、孝三も笑ひ出しました。『あんなけちくさいお茶屋ぢや、ふとるも痩せるもありやしない。』

『それもさうだなあ。』

二人は笑ひあひました。

孝三の母親は、身寄の男の子の手をかりて、近所の長屋相手の小さなお茶屋をやつてゐるのでした。

一時は陽氣に笑つても、孝三はぢき暗い顔になるのでした。

『お前、なんだな、……』と、老水夫は孝三の顔をのぞきこんで、冷かすやうに云ひました。『……きつとお前、おツ母のことばかりで心配してるんぢやねえな。八重坊のことも心配なんだらう？　どうだ？』

孝三は困惑したやうに薄笑ひを浮べましたが、日焼した顔にも赤みのさしたのが見えるのでした。

『図星をさされて、笑つてる奴があるか、ははははは！』と、老水夫も愉快さうに笑ひました。『……だが、この分だと、八重坊の家も焼けたな、きつと。家は焼けても、八重坊のとこなんさあ、それこそ焼けぶとりだ。親爺がなにしろ、大工と來てるからなあ。今頃は、飯くふ暇もないくらゐに、いそがしがつてるだらうよ。……』

なほ話しつづけようとしてゐるところへ、船長の胴間聲がきこえて來ました。

もう港の岸は眼の前になつてゐます。

『ぢや、なあ、俺がよく船長に頼んでやるから、あらかたきまりがついたら、お前だけ先に上陸するといいや。』

老水夫が去りがけに、親切に云つてくれるのでした。

『頼みますよ。』

孝三も元氣になつて、自分の仕事の持場につきました。

二

それでも孝三が上陸することの出來たのは、夕暮に近い頃でした。

港から遠望しては、それほどとも思はれませんでしたが、實際の町にはひつて見ると、大火災の慘狀がまのあたりに思ひ浮べられるくらゐでした。港隨一の繁華な商業中心地帶は、海の方から見たのでは、石造や煉瓦の建築物が立ち並んでゐるので、焼跡の感じはなかつたのです。來て見れば、みんな内部は焼け落ちて、窓々はがらんどう、焼けはじけた壁だけが、わづかに復活した、暗い街燈に照らされて、廢墟の如く立つてゐるのです。名だたる銀行、郵便局、大商店、みなさうでした。なかには既に再建築にとりかかつてゐるのもありましたけれども、多くはまだ焼跡の整理すら完全には出來てゐませんでした。

わづか半年見ないうちに、かうまでも慘ましく變つた港町の姿に、孝三は深い感慨を抱かずにはゐられませんでした。有爲轉變と云ふのは、このことだと思ひました。それと同時に、あ

らたに母親のことが氣づかはしくなりました。外のどんなものが、有爲轉變の運命によつて變らうとも、自分の母親だけは、無事であつてくれと心に念じながら、彼は次第に大通から場末の方へと歩みを早めて行きました。

どこまで行つても、燒跡ばかりです。ところどころに、バラツクの灯が見えはしても、それさへ荒野の一軒家のやうに、荒涼たる感じを與へるばかりです。どこが自分の家のあつた町か、それすら孝三には見當がつきませんでした。

やうやうのことで、その方角をさがしあてました。が、行つて見れば、その邊一帶は、まだ燒跡の灰も掻かれてゐない始末です。立退先の札の立つてゐるところもありましたが、孝三のところには何も見當りませんでした。

この上は、普段から親しくつきあつてゐる八重子の家を尋ねて、樣子をきく外はありません。ことによつたら、母親は、八重子の家の世話になつてゐるのではないかと、彼は無理にも氣をひきたてて路を急ぎました。

或る十字路のところへ出ると、そこはバラックながら幾軒かの家が並んで、店の電燈もあかるく、商賣をしてゐました。たしか八重子の家は、その十字路から少し行つたところにあつた筈です。大工のことだから、自分の家ぐらゐ、手まはしよく建ててゐるだらうと、心強く思ひながら行つて見ると、案の定、一軒の急造の平家があつて、表の硝子戸ごしに、細工場から、その奥の、食事をしてゐる家内の有樣まで見えました。

躊躇せずに孝三は、硝子戸をあけてはひつて行きました。土間を通つて、遠慮なく奥の茶の間の上框の障子をあけました。

『今歸つて來ましたよ。……火事で大變でしたね。』

孝三は元氣よく挨拶したのに、大工の家内三人は、氣まづさうに互に顏を見あはしたきり、誰一人挨拶をかへさうともしないで、默つて食事をつづけるのでした。

――をかしいなあ。どうしたんだらう？ と、孝三は不思議に思ひました。それに、母親の姿が見えないので、ますます氣がかりになつて來ました。

『それはさうと、おツ母はどうしたでせう？』

たまりかねて孝三は訊きました。

『あ、さうだ、……おツ母のことだが、……』と、しぶりながらも、やうやく初めて口を開いたのは、八重子の父親でした。

『そこぢや話も出來ない。まあこつちへあがんな。』

かう云つて八重子の父親は、自分もちやうど食事を終つたところで、餉臺からはなれました。

が、孝三が上へあがつて、一刻も早く母親のことを訊かうと構へるのに、八重子の父親は、急に何か思ひだしたやうに、柱の時計を見て、そはそはと腰を浮かしかけるのです。

『すつかり忘れてゐた。棟梁のところへ行かなくちやならないんだ。……ぢや、お前からよく話してやつてくんなよ。』

立ちあがりながら、彼は女房に眼まぜをしました。女房は苦

い顔をしましたが、そんな事にはお構ひなく、彼は逃げるやうに、さつさと細工場の方へ出て行つてしまひました。出て行つたかと思ふと、表の方から呼ぶ聲がしました。

『八重子！　八重子ー』

呼ばれた八重子は、箸をおくとすぐに立ちあがりました。さうして、孝三の方へは振りむきもしないで、行つてしまふのです。孝三がはじめはひつて來た時、たつた一度、それもほんのちらつと顔を見あつたきりで、あとは始終うつむきがちに食事をしてゐた八重子でした。

あれほど心を許しあつた仲だのに、――勿論兩親もそのことは承知してゐるのです、――何も今更はづかしいやうなそぶりを見せる必要はないのでした。これまでに、親の前でも、孝三と八重子は、遠慮なくうちとけあつてゐたのでした。それだのに、急にそぶりが變つたのです。何か變つた事情があるのに違ひないと、早くも孝三は察しました。胸騒ぎが起りました。

みんな食事が濟んだあとの飾臺を、傍におしやつて、女房はやつと孝三の方へ向きなほりました。

『孝三さん、あんたは、今度の火事のことは、なんにも知らないの？』煙管をとりあげながら、女房はきりだしました。

『知らないんです。ただ、大火があつたつてことしか、……』

『とても大變な大火事でしたよ。見て來たでせうけれど、目拔の街はみんな燒けてしまふ。怪我人なんか、たいしたものよ。

人死もあつたんですからね。なにしろ寢入端の夜の一時でしたよ、火のあがつたのは。そこへ持つて來て、宵のうちからの物凄い風でせう。おまけに六月にはひつて、一滴も雨と云ふものが降らなかつたのさ。なにもかも、からからに乾ききつてゐるところへ、おあつらひむきの大風。ひとたまりもないわ。蒸氣ポンプが幾臺あつたつて、あんな火事になつちや、役にたつもんぢやないつてさ。八百戸よ。町の半分、それもいいところばかり、……』

『ひどい事になりましたね。』

『とても、それやあ、なんて云つてお話していいか、……まあ、云つて見れば、戰爭みたいな生き死にの騷ぎだつたのよ。……それほどの大火事のもとが、一體なんだと思ふの、孝三さん、……』云ひかけて大工の女房は、ちつと孝三を見つめました。『……その大火の火元は、どこだつたと思ふの？』

云はれて、孝三は思はずぎくりとしました。またしても胸騷ぎが烈しくするのです。

『びつくりしちや、いけませんよ、孝三さん！　火元はあんたの家だつたのさ。誰もそれや、火事を出さうなんて思ふものはないけれど……つまりはまあ、運が悪いとでも云ふのか、何しろ最初は、わづか竈の下の小さな火が元で、町の半分、八百戸も灰にしてしまふと云ふんだからね、過ちとは云ひながら、怖ろしいことをしでかしたわけなんですよ。あたりまへの人間なら、誰だつて、世間様に申譯がないと思ふのは無理もないことさ。だもんだから、……』

『それで、……』と、孝三は眼をぎらぎらさせながら、せつかちに、生唾をごくりとのみこみました。『……それで、……どうかしたんですか、うちのおッ母……』

『可哀想にねえ、氣が違つてしまつたんですよ。』

『氣が違つて、それからどうしたんです？　今は、どこにゐるんです？』

『それがね、行方不明なのよ。どこへ行つてしまつたものか、かいくれ解らないんです。火事の最中に、どことかの丘の上で、髮ふりみだして、手を振つたり足を振つたりしちや、げらげら笑つてゐるのを見たと云ふ話もきいたけれど、それも本當か嘘か解らないし、……とにかく、うちでも隨分探したのよ。どこそこの燒跡から死體が出たときけば、すぐに驅けつけて行つて見るけど、みんな違ふのさ。あんたが歸つて來たら、どんなに賴み甲斐のない奴だと恨まれるか知れないと思つて、足を棒のやうにして探したけれど……』

『仙藏はどうしたんです？』

仙藏と云ふのは、孝三の母親に手傳つてゐた、身寄の男の子のことです。

『仙藏さんは、火事がこはいつて、村へ歸つてしまひましたよ。火事になるとすぐに、あんたのおッ母さんとは、はぐれてしまつたんですつて。』

孝三は深い溜息をつくと、ちつとうなだれてしまひました。

三

『久し振だから、今夜はゆつくりとまつて行つてもらひたいんだけれど、何しろ火事匆々で、バラックだし、狹い上に寢道具も足りないもんでね、……』

大工の女房は、それとなしに、孝三に早く歸つてくれるやうにと、ほのめかすのでした。さう云はれると、孝三も取付端がなく、歸支度をはじめましたが、八重子がどこかへ行つたきり、姿を見せないのが不滿でなりませんでした。

『八重ちやんは、どこへ行つたんです？』靴を穿きながら、きいて見ました。

『さあ、……どこへ行つたんでせう。何か用を云ひつけられて、出て行つたらしいんですがね。』

もう少し待つてゐたらいいでせうと、云つてもくれないのでした。

――どうしてかう、皆が皆、冷淡になつたのか？　と、孝三は表に出ながら考へました。彼の母親の過失がもとで、町の大半が烏有に歸してしまつたのです。そんなことから恨みを買つて、町全體の人人が、彼の一家を呪つてゐるのかも知れません。けれども、彼の母親は、おのれの罪過のために、發狂して行方不明になつたと云ふではありませんか。それだけで既に、母親の罪過はつぐなはれてもいいではないでせうか。ましてや八重子は、孝三と許しあつた仲です。かう云ふ場合にこそ、不幸な彼を慰める役目を勤めなければならなかつた筈です。

大工の家を出た孝三は、憂鬱の胸を抱いてとぼとぼと行きかけました。

ふと、家の横手の暗がりに、人影がさしました。眼をとめて見ると、浴衣姿の女のやうでした。思はず孝三は駈けよりました。

『八重ちやんぢやないか！』

駈けよりながら、彼は聲をかけました。が、呼ばれた影は、ものも云はずに、向ふの裏口の方へ逃げて行かうとするのです。彼は突進しました。女の袖を掴みました。顏を見ればたしかに八重子です。

『どうして逃げるの、八重ちやん！』

半分は怒り聲で、孝三はなじりました。

『はなしてよ！　はなしてよ！』

夢中で八重子は、袖を振りはらふと、裏口へ駈けこんでしまひました。

――八重子まで、俺を裏切つたのか！

胸をかきむしられるやうな思ひで、彼は暗がりの燒跡に、どつかり尻を落しました。――發狂した母親は、行方不明になつてしまつた。心を許しあつた八重子には裏切られた。よろしい、どうしてやるか、今に見てゐるがいい！

彼は心に堅く復讐を誓つて、決然と立ちあがりました。

會ひたいと思つてゐた友達もあつたのですが、もう今では、誰に

にも會ひたくありませんでした。寧ろ人に顔を見られるのさへ、厭しい感じがしました。そのまま悄然と、彼は船に歸りました。船員達は誰もゐませんでした。ランプもつけない暗い、狹くるしい室に、彼は毛布をかぶつて寢ました。

四

夜なか頃、孝三を我子のやうに可愛がつてゐる、かの老水夫が歸つて來ました。彼は船室にはひると、ランプに點燈しました。

『うん、歸つて來てゐるな！　さうだらうと思つた、……可哀想に！』

毛布をかぶつて寢てゐる孝三を見ると、彼は獨り語を云つて、いたましさうに溜息を吐きました。

孝三は眠つてゐるのではありませんでした。毛布をはいで起きあがりました。



『眼をさましてゐたのか。……俺ものこらず、話はきいて來たよ。氣の毒なことになつたもんだ！』

老水夫は慰め顔に、孝三の横へ來て腰をかけました。

『墓參りをして來たかね？……それとも今日は、遲くつて駄目だつたか？』

かう云はれて孝三は、合點のいかぬ顏で、まじ〳〵と老水夫を見まもりました。

『墓参りつて、誰の墓参りのこと？』

『誰の墓参りつて、きまつてるぢやねえか！　お前のおッ母の墓参りよ！』

孝三は呆氣にとられました。

『なんだ！　お前まだ知らねえのか？……お前、八重子の家へ行かなかつたのか？』

『行つたよ。』

『それでゐて、おッ母の話をきかなかつたのか？』

『聞くには聞いたが、氣が違つて、行方不明になつたつて、それだけのことしか、……だが、本當のことか？　おッ母が死んだなんて！』

孝三は思はず老水夫の腕をつかんで、せきたてるのでした。

『誰が噓のことなんか云ふものか。……さうか、あの大工の野郎、不人情な奴だなあ！　本來ならば、お前のおッ母の面倒を見てやらなければならねえ筈なんだ。そいつを、まるでお前のおッ母が野たれ死にするのを、見て見ねえ振するなんて、犬畜生だ。それだもんで、さすがに良心に恥ぢて、お前に本當の事を云へなかつたんだ。……それぢや、俺が町で聞いて來た話を、聞かせてやらう。……』



老水夫の話によれば、孝三の母親が氣が違つて行方不明になつたと云ふのは噓で、事實は發狂の果、誰も構つてくれるもの

はなく、大火後三四日すぎて、公園の裏側の鐵柵に無殘な死體となつて發見されたのですが、誰も引取人がないので、市役所では行路病者として無縁墓地に假埋葬したと云ふのでした。

――なんたることだらう！

泣くにも泣けず、孝三は兩手に顏を蔽うて、齒をくひしばり、心の苦悶をおしこらへました。

――きつと奴等に復讐してやるぞ！

暫くたつて、孝三は決心したやうに、きつと顏をあげました。

翌日孝三は、老水夫と一緒に上陸しました。市役所に行つて、手續をすまし、假埋葬の母親の死體を、共同墓地の方へ改葬しました。香花をたむけ、ねんごろに供養もしました。

墓地からの歸途、孝三はつくづくとこの町全體を呪はしく思ひました。自分の母親を、見殺しにした町の人間達の呼吸する空氣を、彼はおなじやうに呼吸するには堪へられませんでした。この町にも、この港にも、一刻もとどまつてゐられない氣持にさせられました。それには、八重子のこともあつたのです。自分を裏切つた女の住む町に、その港に、一分間もぢつとしてゐられない若者のせつぱ詰つた心持でした。

『今日にもこの港から出て行きたいんだが、……貨物船でも客船でもいいから、乘せてくれる船がないかなあ！』

溜息まじりに孝三が云ふのを、老水夫は聞いて、尤もと思ひました。

『安心してゐるがいい。俺が探してやるから。港には、俺の仲間がどつさりゐるんだ。これから戻つて、心當りの船をきいて見よう。』

親切な老水夫の言葉に孝三は力を得て、ともども急いで、港に歸りました。

老水夫の請合つたとほり、その日のうちに、孝三を船員に採用する商船を見つけることが出來ました。或る大商船會社の近海航路の汽船でした。

翌日の夕方、汽船は出港することになりました。その甲板上に孝三は、恨多い故郷の町に悲愴な訣別のまなざしを與へながら、他日を期する決心を強く堅めました。

五

その日から二十年の星霜は過ぎました。

二十年前ほとんど名もなき一介の水夫にすぎなかつた山路孝三は、努力奮闘の結果、今は一船を支配する船長とまでなりました。

故郷には、悲慘な最期をとげた哀れな母親の墓があるのでした。あの時彼の母親を見殺しにした港町の人人の、誰が墓參りをして香花をたむけてくれませうか！ ただ一人、あの時孝三を慰めてくれた老水夫は、港にはひる毎に、きつと墓參りすると、その時時たよりはありましたが、いつからとなく消息は絶えてしまひました。その後船員達の話で、既に鬼籍にはひつた

ことを知りました。さうとすれば、孝三の外には、誰ひとり母の墓に詣でるものはあらうとも思はれません。

けれども孝三は、二十年間、故郷の港に歸りませんでした。それには、ずつと外國航路についてゐたためもあります。が、彼としては、出來るだけ北海道の方へまはる船を、最初から避けるやうにもしてゐたのです。

たうとう避けられない機會に遭遇しました。内國航路の船長に任命されたのです。彼も今は、齢四十に達しました。艱難辛苦によつて、彼の精神は鍛錬され、立派な人格の所有者となり、すべての船員達に尊敬される身分となりました。ただ、どことなし、彼は憂鬱の人に見えるのでした。言葉すくなく、額に深く皺をきざみ、射るやうな鋭い眼で人を凝視するのでした。一面に慈愛があつて、思ひやりも深く、それだけ船員達に慕はれるのでしたが、他の一面には、鐵の如き嚴格冷徹の强固たる意志が、まざまざと現はれて、容易に人を近づけないやうなところがあるのでした。

さて、船は港にはひりました。二十年前とは、何と云ふ變りやうでせう！　大建築物は港に沿うて建ち並び、馳せちがふ汽車の煤煙、工場の煤煙、山の方にまで人家はのびて、繁榮の有様は一見しても解るのでした。

呪ふべき町は、斯くの如くに繁華をきはめてゐるのに、彼の一家はどうなつたでせう！　一家と名のつくものは、もはや

何處にも發見されないのです。彼こそは天涯の孤獨人です。二十年間陸上の生活を彼はしないのです。家も持たないのです。妻も持たないのです。殘されたものと云つては、ただ哀れな母の墓だけです。

何をおいても、山路船長は、墓參のために上陸しなければなりませんでした。晝間でも、自動車で墓地の下まで行きました。秋でした。叢には蟲が啼いてゐました。さだめし墓は草に埋れてゐるだらうと、悲しく思ひながら登つて行きました。

どうしたことでせう！　めざす墓の周圍には、草一つなく、然も最近に誰か參つたらしいのです。線香のとぼれた跡もまあたらしく、たむけられた女郎花の黄色い色もまだ鮮かではありませんか。

不審に思ひながらも、船長は香花をたむけ、合掌禮拜して歸途につきました。

船に歸つても、墓參の主のことが、氣がかりでなりませんでした。が、間もなくその疑問の解ける日が來ました。

六

その港は航路の終點にあたつてゐました。次の航海に出發するまでには、まだ三四日の間がありました。

山路船長は、一度墓參に上陸したきり、あとは毎日船室に閉ぢこもつたきりで、時たま甲板に散歩に出るくらゐのものでした。

或日のこと、鬱はらしに甲板に出て見ると、船員達が一ケ所に群つて、商人を冷かしてゐるのでした。碇泊中の汽船をまはつて歩く商人達です。北海道特產のさまざまな土產物を並べたり、或は菓子や日用品等を並べたりして、賣つてゐるのです。

船長も行つて見ました。

ふと、船長は、硝子蓋の菓子箱を四つ五つ前に並べて、甲板の上に横坐りに坐つてゐる十四五歲の少年に眼をとめました。肘きりの破れたシャツに、やはり裾のちぎれたヅボン、頭髮をのばしたみすぼらしい少年でしたが、顏だちは整つて、殊に眼はぱつちりし、口元は、上唇がちよつと上を向いて、可愛らしいのです。

見れば見るほど、不思議にも船長の眼は、その少年に吸ひつけられるのでした。

『この男の子は、始終船へ來るのかね？』と、船長は傍の船員に訊いて見ました。

『ええ、始終來るんです。二三年前からの顏馴染です。船へ乘るのが大好きらしいんで、……なんでも、大きくなつたら船乘になるんだつて、ちびのくせに威張つてますよ。』船員は笑ひながら說明してきかすのでした。

少年は自分の噂をしてゐるのを聞きつけて、船長の方を熱心に見あげるのでした。少年の眼は、あこがれに輝きました。

船長は少年の前にしやがみました。

『船乘になりたいんだつてね、君は。……どうしてだね？』

船長に問ひかけられて、少年は元氣よく、臆せずに答へました。
『僕のおッ母の知つてる人が、船乗なんです。』
山路船長の胸は、なぜか怪しくときめいて來ました。
『ふうん。君のお母さんの知つてる人が、船乗だもんで、それで。……なるほどさうか。……君は、お母さんきりないの？お父さんは？』
『僕のちつちやい時、死んぢやつたんだつて。……今はおッ母と二人きりなんです。』
『感心にしかし、小さいなりで商賣なんかして、えらいね。菓子は殘らず買つてあげよう。』
船長は全部の菓子を買取つて、船員達におごつてやりました。
『そんなに船が好きなら、僕の部屋へおいで。外國の港の寫眞だの、いろんな面白いものを見せてあげるから。』
少年はとびたつ程に喜びました。菓子は全部買つて貰つた上に、あこがれの船長室に招待されたのです。
が、船長には一つの思惑があつたのです。自分の部屋へ少年を連れて行くと、紅茶をいれたり、菓子を出したりしながら、おもむろに質問をはじめました。
『君の名前はなんと云ふの？』
『一郎と云ふんです。』
『苗字は？』
『植村。』
それを聞くと、船長は、紅茶を茶碗に注ぎかけてゐた手が、ぶるぶると顫へました。
『お母さんの名前は？』
『八重つてんです。』
若し少年が、注意して見てゐたなら、船長の顔が蒼ざめ、脣が痙攣したやうにひきつつたのを見つけたでせう。けれども少年には、少しも氣がつきませんでした。
少年の瓜實顔の顔だちと、ぱつちりした眼と、可愛らしい脣とが、少女時代の八重子に餘りにも似てゐることに氣づいた船長は、それとなしに少年を船長室に誘ひいれて質問したのでした。
少年の苗字は植村。八重子の姓も植村です。察するところ、一人娘の八重子は入婿をとつたものと思はれます。
次次に船長は問ひをすすめました。少年はてきぱきと答へました。少年には祖父母にあたる大工夫妻は、とうに死んでゐました。少年の父も若くして死にました。殘つたのは八重子とその子の一郎、二人きりです。八重子は賃仕事をし、一郎には港の船船にあきなひをさせ、母子二人は辛うじて生活をたててゐるのでした。
――今こそ思ひ知つたであらう！と、山路船長は、二十年前に彼を裏切つた八重子の姿を思ひ起しながら、心に云ひました。哀れな母親を見殺しにした植村一家に對して、あらたな憎惡を燃えたたせるのでした。

その時扉にノックの音がしました。ボーイでした。
『植村と云ふ人が、船長に面會したいと云つて來てゐます。』
頭上に雷鳴が起つたとしても、それほどに船長は驚かなかつたでせう。颱風激浪にさへ動ぜぬ彼でしたが、植村と云ふ名には、然もその當人が、彼を訪ねて來たと云ふには、胸の鼓動が亂調子にならずにはゐませんでした。
『女の人か?』と、辛うじて彼は問ひかへしました。
『はい、さうです。』
『それぢや、きつと、この少年のお母さんだらう。』と、船長はやうやく氣を落つけて、笑ひながら、今度は一郎に云ひました。『僕に用事があるわけぢやないんだ。きつと何かで、君を迎へに來たんだと思ふから、早く歸りたまへ。』
一郎は怪訝さうにしてはゐましたが、云はれるままに船長室を出てゆきました。
『君はかう云つてくれたまへ。』と、船長はボーイに云ふのです。『植村と云ふやうな女の人は知らないからと、……』
『でも、船長の名前を云ふんです。山路孝三さんとはつきり云ふんです。』
『いや! なんと云つても、知らないからと云つて、追ひかへしてやれ!』
遽かに烈しい怒り聲で、船長は云ふのです。ボーイはびつくりして出て行きました。
一人きりになると、山路船長は立ちあがつて、腕ぐみしながら、齒をかみしめ、ぢつと一點を凝視しました。出て行つて、八重子を思ふさま面罵してやりたい心を、彼はこらへにこらへてゐたのです。

七

罵り喚く聲がきこえました。つづいて、ばたばたと駈けて來る音がきこえました。
船長室の扉が、ノックもなく開けられました。一郎少年があけたのです。そこへ、ボーイをおしのけながら現はれたのは、貧苦にやつれた年増女でした。
なんと云ふ變りやうでせう! 山路船長のはりつめた心も、一時にゆるみました。彼の胸深く印象をとどめてゐたのは、十八歳の八重子でした。今は三十幾歳の彼女です。髪は油氣のない束ね髪でした。小皺がよつてゐます。着物は粗末な綿服です。が、人懐かしさうな、ぱつちりした眼と、まだ色の褪せない唇とには、昔のおもかげが殘つてゐました。
八重子は最初、父親の前へひきだされた子供のやうに、おどおどしながら山路船長を見てゐましたが、何をするのかと思ふ間もなく、船長の足元へぺつたりと坐つて、床の敷物に顏のつくほどお辭儀をするのでした。さうして今度顏をあげた時には、眼から頬から、くしやくしやに涙で濡れてゐました。
彼女としては、悲しくもあらうし、嬉しくもあらう。泣きながら、彼女は明るい微笑を頬に浮べてゐました。



山路は依然として、腕を組んだまゝ、立つてゐました。彼も今はうなだれて、涙ぐんでゐました。一郎は母親の横に、不思議な顏で立つてゐました。

『こんなところへ、のめ〳〵と出て來られた義理ではないんですけれど、……』八重子は床に手をついて、話しはじめました。『今度船長さんになつて、この船に乘つておいでになつたことが解つたものですから、一言お祝の言葉を申上げたいと思ひまして。……二三日前に、墓地の方へおいでになつたお姿を、たしかに見かけたと云ふ人がありましたんです。それを、今日ききまして、若しやと思つて、お墓へ行つて見ますと、私の外は誰一人、……から云ひますと、何か自慢のやうに聞えるかも知れませんけれど、そんな譯ではないんです。罪ほろぼしのためにずつと私一人、お墓まゐりをつづけてゐましたんです。今日行つて見ますと、新しいお花があがつてゐるので、それでは確かに、孝三さんがいらしたんだと、私どれほど嬉しかつたか知れません。早速汽船會社の方へ問ひ合せましたら……』

云ひかけて八重子は涙をぬぐひました。

山路はあの日、墓參に行つて、身寄も何もない筈の墓に、誰が香花をたむけるのかと不審に思つたのが、やつと解つて來ました。彼の心は次第に柔ぎかけるのでしたが、最初彼の母親が野たれ死して、市役所から行路病者扱にされて無緣墓地に葬られた時、知らぬ顏してゐた八重子の兩親のことを思ふと、なかなか憎惡は消えなかつたのでした。

『云ふことが濟んだら、歸つてもらひませう。私はこれから、用事があるんですから。』

冷淡に云ふと、山路は机に向つて腰をかけました。

『はい、もう、ぢきに、……』

八重子は取付端もなくおどおどと、立ちかけましたが、恐る恐る云ふのでした。

『あのお願ひがございますんですが、……』

『なんです？』

『この、一郎のことですが、是非船乘になりたいと云ふんで、あなたの船でボーイからでも仕上げて頂けませんでせうか？』

『今はあきがないから駄目です。』

あまりにぶつきら棒に斷られて、八重子は袖で眼を蔽ひ、泣きじやくりました。

『では、もう一つお願ひがございます。私を許して下さる譯にはいきませんでせうか？』

顏を蔽うたまゝの涙聲でした。

山路船長は椅子から立ちました。八重子にも一郎にも一瞥も與へずに、室を出ました。

『お歸んなさい！』

室を出てから振りかへつて、ただ一語嚴然と云ひすてるなり、向ふへ行つてしまひました。

八

翌日山路船長の船は、歸航の途につきました。築港を出て、岬をかはして、いよいよ沖合へ出た時です。下の方が騒騒しいので、船橋にゐた船長は、何かと思つて見ると、一人の少年が、荒くれの船員にひきたてられて來るのでした。

船橋にひきたてられて來る少年を見ると、昨日の一郎でした。彼は築港にゐる間に巧みに船内にかくれて、船が沖へ出てから顏を出したのでした。

「船長さん、どうか僕をボーイに使つてやつて下さい！」一郎は哀願するのでした。

昨日はじめて見た時から、船長は一郎を愛らしく思つてゐたのです。八重子に頼まれた時、承諾を與へてもよかつたのですが、これが、昔、自分を裏切つた八重子の子供かと思ふと、素直に承諾する氣にもなれず、すげなく斷つたのでした。

「お母さんには話して來たのか？」と、船長は優しく問ひました。

「いいえ。船へ乘る前に、郵便を出して來ました。」

「なぜ郵便なんかで、……」

「解ると、きつととめられるんです。昨日あれから、僕ずゐぶんせがんだんだけど、おツ母は、とても船長さんは許してくれないから、諦めろ諦めろと云つてゐたんです。」

「よろしい！　それぢや、一生懸命に働くんだよ！」

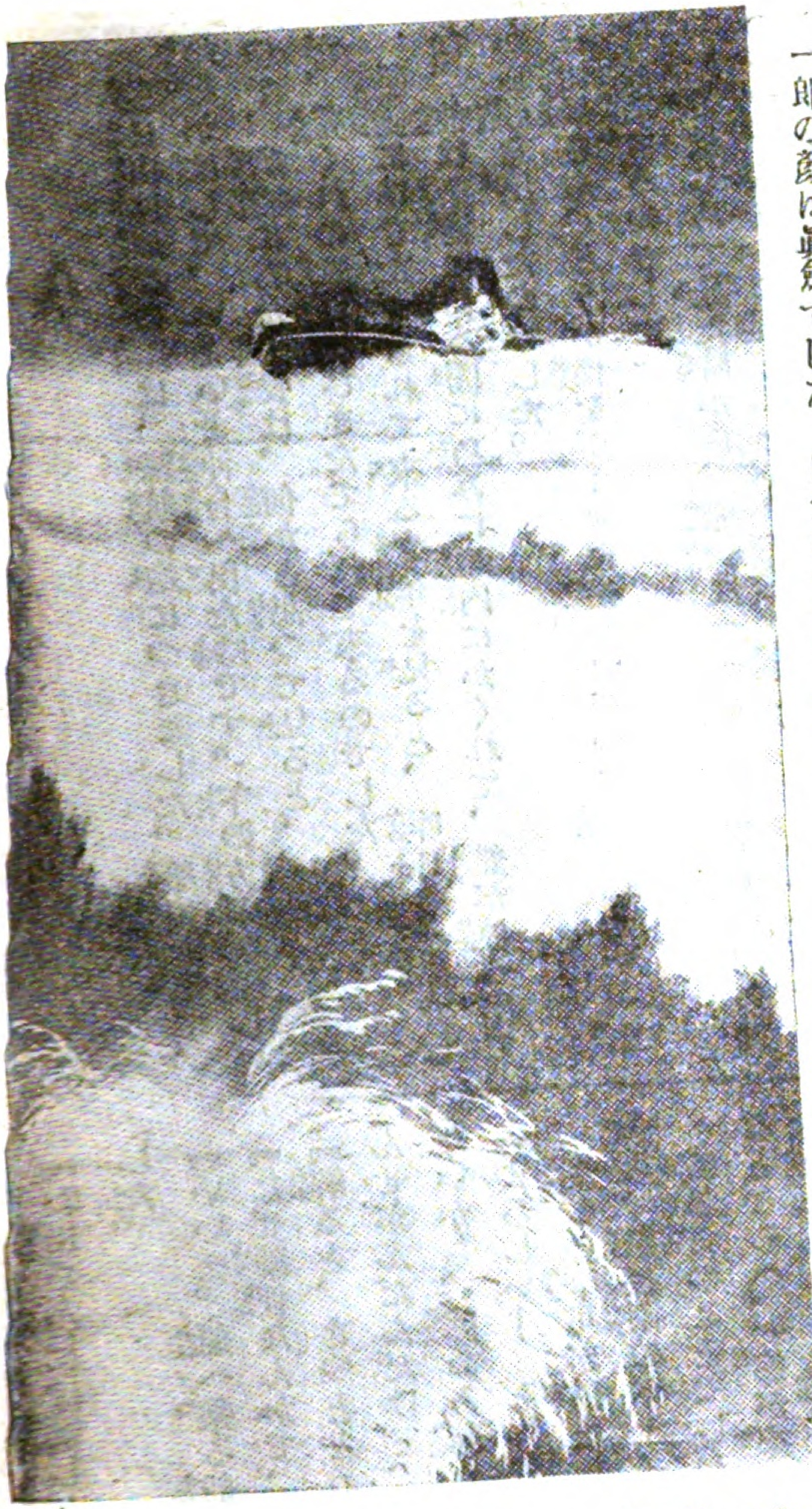
船長の許可が出ました。一郎は雀躍して喜びました。その日から、船長附のボーイとなつて、陰日向なく働きました。

或る日のことでした。船長が自室で晝食後の休憩をとつてゐるところへ、一郎が來て、あらたまつたやうに質問するのです。

「船長さんのお母さんは、火事で死んだつて本當ですか？」

船長は古疵にさはられるやうに苦い顏をしましたが、すぐに面を柔げました。

『誰にそんなことをきいた？』
『誰と云ふことはないんですが。……それから、うちのおッ母は、船長さんの嫁さんになる筈だつたつて、本當のことですか？』
『そんな事は、今更どうでもいいんだ。もう二十年も前の話だからね。』
『だけど、船長さんは、永久にうちのおッ母を憎んでゐるんだと、船の人達はみんな云つてゐます。どうして憎むんですか？』
一郎の顏は眞劍でした。自分の母を憎んだりする者は、たとひ船長だらうと、許してはおけないと云ふ樣子が見えました。
そこで船長は懇懇と、二十年前の大火の時の物語をしてきかせました。
『若しも君のお母さんが、氣が違つた揚句にそんな野たれ死をしたり、引取人もない行路病者にされたりしたら、君はどんな氣持になる？』
感動しやすい一郎は、淚ぐんで、物も云へませんでした。
『君のおぢいさんおばあさんに當る人達は、私の母がそんな目に會つてゐるのに、知らん顏をしてゐたんだ。おまけに、私に對する約束を反古にしてしまつたんだ。……だが、みんな過ぎ去つたことだ。殊に君なんかの、まだ生れない先の出來事だ。關係がないんだから、そんな事は考へないで、仕事を眞面目にやつたがいい。』



『でも、船長さんは、うちのおッ母を許してくれるんですか、くれないんですか？』
『君はどう思ふね？　許すのが當然か、許さないのが當然か？』
『許してやつて下さい！　どうか、許してやつて下さい！』
氣の狂つたやうに云つて、一郎は床に跪き、船長に哀願するのでした。



『そんなことは、どうだつていい。さあ、まだ晝飯前だらう。早く行つて食べるんだ！』

一郎を促し立てて、一緒に室を出ると、船長ひとり上甲板へのぼつて行くのでした。

九

それ以來、一郎はますます熱心に勤務するやうになりました。母のための贖罪と云つた敬虔な氣持でした。二年目には、水夫になりました。口數少く、それでゐていつも、人の困難とする仕事を、率先して引受ける男らしい勇氣を持つてゐました。船長にはことの外愛されました。

が、あの時きり、一郎は母親のことを船長に向つて一言も云はないのでした。母親を許してくれるやうに哀願することも、なくなりました。一層無口になりました。船長は時折見てゐて、いぢらしくなることもありました。

ちやうど、一郎が船に乗込むやうになつてから、三年目の秋でした。その船は南の方から、太平洋沿岸を北航してゐました。

連日天候險惡で、海上は荒れつゞけました。金華山沖にさしかかつた時には、いよいよ颱風の圏内にはひつたのです。危險には充分警戒してゐたのですが、如何ともすることは出來ませ

んでした。激浪に加へるに濃霧です。命とたのむ推進機は破壊されました。風浪に流されて坐洲する結果に立至つたのです。

夜が明けると、嵐は少し和ぎましたが、激浪は猶ほ物凄く船體を洗ひ、刻刻と危険に瀕するのです。貨物船でしたから、乘客はありませんでしたが、それにしても乘組員の生命を救はなければなりません。船長の憂慮はいかばかりだつたでせう。海岸は眼前に見えますが、船と岸との中間に並列する岩に噛みつき砕ける浪は、到底救助船を近づけないのです。

その時、傾きかけた船上から、突如として海に飛び込んだものがありました。彼は激浪と戰ひながら、岩のある方面を避けて、岸へ岸へと向つて行くのです。

『植村だ！』

『植村！　しつかり！』

喚聲が起りました。

植村一郎でした。一郎の腰には細縄が結びつけられてゐます。それによつて、船と岸との連絡をとらうと云ふのです。全乘組員の生命は、彼の手に托せられてゐます。彼は勇敢に泳いで行きます。が、岩を避けよう避けようとしても、そつちへ段段流されて行きます。あはや！　岩にうちあげられて、砕けたかと、はツと思つた瞬間でありました。さいはひ岩から數間放れた海面に、ひよつこり彼の頭が浮びあがりました。

山路船長は感激の涙を眼に浮べながら、ぢつと一郎の泳ぎ行く跡を追つてゐます。一郎はだんだん岸に近づいて行きます。

岸邊では、焚火の火が盛におこりました。山のやうな怒濤が、ひとしきり岸邊にうちあげたと見るや、濱邊の人人は一様に群りおりました。怒濤のひいたあとに、投げあげられて、倒れたままの一郎の姿が、船からも見えました。人人は急いで、彼を抱きあげました。

『萬歳！』

『萬歳！』

悲愴な叫びが、船員達の口から叫ばれました。彼等はみんな、手をあげて連呼しました。

一〇

一郎の冒險的行爲は、全乘組員の生命を救ひました。一郎の腰につけた細縄は更に太綱に代へられ、本船と海岸との連絡をとることになり、それによつて救助艇を操作することが出來るやうになつたのです。

激浪怒濤と戰つて、身命を賭しつつ使命を果した一郎は、ほとんど卒倒の状態で、焚火の傍に横たはつてゐます。急造の擔架で、人家のある方へ運ばうと云ふのですが、時時一郎は鈍い瞼をあけて周圍を見るのでした。

『船長は？　船長はまだ？』

その都度彼は、嗄れ聲でかう云ふのです。

最後に船長が來ました。

『船長が來たよ。』

誰かが一郎の耳元で云ひました。一郎ははッと眼を見開きました。

『植村！　でかした！　感謝するぞ！』

山路船長はぼろぼろ涙をこぼしながら、擧手の禮をし、あまつさへ上體をおごそかに前へ傾けました。さうしてから、船長は、砂地に膝をついて、一郎の蒼ざめた顔をいたましさうに覗きこみました。

『船長！　私は滿足です。たつた一つ、この際お願ひがあります。どうぞ母の罪を許してやつて下さい！』

母の罪を贖はうために、どんな危險な仕事をも避けなかつた一郎の尊い犧牲的精神に、船長は今更つよくつよく打たれました。彼は一郎の手を堅く握りしめました。

『君の立派な行動は、どんな人のどんな罪をも、きつと許させずにはおかない。お母さんは許されたよ。安心して、さうして元氣を出して、……』

一郎はにつこり笑つたまま、眼をつぶりました。永遠の瞑目でした。彼は精神の力によつて、彼の肉體がなし得る以上の仕事をやつてのけたのでした。ですから、その任務を果し、母の罪を許されるや、今まで辛うじて緊張してゐた生命の絲は、ふつつりと切れてしまつたのです。

山路船長は頭を垂れました。——母を許せよ！

どこからともなく、さう云ふ聲が聞えて來ます。それは同時に、二十幾年の間、自分の心の中でも叫びつづけて來た聲でした。

×　　×

印度洋でこの物語を私にしてきかせた歐洲航路の船の火夫は、當時山路船長の船に乘組んでゐたのです。

『山路船長はその後どうしたらう？』と、私は訊いて見ました。

『船乘をやめましたよ。植村君のお母さんに、自分の財産を全部やつたさうです。さうして、自分は山へはひつて、坊さんになつたとか云ふ話ですが……何しろ變つた船長でしたよ。正直な、生一本の人で、……』

話しをはつた時には、印度洋は星月夜になつてゐました。

（終）

面白い讀切小説を續々發表！

次號には更に素晴しい大傑作、驚くべき名篇を御紹介いたします。是非御期待下さい！！



怪盜夜叉王

前田曙山

山川秀峰畫

山崎屋の寄合

『各方御參會の處へ、折よく參り合せて御座つた。』

兩刀へ柄袋を著せ、今道中から入府したといふ姿の武士は、悠々として二階の廣間へ入つて來た。座敷に居流れた七八人の武士は、此不意の珍客に、嶮しく眉根を苛立たせたが、來客の顏を見ると、一同は安心したやうに微笑を浮べて首肯き合つた。

時は萬延元年三月朔日、場所は江戸日本橋西河岸の寄合茶屋山崎屋の裏二階で有る。床を背にして上座に扣へたのは、水府先手同心頭の金子孫二郎、續いて中小姓二百石の佐野竹之助、大番組百石の黑澤忠三郎、其外關鐵之助、稻田重藏、蓮田市五郎の面々、孰れも水戸譜代の烈士で有る。之に向つて客の座に就いて居るのは、引詰髮に眉根迄釣上つて見える二人の壯士、小鬢に面摺の有るのは有村治左衛門、其上座なのは兄の雄介で、薩藩耿々の武士で有る。

『多分本日之へおいで下さる事と、心得致し居つた。參會は本日限り、一件には餘日御座らぬに由つて、萬一行違つて御逢致されぬ場合には、夜叉殿に對して、何とも遺憾に存じ申した。』

座を讓つて上席の金子が會釋した。夜叉は此一黨極秘の後楯で有るらしい。

『夜叉王殿仰せにより、拙者昨夕水戸を立つて、夜徹し之へ參つた次第、御手配は決定致して御座るか。』

『左樣、人々樣々の異論は御座つたなれど、畢竟何れも勤王の忠誠より出づる事、只感銘の外御座らぬが、先一番手としては、齋藤監物、佐野竹之助、關鐵之助、其外併せて水藩十七士、他

藩では之に御在する薩藩有村治左衛門殿、總勢十八人、明後上巳の式日を以て、乾坤一擲の壯擧に及ぶ考へ。拙者は有村雄介殿と共に、高橋多一郎殿の後を趁つて上國へ參り、斬奸の次第を奏聞仕つる事に相成りましたるにより、斬奸見屆け次第、即座に當地を出立仕つる手筈で御座る。』

『御勇ましき事。然らば第二段の手配は。』

『夫こそ兼々夜叉王殿仰せの如く、萬々一にも一番手仕損じ申す節には、夜叉王殿不意に起つて、短兵急に江戸本丸に乘入り、火をかけて攻め落されべく、其節は姫君にも、同時に八百八丁に火をかけて、諸大名の後詰を狼狽へさせ、混雜に紛れて、一時に江戸を亡ぼす事は、萬事夜叉王殿の御方寸に御在すと、宜しく御言上願はしう存ずる。』

恐ろしきは根強き壯士の魂膽、敵を仆す爲には、一手段のみならず、萬手段を盡さねば已まぬのだ。

『其儀は篤と心得申す、然し成る可くは江戸町方の迷惑にならぬ事を第先と致すにより、一番手が首尾よく仕了せるやう、夜叉王殿には、八百萬の神祇にお祈り申される由、一番手の方方に、呉々も遺策なく斷行されるやうとの御傳言に御座り申した。』

『仰せ迄もなく、彦根の赤鬼は、屹度退治申すで御座らう。敵に幾百人の供廻り御座らうとも、我等の刀には天照皇大神が御宿りで御座るわ。』

血氣の佐野は引取るやうにして低く叫むだ。燕趙悲歌の士が醉を吹くと、氣は虹の如くに渦卷く。

『然し二番手の方々は、納まり申して御座らうか。』

金子の心配は、二隊の豫備隊となつた壯士の鬱勃たる不平で有る。

『其儀は御懸念に及び申さぬ。夜叉王殿が御取鎭めに相成り、各々方一番手が首尾よく望みを遂げられた節には、直ぐ上方へ引取つて、何分の日和見御在す樣子で御座る。殊に近頃面白い事には、赤鬼の間者として、波多野右近が潮來へ入込み申した事で御座る。』

『赤鬼の犬奴、又しても夜叉王殿を覘ふとは、實以て執念き奴で御座るな。定めて長兵衛と申す岡つ引の白痴者も同道で御座らう。』

と、關鐵之助は快よく笑つた。百の右近、千の長兵衛有りとも、夜叉王に指もさせるのでは無いから、其點に於ては全く懸念はないのだ。

『五月蠅き奴ぢやによつて、斬捨てしまひなされば宜しいのぢや。』

稲川と蓮田とは、拳を握つて苛々した。

『いや、夜叉王殿仰せには、近々姫君と御緣組遊ばすによつ

て、其節は波多野奴に媒人の取持を仰せ付になられる趣き、滅多に波多野に過ちあらせてはなるまいと、二番手の血氣連中を御戒しめに相成つて御座る。』

『然し波多野も武士、所詮承引は致すまいが。』

『夫を承知致させるのが、夜叉王殿のお働きとも御座らう。』

殺伐の席は面白く軟らいで、勇ましい酒盃は益々興に入つて來た。

『又しても殿の調戯で御座るな。左様御座つたら、波多野奴も目を剝く事で御座らう。……自體色を以て姫君を誑らかさんとしたる奴が、姫君の御媒人を申上げるとは、いや痛快で御座るわい。』

一同は手を拍つて喜んだ。然し夜叉王が一人で芝居を打つて居るとのみ思ひ込む時に、姫は疾に怪しい懸罠から逃れて、許嫁の背の君の許に納まつて居るのだ、右近に媒妁を承引させるより先に、右近の媒妁を以て、早くも中納言と瑞たき固めの盃を取交して居るのを知らぬので有る。夜叉王如何に萬能の誇が有るとも、是ばかりは最早如何ともする事は出來ない、從つて姫を江戸町方燒拂の大將とするなどとは及びも無き事、凡ては空中の樓閣にして、畫ける餅に過ぎぬので有る。天下に成らざる事無しと自惚る夜叉王は、最後の大目的に於て、全く失敗したのを知らずして、飽く迄偉がつて居るのだ。

督殿の忠告

桃の花咲く宵節句、蘭燈影濃かなる霞ケ關の奧殿に、殿は愛妾阿浪の方の零るゝ旨味の中に恍惚として、政道の煩はしい詮立しさを、油のやうな酒の醉心地に軟らげて居た。翌は上巳の節句、柳營五節句の式日の中にも、最も重い儀式で有るから、卯刻には夙く支度を整のへて登城せねばならぬので有る。外には異國との談判、内には不逞浪人の取締、京方への駈引、柳營諸役人の操縱、次から次と起つて來る天下の大事を、五尺の身體で鹽梅せねばならぬから、偶ま奧向で寬がれる間だけが、氣を縱ち心を展べ、ゆつたりした我身一つが見出されるのだ。

『左兵衞督樣御客來、片時の間御目通お願ひの由に御座りまする。』

詑口で請取つた表の口上を、高島田の御小姓が恐る〳〵取次ぐと、御中老がトロリと軟いだ殿に申上げた。

『吉井殿が參られたとか、フーム。』と、殿は思はず頭を傾げて考へた。吉井殿は松平左兵衞督信敎、元紀州家の門葉で、高は僅かに一萬石の小身ながら、剃刀の刃のやうに切味の冴え冴えした若人、水戸中納言に蟄居の台命を傳へた時、此人にして始めて水戸藩士の激昂を無事に納め得た手腕家で、花も實も有る眞の武士で有る、其人が例外の酉刻過ぎといふに、前觸も無

く來客するといふのは、決して尋常一樣の事では無いのだ。

殿は衣服を改めて、靜々對客の間へと出座した。煌々たる百目蠟燭が晝を欺むくばかり輝やく處に、若い左兵衛督の凛烈なる姿が、白扇を膝頭に立てつつ、端然と主を俟つて居る。天晴御役に立つ者と、掃部頭の目には、飽まで頼母しく見える。

『夜陰早急の御入來、聊か懸念に存ずる。何ぞ思召し立とも御座らうか。』

殿は例に由つて、オットリと構へる。泰山頂上に墜つるとも、慌て狼狽へる樣子は微塵も無い。

『平生ながら御健勝祝着に存ずる。天下御政道の爲、此上にも御保養を願ひまする。』

手を支いて色代しながら、靜かに見上げる目、徐ろに瞰下す眦、客の眼中には男の精根をランビキにかけたやうな潤みが有り、主の視線には、怪



訝の色が滲むだ。

『辱じけなう存ずる。然し不肖ながら御政道を切盛する掃部、身を思うて保養などする迄も御座らぬのが殘念で御座るよ。』

『いえ、大切の御政道向をお預りに相成ればこそ、御分樣の御身體は、御分樣にして御分樣では御座らぬ、賤口の某が申するは、釋迦に說法とも御座りませうなれども、御分樣御一身には、天下の安危が繫り居りまするにより、幾重にも御身體御大切に願はしう存ずる。』

『ホ、ウ、督殿には大分老成人めいた事を言はれる。今夜の御入來は、拙者養生の御勸めであられるかな。』

殿はいつに無い左兵衛督の養生の忠言を、不似合なものに聞いて居た。

『御意に御座りまする。取急ぎ右を申上度、夜陰を冒して推參仕つて御座る。』

『御親切辱けなう存ずる。然し夫のみの事に、態々の御入來、近頃痛み入つた事で御座る。其樣にお迫き有る事も御座るまいに、督殿少と御年が寄られたな。』

『いや、中々急がねば相成りませぬ。』

『ハテ。』と、掃部頭は左兵衛督の只ならぬ樣子に、太い眉根を黯らせた。

『御分樣には、まだ水府の樣子をお聞き及びでは御座りませぬか。』

『水府の上下が拙者を憎み居るは、申す迄も無き事、強ち事新らしく聞き知らうとも存じ申さぬ。』

殿は水戶一藩の忙だしい跳騰などは、大局から見て、齒牙にもかけぬのだ。

『いや、左樣に輕々しく御看過し相成るは如何と御座りませうか。某承はる處にては、水藩脫走の浪人共、續々當江戶表へ入込みました樣子、萬々一由々しき大事とも相成りましては、御分樣御身上にも、決して喜ばしき事では御座りませぬ。』

『水藩浪人とは申せども、內實は御隱居御聲がかりの輩とも御座らうか、兵糧方一切御貢ぎ相成るとも申す。夫等の者が一時水戶長岡に集り、夫よりして拔け〲に入府致した形跡が有ると申す事、先般市川國府臺の古寺に屯集致し居つたも、其一味では有るが、何等の企てであるとしても、畢竟は蟷螂が斧を揮つて龍車に向ふも同樣、軈ては我身を壞るに過ぎぬ。多寡が三四十人の水府浪人が、逆さになつても、天下は覆へるまいでは御座らぬか。』

『夫程水府の樣子を御承知遊ばされながら、輕々に御扱ひ有つては相成りますまい。素に御分樣を怨みに思ふ上は、如何なる御油斷の隙を狙ふまじきものでは御座りませぬ。』

『異な事を。然らば浪人共が、拙者に對して、何事か企てを致

し居ると申されるか。』

殿は流石に不愉快の眉を曇らした。例へ我身を思ひ呉る爲とは言へ、瑞たき宵節句の幸先に、不吉な言辭を列べるのは、長者に對する禮では無い。

『左樣な企てを致さぬ事を取りしきつて祈り申す事で御座る。某斯樣に申すは禮を失する儀に御座りまするが、守る者に油斷は有つても、狙ふ者に油斷無しとの諺、僅か三四十人と申しても、是等の者が心を合せ、力を一つに致し、死を決する時には、如何なる大事をも仕出來しまする。憚り多き申し條ながら、御先代直政公、又は直孝公の如く御武勇に御在し、千軍萬馬を往來なされたる御仁ならば、某更に杞憂は仕つらねど、失禮ながら御分樣御業前、いや凡て當世の人の腕にては、如何に心猛く膽太くとも、暗夜の礫は防ぎ難きかと、實以て心痛申上げるので御座る』

單身小石川水府舘へ上使として乘込み、立派に使命を果した程の左兵衛督、御三家の威にも恐れぬ人が、道理の前では掃部頭の威勢に屈する者では無い、飽く迄大老を諫めて、其身を守らせねば措かぬので有る。

『然らば何か拙者に身の周邊の用心でも致せとお言ひ召さるか。』

掃部頭は益々不快の顏を曇らした。威嚴當世を壓して、入陽をさへ招き返すべき一の人に向つて、思ふ事を思ふ儘に言つて退け、面を犯して憚からざるは、只此人有るのみだ。

『水戸殿御蟄居は、元より上樣御上意とは御座れど、其實は御分樣御一存に出でさせられた事は、水藩の人々は元より、天下一統洽く承知致し居る儀に御座りまする。』

若く鋭どい意氣が、殿の胸板に羽ぶくらせめて突刺さつて行く。

『上の樣子を存ぜぬ者共は、左樣に思ふ者も御座らう。總じて吉事は上樣に歸し、凶事は此身に負ふのが、政道を執る者の常で御座る。人の怨みが恐ろしいと申して、拙者政道を枉げる事はなり申さぬ。』

大老は不快さうに言つた。此發明な督殿迄が、俄かに背き去つて行く心地がするのだ。

『其儀で御座る、是非善惡に拘はらず、御分樣を怨む不逞人有りと御承知ならば尚更、明日式日の御登城は甚だ以て心懸りで御座るにより、願はくは御所勞遊ばされては如何御座りませうか』

『拙者は左樣な卑怯者では御座らぬ。』

『いや御分樣御一身は、御分樣にして御分樣では御座りませぬ、天下の重大なる目方が、御分樣の双つの肩に繫り居る事を御考へ下さるやう。萬々一不測の變を生じも致せば、延いては天下の大亂とも相成る儀、よく〳〵御賢察下し置かれるやう。』

言々肺腑を衝つて、血が滴たるやうな言葉、



夫は大老の身を思つて言つて吳るのだが、行懸りの意地になつて、柔順に受入れる事は出來なかつた。

『折角ながら、苟しくも天下の大老職として、虛病を構へて不參致すに於ては、何を以て則を下々に示す事が出來るで御座らうか。』

剛愎で聞える殿は、頑として左兵衛督の言葉を聞かない。

『然らばせめては御駕籠廻りに屈竟の御家來をお配りに相成り、尚行列の御人數も、日頃に倍するやう、御供連に相成るやう願はしう存ずる。』

『いや、供の人數の事は、夫々格式が御座るにより、一時の都合に由つて增減は致されぬ。御心痛無用にさつしやるやう。』

『恁樣に申入れて

も、御聞濟は御座りませぬか。』

左兵衛督は色白の顔に、鮮かな血色を漲らした。天下一の人の面を目して、飽まで所存を述べるには、よく〳〵思ひ入つた決心がなければならぬ。

『御身の心痛は、影に怯え、聲を恐れる臆病沙汰、要らざる取越苦勞と申すもので御座らう。』

『いや、憚りながら痴人の夢では御座らぬ。長岡を脱け〳〵に江戸へ入り込み申した水戸の壯士が、狙ふ處は御分様御一人で御座りまするぞ。』

左兵衛督の膝頭は、ジリ〳〵と疊の目を呑むで行つた。

『よし、何人が狙はうとも、人間の運は天に御座る。如何程供廻りを増せばとて、運拙なければ、金城湯池の中に居ても、命を全うする事は出來申さぬ。又運の神が見放したまはねば、單身矢玉の中に飛入つても、微傷一つ負ふものでは御座らぬ。敵を恐れて逃げ隱れ、又は防ぎの人數を増すなどは、祖先以來拙者家の武名を汚なふものにつき、斷じて御心付に從ふ事罷りならぬので御座る。』



『左様に申しても御分様は。』

『諄う御座る、お廢め下されい。』

殿は威丈高に叱り附けるやうに却けた。

『いや廢めませぬ。天下の御爲につき、御意見申上げる。』

『ならぬと申すに。』

二人ながら鍔迫合其儘に激昂して來た。

『御承引下さらぬに於ては、いつまでも某是に着席致し居りまする。』

『御隨意に仕召され、拙者用件御座るに因つて、退席致す。』

殿が突と立たうとする袂を、スル〳〵と膝行して、左兵衛督は少時と扯止めた。

『エ、、亂心めされたか。』

袖を拂つて身を躱へすと、袂はメリ〳〵と裂けて、左兵衛督

は其儘バッタリ前へ手を支く、途段に殿はツッツと摺足早く、奥へ引上げて了つた。

雛の首の前表

御機嫌斜めに傾いた殿が、出迎へも俟たずに、荒々しく奥へ成られたので、錠口の中は上を下への狼狽へ、忙て褥を直すやら、手焙を薦めるやら、部屋へ下つた阿浪の方が、再び忙だしく伺候するやら、雨と風が一緒になつたやうな騒ぎで有る。

『酒を持て。』

殿は左兵衛督に意見された不愉快を、酒で紛らさうとするので有る。途段に次の間で、アッと魂消る優しい女の聲。夫が殿の成らせられた座敷と襖一重なので、阿浪の方は冷りと息を詰めた。然し殿は案外氣色がよく。

『女共が影法師でも見て、驚いたのであらう。臆病者奴が。』

と、呵々と笑はれたので、側の女中達は吻と甦生つた心地になつた。

『お耳障り恐入りまして御座りまする。』

次の様子を小聲で報告された阿浪の方は、俄に顔色蒼ざめて、不安の眼を低く伏せて色代した。

『浪、何と致したのぢや。』

『恐れ入りましたが、お次に飾りました雛人形の御内裏様が、自然と轉げ落ちまして、男雛様の御首が落ちましたさうに御座ります。』

瑞たい佳節句に、男雛の首が落ちるとは、此上の不吉は無いのだ。阿浪の方は言ひ知らぬ不安に襲はれ、悪魔に呪はれるやうな心地がする。

『何の事ぢや。生きた人間でも、躓づく事が有る。木偶人形なら、何かの拍子に仆れようでは無いか。』

殿は瑞祥も不吉も、更に歯牙にかける様子も無く、寛々として大氣に嘯ぶいた。

『御意に御座いますが、雛段にチャンと据ゑて有りまする人形が、自づと落ちますのは、どうも合點が参りませぬ。』

『鼠でも荒れたであらう、氣に致すな。但し予の首の落ちる前表かな。』

『アレ滅相な事を。』

阿浪の方も老女達も、五官の働きが一時に底止した。如何に御座興とは言ひながら、日頃謹嚴な殿にも似合ぬ戯言で有る。宵節句の祝儀は水よりも冷やかになつた。

血染の雪

翌れば三月三日、瑞たき吉瑞を尋ねて、萬延と改元してから僅かに三日目で有る。去年十一月以來雨雪少なくして、江戸中

火災多く、町方は枕を高く寢る事さへ出來なかつたが、此日は朝になつて、一天俄かに雪を下し、霏々として面も向くべからず、紅い桃の花に冷たい綿と降り積み、萬畳白皚々たる銀世界と化して了つた。雪は豊年の貢とは言ひながら、時ならぬ賜物は天の戒めでは無いかと、心有る者は眉を顰めて身を竦めはした。

殿は明卯刻の太鼓と共に浴を引き、髮を取上げさせたが、日頃手練て居る中小姓ながら、不思議にも髪が纏まらぬ、揃へれば揃へる程割れるので、忙て狼狽へながら、脂汗を流して漸くの事で恰好だけを附けた。



『恁樣な事は例にないぞ。怪力亂神は語らぬとは申せ、時節柄萬一にも御城内に異變の有る前表ではないか、氣懸りで有る。早々登城致すにより、急いで供揃申付けい。』

殿は式服に改ためて、大玄關へ立出ようとすると、丸と呼ぶ京種の手飼の狆が、何處を潜つて驀つて來たか、奧より一散に驅けて來て、殿の袴の裾を啣へて引戻さうとした。家臣は御前體叱りもならず、手に汗握つてハラ〳〵した。

『オウ丸か、其處放せ。其方も予を扯住めようと致す。左兵衛

殿にかぶれ居るな。』
呟やくやうに苦笑ひをして、漸く狆を後へ抱き取らせ、其儘式臺から乗物に召された。
此時雪は邪慳な程、一入降り頻り、三間と先は濛々として、殆んど見え分かぬばかりで有る。剰さへ風は北より吹き捲つて、濠端の柳は右往左往に亂れ躍き、遙か塢下の水の面に浮寝の禽は、夢驚かされて、悲しく鳴いた。
殿の駕籠が屋敷の赤門を出て、霞ケ關へ懸る時に、素足に草鞋穿、股立高く取つた浪人體の一人の侍が、冠れる笠を取つて雪を拂ふのか、右手に差上げて二つ三つ高らかに打振つた、夫は烈士の後見金子孫二郎が、大老出門を同志に知らせる合圖だつた。
昨夜品川の土藏相模に、此世の名殘の春を買つた十八烈士の面々、夜明けて見れば、時ならぬ稀有の大雪に、偖は天佑疑ひ無し、吉兆此上や有ると、雀躍りして欣び勇み、曉寅刻といふに、一同仲宿の虎屋へ引上げると、三々伍々に雪を踏むで芝の愛宕山へと集り、片附けた見晴茶屋の床几を引出して、携へた酒筒を傾けながら、雪に曇つた江戸城の山のやうな木立を遙かに瞰下して、ニコリと微笑を洩した。



『赤穂義士の討入も、雪といふ天佑が有つたな。』と、一人が得意らしく言つた。
『左樣、然し我々共は、赤穗浪士よりは、遙かに大きな仕事を致すのぢや。』
『叱ッ、大きな聲を致すな。』
『いや、此山の上には誰も居らぬわい。』
『さればとて、滅多な事を口外してはなるまい。』
『安心さつしやい、如何に拙者の聲が大きくても、霞ケ關までは屆かぬわい。』
一同は笑ひながら女坂を降り、巴町通りを眞直に虎の門から櫻田前へと來て、一先濠端の葭簀張の空茶店へと隱れ、大老の行列今や來ると、義烈の血を湧き立たせつゝ、片唾を呑むで待ちかけた。
大老の先供は、早四五十間の彼方へ進んで來る。喝道の嚴めしい聲が、浪を打つやうに、遠くから聞えて來た。
一同の目と目は、互ひに物を言つた、いさと促し合ふので有る。

濠端を西へ向いて、通行人の如く、行列に向つて歩き出したのは、關鐵之助を先頭の指揮役にした一隊、續くは佐野竹之助、大關和七郎、廣岡子之次郎、森山繁之介、海後磋磯之介、稻田重藏の七人、足駄穿に無印の番傘降りしきる雪に惱むと見せかけながら事有りとしも無く歩いて行く。

櫻田外松平大隅守の長家下には、黑澤忠三郎、有村治左衞門、山口辰之助、增子金八、杉山彌一郎、稍遲れて、五六間後に退つたのは、鯉淵要人、蓮田市五郎、廣木松之介、殿は齋



藤監物で有る。部署盡く定まり、只一瞬の後に來るべき烈火の爆發を待ち設けるばかり、雪は又しても一頻り降りまさり、綿を千切つて投げたのが、萬字巴と散亂した。同志の意氣慘として驕らず、靜かなる事林の如くで有る。

　侍合羽に高股立の先供は、足並靜かに、粛々として過ぎ、金紋先箱に續いて、天下の大老井伊掃部頭の乘物は、早目前咫尺に近づいて來た。

　氣早の佐野竹之助は、早くも羽織の紐へ手をかけて、扔ぐり捨ようとした。

『まだ〳〵ッ。早いぞ。』

　續く大關は目交に押止めた。駕籠が近づいたとは言ひなから、一氣に飛込むには、間隔が聊か伸びて居る。途段に大隅守の辻番の陰から、バラ〳〵と飛出した一人、冠物の儘。

『差上げます〳〵。』と、右手に包物を高く掲げて、雪を蹴立てて飛んで出たは、遊軍の森五六郎、言ふ迄も無く、駕籠訴の差越願ひと見せかけたので有る。

『成らん〳〵、差越願ひはならん、退れッ。』

　供廻の日下部三郎右衛門と、供目付の澤村軍六は、行手を遮つて手を擴げた。途段に森は笠を扔ぐり捨、ヒラリと羽織を脱げば、下には白鉢卷白襷。呀といふ間も拔討の早業は電光石火、矢庭に日下部の左手の肩口、バラリと斬下げた。

『狼藉者ッ。』

　日下部の悲痛な叫びは、驚愕と、畏怖と、憤然との絶叫で有る。よろめきながらに拔合せようとしたが、泰平の夢に慣れた從士の面々は、いづれも羅紗の鞘袋に加へて、柄袋をさへ掛けて居たから、容易く拔き放す事もならず、心慌て鞘ぐるみ引拔く處を、二の太刀深く眉間を殺竹割にされ、斷末魔の唸りを發して、朽木を仆すが如く、撞と雪中に仆れた。血は颯と散つて、櫻田の雪花と紛うて鮮さき最初の血祭で有る。

　森が刀を拔いたのと、日下部が殪れたのとは間髪を容れざる一瞬間で有つた。同時に鞘ながら引拔いた澤村軍六は、已ッと叫むで打つて蒐らうとしたが、白虹天に躍る森の勢ひ込むだ太刀先に、左の肩を大袈裟に斬り附けられ、二言と言はず仰樣に仆れ、虚空を掴むで息が絶えた。

　途段に濛々たる雪天を劈く一發の銃聲、駕籠を目蒐けて美事に射込むだのは、左翼組黑澤忠三郎が機轉の筒先で有る。

　千代田の丘の松の綠、枝も鳴さぬ二百餘年の夢は敢なく打破られて、櫻田門外の落花狼藉、天と地とが倒になつて、蜿蜒打ち廻る修羅場は現出した。百餘人の供方は驚き忙て、バラバラと取つて返すもあれば、柳の古木に抱き附くも有り、躓づき辷つて高這に逃れるもある、然し流石に恥を知る士分は、驚き忙てながらも、バラ〳〵と先供へと驅け附けたので、駕籠脇は反

つて手薄になつた、是こそ烈士の面々始めよりの作戰で有る。右翼組の佐野、大關、廣岡、森山、海後の面々ドツとばかりに眞一文字に飛び込むで行つた。供目付の川西忠左衛門は、二刀流の達人で有る。早くも兩刀を拔いて天地に構へ、駕籠を後にして防ぎ戰かつた。さしもの烈士も只一人の敵に拒まれて、左右無く進み兼る内に、廣岡と稻田とは忽ち重傷を負はされたが、傷を負うて益々勇猛なる怒猪其儘の稻田、敵の刀の下を摺り拔け樣、勢ひ込むで駕籠の中を刺し貫ぬいた。

『アツ』といふ苦鳴の手應、『占たツ』と叫びも敢へず、海後が拳下りに突き徹したので、殿は十二分に脾腹を抉られて、前にのめり伏した。

川西を斬伏せ、血刀の儘飛込むで來た佐野は狂へる猛虎の躍り兔るが如く、ズバリと駕籠を突き徹すや否や、引戸を捩り取るやうにして、殿の襟首攫むでズル／＼と引出した。重傷を負つて早片息になつて居る大老は、夫でも手を突張つて起き直らうとする處を、有村治左衛門は髻を引攫むで押仰向け、有無を言はさず首を打落した。

『可か／＼ツ。』

喜び窮まつた有村は、×首を太刀の先に差貫ぬき、薩摩拵其儘に雀躍して叫ぶと、一同は占たつと、異口同音に歡聲を擧げた。

不意の襲撃は寸時にして了つた。井伊家の同勢は支離滅裂と



なり、仰様に仆れる者、重傷に打伏して苦しむ者、死人手負は鮪を轉がしたやうに横たはり、合羽や傘や、下駄や刀やが、引汐の後のやうに血染の中に散亂して、目も當られぬ慘狀だつた。

右近の復活

『御前、世にも恐ろしき未曾有の大變に御座ります。手前は空屋敷の床下で、左樣な話を致し居るを聞きましたる節、只痴人の夢を說くと聞きましたが、御大老の大變、最早疑ふ處は御座りませぬ。夫には不敵の怪賊夜叉王が後援を致して居りまする。萬一にも右一番手が仕損じました時には、夜叉王自から二番手となり、江戸へ大變を起させまする目論見に御座りまする。就ては假令一番手が望みを遂げましても、まだ二番手が有るからは、此上如何やうの大事を致さぬとも限りませぬ。』

潮來の館に逗留する波多野右近は、江戸からの知らせに、殆んど度膽を抜かれて居た。

『さうぢや、二番手が有れば、三番手も四番手も有ると思はねば成るまい。』

朝臣の推量は、右近の怯えた心を、益々狼狽へさ

せる。

『此上は一刻も早く立戻りまして、御老中まで、當地で見聞致した事を申上げねば相成りませぬ。』

『夫が宜しいであらう。……惜むべきは不敵の怪賊ぢや。大膽にも當地の空屋敷に巣食ふのみか、天下の大亂を企て、彦根殿の首を梟げるなどとは、言語道斷沙汰の限りと申すものぢや。其方は早速江戸へ參つて、當地の樣子を知らせたが宜しからう。夜叉は當地を引拂うたに致せ、まだ江戸を離れはせぬに由つて、要所々々の關を立切つて、必死になつて搜さうなら、必ず天の網に羅らうぞ。是迄江戸の捕方の者の圍む網は、餘りに目が細か過ぎたによつて、いつも大物を取逃すので有る。今度こそは、太い綱で荒目の網を拵へ、天と地の間に張り切るがよいのぢや。』

『御意に御座ります。天下の威光を以て、彼老耄を召捕る事がならぬとは、如何にも無念至極に御座ります。』

右近は忌苦しい程殘念でならない。

『さればこそ、彦根殿大變、公儀の威の輕重を問はれるやうに相成るのぢや。然し其方は再三夜叉に面會致して、能く面體を見知るのぢや。』

『白髪の赭顏、背丈の高い男に御座りまする。』

『其方の外夜叉の面體を知る者は一人も無いにより、其方は大切の見知り人ぢや。』

『手前は再應夜叉奴に誑かされましたが、然し只一つ彼奴を出拔きくれまして、何より痛快に存じ居りまする。』

『ホウ、夫は何事で有るな。』

『餘の儀には御座りませぬ。即ち御前樣と姫君樣との御縁組を、瑞たくお調へ遊ばされました事に御座りまする。夜叉奴は恐れ多くも、必ず姫君樣を申受けて、偕老の契を結ぶなどと、以ての外の高言を吐き居りました。殊に手前を其節の媒立に致して見せると申しましたが、現に御二方樣は、目出度く御睦みに相成り、慮外ながら手前が御媒立を承はりまして御座ります。左樣に相成つては、夜叉は如何に焦りまするとも、最早手の下しやうは御座りますまいかと存じまする。』

右近が誇るに足るものは、只此消極的の勝利ばかりで有る。

朝臣と姫とは、顏見合せて胡散な微笑を交した。

『夜叉は定めし無念に存じ居るであらう、如何に魔法遣でも、是ばかりは何ともされなんだと見ゆるな。』

朝臣は姫と見交した目を、右近の上に落して快よげに微

笑む。

『手前全く胸の痞が下るやうに覺えまする。』

『其方が江戸へ戻るならば、麿も江戸まで同道致さう。』

『御前もお出で遊ばしまするか。』

『さうぢや、之には秦殿も居れば、其方の母御前も居る、又晉羽も世話女房になつて、萬事を切盛致し呉るによりて氣支ひは無い。麿は如何に水郷の隱者となつても、まだ〳〵浮世の執着は捨てられぬにより、自身江戸表へ參つて、世の中の樣子を見屆けたいと思ふ。今度の椿事の爲、如何樣の變事が起るまいものでも無いぞ。』

日頃不快に思つて居た大老が不慮の死を遂げたので、再び世の中へ打つて出る下心ではないかと、右近は窃かに算用して見た。

『夫は結構に御座ります。然らば御供仰せ付けられまするやう。』

二人は七日の朝といふに、潮來を立つて、供をも連れずに江戸へ向つた。長兵衛や乾兒は、前以て江戸へ歸して了つたから、反つて氣散じの旅で有る。

道中は果して兇變の噂で持切り、今にも世の中が顚覆へりさうな騒ぎで、道路目を欹て、聲を潛めて囁やき合つた。

右近は兩國橋で朝臣に別れ、一旦屋敷へ歸る間もなく、直に老中筆頭安藤對馬守の大名小路の上屋敷に伺候した。大老亡き後は、此人が政道の切盛をして居るのだ。

『右近、其許は夜叉召捕の爲苦心致し居る趣き、彥根殿より承はり及んだが、其彥根大老も不慮の急變、何とも殘念千萬であるぞよ。』

何となく身の廻りの倚賴たさを痛感する時、忠義無二の右近が伺候したのを、賴母しいものに思つたらしい。

『恐れながら不時の御大變、生憎手前夜叉召捕の爲、潮來と申す處へ、內々出張居りまして、世上の取沙汰を聞くと其儘、宙を飛んで先刻立戻りましたるやうな次第。然し上樣益々御安泰、御前樣にも御健勝、御恭悅申上げまする。就きましては其砌の曲者は、最早御召捕に相成りまして御座りませうや。』

『如何にも、或ひは其場で討死、又は自訴致しなどして、關鐵之助外一二人が、まだ御手當に相成らぬのぢやが、之も程なく御繩を頂戴するであらう、安堵致せ。』

對馬守は水戶浪士の兇刃は、前樣御蟄居に憤激するの餘り、彥根大老一人をのみ、怨の的に狙つたに過ぎぬと、輕く扱つて居るらしく見えた。

『早速の御落着、大慶此上とも御座りませぬ。然しながら此度の儀は、深く巧みましたる謀叛人共の恐ろしき企だてに御座りまする。第一段の企てと致しては、此度の兇變に御座りまする

者、猶第二段第三段の備が、浪人共の間に仕組まれて居りまする。』
『二段三段とは、後詰が有るといふ事か。』
『御意、手前此度内々潮來へ參りまして、右の陰謀を探り出しまして御座りまする。』
『其宰領を致すは何者ぢや。』對馬守は彦根限りの怨みの刄と、輕く樂觀して居たのが、俄かに危ふくグラ附き出して來た。
『夫こそ夜叉奴に御座りまする。』
『果して怪賊は、其樣な曲者で有つたか。』
何樣只の盜賊らしからぬ夜叉王は、果して天下を狙ふ大伴の黑主だつたので有る。
『此度の水戸浪人を陰より操り、又費用萬端を賄なひ居りますも夜叉王、又第二段の目論見としては、江戸町方燒拂ひ、其騷ぎの暇に、恐多くも短兵急に御本丸を襲ひ申す企て、凡て夜叉が致す惡巧みに御座りまする。御用心下し置かれまするやう。』
對州殿は愕然とした。只水戸浪士の遺恨とのみ思つたのが、其根差の深いのに驚き呆れる外はない。今日は人の身、翌は我身の上とも知れないのだ。
『然らば其夜叉と申すを、一刻も速やかに召捕るやう手配致さねば相成らぬ。』
『此儀手緩く致し置きましては、此上如何なる大事を惹起すまいものでも御座りませぬ。夜叉と申すは切支丹の魔法を遣ひ、飛行自在とも申しまする。先以て古への由比正雪の如き曲者と心得まする。』
右近の言ふ事は、殿に取つて氣味のよいものでは無かつた。彦根殿は豪氣に勝れて居るが、對州侯は雋鋭の氣に充て、何方かと言へば、神經質の方だつた。
『然らば何時如何なる處へも立入るまいものでも無いな。』
『御意に御座りまする。御威光さへ恐れぬにおきましては、御本丸へも忍び入り兼ぬので御座りまする。』
『嚴重御門守が有つてもか。』
『切支丹の忍術は白晝人の目に遮る事無く、自在に往返致しまする。』益々以て無氣味の話で有る。彦根殿亡き後は、間部殿と自分とが、政道を取しきつて居るのだから、自然首を狙はれるとなると、二人の外を出ないのだ。恁なつては如何なる犧牲を拂ひ、重賞を懸けても、夜叉を召捕つて了はなければ、枕を高く眠る事は出來ない。
『夜叉召捕の指揮方は、一切其許に申附けるにより、加役方の者を引連れ、油斷なく致すやう。……尤も町奉行には當方より心得させ置くにより、手不足其他人數の要る場合には、奉行所の力へ申出るやう致したがよい。』

夜叉召捕に失敗した彼は、夜叉召捕の爲復活したので有る。表は小普請ながら、事實は老中筆頭より直々に仰せ付つて、大手を振つて活躍出來る事になつた。重ね〴〵の失敗と恥辱とは、此時に雪がねば、死して祖先に合はせる顏はないのだ。

『畏まりました。假令夜叉が天を翔る術を會得致しませうとも、此度こそは必ず召捕つて御覽に入れまする。』

『オウ確と申附けたぞ。』對馬守が吻と安心するところへ、用人が眞蒼な顏をして、恐る〳〵伺候した。

『申上げまする。……只今濱町御中屋敷よりの注進。夜叉王と名乘るところの怪賊込み入り、以ての外の狼藉を働き居りまする趣き、仍つて當方より詰合の者を馳け附けさせまして御座りまする。』

夜叉が潮來を立退いて、江戸へ向つたのは、大凡當りが附いて居るが、早くも日本橋の眞中へ現はれ、老中筆頭の中屋敷を襲ふに至つては、何處まで大膽不敵か數が知れないのだ。

『誰ぞ怪我致した者はないか。』

殿の氣懸りなのは、中屋敷に懷胎の身を大切に養なふ愛妾の上で有る。五人七人の家來は附いて居るが、能く夜叉の闖入を防ぎ止めるや否や、覺束ないので有る。

『畏れながら、其邊は承はり及びませせぬ、只右申上げました注進のみに御座ります。』

『然らば家中腕達者の者に申附け、直ちに中屋敷へ加勢に參るやう、一刻も猶豫致すまいぞ。』

殿の心配は總つて愛妾の上に有る。若し夜叉の爲に過ちを出來しては、取返しが附かぬのみならず、延いては老中職の權威、將軍家の威光にも拘はるのだ。

『然らば手前も直樣御中屋敷へ向ひまする。』

今度こそは逃さじと、右近は烈火の息を吹いて立上つた。あはれ怪盜夜叉王、右近が行き附くまで、中屋敷に狼藉を働らいて居れかしと、刀の鍔元握り固めて必死に念じた。(つゞく)

御禮

最近、キングが、小説に、記事に、猛然たる向上進展を試みつつあることに就いて、愛讀者各位から、熱烈なる賞讃激勵の辭を頂戴し、一同感激に堪へません。

一々親しく御禮御挨拶申上げたいとは存じますが、何分にも多忙繁劇、殊に最近は新年號の準備に大奮闘中とて、失禮のものも少からざること丶恐縮に堪へません。どうぞ事情御諒察御寬恕を願ひ上げます。

尚、キングをいよ〳〵良くする爲に何かお氣付のことがございましたら、大小となくお教へ下さい。御忠言は更に歡迎するところです。それについて、御手紙を下さる方は、是非御住所御姓名を御明記下さい。併せて御願ひ申上げます。

日本文化發達紀元番附

（にほんぶんくわはったつきげんばんづけ）

パン　明治元年　徳川末期にすでにパンは製造されてゐたが、大量製造はこの年が始めてである、薩摩藩で五千人分を製造して藩兵に供したことがある。

新聞　明治三年　文久二年「バタビヤ新聞」本所で發行。元治元年岸田吟香等の「新聞紙」出で、明治三年「横濱毎日新聞」刊行。

電信　明治四年　公衆電報の取扱ひはこの年が始めてゞある。

鐵道　明治五年　明治三年春起工、五年九月東京横濱間開通。

小學校　明治五年　寺小屋が廢されて初めて學制が發布された。滿七歳で男女共就學。義務教育は明治十九年。

煉瓦　明治五年　銀座通りを煉瓦にする爲に東京府下小菅に製造所を設立する。尚安政四年徳川幕府にて製造したることあり。

硝子製造　明治六年　東京品川に民營の硝子工場、「興業社」が出來た。

警視廳　明治七年　東京警視局この年始めて設けられる。巡査（邏卒）が三千人東京におかれたのは明治四年である。

マッチ　明治八年　宮内次官吉井友實伯がマッチ會社製燧社を始めて起す同時に海軍技師清水誠氏フランス式製造法を傳へる。

時計　明治八年　徳川時代すでに時計として製造されたものがあつたが商品としてはこの年が始めてである。

ビール　明治八年　東京に櫻田ビールが起り翌年札幌ビール起る。

美術研究　明治九年　東京美術學校が初めて設立された。佛蘭西歸りの黒田清輝畫伯初めて裸體畫を紹介した。

ラシヤ　明治十年　留學でラシヤ研究の上歸朝した井上省三に命じて政府は東京千住にラシヤ工場を作つた。

博覽會　明治十年　第一回内國勸業博覽會開かる。博覽會の名は慶應元年栗本鋤雲の案出。

電燈　明治十六年　官報局印刷所に白熱燈を始めて使用す。

人造氷　明治十六年　明治初年には米國から輸入して居たがこの年東京新堀に「東京製氷會社」が出來た。

蓄音機　明治二十三年　この年初めて米國から蠟管蓄音器の蓄音機が渡來した。平圓盤蓄音器の輸入は明治三十六年。

電車　明治二十六年　明治廿三年上野公園で試驗、廿六年京都七條南禪寺間に始めて開通す。

自動車　明治三十三年　三越の前身三井呉服店が三千五百圓で始めて佛國から自動車を購入す。

百貨店　明治三十九年　三越呉服店がデパートメント・ストーアを開いたものの初めてゞある。

帝國議會　明治廿三年　明治十四年十月勅語を以て二十三年國會を開くことを定められ二十三年十一月第一回開會

帝國憲法　明治廿二年　同年二月十一日紀元節の佳辰をトし發布さる

汽船　安政二年　徳川幕府オランダから汽船を購入す。東京横濱間の海上運輸は明治六年。

雜誌　慶應三年　柳河春三創刊の「西洋雜誌」が初め、また明治十八年頃徳富蘇峰氏の「國民の友」全盛を極めた。

郵便　明治四年　この時四十八文、百文、五百文の和紙木版刷の切手が作られた。

セメント　明治四年　時の工部省が東京深川に工場を設けた。十七年淺野總一郎氏が之を引き受けたのが今の淺野セメント會社である。

洋紙製造　明治五年　淺野侯爵家で東京麹町に製紙工場を設けた。同年大藏省で紙幣局を設け、公債、紙幣用紙を製造した。

圖書館　明治五年　東京湯島に設けられた書籍館が始め、これが今日の上野帝國圖書館の先祖である。

瓦斯　明治六年　東京横濱で初めて用ふ。

洋式製本　明治八年　横濱で行はれ十三年に初めて天金（上小口金箔塗）が試みられた。

大審院　明治八年　この年控訴院も設立されて、人民の福利増進の道が開かれた。

寫眞術　明治九年　渡來したのは安政年間、初めはバテレンの妖術として命がけの作業であつたが明治九年保護條令を發布さる

盲啞學校　明治十一年　古川太四郎といふ人京都に盲啞院を開く。

自轉車　明治十八年　明治十四年印刷局に三輪車が來た。十八年には前輪の大きい達磨形のものが到來した。空氣タイヤスは二十八年頃からである。

メートル法　明治十九年　度量衡取締令が布かれたのは明治八年、十九年萬國度量衡局に加盟メートル法併用す。

電話交換局　明治二十三年　米國から輸入されたのは十年頃、二十年英國製を輸入二十三年東京横濱に交換局を設ける。

保險會社　明治三十三年　株式會社、相互會社に限り保險會社の設立が許された

活動寫眞　明治三十三年　明治卅一年大阪で撮影された映畫があるといふが [illegible]

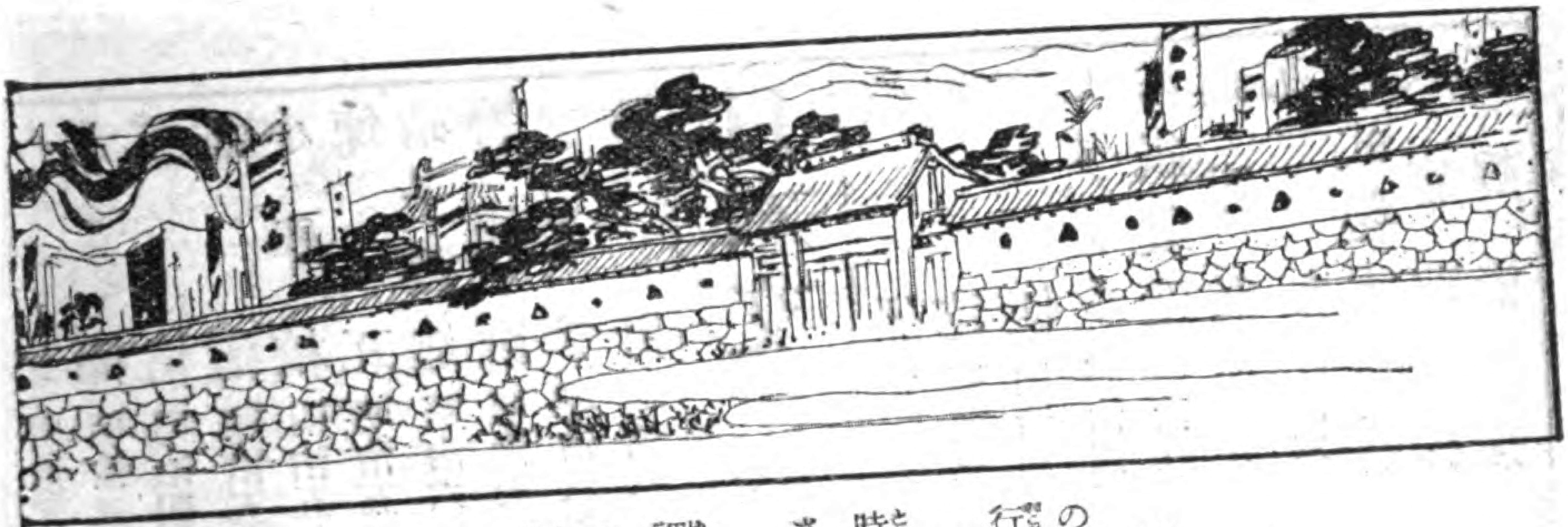
無線電信　明治三十六年　明治 [illegible]

美容術　明治三十九年　[illegible]

飛行機　明治四十四年　明治四十年頃から飛行熱が高まり四十四年春米人マース大阪にて日本最初に飛行す。

鐵筋コンクリート　大正元年　此の以前にも小規模のものはあつたが大阪陸軍被服廠の工事が大規模のものとして初めてゞある。

＝お番付お數へをそふ＝　松原晃郎作



大事を成す人

前内務大臣　望月圭介

秀吉の傳記を讀んでいつも感心するのは、秀吉のする事なす事が、常に强い信念に依つて堂々と行はれたといふ事である。

例へば、信長幕下の勇將荒木村重が謀反をした時、早速出掛けて行つて、村重を諫めた時だつてさうだ。

その時、加藤清正、福島正則、加藤嘉明等、所謂賤ヶ嶽の七本槍で名高い豪傑連が、秀吉について行つたが、伊丹へ着くと、秀吉は、いきなり單身で村重に會はうと云ひ出した。お供の豪傑連大に驚き、

『それは以ての外の事で御座る。村重が恐れてゐるのは、實は右府殿（織田信長）ではなくて、智略縱横の貴所である。今、貴所が單身敵中に入るならば、村重は如何なる謀計をもつて貴所を害せんとも圖り難い。どうか我々のお供をお許し願ひたい』

と交々諫めたのであつた。

すると秀吉の答が振つてゐる。

『自分は今、村重に會つて、事の正邪を說き、彼をして大義名分に就かせんとしてゐるのだ。申さば秀吉は天の使であつて、私の使ではない。如何に村重心狂へばとて、神の使徒たる自分を害しようなどといふことは斷じてある譯がない』

さう云つて、彼は敢然と城に入つた。

その態度と眞情とには、村重の心が動かぬ筈はなかつた。けれども時は既に遲かつた。村重は云つた。

『自分は遠近の諸豪と盟約成つて、事既に此處に至つた。今、若し貴公の意見に從はんか、これ等の人々との約束を破棄せねばならぬ。男子の一言は金鐵より重い。何卒か村重が武門の意地も充分察し、男を立てさせて戴きたい』と。

さうして彼は遂に謀反を思ひ止まらなかつたの





であるが、これより先城中では、切りに村重に向ひ、

『何うせ信長に謀反する程なら、秀吉が單身この城にやつて來たこそ幸ひである。先づ彼を血祭にしよう』と、說くものがあつた。

然し、村重は、秀吉が、自分の身上を心配し、自分を信頼して、單身會見を求めて來たその友情を思ふと、どうしても不義の刄を研ぐことは出來なかつた。そして懇ろに秀吉を城外まで送り届けたのであつた。

◇

秀吉、生涯の大事業は總てこの流儀で率直にやつてのけてゐる。自分の信じたこと、自分の行ふ事には、常に神佛の加護ありとの強い信念で、總てのことを實行したのであつた。彼の事業が坦々として砥の如き大道を、輕車を驅つて行くが如き奇蹟的大成功を收め得たのも、畢竟この大信念の力であつたと思はれる。

斯うした大信念は何處から出て來るか。

寶積經に、こんな言葉がある。

『人の爲に護り、我が爲に護らず』と。

犬が近づく時、雞は逃げる。然し彼が雛を伴れてゐる時、犬が近づいたら、彼は猛然として犬に向ふ。犬が驚いてタジ／＼と退く光景は日常よく見るところである。人は我が爲に護る時に弱く、人の爲に護る時に強い。利欲の爲に護る時に弱く、正義の爲に護る時に強い。千萬人と雖も我往かん底の大信念は、實にかゝる無我の精神より生れるのである。而してかゝる信念の前には鬼神も亦之を避けるのである。

◇

私は、政黨に入つて、議員たること三十年、長い間に多くの人々に接して來たが、その間、人の榮枯盛衰悉くこの律に當て嵌つてゐる事を恐ろしく思つてゐる。

人の爲を圖つた人は自然と榮え、我が爲を圖つた人はいつか滅びてゐる。興るも滅びるも、畢竟皆自らのなすことである。

古今東西、偉人の蔭には多くの之を援ける人がある。多くの人々の力によつて大事業は建設されてゐる。多くの人の心を收攬する力は何ぞ。即ちこの無我の精神である。この精神の持主の下に、歸せずして多くの人が集り、其處から大事業が生れて居る。



野口英世博士發奮物語

見よ！　この母、この師、而してこの人

文學博士　坪内逍遙



野口英世博士

逆境を厭ひ、失意を悲しむのは人情の常であるが、其實、順境には意外な禍ひの根が藏されてをり、得意には兎角危機が潜んでゐる。だから、人は常に其順境を、其得意の時代をこそ警誡すべきだ、と古今ともに、達人は訓へてゐる。

秀吉ほどの人物でも、日本全國を平定して、太閤殿下と崇められた當座は、慢心して、大ぶ脱線しかけてゐた。或時、諸侯に向ひ『むかし北條時頼は、執權職の身で、姿をやつし、行脚僧となり、國々を遍歴し、民衆の實情を視察して其憂苦を救ふ事に力めたといふ事だ。天晴れの心掛け！　わしもそれに倣つて、全國を微行して見ようと思ふ』といつた。諸侯皆肚の中では『今はまだ國内各所に秀吉に敵意を抱く者が大勢ゐる。それだのに、何て無謀な、向う見ずの思ひ立ちだ！』と苦々しく思つた。けれども太閤の鼻息が荒いから、それを口へ出していふ者はなかつた。

たゞ前田玄以だけが『それはお危ない！　御旅行中にどんな變事があるかも知れません。おやめ遊ばせ』と諫めたが、慢心してゐる秀吉だ。『日本中は俺の掌中の物も同然だ。危險な筈はない。だれが何を爲得るものか？』と言ひ放つて聽かなかつた。

と、二三日過ぎて、例の曾呂利新左が久しぶりで出仕した。

『曾呂利、何か珍談はないか？』と太閤が訊ねた。

『さればでございます。最近、河内の福王山、光の瀧の不動尊へ參詣いたしましたところ、身の長二丈餘の鬼めが忽然と現れ、手前を引ツつかみ、すぐにも食ひさうにいたしました。で、手前申すには「さても〱怖ろしい、世にも凄じいお姿を、此世の思ひ出に拜ませて戴きました上は、命はをしみませぬ。が、最期に只一つのお願ひ。あの世の土産に、貴方樣の御通力をお見せ下さい。何と、梅干ほどの小ちやなお姿にもなられますか？」と申すと、鬼め得意になり「容易い事！　これを見ろ」と忽ち一つの梅干に化けました。で、いきなり引ツつまんで頰張り、すぐに呑み下してしまひましたので、危ない處を助かり

ました』と大眞面目。

一座の人々は『又例の通り欺がれた』と腹を抱へて笑つたが、秀吉だけは苦い顏をしてゐた。

その翌日、秀吉は諸侯に向ひ『君たちは曾呂利めのあの話を例の與太とばかり聽流してゐたやうだが、あれは予への諫言なのだ。二丈以上の惡鬼でも梅干ほどになつた瞬間には人間に食はれる。予も平人になつて微行すれば、どんな目に逢ふか知れぬわい。廻國は中止々々！』諸侯は初めて覺つて『話上手よりも聽き上手だ！』と感歎した。

以上は弘く知られてゐる所謂曾呂利傳說の一篇なのだが、これから話すわたしの話も、賴むは、たゞ一に讀者諸君が聽き上手であつて欲しい事です。

＊　＊　＊　＊　＊

ことしの五月十四日、わたしは未知の人から不思議な手紙を受取つた。



熱海の別邸に於ける坪内逍遙博士

謹啓未だ拜顏の光榮を得ず候處ますます御清健學界の爲に御盡瘁拜賀し奉り候 陳者明治三十年の頃順天堂病院に一醫學生たりし當時の野口清作は御著書「書生氣質」なる本を讀みて該書中に主人公たる野々口清作といふ醫學生ありて恰も野口清作を呪ふが如き筋立なるを知りて深く驚歎いたし候 自分も之に同情して英世と改名いたさせ世界の醫界の英雄たれと訓誡致し候處本人も大いに憤起し遂に野口英世博士と相成り申し候 右は偶然の御作意にて候哉今以て不思議に存じ候 按ふに御著書中の野々口清作の言動は野口清作の立志奮勵に頗る有力なる刺激と相成り候次第に候 願はくは當時の御趣意御洩し下されたく別包記念寫眞呈上御願ひ申し候 野口と自分とは義父子の間柄に候　敬具

昭和五年五月十一日　小林榮

坪内先生侍史

明治も十八年出版の愚劣な一戲作書と世界的醫學博士故野口英世氏！　意外な、餘りにも奇異な關係！

「書生氣質」は私の處女作ではあるが、其書名を憶ひ出すだけでも冷汗が出る惡作！　書肆の懇請に餘儀なくされて、「逍遙選集」の別卷中に收めさせはしたものゝ、其校正もろくろくせなかつた位だから、野々口清作とはどんな人物であつたか憶ひ出せず、早速「選集」を繰つて見ると、第六回『詐は以て非を飾るに足る、善惡の差別もわからどの惡所通ひ』といふ條下に、たつた一度だけ顏を出す人物に

『年の頃は二十二三、ある醫學校の生徒にして、もう一二年で卒業する野々口精作』といふ田舍出の人物がある。無論、主人公ではない。世を舉げて享樂を欲し、奢侈を好み、素寒貧の學生までが、仕送りする父母の苦勞を思はず、五十錢の疊附に一圓の麥藁帽子、四圓以上の博多の帶。身分不相應の外容坊三昧をして遊惰放蕩に身を持崩すが一般であるのに、此男ばかりは、

『井の字飛白の單衣は裄丈きはめて短く、三つ紋の麻羽織はさすがに近頃の仕立と見えて、ぞべら〳〵とは參らねども、當世風とぞ思はれたる。兵兒は大幅一反の白金巾、尻の邊りから幾重となく、幅廣のまゝに卷附けしは、どういふ本心か薩張わからず。西洋の辻地藏が被りさうな大きな麥藁の帽子をいたゞき、握りあまるやうなステツキを揮廻して、會釋もなくぶらり〳〵、折々口先を尖らして、人觸るればア、と言ひたさう……

ところが、此粗放、此磊落は、其實、父母、親戚、學校當事者等を欺瞞するための小策略。野々口精作は、つまり、假面を被つた放蕩者、つまりは、斯ういふ風がはりなのもあるといふ作意なのである。此人物は此條下だけで立消えてしまつてゐる。

「書生氣質」の稿を起したのは明治十七年、初めての發表は其翌年。ちやうど故英世博士が十歳の時に當る。だから、姓名、其他にどういふ類似があらうと、それは全くの偶然であることは言ふまでもない。で、大體、次ぎのやうな意味の返事を書いた。

『取るに足らぬ舊作が故博士發憤の一機緣となつたとは全く存じもよらぬ不思議なお話である。が、すべて物は見樣、話は聽き樣。それは、申すまでもなく、故博士の英邁な天資と貴下の剴切な御教訓が然うあらしめたに外ならぬのでありませう。按ふに、だらけ切つた現代の青年とても、斯やうな話を聞いたら、幾らか反省しさうなものです。實は、講談社の「キング」編輯局から、かね〳〵何か修養談を書けと頼まれてゐます。お差支がなければ、故博士の其頃の行實、貴下との御關係を一通りお洩し下されたい』と書いた。

野口博士の略傳は、當「キング」第三卷、第一號（昭和二年一月一日號）に『貧賤の不具息子、遂に世界學界の大權威』と題して綿貫六助氏が（少年時から歸朝まで）書いてをられる。又其以後の事や青年時の事は「日本醫事週報」の同博士追悼號に見え、尚ほ單行本では橘都政氏の著「野口英世博士傳」がある。

が、それらは皆最近に讀んだのだ。小林氏へ返事を出した當時は、博士の出世後の業績だけを傳聞で知つてゐたばかりで、少青年時代の事は全然知らなかつた。で、僞善家の放蕩學生野々口精作といふ類似の姓名が博士に不快を感ぜしめたのは無理もないとして、なぜ非常に驚歎したり發憤したりしたのかゞ呑込めなかつた。何か別に仔細があるのではないかと思つた。

で、小林氏から再應の便りのあつたまでに、私は一通り手がかりを調べて見た。さうして其間に、世には訛傳の多い事、隨つて邪推臆斷は謹まねばならぬ事、讀みちがへ、記えちがへは誰れにも有る、隨つて反讀、熟考が必要だといふ事等に關して

今更ながら覺る所があつた。

或人は、博士の洋行は失戀の結果であつたといふ噂だといひ、或人は、彼れは青年時代には中々の放蕩者だつたといふ噂だといつた。双方とも無證據で、單なる噂話であつたが、「書生氣質」との關係を說明するには、むしろ誘惑的な材料であつた。其うち或人が、『改名の動機に關する件なら、既に某作家が雜誌「雄辯」で「野口英世」と題して劇に書いてゐる。其序幕ウインのホテルの場、岡倉友三と博士との對話がそれだ。岡倉のモデルは中村吉藏氏。此對話は同氏の歸朝實話に因つたものだ』といつた。早速「雄辯」を捜して、其對話を讀んで見ると左の如くあつた。

英世　坪内博士？……ずつと以前に「書生氣質」といふ小說を出した人ぢやありませんか？

岡倉　よく御存知ですね。

英世　いや、あれには少し恨みがあるんですよ。（思ひ出すやうな表情で）明治三十年頃だつたと思ひますがね、まだ私が書生の時、國で偶然その小說を讀んだのです。すると、其中に野口淸作といふ人物が出て來たぢやありませんか？……淸作といふのは元來私の本名なんです。ところが、小說中の野口淸作は非常に頭のいゝ秀才なんですが、女に騙されるか何かして、終に零落してしまふんです。それで私はすつかり憤慨してしまひましてね、すぐ村の役場に駈け付けて、樣々と苦心した揚句、やつと野口英世といふ名に變へて貰つたんですよ。（笑ふ）

いよ〳〵解らなくなつた。野々口精作は、前記の如くほんの端人物で、一度ツきりで立消えてしまつてゐる。「書生氣質」の主人公である秀才は小町田粲爾といふのだが、これとても女に騙されはしない。もつとも、此對話は傳聞を劇化したのだから、當にはならないが、と思つてゐるうち、小林氏からの返辭も來、博士と同窓であつた奧田秀次氏、戸田求氏等から確實な種々の材料を貸與されたので、やつと眞相が明かになつた。訛傳を一掃するためかた〳〵、綿貫氏のと重複しない限りに於て、故博士の少青年時代の概略を話して見よう。

* * * * * *

家は福島縣猪苗代湖畔の小農家、父佐代助は隣村から家附きの女へ入籍、好人物ではあつたが大酒家、その爲に家計は不如意となるばかり、母は流石に傑人の母らしい天成の賢女、けれども其初めはわが姓名をさへも書き得ないほどの無學者。さういふ環境から、全く奇蹟的に、あんな世界的醫學者が偶然に出たのであらうか？　憤を發して、艱難に耐へ、自ら恃み、自ら彊めて休まなければ、所謂精神一到である、どんな事だつて達成されない筈はない、と教訓する場合もあるが、それは、其實、生活狀態に依る事で、てんで學資がなければ小學へさへも入られない。殊に、文化の中心へ遠い山間の僻地なぞで生れた身は、如何な天才者も、啓發される機緣もなく、自修しようにも手蔓がなく、或ひは自覺さへもせずじまひに、埋れ木となる事が多からう。あの如き賢母、あの如き良師がなかつたなら、

世界的醫學者故英世氏も、其祖父某同樣、翁島村附近に於ける一人格者としての名を留めたに過ぎなかつたかも知れない。

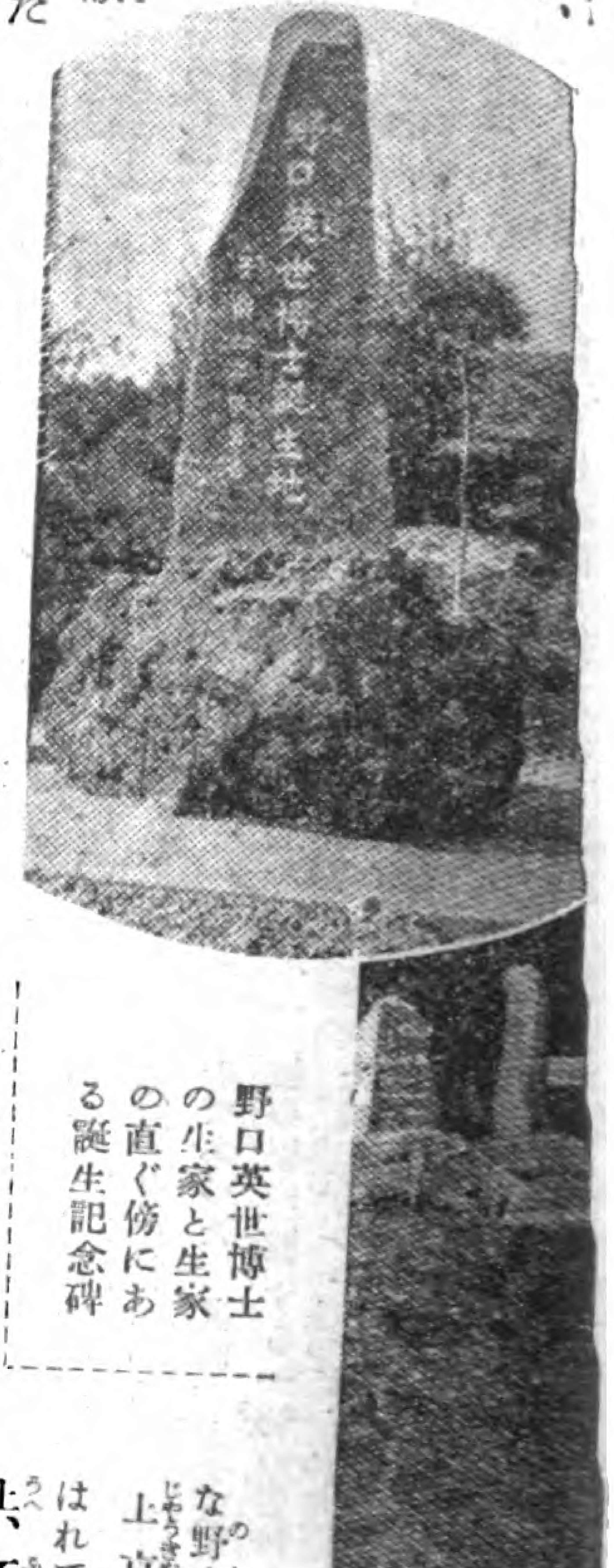
賢母しか女の事は——如何に彼女が其愛兒の爲に獻身的の努力をしたか、赤貧洗ふが如き生活の中からデンボウ清作と異名されてゐた不具子を、ともかくも小學に入學させたのは彼女の力であつた事等は——綿貫氏が既に書いてをられ、前記「野口英世博士傳」にも詳叙され、尚ほ現に小林氏の手許に、「野口博士母堂」と題した投谷秋比登氏の未刊稿もあつて、彼女がまだ幼少であつた會津戰爭當時の事から、其結婚の事、家政不如意の事、其父母を、其飲み助の夫を、其男女の子供三人を女の手一つで養つて、苦情一つ言はぬ働き振の事、おのが不慮の手ぬかりから不具にした子は殊にいぢらしく、せめて高等小學校ぐらゐ卒業する學資を稼いでやりたいと、灰へ字を書き習つてまで一心に勉學し、村の或助産婦の助手となり、後には其代理をも勤め、遂には獨立して開業するに至つたまでの大苦業の一部始終、代々大沼郡の中田の觀世音が信仰であつたが、彼女は特にわが子の爲に立願し、毎年七月七日の縁日に參籠通夜する事を前後二十年間只の一度も缺かさなかつた事、此純な、熱烈な母性愛は自然に博士の心肝に銘刻され、出世前も出世後も一日も忘れる事のなかつた事、なればこそ歸朝匆々、故國に歸るや否、慈母、恩師（小林氏）同伴で觀世音への禮參りを濟すと同時に、母を奉じて京阪其他へ漫遊し、脇目にもいぢらしいほどに孝養に專心した事等は今更改めて絮說するにも及ぶまい。あゝ、愛ほど強いものはない。中にも母の愛ほど靈なものはない。古今内外とも、傑出した人格は其母の薫陶に、慈愛に、行實に負ふ所が多い。母としての資格に於て、女性の責任の最も重く且つ大いなる所以である。



良師小林榮氏——デンボウ清作の尋常科卒業當時、試驗委員として出張し、初めて彼れに接して其偉材を看破し、其貧困を憫んでわが家に引取り、猪苗代の高等科に入學させ、進學の第一階梯を與へた小林榮氏、後にドクトル英世をして『自分は若し小林先生に見出されなかつたなら、牛追ひ太郎で一生を終つたであらう』と感謝せしめた小林榮氏、清作が左手の不具を醫

み、主唱して醵金し、新歸朝渡邊ドクトルに乞うて手術を施し、指の自由を得た清作をして隣恩の廣大無邊な事を感ぜさせ、一生を斯業に献げようと思ひ立たせた小林榮氏、其渡邊ドクトル方の薬局生となるにつけても、又いよく決心して彼れが上京するに際しても、或ひは精神的に、或ひは物質的に、訓へもし、助けもした小林榮氏、かくて清作改め英世が濟生學舍を卒業して、更に米國に遊學するに際しては、彼れをして後顧の憂ひなからしむべく、貧困な彼れの兩親をわが家に寄寓させ、改めて彼れと義父子の誓約を結んだ義人小林榮氏に關しても、前記の諸書に、既に一通り叙し盡された事は、今更繰返す必要もあるまい。たゞ彼の改名一件は、是れも主として小林氏の激勵と勸告に由つたのであると共に、多少正すべき誤りもあり、批評すべき點もあるから、特に此逸話を中心にして、やゝくはしく叙することにする。

清作が「書生氣質」を讀んだのは、明治三十一年の五月で、彼れが順天堂に在勤中、胃腸の重患に罹つて臥床してゐた時の事である。前掲の脚本では、「國」で讀んだと言はせてあるが、それは多分聞きちがへであらう。諸書に見えてゐる所は次ぎの



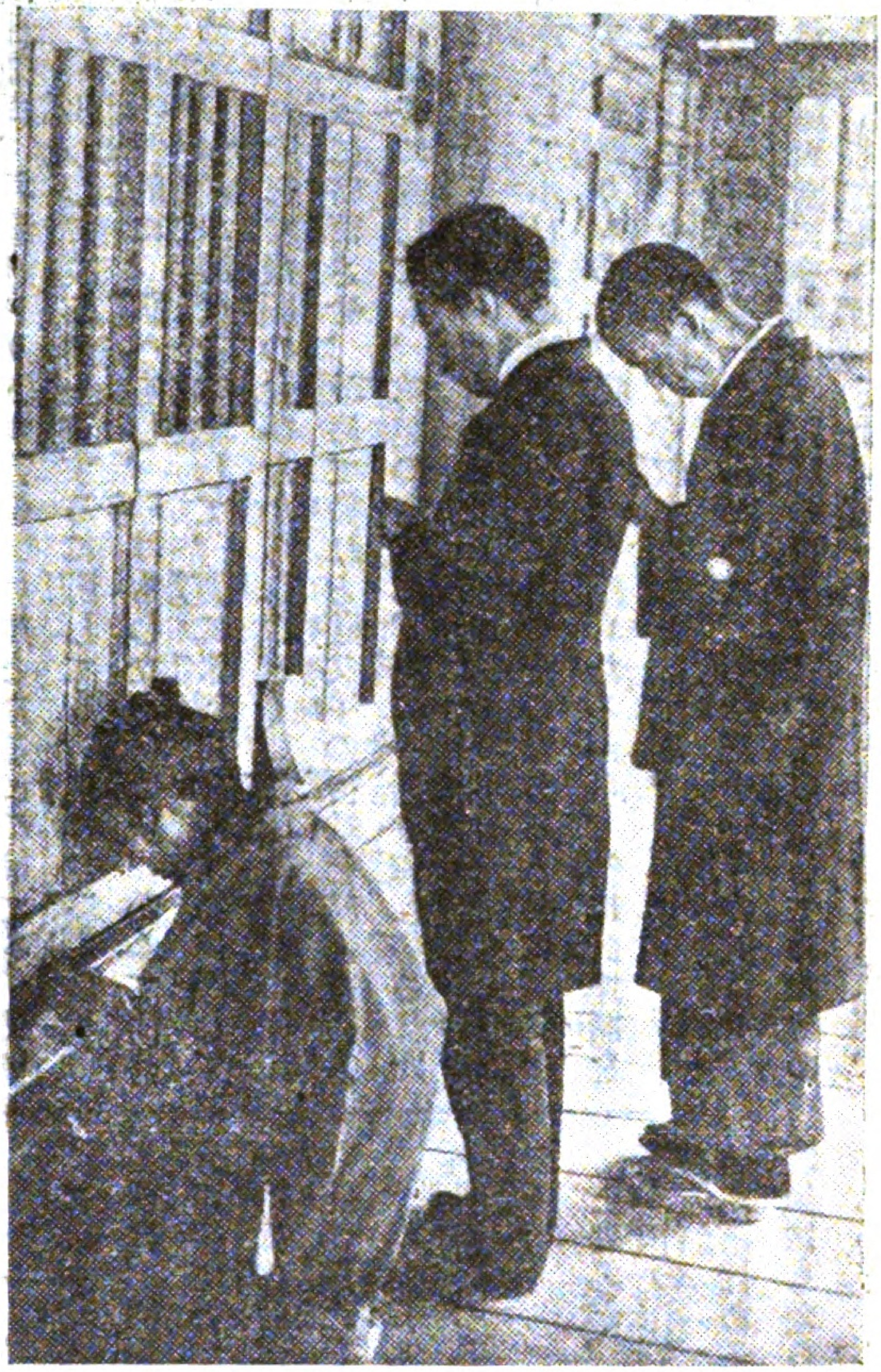
野口英世博士の生家と生家の直ぐ傍にある誕生記念碑

如くだが、それが彼れの直話に據つたものなら、原作意の甚だしい誤讀である。

『年齢、風采等までも同じやうな野々口清（實は精）作といふは田舍から上京した秀才の醫學生、それが友人に誘はれて或藝妓になじみ、學業を怠り、其上、不攝生をしたゝめに病氣になり、果は女にも捨てられ、失戀と病苦とで悲觀して自殺する、云々。

これを讀んで清作は非常に無氣味にも不吉にも感じた。といふのは、該醫學生の墮落以前の境遇、性格等が餘りにもよく自分に似てゐて、むしろ恐ろしい程であつたからである。彼れは一時は作者が彼れをモデルにしたのではないかとまで疑つた。前途の運命を暗示してゐるのではないかといふ迷信までも伴つた。小林氏も一讀し、其煩悶と杞憂に同情し、慰藉し、激勵し「世に秀づる傑人となれ」と祝福して「英世」と改名させた。云々』

ところが、小説中の精作にはそんな經歴は少しもない。いや、作の主人公小町田粲爾といふ人物とても、藝妓と馴染むといふ事はあるが、騙されたわけではなく、隨つて失戀はせず、病氣にもならず、自殺もしない。一體、どこをどう讀んだのであらう？　小林氏も一讀したとあるが、これは野々口精作の出る條下只數頁だけを讀んだのであらうから、無理もない。


中田の觀世音へ母と師とを伴ひてお禮參りをしてゐる博士

るまいか？

それにしても、清作は一意學問に精進してゐた眞摯熱誠の貧學生、或人の噂したやうに、放蕩する餘裕なぞがある筈はなく、又あらゆる意味で婦人關係なぞはなかつたといふ事だ。とすると、境遇性格、風采までが、相酷似してゐたから、とは、一體、何を指すのか？　此説明はどの關係書類にも見えてゐない。ひとり「日本醫事週報」の野口博士追悼號に載せられた牛莚野人の一文だけが、やゝ當年の清作を髣髴させるかと思はれるから、左に抄出する。

野口博士逝去。（中略）如何に同博士が其性格が變り物であり、學界に於ける偉功の人であつたかを語るもの云々。（又略）明治三十三年秋のころ蓬髮垢衣にして、左手の屈伸十分ならざる一癖ありげの一青年が某氏の紹介狀を持つて野人を訪うた。其言ふ所、悉く大言壯語にして、例へば、予は到る處門人食客の取扱ひを受けてゐるが、其實、先生格であると自信し得る點も多々ある。（又略）などといふのであつた。其時、其放縱らしき青年醫は野人の圖書室に所有せる細菌學に關する一切の書籍を借りて歸つた。（又略）其放縱らしかつた青年醫の一生ほど無類飛切りの困苦悲慘を重ねたものはあるまい。幼少時に過度の辛苦を嘗め盡したる彼れは、青年時代に極端のヒネクレと極端のエネルギー發揮となつたのは自然の已むを得ざる歸着であつたと言はねばなるまい。其鬱憤性格が[illegible]

想像するに、當時、大志に燃えてゐた清作だけに、或ひは重患の爲に甚だしく前途を悲觀し、極度の神經衰弱となつてゐたのではなからうか？　さうしてさういふ際に、滑稽本と聞いて、慰藉を得べく、最初手當り任せに第六回を讀んだのではなかつたか？　さうして姓名、境遇、風采等の類似に驚き、其學生の墮落生であるのを知つて不快感に襲はれ、もう其前後を讀む氣になれず、爾て看護婦なぞから、漠然と傳聞してゐた作の筋立を種に、精作を主人公の小町田と誤解もし混同もしたのではあ

良なる方面に轉回したゝめに、今日の大を爲すに至つたものと見るべきであると思ふ。若し彼れが渡米することなく、引續き日本に居て、變態性格を發揮しつゝ、不平不滿を繼續したならば、いかなる結りを告ぐるに至つたか解らなかつたであらう。云々。

これは重患前の事か、其以後の事か不明だが、とにかく重患の全癒と改名と——其結果としての渡米——が彼れに取つて一大回轉期を標榜したものであつたと言へる。さうして是等の事事に携はつて彼れを幇助し、彼れを教訓し、彼れを激勵したのは、今現に猪苗代に日新館と號する私立小學を經營し、全く無報酬で該地の少年らの薫陶に獻身し、齡既に古稀に達しながら、尚ほ聊かも倦色なく、一意育英に熱衷しつゝある彼れが恩師小林榮氏であつたことは、特に注意すべきである。

故ドクトル英世が天成の偉材であつたことは、今改めて言ふを俟たない。けれども若し彼れにして其未だ高等小學にさへも入り得なかつた時、未だ其不具な左の手の治療をもされず、隨つて其前途に一線の光明をさへも認め得なかつた時、十年の苦學其效なく、重患にさすがの英志も挫け、あはや女々しい悲觀に墮りさうになつた時、若し此良師の恰好時の扶掖が、指導が、給助が、教訓がなかつたなら、果してよくあの如き偉業を成就する素地を造り得たであらうか？

或ひは、改名の一條の如きも、小林氏は、淸作の誤讀を意識しながら、わざとそれを好機會に、激勵して、彼れを發憤させ、改めて志を奮ひ起させたのではなかつたらうか？ さうだとすると、小林氏こそは洵に話の聽き上手である。

故ドクトル英世は天成の偉材であつた。けれども其世界的業績の三分の一は、其因果關係からいふと、其母の慈愛と、薫陶と、其行實の自然的感化の賜であり、更に他の三分の一は、恩師の恰好時の扶掖と、教訓と指導と、給助の賜であつたことは爭はれない。あゝ、此母があり、此師があつての此人であつた！

靈なるは母の愛である！

偉いなるは師の感化である！

滔々として世を擧つて、自分が母であり、師であることをば忘れてゐるが如き人々の多い現代の讀者たちよ、たとひ私の話し方は下手であつても、どうぞ聽き上手であつて下さい。

（昭和五年七月廿五日）

最後の一錢

（幸田露伴博士の逸話）

幸田露伴博士は若い頃、北海道旅行から東京へ歸る途中、宮城縣鹽釜に來た時、懷中あますところ僅に一錢。すると博士は鹽釜神社へ參詣してその一錢を賽錢に奉り、即座に一首詠じた。

からからと辛き浮世の鹽釜で煎じ詰めたり懷の中

それから仙台近郊の原の町へ來た時、

宮城野の萩の餅さへ食へぬ身の腹のへるのを何んと仙台

と詠んだ。飄逸なる博士の面目躍如たるものがあるではないか。



一、私は何でせう？

時によると私は月の表面へも現れます。牛は眞晝になると私を探すやうにして歩きます。

闇夜には私は姿をかき消してしまひます。私は音もせずに動いて行きます。天氣のよい日にはあなた方と一緒に散歩します。

然し捕へようとしても捕へることは不可能です。

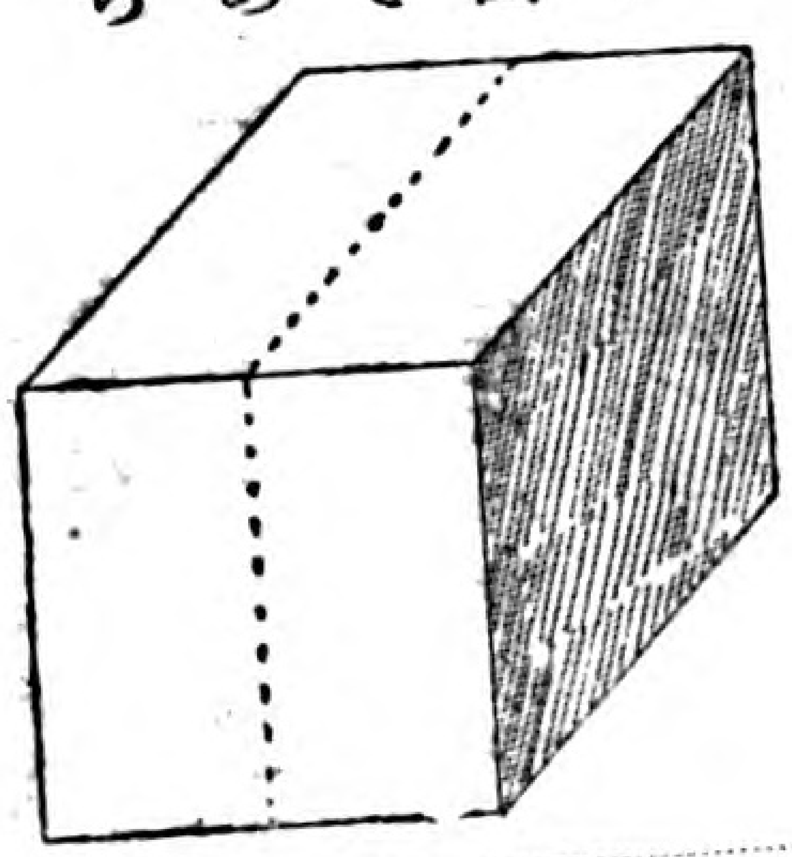
私は目方はありません。私は隨分高い所へも登れます。

あなたが何處かへ行く時に前に立つて御案内役をするかも分りませんが、直ぐその歸りには私はあなたのお供をします。

ハテ私の正體は何でせうか。

二、豆腐の切り方

これは羊羹の片一である。點線のやうに切れば、切口は四角となる。只一度で切口を六角ならしめる切方があるだらうか。



三、團體の人數

男女混合の團體があります。男女のどちらか一方の人數の何倍かになつて居ります。今この團體を解いて、次のやうにならべることになりました。

まづ第一に、右端から男四人、女二人、男女各々二人宛を横隊に整列させました。すると殘つたものが六人ありました。列んだものを元に戻します。

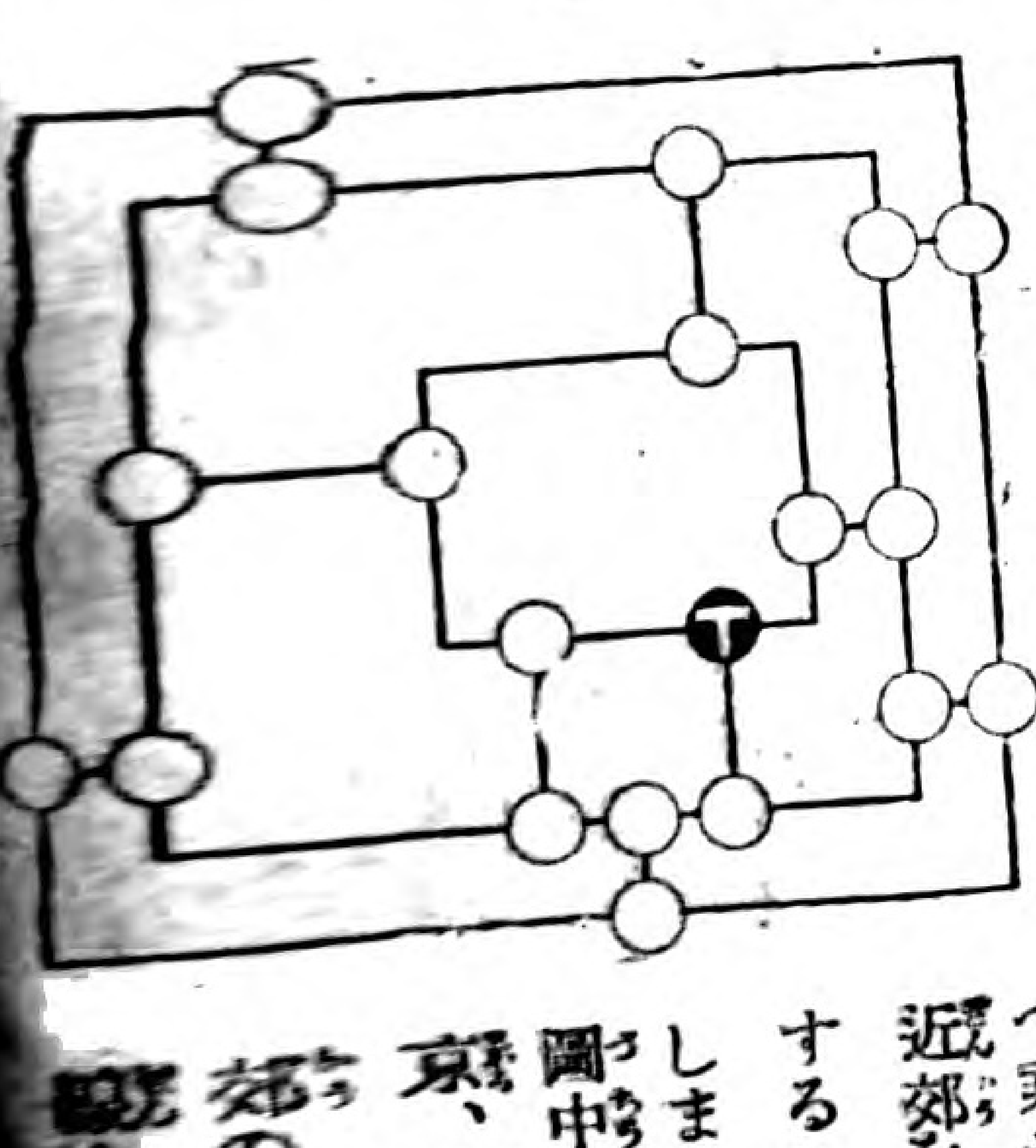
右の様にして、今度は、男九人、女二人、男女各々一人宛を整列させました。殘つたものが三人ありました。列んだものを元に戻します。

さて最後に、この二回の整列に於いて、一度もそれに加はらなかつたものを調べて見ると二人ありました。

一體この團體は、男女幾人から成つてをるでせうか。

四、遊覧自動車

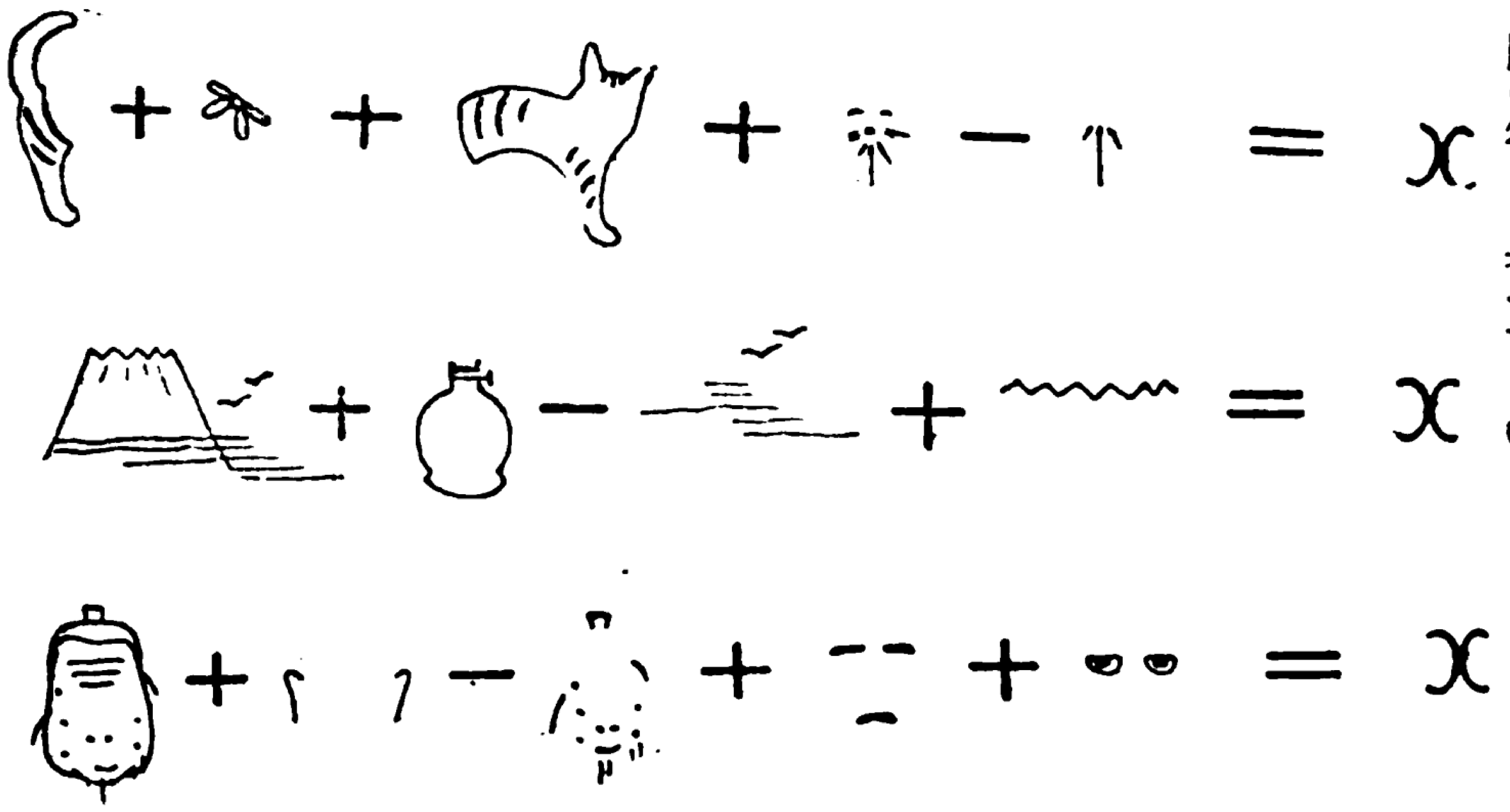
田舎から、お婆さんが上京したので、次郎君は、兄さんと相談して、お婆さんを自動車へ乗せて、近郊を案内することにしました。



圖中Tは東京、圓は近郊の名所、線は自動車

珍奇繪算術

何と面白い算術ではありませんか、左の三股の答をお考へ下さい。

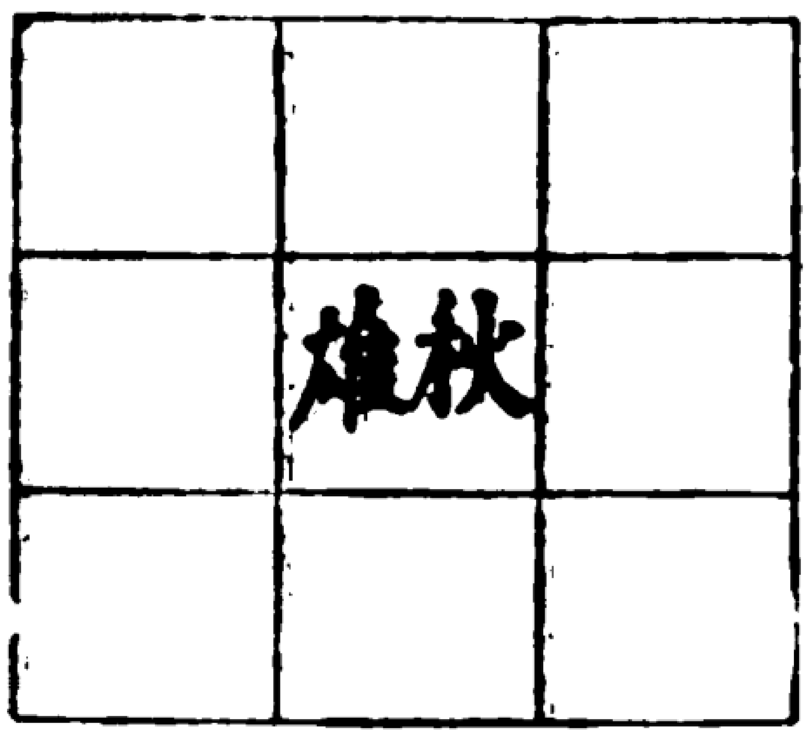


道を示したものであります。此名所を一つも餘さず、同じ場所へ二度立寄ることなしに一巡するには、どういふ風に自動車を進めて行けばよいでせうか。

五、署名のある紙片

『ね、清君、賢いい君にとつくり一つ考へて貰ひたいことがあるんだが……』

と云つて、秋雄君は、葉書大の厚紙を清君の前に出して見せました。それには、圖の如く厚紙を九つに仕切る直線と中央の部分に秋雄といふ名前とが書いてありました。秋雄君の問題といふのは、その厚紙を直線通り九つに手でひき裂きバラ〳〵になつた九枚の紙片をごちやにして、その中から署名のしてある一枚の紙片を、目を閉ぢたまゝ探し出すといふのであります。



清君は、しばらく考へて居ましたが、やがてニコ〳〵しながら云ひました『わけはないさ、これだけの智慧があればね』。

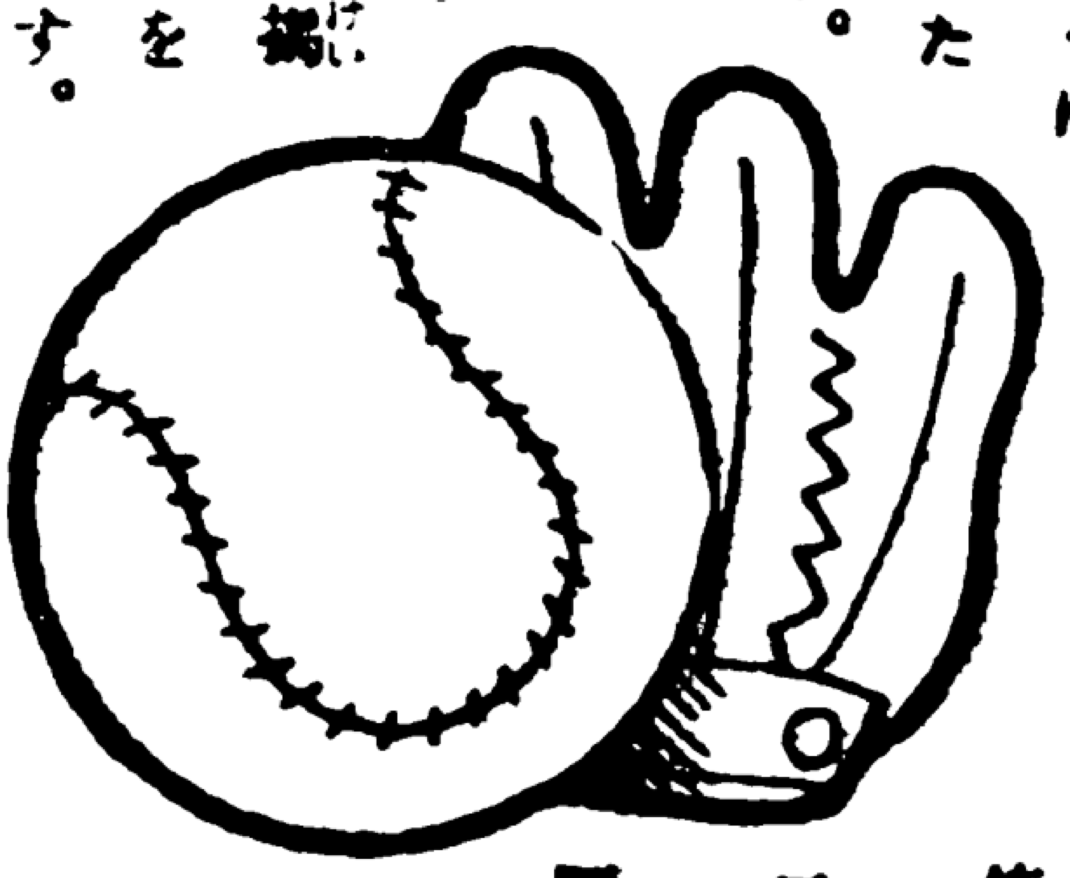
さて清君の智慧といふのはどういふことでせうか。

はめ繪募集

これは、はめ繪と云つて、その昔非常に流行したものであります。

第一圖は問題の繪型で、第二圖は、それにあてはまるやうに工夫して描いた繪であります。第二圖に倣つて、素晴らしい御傑作を御考案下さい。掲載者には薄謝を贈呈いたします。


第一圖


第二圖

（本欄解答は三六五頁にあり）

心(こゝろ)の日月(じつげつ)

菊池寛

田中良畫



社長夫人

磯村の姿を見て、しかもそのまゝ、自動車を乘り過させてしまつたことが、麗子の心を急に曇らせてしまつた。

（どうして、あのとき早く自動車から降りなかつたどらう。）

と、麗子は、後悔した。（でも、あの方、私のことなんか、すつかり忘れていらつしやるに違ひないわ。）

さうも思ひ返した。

でも、やつぱり心がとがめた。少女歌劇を見ようと云ふやうな、ほがらかな氣持は急になくなつてしまつた。

それよりも、他郷の人ばかりの間に住んで來た麗子には、磯村の姿のなつかしさが、彼が見えなくなつてから、勃然として胸の中に湧いて來たのである。

（なぜ、言葉をかけなかつたのだらう。やつぱり、わたしはお會ひしたかつたのだわ。）

だが、そんな事を思つてゐる裡に、車は忽ち止まつた。氣がついて見ると、歌舞伎座の前に着いてゐた。

それは、蛋白色に塗られた壯麗な御殿のやうな建物だつた。太い圓柱の立つた玄關をは入つて見ると、まだ幕が始まらない前と見え、十二三歳から、二十歳までの若い令孃達が、赤い絨毯を敷きつめた廊下の上に花のやうに散つてゐた。

麗子は、どこへどう行つてよいのか分らないやうだつた。でも、少女の案内人に跟いて、自分の座席を見つけて、とにかく坐つた。舞臺には、美しい花鳥模様の緞帳が降りてゐた。天井は、二重の格子のはいつた白木作りの格天井だつた。

でも麗子の眼には、その天井や銀色の葉に赤い實が成り、金の鳥の飛んでゐる目のさめるやうな緞帳も、椎の實形の電燈など、何にも目に映らないほど、彼女の心は先刻一目見た磯村のことで一杯だつた。

（あれきりにしてしまつては、私の方が悪いのだ。もう、一度お電話をかけて見よう。そして、もう一度あの方の本心を訊いて見よう。）

と、考へて來ると、麗子はすぐにも電話をかけたくなつた。牛込四八〇五番と云ふ番號は、ハッキリ覺えてゐた。でも、今かけたのでは、あの方まだ寄宿舍に歸つてゐないのに定まつてゐる。一幕濟んでからと思つた。

そのうち、フットライトが夢のやうに點くと、オーケストラボックスから開幕前の序樂が始まつた。

音樂好きな麗子は、しばらく磯村のことを忘れてきゝ入つてゐた。幕が音もなく上ると、『シンデレラ』の第一幕だつた。

運命の箱の中の、夢のやうな美しさに、麗子は心をときめかした。

歌劇の筋は、お伽噺とは少し違つてゐた。でも、麗子にはシンデレラの可愛い姿に、心を惹かれずにはゐられなかつた。

幕が降りると、麗子は廊下に出た。どこかに、きつと電話があるに違ひないと思つたからである。

だが、廊下の美しい人波を見ると、何となく氣おくれがして足が竦むやうに覺えて、しばらくは褪紅色にぬられた壁により添つて、前を通る人々をぼんやり見てゐた。

十三四歳で、ちやんとした夜會服を着てゐる少女などを見ると、いかにも都會的な氣がして、麗子は羨ましいやうな氣がした。みんな姉妹やお友達と一しよだつた。麗子のやうに、一人ぼつちで來てゐる人は誰もなかつた。

ふと、麗子はおどろいて目をみはつた。自分の眼の前を社長が若い美しい婦人と通りすぎようとしてゐるのだつた。



その婦人は、社長の奥さまに違ひなかつた。水色のイヴニングドレスを着た長身の姿が、いかにも高貴で美しかつた。たゞ顔は、美しいが少し冷たく險があるやうに思つた。麗子は、お辭儀をしようかしまいかとためらつたが、やつぱりした方がいいと思つて、頭を下げた。

すると、そのお辭儀が社長には、氣づかれずに夫人の方にだけ見られた。

夫人は、目をみはつて麗子を見た後、良人の袖を引いた。そして、何かさゝやいた。(あの方が挨拶してゐるわ)と云つたらしい。

『やあ!』

社長は、立ち止まつて微笑した。

麗子は、丁寧に社長と夫人とに挨拶した。

『これ、會社の皆川さん。』

さう云つて、社長は夫人に紹介した。

『さう!』

夫人は、かるく答へて一寸頭を下げた。

丁度、そこへ麗子と同じ位の年輩の令孃が、人込の中から社長を見つけて追ひすがつて來た。

『お兄さま、お茶を飲みませうよ。』



『あゝ飲んでもいゝ。』
その令孃は不思議さうに麗子を見た。
『この方は、會社の皆川さん。これは、妹です。』
と、社長が云つた。麗子は、丁寧にお辭儀をした。彼女は、眞赤な地に黒いバラの模様のあるイヴニングドレスを着てゐた。そして斷髪だつた。
『まあ！　何て、綺麗な方でせう！』
彼女は、麗子を見てゐたがいきなり云つた。
麗子は、恥かしくつて、顔が眞赤になつた。
『わたし、貴女のやうな方大好きだわ。お友達になりたいわ。お兄さま、お友達になつてもいゝでせうこの方と。』
『うん。』
社長は、微笑してゐた。
『ねえ、みんなでお茶を喫みに行きませうよ。あなたも、いらつしやらない？　お姉さまいゝでせう？』
だが、夫人は先刻から急に、不機嫌になつてゐた。
『だつて、混んでゐるでせう。』
彼女は、そつけなく云つた。そして、良人をうながすやうにして歩き始めた。

『ちや、また。』
社長もさう云つて麗子から離れて歩き出した。夫人の態度のけはしさを感ずると、麗子は心が少し痛んだ。
社長の妹は、まだ麗子の傍から離れなかつた。
『いつから會社へいらしつたの？』
『四月からですの。』
『わたし、會社へ行つたことないのよ。でも、わたし職業婦人になりたいの。お兄さんに使つてくれないかと云つてゐるのよ。』
『まあ、おほゝゝゝ。』
社長に比べると、やゝ丸顔で色はあさ黒いが、目の美しい娘だつた。
『ね。今度私の家へ遊びにいらつしやらない？』
『はあ！』
『女學校はどちら？』
『岡山ですの。』
『わたしは、文化學院なの』
『文化學院つて、たいへん自由な學校ださうでございますね。』
『えゝ。自由よ。ねえ、わたし達二人だけでお茶をのみに行きませうよ。』
さう云つて、彼女はどん／＼先に立つて歩き出した。
『わたしのお姉さまは、大ブルジョアの娘よ。だから、あんなに威張つてゐるの。』
彼女は、麗子と並んで歩きながら云つた。
麗子は、お茶を飲んでゐる内に、彼女とだん／＼親しくなつた。
『わたし、貴方のやうな大人しさうな方、大好きだわ。わたし、貴女とお友達になりたいの。』
『わたし二三日の裡に、會社へお電話するわ。そして、一しよに遊びませうね。』
『どうぞ。』

×　×　×

二人が、喫茶店を出て見ると、第二幕が開いた後で、廊下には人影がなかつた。
『あゝ、始まつてゐるわ。ぢや、失禮！』
さう云つて、彼女は扉をあけて、は入つて行つた。
麗子は、自分の座席に通ずる扉の方へ歩かうとして、ふと外套を預る係の前に、卓上電話が置いてあるのに氣がついた。
麗子は、勇氣を出して、そこへ行つた。
『この電話お借りしてもいゝんですの。』
『どうぞ。』
係の女が云つた。

　麗子は、息をはずませながら、牛込の四八〇五番を呼び出した。それは、二月ぶりに呼んだ番號である。
『あの聖陽學舍ですか。』
『さうです。』
『あの磯村さん、いらつしやいますか。』
『磯村？　磯村何と云ひますか。』
『磯村晃さんです。』
『あゝ、磯村晃ですか。あれは退舍しました。』
　いかにも、輕蔑し切つた返事だつた。麗子は、胸を衝かれるやうな氣がした。
『どこへいらしつたでせうか。』
『それは、分りませんな。』
『さうですか、移轉先は分らないんでせうか。』
『少し不都合なことがあつて退舍を命じたのですから、分りません。』
『あゝ、失禮しました。』
　麗子は、心が暗くなつた。やつぱりあの方は墮落していらつしやるのだ。自分の直觀は當つてゐたのだ。だから、自分に對してもあんな薄情なことをなすつたのだ。麗子はさう思つて、自分の胸に殘つてゐる磯村晃と云ふ字の痕跡を、すつかり拭ひ取つて了はうと決心した。

嫉妬

　社長と夫人とは、麗子と別れると、劇場の左手につゞいて居る賣店の中には入つて行つた。
　そこで、夫人は少女歌劇のスターのブロマイドを買つた。
　そのとき、開幕の鈴が鳴つたので座席へ引き返して來た。
『ねえ、先刻の女の人ね。あれ會社で何をしてゐるの。』
　夫人は、座席へ着くと小聲で訊いた。
『事務員さ。』社長は、事もなげに答へた。
『さう。綺麗な人ですわねえ。あんな綺麗な人が居ることなど、貴君はちつとも、おつしやらないのね。』
　社長は苦笑しながら云つた。
『そんな事を、一々報告してゐたら、キリがないぢやないか。』
『何時から、會社へ來てゐるのですの。』
『二月位前から。』
『あの人は今日、なぜ寶塚へ來たんでせう。』
（俺が切符をやつたんだよ）と、かる〴〵答へるつもりであつたのが、夫人の態度が、こじれてゐるので、さう素直に答へられなかつた。
『そんな事知るもんか。』
『あら、貴君が切符をおやりになつたからぢやありませんか？』

『馬鹿な。僕はやりやしないよ。』

『貴君は、阪急の小村さんから、いつも澤山お貰ひになるんぢやありませんか？』

『おい！　おい？　つまらないことを云はないで、だまつて見ようよ。今歌つてゐるのがお前の好きな浦野まつほだらう。』

『そんなことよりも、わたしはあの人がどうして、今日寶塚へ來たか知りたいんですのよ。』

社長は、取り合はないで、舞臺の方を見てゐた。そこへ妹の明美が麗子と別れて、は入つて來た。

『今あの方と、お茶を飲んでゐたのよ。』

と小聲で、夫人に云つた。

『あの方つて誰？』

『皆川さんと云ふ會社の方！』



『まあ。明美さん、あんな人とお茶を飲んではいけませんわ。』

と、夫人は云つた。

『なぜですの？』

明美は、問ひ返した。

『だつて、職業婦人でせう。職業婦人なんて、いやぢやありませんの？』

『だつて、あの方大人しいゝ方ですわ。お兄さんから、切符を頂いてありがたうと云つてゐたわ。』

『まあ！　切符を……』夫人の、眼は、忽ち險しく光つた。

『お兄さんから、頂いたので、初めてこんな大劇場へ來られたのだと云つて欣んでいらしつたわ。』

夫人は、だまつて良人の顔をにらんだ。それきり、一言も口をきかなくなつた。

美貌禍あり

それから三日目だつた。麗子が會社に出て、いつもの通り仕事をしてゐると、給仕が急には入つて來て叫んだ。

『社長さんの奥さまがいらしつたよ。』

『まあ！』

と、麗子が立ち上る間もなく、夫人が扉を開けては入つて來た。

今日は、ローズ色のアフターヌーンを着てゐられた。

『いらつしやいませ！』

麗子は、あわてゝお辭儀をした。

夫人は、だまつてかるく頭を下げたまゝで、奥の部屋へは入つて行つた。まだ二時に間があるので、社長はむろん來てゐるわけはなかつた。



わざと、社長が出社しない前に來たやうに、麗子には直感された。庶務課長の工藤が、きゝつけて飛んで來ると、何かと御機嫌をとつてゐた。しばらくすると、工藤が麗子を呼びに來た。

『あの社長さんの奥さんが、御用があるさうですから。』

麗子は、一寸不安に感じたが、わるびれないでは入つて行つた。工藤は、席をはづした。

夫人は美しい顔を緊張させて、ニコリとも笑を見せてゐなかつた。

『あのたいへん失禮ですが、一寸だけ承はりたいんですの。』

言葉だけは、ひどく丁寧だつた。

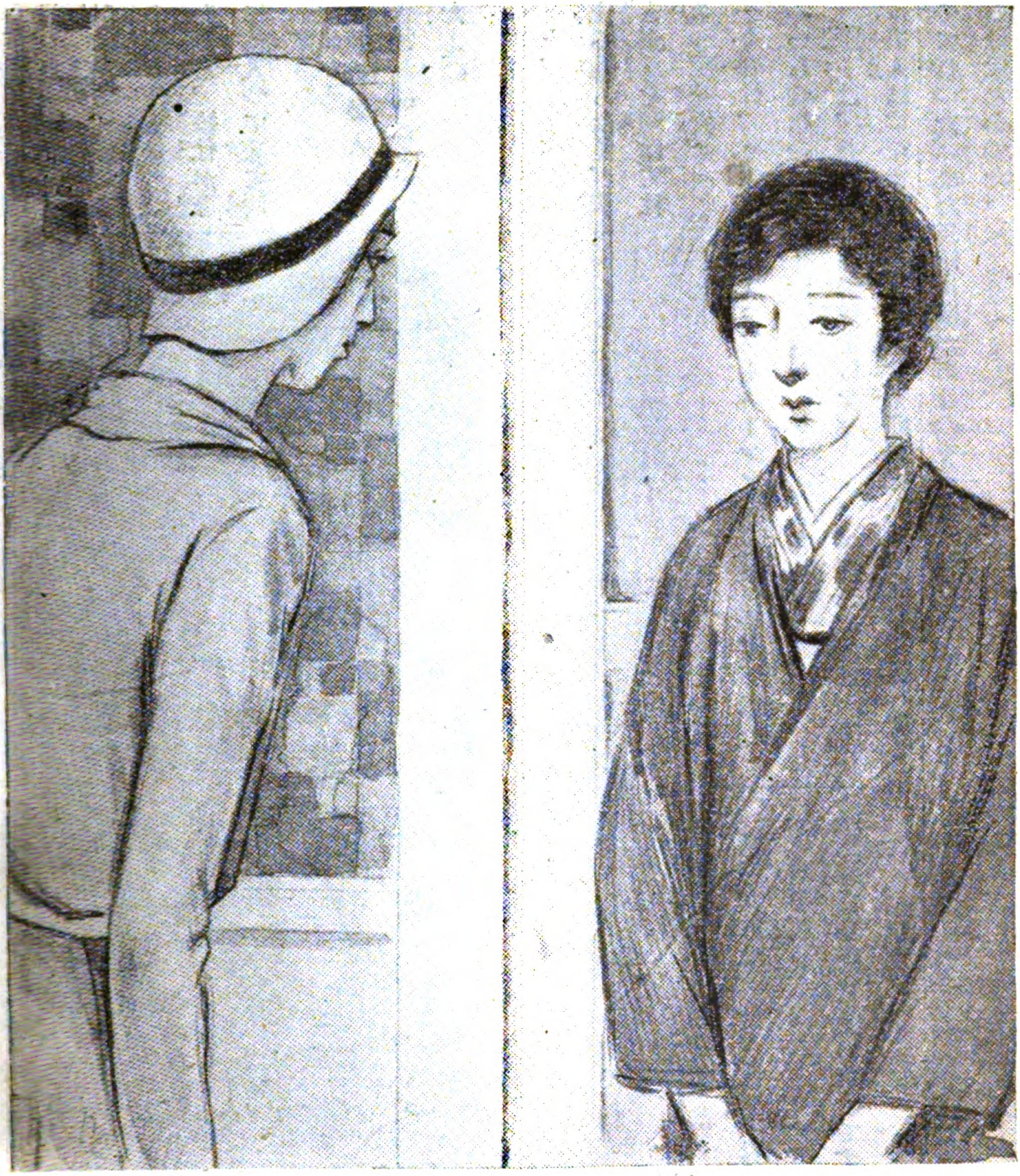
『どうぞ。』

『工藤さんから、聞いたんですが、貴女は社長係なんですつて。』

『えゝ。』

『主人がいろ／＼お世話になりますわねえ。』

それは、可なり皮肉にとれる挨拶だつた。



『いゝえ。』
『この間、寶塚へいらしつてゐたでせう。』
『えゝ。』
『あの時の切符は、主人が差しあげたのですつて。』
『えゝ頂きましたの。』
『それから、外に何か主人が差しあげたもの、ございません？』
まるで、裁判官のやうなきカだつた。
『…………』
麗子は、ほんたうのことを云ふべきかどうかと、心で迷つた。
『あの……』
『ハツキリおつしやつて頂きたいと思ひますわ。わたしは、つまらないことで、お互に誤解したくありませんから。』
麗子は、少しカツとした。いや堅つてゐられるやうで、



だつた。
『いつか香水を頂きましたわ。』
『それから。』
『半襟。』
『それから。』
『帯留を頂いたことがございますわ。』
『まあ！　帯留！　主人は、何だつてそんなものを貴女に差しあげるんでせう。』
『あの私、毎日花を持つて來て、あの花瓶に挿しますの。そのお禮だと云つて下さるんですの。』
麗子は、涙が出さうになるのを、じつとこらへて返事をした。
夫人は、その小さい花瓶にさしてある矢車草をじつと見つめながら、
『毎朝、貴方が花を持つていらつしやるの?』
『えゝ。』
『貴女も、御奇特なお志ね。』
『……』
麗子は、泣き出しさうになつた。
『どうも、ありがたうございました。ぢや、あちらへお引とりになつて下さい。』
麗子は、悄然として自分の席に歸つた。不當に侮辱された怒りと悲しみとで胸が一杯だつた。
麗子と入れ代りに、夫人は工藤を呼んだ。そして、工藤としばらく何か話したと思ふと、奥の部屋から出て來て、立ち上つて挨拶する麗子には會釋もせず、サッサと歸つてしまつた。
夫人を送つて、自動車に乘るまで見送つたらしい工藤は、すぐ麗子の所に來た。
『ねえ。皆川君、困つたことになつたよ。君は、どうして社長に切符なんか貰つて寶塚へなんか行つたんだ。』
『だつて、社長さんが下すつたんですもの。』
『あの奥さんは、滅茶苦茶なやきもちの上に、君が人並はづれて綺麗なのだから、たまらないよ。君を、入社させたと云ふので、僕まで散々とつちめられたよ。そして、即刻君に出て貰へと云ふんだよ。それも、社長に話すと、社長が引き留めるかも知れないから、君が自發的によすことにさせろとから云ふん

だ。君も、あんな奥さんに見つかつたのが、災難だと思つて、社をよしてくれないか。』

『………』

『社長だつて、君に野心があるわけでなく、また君が品行方正なのはよく分つてゐるんだが、あんな奥さんに逢つちや叶はんよ。その代り、これだけ退職手當をやつてくれと云つて、奥さんが二百圓だけ置いて行つたよ。君にゐられることが、よつぽど氣になるんだね。』

さう云つて、工藤は麗子に百圓札を二枚渡さうとした。

『頂きませんわ。そんなもの。』

麗子は、汚はしいもの〻やうに、それを斥けた。

『なぜだ。退職手當だから取つて置きたまへ！』

『私、そんな意味でお金を頂くことはございませんもの。』

『なるほど、君の云ふ通だ。君はちつとも疚しい所はないんだもの。だが、會社からの退職手當だとすると、一月分やつとだよ。それでもい〻か。』

『退職手當なんか、頂きたくございませんわ。』

『さうあつさり云はなくつてもい〻よ。まあ、出來るだけのことをしてあげよう。だが、とにかく自分からよしたいと云ふ事にして、よしてくれるか。』

『はい。よしますわ。』

『ぢや、社長が來たら、君から一言云つてくれないか。』

『はい。』

麗子は、さう云つたとき、それまで抑へてゐた涙がハラ〳〵とこぼれた。

『氣の毒だね。ほんとうに、だがその裡、またい〻ところへ世話しよう。君は、眞面目によくやつてゐるのに、これがほんとうの災難だね。』

さう云ひながら、工藤は部屋から出て行つた。

（麗子は、口惜しさと悲しさとで、胸が一杯だつた。でも、やつぱり社長さんから、何か頂いたのがいけないんだわ。やつぱり、私もいくらか悪いんだわ。）

さう考へて、やつとあきらめる外なかつた。

夫人が歸つてから、一時間近く經つて、社長はやつて來た。麗子は社長の顏を見上げる勇氣もなく、うつむいたま〻で挨拶した。麗子は、退社のことを社長に話さなければならないと思ひながら、どうしても社長室には入つて行く氣にはなれなかつた。

すると、社長の方が麗子を呼んだ。行つて見ると、いつもの通り、四五通の手紙に返事を出す用事だつた。

その用事を受けとつてから、麗子は云つた。

『あの、私都合でよさせて頂きたいと思ひますの。』

『えつ！ なぜ。』

社長は、可なりあわてゝゐた。

『都合がございまして。』

社長は、少し考へてから、

『さう。君が、さう云へば、僕として立入つてきくわけには行かないが、もし仕事が氣に入らないとか、待遇がわるいとか云ふのなら、ハッキリ云つて貰ひたいね。』

『いゝえ。そんなことございません。』

『さう。それなら、仕方がない。しかし、僕は君にずーつと居て貰ひたかつたんだ！』

さう云ひながら、社長はじーつと麗子を見つめた。社長の眼に、感情の火花が、ほとばしつたのは、これが初めてゞある。

『……』

麗子も、胸がせまつて、何も云へなかつた。

『失禮だが、一身上の都合でよすのなら、相談に乘つて上げてもいゝんだが。』

『…………』

『どうしても、よさなければいけないんですか。』

『はい！』

『さう。ぢや、仕方がない。明日から、貴女が持つて來て下さる花を見ることも出來ないんですね。』

社長は、さびしく笑つた。

『……』麗子は、涙が出さうだつた。

『皆川さん。もし、先々僕でもお力になれるやうなことがあつたら、何時でも相談に來て下さい。』

『はい。ありがたうございます。』

『いつから、およしになりますか？』

『今日から。』

社長の顏は、見る〳〵悲しみの雲に掩はれたやうに、麗子には思へた。

『ぢや、お別れに一度握手をさして下さいませんか。』

麗子は、恥しかつたけれども云つた。

『どうぞ。』

二人の手は、ぴつたり握り合はされた。

『皆川さん、僕は貴女が好きだつたのです。しかし、僕は妻がありますから、どうにもなることではなかつたのです。いま、お別れした方が、僕は苦しまなくてすむのです。どうぞ、御幸福に。』

麗子は、カッとなつて、どう云つてよいか分らなかつた。ただ、相手が握るまゝに委せてゐた。

『ぢや、左様なら。』『…………』

麗子は、言葉の代りに涙が、はうはいとして溢れて來た。

『麗子は、逃げるやうに社長室から出た。（つゞく）

『心の日月』黨より

◇……何といふ『心の日月』の面白さ！遠く異境の地で、毎號『キング』を待ちこがれてゐます。妻も大の『心の日月』黨で、『キング』の到着した日は奪ひ合ひです。（在カナダ、高野寶吾）

◇……『心の日月』の麗子はどうしてあのやうにお氣の毒な事ばかり續くのでせう。でも、誘惑を切り拔けて突き進んで行く雄々しい心持が、私はうれしくて堪りません、早く麗子の身に幸福な日が來る樣に心待ちに待つて居ります。（和歌山市、園田久子）



懸賞入選作

金鯉兜物語

永瀬英一
挿繪 小田富彌

一

青葉の匂ひに、天も地も仄かにつゝまれて、すが〳〵しくも朗らかに朝の風薫る、五月野の日の光り。こゝろゆく迄生きてゐる生命が讃へたくなる。が、それは昨日までの事。

もりあがり〳〵、山吹き登る青葉の風も、からりと晴れた日光も、變りはないが、扨て野にも山にも、唯轟くは人馬の響、陣鉦太鼓鬨の聲。小牧の山を中心に、殺氣戰氣は天地を籠めて、おのづからなる武者震ひも、いとすさまじく感じられた。

天正十二年、遠州濱松の城主徳川三河守家康は、織田信雄の乞ひを容れ、兵を出して此處小牧の原に、賤ケ嶽に柴田勝家を討つてより威力天下に誇る、羽柴筑前守秀吉の大軍を迎へ、對陣したのである。

秀吉は名立たる豪氣の大將、自から兵を率ゐて先陣する。家康とても後れず、血氣壯氣の三河武士を從へて、必勝を期して對した。

朝風と共に戰機は熟して、やがて修羅劍鬪の巷が現出した。兩軍共に千軍萬馬の强者である。羽柴勢は幾度か徳川勢を追つた。徳川勢は又幾度か盛り返して羽柴勢を追つた。

『家康討たずんば、天下平定の妨げ、拔かるな!』と秀吉が自軍を勵ませば、

『秀吉は舊主の子息に弓引く横道者、許すな!』と家康は激し

く下知する。

一進一退、雄叫び、血潮屍山の中に、兩軍は必死をつくして戰つた。

合戰酣の中に、日はいつか午をつげ、合戰酣のうちに、數は次第に更けて來る。

その頃である。

羽柴勢の中から躍り出た武者一騎。黒づくめの裝束も天晴目立つ白馬にまたがり、大身の槍をりゅう〳〵としごいて叫んだ。

『徳川勢に良き敵なきや。吾こそは羽柴方、淵兵衛清秀の弟、中川權八郎清澄!』

名乘りも目ざましいが、權八郎の働らきも亦目ざましかつた。唯一騎亂軍の中に驅け入つて、當るを幸ひ突き立て突き倒し、阿修羅の如く戰つた。流石の徳川勢も、彼一人にはゞまれて、一時は颯ッと崩れ立つた。

時に! やゝ後方から、味方の勢を驅け拔けて、權八郎の前へ現れた徳川方の武者。黄金作りの鯉を戴く大兜が、一際凛々しい若武者である。

『權八郎とやら參れ!』

大喝一聲叫びさま、大刀構へて突立つた。

『おう!』

權八郎も滿足げに槍を立て直す。

勇ましの武者ぶり、兩軍の將士は目を瞠つた。

『參れ! 何奴ぢや』

『吾こそは……いや待て』と若武者は名乘りかけて、急に中止した。

『待てとは後れたか』と、權八郎はいら立つた。さつと駒から飛び下りて、

『否後れはせぬ。思ひ出した事があるのぢや、急くな、暫く待て』

平然と言ひ返した金鯱兜の若武者は、やがて羽柴方の陣に向つて、憚りもない大聲で、高らかに呼ばはつた。

『あいや、羽柴方の大將に物申す。貴軍の勇將中川權八郎殿の首級申受けんとする時も時、斯く申す身共、尿意催し堪へ難く存ずる。用中討たれなば武士の恥辱、暫しの間鐵砲矢玉を、おとゞめ下さるまいか。何と如何でムるぞ』

言ひも言つたり意外の言葉、聞く程の者、敵も味方も唯あッと呆れた。

『心憎き事を申すぞ、若者。ずうんと氣に入つた。心ゆく迄用を足すが良いぞ』羽柴の陣から、若武者に劣らぬ程の大聲が響いた。

『此の手の大將加藤虎之助清正、確かに引受けたぞ! あいや

者共、暫く控へい！』
『流石は加藤殿、忝なう厶る』若武者は、愉快さうに一禮して『聞くやうの次第ぢや。權八郎お身も待つか』
『待つぞ、待たいでか！　若年に似合ぬ豪膽無双、嬉しい奴ぢや。用足し殘して笑はるゝな。とまれ良き敵！』
權八郎は滿足さうに言つた。『討つには惜しいぞ。わはゝゝゝ』
『討つとは誰を。はゝゝゝ。暫く許せ』
とばかり、若武者は悠々と前をまくつた。忽ちほとばしる白水、一條を描いて、快よく地に鳴つた。
思ひ充分に用足し終つた若武者は、いかにも氣持よささうに武者震ひ一番、



『いから待たせたの』莞爾と權八郎に挨拶すると、清正の陣に向つて『加藤殿、御厚志存分に受け申した。忝なう厶る。いざ是より權八郎殿との一騎討、御笑覽下されえ』と叫んだ。
『面白き若者。清正とくと見分致すぞ』何時の間にか清正は、ずつと駒を進めて、興深げに見守つてゐた。
『心得たり。權八郎いざ！　われこそは……』
『待て若者』と清正が遮りとめた。『先程よりの振舞天晴。權八郎一人に名乘らするは惜しき名ぞ。其場に名乘れ！』
『やすき事よ。權八郎もよつく聞

け。われこそ生粋の三河武士、徳川三河守が家中に、些か知られし矢田作十郎秀道。生年此處に二十有二。わが武功の一として今日唯今、羽柴方の猛勇中川權八郎を討ち取り申す』

『美事討つ氣か！』權八郎が喚いた。『天晴乍ら小冠者、わが手に立たうや、參れ』



『いざ！』權八郎も駒から下りた。

颯ツと飛び離れる太刀と槍とが、午後の日差しに、目ざましく鋭どく輝いた。

何れ劣らぬ武者振りに、見る程の將士感に打たれて、敵も味方も固唾を呑んで合戰も忘れ、唯晴々しう見守つた。

二人の鬪ひは、華々しくも激しかつた。突き込む槍尖、拂ふ太刀。斬り込む刄尖受ける槍。火花も散らう、空に劍戟の音も響かう。並み居る將士が思はず洩す感嘆の叫びと、握りしめる力こぶとに圍まれて、正しく兩虎、二人は必死に相戰つた。

『おゝ！』

『おウ！』

だが、武運は作十郎にあつた。

作十郎が斬り込む太刀先、美事權八郎が鎧の隙に、ぐさとばかり突き立つた。

『作十郎出來した。討たれても惜しうはないぞ！』

權八郎も名ある武士、倒れ乍らもわが敵賞めて、やがて敵な

く落ち入つた。ホツと呼吸つき、作十郎があげる勝名乘。
『羽柴方の勇士中川權八郎淸澄を、矢田作十郎討ち取つた。後日の功を爭ふな!』
勇ましくも凛々しい武者振、日に映えて輝やく金鯱兒は、一際華々しく見られた。
『やんや、やんや』
『三河武士の譽だ! やんや』
『矢田作十郎ときいた、その名忘るな』
『金鯱兒の伊達もましてや良いぞ』
『矢田よ! 金鯱兒よ』
『やんや、やんや!』
賞め渡る呼聲は空に響いて、しばしが程は鳴りもやまなかつた。
その時驅けて來た武者一騎、馬上乍ら大音に呼ばはつた。
『徳川方に申さう。羽柴方は加藤の勢を後詰に、動き始め申した。主君には直に迎へ撃のお仕度ぢや。方々遲れめさるな。長久手へ! 長久手へ!』
その聲の下、忽ち戰氣が、再び激しく動いた。
『長久手へ! 長久手へ!』
『やるな! 喰ひとめろ』
鯨波、吶喊の聲は凝つて、すさまじい修羅場となつた。

その混戰の中を、斬りぬけ驅け拔けて、まつしぐら、疾風の如く長久手へ長驅する、三騎の武者がある。先頭を切るは卽ち矢田作十郎、つゞいて本多隼人、阿部三四郎。
日は既に赤々と西に傾むいて、青葉にむせぶ小牧山上、うつすらと宵の月がかゝつた。

二

障子もカラリと開け放し、颯爽と吹き込む青葉の風に端居して、徳川家お留守奉行酒井主膳は、頗る上機嫌であつた。ほくほくもので白髮頭を振り乍ら、にこ〳〵と、先程注進受けた作十郎の働らきぶりを、愛娘小菊と乳母のお民とに、語りつゞけてゐた。
『戰場、敵の目前で、しかも大敵を控へ乍らの立小便、その落付、その度胸、いや見上げたものぢや。なう小菊』
濱松の花とうたはれる美女小菊、冷然と父の言葉をきいてゐたが、美しい眉をひそめて唯一言。
『いゝえ。はしたない業と存じまする』
『何? はしたない! め、めつさうな。何がはしたない事があらう。立派な事ぢや。武士として持たねばならぬ落付ぢやに。度胸ぢやに。はゝゝ。女子のそちの淺慮へ。無理とは思はぬか、その落付あつてこそ、美事大敵も討ち取り得ると申すもの

ちや。長久手への驅付も作十郎が一番なら、働らきも亦拔群ぢやつたと申すこと。功名手柄のその度毎、彼め自慢の金鯉兜の鄙やきに、一段見上げた男振りぢやつたさうな。老いの名殘にその姿、わしも一度は見たかつた。そちにも見せてやりたかつたぞ。はゝゝゝ』

主膳は快よげに打ち笑ふが、何故か小菊は冷淡だつた。

『わたくしは見たう思ひませぬ』

『まあ〱お嬢樣。さう素氣なく仰有るものではムりませぬ』

と、乳母のお民は取りなし顏『許嫁の作十郎樣、餘り皆樣がお賞めゆゑ、而義う思し召すのも御尤も、ほゝゝ』

『あれ、乳母とした事が、知らぬぞえ』

『ほゝゝゝ。したが旦那樣。作十郎樣御自慢の金鯉の兜とやらも、いつぞやの戰ひの分捕品だと、申すではムりませぬか』

『むう、さうぢや〱』主膳は快心の笑みを浮べた。『あれは確か、石瀨攻めの時ぢやつた。いや、その時も作十郎の働らきは、雄々しく目ざましいものぢやつたぞ。あの兜は由來、石瀨城主石瀨筑後の持物ぢや。その筑後と作十郎と一騎討。わしも折よく始めから見分致したが、その鬪ひの激しさ、思はずわしも舌を卷いた。結局は作十郎の勝になつたが、最期の際に筑後も、作十郎の武勇を見込んだか、家重代のあの兜を讓つて死んだのぢや。わしも亦彼の武勇にずうんと惚れた。それから、

民、其方も知つてる通りの强談判を致して、首尾よく作十郎を、小菊の婿と約定したのぢや。はゝゝゝ。良き婿、良き婿、三國一ぢや。わしは嬉しいぞ。小菊、そちも嬉しからう。はゝはゝ』

『何嬉しうムいませう』

小菊はいつそ腹立たしげである。

『嬉しくないと申すか。あれ程拔群の若武者を、夫に持つ果報は、滅多に女子に有るではないぞ。それを猶、嬉しくないとは何故ぢや』と、主膳は不審さうだつた。

『作十郎殿は、お强い方でムいませう。戰場で目ざましい功名もお立てなされませう。けれども、けれども無情いお方でムります。戰場からのお便りも、いつも〱お父上にばかり。許嫁と言ひ作ら、つひぞ一度もわたくしに、優しいお言葉も下さりませぬ。强いばかりで立派な武士と、何うして申されませう』

『むゝ、はゝゝゝ。やくたいもない事を申す奴ぢや。言葉多きは品少し、つべこべと申さすとも、作十郎は汝のことを、心から愛しいと思つて居るぞ。生命を捨てゝ、主君に忠をつくす者は、同樣に女房も可愛がるものぢや。迷ふな、迷ふな。喜んで作十郎にすがつてをれば、そちの幸福は末長いのぢや』

『それはお父上のお眼鏡違ひでムります。あの方は妻よりも、功名手柄を重く見る方と存じます。わたくしは、厭々作ら妻に



されるのは、女子の恥と思つてをりまする。出来ますならば、あの方との縁談、破談にして頂きたうムります』

『馬、馬鹿な事を申すでない。作十郎の眞意は、其方に對する心のたけは、便りの度に必ず忘れぬ、そちへ宜敷くの一言が、現しつくして餘りないのぢや。くよくよと要らぬ事を申し、作十郎に嫌はれて後悔すまいぞ』

『何後悔を致しませう。わたくしとても、女子の誇りは持つてをります。お父上、お願ひでムります。作十郎どのとのこと、破談になすつて下さりませ』

『いゝやならぬ！家中廣しと言へど、作十郎に優る其方の夫はないのぢや。我儘は申さず、父に任せて置くが良いぞ。必らず悪しうは計らつて居らぬ』

『いゝえ、厭でムります。わたくしはわたくしを大事にして下さる方でなくば、夫として見える氣はムりませぬ』

『えゝ解らぬ事を申す奴、口先では兎もあれ、心から其方を大事に思ふ者は、作十郎が随一ぢや』

『いゝえ、それは違ひまする』

『あゝもし お孃様』乳母は急いで遮つた。

『ちとお言葉が過ぎまする。作十郎様はお立派な方、御似合の御縁と存じまする』

『乳母や、和女には解らぬこと、控へてお居やれ』と、小菊は強くたしなめた。

『は、はい』

『乳母が申す通り、否、かへつて作十郎は其方に過ぎた夫ぢや。つまらぬ事は言ふでないぞ

『いゝえ、それはお父上の慾目で厶りまする。わたくしはあの方では、不服で厶りまする』

『えゝ又しても世迷言……』

主膳が立腹の色を見せて、顏色を險しくし始めた時、取次の者が敷居越に手をついた。

『申上げます。唯今、阿部三四郎樣お越しに厶りまする』

『何！　阿部が參つた。彼は主君のお伴で戰場にある筈。何しに參つたやら……何は兎もあれ、此處へ通さつしやい』

主膳は不審氣に言つた。颯ッと小菊の面に明るい色の動いたのは、主膳もお民も氣付かなかつた。

やがて阿部三四郎が通されて來た。

『これは／＼御重役には、何時も乍ら御健勝の程祝着申上げまする。小菊どのにもお障りなく、結構に存じまする』

『貴方樣にもお變りなく、お喜び申しまする』

と、小菊が晴々しく言ひかけるのを、主膳は激しく制した。

『待て小菊！　挨拶は後の事。阿部、貴公が戰場より戻り來し用向は何とぢや』

『申し遲れました。實は主君此度、羽柴方と和睦致し、明日御歸城に相成ります。その先觸として拙者參着仕りました』

『ほう、愈よ和睦とか。それは重疊ぢや。小牧長久手と、あれだけ御當家の武勇を示し置かば、羽柴殿も骨身に多少はこたへたであらう。此邊で切上げるのも亦上策と申すものぢや。さしてやわが君御無事の御歸城、目出度いの』

『御意に厶りまする』

『貴公も天晴功名、羨やましいぞ』

『恐れ入りまする。拙者などは物の數でも厶りませぬ。同輩中功名の隨一は、矢田作十郎に占められて厶ります』

『貴公とても劣らぬぞ』と、主膳は花を持たせるやうに言つて

『扨て、その作十郎ぢやが、主君のお伴かの』

『なか／＼持ちまして。作十郎は羨望至極の榮えの大役、和議御正使榊原小平太康政殿の介添副使として、大阪表へ出向致して厶りまする』

『や！　それは冥加至極……』と言ひかけた主膳、三四郎の手前、後は笑ひにまぎらせて、『むゝ。して作十郎からわしへ、何ぞ言傳でも無かつたか』

『厶ります、厶ります。これなる書狀頼まれて參りました』

『や、大儀々々』と、主膳はにこ／＼顏で、三四郎から一通の書狀を受取り『こりや誰か眼鏡をもて。いや／＼それに及ばぬ。わしが參つて讀んでくる。阿部、卒爾するぞ』

『はゝ』

主膳はいそ／＼と、喜びに堪へぬやうにおのが居間へ引きとつた。不滿さうにそれを見送つた小菊は、やがて眉を險しくし

乍ら、三四郎に向つた。
『阿部樣、慮外ながらわたくしへ、作十郎殿から、何ぞ申して
では厶りませぬか』
『は、唯、よろしくとばかり……』
三四郎は心持眉をひそめ、氣の毒げにそれだけ答へた。
『え〻又しても……』
小菊の面には、裏切られた者の寂しさ、口惜しさ、悲しさ、それらの感情の交錯した、複雜な心理の色が浮んだ。間もなくそれは、冷たく苦々しげな表情に變つて行つた。
『御立腹御尤もに存じます、なれど……』
何やかと慰め顏の三四郎の言葉も耳に入らぬげに、小菊は凝ツと唇をかみしめて、庭樹青葉の靜かなそよぎに、うつろな眼ざしを向けつゞけてゐた。

三

秀吉との和議滯りなく濟めば、心にか〻る大敵はなく、唯隙あらばと斧を擧ぐ蟷螂にも似た小城端城ばかり乍ら、二葉のうちに切らずんば悔いもあらうと、德川勢は駿遠三の山野に轉戰した。
一月ばかりの間に、討つは討ち、降るは降らし、駿遠三の三ケ國今は全く平定した。
その間、作十郎の働らきは、金鯱兜の輝やきと共に、殊に優れて颯爽と、華々しくも勇ましく『矢田の金鯱兜』の名は、味方の敬慕と敵の畏怖との間に、隱れなく鳴り渡つた。
彼が馳驅する所、敵は風になびく草木のやうに逃げ散つた。稀に立ち向ふ、武勇に驕る武者も有るには有つたが、武運に惠まれた作十郎は手もなく討ちとつて、功名の上に功名を重ねた。家康が軍をまとめ、凱歌を奏して居城濱松へ引上げた時、かすり傷一つ負はず、英氣凜々たる作十郎の姿も、家康の馬側に引添つて見られた。
それから暫く、作十郎を初め血氣の三河武士に取つて、忿しく腕を撫するのみの、無爲な平和な日がつゞいて、暑熱蒸す如く、濃き青葉陰がしきりに慕はれる眞夏の日が來た。
ある日のこと。
出仕から歸つた作十郎が、お長屋で素裸になり、涼を取つてゐる所へ、三四郎が訪ねて來た。
『三四郎か、好う來たな。や、お主今歸りか。遲かつたな』
『うむ。本多らに引止められてゐたからよ。暑いの』
『暑いぞ。まあお主も裸體になれ。それ其處の井戸で一三杯冷水をかぶれ。い〻氣持ちや』
『成程、何よりのそれが馳走ぢや。許せ』
『お〻さ』

骾なく筋骨隆々たる若者二人、縁の端近くへだてなく寛ろいだ。庭に咲き誇る、作十郎たしなみ手作りの白百合が、時折吹き起る風のまに〳〵、香ばしい薫をたてた。

一しきり激しい蟬時雨。

稍ゝ西に傾むき乍ら、太陽はまだ暑い。

『暑氣凌ぎには酒だ。何は無くとも先づ參らうぞ』

作十郎は老僕を呼んで酒を命じた。やがて二人は酌み交しながら、

『いかい雜作になるの』

『何さ。此頃おれも退屈凌ぎに酒を覺えたぞ。退屈、退屈、徒らに腕が鳴る！』

『ところが作十郎、間もなくその腕も堪能する程、働らかれようぞ』

『何！』

『一旦は主君の武勇に降つたが、岩村奥山長谷川の衆、流石に無念か心を一に、關東の北條たのんで寢刃を磨ぐと、確かに聞いた』

『それは初耳、面白いの。少しも早く蹈みつぶさう。して出陣は何時と聞いたの』

『それが彼奴らを破るは易いが、この機會に、北條方に一泡吹かすも興ある事、彼奴らが事を擧げるを待つてそれからと、拔かりなら忍びの者も潜ませた、主君を始め榊原酒井本多の重役衆の御存念を、洩れ聞いたぞ』

『成程それも一興だ。どうともあれ、おれは唯、手ごたへある相手が欲しい。北條なら金鉢兜に刃向ふものも、三人五人有るだらう。待ち遠しいぞ、はゝゝ』

『はゝゝ』三四郎も笑つたが、すぐ改まつて言ひ出した。

『それに就て、時に作十郎。ちとお主に頼みがある。聞いては呉れぬか』

『出來る事なら聞かう。言うて見い』

『他ではない。おれは近頃さつぱり手耐へある敵に對へぬ不運さだ。お主の金鉢兜に刃向ふ程の者は、覺えのある豪の者に違ひない。其處でだ。それ程の者に渡り合つて見たい。濟まぬが今度の戰ひだけ、お主の兜を、おれに貸しては呉れぬか』

『何、おれの兜を貸せと言ふのか。うむ……』作十郎は少時默念して『貸してもいゝぞ。だが……』俄かに不興氣に、吐き出すやうに言ひ捨てた。『だが、似合ふまいよ。お主のやうな卑怯者には喃！』

『言つたな此奴！』三四郎は滿面に朱をそゝいで、猛り立つた。『何時何處で、おれが卑怯な眞似をした。言へ、此奴、吐せ！　何時何處で、おれが卑怯をした』

『たつた今、おれの前で！』と、作十郎は平然と言ひ返した。

『何！重ねての雜言』三四郎は猶も怒りきつた。『不肖乍ら阿部三四郎、卑怯者呼ばはりは、友なりとも聞捨てには出來ぬぞ。こりや作十郎、何が卑怯者だ！』

『解らぬか！お主にも似合はぬ。三四郎、お主は主君のお伴して、戰場へ向ふ時、どんな覺悟で出るのぢや』

『もとより一死を期し、主君の御馬前に骸をさらす覺悟でだ』

『可笑しや』

『何と！』

『三四郎良く聞け、お主がまこと其覺悟なら、おれの兜貸して呉れとは言はぬ筈』

『う……』

『借りるとは返すの氣。返さねば武士の恥。と申して好き敵に渡り合つた場合、兜返さんが爲死を惧れても武士の恥。三四郎、同じ事なら、何故呉れと言はぬ』

『解つた！』三四郎は叫んだ。『解つたぞ作十郎。おれが惡かつた。お主の言ふのが道理ぢや。返す〴〵もおれの不覺、詫るぞ。改めて頼む。金鯱兜をおれに呉れ』

『他ならぬお主の頼み、呉れよう』

『忝ない！』

氷解することの早いも武士、二人は釋然として打ち笑つた。

『時に作十郎。貰ひついでにもう一つ、お主から貰ひたいものがある』

『何ぢや』

『小菊どのをぢや』

『何！』

『恥かし乍らおれは小菊どのにぞつこん惚れた。見受ける所、お主の女房とか、お主の好きな女なら頼みはせぬ。だが、お主には何樣でもいゝ人と見た。だからこそ、恥を忘れてお主に頼むのだ』

『ことわるぞ』作十郎ははつきり言つた。『許嫁は女房も同然。女房を人に呉れること、未だ聞かぬぞ』

『だがお主も小菊どのも、許嫁らしうは、仲好うは見えぬ』

『それはおれの私事、お主の知つた事ではない』

『だが、小菊どのはお主とのこと不服と聞いた』

『いらぬ世話。女におれの氣持は、さう易々とは解らぬ。……それは兎もあれ、他目には何樣ともあれ、おれとてもお主に劣らず、小菊には惚れてゐる。その女を何しにお主に呉れよう。強つて欲しくば奪つて見い』

『奪れと申すか！』

『定よ。奪へるものなら奪つて見い。小菊とても武士の娘、さう易々と約定變更へはすまいぞ』

『面白い！必度奪つて見せるぞ』

『うむ』
『其時になつて青筋立てまいぞ』
『何の、はゝゝゝ』
『はゝゝ』
二人は何だかしら、わだかまりは見せ乍ら、それでも豁然と笑つた。
その頃城の大手口から驅け出した一騎の武者、通りがかりに作十郎がお長屋を、垣根越しにのぞきこんで馬を留めた。
『矢田！ おい作十郎は居らぬか！』
『何ぢや。おゝ隼人か。この暑いのに駒驅つて、何事ぢや』
『始まるぞ、始まるぞ！』
『始まるとは戰ひがか』と、三四郎も顏出して言つた。
『や、三四郎お主も居たか。さうぢや、先刻お主に話した事、案外早う始まつた。長谷川岩村の降人衆、北條たのんで事擧げた。たつた今忍びが戻つて注進ぢや。おれは是から重役衆へお召しの使者だが、友達甲斐にお主らへ先づ知らせる。拔かるまいぞ』
『心得た。即刻登城御下知を待たう。三四郎お主も用意せい』
『合點だ。兜は貰つて歸る』
『よし。隼人大儀ぢや』
『うむ。後刻お城で會はうぞ』
其儘、本多隼人は一鞭馬に加へて、街を飛んだ。後には二人。
『作十郎、おれは今度こそ力一杯働らいて、天晴功名立てるぞ。それこそ即ち小菊どのへの婿引出』
『それも良し、これも宜し。おれは死ぬ氣で働らくぞ。はゝゝは。だが、死甲斐のある敵だらうか喃』作十郎は、靜かに腕を撫し乍ら言つた。『おれは何故か、飽氣ないやうな氣がするぞ。はゝゝ』

四

戰ひは作十郎が豫感に違はず、忽ちにして片附いた。後楯の北條家は、思ひの他に強豪な三河勢に惧れをなしたのと、一家を擧げて相對する程の理由もないのとで、特派した侍大將三人を討たれると、其儘私かに引き上げて了つた。
殘りは端城武者。寧ろ力の入れ甲斐が無かつた程簡單に終つた。のではあるが、徳川家とすれば、是れで勢力全く剛く、駿遠三を征服した事になり、結果に於ては重大な成果をあげた意味になつたのである。
で、家康は、新秋の氣やうやく山野にあまねく、萬物回新の期、一家中をあげて、城外濱松川の邊に招じ、祝賀の宴を催した。

連日降りつゞいた物すさまじい豪雨が、カラリと霽れ渡つた日であつた。空はあくまで透明に晴れ輝やいて、氣は澄み、清朗たる朝であつたが、川は濁流渦を卷いて、凄惨味を見せ乍ら轟ろき流れてゐた。

『拙者覺えて三十年、これ程の洪水は始めてでムる』

『左樣、すさまじい有樣ぢや。丁度長久手の戰ひに、御當家の軍勢が、羽柴方へ總がかり致した時の勢ひにも似て、めさましい程ぢやの』

そんな噂をする人々の間に混じつて、矢田作十郎も、下僕彌平を召しつれて參集してゐた。

同じく下僕に何やら包みを持たせた阿部三四郎に、ばつたり會つた。

『や、作十郎此處にゐたか。よい所で會つたぞ』

『三四郎か。其後取まぎれ、自身見舞にも出なんだが、すつかり快いか』

『引籠中度々使ひを受けて忝ない。もう殆んど快い。不覺の傷だが向ふ傷、笑つて呉れるな。はゝゝゝ』三四郎は稍ゝ寂しく笑つた。

『何の笑はう。長谷川石見を討ち取つた、お主の手柄を羨やんだぞ』

『何の—　討ちは討つたが、石見めが斃れる途端に投げた太刀を、不覺にも打ちつけられ、失心するとは醜態だつた。口惜しいぞ。たがそれにも増して口惜しいは、石見めが言つた言葉ぢや。彼めと太刀を合せた時、『や、矢田作十郎では無いな。ふむ、金鍬兜の僞物か』と吐いた一言が、胄身に耐へて辛かつた。僞物、僞物！　はゝゝゝ。思へばその前、敵が爭つて遁げたのは、おれの武勇でなく、作十郎お主の武勇を惧れてぢや。僞物、眞赤な僞物。はゝゝ。由ない事をした。許せ。で、兜は改めてお主に返す。直々返さねば氣が惡いから、本日持つて參つた。受取つて呉れ』

『はゝゝゝ。お主も到頭我折つたか』

『うむ。受取つてくれ』

『よし。彌平其方頂戴致せ』

『かしこまりました』下僕は恭しく、三四郎の手から、金鍬兜を受取つた。

『作十郎、又後刻會はう』

『うむ』

去り行く三四郎の後見送り、作十郎は憮然として、彌平をふへり見た。

『彌平、その兜は汝につかはす。金具剝ぎとり金に代して、酒代にでも致すが良いぞ』

『えッ！　めつさうな。旦那樣、こんな立派なお兜を、又貴方

殿が御着用なされば、宜敷うムりませう』
『何を馬鹿な！』作十郎はその言葉を一蹴した。『矢田の、矢田作十郎の金鵄兜は、はゝゝゝ。もう伊達にはならぬぞ。鯉は死んだのぢや。哀れになう、はゝゝゝ』
やがて家康も出座して、酒宴が始まつた。
酒井主膳も、愛娘小菊を伴なつて、姿を見せた。
『よう作十郎、早や参つてゐたか』
『是は〳〵御出座御苦労様にムります』
『うむうむ。其方暫く見えぬから、什う致したかと思ひ居つた』
『余りしげ〳〵と出入致すのは、諸人の聞え如何かと存じまして……』
『たしなみ、たしなみ。大概天下も泰平ぢや。そのうち主君に願ひあげ、表向披露しようの』
『御配慮重ね〳〵忝なうムります』
『何の。待ち遠しいの』
『御意……』
『はゝゝ。なう小菊』と、主膳は上機嫌で小菊を顧みて『其方とても同じぢやの。はゝゝゝ』
『存じませぬ』と、小菊は済まぬ顔色だつた。
『存ぜぬは有るまい。はゝゝ。さう羞かますと、作十郎に挨拶なとせぬか』
『作十郎様、お久しうムりまする』
『……』
作十郎は黙然と頭を下げた。小菊は不満げに顔をそむけた。
『わしは主君の御機嫌を伺つて参る。小菊そちは待つてをれ。作十郎たのむぞ』
『わたくしも御一緒に参りまする』
『はて、待てと申すに！』
『いゝえお伴致しまする』小菊は言張る。
『はゝゝ。羞かしいのか、やくたいもない奴。では作十郎、後刻の』
『は……』
作十郎は瞬間わびしさうな顔色を見せたが、忽ち旧に戻つてゐた。
『や矢田殿此處か。お身の武勇にあやかる為、お杯頂戴致したうムる』
『身共も同じく、一酌献じたい』
『おいでなされい』
『さ、おいでなされい』
忽ち作十郎は諸士の中に取り囲まれた。
無理強ひの杯の数、作十郎も流石に酔ひを覚え機を見て座

を外すと、唯一人堤の陰の草原に、伸び〳〵と寢ころんだ。空は飽くまで晴れて、まぶしい程の日光が、さん〳〵と彼の全身



にふりそゝいだ。

と、彼の居る堤の向ふ側に、腰を下した二人づれ。

『小菊どの、御疲れでムらう』

『いゝえ、さして疲れは致しませぬ』

正しく三四郎と小菊。作十郎は今更立つにも立てず、氣わるい乍ら、其儘居た。

『三四郎樣、わたくしに御用と仰有りまするは？』小菊のこゑは浮々とはずんでゐた。

『さ、餘の儀ではムらぬが……』三四郎は、少時言ひよどんだが、やがて思ひきつたやうに言ひ出した。

『小菊どの和女は眞實作十郎と婚禮なさる御所存でムるかの』

『え？　眞實ならば何と、又眞實でなければ何と御意なされます』

『さ、眞實和女が作十郎と婚禮なさるお心なら詮もないこと。若しさも



なくば……』

『さもなくば?……』

『小菊どの、拙者の妻になつて下され』

『えツ!』

『さ、驚ろかれるは尤も! さり乍ら、一應はお聞き下され。拙者先年より、武士に有るまじき事乍ら、眞實和女に想ひを焦して參つた。作十郎と許嫁と存じて、押へても／＼煩惱消すに術ムらぬ。なう小菊どの、和女と作十郎の婚儀、もし破るゝの時あらば、いゝや和女が作十郎との婚儀に心進まぬと見たはひが目か、武士の意地を捨てゝお願ひ申す。拙者とても、家柄武功さして作十郎に劣るとも覺えぬ。まして和女を想ふ一念は、生命にかけて神かけて、眞向生一圖。何と小菊どの、作十郎が事忘れ、拙者が妻になつては下さらぬか』

　三四郎の聲音は熱意を帶びて、ひたすらに眞劍だつた。小菊はその眞劍さに打たれたやうに、やゝ暫し、言葉もなく打ちうつむいてゐたが、やうやく顏をあげて、

『數ならぬわたくしへ、それ程までのお志 忝なう存じまする。御存知の通り作十郎どのは、お強いばかりで無情いお方。わたくしとても考へぬ譯ではムりませぬが……あ、あツ!』

俄かに小菊は叫んだ。

と見る。彼女が手にした、家康直筆して主膳に托し、主膳又小菊に托した何かの御沙汰書が、手を辷つて、ひら／＼と、濁流漫々渦卷流れてすさまじい川の中へ、舞ひ落ちたのであつた。

『あ、お殿様御直筆の御沙汰書が、あれ、川に落ちて流れまする。わたくしの生命にかゝはる一大事! もし三四郎様、眞實貴方がわたくしを、お慕ひ下さるなら、あれ、あれをお取り下

さりませ。あれあれ流れまする』

小菊は狂氣のやうに叫んだ。

『うむ!』

狂浪高々と岸を洗ひ、悽愴轟ろきの音を立てゝ、猛奔する濁水の河中を見入つて、三四郎は思はずたじろぎ、唯うめくのみだつた。

『もし三四郎樣、わたくしの命で厶りまする。わたくしの命!貴方は生命にかけてわたくしをお慕ひ下さると申されましたに、何を御躊躇なされます。あゝ、三河武士の生命がけとは、それ程の事で厶りまするか、口惜しい、口惜しう厶りまする』

『うむ!』

小菊のその言葉にすら、三四郎は猶もためらつた。と、突如、二人の前へ躍り出る作十郎。

『卒爾は後で詫びるぞ!』

大音に言ひさま、着衣も脱がず、ザンブとばかり、濁流めがけて飛び込んだ。

『あ!』

『あれ!』

二人の驚愕の叫びのうちに、作十郎は美事な抜手を切り乍ら、波のまに浮きつ沈みつ流れる御沙汰書に、ハッシ〳〵と近づいて難なく手に入れ、直に岸に泳ぎ戻つた。

小菊、つゞいて三四郎、必死となつて駆けつけた。

『作十郎樣、作十郎さま!』

小菊は上氣したやうに叫びつゝ、今しも岸へあがつて、濡れそぼつた衣服をしぼつてゐる作十郎に、すがりついた。

『やはり、やはり本當にわたくしを想つて下さるのは、貴方で厶いました。有難う厶ります〳〵。今迄のわたくしの慮外、どうぞお許し下さりましていつまでも〳〵今日のやうに、愛しうおもつて下さりませ』

『小菊どの、ちとおたしなみなさい。大切な、生命にかゝはる程のものを、取り落すとは何事です』と、作十郎は靜かにたしなめるのであつた。

『いゝえ、いゝえ。わたくし疎相で落したのでは厶りませぬ』

『何と!』

『お聞き下さりませ。先刻三四郎樣のお言葉もあり、男が本當に女子を愛しう思召すなら、必らず、その女子一期の大事に會ふ時は、生命にかけてお護り下さる筈と存じます。三四郎樣が、お言葉通りなら、必らず速刻川に飛び入つて下さる筈、もしお溺れ遊ばせば、妾も直にお後をお慕ひ申しまする。それが一期の本望の筈で厶りまする。又作十郎樣が、わたくしのお疑ひした薄情のお方で無くば、何處にお在で遊ばしても、危難をお感じ遊ばして、お駆けつけ下さる筈と、立留乍ら、お二人のお聲

を、おためしする爲、故意と取落したので御座ります』

『や、やッ！』と驚ろき呆れる三四郎に引きかへて、作十郎は俄かに怒りをなして、矢庭に小柄をつきのけた。

『何と言はれる。武士の心を、三河武士の想ひを、いやさこの作十郎の一圖さを、毛筋をまで疑つてためしたと言はれるか』

『あいなう。お詫びは幾重にも致しまする』

『はゝゝゝ。詫びて濟まうか』作十郎はやるせなげに哄笑した。『はゝゝ。作十郎生粋の三河武士、この屈辱には耐へぬぞ。小菊どの、改めて本日唯今、和女とは赤の他人と相成るぞ！』

『えッ！』

『お退りめされ！　いやさお退りなされい。作十郎本日、戀を死なし戀を捨て、天涯無客、寧ろさば〳〵致したぞ。はゝゝはゝ』

哄笑一番、作十郎『御免！』とばかり、驚き呆れる二人を後に、悠々と堤を彼方に歩み去る。と唄ひ出される謡曲の一節、高々と碧空にこだまするのであつた。（終）



貯金帳少し貸しなと覗かれる
（初太郎）
猛打者が立つとカメラが用意され
（呑天坊）
勝ちさうになると應援旗を振り
（光坊）
子を寢かし除く母親は踊りめき
（甫了）
張板の蔭へ媒介人指をさし
（美どり葉）
辷り込みセーフの聲で起き上り
（關昌）
新調で用もないのに訪づれる
（藤原生）


歸れとは言はぬが大い欠伸なり（蛙鼓）
新妻が傘持つて來て騒がれる（柳之助）
左官屋の一人は捕手の型で受け（圭一）
涼み過ぎ傾く月に風邪を引き（星草）
擂古木を持ち出す茶目の野球熱（行々子）
行水の妻を守つて犬を追ひ（登志）
買つて來てやつた太鼓をうるさがり（利一）
川柳漫畫
川上三太郎選
谷脇素文畫
繪になる川柳募集。用紙ハガキ。一人五句以內。〆切毎月末日宛名『キング懸賞部』採用篇には掲載誌を呈して謝意を表す。



この人々を見よ

＝足なく手なくしてこの活動＝

工學博士　田中龍夫

年中寝ながらの商ひ

神戸女學院に座古愛子さんといふ婦人がある。

座古さんは女學院の先生でもなければ、生徒でもない。學院内の一室を借りて、文房具や晝飯の麵麭を賣つてゐる婦人だ。

さういふと、諸君の中には、甲斐々々しい商家の奥さんが帳場に坐つて、買物に來る女學生達に愛嬌を振り撒いてゐる姿を想像する人もあるだらうが、實は、この座古さんこそ、手足の自由を奪はれた氣の毒な婦人なのである。

貧しい家庭に育つて、小學校も碌々卒へぬ中に、茶屋奉公に出され、轉々と浮世の荒浪に揉まれた末に、彼女を襲つたのは、劇烈な僂痲質斯であつた。そのために、無慘にも彼女は全身の自由を奪はれてしまひ、兩手兩足とも屈伸出來ぬやうな悲慘な身體になつてしまつたのである。

今、若し自分がそんな身體になつたと想像して見たら何うであらう。何を樂しみに生きて行くか？　何を希望に生を保つて往くか？　それこそ死んだ方が增しだといふ氣持になるに相違ない。

座古さんも、一時はそんな暗い氣持で鬱々と世を儚んだこともあつたであらう。

だが、そこだ!!　人間には大きな試練に出遭ふと、忽ちぺちやんこに悄氣て厭世自殺する人と、何糞と強い彈機のやうに彈き返す人と二種類ある。座古さんは、この後者であつた。泣いても悔んでもどうにもならぬ悲慘な運命をさらりと諦めて、不具者ながらに明るく生きる道を考へたのである。

手蔓もあつたらう、後援する人もあつたらうが、兎に角、神戸女學院の一室を借りて、文房具や麵麭を賣つて、自分獨りで

生活すべき方策を立てたのである。

私は、この話を聞いて、是非一度その座古さんに會つて見たいと思つてゐた。その內に幸ひ神戸へ立寄る用が出來たので、座古さんをお訪ねする機會を得たわけだが、訪ねて見て更に驚いてしまつた。といふのは實に話以上の事實だつたからだ。

店には誰一人ゐない。數名の女學生が買物に來てゐたが、見なれぬ私の顏を見るとそこそこに出て行つてしまつた。

『御免下さい』

案內を乞ふと、

『はい』

と返辭をした人を見ると、店の片隅に蒲團を敷いて寢てゐる。それが私のお訪ねした座古さんなのだ。店員もゐなければ、手傳人もゐない。全身不隨の婦人が、獨り寢たきりで商賣をしてゐる。

『そんなお軀では、嘸御不自由でせうね』

私は、何より先にこんな挨拶をして仕舞つた。

すると意外にも座古さんは、

『はい、何しろこんな不具者でございますから、不自由は致して居ります。けれども幸福なことには、皆さんが同情を寄せて



神戸女學院に於ける座古愛子女史

下さいまして、いろ〳〵お世話をして下さいますから、何一つ不足などはございません。女學校の皆樣は、各自に店の品物をお買ひになると、あそこにある大きな錢箱へ、お代は入れて置いて下さいますし、卸商の人々が來ては、不足した店の品物は置いて行つて下さいます。私はまあかうして蒲團の中から皆樣の御親切を感謝して居りさへすれば、立派に商賣をして生活して行けるのですから、こんな幸福はございませんわ』

如何にも人生の幸福に心から感謝してゐるといふ口振りだつた。そして二六時中寢た切りの病人とは思はれぬやうな朗らかな顏に、明るいそして快活さうな微笑をさへ浮べて語るのである。

『何か記念に……』

と、私がいふと、座古さんは、利かぬ手の中指と人指指との間に筆を挾んで、

病みふして步み得ぬ身のうれしさよ
　踏み迷ふべき道しなければ

と、紙に書いて私に呉れた。勿論字體は亂れてゐる。けれども其處には輝かしい朗らかな氣持を充分うかゞひ知る事が出來

た。私は涙ぐましい感激をもつて、歌と座古さんとを見較べたのであつた。

片足なく兩手なき名辯士

私は今一人、兩手と右足なくして、この世智辛い世の中に雄雄しくも奮闘してゐる人生の闘士を諸君に紹介しよう。名前は、中山龜太郎君、生堂と號し、現に新富座の辯士として活動してゐる人である。

中山君は岡山の生れのやうに聞いてゐる。四歳の時に父と別れた。それも尋常一樣の別れではない。秋田縣の椿銀山の大爆發の時、無慘な最期を遂げたといふのだから、中山君は幼時から悲慘な運命の子であつたに相違ない。後に殘つた母親と祖母とは、中山君を伴れて、泣く〳〵九州の小倉へ來て、親戚に身を寄せた。

よく〳〵運命は中山君に苛酷であつたと見えて、六歳の舊正月の事だ。中山君が近所の鐵道線路で無心に遊んでゐると、突然、惡魔の如く疾走して來た列車は、この頑是ない小供の兩手と片足とを無慘にも車輪の下に毟ぎ取つて、血みどろにして投げ飛ばしてしまつたのだ。大抵の者なら即死してゐたに相違ない。然るに幸か不幸か、中山君は虫の息を吹き返し、漸く一命だけは取りとめた。母親の悲嘆は云ふ迄もない。中山君自身の不幸は尚更のことだ。四肢完全に揃つた大丈夫でさへ、世を渡つて行くには非常な困難が伴ふのに、生れもつかぬ不具者としての人生に、これから何ういふ道をとるのであらうか？



中山龜太郎氏

併し、母親の慈愛と、中山君の奮闘とは、兎に角中學校を立派に卒業する事が出來得た。これだけの事さへ仲々世の人のよくする事ではない。而も彼は二十二歳の時、感ずる處あつて、奮然として上京した。そして松竹キネマ直營の新富座の辯士熊岡天堂氏の弟子となつたのである。一本の手なく、片足さへない中山君は、口と頭とで一人前の人間にならうと決心したのである。その悲壯なる心事を思へば、誰しも涙なしには聞く事は出來ないではないか。

中山君は奮起した。彼の前途には悲觀も失望もなかつたのだ。彼は明けても暮れてもスクリーンの前に立つて、眞劍な熱辯を振つて、觀客を滿足せしめるやうに努力したのだ。新富座には今七人の辯士がゐるが、中山君はその中の最も古參で、堂々と一家をなしてゐる人である。

しかも中山君は、單なる職業辯士で滿足してはゐなかつた。

「辯士は言葉の取次者ではない。自分の人格から溢れ出る言葉や情熱で、大衆を指導する立派な教育者でなくてはならない」

さう悟つた中山君は、朝早く澁谷の家を出ると、城北の學園東洋大學に通ひ、倫理教育の學科の講義を聽くのであつた。忙しいといつたら想像の外である。大學から直ちに新富座に向ひ、夜は更けてから自宅に歸る。日曜祭日は、活動寫眞館の書入れ日だから終日奮闘しなくてはならない。一日十五時間以上、年中休日なしの勤勉努力を續けなくてはならなかつた。しかもそれが手足のない人のことだ。

私は、この座古さんや中山君の話を聞いて最も感心するのは、この人々が、血腥い無慘な運命の下にあつても、決していぢけたり、屈伏したり、或は自暴自棄になつたりせず、寧ろ却つて、人一倍の奮闘的精神と明るい人生觀とを以て世に處して行きつゝあることだ。

それでなくてはいけない、人生、不平や愚痴は弱者のする事だ。悲觀や自殺は敗者の仕業だ。明るく、そして力強く生きる心懸けこそ、軈て幸福を生む畑である。

――をはり――

堪忍大明神（聖人聖語）

第五高等學校教授　八波則吉



二宮尊徳翁の『語錄』は皆傾聽すべき金言集だが、其の中に『堪忍大明神』と題する一文がある。大要を申せば、

『堪忍大明神』と書いた御札を、大黒柱に張り置き、毎朝起きたら、手水を使つて『今日一日堪忍をよく守り、惡事災難を遁れますやうに』と祈れ、主人を始め、家内中誰も斯う祈るのぢや。さうして終日よく働き、さて寢る前に、誰も御札に向つて『お蔭で今日も無事に勤めました』と御禮を申せ。若し又、不圖腹が立つやうなことがあつたら『堪忍大明神々々』と三遍唱へて相手に向へ。總じて此の神を信ずる者は惡事災難を免がれ、別して頬の膨れる病に罹ることなく、家内安全、疑ない。

と。さすがは尊德先生のお詞ほどあつて、やさしくて、面白くて爲になる、修養訓の三要素を具備してゐる。





僅かの衛生常識が疫痢で瀕死の愛兒を救つた話

―特に本篇を世のお母樣方に捧ぐ―

日本に於ける幼兒の死亡率の高いのは何を物語るのでありませうか。一寸した親達の不用意が案外な大事を惹起すことになるのであります。親として子供の病氣程心配になるものはありません。身代りになつてやり度い位であります。然し心掛け一つで可愛い子供の命を容易に安全に取止める事が出來ます。大事に至らぬ前の手當こそ本當の親心の愛の表徴でありませう

記者

喜びの歸郷

それは今思出してもゾッとする位であります。此夏初めて儲けた四歲の愛兒を連れ、私の實家へ行つた時の事です。何しろ初めての子供故、みんなから澄夫さん〳〵と言つて、

下へも置かぬ歡待振りに、私もどんなにか夫の手前、肩身が廣う御座いました。

すると二三日過ぎの或る蒸し暑い晚の出來事であります。澄夫は此の日の夕方から、何時になく、元氣がなく不機嫌で無暗に泣きつづけるので、いろ〳〵と操したり、乳を哺ませたりいたしますが、仲々に泣き止みません直ぐに醫者へと思つても生憎實家は夏場所だけ(海水浴場)賑ふ裏日本の漁村ですから小兒科專門の醫者もなく、どうしても四里も隔つ市迄行かなければならないし搗てゝ加へて、だん〳〵苦しさうになり、果ては泣く力も次第に衰へ熱は愈ゝ高くなるばかりでした。

恐ろしい疫痢か

私は此時ふと或る恐ろしい豫感に襲はれま

した。若しや坊やは疫痢ではないかといふことでありました。若しさうとしたら何うしよう。此時の私達の心配は勿論實家の父母も全く生きた心地はありませんでした。

一寸した機轉で之の歡び

その時ふと『イチジク印輕便浣腸』の事が思ひ出されました。之れは澄夫が生れた時私の一番上の姉樣から疫痢の樣な病氣になつた時とか、或は子供が何日間も便秘した時に、浣腸さへして置けば醫者へ行くまでの手當として實に重寶だからとの優しいお便りでした。此事を早速夫にも話して村にたゞ一軒ある藥店から買求め直ぐ浣腸をしてやりますと、全く効果偉大なもので、澤山の變な便が出て、元氣を恢復し脈搏もだん〳〵正しくなり。大藝

きな眼で私達の顔を見る位になつたので一同少しは愁眉を開きました處へ漸く市の小兒科のK先生がお出下さいました。そして直ぐ色色の手當や注射の後、仰しやるには本當によい時にお出になつた、之が後一時間も遲れて居たら取返しのつかぬ事になつたかも知れぬと申されました時は全くホッと致しました。

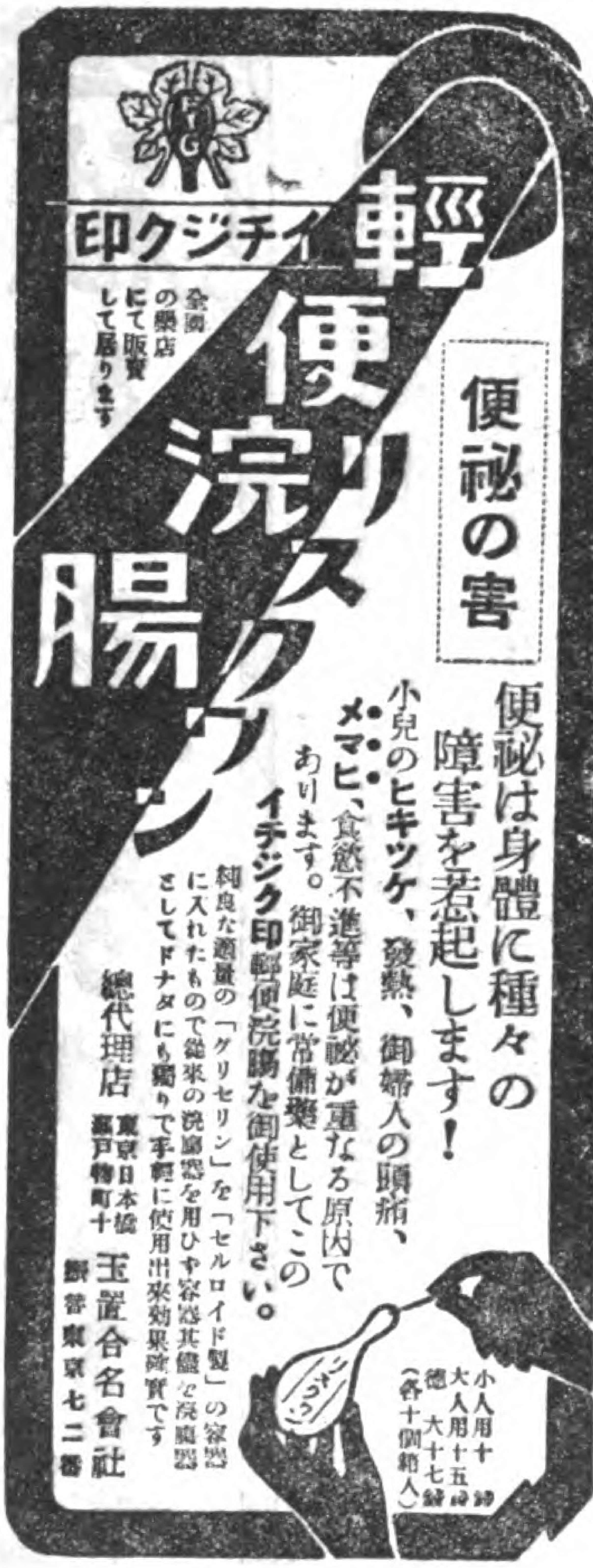
天の助けか輕便浣腸

そこで私は、實は先生がお出になる二時間程前に『イチジク印の輕便浣腸』で浣腸をして置きましたと申上げました處先生はポンとお膝を叩いて『それで漸く解つた』と仰しやつて實はあなたはよい所にお氣が付かれた。それで此のお子さんが助かつたのです。世の心あるお母樣方にも是非此の心懸けがあつて欲しいと、大變お賞めになりました。其時の嬉しさ・瀕死の愛兒が助かつた事と、先生のお言葉で天にも上る心地でした。私の拙ない此の一文が世のお子さんをお持ちのお母樣方に幾分でも御役に立ちますならば望外の幸であります。(あい子)

お子供樣連れの旅には

お忘れなく必ずリスクワンの御用意を!

「ハハキトクスグカヘレ」との電報に私は直ぐ五歳の長男と三歳の長女を連れて歸郷の途に就きました。何んと悲しい旅で御座いませう。平常なら樂しき旅であるのにと思ひつゝ東京驛から乘込みました。何も知らぬ無心な子供達は汽車に乘つたのを耐らなく嬉しがつて居りました。そのうち長男の行夫は遊び疲れて靜岡邊から寢込んで仕舞ひましたが、長女の安子は頻りに欠伸をし乍らグヅつくばかりか、顔の色も赤く見えるので一寸額に手をあてゝ見ますと熱がある樣です。如何しよう夫と一緒ならと思ひましたが、夫は手離せぬ仕事の爲め一列車遲れるといふ運の惡さ。ふと氣付きましたので早速旅行ケースの中から、『輕便浣腸リスクワン』を取出し浣腸してやりました。すると餘程熱も下つた樣でしたが、ともかく夢中で名古屋に到着。馳付けて見ますと運よくお母樣は大變病氣がよくなつたと聞くうれしさ。その上に子供もスグ診て頂きましたが大した事もなく全快致しました。子供等と旅行するには『輕便浣腸リスクワン』を忘れぬ樣と婦人倶樂部で敎へられた記事が役立つた實話で御座います。キング愛讀の皆々樣にもおしらせ致します。(らん子)



◎キング愛讀者の爲め便宜上大日本雄辯會講談社代理部でも販賣(振替東京六六二一九番)

彼が一旗擧げるまで

田舎銀行員から政務次官

─司法政務次官川崎克氏の立志物語─

大木禮二



川崎克氏

劍豪荒木又右衛門が旗本の同勢を向ふに廻して、天晴れ三十六人斬りをやつた所、俳聖芭蕉が呱々の聲を擧げた所として天下に名高い伊賀の上野。

時は明治三十五年、時の東京市長であり、代議士であつた咢堂尾崎行雄氏が此處へ遊説に來た。ところが當時は今と違つて、町の有力者も演説といふものに殆んど經驗のない時である。況んや大雄辯家として名聲高き尾崎氏を前にしては、開會の辭を述べる者が無い。

町長始め町の有志は困じ果てゝしまつた。

──と、此の時、誰云ふとなく『川崎の伜にやらせたらどうか』と云ひ出した。

『成程、あれは始終演説の稽古らしいことをやつてゐる！』

町長は多少危ぶんだが、早速人を派して川崎を招びにやつた。やつて來たのは二十三の青年。

『川崎君、どうだ一つ君開會の辭をやつてくれんか』

『私がですか？──しかし誰もやる者がなければやります。尾崎先生の前座なら私も光榮です』

青年川崎は快諾して壇上に起つた。

彼は開會の辭は見事にやつてのけた。が、その儘は壇を下らなかつた。

彼は續いて世界の大勢を論じ、堂々一時間ばかり一大熱辯を揮つてしまつたのである。

滿堂破れるやうな喝采。『尾崎より上手いぞ！』『今に偉くなるぞ！』彼を知ると知らざるとを問はず、聽衆は熱狂して八方から讚辭を飛ばす。

と、これを後からぢつと聞いてゐたのは警堂氏、彼が壇を下ると、つと起つて彼の手を握り、

『川崎君、實に立派な出來だつた。敬服しました』

『恐縮です、初めてですから……』

『君のやうな有望な人物をこんな田舍に埋らして置くのは惜しい。若し上京して一仕事やり度かつたら、いつでも訪ねて來給へ、大いに盡力しませう』

今や議政壇上の第一線に立ち、民政黨の花形として活躍する現司法政務次官川崎克氏の靑年時代のことである。

×　×　×

彼は明治十三年、この上野町に生れた。年十一歳の時、父に別れ、以來淋しい家庭の中に成長したが、十八歳で町の八十三銀行に入つて、一ケ月二圓五十錢貰ふことになつた。

所が、この克少年、同銀行の保險代理部の係りだつたが、非常な奮闘家、勸誘に出ると必ず素晴しい成績を擧げて來る。――何時しか銀行の預金よりは彼の保險勸誘高の方が、ずつと額が多くなつてしまつたといふ有様。

これにはさすが服部頭取始め一同啞然、

『この小僧、並々の人間ではないぞ』

と、周圍の人々は舌を巻いて驚いた。お蔭で二年ばかりのうちに月給五圓に進



給。が、雄心勃々たる彼、何時までも田舍にくすぶつてゐるものでない。

『大人物になるには東京だ。さうだ、東京へ出て一勉强しよう』

彼は早速母に相談した。

彼は一家を管理してゆくべき長男である。父亡きあとの生活は樂ではなかつた。然し流石に、偉い子供を作り出す母は違ふ。親戚の者は一人殘らず反對したにも拘らず、母は敢然として、

『石をかじつても家の者は生きてゆく。その代り立派に成功しておくれ』

と、淚ながらに彼の上京を許した。

彼の喜びは云ふまでもない。早速上京して明治法律學校へ入學した。入學したといつても籍を置いた丈である。彼は母の心勞を思ふと一日も早く卒業しなければならぬと思つた。で、學校へ通つてのんべんだらりと正規の講義を聞いてゐたのでは、とてもやり切れない。學校には籍だけ入れて置いて、一日も講義は聞かなかつた。毎日々々圖書館で猛勉强をつゞけた。そして當時の法律書といふ法律書は、殆んど悉く讀破した。

かくて上京して一年足らず、彼は日本大學の三年に編入試驗を受けて見事に及第し、その翌年には卒業して了つたのであつた。他人が三四年かかつてすることを、彼は二年足ら

ずやつてのけたのである。

當時の彼の貧乏振りは實に想像以上であつた。國許には多少の財産はあつたが悉く親類の保管の下にあつて、僅かしか送つてくれない、而もそれさへ月々遲れ勝ちであつた。

或る時、それは神田三崎町に自炊生活をしてゐた時分であつたが、恰度試驗の眞最中、懷中ビタ一文も無くなつてしまつた。然し強情で向ふ意地の強い彼は、友人に借りに行くのも厭と、たうとう三日間といふもの食はず飲まずで過したことなどがあつた。

又、或時は金がないのでランプが灯けられぬ。勉強が出來ない。やむなく夕方から夜半の十二時頃まで寢て、夜半にそつと宿を脫け出し、近所の家の街燈を盜んで來て、夜の明ける時分まで勉強し、またそつと返しにゆく、――といふやうなこともやつた。

かうした苦勞の後、漸く大學を卒業し、一先づ歸省してゐた時、偶然に尾崎氏に見出さるゝに至つたのである。

× × ×

彼は尾崎氏の世話で東京市役所へ入つたが、火の玉のやうな氣性は、やがて宮仕への馬鹿々々しさを感じ出した。思ひ切つて職を辭し、大に彼の活動性を滿足せしむべく日本新聞の政治記者となつた。

何しろ持つて生れた奮鬪性の快男子、筆はたつ、勇氣はある。忽ち政治記者中の利け者となり、政治家中彼に囑目する者も少くはなかつた。

と、彼は一日、政友會の重鎭、岡崎邦輔氏並に竹越三叉の兩氏から重大な相談をうけた。相談といふのは、當時伊藤公が朝鮮に統監として各種重要問題の解決に骨を折つてゐるが、元山毎日新聞が、事毎に政府に楯つき面白くないから、これを叩き潰して貰ひたいといふ相談である。叩き潰すといつても腕力ではない。元山毎日に對抗してゐる元山時事の主幹となり、紙上の戰ひでやつてくれといふのである。

『畏りました。やりませう。必ず一年以內に見事に叩き潰して見せます』

彼は決死の覺悟を以つて、元山へ乘込んだ。時に彼れ僅かに二十八歲である。

が、然しこの靑年主幹は、敵と鬪ふ前に先づ味方と鬪はねばならなかつた。何しろ新聞記者といへば、海千山千の武者が多い。その中に飛び込んだ僅か二十八歲の若輩主幹だ。甘く見られるのも無理はない。

『今度の主幹、生意氣だ』といふので、忽ちストライキをやられたが。負けず嫌ひの彼、

『よし、やるならやれ、俺は一人で新聞を作つて見せるぞ』

彼は大車輪だ。編輯から探訪から印刷へかけて八人藝、不眠不休、東奔西走、遂に一週間ぶつ續けてたつた一人でやり通してしまつた。驚いたのは記者連中、たうとう兜を脫いで降參し、爾來新主幹の命を唯々諾々として聞くやうになつた。

內部の統制がつくと、今度は元山毎日に向つて猛烈な戰爭を開始した。彼が編輯するやうになつてから紙面は一新した。市民は擧つて彼の說に聽いた。僅か數ヶ月にして元山毎日は購讀者激減、忽ち經營困難を傳へらるるに至つた。

時偶ま元山に民團長（市長）問題起り、彼は熱烈なる市民の輿望を負うて民團長に推選された。同時に、彼の勢力に押されて一本立ちの出來なくなつた元山毎日は遂に彼の前に

併合を乞うた。團長にはなる、反對派新聞は合併する、彼の得意や思ふべしである。

若き民團長——彼は前後三ヶ年そこで縱横の才腕を揮つた。

× × ×

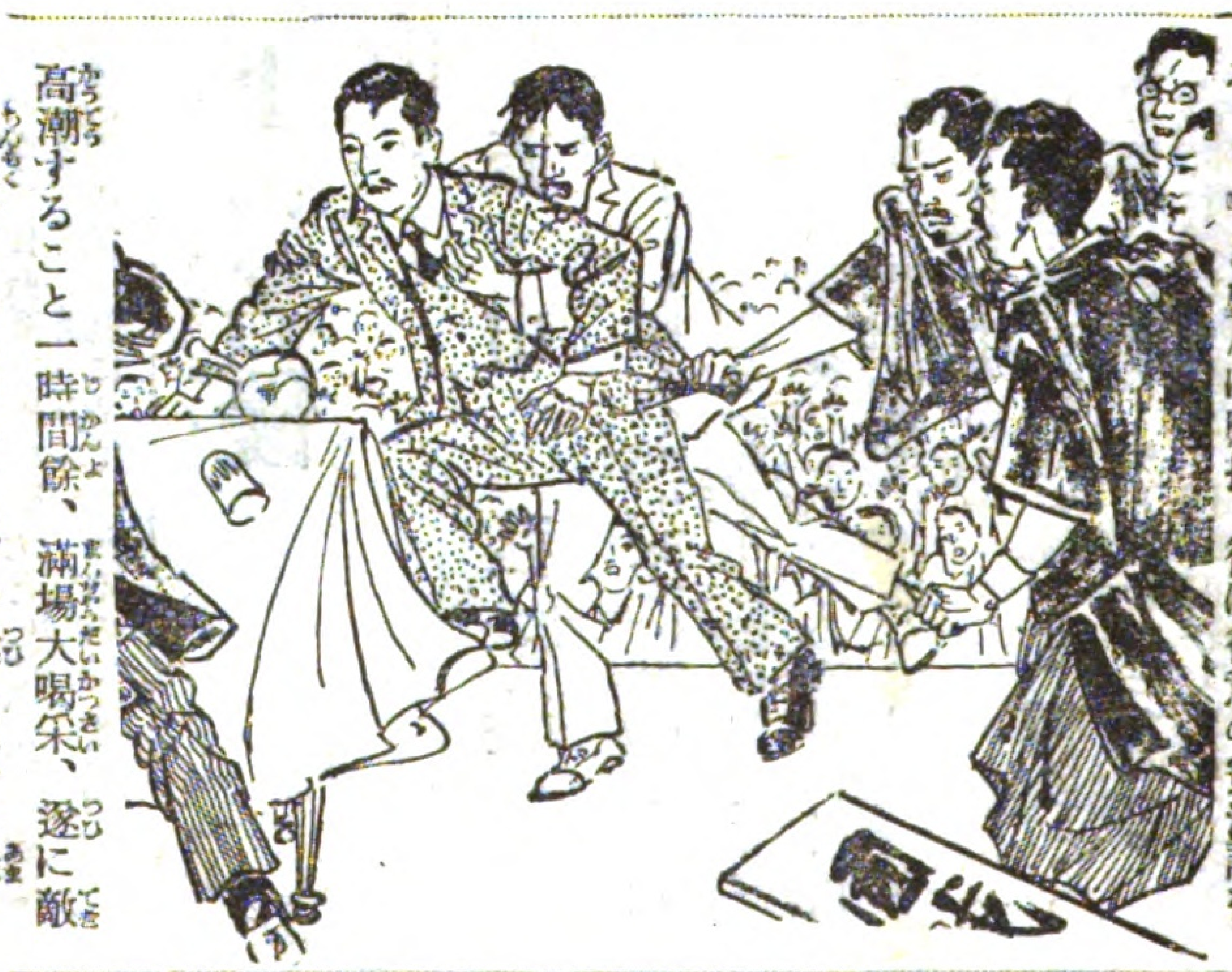
やるだけのことをやつた彼は、明治四十三年民團長を辭して東京に戻つて來た。

と、場面は急轉回、明治大帝の崩御、續いて大正の政變、桂公が宮中より出でて總理となり、所謂『皇室を以て城郭とし、詔勅を以て彈丸に代ふ』といふので、世論囂々と湧き立つた。彼は尾崎行雄氏の一派と共に、憲政擁護運動に急先鋒となつて活躍することになつた。

素より、政府でも默つてゐない。櫛部荒熊氏等の率ゐる政府黨一派は、逆に國技館に於て尾崎氏彈劾演說會を開いた。

櫛部氏等は尾崎氏の所謂『天皇は人なり』の言葉尻を捕へて、尾崎こそ國賊だと盛んに惡罵を始めた。と恰もそこに傍聽人の中に交つてゐた川崎、生れついての熱血漢、この不合理の演說を聞いて何でう默すべき、奮然として單身、敵の壇上に飛び上つた。

敵の壯士數十名、之を見て驚き、バラ〳〵と馳けよつて彼を壇上から引き下さうとする。と、彼等の演說に反感を抱いてゐた聽衆は、俄然總立ちとなつて彼に味方し、『やらせろ〳〵』と盛んに應援、彼は得意の憲法論を



高潮すること一時間餘、滿場大喝采、遂に敵を沈默せしめたのみならず、遂に五千に餘る聽衆の名に於て、此の演說會を解散してしまつた。演說の妨害をやるとか、立合演說をやるとかいふことは他に例のないこともないが、敵の演說會の壇上に大獅子吼、遂に聽衆の贊成を得て、逆にその演說會を解散せしめるといふやうなことは、或は前後この一つであるかも知れない。

× × ×

大正四年、三十六歲、彼はいよ〳〵郷里三重縣より衆議院議員候補者として逐鹿場裡に打つて出ることになつた。

相變らず一文無し。搗て加へて、選擧區には何等貢獻したこともなし、まして名門々閥では勿論なし、況や制限選擧の當時である。彼のやうな駈け出しの書生が當選しようなどとは誰しも思はなかつた。

然し、元來が負けじ魂の彼、火の玉の如き彼、何クソ！ と猛奮闘、舌戰實に二百三十回といふ努力である。俄然、彼は大方の豫想を裏切つて、七人定員中の第五位で見事當選！ 敵も味方もアッと驚嘆した。

三十六歲の青年代議士——彼の政界に乘り出す第一步は、かくして華々しいスタートを切つたが、爾來、大正九年原内閣の選擧大干涉により、藤澤幾之輔其他の諸名士と共に、惜しくも落選したが、一年足らずの間に行は

れた補缺選擧では見事反對黨をたゝきのめし、引續き當選すること六回、加藤高明內閣の成立するや、擧げられて陸軍參與官となり、宇垣陸相に獻策して軍制改革の大業を佐け、遞信參與官に移つては簡易保險法の改正を始め功績少からず、斯くて政務官として優秀なる力量才幹を示した彼は、今度、昭和四年濱口內閣の成立と共に、司法政務次官に就任、今や民政黨有數の闘士として、その勇姿を政界の第一線に立てゝゐるのである。

流浪十年遂に天下の名優

――井上正夫氏の苦業時代――

蔭山弘義


井上正夫氏

『アレーッ……人殺しイッ……』

遙に聞える女の悲鳴。聲は町外れの森の中、然も十二時過ぎた眞夜中だ。

『助けて下さいーッ』

素破、容易ならぬ一大事件、寸刻も躊躇はならぬ――と折よく通り掛つた警官は、佩劍握るや森の小道を一散走りに驅けつけた。見れば、闇の彼方に動いてゐる男らしい白地の浴衣。警官は驀地に飛込んで、

『待てッ何をするかッ』

と素早く襟がみを引ッ摑んで、忽ちそこへ捩ぢ倒し、ポカ〱ッと拳骨が三つ四つ。

『全體貴樣は何者だ、此頃毎夜のやうにこの森で悲鳴が聞えると云ふ話しだが、サテは貴樣の仕業だな、顏を見せろッ』

警官は男の顏を捩ぢ向けて見る。細面の色の白い眼鼻立の整つた男。

『フン、役者めいた顏つきをしてゐながら太い奴だ、サア本官と共に警察へ來い！』

『ヘッ、ヘエ……あゝ苦しい……旦那實は私はその役者でございます』

『役者？　役者でも何でもいゝ、サア起てッ』

『ヘエ、起つには起ちますが、私はその役者の稽古をしてゐたんで……』

『ナニ、役者の稽古をしてゐた？　役者の稽古に矢鱈に女に惡戯されてたまるか、四の五の云はず來いッ』

『イエ〱飛んでもない――あれは聲色です、現に何處にも女は居ないぢやありませんか』男は起ち上つて拳骨のあとを撫でながら言譯をする。成程、四邊を見ればそれらしい女の影もない。警官はいさゝか狐につまゝれた形で、

『フーン、すると貴樣は矢張り本物の役者か？』

『ハイ、私は今、町の××座にかゝつてゐる芝居の座員でございますが、此處で聲色の稽古をしてゐるんです』

『フーン、成程、さう云へば貴樣の顏には見

覺えがある。――しかし稽古にしても何にしても女の悲鳴などはよろしくない、今後氣をつけい』

『ヘイ、誠に相濟みません……』

警官は何だ人騒がせをするとブツ〱云ひながら歸つて行つたが、あとに殘つた彼役者先生、痛さうに顔を撫でながら、思はず『アハヽヽ』と笑ひ出してしまつた。

近頃流行のナンセンス、確に百パーセントの値打はある話だが、さてこの話の主人公こそ誰あらう、後年劇壇の大統領と大向ふからヤンヤの人氣を浴びた井上正夫氏――氏がまだ十八歳の時分、敷島義團の一座に加はつて山口縣長府に巡業中の一挿話である。が、かうして聲の苦心に咽喉から血を流すこと幾度かして稽古したお蔭で、氏は現在どんな廣い劇場でも隅から隅まで聲が通らぬことは無いといふほど聲量が豐富になつたのであつた。

× × ×

彼は愛媛縣伊豫郡砥部町に生れたが、長ずるに及びいろ〱の事情から一日も早く家を離れたいと願つてゐた。と、恰もそこへ來たのが敷島義團といふ壯士役者の一團。彼は渡りに舟と、着のみ着のまゝ家を逃れて座員に加へて貰つたのである。

彼は元來役者が好きであつた。お祭などに若い者の村芝居があると、風彩のよい彼はその立役者になつて喝采を博したことなどがあつた。

が、本職になつて見るとさう〱うまく問屋が降さない。田舍廻りの旅役者、當らぬと食ふや食はずで逃げ出すこともある。慘めな宿屋で五日も十日も逗留して次の開演場を探すこともあつた。さうかと思ふと身ぐるみ着ぐるみ、スッてんてんで寒中を舞臺裏で過すこともある。夕暮毎に座長の爲め、五厘づつ持つて德利の底にポッチリと酢を買つて來たのも



この時のことである。それに彼は生れついての酢ぎらひ、こんなつらいことはなかつたと今も昔語りの一つにしてゐる。

――しかしその間にも彼は藝道への精進を忘れなかつた。

道を歩き乍らも身ぶり手ぶり、科白を口ずさむ。まるで氣狂のやうな有樣。だから深夜女の悲鳴を眞似て警官に擲られるやうなことはさう珍らしくは無かつたのだ。

或時、座長が髭のある紳士に扮する必要があつた。その頃つけ髭といふものを持たなかつた一座は大抵墨で書いたものである。その滑稽さは全く茶番を見るやうなもの。彼は何とかして本物の髭を拵らへてやりたいと思つた。そこで、白縮緬の兵古帶を裂いて髭形を拵へ、それに自分の頭の毛を一本一本拔いて植ゑた。果せる哉本物と見違ふやうな立派な髭が出來た。座長は大いに

喜んで彼に金五十銭也を與れ時に目をかけてくれるやうになつたが、そのお蔭で、抜いたあとに生える毛は全部眞白、現在彼の前頭部に一ケ所丸い白髪の所のあるのは、實にその時の苦心を物語るものなのだ。

それは恰度福岡縣羽犬塚で開演た時のこと、一座は『日本男兒』といふ芝居を上演した。所が非常な大うけ。人間か人形か？——觀客は熱狂して、中にはこれに賭をする者などが出て來る。

『あれが人間なら素晴らしい役者だぞ』

觀客は人間が扮したと聞いて更に驚いた。

九州で名うての某俠客は賭に當つて彼に金二十銭與れたこともある。

彼の藝はかうして次第に至妙を加へて來たが、やがて羽犬塚で偶然落合つた酒井正俊一座に加つた。この酒井正俊が彼に井上正夫といふ藝名を附けてくれたが、これぞ井上正夫の名が世に出るそも／＼の初めだつたのである。

× × ×

酒井一座は間もなく大阪道頓堀の辨天座へと乘込んだ。所が恰度同じ道頓堀の朝日座に來てゐたのは當時日の出の勢で人氣を博してゐた新派の大立物喜多村緑郎、高田實の一座。然もこの一座とは偶然にも同じ出し物。酒井の一座は懸命になつた。何とかして向ふよりうまくやらねばならぬ。一座は頭を集めて工夫を凝らした。

彼はその時醫學生の役を振られた。

『よし、アッと云はせてやるぞ』

彼はひそかに工夫を凝らして開場を待つた。

と、意外、蓋を開けると俄然人氣は喜多村一座を壓して酒井一座に集つた。然もその人氣の中心は、無邪氣な醫學生である彼井上正夫なる端ッ葉役者の上に集つたのだ。

朝日座は連日大入滿員、同時に井上正夫の名は關西劇壇に疾風的に喧傳されて、一躍彼は人氣役者になつてしまつたのである。喜多村高田の兩優が忽ち彼の藝を認めたのは云ふまでもない。

漸く人氣は出たものの田舍役者で終りたくないと發心した彼は、明治三十一年上京して眞砂座の伊井蓉峰一座に加はり、再び所謂馬の脚から修業をつんだが、翌年、田口掬汀氏の『女夫波』の上演さるゝや伊井の老け役に對して子役を振られ喝采を博してより、文字通りトントン拍子の出世振りで遂に今日井上正夫と聞けば誰一人知らぬ者なき名優とは成り得たのであつた。然も彼は劇界稀に見る人格者、いよ／＼その藝の圓熟と共に劇界の至寶として讃へらるるに至つてゐる。

妻の諫めを容れて今日の成功

—實業家吉村鐵之助氏の發奮の動機—

若林意山

大阪は或る遊里に近い町に吉村といふ唐物屋を營む若い夫婦があつた。顧客も相當にあり、金持ちといふほどではないがその日には困らぬ暮しであつた。

所が商賣の關係もあつて、若い主人はよく酒くさい息を吐きながら歸つて來た。それが爲め、彼は何時の間にか健康も勝れぬやうになつた。

妻のみね子夫人、主人のこの有樣を見ては竊に眉をひそめ、折を見てはそれとなく、

『あなた、お遊興になるなとは申しませんが、若しやお身體にさはるやうなことがあつては……』

『ハヽヽヽ、またお前のキリスト教か……宗教なんてものは金持ちかお道樂者が氣休めに信仰するもんだ。そんな眞似をしてゐたら我我は口が干上つてしまふよ』



吉村鐵之助氏

こんな譯だから自然店の者までその氣になり、みね子夫人の見えない所では舌を出して嘲笑つてゐる。

しかしみね子夫人の信念は固い。何と云はれても、いつかは自分の力で夫の心を更らせ、正しい道に導かうと深く心に定めてゐた。



すると恰度その頃、明治十九年のことだが、近くの或る教會に、當時京都の同志社に在つて熱烈に神の道を説いてゐた新島襄、綱島佳吉、市原盛宏などといふ基督教界の先覺者が來て、熱心に説教してゐられた。

『おゝ、これこそよい機會だ……』

夫人は心ひそかに喜んで、自分は毎日缺かさず聽講に行く一方、夫にもぜひ一度聽かせて見たいと考へ、

『ねえあなた、御存知かも知りませんが、今度京都からいらしつた新島先生や綱島先生のお説教は大變な評判です。あなたは基督教はお嫌ひですが、きつと何かの爲になりませう。ぜひ一度お聽きにいらしやいませ』

それとなく奬めて見る。

『さうか、俺も評判だけは聞いてゐたが、それほどにお前がいふのなら一度聞きに行つてやらう』

主人は内心いやいやながらみね子夫人に連れられて教會へ行つた。

教會では今しも新島先生が熱烈な口調で説教中である。

『……心の貧しき者は福である。天國は即ちその人のものであるからだ。哀しむ者は福である。その人は地を嗣ぐことが出來るだらうから。また心の清いものは福である。その人は神を見ることが出來るだらう――』

その熱烈火の如き一句一句――聽衆の胸に

は深い強い感動を與へずには置かなかつた。主人もどうやら深く感動したらしい色が顔に見えた。然し、歸り途になると、

『あゝあ、長いお談議を聞かされた。だがこれでお前への勤めも濟んだといふものだ。アハ、、、、』

彼は夫人をからかふやうに冗談をいつた。

『あんな立派なお話に何の感激も起らないとは、何といふ情けない夫であらう』

夫人はつく〴〵悲しかつた。

× × ×

彼は近江の國大津のある質屋に長男として生れた。家は相當にやつてゐたが、他人の飯を食はねば世間がわからぬといふので、十四歲の時、唐物屋をやつてゐる京都の親戚に見習といつた工合で預けられた。唐物屋といふのは支那の名產を商ふ店で、象牙とか唐木（紫檀、黑檀、花梨といつたやうな貴重木）を取扱つてゐた。彼はその店でよく忠實に働いたが、商ひの上から三味線屋とか藝者屋とかに多く出入りしてゐる中、若氣の至りついふらふらと惡い酒の味を覺えた。親戚の家では彼の將來を心配して實家に歸した。彼が十九歲の時である。

大津に歸つて二年ばかりブラ〳〵してゐたが、元來活動的に生れついた彼は質屋といつたやうな坐して待つ商賣はどうも氣に合はず、こゝ一つ男一匹の腕を磨いて見たいといふので、知合の世話で、大阪のある鋼鐵屋に店員となつた。既に十四の年から小僧として叩き上げた經驗はあり、一生懸命働いたので主人も大喜び、やがてその親戚の娘を是非彼に貰つて貰ひたいといふことになつた。

さて妻を貰つて一家を持つとなると彼も自分の將來について深く考へねばならぬ。どうせ一家を持つなら獨立して商賣を始めたい、それも鋼鐵屋はまだ本當になれぬことであるし、資金も相當に要るし、先づ〳〵自分の覺えついた商賣をといふので、結婚すると同時に、主家を辭し、小さい乍ら唐物屋を始めたのであつた。時に彼は二十四歲、みね子夫人は二十二歲。

若い夫婦は輝く希望に躍り立つてゐた。商賣も順調に發展して行つた。がそこに思ひがけない陷穽が待つてゐた。商賣が手廣くなるにつけ、若い主人はうか〳〵と、あちこちに回收不能の多くの貸金を作り、彼の店の致命傷たらんとした。彼は日夜心痛した。心痛の餘りには、幾年來忘れてゐた酒の味を再び覺えた。三味線屋や藝者屋に出入りの多い彼の商賣と、酒と唄とは僅に紙一重の間にあつたのである。

然し、みね子夫人は夫の醉うた姿を見ても決して憎む氣になれなかつた。事情がわかつてゐればゐるだけに何とかして夫の心を引立て、そして正しい道に引戾したいと苦心したのであつた。夫人はそれを信仰に求めた。そして先づ自ら信者となると同時に、夫にも信仰を植ゑつけんと思ひ立つたのであつた。

× × ×

夫人の親切が仇に、彼は夫人をからかふやうなことをいつてゐたが、然し、蒔かれた種は遲かれ早かれ芽を出す時が來る。いつとなく彼は、何やら考へ込むやうになつた。足繁く通つてゐた遊里へも遠ざかり、飲み續けてゐた酒も何となく進まぬやうになつた。そして、商賣の得意廻りをするのを寧ろ恐るゝものゝ如くであつた。

夫人は自らの勸めが無駄でなかつたことを

知つた。そしてこの上はもう一歩と考へた。

『あなた……』

或る日彼女は思ひ切つて切り出した。

『あなたは御商賣に嫌氣がさして來たのでしたら、いつそ一思ひにお止めになつては如何』

『うむ、實はそのことなのだ。俺はいつぞやお前に進められて教館へ行つてから、つくづく自分のしてゐることが惡かつたと悟つた。この商賣は酒に縁が近くていかん。お前のいふ通り、いつそやめてしまつてもいい』

夫は懺悔するやうに、始めて胸を打ち開けた。

『よく仰有つて下さいました。そりや商賣に上下はありますまいが、この商賣は貴方の御出世によくありません。ケチのついた商賣は一層思ひ切り、サッパリと新規蒔直しに出直したらどうでせう。私はどんなに艱難辛苦をしてもいとひません』

『さうか……お前もその決心なら思ひ切つてやめよう』

夫婦は互に語り合つて將來の成功を誓つたのであつた。

× × ×

間もなく店は閉ぢ、家財道具を賣り拂つた夫婦は、新しく活躍するには東京に限ると、僅か八十圓の金を懐中にして棲みなれた大阪を出發した。

しかし、かうして男々しく上京したものの、何しろセチ辛い世の中、オイソレとうまい商賣もない。仕方なく夫婦は、月貳圓五十錢の借家に住み、主人は慣れぬ勞働者に身を落して、當時の田中鐵工場、今の芝浦製作所に鐵槌を握り、汗水たらして働いた。

みね夫人子も勿論遊んでなどはゐない。夫の出て行つたあとは、近所のすゝぎ洗濯もするし、裁縫も引受ける。暇があれば内職に袋貼りもする。寢る目も寢ない共稼ぎの艱難辛苦――が、あの昔の生活に比べて何といふ明るい希望に滿ちた生活であらう。

やがて夢の間に五年ばかり經つたと、好運にも主人は或る小さい鐵工場を手に入れることが出來た。日頃から稼ぎ貯めたお蔭で多少の資本が出來、それを資本に買ひ取つたのである。

この好機！ これを逃して何にならう！ 彼は懸命になつて商賣の繁榮策を講じた。

朝は早くから工場に出て働く。夜は遲くまでお得意をまはり、材料を仕入れる。晝となく夜となく、文字通りの大活躍。妻はまた神の冥護を念じながら夫を助けて今までに倍する必死の覺悟で働き、少しでも夫の負擔を輕くし、夫を勵ますやうにと心掛ける。

お蔭で、お得意の信用は日増に厚くなり、工場は次第に盛大になつて、成功の曙光は追々と見えて來た。

爾來櫛風沐雨三十有餘年、夫婦はあらゆる艱難と闘ひ、あらゆる辛酸を嘗めて奮闘努力を續けたが、遂にこれが出世の糸口となつて彼は今日實業界一方の重鎭と稱される大成功者となつたのであつた。

即ち吉村商會主を始め、江若鐵道、大日本電球等諸會社の社長、更に無數の大會社重役の椅子を占め、實業界の人格者として、宗教家として、令名ある吉村鐵之助氏――氏こそ實に此榮ある成功者であるのだ。

さもあらばあれ、この成功の裏面にあつて、陰に粉骨碎心、よく内助の功をつくしたみね子夫人の如きは、まことに類ひ稀なる日本婦人の龜鑑といはねばならぬ。（終）

美談逸話挿話選

母の心

板垣退助は幼名正形。生家は土佐高知城下中島町にあつて、父正成は祿高三百石。母は同藩林勝重の女で、有名な良妻賢母であつたが、どういふものか、彼女は生來非常な雷嫌ひであつた。



或る夏の日、當時まだ五歳の正形が庭前で遊んでゐると、俄に黒雲暗澹として、電光ひらめき雷鳴とどろく物凄さ。正形は膽を潰して玩具を抛げ棄て、足も空に奥の間へ逃げ込んで、いきなり母の膝へ取りついた。

と、日頃情深い母が、何故か、嚴しく正形の小さな手を打拂ひ、『お前、彼方へいつておいで。決して此處へ來てはいけません。』

と、嫌がる正形を無理から隣室へ押遣つて、暑苦しさも厭はず、間の襖をピシヤリと閉て切つてしまつた。雷鳴電光は愈々すさまじく、正形は恐ろしさに泣き叫び乍ら、襖に手をかけるが、母は堅く押さへて開けさせなかつた。しかし、素より雷嫌ひの母である。自らも恐ろしさに顏色を失ひ、總身をぶるぶる顫はせてゐるのだつた。

かうした事が屢々あつたので、或る人が不審に思つて譯を訊すと、正形の母は卒直に答へた。

『固より愛兒の正形のこと、決して邪慳に追ひ拂ふ譯ではありませぬ。元來私は雷を恐れる性分で、雷鳴を聞くと生きた空もなく、たゞ慄へてをりますが、もし正形を近づけて私の臆病な氣が感染しましたら、一生膽力具はらず、立身出世の妨げになりますので、雷鳴の時は態とつれなく遠ざけるのでございます。』

後年、正形改め退助が岐阜で刺客相原尚褧に胸を刺された時、『板垣死すとも自由は死せず！』と叫んで、從容自若、見る人聞く人その膽力に驚嘆したといふが、それもこの母の教育の力に負ふところ大なるものがあつたのである。

蠻族に通じる愛

一九〇一年ブラジルの首府リオ・デ・ジヤネイロの大植物園の園長のバルボサ・ロドリイグ氏が、アマゾン流域の秘密境を探檢してゐた時のことである、インデ

イアン族の中で、何にかにつけかにつけブラジル政府に反抗して頑迷極まる蠻氏と思はれてゐるクリチナ・インデイアンといふのがあつた。

ある時氏は、夫人をつれて、この種族たちの住んでゐる地方へ、勇敢にも探検の歩をすすめた。



果して、蠻族は、氏の一行を見つけると、殺到して來て、ぐるりとりまいてしまつた。

その時、子供を抱いた蠻族の女がゐたが、抱いてゐる子供が、喧しく泣き叫ぶので手こずつてゐた。

氏の夫人は、靜かに近よつて行つて、女の抱いてゐる小兒に向つて、やさしい聲で子守唄を歌ひかけながら、しまひには抱きとつて胸をひろげ、乳房を含ませながら、たうとう寢せつけてやつた。

この間、蠻族たちは、夫人のすることを、奇異な眼を瞠つて見まもつてゐたが、夫人の歌ふ子守唄のメロデー、やさしい態度に魅せられたのか、次第に顔を和げ、やがて、敵意を飜して、氏夫妻を招いて宿を與へたり、贈物を呈したりして、歡待しはじめた。

『どんなに野蠻だといつても、通じるものは通じるのだ――言葉でも、習俗でも通じない難關を愛だけは靜かに歩みよつて行くのだ――』と氏は、その時、武器一つ持たずこの蠻地へ入つた自分の決心を尊いことに思つた。

彦左衛門とお茶壺

毎年、宇治から將軍家へ献上する茶が、往來を通行する時は『お茶壺の御通り』と云つて路傍の人々は跪坐禮拜するのが常であつた。

これは士ばかりでなく大名でも道を避けて禮をしなければならなかつた。

大久保彦左衛門、或時此の『お茶壺』と行きあつたが、路を避けぬばかりか禮もしない。附添の役人、



『これは御用の御茶壺だ御存じないか。』と云ふと彦左衛門、『何ッ、御用のお茶壺だ、此の方は御用の御人だ、人と茶ではどちらが尊いか考へて見さつしやい。』役人は此の一喝に這々の體で逃げて了つた。

自身の改革

宗教改革史の著者として名高いバーネット僧正の子に、トムソンといふ放蕩兒

があつた。

或る朝、彼は何故かいつもに似ず頻りに考へ込んで居た。珍らしい事とて、父の僧正は不審さうに訊ねた。

『お前は何をそんなに考へてゐるのか。』

トムソンは、靜かに顏を上げて、重々しく云つた。



『お父さんの宗教改革史よりももつと重大なもつと大切な事を考へてをります。』

『うむ、それは一體どういふ事だ?』

『私自身の改革であります。』

僧正はから〳〵と笑ひながら、でも親切に云つた。

『それはお前のやうに一度墮落した男には迚も望みのない事だが、併しお前の口からさういふ言葉が出たのは大變うれしい。』

『有難う御座います。仰言るまでもなく私の事は御信じにはなりますまい。然し、私は人に何と云はれても、又如何に笑はれても少しも寂しくはありませぬ。結局私自身の改革は私自身の改革ですから誰にも賴ることなく、その改革に努力します。』

彼の言葉は、嚴然として些かも輕薄なところがなかつた。

果せるかな、トムソンは後年民事裁判所長として、その賢德を世人から仰がれるやうになつた。

諸君、怖れるな

有名な英國の探檢家サア・ハンフリー・ギルバートは、その最後の航海で、彼の乘つてゐた船が氷山に衝突して將に沈沒せんとした時、あわて騷ぐ乘組員に向つて言つた。

『諸君、怖れ給ふな。天國へは陸からでも海からでも行かれるぞ。』



さうしてギルバートは沈み行く船の甲板に坐して、最後まで靜かに聖書を讀んでゐたといふことである。死に面して從容として怖れざる、斯くの如きを眞の勇者の態度といふべきであらう。

作兵衛の言葉

上杉景勝の家臣河津作兵衛といふ者は、相撲が上手で家中の若侍共に多く弟子があつた。作兵衛は力量があつたばかりでなく、書を讀み、琴を彈じ、日頃は柔弱な人のやうに見えた。常に門



人を警めていふには
『何事も人は廣く心を配りて學ぶ時は皆無用のことはない。我氣力壯なりとて人の氣力のよわきを侮り、わが發明に誇つて人の愚を見下すなどいふ拙き心にては藝の至極には至らぬものである、とりわけ士と呼ばれ、人々の上に立つ者は己れ高ぶる思ひなどゆめ〳〵あるべからず、このわきまへを持つて何事も修業をせねばならぬ。』

辨償

『懺悔錄』の著者として有名なルッソーがパリイの市を歩いてゐると、
『ワアッ！』
とばかり猛犬に嚙みつかれた。犬の飼主はあとでルッソーと知つて大あわてにあわて〳〵、わざ〳〵使を寄越して、
『どんな償ひをいたしたらよろしいか。』
と、懇ろに問うて來た。ルッソーは、
『以後犬をつないで置くやうにしなさい。』と答へた。

木曾の馬子

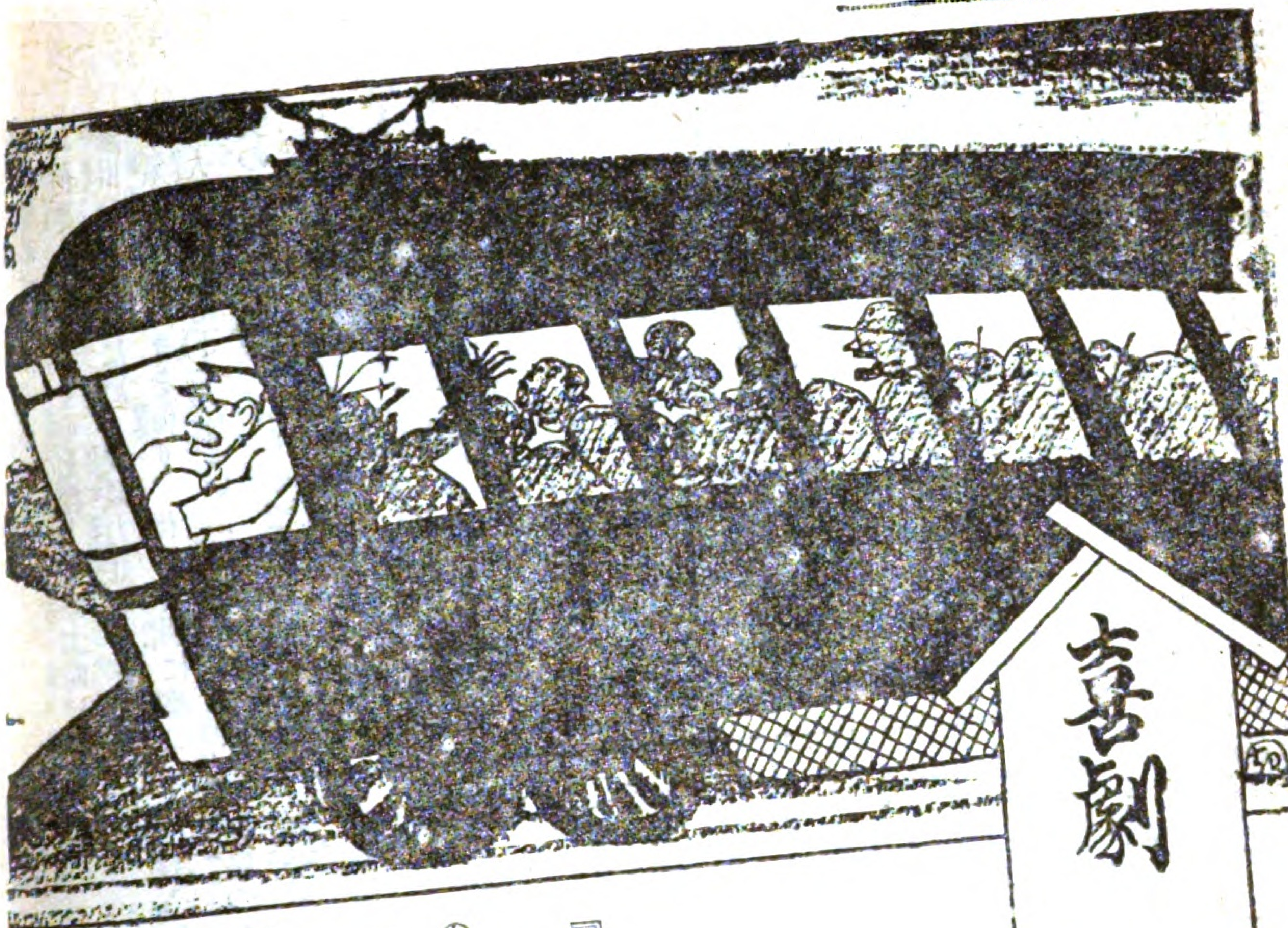
昔、或る僧が、木曾路を旅して、驛馬を雇つた。するとその馬子が自分の馬を呼ぶのに、しきりに、『親力親力。』と云ふ。僧は不思議に思つて、
『木曾では馬の事を親力と呼ぶのかね？』
『別にそんな譯でもありませんが、何しろ畜生乍ら一家一族を養つて吳れるのだから、わしは親力と呼ぶことにして居ます。』



と馬子の答。僧は非常に感心し乍らほど行つた頃、馬子は、急に足を止めて、馬上の僧に願つた。
『和尙樣、一つ恐入りますが、此の馬に十善戒を授けて頂けませんでせうか、此世の働きは畜生と申して、仲々人間も及びません。此の親力が死にましたらどうか來世は立派な佛にしたいと思ひますから。』
僧は、益々感心して、直ちに馬から下りて、その場で戒を授けてやつた。
馬子は、我が事のやうに喜んで、やがて次の驛へ着いた時、賃銀を辭退した。強ひて十文を與へると、早速餅を買つて馬に食はせ、その勞をねぎらふさまは、まことに親子のやうであつた。

樋口慶千代氏の名著

近松研究に於ける第一人者樋口慶千代氏の、上田博士との合著に『近松語彙』なる名著がある。これは、眞に文字通り氏の半生の心血の凝つたものである。
文學博士笹川臨風氏は、『此書一たび出でて、近松學は其の夕闇にも似てゐる時代から、一躍して、白日冲天の明るさに進んだのである。』と口を極めて推稱されてゐる。



喜劇　心機一轉

曾我廼家五郎

細木原青起畫

——深夜の叫び——

『待て、待てッ！　電車待てッ！　止まれッ！』

今しも京阪電鐵京都行の最終電車が、深々たる夜の闇に全速力で橋本附近のカーブ線へ差しかゝッた時、突如！　前方から此の叫び！

『アッ！』

肝をつぶしたのは運轉手です。必死に制動機をかける五六間前の線路上に、何と一人の男が仁王立ちになッて、焚火の炎に全身を照らされながら兩手を振ッて立ち塞がッて居るではありませんか！

『コラ馬鹿！　何をして居るンだッ！』

運轉手は火の玉のやうに怒りました。間髪の際どい所でやッと電車を停めると、飛び下りざま、



『生命が惜しくねエのか、馬鹿野郎！』と突き飛ばす、そこへ後部から車掌も駈けつけて、

『交通妨害だ、サア來い！』

と、前後からポカ〳〵と撲る蹴る。撲られてゐるのはズングリ肥ッた若い男でした。彼はフー〳〵悲鳴を上げて居ます。

『マ、マ待ツとくたはれ！　ア痛々！　マアそンな、理由も聞かンと何をするのや。ア、ア。腰骨が折れるがナ……』

『何を馬鹿々々吐しやがる。立てツ！　野郎立たねエかツ！』

する中に急停車で泡を食ッた乘客連中もドヤ〳〵降り出して來ました。中でも眞赤になツて怒ツて居る一人の紳士。

『オイ運轉手、何うしたンだッ？』

『何うも濟みません。何しろ此の野郎が電車の前へ仁王立ちになツて進行妨害を企てたンです』

『何ぢやと？　それは怪しからン奴ぢや。コレ貴様ツ、天下の交通機關に惡戯をするとは許すべからざる奴ぢや』

乘客の中でも氣の早いのがポカ〳〵となりかゝる。すると件の男また悲鳴を上げて、

『マア、待つとくたはれ、兎に角理由を——アイタ、タ、タ。マア〳〵理由を聞いとくンなはれ。此の線路を——此の線路を、貴下がたの電車がその儘通ツて行ツたら、ソラ大事なるのぢやがナ——』

『エ？　何だと？』
『脫線するか顚覆するか――何ッちにしても無事には濟めへン。そやさかい私が一生懸命それを知らそ思うて、聲を嗄らして止めたのや！』
意外な言葉に車掌と運轉手。思はず押へつけて居た手を離しました。
『すると何か。此の線路が何うかなッて居るとでも言ふのかね？』
『何うかなッて居るどころかいナ。マア彼處を見なはれ』
言はれてみンな指さす方を透して見ましたが、忽ち眞青になッた運轉手と車掌、見る〳〵窓へ出しました。
『ヤア〳〵、大變だ〳〵！』
『土砂崩れで石と砂が線路を埋めて居る。大變だ』
『忽ち脫線、顚覆――危いところだしたナ』
『ヒエー』
一同の心臟は縮み上りました。暫くして我に返ッた運轉手、ツカ〳〵と彼の前へ進み出て、
『すると貴下は、この突嗟の場合、非常信號の代りに火を焚き、聲を限りに我々に知らせて下すッたのですか』
『さうやがナ』
『さうして我々數十名の生命を、危險を冒して救助して下すッたのですな』
『さうやが』

異常の感激と感謝が嵐のやうに一同の間に捲き起りました。
と見るより最前眞赤になッて怒ッた紳士、泥まみれになッて居る彼を引き起し、一同の前へ立たせて、さて咳一咳、
『諸君！　拙者は當府會議員中井禮造であるが、實に此の方の此の突嗟の御行動は、機敏とや言はん勇敢とや言はん。要するに此の方は我々の生命の親である。諸君には此の際衷心より感謝の意を表せられん事を當府會議員は切に希望する次第であります』
すると一同は忽ち此の生命の恩人を取卷きました。中でも恐る〳〵帽子を取ッて進み出た車掌と運轉手。
『エ、何んとも全く、申譯のない失禮を致しました。何うぞ御勘辨を願ひます。恐ろしい大慘事を未然にお防ぎ下さいました事は、直に會社の方へ報告致しまして、改めて御挨拶を申し上げる心算ですが、就きましては取敢へず御住所と御姓名を御聞かせ願ひたいもので御座います』
然るにわが生命の恩人は、案外ポンヤリしたものでした。
『イヤ、皆が悅ンで呉れやはッたらそれでもう結構や、別に名前を言ふ程の事はあらへンが……』
とその儘、ハツ〳〵と歩きかけましたが忽ち腰をおさへてペタンと尻餅――。
『アイタヽタヽタ――』

――百二十二圓五十錢――

『誰だい、大切な生命の恩人を、斯ンなに起てンやうにまで痛いめにあはしたのは?!』
『さう言ふお前かツて、先刻此の生命の恩人の事を、ありや氣狂者かもしれンーーなンて吐かしたぢやないか』
『靜かにせい、名を聞いて見ろーー』
さてその生命の恩人樣は一同から、所は何處、名は何と問ひ詰められて仕方なく、
『へゝへ。わてはハダカの又公と言ひますのやーー』
『エ? ハダカの又公ーーですツて?』
『イエその、坂田又吉と申しますのやーー』
すると、例の中井府會議員、
『ハ、ア、坂田又吉君と仰有いますか。なるほど、さて諸君、我々の生命の親、坂田又吉君を改めて拙者より御紹介致します。そこで諸君、玆に少し諸君に御相談申し上げたい事がある。外でもない。つまり我々の生命を救うて與れた此の坂田又吉君に對し、我々は些か感謝の意を表する爲めーー謝意を金錢に代へる事は甚だ禮を失して居るけれども、取り敢へず應急手段として、拙者から帽子を廻しますから、各自宜しく應分の御寄附が願ひたいのであります』
彼は斯う言ツて先づ十圓紙幣二枚を奮發しました。『いいとも、いいとも』
『贊成、贊成!』
やがて帽子が一巡すると府會議員、
『坂田君、一同より感謝の印として集ツた金が、些かながらここに百二十二圓五十錢ーーいや、勿論、決してこれで御禮を濟ましたといふ心ではありませんが、取り敢へず採ツた手段です。何うぞ氣にかけずお納め願ひたい』
『遠慮なく、何うぞーー』
『さア、とツて置いて下さい』
到頭無理矢理に彼の懷中へ押し込ンで仕舞ひました。
『斯ンな事して貰うたら、どうもなりまヘンでーーへエ〳〵、エライ氣の毒でおますなア』
『坂田君、御遠慮は無用です』
『さよか。皆さんどうも大けに』
此の時運轉手は一同に言ひました。
『では皆さん、恐れ入りますが何うかもう一度、あの電車にお乘りを願ひます。兎に角後の停留場まで引返しまして、本社へ此の由を報告し、直に線路工事にかゝらせます。何うも大變御迷惑で御座いました』
『それでは諸君、さういふ事にしよう』
『坂田さん、どうも有難う御座いました』
ゾロ〳〵一同が再び電車へ乘り込むのを見送ツた又吉。
『どうも却ツて濟まン事で……有難うさん』
中井府議は最後に帽子を振りました。
『坂田君、ではこれでお別れします。諸君、坂田君の爲めに萬歲を三唱して下さい!』

その中電車は動き出しました。途端に起る萬歳の聲！

『坂田又吉君、萬歳！』

『萬歳！ 萬歳！』

『生命の恩人、萬歳！』

『萬歳！ 萬歳！』

――右も左も蟲の聲――

『ハックション！』

あとへ取り殘された生命の恩人坂田又吉君は大きなクシャミを一ツしました。

『何にしてもマア好い鹽梅やッた』

それから彼は傍に置いてあッた大きな風呂敷包へ手をかけましたが、何と思ッたのか急にその手を引ッ込め、どッかり大地へ蹲踞み込み、切りに何事か思案し始めたのでした。

ところへ突然パッと提灯の火。彼はギョッとして慌てゝ立ち上りましたが、不意を食ッて向ふも吃驚したらしく、

『ヒエ、誰ぢやい吳ダな――ヤア〳〵、お前は又公やないか』

『オヽ、伯父さんか?!』

見れば又吉の伯父で車力の坂田又兵衛でした。伯父は頗る怪訝な顔をして、『何ンやお前斯ンなところで。今頃？ 何をして居くさッたのや』



『それがその――』

『コレ、お前は四五日前に刑務所から出て來たばかりの身體やないか。それでなくとも喧嘩はする、賭博は打つ、此の界隈でハダカの又公と言へば、犬もお前にはよう吠えン位に嫌やがられて居るのが、少しもお前には解らンのか』

『それは、よう解ッてる』

『解ッて居るのやッたら何で今頃、こんな夜更けにこンな處でウロ〳〵し

て居るのや。私に取ッてはたッた一人の可愛い甥や。たとへ刑務所へ這入ッたかて、改心すれば元の人間。世間の人が笑はゞ笑へ、私はやつぱりお前が可愛い。ほンまに、これから金輪際、曲ッた根性だけは出て呉れるなや』

『ところがモウそれが出て居るのや』

『エ、出て居るとは、何がぢやい？』

『此の根性が』

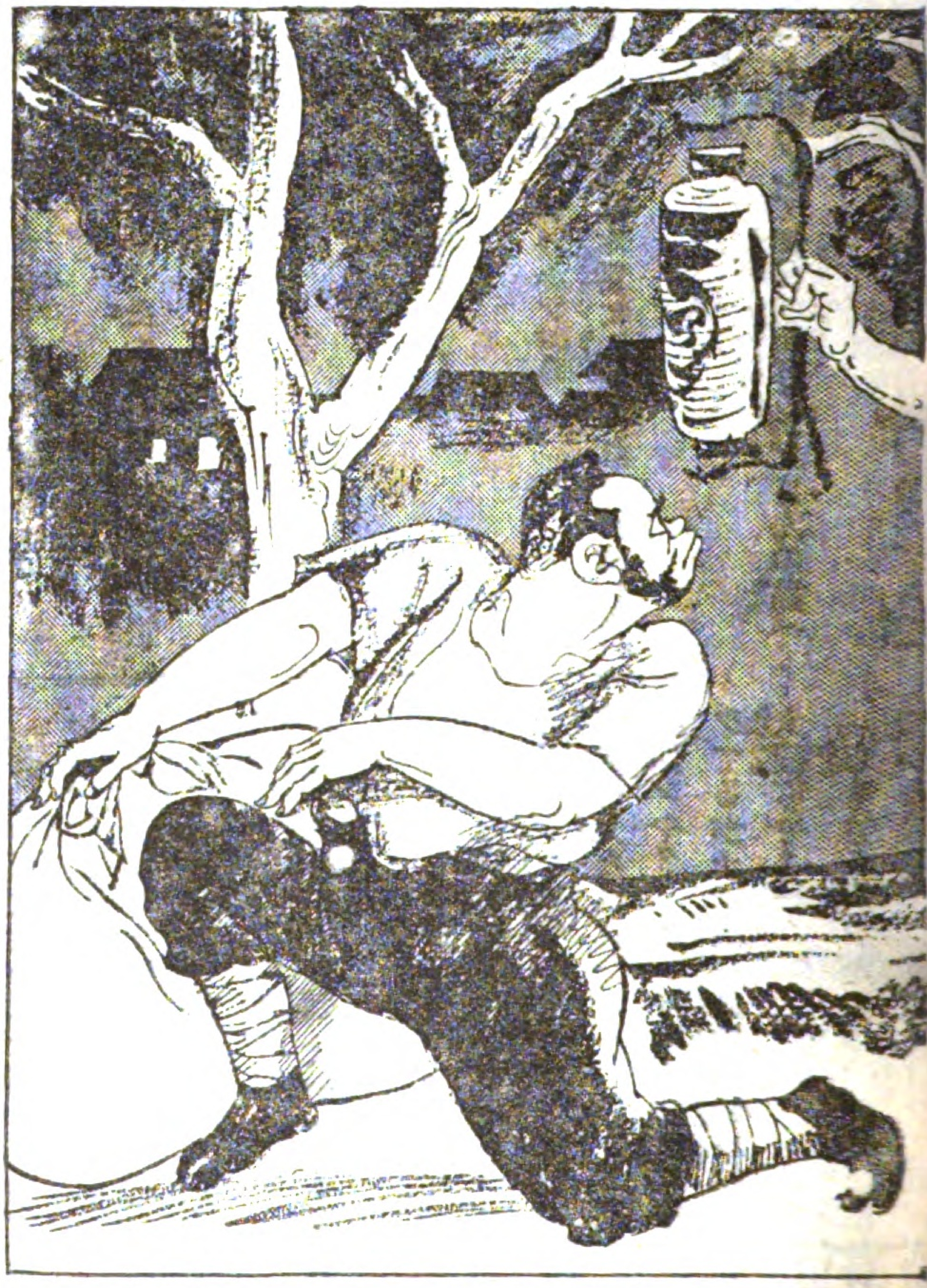
と人差指で鍵の形――。

『ヤア〳〵、そしてまた何時出したのぢやい？』

『今晩やがナ』

『ヒエー、そらほンまかい！』

昔氣質の又兵衛伯父、その儘大地へ、へ、タ張ッて仕舞ひました。その眼の先へ又吉は最前の風呂敷包を見せる――。



『伯父さん、コレだす』

ぱらりと解けば金紗の婦人コート、御召の女羽織、手提鞄、女持の金時計等、等、等……。

『ヤ、ヤ！　こりや、又公！』

又兵衛は呆れ果てゝ其儘又吉を捻伏せました。

『アッ、痛い〳〵、伯父さん、その腰骨は今おされたばかりのとこやがナ。アヽイタ、タ……』

『嘘を吐すのぢやい。コレ又公――』

又吉はまた蛙のやうにペタンコになりました。

『コラ又公！　汝は何といふなさけないど根性の奴ぢやい。四五日以前やッと娑婆の風に當ッたばかりやないか。然かも散々意見をして、身に沁々と應へた樣子やッたで、ヤレ安心と思ふ今夜もう、そンな大それた事をさらすとは、何處まで私を泣かすのや。コレ又公、世間の人に何と笑はれたかて、矢張り貴樣が可愛よッてに、陰になッたり日向になッたり、心配して居る

私の心が、コレヤイ貴樣には解らへンのか。貴樣はもう死ぬまでど根性が癒らンのやなあ！』

途端に又吉の懐中からバラ〱と銀貨や紙幣が落ちる。今や又兵衛伯父も呆然たるばかりです！

『ア、ア！　こりや貴樣、金までも……』

思はず締めた手へ力が這入るその下から、

『違ふ〱、そら違ふぜ伯父さん――』

『何を吐す。此の風呂敷包と言ひ、金と言ひ……』

『だから違ふのや〱伯父さん』

『違ふ？　違ふとは何が違ふのぢやい。此の風呂敷包は汝が盗んだ物でないといふかい』

『イヤ、それは盗んだのや』

『ソレ見い、汝――』

『ア、イタ、タ、タ』

『さうして此の金も一緒に盗んだのやろ』

『違ふ〱』

『コレ胡麻化さうとしたかてさうはいかンぞ』

『伯父さん。今度といふ今度こそは本當に心を入れ替へましたのや』

『ナニ？　心を入れ替へた？』

『さうや、だからこそコレ斯うして風呂敷包を伯父さんの前へ出したのやがナ』

『フーム。汝がひどう眼の色變へていふその言葉、まんさら嘘でもなささうやが、それぢやその譯を話して見ンかい』

『話さいでか伯父さん。斯ういふ理由だす。聞いと吳ンなはれ』

と又吉は伯父の前へピタリと兩手を突きました。

右も左も蟲の聲――。

――置いて行く盗人――

『娑婆の風に吹かれた四日目の今日、酒は飲みたいし、錢はないし、腕組みしながらブラ〱來ると、恰度此の先の伏見屋といふ家の裏口でヒヨイと見れば足がかりの好い樹がニユーと突き出て居るやないか。ハヽアこれを登ればラクに内裡へ這入れるなアと思うたンや』

『悪い根性が骨の髓まで染みとるンやなア、それから何うした？』

『それからフラ〱ツと家の中へ這入ると、誰も彼も寢入ばなでみんな高鼾や、コレ幸ひとチヨツと風呂敷包にして悦び勇ンで此の電車道までドン〱逃げて來ると、ところが伯父さん、彼處を見なはれ』

『何ンや？　こりやエライ事ぢやないか。土崩れや。線路が埋ツてるがナ。萬一此處へ電車が來たら顚覆や、こりや大變ぢや大變ぢや！』

『私もさう思ツたンや、此の儘に放ツといたら澤山の人の生命にかゝはる。さうかと言ツて私一人の力では迚も何うする事も

出來ンし、思案して居る間に、伯父さん、向ふから京都行の終電車がやツて來たのだすぜ！』

『エ？　エ？』

『こりや、大變や思ふと私は自分の事は忘れて仕舞うて、何でも電車の方へ知らさンならンと、突嗟の考へで此處へ火を焚いたのや。ホレ、此の通り、まだ焚火の跡があるやろが』

『ウン〱。なるほど』

『さうして私は線路の上へ立ち上ツて一生懸命怒鳴ツたのや――待て〱ツ電車待てツ止まれ〱ツ危ないぞウ、危ないぞウ――』

『それから？　それから？』

『電車はやツと此處で止ツたが、ほンまに危ないところだツたぜ、伯父さん』

『ヤレ〱』

『すると皆の人が大悦びに悅びはツて、ヤレ生命の親ぢや恩人や言うて、立派な人たちがみンな此の私に頭を下げなはツた』

『ウン〱』

『そればかりかホンのお禮の印ぢやいうて百二十何圓てふ此の金を、私の懷中へ無理に押し込ンでな』

『ウン〱』

『最後に坂田又吉君、バンザーイと、伯父さん、私のバンザイまで言うて呉れはツた』

『ウン〱』

『私は此の年になるまで、バンザイを言はれたのは今日が初手や。伯父さん、私は嬉しうて、涙が出たがナ』

『ウン〱』

『何で伯父さんまで泣くのや？』

『泣きやせんわい。鼻汁ぢやい〱』

『何の鼻汁なもんかいナ。だが伯父さん、然かもその上お上から近々感謝狀たら言ふもンを下さるさうやぜ』

『又公、汝はえらいぞ、子供の時から俺が盲で、今日まで散々歎されよつたが、初めてそンな素晴しい手柄をして呉れた。煎豆に花とは此の事ぢやい。又公よ、俺が悅ぶより死ンだお前の兩親が冥土で何ンなに悅ンで居やはるか解らンぞ』

『何の、たツたあれツぱちの事で先刻は先刻であンなに澤山の人が悅ンで呉れはるし、今また伯父さんまでがそのやうに悅ンで呉れはるその姿を見ると、人間は矢張り好え事をして暮さねば損やなあ』

『コレ又公、お前本氣でそれを言うてるのかい』

『私は先刻もつく〱考へたのや。何しろ府會議員の旦那はンまでが私にバンザイを言うて呉れはツたのや。伯父さん、私は今晩といふ今晩、全く改心したがナ』

『エライ、又公！　エライぞ！』

『ところが伯父さん。私は泥棒してゐるがナ』

又兵衞伯父は風呂敷包を蹴飛ばして唸りました。

『又公、汝や一體何うする氣ぢやい!?』

『外に仕様もないよッて、これから伏見屋へこれを返しに行く心算だす』
『阿呆吐かせ。借りた物を返しに行くのやないぜ』
『だからもう一度盗人に這入りに行くのだす』



『何ぢや？ もう一度盗人に？ コレヤイ又公、そしてまだ何か汝は盗む氣かい？』
『阿呆らしい。いま改心したばかりやがナ。今度は盗人に這入ッて此方から物を置いて來るのや。此の風呂敷の中の物を、みンな元の所へ置いて來るのだす』

——泥棒！泥棒！泥棒！——

こゝは伏見屋の裏口、高い塀の下へ忍び寄ッた又兵衛と又吉です。
『梟が鳴いて氣味が惡いが、又公大丈夫かい』
『伯父さん、まだようみンな眠ッて居るぜ』
『此處に居てそンな事が解るかい』
『餅屋は餅屋や』
『詰らン自慢せンとくれ。そンな事よりもし内證へ這入ッて眼を覺されたら大變ぢやぞ』
『そら大丈夫や。馴れてるがナ』
『萬一見つけられたら品物を投げ出して逃げ出して來い』
『ランそンなら伯父さん、見張りを頼ンまつせ』
『ヘンな事を言ふない——全で共謀になッてるやうやないか』
又吉、ズングリした身體に似合はず、その儘ヒラリ〳〵と輕く樹の枝へ——忽ち闇に吸はれて行きました。跡に

には又兵衛老人、何となく氣色が悪い。

『巧いこと早う品物を置いて來て呉れゝばいゝがなア』

三分、五分――。すると突然内から絹を裂くやうな叫び！

『泥棒だ〱！　泥棒々々！』



又兵衛老人、ハッと驚いてその儘鞠のやうに轉がりました。『アッ又公、やられたか？――南無阿彌陀佛！』

途端にガタ〱といふ只ならぬ物音！……メリ〱と裏口の木戸が押し倒されたと見る間もなく包を背負ッた一人の男、バラ〱と逃げ出さうとする背後から、

『泥棒ッ待てッ！』

と一喝！　續いて二三人、忽ち大格鬪となりました。

『汝、これでもか?!』

『何うだ！　野郎！』

『神妙にしろ！』

見る〱折重ッて高手小手、ぎゆう〱縛り上げて仕舞ひました。

『彌市、何うした』

奥からは老人の聲。すると息を切らしながら彌市と呼ばれた青年。

『お父さん。到頭捕まへました』

『もう貧乏ゆるぎもさせる事ではありません』

鼻高々と店員たち。

『コレ余り傍へ寄るな、危ないぞ』

父のあとから怖々覗き込んだのは彌市の妻。まだ丸髷も初々しい。

『いま電話で知らせましたから間もなく警察からお見えになる

で御座いませう。それまでしツかり縛つておきなさいナ』

殊勲の彌市は妻の手前、大いに落ちついたものです。

『おい、喜助、その風呂敷包は觸らない方がいゝぜ。然し却々手強い奴だツたなア』

『貴方、何處もお怪我はなかツたこと？』

『何アに、何處も何ともありやせンさ。何のこンな蚊トンボの一匹位……』

『ホヽウ、馬鹿にお強いのね』

その中ガチヤリと佩劍の音。

『若旦那、警察の旦那がたがお見えになりました』

『何うも夜中御苦勞樣で御座います』

『イヤ、ところで賊は？』

『ハ、小生がわけなく捕へまして、そこに縛ツておきました』

『さうですか。それはお手柄でしたナ。ハヽハヽハ。それから盜難品は？』

傍から喜助が、

『ハイ、此の風呂敷包で御座います』

『その外にありませンか』

此の時奧から彌市の母親の

『マア〱驚いた。斯ンな所へ妾の大事な手提金庫が……』

『なるほど。一寸此方へ。ハヽア、此の中は金が幾何這入ツて居りましたか』

『ヘエ、それは……良人には内密なので、大きな聲では言はれませんが、……ホヽヽ、二百五十圓程ありますので……』

『何ンやと婆さん、そンな大金を何うしたのぢや』

『何ネ、これはその、倅が時々呉れたのを……』

『嘘つけ！　大方臍繰り居ツたンだらう。此の泥棒めが』

『何ンですツて、泥棒？　コレ良人、ヨクモ〱……』

『マア〱お父さんもお母さんも、警官の前ではしたない老人喧嘩は止めて下さい。オヤ春子、お前何を持ツて來たのだい？』

見れば妻の春子、大きな風呂敷包を持ツて來ました。

『ねえ貴郎や、これが彼處に落ちて居ましたの！　矢張りこれも盜難品ですわよ』

『驚いたナア。斯ンな大きな風呂敷包を二ツも拵へるなンて――オヤ〱、こりや春子、みンなお前の物だよ』

『マア〱、錦紗のコートに御召の羽織、手提鞄に腕時計――』

アラマア〱！』

『お母さん、春子の部屋へも這入ツたんですよ』

『マア〱呆れた、何て怖いやつだらうな』

此の時泥棒はムツクリ顏を上げました。

――確かり重ねた四本の手――

『旦那、濟みませンが、一寸その風呂敷包を私に見せておくンなさい』

『何だ〱、何うするのだ』

泥棒は、切りに二ツの風呂敷包を覗いて居りましたが、

『旦那！ 其方の方は如何にも私が拵へた風呂敷包に相違ありませンが、此方の包には少しも覺えがありません。此方のは、私ぢやありません』

『コレ〳〵何を言ふ。覺えのないものが何うして此處にある。今更卑怯な事を言ふな』

『本當だ。警官の仰有る通り、貴様の外に誰が斯ンな風呂敷包なンか拵へる必要がある』

『けれども、何うも――』

『默れ！』

此の時ツカ〳〵と進み寄ッた一名の刑事。

『ヤア、貴様は寅吉だな！』

名前を言はれて件の泥棒。『あ、田越の旦那――』

田越刑事は一同に言ひました。

『これは張子の寅吉といふ前科數犯の曲者で、我々が嚴重に捜索中の者です』

『そンな惡者なら此の風呂敷包は當然――』

『無論二ツとも此奴の仕業に定ッて居ます』

『イエ、旦那、そんな濡衣を被せられちや私の面が汚れます。この方は斷然――』

『愚圖々々言ふナ。サア、起てッ！』

× × × × × × ×

『オヤ、又公やないか』

『伯父さんだすか?!』

『又公か！ 私や今の盗人は汝やと思うてブル〳〵顫へて居たンやがナ』

『私も泥棒――といふ聲に驚いて、その儘包を放り出したなり此處に隠れて居ましたンや』

『さうか。あぶないところやッたなア』

『思ッても身顫ひが出ますがナ』

『ほンまにこれから止めてくれよ』

『止めいでかい』

『だが又公』

『何ンや?』

『明朝の新聞に注意せいや』

『明朝の新聞? 何ンでや?』

『汝の今夜の事が殘らず詳しう新聞に出るがなナ』

『ヒエーそれぢやあかンがナ伯父さん！』

『アハヽヽヽ。そンなに顔色を變へンでもいゝ。お前が電車の危急を救うた、ほンまに偉い奴ぢやと新聞に出るのぢやがナ』

『伯父さん！』

『又公！』

確かりと握る伯父と甥の手と手――やがて四邊はしら〳〵と右も左も鷄の聲――東天紅、東天紅。――（完）――



新掲載＝大長篇武勇講談

關口彌太郎

大河内翠山
近藤紫雲畫

美人劍士

こゝに奥州二本松の城主丹羽左京太夫侯の家來に、關口賴母氏宗といふ人がございます。關口流柔道の名家で、その上劍道の達人、家中一般の者に柔劍二道を指南いたして居ります。その一子彌太郎氏治、その年二十一歲、性來の大力に幼少の時から父の教へを受け、十八歲の時には、既に親優りと評判される技倆となりましたが、その年江戸へ出て、將軍家お抱への名劍士小野一郎右衞門忠明の



門へはいりました。二郎右衛門は前名を子上典膳といつて伊勢國の住人、伊東一刀齋に久しく就いて一刀流を學び、後小野派一刀流を編出した程の名人でございます。その名人に就いて三年間みつしりと勉強、この二十一歳の春郷里二本松へ歸つて來たのでございます。元でさへ父親をも凌ぐほどの腕前であつたのが、三年間名道場で修行して來たのですから、もう家中誰も彌太郎の手に立つものがございません。父の門弟共が、

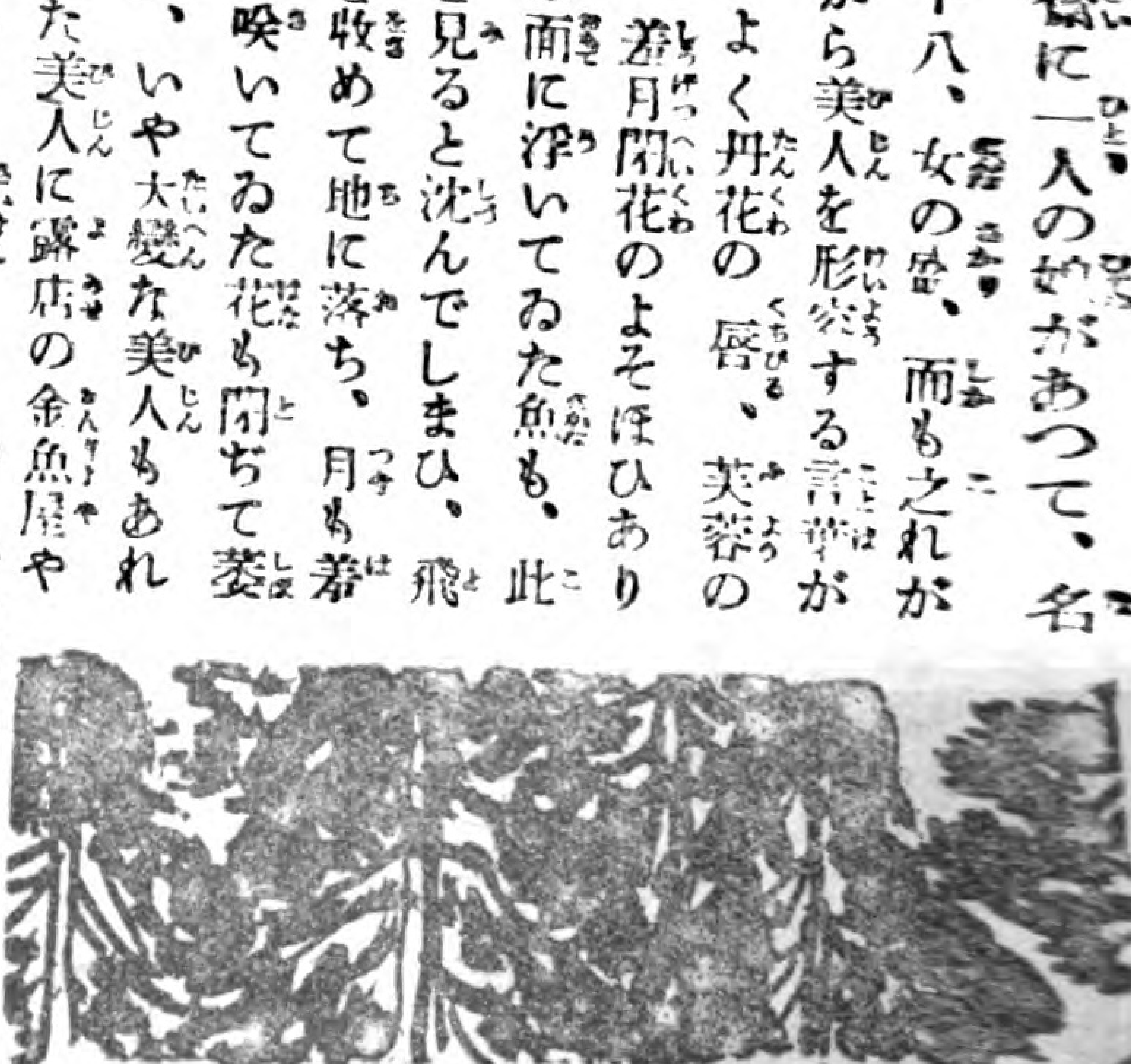
×『いや何うも若先生はお強い』

○『流石に小野先生のお仕込みだ』

□『當藩中、若先生に勝つものはございますまい』

強ちそれは追從ばかりではありません。全く彌太郎は強いのでありますが、人間といふものは妙なもので、あまり褒めそやされると、えて慢心を起すもの、此頃は彌太郎も俺ほどの腕前のものは、まづ天下にあるまいといふ驕慢な氣になつて居ります。

と、こゝにこの二本松の城下、天神小路といふ所に、近頃新しく道場を開いた武藝者があります。表に掲げられた欅の大看板には『神陰流劍道指南、井上一徹齋』と、いと達筆に書いてある。主人の一徹齋は元上州箕輪の住人上泉伊勢守秀綱の門人で、上泉の四天王といはれた柳生但馬守、丸女藏人太夫、正田文五郎、神後伊豆守などといふ人物と肩を双べた程の達人であつた。此の一徹齋に一人の娘があつて、名はおしづ、今年十八、女の盛り、而も之れが絶世の美人。昔から美人を形容する言葉が澤山あります。よく丹花の唇、芙蓉の眦、沈魚落雁、羞月閉花のよそほひありなどといふ、水の面に浮いてゐた魚も、此の女の美しいのを見ると沈んでしまひ、飛んでゐた雁も翼を收めて地に落ち、月も羞ぢて雲間に隱れ、咲いてゐた花も閉ぢて萎んでしまふといふ、いや大變な美人もあればあるもの。こんな美人に露店の金魚屋や草花屋がひやかされたら災難です。兎に角一目見るとブル〱ツと震へる程の美しい女。



其の上幼い時から父に劍術を仕込まれ、今はどんな者にも負けないといふ腕前、女が美くつて武藝が出來るといふのですから、武士の妻には誠に誂へ向。それに一徹齋はどういふ考へであつたか、娘と試合をして勝つた者には娘を嫁にも遣はさう、婿にもしようといふことを、言ひ觸らしたから堪りません。さらでも若侍の憧れの的になつてゐる女、城内はその評判で持ち切りの有樣。それから井上の道場といふものは、おしづどのを妻に申受けたい。婿に來たいといふ申込みが、朝から晩まで

絶え間がない。それに一々應接をする一徹齋の忙がしいこと、一通ではございません。

○『手前は當二本松の藩中、小林金三郎と申する者、何卒御息女を申受けたく推參いたした』

一『これはお出でなさい、貴殿お幾才にお成りだな』

金『當年二十五歳、卯の一白でござる。御覧の通り、色も白く男ツ振りもよく、家中で今業平などと噂されて居ります』

一『ハ、ア左樣かな。併し色の白いのは汚れつぽいから不可ん。拙者の娘の良人は、金があるとか、男ツ振が好いとかいふことで定める譯にはまゐらぬ』

金『ハ、ア、ではダンスが出來るとか、野球が上手だとか……』

一『餘計なことを言はしやるな。憚り乍ら娘は拙者の仕込みで、劍術は神陰流、薙刀は靜流、柔術は起倒流、馬術は大坪本流の達人、娘と試合の上、娘に勝つたものを良人と定める。嫁にも差上げよう、婿にもいたさう。試合をする氣がござるか』

金『それは何より結構、試合を願ひませう』

一『劍術は何流をお學びだ』

金『劍術は念流、柔術は當丹羽家御指南番關口頼母先生の御教授を受け、關口流を心得て居ります』

一『さやうでござるか、關口先生は御評判の好い御方ぢや、其の御仕込みなら十分のお腕前でござらう。それでは早速娘と立會つしやい』

金『心得ました』

ナアニ高が女、どれ程のことがあらう。女に負けて堪るものか、それに乃公は業平といはれる美男、立合つてゐる間にきつと娘が乃公に見惚れる。見惚れた所を打込んでやらうと、情けない奴があつたものです。道場へ通つて試合をして見ると、いや此のおしづの強いこと、唯だ一撃で打込まれ、悄然と引退りました。

斯ういふ風で、來る者も來る者も誰あつておしづに勝つ者が一人もない。一徹齋は亦それが自慢で、若い武士達が娘に打込まれて、悄然と歸つて行く姿を笑つて見送つて居りました。

關口頼母の道場では、門人が溜りに集つて稽古待つ間の世間話。

甲『近藤、貴公の小鬢の傷はどうしたのだ』

乙『これか、これは棚の物が落ちたのだ』

甲『棚から物が落ちて來たら、何故身を躱さぬ、未熟ではないか。敵の槍であつたら命はないぞ』

乙『さういはれると面目ない。……だが中村、貴公拙者の額の傷のことをいふが、貴公の手の傷はどうしたのだ……さうあわてて引つ込まさないでも宜い……さては行つたな貴公も、井上の所へ』

甲『アハヽヽ、分るか』

乙『分るとも、其の傷は竹刀の傷だ』

甲『面目ないが、實は乃公も行つたよ、そして負けたよ』

丙『皆んながさう白状するなら、俺も打明けるが、乃公も行つてひどい目に逢つて來た』
甲『遠藤も行つたのか』
丙『ウム、此處にゐる者、大抵負けた組だ』
甲『オヤ〳〵情けないな、併しあの女は實に強い』
丙『全く強いよ、迚も吾々は敵はぬ』
と門人同志の話し合つてゐるのを、柱によりかゝつて聞いてゐた彌太郎氏治、門人の話が途切れると、
彌『今、話を聞いて居れば、貴公達は女に負けたといつてゐるが、何處の女だ』
甲『若先生御存じないのですか、城下の天神小路に井上一徹齋といふ神陰流の武藝者が近頃道場を開きました』
彌『その話は聞いてゐる』
甲『其の井上におしづといふ娘があります。左樣、歳は十八と申しますが、頗るの美人でございます。その娘が親の仕込みで、劔術が莫迦に強く、靜流の薙刀も使ふといふ話。で、その娘と試合をして、勝つた者には娘を遣らう、嫁にくれてもよい、婿にもしてもよいといふので、家中の者が爭つて試合に參りますが、まだ誰も勝つた者がございません』
彌『それで貴公達も行つて、其の女に負けたといふ譯か』
甲『ハイ』
彌『意氣地のない連中だね』
甲『若先生は御存じないから、さう仰有いますが、中々の腕前、――若先生だつて危なうございますよ』
彌『ナニツ、此の彌太郎がその女に負けるといふのか、馬鹿めツ。高が女の武藝、どれほどの事がある。馬鹿者共が、相手が美しい女ゆゑ、十分の腕を現はし兼ねて敗れを取るのだ。それを宜いことにして、勝つた者に嫁に行かうなどと、武藝者を蔑しろにする不埒な奴だ。此の彌太郎が行つて、只一打にして哭れる』
甲『さやうでございますか、併し御油斷なさいますな』
彌『ナーニ、大丈夫ぢや。江戸で小野先生に就いて學んだ腕前、女などに負けて堪るものか』
利かぬ氣象の彌太郎は、乃公こそといふ慢心があるから堪りません。ぶらりと我が道場を出て、天神小路の井上の道場へ乘り込んで行きました。
彌『頼まう』
○『ドーレ』取次の門弟が出て、
○『どちらからお出でになりましたか』
彌『拙者は當藩の指南役、關口柔心氏宗の一子同苗彌太郎氏治と申す。御當家の息女と一本の試合を致したく推參仕つた。先生へ宜しくお取次下されたい』
○『ハツ、暫らくお控へ下さい』
門弟が奥へ來て此の事を取次ぐと一徹齋の
一『ハヽア、いよ〳〵來たか、實は其の彌太郎の來るのを待つてゐたのだ。道場へ通しなさい』

彌太郎は道場へ通されて待つてゐると、出て來た井上一徹齋。

一『これは〳〵御城內御指南役關口籾母先生の御子息、彌太郎殿でござつたか、拙者は井上一徹齋、初めて御意得申す』

彌『申し後れました。拙者關口彌太郎でござる、御息女はなかなかのお腕前の樣子、何卒一本の試合、願ひたく參りました』何負けるものかといふ口の利き方。

一『如何にも承知いたした。併し娘と試合をしても、娘に勝たなければ嫁には上げられぬが宜しいか』

彌『拙者は御息女を嫁に戴きに參つたのではござらぬ』

一『イヤ皆來る者がさう申して居るがな、中々娘には勝てませぬぞ。失禮ぢやが、彌太郎殿には娘に勝つだけのお腕前があるかな』

彌『手前も江戸で小野二郎右衞門先生の仕込みを受けた腕前、憚りながら女づれに敗れを取らうとは思ひませぬ』と、憤然と言放つ。

一『之は偉い御自慢』

彌『見事勝つて御覽に入れる』



一『それは感心ぢや……コレ〳〵しづや、これへ參れ』

しづ『ハイ……』

衣摺れの音がして、靜かに襖を開いてそれへ出て來たおしづ。實に水の垂れるやうな絕世の美人。

一『しづ、此のお方は御城內關口殿の御子息彌太郎殿だ。お前

と試合にお出でになつた。直ぐに立會ひなさい』

しづ『ハイ……』

一『彌太郎殿、お手並を拜見いたさう』

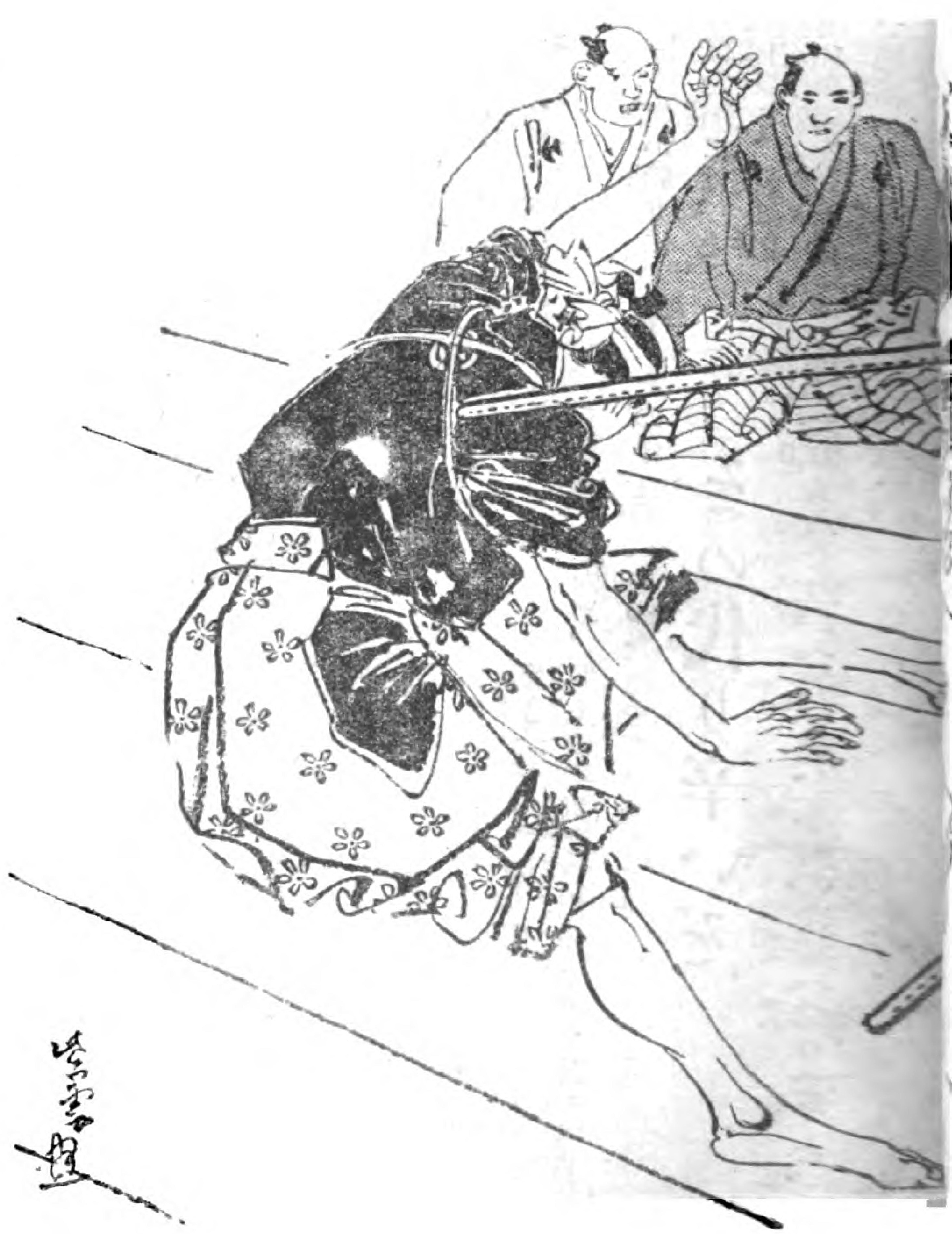
二人は支度をして、袋竹刀を持つて、道場の中央へ出ました。

殘念！

双方袋竹刀を三寸の掛け違ひに置いて、互ひに目禮したのは劍道試合の法式。

しづ『關口様、お手柔かにお願ひ申します』とニッコリ笑つたおしづの愛嬌は、得も云はれず美しい。

彌『御同……』と、ぶつきら棒にいつた彌太郎、心のうちに成程美い女だ。家中の若侍達は、此の色香に心蕩けて不覺を取るのだ、併し此の彌太郎はその手は喰はぬぞ。今日こそ目に物見せてくれんと、竹刀を取つてヤッと大上段に振冠つた。おしづは簡ましやかに青眼の構、双方ヂッと氣合を計つてゐたが、彌太郎は高が女と飽くまで侮つてゐる。やがて『ヤッ』と打下した。おしづは輕くパッと受流して、二三合打合つたと見れば、『エイッ』おしづが烈帛の氣合諸共、打込んだやつを受損じた彌太郎、小手をしたゝかに打たれ、ぽろりと思はず竹刀を取落した。しまつたと思つたが、利かない氣だけに參つたとはいへない。『組打ッ』とばかり、いきなり大手を擴げた。おしづも心得て得物を打捨て、ムンズと組合つた。暫らく揉合つてゐたが、呼吸を圖つて『ヤッ』といふおしづの一聲。彌太郎は、筋斗打つて、道場の中央へ投付けられた。起上らうとする



所へ飛込んだおしづが上から押へつけ、
しづ『如何ツ——』
彌『參つた』
　おしづは手を放してニッコリ。
しづ『失禮いたしました』
　彌太郎立上つたが、面目なささうに默然としてゐる。一徹齋笑ひ出して、
一『アハ、、、イヤ彌太郎殿、それでも江戶で御修行のお腕前かな。イヤまだ〳〵、しづとは段が違ふ。サアお家へ歸つてお茶でも呑みなさい』
　馬鹿にした爺いだと思つたが、負けたのですから何うも仕方がない。無念の齒噛みをして井上の道場を出た。
　跡見送つてゐた一徹齋、何と思つたかそつと彌太郎の後をつけて行きます。彌太郎は悄れ返つてあてどなく步いてゐましたが、城下外れの芝原まで來ると、ドッカリ崩れるやうに坐り込んでしまひました。さては口惜しい一念で腹でも切るのか、腹癒せに復讐でも企てるかと、一徹齋は木陰へ身を忍ばせて樣子を窺つて居ります。
　とは知らぬ彌太郎、もの〻一刻あまり腕組をして何か頻りに考へ込んでゐるやうでしたが、やがて決然とあげた面には、あり〳〵と決心の色が見えました。そしてつと立上つて、前に似ず勢よく步き出したが、城內へは向はず、奧州街道を江戶の方角へすた〳〵行つてしまつた。これを見た一徹齋ハタと膝を打つて、
一『あゝ見上げた男だ、私が見込んだ眼に狂ひはなかつた』
　獨言をいひながら我が家へ歸つて來ると、娘に向ひ、
一『これしづ、彌太郎殿は見上げたものだぞ。お前に負けたのを殘念に思つて、江戶へ行つたらしい。それも家へ戾らず、ここから街道を西へ發足した。きつと江戶へ再び修行に出たものと思ふ。今度戾つて來る時は、キット立派な腕前になつて歸つて來るに違ひない。あゝ後世恐るべきは彌太郎殿ぢや……しづ、お前は良い亭主が出來て仕合せぢや』
しづ『アレお父さま、そんなことを仰有つて……』
一『本當ぢや、嬉しいかアハ、、、』
　一徹齋の察しの通り、彌太郎は江戶を指して出發したのでございます。女に負けるやうでは、武藝者として、祖先に對し父に對し、世の中に對して面目がない。今までの修行は、まだまだ未熟だつたのを、自分で充分と心得違ひをしてゐたのだ。ああ耻かしい、之れから本當の修行をして、今の自分を叩き直さなければならない。……飜然と覺つた彌太郎は再び江戶へ行つて修行する決心を固め、井上の道場を立出ると我が家へも歸らず、その儘江戶へ向つたのでありました。

その代り辛いぞ

　途中お話もなく江戶へ着いて、小野の道場へ參りますと、一刀齋右衛門が。

二『彌太郎、どうして參つた』
彌『ハイ、修行に參りました』
二『其方は三年の修行をして、國許へ戻つたのではないか』
彌『ハイ、御教導にあづかりまして、十分の腕前になつたと信じて戻りましたが、此度未熟であることを覺りました』
二『ウム、それはどういふ譯ぢや』
彌『女に負けました』
二『女に負けた……時に依り技に依つては男にも女にも負けよう』
彌『先生、お聽き下さい、實は斯ういふ譯でございます』と井上一徹齋の娘に敗れたことを話をして、今後の自分の決心を述べた。
二『さうか、併しお前が未熟を覺つて、眞の修行をしたいと決心をしたのは何よりぢや』
彌『就ては尚ほ此の上の御教導を願ひます』
二『イヤそれはいかぬ、私には教へられぬ』二郎右衛門の意外な返事に彌太郎は驚いた。
彌『どうした理由で教へて下さいませぬ』
二『強つて聞くなら話して遣はさうが、お前は腕は達者だがまだ本當の劍道を知らぬ』
彌『エッ……』
二『驚くことはない、お前の劍は棒振り劍術ぢや、腕が出來てゐるやうで、イザとなればコロ／＼負ける。お前が初めて自分の未熟に氣づいたのは結構なことぢや。私が良い先生を教へて上げる、其の許へ參つて修行をしなさい』
彌『ハイ、其の先生は誰方でございます』
二『私の恩師伊東一刀齋先生ぢや』
彌『オ、ッ一刀齋先生は、一刀流を編出した大先生……』
二『さうぢや、私が神子上典膳といつて、下總國に居つた時分、初めて御目にかゝり、それ以來御教へに預かつて、私が今日在るのも全く一刀齋先生の御恩ぢや、今は遠州秋葉山の山中に隱遁して、世の塵を避けて居られる、其の老先生の許へ行つて修行をしなさい』
彌『ハイ、有難う存じます』彌太郎もほつと安心いたしました。
二『其の代り辛いぞ。嚴しい先生ぢやで、それを忍ばねばならぬぞ』
彌『ハイ、どんな艱難も厭ひません』
二『それでは私が添書をしてやらう……』
彌『有難う存じまする』
二郎右衛門の書いて呉れた添書を押戴いて懷中なし、厚く禮を述べて彌太郎は、輝かしい望み心を抱いて江戸を出立いたしました。
途中も無事に遠州秋葉山へ來た。寛永時代の秋葉山、人の登ることも稀でありますから、松柏生茂つて晝尙暗く、道は左程でもありませぬが、行けば行くほど段々道は險しくなるばか

り、次には道らしい道もないやうになつた。已むを得ず斷崖絶壁を登つたり下つたり、又は溪川を越え、幾度か危い思ひをして辿り行くと、漸く聊かの平地に松の大木の鬱蒼とした所へ出ました。

ホツと息を吐いて、傍らの大木の根に腰を掛けると、そよそよと吹いて來る松風、四邊の岩には、たら〳〵清水が苔傳ひに落ちてゐる。實に閑雅幽邃、人跡全く絶えて、之が本當の仙人の住む所かと思はれるやうであります。



彌太郎は疲れも忘れて、尚も道のない所を登つて行くと、山と山との間から、薄く煙が立登つてゐる、それを便りに行くと一つの庵、茅を苅つて屋根と爲し、竹の梁に丸木の柱を結び、松の大木、奇しき形の岩などが庵の周圍を圍んでゐる。實に仙窟といふのは斯ういふ所であらうと思はれました。彌太郎はおづおづ庵の中を覗へば、白髮の老翁が、爐に向つて頻りに焚火をしてゐます。ハヽア之れが伊東先生だなと思つたから、彌太郎それへ兩手を仕き、

「それに在せらるるは、伊東先生ではござりませぬか、初めて御意得まする、拙者は武道修行を仕つる關口彌太郎氏治と申しまする未熟者、先生の御高名を慕ひ推參仕つりましてございます」一刀齋チロリと見て、

「お前は、小野二郎右衛門から私のことを聞いて來たな」

……』

一『其の位のことが解らないで何とする』

彌『小野先生のお勸めに依つて、修行の爲め參りましてございます、詳しいことは是は小野先生からの御書面にございます』

一『ウム……』僅かにうなづいて、彌太郎の出した手紙を一讀し、



一『修行をさせてやるが辛いぞ。辛抱が出來るか』

彌『どのやうな辛抱もいたします』

一『さうか、途中で辛いといつて下山するやうだと、命がないぞ。それが覺悟か』

彌『ハイ、覺悟いたして居ります』

一『女に負けるやうでは、辛抱が出來るかどうか分らぬな』

彌『恐れ入りました――どんな辛い思ひも、必らず耐へて見せます』といつて屹度唇を結んだ。

一『ウム さうか、そんなら敎へてやらう……それでは彌太郎、早速だが、其の鍋の雜炊が焦るやうぢや、下ろしてくれ』

彌『ハツ』

一『下ろしたら、茶碗へよそつてくれ』

彌『ハツ』

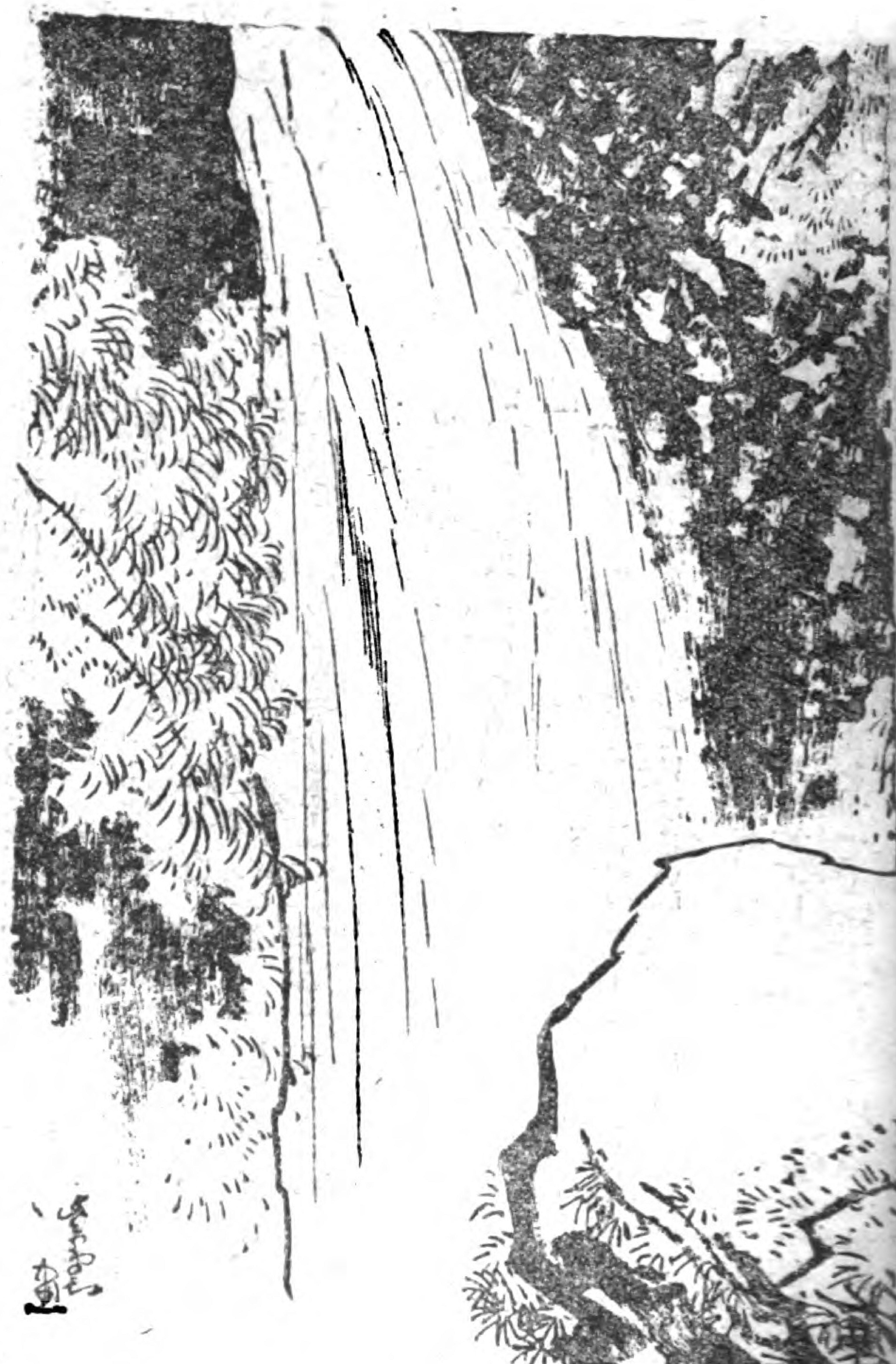
人使ひの荒い爺さんだと思つたが、言はるゝ儘に茶碗によそつて出す。輕く一碗を喫した一刀齋。

一『彌太や、此のよごれた丼碗を、向ふの溪川へ行つて洗つて來なさい』

彌『ハイ……』
一『それが濟んだら、薪を割りなさい……彌太郎、水を汲んで來い……彌太郎其邊を掃除をしろ』
いや彌太郎の忙がしいこと。其の内に日が暮れる。
一『彌太郎や、日が暮れた、燈火を點けろ』
彌『ハイ』
一『彌太郎、私は寢るから、床を敷け、そして側へ來て腰を揉んでくれ』



彌『ハイ……』是れは厄介千萬だと思ひながら、腰を揉んでゐると、一刀齋すや〳〵眠ついた樣子、もう宜からうと、立たうとすると、ウームと寢返りを打つて、
一『彌太郎、今度は此方を揉んでくれ』
彌『オヤまだ起きてゐるのか、油斷のならぬ爺だ』と思つて揉んでゐる内に、夜は深々と更け渡る。彌太郎スッカリ疲れ切つてしまつた。
一『彌太郎、何時頃であらうの』
彌『もう九ツ過ぎかと存じます』
一『まだ早いな』
彌太郎驚いた、九ツ（十二時）で早いといふ、此の爺さん一晩中寢ないのかしらと思つた。
一『今日は疲れてゐるだらう、もう宜いから御前も寢なさい。だが斷つて置くが斯ういふ山の中だ、布團はないよ』
彌『ハイ、何所へ寢みましてよろしうございますか』
一『向ふに藁小屋があるから、其の中へもぐつて寢なさい』
彌『オヤ〳〵まるで犬だ』仕方がないから言はれる儘に、其の夜は藁小屋へ入つ



て眠りました。晝の疲れでグッスリ寝込んでゐると、
一『彌太郎、彌太郎』といふ聲。ハッと眼を覺して見ると、小屋の外に一刀齋が立つてゐる。
彌『ハッ、先生、何か御用でございますか』
一『御用かではない、何故起きない、夜が明けたぞ』
彌『それはどうも……』
慌てゝ起きて見ると明けたどころかまだ眞暗です。

彌『先生、暗うございます』
一『暗くてもモウ夜明けだ。早く起きて鷄に知らせてやれ』
彌『オヤ〳〵、鷄より早く起きるのかな』
一『何を愚圖々々いつてゐる、彌太郎、水を汲んで來い』
彌『ホーラ始まつたぞ』
一『彌太郎、薪を割れ、──彌太郎、雜炊を炊け──彌太郎、腰を揉め』
彌『大變々々、斯う使はれては、人間だから宜いけれども雜巾なら摺切れて了ふ』
使ふ方は朝から晩まで下男同樣に使ふけれども、劍術の方はけの字も教へない、けれども此所が辛抱の仕所であると、一刀齋に言はるゝ儘、ハイハイといつて働いてゐる。

瀧と根くらべ

斯うすること半年餘り、ある日、
一『彌太郎、今日は私が稽古をしてやる』
彌『オゝッ、御稽古をして下さいますか、ハッ有難う存じます』
一『私の跡に尾いて來なさい』
彌『ハイ……』

初めての稽古、彌太郎は喜びの心を躍らして、一刀齋の跡に尾いて行きました。山路を登ること半里あまり、四方峨々たる岩石が聳え、其の岩と岩の間からは、ゴーゴーッと物凄い音を立てゝ瀧が落ち、飛沫は霧となつて四邊を罩めてゐます。

一『彌太郎、此處がお前の修行の場所ぢや』

彌『ハイ、此處で先生が劍術をお教へ下さるのですか』

一『いやさうではない、此の岩の上に坐禪を組んで、あの正面に落ちてゐる瀧と睨めッこをするのぢや』

彌『ヘエー先生、私は禪坊主の修行に參つたのではございませぬ』

一『默れッ、誰が禪坊主の修行をしろといつた。此の修行が出來ないやうでは、私の側に一刻も置くこと相成らぬ。直ぐ下山いたせ』

彌『いゝえ、いたします、坐禪でも何んでもやります』

一『よし、では坐れ。向ふの瀧とお前と、睨めつこをして、何方が勝つか、根比べをするのぢや』

彌『御言葉でございますが、瀧は水で非情のもの、根負けをすることはございますまい』

一『イヤ／＼さうでない、草木國土悉皆成佛ぢや。瀧でも負けたり、勝つたりする。それが修行ぢや、やつて見なさい』

彌『ハイ……』

其日を皮切りに彌太郎は、朝起きて用事を濟ませてしまふと、此處へ來て岩の上に坐禪を組み、轟々と音を立てゝ落下する瀧と睨み合つてゐる。之れが中々樂なことではない。幾度山を下らうかと考へたか知れません。併し『イヤ／＼これが修行だ。此の修行さへ出來れば、人に優れた武藝者になつて、負かされた女に勝つことが出來るぞ』と井上の娘に打込まれた上、道場の中央へ投げ飛ばされた自分の醜い姿が、まざ／＼と胸へ浮かんで來て、

『何ッ、是しきのこと……』

岩の上に坐禪を組み直して、屹と瀧を睨み込む。かうして氣を勵ましてはゐたが、何日も／＼同じ事ですから、時には倦きが來たり眠氣がさしたりする。ある日あまりに倦きて來ましたので、組んでゐた趺坐を解き、立膝をして、その上に置いた手で頤を支へ、何所を見るともなく、何を考へるともなく、茫然としてゐたとき、

『エイッ』

鋭い氣合の聲がかゝつたと思ふと、同時に肩口をピシーリと打たれ、

『アッ』

といふ間もなく、ころ／＼岩から轉がり落ちました。下は瀧の落ちたのが奔流となり、渦卷き狂つて岩の根を嚙んでゐます。落ちたが最期とても助かる見込みはございません。（つゞく）

さあ彌太郎はどうなつたでございませうか、一世の俠男關口彌太郎の壯烈を極むる素晴しい面白い物語はこれから開始いたします。どうぞお樂しみとお待ち下さい!!

常識繪統計





勿體ない火害

○我國一ヶ年間(昭和三年度)の建築物の出火度數は二萬二千九百三十七件、即ち一晝夜に六十三件弱。

○右の損害見積額七千四百五十三萬一千百十六圓。詰り僅かの不注意から一ヶ年間に之だけの財産を失つてしまつたわけだ。

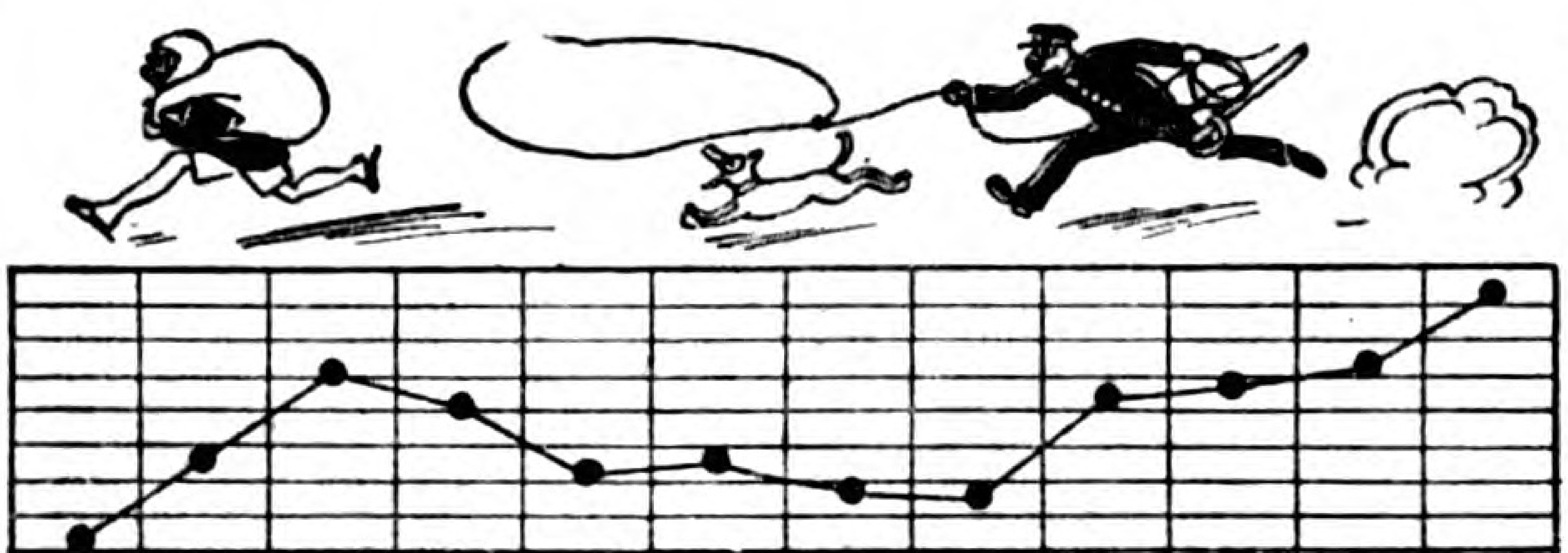
其の主なる原因による出火件數は左の如くである。

焚火	二、三六五件
取灰	一、七三一件
行火炬燵	九八四件
火鉢	六〇九件
ストーヴ	三八二件
爐	三五三件
火消壺	一三七件
電氣行火	二九件
瓦斯ストーヴ	二一件

(昭和三年度)

盗難にかゝり易い月

昭和元年の調べによると、盗難の最も多い月は三月、十月、十一月、十二月で一月になると急に少くなる。殊に開け放しの多い七月、八月に少いのは不思議である。今之を各月の回數に依つて表にすれば左の如くである。



一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
二五、三六八	二七、八五四	三〇、六五三	二九、〇〇二	二七、二五〇	二七、五三六	二六、九七九	二六、八五〇	二九、三七三	二九、七六五	三〇、九八五	三二、一八六件

煙になる煙草



○我國で内外國産の煙草の一ヶ年間の賣上金高は二億八千七十七萬一千圓。これを一日に平均すれば七十六萬九千圓宛が煙になつてゐるわけだ。所で此の煙草の火が原因となつて起す火災の損害は、年々八百三十三萬餘圓とは、煙草も馬鹿に出來ない。

(以上、財團法人大日本消防協會調査)

婦人と鏡



婦人が鏡を覗き初めるのは六歳頃からで十歳迄は毎日平均七分間であるが、十歳から十五歳迄は十五分間、十五歳から二十歳迄は二十二分間、二十歳以上は一時間に及ぶ事は珍らしくない。然し六十歳以上になると鏡と仲が惡くなる。そこで一生の間ザッと積つて七千時間、即ち十ヶ月餘々鏡の前で暮す事になる、とは或る數寄者の計算である。

辻井ヤ氏著「十歳より六十歳迄で五十一年」より

馬背に跨つて

尾崎行雄

馬背に跨つて悠々天の一角を望む時、私の心持は正に意氣軒昂となるのである。その何故かを知らない。高い處に乘つたが爲だといふなら、馬より遙かに高いものがある。生物に跨つたが爲だといふなら、牛の背もあり駱駝の背もある。特に馬に限つてかく感ずるのは、潑剌たる馬の性質とその姿が優美であるためではあるまいか。

私が馬を所有したのは、東京市長時代、目黑の競馬會長となつた因緣からで、抽籤馬を買つてそれに辨慶と名付けた。強い名が良からうと選んだ名だつたが、此の馬は競馬に出る毎に負けて仕舞ふので益々愛想がつき、他の馬を求めて今度は辨慶より更に強く優美だといふ意味で義經と名づけた。これが名に耻ぢざる駿馬となつて屢々優勝もし、十八年の永い間、私の愛馬として常に私を樂しませて呉れた。

昔から、馬位騎手の心を敏感に識るものはないといふが、愛馬義經も全く其の通りで、私の妻や娘が乘つても、極めて柔順で決して落したことはない彼だつたが、他人が乘ると、殊に氣に入らぬ人などが乘ると、憤然として敵意を示し、必ず振り落さずには置かなかつた。首が長くて素人目には殊に姿が美しかつたので、外國の陸軍武官などは、よく借りに來たが、隨分弱らせられたものだつた。

一度など、もと騎馬巡査で近所の交番詰めとなつてゐた巡査が、私の愛馬を見て乘つて見たくなり、私の馬丁を口說いて到頭義經を引出してしまつたものだ。

處が義經は、見知らぬ男を例によつて振り落さうとした。

馬術に達した者なら、馬の心を讀んで直ぐ下馬するのだが、この巡査は義經が落さうとすればする程落ちまいと逆ひ、荒れさせまいと竹藪へ乘り入れてしまつたが、到頭義經に振り墜され、双方共に大怪我をしてしまつた。丁度、その時分私は内閣に列してゐたが、警視廳から人をもつて鄭重に謝罪に來られたには却つて恐縮したことがある。それ程の馬だから、主人の私には實に忠實であつた。私も又、畜生とは思はず親しみ、家族の一員として愛撫してやつてゐた。

併しこの愛馬も年をとつたので老後を安泰にしてやりたいと、今年の春、北海道帶廣在の懇意な獸醫の處へやつたが、私は勿論一家揃つて染々別離の悲愁を味はつた。芝居でやる鹽原太助が『青』との訣別のそれの如く、行くものも送る者も名殘り惜しく、胸一杯になつた娘が義經の顔にしがみついて泣けば、動物ながら義經も默然と首を垂れて、目に一杯涙をためてゐた。其の哀しげな姿は、今なほ眼前に髣髴として一種の感慨なきを得ない。

輕井澤の天地は乘馬に最も相應しい處だ。朝霧漸く霽れんとして、東天微かに白む頃、馬背に跨れば、戞々と蹄の音高く、馬は露を散らして道草の中に歩を移す。雲は刻々に千變萬化して、一日同じ姿ではゐない。透明な高原の空氣は、淺間山の曼陀羅華を憶はするやうな馥郁たる草花の香を湛へ來つて、その愉快さ爽快さは譬へるに物がない。



――寫眞は尾崎行雄氏と愛馬『義經』――

黙つてゐる猫

大佛次郎

猫は、ものごころのつく頃から僕の傍にゐた。これから先もさうだらう。僕が死ぬ時も、この可憐な動物は僕の傍にゐるに違ひない。――お醫者さんが來る。家族や親類の者が集る。（最後には坊さんも來るわけだが）その時此奴は、どうも、いつも見なれない人間が出入りして家の中がうるさくて迷惑だと云ふやうに、どこか靜かな隅か、日當りのよい所に避け、毛をふかくくと、まるくなつて一日寢てゐるだらう。寢るのに倦きたら、起きて思ひの丈伸びをする、草原へ出て虫を追ふ。空腹を感じたら、降りて臺所へ行つて、長い尻尾を立て、家人の裾に體をすり寄せて飯の催促をする。それが濟んだら顏を洗ふ。さて、それから何をしたら一番氣持がよく滿足かを考へて其の通りにする。空氣を薄ら寒く感じたら、藥の匂ひを嫌ひながら、活氣があつて暖い看護婦の膝へあがつて、また睡ることだけを考へる。

その時に手傳ひに來てゐる者の誰かゞ、『この猫はあんなに可愛がつて貰つたのに、すこしは氷をかく手傳ひでもおしよ』と、この永年の主人の死に冷淡なエゴイストを非難するのだ。惡くすると、猫は蹴飛ばされる。――僕同樣に猫を愛することを知つてゐる妻は、そんなことを云ふ筈がないし、する筈がない。また僕は、もう口が利けなくなつてゐるわけだが、これを聞いて、つまらない無理なことを云ふ人間だと、ひそかに腹を立てゝゐることだらう。それは僕には、目が見えなくなつてゐても、卓の陰に白いバタのやうに蹲つたり、散らばつた本の中を埃をいとつて神經的に歩いてゐる此の氣どり屋の動物の靜かな姿や美しい動作を思ひ浮べてゐることが、どんなに心に樂しくて、臨終の不安な魂を慰め

ることかわからないからだ。——來世といふものがあるかどうか、僕未だにこれを知らない。假りにもそれがあるならば、そこにも此の地球のやうに猫がゐてくれなくては困ると思ふのである。ゐないとわかつたら、僕の遺言の中一番重要なくだりは、嚴密に自分の著作を排斥して、好むところの本と猫とを、僕の棺に入れるやうに要求するに違ひない。

猫は僕の趣味ではない。いつの間にか生活になくてはならない優しい伴侶になつてゐるのだ。猫は冷淡で薄情だとされる。さう云はれるのは、猫の性質が正直すぎるからなのだ。猫は決して自分の心に染まぬことをしない。そのために孤獨になりながら強く自分を守つてゐる。用がなければ媚びもせず、我儘に默り込んでゐる。それでゐて、これだけ感覺的に美しくなる動物はゐない。冷淡になればなるだけ美しいのである。贅澤で我儘で他につめたくすることは、どんな人間の女のヴァンパイアより遙かに上だらう。だから猫を可愛がるのには、さういふ女に溺れてゐるやうな心持になることで、それでゐて決してこちの心を滿たさずにゐられるのだから有難い。讀書に疲れたら顏をあげて、この『客間の虎』の、もの靜かで、おごりに滿ちた優しい姿態を眺めればいゝのである。こちらからも執こくしないで、そつと放任して置いてやるのである。氣儘にして置いてやれば、猫はいよいよ猫らしく美しくなつて、無言の愛着を飼主に寄せて來るのである。多少なり、かうした沈默の美しさが感じられるひとならば、猫を愛さぬわけはないと思ふのである。



——寫眞は大佛次郎氏と愛猫——

魚群と共に泳ぐ

映畫俳優 鈴木傳明

向島に生れ小供の頃から隅田川の水に親しむ便利のあつた私は、十八の年には早くも笹沼流水府流の免許を得て一かどの泳手となつた。水についての最も深い思ひ出といへば、大正八年、國民新聞社が催した三浦半島から房州の北條まで即ち海上十八里の東京灣橫斷競泳大會に參加した時のことである。

半島の三浦寺に殘る記錄によれば、このコースは鎌倉時代三浦道寸といふ武人が泳ぎ切らうと企て、途中、利久の沖合で鱶の群に襲はれて果さなかつた因緣のある難コースで、我我の成功は實に空前の大記錄を生んだと共に、道寸の雄圖を繼いでその靈を慰めた壯擧とも云ふ事が出來る。選拔された我々選手三十名が、盛大なる官民の大歡呼を後にし、掛聲勇ましい八挺櫓の水先案內を先登に三隻の護衞船を從へて、遊岬から勇壯泳ぎ出たのは七月三日の午前九時であつた。

今思ひ出しても慄つとする命懸けの大遠泳――。渺々たる大海の底に海神の威力を感じては思はず魂を竦め、三浦道寸の謳を思ひ出しては鱶の襲來を怖れて鱗のこはばつたことも幾度か。或はまた大自然の壯觀と美しさに、蕩然と我を忘れた愉快等々思出の頁はいつ迄繰つてもつきない。殊に大洋に泳ぎ出て、山なす大浪の中を浮きつ沈みつしてゐる時、突如、鰹だか鯖だか、一二尺もある魚群にぶつかつた時は、全く名狀し難い壯快さだつた。もの〻二十分間も、ピシヤリピシヤリと泳ぐ手足を尾鰭で打たれながら、魚群と共に游泳してゐたのだからその痛快さつたらたない。先に立つ八挺櫓が大浪の山にスル〱と浮び乘つた時、私の身體は浪の狹間へ沈め込まれてゐる。谷底からゆれ動く山を見上げるさへ既に大壯觀。況んや、數十尾の潑剌たる大魚が勢ひよく舷を叩いて跳ね飛ぶ其優美な光景――未だ甞つて私はこんな大自然の活ける美觀を經驗したことがない。

午後二時頃になると大雨沛然として襲つて來た。水先案內は方向を見失つてしまつた。難泳又難泳。泳ぐ者の心細さはたまつたものではない、遂に多くはこ〻で落伍した。が、泳ぎ殘つた十一名はコースを[illegible]

遂々夕刻近く前後して目的地へ泳ぎつく事が出來た。時々、竹の先に結びつけられた杓子から粥の握飯と氷砂糖を貰ふだけ、唯の一回も休み無しに泳ぎ續けて身體は綿の如く疲勞し、上陸地の砂を踏むと同時に皆バタリバタリと倒れて仕舞つた。僥倖にも私は記録さるべきこの大遠泳に第一着の榮冠を擔つたのであつたが、今にして思へばよくも怒濤八里を泳ぎ切つたものだとつく〲一念の力強さが思はれる。

およそ、褌一本の素裸體で、到るところの海や河で思ふまゝに樂める水泳位、金のかゝらぬ一般的な趣味はない。たゞ今迄は季節に制限されてゐたが、それも近年急速に發達しつゝあるプールの設備が、もつと普及すれば、雪や霙の降る嚴冬でも充分樂むことが出來るやうになる。



まして夏の水泳の興味ときたら他の何物も企て及ぶものでない。暑さに水を求める我々の本能が、心ゆくまで滿足させられるのだからとても愉快な筈だ。水に恐怖を抱いて軀を縮めさへせねば、鐵石でない人間の體は、もと〱水に浮くものなのだから誰でも一二週間水に馴れゝば忽ち泳げるやうになれる。而も健康に良いことはいふ迄もない。贅肉が脫れて全身が均齊し、美的な肉體を創造してくれることは、之れは他の如何なる運動にも優る大收穫である。私は暇さへあれば撮影所の女優達を矢口の渡附近の玉川に率き連れて行つて水泳をやらせてゐる。

凡そ、運動の愉快味は疲れきつて身體を横に投げ出した時にある。今流行の麻雀やカルタや酒に夜更した時の疲れの不愉快さとは本質的に違つてゐる。運動の快い疲れを味つた經驗のない人は、試みに水泳をやつて疲れた身體を涼風に吹かれながら濱邊に横へて見るがよい。不淨なもの一切を洗ひ棄て去つた得も云はれぬ快感が、全身に傳はるのを覺えるだらう。

——寫眞は鈴木傳明氏——

吉田磯吉氏と『墓』

東京日日社會部長　小野賢一郎

昨春五六年ぶりで歸省した。私の郷里といふのは福岡縣の芦屋といふ景色はいゝが廢れた町である。昔は『芦屋千軒、關千軒』といつて玄海灘に開いた舟着場、下の關と出船入船繁華を競つたものである。それが鐵道の便をはなれてから、次第に衰へて、今日では齒の拔けるやうに商家が倒れ、無産者は他郷へ移つてしまひ、家並も揃はなくなつてしまつた。人情はすたれ、小さな僞惡、僞善が横行し、人心ばらばらになる。どこも落ち目になつてくるとさういふもので、歸省する每に不快なことを耳にするのが例であつた。

久方ぶりの歸省、いつもするやうに先祖の墓に參り、親戚知己に挨拶をした。それから町の裏山傳ひに叔父の墓にまゐつた。叔父といふのは井筒伊三郎といつて、方圓流の柔術の師範であり、また、その昔——三十數年前、この町が繁昌してゐた頃の顏役で、この町を中心に炭坑地から、博多の一部に、いさゝか名を知られてゐた。私の七八歳の頃死んだが、私の祖母が昔氣質のやかましやなので、いはゞ顏役稼業のやうな派手なことを好まず、近所のくせに、叔父の家に出入するのを喜ばなかつた。——だから私の記憶にある叔父といふのは、庭先に煙草を植ゑてゐたこと、西洋煙草をのんでゐたので、その箱を貰つて喜んだこと、尋常小學にはいつた時懐中時計をくれたが、ひどく祖母から叱られて返しにいつたこと位である。

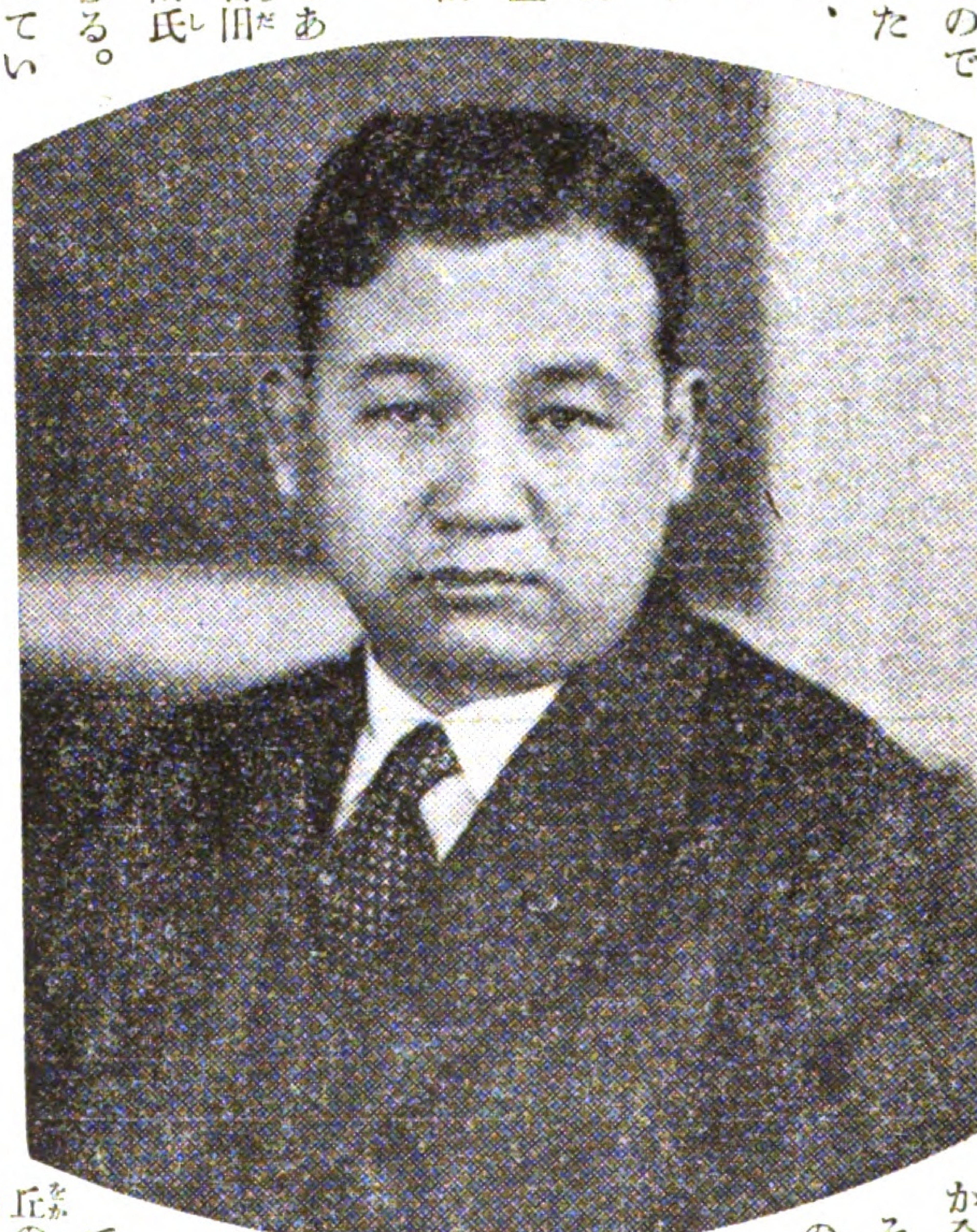
その叔父の生涯を母の生きてゐる間によく聞いておきたいと思ひながら、いつも忙しい歸省なので、つい果さず、その時もたゞ墓にまゐつて水と花をさゝげたのであつた。墓は門弟一同が建てたものである——と、みると墓のあたりがよく

掃除されてゐて、あたりの墓のやうに雑草がはびこつたり墓石が缺けたり、無論倒れたりしてゐない。

『きれいですなア』と母にいつた。母は『これは吉田さんの乾兒の人達がして下さるのです。墓も傾いてしまつたが、吉田さんのとこで、すつかり直して下さつた』と言葉短かに話すのであつた。吉田さんといふのは芦屋から五里隔つた若松市の吉田磯吉氏のことである。九州切つての大親分であり衆議院議員である吉田氏のことである。吉田氏もまた芦屋の出身である。

その時私は何といつていいか一脈清涼の氣が胸の中をスツと通るのを感じた。そして人情と共に廢れゆく町の家並を見下しながら、人情未だ廢れず！　と心につぶやいたことであつた。叔父井筒と吉田氏の關係についても私はくはしくしらない。しかし井筒は吉田氏より先輩であつたらうし、井筒の繩張りから吉田の大親分が完成したにちがひない、井筒が吉田氏に對してドウ待遇したか全然私は知らない、吉田氏は吉田その人の力で今日あるはいはでものことである――兎に角、三十幾年前死んだ井筒の墓が、吉田氏の力で修復され、生える雜草が吉田氏の配下の手で刈られ清掃されてゐるのは事實である。

吉田氏は鑛業家として忙しい、民政黨の九州の一方を承はる人として忙しい、大親分として身邊にはごた／＼と雜多な用を持ち込まれる忙しい人である。その人が、廢れゆく町の丘の上の墓に一片の關心をもちつゞけてゐるといふことは、涙ぐましく美しい話である。常に郷黨、父母、友朋に反いてゐる私の心もち、今更省みられたことであつた。――寫眞は小野賢一郎氏――



投網の心境

伯爵　奥平昌恭

私が投網を始めてから、もう三十餘年になる。趣味でも道樂でも、二十年以上演つてゐると、一角の達者になれるものだ。況して、投網のやうな原始的な技術になると、一層上達は顯著といつてよい。

だが、至つて單純な技術のやうに見える投網にも、究めて見ると、いふにいはれぬ味ひがあるものだ。投網の三昧境とでも云はうか、所謂悟道に達する事も出來るものだ。

碁や將棊にしても、唯勝つた時の興味に夢中になる間は、まだ初心の域を脱しないといふが、投網でも其通り獲物の多いのを喜ぶうちは、投網の初心者だ。だが併し、かく云ふ私もはじめ投網に興味を感じたのは矢張りそれであつた。郷里中津にゐた頃、人に伴れられて山國川の下流へ赤目魚を捕りに行つたところ、思はぬ大漁で、網の中でぴち／＼と反ね返る數十匹の鯔魚を見た時、世の中にこれぐらゐ壯快なものはないとつく／＼感じた。これがもとで遂々今日まで、投網に浮身をやつすやうになつてしまつたのだ。

併し、この興味は、碁將棊でいふなら偶然の勝で、ほんとの勝利ではない。投網も研究して行く中に、唯偶然の獲物だけでは、眞の興味は湧かなくなつてくる。

網の打ち方、姿勢、網の廣がり等の技術に五分のすきもない時は、獲物がなくても愉快を感じる。舟の舳先に立つて、五十匁敷位の大網をさつと投げ出すと、それが百パーセントの廣がりを見せて、さぶつと水に吸込まれて行く時の感じつたら、獲物の多少などは論ずるだけ野暮だ。

ところが、不思議なもので、前夜不節制をしたり、網を打つ時、雜念を交へたりすると、不思議に網は廣がらない。多數舟の集つた時、『一つ我輩が上手いところを見せてやらう』とばかり、力瘤を入れて投げると、上手い所か、飛んだ下手

さを見せ勝ちのものだ。虚心坦懐、無我無心の境にあつて、我即網となつてこそ、網はぐん〳〵廣がつて、胸のすくやうな滿足が得られる。投げる人の心境が鏡の如く網に映る。投網もそこまで行くと、もう死物ではない。即ち投網の三昧境に、人も網も一緒になつて息をしてゐるのだ。

併し、何といつても投網の目的は漁にある。獲物の多い程興味はある筈だ。唯、それが偶然の大漁だつたのでは面白くないといふのが、初心者と違ふ點だ。

投網の興味は、技術の外に、だん〳〵と深まつて行く。魚の習性を充分に研究し、海底の模様を手に取る如く識ることなど其の一つだ。例へば、黒鯛は眞鯛の如く密集性がないから、餌撒きをして置いて網を打つとか、鯔は非常に敏感で舟を近づけないから、十月頃の月のない晩に網を打つとか、何月頃鯔にはどこの沖を通つて、どの方面に向ふとか、どこにはどんな魚がゐるとか云ふやうに、さながら海底の案内者の如くになつて來る。そこまでになると、漁は大抵外れないから、大漁は寧ろ當然である。却つて外れた時、何故外れたかを研究するのが面白い位だ。



いづれにせよ、運動としての投網は、種々の點に優れた處を持つてゐる。汐風に吹かれて重い網を打つから、健康によいのは勿論、四季様々に變化する海上の景色を眺めてゐると、心まで大海原の如く廣々する。精神修養としても立派に役立つ。しかも舟底には、潑溂とした魚を生かして歸る時の勇ましい櫓の音などは、全く投網に經驗ある人でなくては分らない爽快な境地である。

——寫眞は投網に興ずる奥平伯爵——

昔の芝居と今日の芝居

帝室技藝員　高村光雲

私は役者に好き嫌ひはない。藝熱心な人は誰でも好きだが、吉右衛門の態度が殊に大好きです。彼の藝を惜しみ、彼の健康を祈るために、先き頃觀音樣の像を刻んで贈りましたよ。

私は明治初年――世に云ふ猿若町の三座時代からの芝居を見て居ります。猿若町は一丁目、二丁目、三丁目に一つ宛小屋があつて、交る交る蓋を開けてゐたものですが、文字通り至つて小さな小屋で、天井は簀の子張、便所といへば小屋の後に醤油樽が置いてあるといつた始末で、洵に御粗末とも不潔とも今の若い人達の想像以上のボロ小屋でした。

それでゐて、觀劇料は割に高く、土間桟敷一桝四五圓しました。五六人連中を組んで一桝買ひますが、それでも辨當や何かで一人前一圓は掛りました。

『此頃のやうに一人前一圓か〻つては、もう芝居も見られないな』など〻師匠の家で噂したのが、私の二十歳位の時でした。

その當時からすると、一般の物價が三四十倍もしてゐる今日、立派な歌舞伎座の一等席でも七八圓とは割に安い。芝居好きには洵に幸福な時代です。

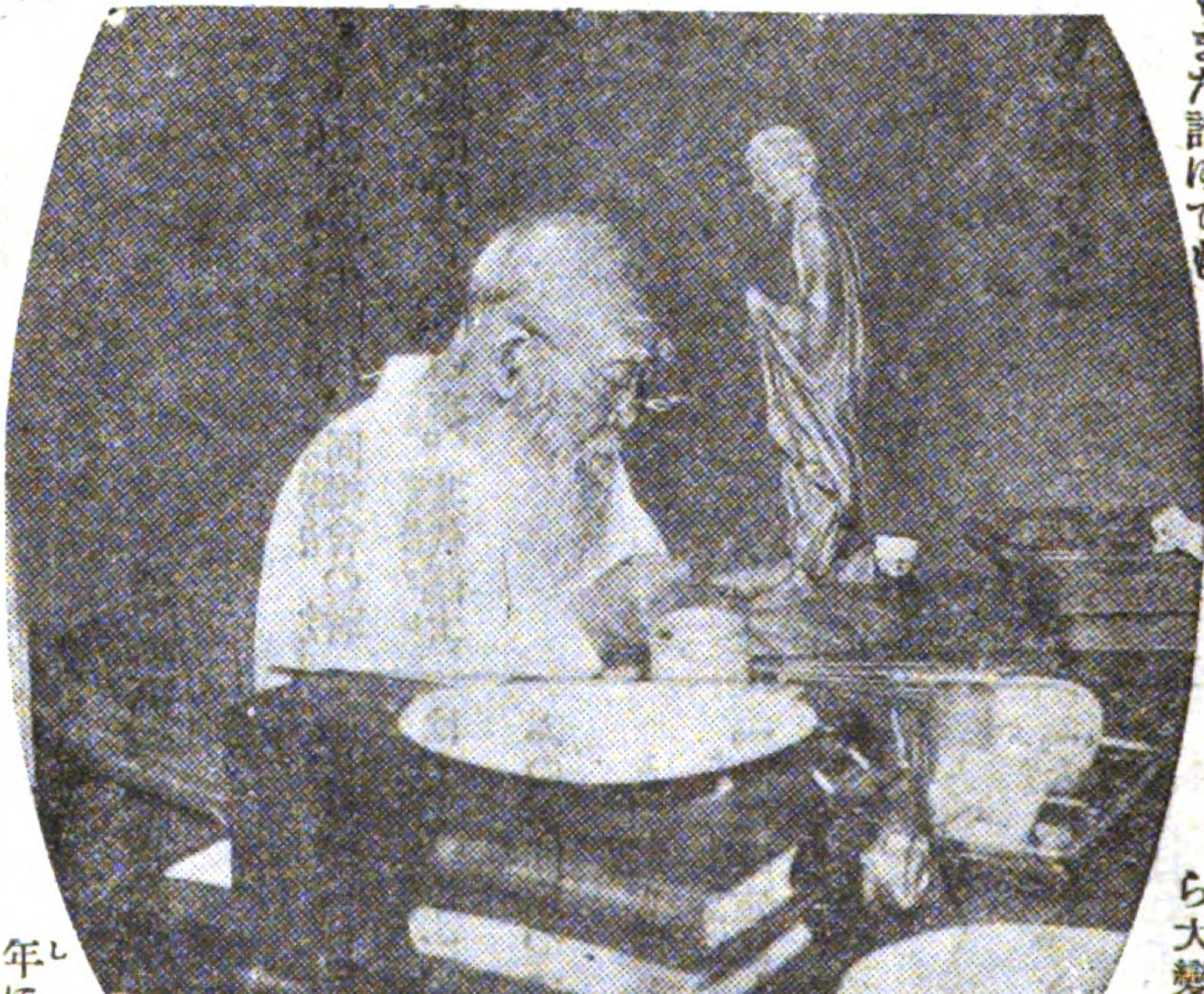
昔の役者と今の役者と何方が上手いかとよく人に聞かれますが、どちらも上手いと答へる外ありません。何故かと云つて、昔と今とはてんで芝居の狀態が違つてゐるのですから、比べやうがありません。

昔の役者は道具や背景舞臺裝置が極めてお粗末だつたから、藝だけで芝居を生かして行かねばならぬ。そこに苦心があつた。骨が折れた。けれども、代りに見物は皆江戸ッ兒ばかりだから、江戸ッ兒の粹だとか伊達だとか云ふ氣持や趣味に叶ひさへすれば、歡迎た譯です。

ところが今の役者は、進歩した素晴らしい舞臺裝置の援けによつて樂に芝居が出來る。代りに見物は東京市民といへば

體裁がよいが、云はば日本各地の人々の集りで、觀る人の趣味が雜多に廣まつてゐるから、江戸の趣味許りでゆく藝風では決して歡迎ない。勢ひ藝もまた誰にでも滿足出來るやう多方面に亙らねばならない道理で、そこに別の苦心が要るわけです。

何れにしても、今の人たちは幸福ですよ。役者の側から云へば給金にしても、昔と今とは比較にならない。殊に昔の名題役者は、小屋の掛持は出來なかつた。隨つて毎月芝居を打つ譯にはいかない。打つても當り外れがある。名優と謳はれた人達でさへ、年中貧乏で質屋と懇意にしてゐたやうな有樣でした。見物にしても、昔は乘物の便はなし、今のやうに晝興行ではなかつたから、芝居見物となると暗い中から支度して、一日仕事を休んで出かけなければならない。女などは前の晩から大變な騷ぎをしたものです。



近頃は、新劇といふのが大分流行するやうですが、私共彫刻家が觀て參考になるのは、やつぱり舊劇ですね。殊に生世話の、例へば玄冶店で羽左衛門の與三郎が蝙蝠安に文句を並べさせ、自分は頰冠りして舞臺を背にして立つてゐる後姿なんて、ほんとにふるひつきたい位です。

あゝいふ立派な姿を見ておくと、いつか彫刻に役立ちます。姿といへば、どうも女優さんよりは女形の人の方がよいです。男は身長があり、骨盤が小さいから、着附がキリッとしまつて、とてもよい姿に見えます。歌右衛門の女形なんか上品で難の附け所がありませんね。此の老年になつても、毎月二三座は缺かしません。舞臺の人の姿を見てゐると、常に何かを教へられ、創作の刺戟になりますので。——寫眞は高村光雲翁——

出す時には出す

第五高等學校教授　八波則吉

今から三十年以前の事である。私が學生時代、同鄕會の幹事として先輩の處へ寄附金を募集に行つた時の事。某代議士を旅館に訪うて來意を話すと、

『君がたの會費はいくらか。』

と問はれた。

『三十五錢です。』

と答へると、重ねて、

『三十五錢で、料理屋で宴會が出來るか。』

との質問。

『出來ませんから、名士のお方に御寄附をお願ひするのです。』

と、正直に答へると、

『それがいけない。人の懷を宛にして宴會を催すといふのは……。第一、學生があんな大きな料理屋で宴會を開くといふのが間違つてゐる。茶話會で澤山だ。』

と、劍もほろゝの挨拶。痛み入つたが、

『既に確定致してゐますので。……某々代議士の方々からも、多分の御寄附を戴いてゐますし……』

と恐る〳〵實情を開陳した。すると、

『人は人だ。まあ考へて置かう。』

と言はれて、其の日は本鄕から京橋まで無駄足を蹈んだ。當時まだ電車はなくて、鐵道馬車が萬世橋まで通じてゐた。私は馬車の中で、

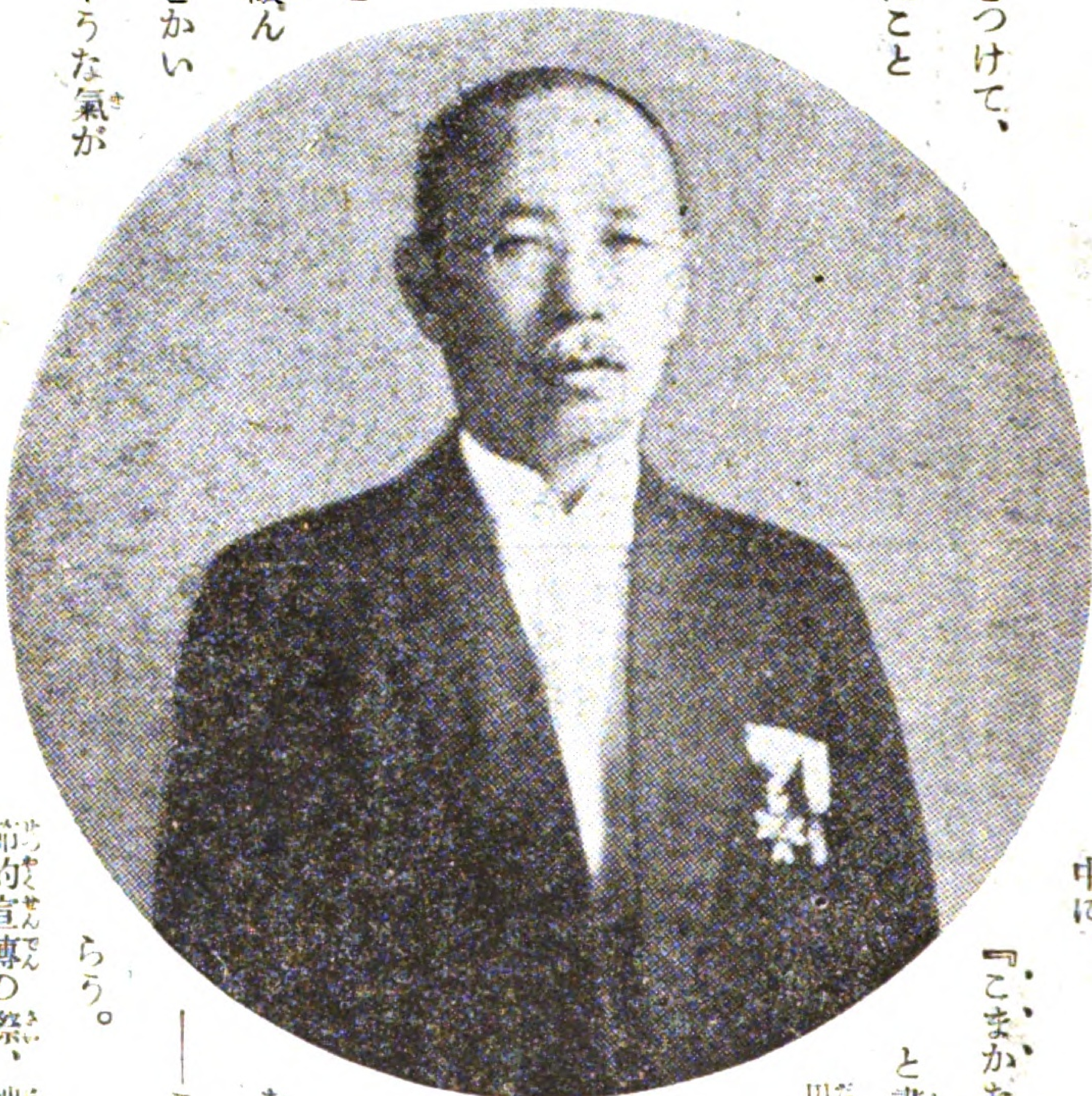
『けちな人だ。あんな金持の癖に……。考へなくともよささうなものだ』

などと、得手勝手な理窟をつけて、ぷん〳〵怒つて下宿へ歸つたことを記憶してゐる。

それから幾年か經つた。

或日の新聞に、安川敬一郎氏が、財産の全部——百萬圓を提供して、戸畑に明治專門學校を建てられることになつた、といふ記事を讀んで、私は思はず全身に冷汗をかいて、穴があれば這入りたいやうな氣がした。

前記の某代議士といふのは安川敬一郎氏其の人であつたのである。



現行の國定讀本、卷の六第十七課『けんやくと義捐』の中に、

『こまかな人だが、出す時には出すね。』

と書いてあるのは、取りも直さず男爵安川敬一郎氏の如き高徳の方を指すのであらう。私は學生時代に『けち』と『こまか』との區別を忘れてゐた。『けち』は吝嗇で、『こまか』は儉約である。無用の費を節して有益の事に使用する——これが眞の節約でなくて何であらう。

節約宣傳の際、端なく往事を追懐して、懺悔かたく此の一文を綴る。

——寫眞は八波則吉氏——

巴里仕込の書道研究

洋畫家　中村不折

片影も斜や鮎の背に跳る

私の祖父は、こんな句を物してゐる。俳句も上手だつたが字も巧かつた。私が繪を志し、書に趣味を持つたのも、一にはこの人の素質が隔世遺傳したのでもあらう。

だが、本當に書の趣味を味ひ、本當に字を書いて見たいと思つたのは、私が支那に渡り支那趣味を解するやうになつてからのことである。殊に昔は畫家即書家であつたことを知るやうになつてからは、書をもまた自分の仕事として稽古をしたのである。

明治二十八年一月、私は日本新聞の從軍記者として戰地に赴いた。戰爭は間もなく終つたが、私は神宮教の慰問使と共に、營口や鳳凰城方面を視察して、親しく支那趣味を味はつた。各地の建築や古代の碑などを興深く胸躍らせ乍ら覽て廻つた。このことが私に書の趣味を覺えさせたのである。後年西洋へも行つたが、彼地の文物には何物にもこれ程の感激は湧いて來なかつた。

私の關係したのは、日本新聞の附屬新聞ともいふべき『小日本』であつた。この編輯長が正岡子規で、子規が俳句を作れば私が挿繪を書くといふわけだつたが、この子規との交遊が一面私の支那趣味を強めたことも確かである。

明治三十四年、私は佛蘭西へ遊學した。その時も書道の事は忘れず、行李の中には駿河臺狩野家の粉本や、古碑を入れて置いた。

『そんな物を提げて行つても、歸りには乾度地中海へ投げ込んで來るだらう』

日本新聞主筆の陸羯南氏は、かう云つて冷かしたものだつた。處が虎の子の墨一挺を、同船した渡邊國武子が貸せといふから貸すとボーイが滅茶々々に磨りへらして仕舞ひ、殆ど

無くしたのでひどく悲觀したが、船長の好意で再び日本から取りよせて貰ひ、やつと巴里滞在中の間に合せた等といふ珍談もあつた。

巴里では晝間はアトリエに通うて洋畫を勉強したが夜は訪ねる友もなく無聊に苦しむままに、書を學び、また日本畫を稽古してゐた。だから私の書や日本畫は、巴里仕込といふことが出來るのも滑稽である。

書の趣味を解するに最も必要なのは、支那の古い肉筆や碑の摺物、その他古文字を彫つた器物などの參考品だ。徳川時代までは、恁うした物は殆んど無かつた。明和年間、漢時代の曹全の碑が長崎に在るといつて、非常に珍らしがつたものである。



處が、今では段々集つて、私の所持する摺物だけでも漢の碑百五十、六朝の碑三百、唐の碑一千。肉筆でも、前漢から六朝、唐にかけて三百位はある。四千年前の殷時代、龜の甲や獸の骨に字を書いたものが、三井家に一千、私が五百位は持つてゐる。進みゆく世の中といふものは有難いものだ。中でも、私の最も好きなのは六朝の物で、中岳靈廟の碑とか廣武將軍の碑などは、いつ見ても氣持がよい。

併しこれを蒐めた苦心といつたら容易ではなかつた。文字を觀賞するために、大きな鼎や爵（酒器）などを買はねばならぬのだから、私はせつせと繪を書いては、得た金をこれ等に替へた。今では參考品は倉の中一杯になつたが、お陰で生活は常に貧乏してゐなくてはならない。趣味も私のやうに凝り過ぎては困つたものだ。今では趣味といふより寧ろ本業といふべきものかも知れない。

——寫眞は中村不折翁——

國技野球

久米正雄

英國の都會でも田舍でも、鳥渡空地があると、そこに遊んでゐる青少年は、みんな重さうなクリケトの球を、腕を硬直させたやうに旋回させて、速製のウイツケツトに向つて、一パウンドで投じ、一方はそれをあの平たい板で、打つて遊んでゐる。公園でも同じだ。何處でも彼處でも、やつてゐるのは、殆んどクリツケツトの眞似である。――云ふ迄もなく、クリツケツトは英國の國技だ。

佛蘭西の空地では何も是と云つて遊びはしてゐない。草原に寢轉がつたり、繪を描いたり、たまに何かやつてゐるらしいと見ると、老人までが交つて、人頭大の鐵丸を、ごろ〳〵轉がして、目標に一番近いのが勝、と云つたやうなものをやつてゐる。――佛蘭西の國技は何だらう。ひよつとすると戀愛ごつこかも知れない。

さう云へば、獨乙の空地では、何をしてゐたらう。是も是ぞと云ふ特殊なものを、私は印象に止めてゐない。たゞ感じから云へば、陸上競技の眞似事位が似合はしい。

米國へ渡ると、不思議な事に、空地で青少年の遊んでゐるものは、吾々の期待してゐた野球でなくて、あの米國形のラグビー球を、パスしたり蹴つたりしてゐる方が多い。

ところが日本へ歸つて見ると、到る處の空地と云ふ空地は、必ず大概キヤツチボールか、野球を遊んでゐるのに一驚する。土日曜など、鎌倉から東京までの汽車の沿線で、草原あれば、必ずさゝやかなバツクネツトと、ユニフオームの白い選手たちと、それからそれ相應の見物とが、應援に遑ない程窓外に見出される。――野球は、今や斷じて米國の國技ではない。米國には商賣人はゐるが、今や、民衆的には確に日本の國技である。

それも、從來は學生のものだつたのが、だん〳〵、青年團のものにもなりつゝある。そしてスポンジ・ボールの出現は、少年の喜ぶところとなつて、今後は軟球テニスと同じく、日本に特殊な軟式野球と云ふものが發達するかも知れない。やつて見ると、勿論本ボール程の痛快味はないが、味は却つてデリケートで、別な面白味がある。

いづれにしても、野球が庶民的になり、青年團の中から、

勇者が現れるやうにならなければ、本當に強い野球は、日本には產れない。日本の野球は、寧ろ今のところでは、洗練された頭腦の野球である。腕つ節の野球ではない。巧い野球で強い野球ではない。

六大學リーグの選手の、巧いもの丶巧さから云つたら、或ひは米國の職業選手を、凌ぐものが無いとは云へない。現に野球術の頭腦的細さなどから云つたら、リーグ戰などの方が遙に彼らのよりラフでない。

米國大リーグの野球では、餘程の事がない限り、無死一走者が出ても、バントで送る正攻法などは取らない。スキーズなどはやらないと云つてい丶。彼らのは飽く迄、ヒッティングで大量生產主義である。その代り七八番を打つてる者でも、當ればホーム・ランは打つ。

併しさうは云ふもの丶、投球術と打擊術とでは、幾らどう背伸びをしたつて、どうも日本の大學選手などは、及びさうもない。守備は、視力と敏捷さで、實際或ひは日本のそれだつて、さう遜色ないかも知れないが、力と長期の練磨に依る投、打は、まるで話にならない。力がまるで違ふ。



米國の球場は、見物席は兎も角、球場そのものが、神宮だけの廣さを持つたのは、さう見當らなかつた。甲子園などは、廣さでは恐らく世界一だらう。が、ルース、ウイルソン、シモンス、オットあたりのホームランは、矢つ張りあの芝生は樂々と越えるに違ひない。

だから、一面米國大リーグの見物は、ゲームを見物に行くんで無くて、スタア・スラッガアのホームランを見に行くのだといつてい丶。其點で又、日本のファンの方が、高級と云へば高級である。

なにしても、僕達が菊池などを相手に高等學校時代、――ゴムマリ野球をやつた時から考へて見ると、實に大した進歩であり發達だ。

――寫眞は久米正雄氏――

釣談一片

文學博士　幸田露伴

釣魚のたのしみも色々様々である。一概にこれを語らせようとするのは無理である。渓河釣の趣味は渓河釣の好きな人、海釣の趣味は海釣の好きな人で無くては、能く合點が出來て居らぬ筈で、詳しく言へば同じ鮎釣の中でも鮫釣の味とテンカラ釣の味とは異なり、鮒釣の中でも寒鮒釣の味と野釣の味とは異なつてゐるやうなもので、到底二日や三日で釣の各科の談を爲しおほせるものではない。試みにさつと鮒釣を談れば、先づ、

鮒釣は春初から春晩まで、川でも釣るが、田野の間の小溝などを釣つてあるく。

ホソの釣は和らかい日ざしの下で、芳草を踏み蝶々に伴なつて、榛の木や稲架のあちこちを出入し、纖麗な短い美竿を手にして、チョイと鉤を下して幾尾か釣つては、また他の處へ轉じて釣るので、野あるき同様に、身も輕く心も輕く、執着無く、遊びあるくのであるから、野釣の稱も起つたのであらう。手柄岡持などは蓋し此の黨の釣客で、身分もあり才學もあつた人の、其心はもとより鮒なんぞに在つたでは無いが、たゞ其の長閑な風趣を喜んだのであらう。家集の『われおもしろ』には此の釣に關する歌が數々見え、其の釣場所が中川附近であつたことも知られる。梅室の句に、

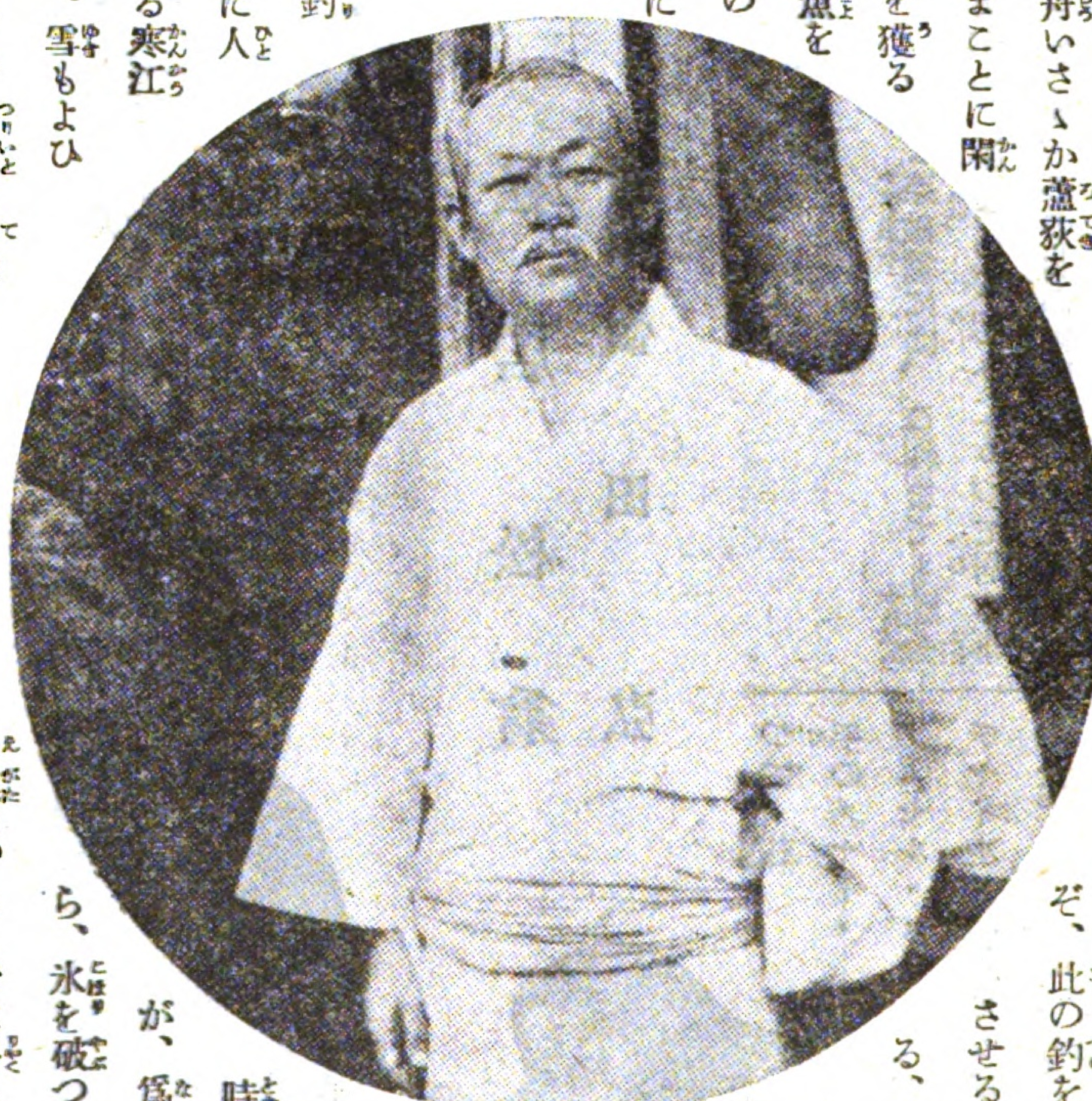
『梅が香や鮒ひつかけし釣の絲』

とあるのも早春の此の釣で、

『うなゐ子が鮒釣る里のみぞ川に櫻流るゝ春の夕ぐれ』

との戯吟も晩春の此の釣である。

四月八日佛生會頃から後は、氣のきいた者は鮒釣をやめるのが定石だが、近頃は夏でも釣る人がある。寒鮒釣は寒中に孤舟いさゝか蘆荻を離れて川中に釣る、まことに閑寂な釣であるが、魚を獲ることも多く、また巨魚を得ることもあり、春の釣とは異つて、如何にも漢畫的な高趣が饒い。一日の間、ものをいふことも無くて濟ませるのは此の釣で、それだけでも確に人を『すうッ』とさせる寒江獨釣は實に超俗的だ。雪もよひの寒い風の靜かな日など、釣綸を手がかりにして、氷が針のやうに水面に結ばれ出すかと見ると、



直に消えて無くなる。また一寸針のやうなものが見え、また流れて亡せる、凝然として氷の起滅を見てゐる心もちなんぞ、此の釣をしたことの無い人には談つたとて合點させることは出來ない。餌が凍る、手が凍る、其の代り釣得て魚を握ると魚は湯の如く溫い。雪に落ちて來られるのはまだ宜いが、時雨に來られて、しかも魚の少しも出ぬ時などは、『時雨るゝや荻のさゝやき鮒の默』と閉口して、しかもあとでは疝癪腹の起ること受合だ。

其他ヅキ釣といふのがある。此も寒い時に、ふしづけの中の鮒を釣るのであるが、爲す人も少く、爲すを得る時處も少いから、氷を破つて鈎を下す趣を語つても人の了解を得難い。こゝでは略しておく。

――寫眞は幸田露伴博士――

世界の黄金王 ロスチヤイルド物語

松居松翁

挿絵 嶺田弘

幸運の第一歩

『お前も知つて居る通り、わしは奈破翁には、これまでも随分反抗したものだ。あの男がわしに對して怨みをもつて居る事は、能く分つて居る。ところが、あの男の軍隊がいよ〳〵わしの所領へ亂入して來るのだ。わしはとてもこゝに安閑として居るわけには行かぬ。』

獨逸國ヘッスの領主、大公ウヰルヘルム九世は、かう云つて、相談相手のメヤー・アムセル・ロスチヤイルドに顔をそむけながら、双の目に溜つた涙を密と拭つた。



ロスチヤイルドは本名をアムセル・モーゼス・ゼニールと呼ばれた猶太人である。ロスチヤイルドといふ姓は、彼が多少財産を蓄積してから本姓としたので、もとは彼が家號に過ぎなか

つたのだ。ロスチャイルドは赤い楯といふ獨逸語ロトスチルドの英語讀みで、佛蘭西では、ロスチルドと呼ばれて居る。彼は獨逸國の都市フランクフオルト・オン・ザ・メーンの猶太區のヂュウデン・ガスといふ町に住まつて、初はそこで古金銀、古道具などの商賣を細々とやつて居た。彼は十二歳の時その兩親を失つたので、親戚の世話になつて居たが、その親戚は彼に希伯來律法や猶太教法などを學ばせて、猶太教の僧侶としようとした。しかし彼が生れながらの商才は、かういふ脱俗的の教育を受けつゝある間にも、自然にその萌芽を現はして、古金銀の賣買にその手腕を示し出した。而してハンノーヴアの銀行家ヲッペンハイムの爲めに拔擢されて其部下となり、金融業の實際を習得する事が出來た。

その後生れ故郷のフランクフオルトに歸つて、ヂュウデン・ガス町の舊宅に於いて、親讓りの商賣を初める事となつたが、彼の勤勉と誠實とは、彼と接觸するあらゆる人々を感動せしめ、「正直なる猶太人」との綽名をさへ贏ち得たのであつた。彼が今相對して居るウヰルヘルム九世と相知るに至つたについては、可なり面白い挿話があるのだ。

このウヰルヘルム九世は、有名な獨逸のヘッス家の大公で、英國皇室や、丁抹宮廷とも深い關係のある身柄なるにかゝはらず、蓄財に多大の興味をもち、兵士を養成しては之を英國に貸附け、年々驚くべき巨額の收入を得て居るのみならず、その英國に於いて手に入る金を利用して、爲替相場で又二重の營利をはかるといふやうな金まうけの名人で、一面では立派な高利貸を營んで居るといふ人であつた。

ロスチャイルドは何とかして、この貴族的投機營業者の御用商人となりたいといふ希望をもつて、彼に近づく計畫に心を碎いて居る中に、大公の親友であつたフォン・エストルックといふ陸軍中將と知合の仲となつた。中將は歐洲有名な古錢蒐集家であつたので、古金銀や寶石を商賣とするロスチャイルドは、自然彼の愛顧を受ける事となつた。そこでロスチャイルドは此將軍を利用して、ヘッス大公家へお出入の出來るやうにと、しきりに頼み込んだ。すると大公に於いても、ロスチャイルドが「正直なる猶太人」と綽名される程、堅固な人物だといふ事は聞いて居たので、都合によつたら、自分の仲買人にさせて見てもよいといふ下心を起した。

「では、兎に角その猶太人に逢つて見よう。」

大公はとう〳〵かう云ひ出した。ロスチャイルドは、いよいよ大公に拜謁する機會を掴み得る事になつた。

約束の時間に、ロスチャイルドが大公邸へ出かけて行つて見ると、ウヰルヘルムはエストルック將軍を相手に、しきりと將棋を闘はして居た。しかもその旗色は非常に惡かつたので、大

公の機嫌は散々であつた。が、他人の胸臆を洞察するに、もつとも機敏な才能をもつて居るロスチャイルドは、側から岡目八目の助言を初めた。と、それが忽ちにウヰルヘルムの頽勢を挽回して、必敗の運命に翻弄されてゐた大公は、却つて大勝利となつてしまつた。

ウヰルヘルム大公の悦喜は形容のしやうもない程に猛烈であつた。彼は一見舊知の如き感情をもつて、ロスチャイルドの好意を受け入れる事が出來た。彼は自家の國庫をめぐる幾多の御用商人の中から、次第にロスチャイルドを拔擢して、彼の財産の増殖と運用とに、專ら中らせようとするに至つた。

運命の別れ目！

二人の關係はこんな狀態に置かれて、次第に深厚になつて居たのではあつたが、併し此大公の身を以て、ところも有らうに猶太人町へ自からわざ／＼やつて來られたには、ロスチャイルドも驚かさるを得なかつた。一體此フランクフオルトは、獨逸の中でも、最も猶太人の多い町である。有名な大文豪のゲーテは、此町の生れであるところから、此猶太人町についてもいろ／＼書いてあるが、その有様は丁度上海に於ける支那の城内のやうに、全く他の歐洲人の街路と區劃され、ゲーテの所謂「町の中の町、城廓の中の城廓」で、街路も家屋もその狹く、小さく、汚なかつた事は、一通りでなかつたらしい。

それに猶太人に對する當時の獨逸人の侮蔑と嫉惡とはなかなかひどいもので、彼等を咽喉切りだの、犬だのと罵倒し、彼等の寺院は、生贄を取る恐ろしいところで、此區劃ちかくを徘徊した少年は、かならず誘拐されて再び社會に出る機會がないなどといふ評判さへ有つた位だ。こんなところへヘッスの大領主ウヰルヘルム九世が姿を現はしたといふ事、それ自身が、既に驚くべき異常なことなのであつた。

ロスチャイルドは、珍客の來臨に驚いて、一室に招じ入れると、ウヰルヘルムの身の上に、恐ろしい危難の襲ひ來りつゝある事が分つた。「正直猶太人」は心もやさしく、同情心にも富んで居る。自分を信じて、多年愛顧をかけてくれた大領主が、涙と共に身の不幸を喞つのを聞いては、自分自身がその災難に當面した以上に心を傷めずには居られなかつた。

『では、一刻も早くお逃げなさいまし。御必要とあらば、わたしもお落着きになる場所までお供を致してもよろしうございます。』

ロスチャイルドの此同情ぶかい語は、一向に恐怖にのみをののいて居たウヰルヘルムの理性を回復せしめた。

『親切は忝けない。自分や家族の身の上は、今からならば安全に逃げのびるあてもあるし、無事に身を潛めて居る當もない事



は無いが、一番心配なのは、自分がもつて居る金銀や貨幣や、寶石類だ。奈破翁の兵隊どもは、何處へ行つても掠奪をほしいまゝにするさうであるから、わしの領分へ彼等が闖入して來た日には、わしの金銀財寶は悉く敵の手に歸してしまふに相違ない。而して奈破翁が再び滅亡して、あの土地が自分の手へ還る時が來ても、わしは無一文の貧乏人、いや、それよりも情ない乞食同樣の身の上とならなければならない。わしはそれが悲しい。』

ウヰルヘルムは、ロスチャイルドの手を取つてさめ〴〵と泣いた。

『何とかして、重要な品だけでも、皆さまの身につけて、おもちになつてはいかゞです。』ロスチャイルドは云つた。

『併しそんな事では、所有財産の千分の一ももち出せはしない。ロスチャイルド、濟まないが、おまへのところで引取つて、隱して置いてはくれまいか。實は、わしはそれをおまへに賴みたいために、こゝまでやつて來たのだ。』

『さあ！』ロスチャイルドは、かう云つたまゝ目をつぶつて思案にふけつた。

『おまへの迷惑は能く知つて居る。しかし、この大任を賴む人は、おまへの他には一人もないのだ。おまへが引受けてくれなければ、わしは彼のまゝ椅子一つかたづけずに邸を棄てて行くつもりだ。』ヘッスの大公は、いかにも悲しさうに云つた。

『よろしうございます。お世辭にもそれほどの信賴を、みすみす裏切るわけにはまゐりません。わたしの心と生命との有らん限りは、屹度御財産を保護します。決して御心配はなさいますな。』

『有難い。若しあの財産が半分でも無事に殘つたら、わしはおまへの望む通りの御禮をする。どうぞうまく還つて下さい。』

ウヰルヘルム九世は心からの感謝を披瀝して、猶太人の町を去つた。而して粗末な箱に入つた、美事な寶物や、器財や、金貨や、銀貨やが、幾十箱となく、汚ない、汚ない、猶太人の住居の、地下室の底へと運び入れられた。

奈破翁の兵卒は、間もなく、大公の邸内へ殺到した。忽ち掠奪は初まつた。天井や壁紙をさへはがして捜索をしたもの丶、豫期したやうな立派な財寶は、まるで出て來なかつた。獨逸の大領主中、一番富豪の噂の高かつたヘッスの大公家とは信ぜられない程に有金の額も少なかつた。奈破翁は莫斯科の一夜に劣らない程の失望をした。

而してロスチャイルドが、ウヰルヘルムの御用商人で、これまでも非常に深い關係のあつた事を嗅ぎ出した奈破翁は、早速部下の士官をフランクフオルトの猶太人町へ派遣して、ロスチャイルドを糾問に及んだ。が、ロスチャイルドは、どんな嚴重な訊問にも、どんな殘酷な拷問にも、毫も惡怯れはしなかつた。而してその士官たちの憤怒を買つた彼は、自分の財産は悉く沒收されて、全く裸一貫の貧乏人となつてしまつた。

そこから然まで遠くない或ところへ姿を匿して居たウヰルヘルム九世は、平和が克復すると間もなく、フランクフオルトへ飛んで行つて、ロスチャイルドを兩腕にか丶へて、心からの感謝を彼の上に浴せかけた。

『ロスチャイルド、わしは君のやうな義俠的精神の豐かな人を見た事は無い。君一人によつて、わしは從來猶太人に對してもつて居た偏見を悉く棄て丶しまつた。君、どうか遠慮なく、地下室の金銀貨と、財寶とを自由につかつてくれ給へ。』

するとロスチャイルドは微笑に輝く顏をヘッスの大公に向けてから答へた。

『いや、その御禮はわたしの方からこそ申上げなければなりません。實はあの地下室の貨幣だけは、あ丶やつて暗黒の中へ死藏して置くのも惜いものだと思ひましたから、その一部を拜借して、最も確實な事業に投資して見ました。ところがそれが大成功で、可成な收益を得ました。原金は勿論の事、この利益もあなたにさし上げるつもりで、あなたを待つて居りました。』

あくまで正直で、あくまで恬淡で、その癖驚くばかり敏捷な彼の商才には、「貴族的投機業者」と綽名された程に、自から鼻へ抜ける奇慧なウヰルヘルムも、心から感服せずには居られなかつた。

『それにしても何か御禮をしたい、君、何かねだつて呉れるわけには行かないかね。』

『では、申しませう。この原金を向ふ九年間貸して下さい。さ

うすれば十倍にしてお返し申しますから。』

『お易い御用だ。併し九年はおろか、二十年でも、三十年でも、生涯でも、使へるだけ使つて下さい。』

から云つて、ウキルヘルムはもう一度ロスチャイルドを抱きしめた。

併しこの挿話は、今世紀の初頭頃までの傳記者間に云ひ囃された美談ではあるが、其後は多少異論を挾さむ傳記者も現はれて來た。現に昨年「ロスチャイルド家發祥錄」といふ立派な本を著はしたエゴン・ツエザル・コルテイ伯なども、この話だけはその書中から削除して居る。いづれが眞實か分らないが、併しこの話こそは、ロスチャイルドが生涯中、最も生彩に富める劇的場面であると思ふ。わたしとしてはこれを省略することは如何しても忍びない。

時來る！

ロスチャイルドはヘッス大公の仲買人なり、御用商人なりとして、其驚くべき巨額の資本を、自由に海外に運轉するやうになつてから鮮かにその資産を增殖した。彼が千八百十二年の十月十三日（わが文化九年）に世を去る前、既に歐洲第一の資本家となつてしまつた。

倫敦の一新聞記者は、當時彼を嘆稱して、『その列強間に於ける勢力は、如何なる帝王といへどもその脚下にも及ぶべくもない。英蘭銀行も、彼と對抗する事は出來ない』と云つた。その生きた實例は、伊太利皇帝フアヂナント一世に向つて云つた彼の語によつても見る事が出來る。當時伊太利は自國の經濟難を彼の手によつて救濟してもらふ事になつた。すると彼は皇帝に向つてから云つた。

『陛下よ。あなたの國家を救ふ事は承知しました。その代り其報酬としてメデシナの勳爵士X……をあなたの大藏大臣に任命して下さい。』

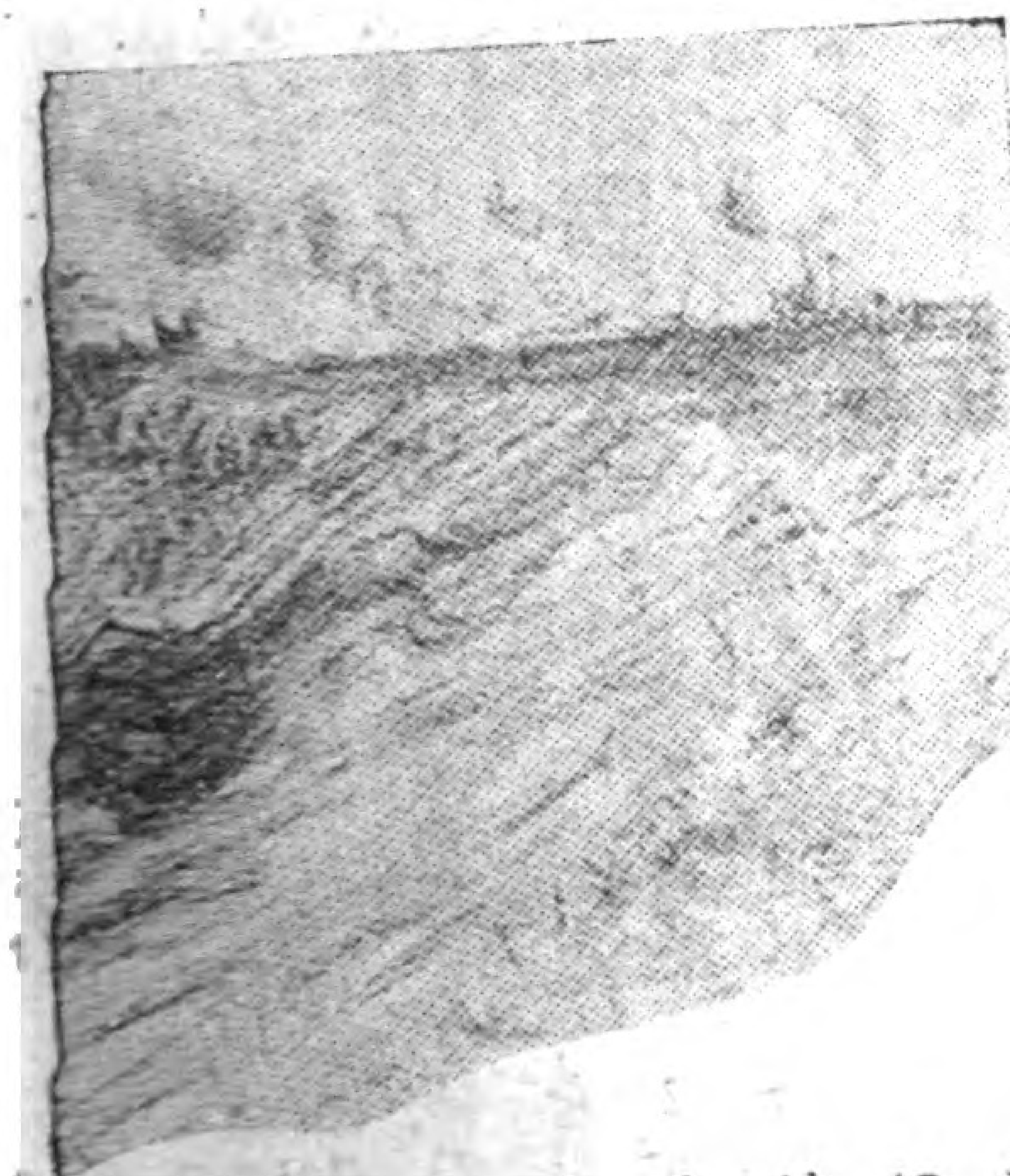
彼は一市人の身を以て、外國の政府の大官を左右する實勢力をもつて居たのであつた。

併し彼は金力の上でのみ天惠を受けて居たのではない。彼は二十七歲の時、ヴオルフ・ソロモン・シユナツペルといふ同じ民族の商人の娘と結婚したのであつたが、その翌年早速一人の娘を設けた。と、爾來殆ど年子の勢ひで、男女十人の子をこしらへた。その中男は五人であつていづれも親に劣らぬ大資産家となつた。卽ち總領のアンセルム・メヤーは、父の生れ故鄕にとゞまつて獨逸ロスチャイルド家の二代目となり、二番目のソロモンは墺太利の維也納に赴いて、そこで墺太利ロスチャイルド家の鼻祖となり、三男のネーザンは、志を立てゝ英國倫敦に赴き、そこで有名な英國ロスチャイルド卿家の初代となつ

た。四男のジェームスは巴里に赴き、そこの同家の元祖となり、五男のカールは伊太利ナポリに伊太利ロスチャイルド家を草創した。

　ロスチャイルドは此の如く、世に類ひ少なき子福者でもあつたのだ。併しこれは細君のヴォルフの功が、與つて力あるらしい。ヴォルフは夫の死後、倅たちがいづれも世界有數の大財政家となり、歐米の金融市場を席卷しつゝあつたに拘らず、彼女は彼等と共に豪奢な生活をおくらうなどといふ贅澤な心は、毫も有たなかつた。彼女は世界に稀なほどの陋巷ではあるが、自分に取つては最もなつかしいチュウデン・ガスの猶太町の舊宅に悠々自適して、生涯そこ以外に住まはうとはしなかつた。

　此自己の分を知り、榮華榮耀にあこがるゝ事を知らなかつた、その恬淡にして、高潔なこゝろは、彼女をして所謂「律義者子澤山」の多產者たらしめ、その健康をも十二分に伸展せしめたものであらう。彼女の世を去つたのは、實に九十有六歳であつた。



　五男子、いづれも父の長所をそれ〲に分譲して、いづれも當時の財界に活躍したが、中に就いて最も敏捷にして聰慧なのは、三男のネーザンであつた。彼は幼年の時より、兄達と共に、父の事業に參加して、一面その商賣に經驗を得ると同時に、他面几帳面の父より相應な資本を分け與へられた。彼は十八世紀の末頃から、世界の商業國として、次第に其重要さを增して行く英國に目をつけて、まづマンチエスタアに移住した。

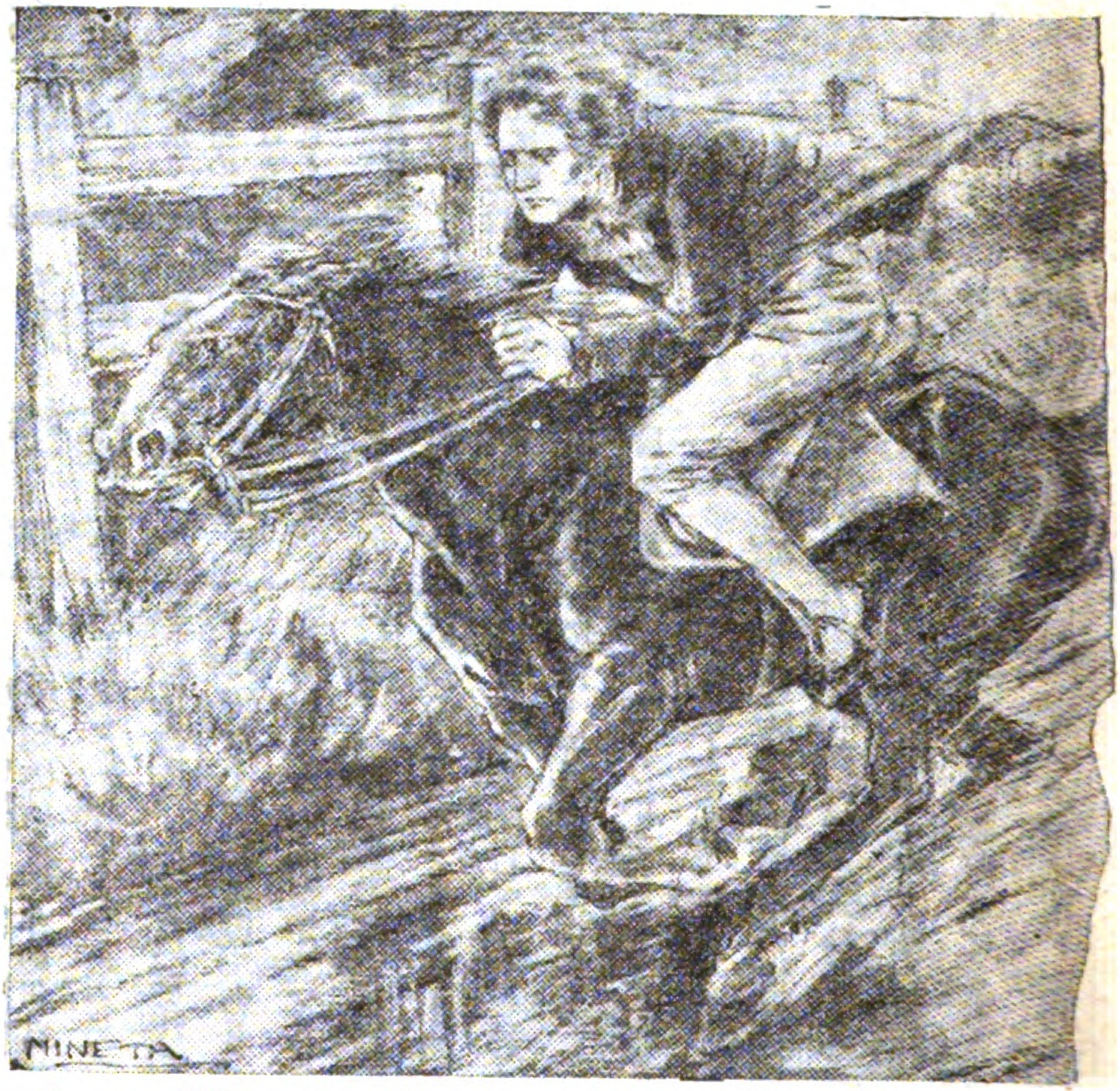
　これは此都市が、あらゆる毛織物製造の中心都市であつたのに、當時は奈破翁が歐洲を其鐵脚の下に蹂躙して、到る處に戰塵を揚げつゝあるが爲め、各國共に兵卒に與へる被服の需要多く、毛織物の消費高が、非常に多額に上つて居る事を、逸早く觀破した爲めであつた。而して彼の此觀察は全く適中した。彼は父より分け與へられた二十萬圓の資本を忽ち二倍にし三倍にし、本國の父兄の事業をも一層圓滑にした。彼はその後倫敦に移つたが、如何に自由を尊重する英國でも、他國人として仕事を經營する事の不便さを觀破して、とう〲その國籍を此國に移し、英國市民に歸化してしまつた。

　彼は奈破翁の英國封鎖の暴令を、逆まに利用して多大の富を獲得した。が、彼をして最も鮮かな金儲けをさせたのは、奈破翁が全然歐洲から失脚する原因を作つたオートル

ローの敗戰の時であつた。

これは千八百十五年六月十八日の事であつた。ネーザンは、此一戰に由つて奈破翁の運命が決定さるゝばかりでなく、全歐洲の列强の興廢が決定する事を見た。彼は驚くべき周到な用意をもつて、あらゆる方面から情報を獲る方法を考慮した。彼は盛んに賞金を懸けて、一刻も早く戰爭の勝敗の報告をつかまうと希望した。

が、他人にのみこの大事を委せ置く事の愚かしさに氣づいた彼は、おのれ自ら戰場近くの小邱に身を潜めて、此一か八かの大戰の成行を刮目して待つた。而してその日の午後奈破翁が、聯合軍の爲めに木つ葉微塵に打破られた實際を見るや、彼はかねて準備してあつた快馬に跨つて、雨上りの泥路を一氣にオステンドまで驅けに驅けた。而してそこから一艘の小舟を四百圓の高價でやとつて對岸につき、そこから再び馬を走らせて倫敦に着いた。彼はその株式市場に身を現はすや、買つて買つて買ひ捲つた。而して彼の戰略が十二分に實行された後一日餘りにして、奈破翁大敗の急報が、初めて倫敦に入つて來た。



かくして彼の富は瞬時に何十倍加するに至つた。曾て彼の父の財産を、塵もとゞめぬまでに奪ひ去つた奈破翁は、その運命を棒に振つて、ロスチャイルド家の一子の身代を盛り上げた。運命の惡戲も、こゝに到るとまことに興味の饒いものである。

つい先頃、日本財界の長老高橋是清翁が、「日露戰爭の恩人」として、米國のシツフや、ロスチャイルドについて人に話して居るのを新聞で見た事があるが、それに由つても、ロスチャイルド家が、日本の戰時公債には非常な努力をして呉れて居た事が分る。高橋翁を斡旋して、日本戰

ロイマチスの痛み

日本のやうに濕氣の多いところではリウマチスに侵される人は仲々多い氣候の變り目毎に關節が腫れたり筋肉が痛み出したりする、痛みを除く一番簡單な方法は矢張りサロメチールであらう、患部を熱く絞つた手拭かタオルでよく蒸して、その後へサロメチールを消えて無くなる迄擦り込みその上を更に蒸しタオルで霑ひ置けばドンなに劇しい痛みも、一二回で氣持ちよく除かれる、勿論永く再發を防ぐことは不能であらうが當面の苦痛を去るにはこれ程簡單な鎭痛法はなく、注射とか劇藥の内服を除いて恐らく他に類があるまいと謂はれて居る。

時公債を成功せしめた人は、多分今より十三年前に世を去つた英國の貴族ロード・ロスチャイルド卿で、前に述べた同家の鼻祖たるアンセルム・メヤーの孫に當る人であらう。今のロード・ロスチャイルドは其長子で、一時下院議員だつた事もあるが、今はその嗜好するところの動物學の研究に沒頭してゐる。彼には此學問に關する有名な著述も澤山あるし、現にトリングには世界でもつとも完備せる私立農業昆虫學の博物館をもつて居る。彼は尚大英博物館の評議員にも任命されて居る。

その弟のアルフレッド・チャアレストといふ人は、曾て英蘭銀行の總裁だつた事のある人で、これは又英國でも有名な美術鑑定家で、同時に運動家であり、國民畫館や、ワレース美術博物館の評議員をして居る。

ネーザンに次いで特色のあつたのは、佛蘭西の市民となつたその弟のジェームスである。フランスに落付くだけあつて、彼は極めて貴族的な人であつた。彼については色々面白い逸話が傳記者の筆に由つて語りのこされて居るが、こゝではその一つだけを紹介しよう。

千八百四十六年に歐洲の大不作があつた時、ジェームスは大きな製麵麭所を巴里の近郊に築き、麵麭の安賣をやつて、市民の苦痛を緩和しようと力めた。ところがそれが却つて彼の反對者の爲めに、逆まに利用せられて、彼の作るパンの材料はパン粉でなくて麩と糠であり、その膨らかし粉の中には、砒素が入つて居るといふ噂が立てられた。この爲めに巴里の市民が激動して、一揆は彼の邸宅に殺到しようとした。その時之を遮り止めたのはマルク・クオースデイールといふ警官であつた。此人はその後失脚して、乞食のやうな有様となつて英國に放浪して居た。その噂を聞いたジェームスは直ちに一萬二千圓を送つて、『どうか之を資本に何か仕事にとりついて貰ひたい。この金も決してたゞ進呈するとは云はない。十年なり二十年なり、或ひは一生涯の中の或時期に、返してくれる事が出來るなら返して下さい。』と云ひおくつた。

ロスチャイルド家の風格が、此一本の手紙にもよく窺はれるのである。みだりに金を浪費せず、何事にも几帳面なところが、ロスチャイルド家の成功の一大原因なのであつた（終）



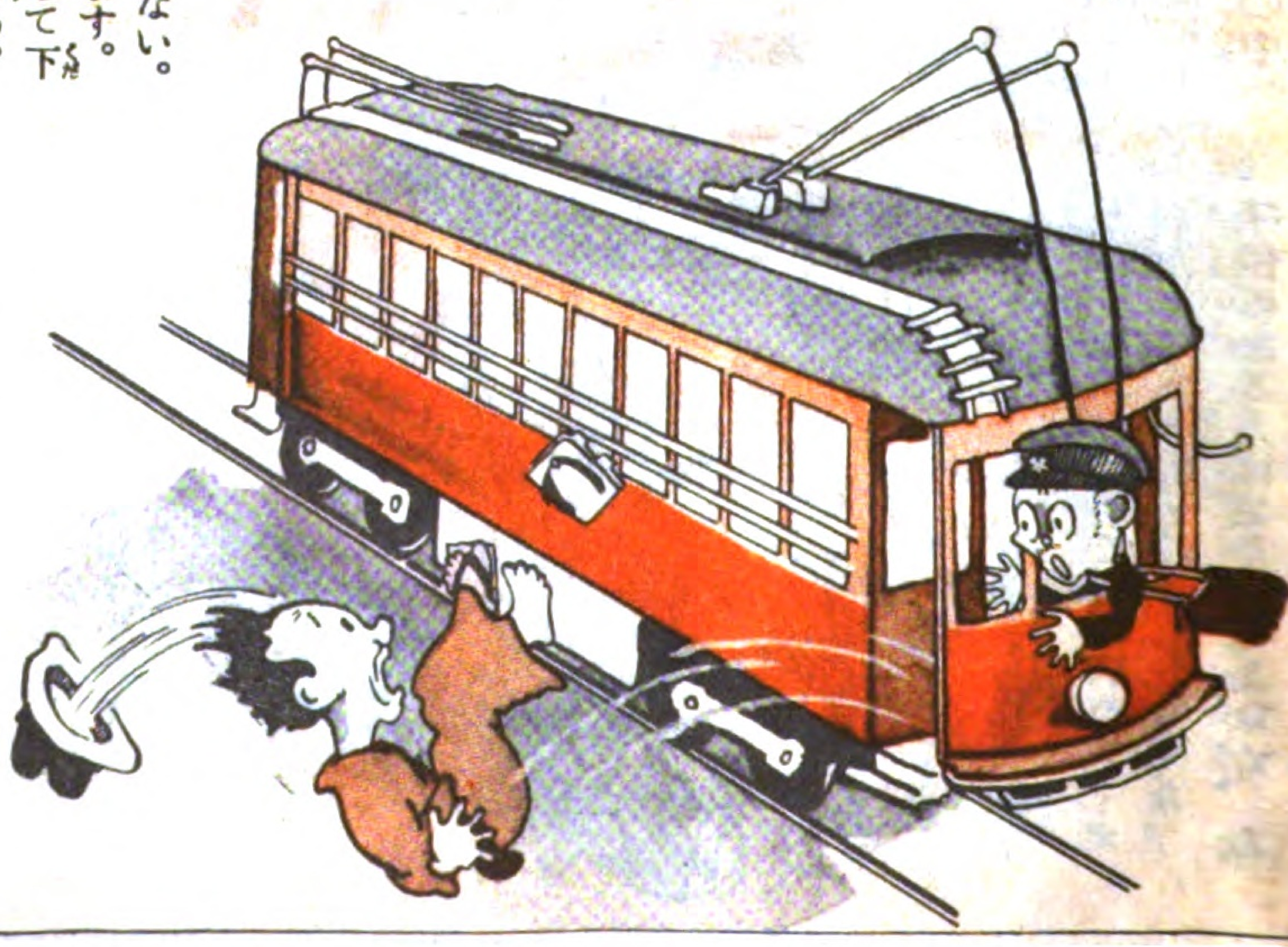
飛降り

山遊亭燕柳

世の中が進んでまゐりまして、今日はスピードの時代だなんて、恐ろしく速いことを競ふやうになりました。汽車にしても、今までの特急では物足りなくなつて、超特急などといふのが出來ましたやうで……。

かうなつてまゐりますと、少しでも速いのを喜びますのは人情。電車よりも乘合自動車の方が速いとなると、電車を五臺やり過ごしても乘合自動車を待つてゐる。やうやう自動車が來てそれに乘ると、今度は電車と競走で『これで一臺追越したぞ。ウム、これで二臺だ。……三臺……四臺もやつと追越したから、いよいよ五臺目だ。こいつを追越しア自動車に乘つた甲斐があつたといふものだ。やつぱり自動車は速いな。さア五臺目に追ひついたぞ。もう少しだ。早く〳〵。しめたッ。これでまづ〳〵乃公の方が先になつた』ところが、氣がついてみると、自分の降りる所を乘越してゐたなんてのもございます。さういふ風でございますから、電車に乘ればつて、我れ勝ちに先を爭うて乘ります。自然、飛乘り飛降りなんてことをやる。一つ間違へば命賭けですが、どうも待つてゐられない。

車掌『もし〳〵、貴所、危うございます。直くに留まりますから留つてからにして下さい。』○『何を云やアがるんだ。箆棒め、初めて飛降りるんぢやアねえやい』大層威張つてをりますから、上手に飛降りるかと思つてゐると、大間違ひ。足をとられて仰向ざまにひつくり返つた。車掌『危い。そうれ、言はないことぢやない。だから、留まるまでお待ちなさいといふんで――』○『何を云やアがる、箆棒め。初めて落つこちるんぢやアねえやい』



田河水泡畫

小言屋

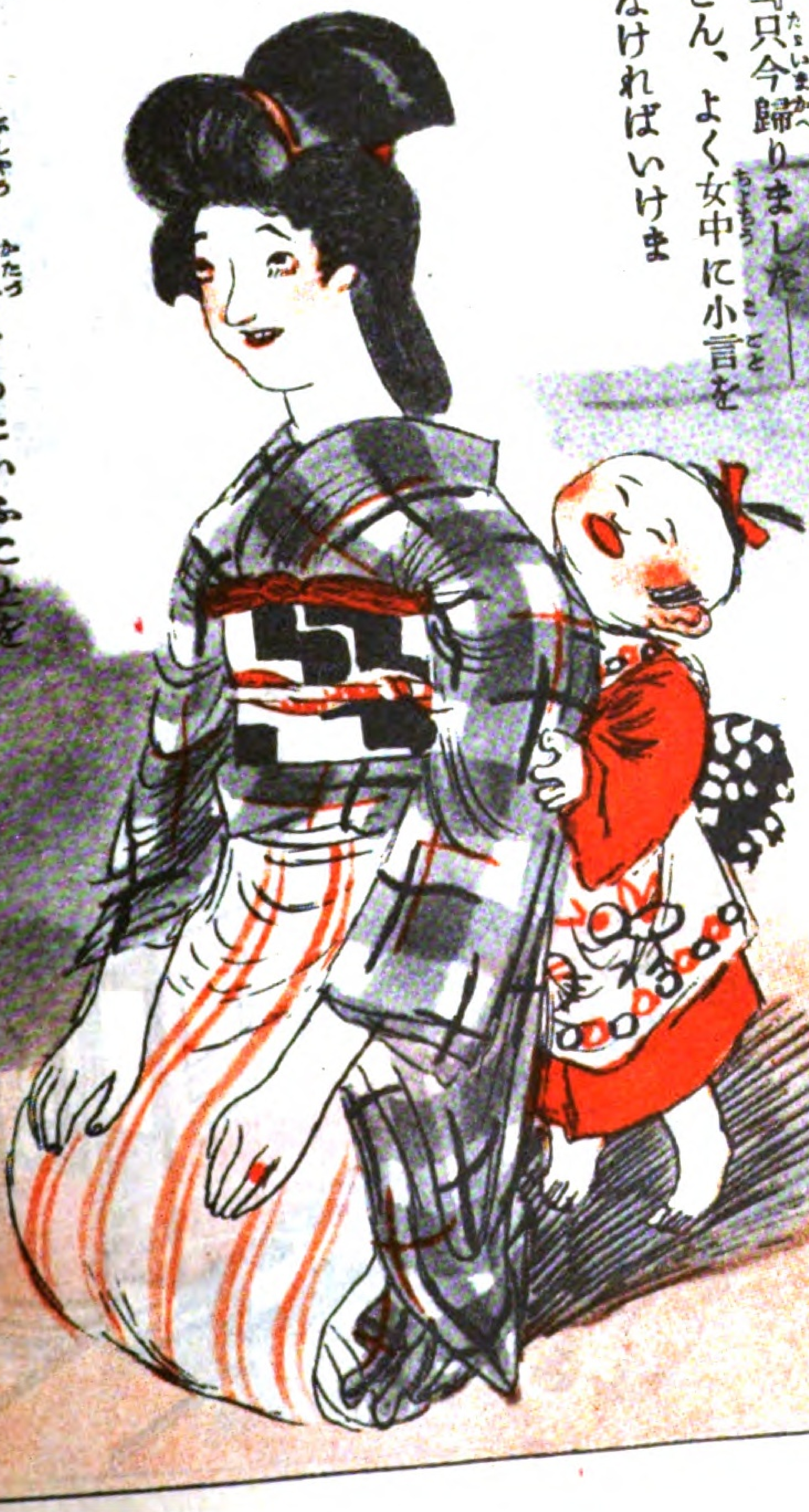
松廼家綠

無くて七癖といふくらゐで、人間何方にも癖のあるもので、中には年中小言ばかりいつてゐる人がございます。朝起きるから出掛けるまで、勤めから歸るとまた寢るまで、始終小言をいつてゐないと、御飯が不味くつて寢られないといふ、まことに厄介な人があつたものでございます。

主人『只今歸つたよ。これ〳〵どうも表を掃いて置かないで困りますねえ。塵芥だらけぢやアないか……なに塵芥屋が來てこぼして行つたのだ？　さうだつたら、塵芥は後で掃いて置いたらいゝでせう。塵芥を散らかしつ放しにして置けといふ法律でもありますか……オイ〳〵上り口に下駄をかうふしだらに脱いで置いては困るな。人樣が來たらどうする。平常だらしがないやうで、みつともないぢやないか。ちやんと下駄を揃へて置くくらゐの考へが起らないのか』

妻『貴下、お歸りなさいまし』

主人『只今歸りました――お前さん、よく女中に小言をいはなければいけませぬよ。不精で片付けるといふことをしない。おや、またやつてるな、かう火鉢の上へ猫を載せて置いては困るぢやないか。猫といふものは歩く度に毛が飛ぶものだ。その毛が食べ物の中へはいつたらどうする。第一毒ですよ……オイ〳〵湯が沸いてゐないではないか。火もおこつてゐない。火がおこつてゐないから、湯が沸いてゐない。ちやんと順序好く行屆いてゐないね……オイ〳〵さう子供を泣かしなさんな。子供のある人はさうでもないが、な



い人はやかましいものだよ……又お前さんもさうだ、幾ら子供があるからつて、髪も結はず、さう燻ぶつてばかりゐないで、たまには髪でも結つて、湯へでもはいつて、お化粧の一つもして置きなさい……オイ〳〵、ラヂオは今休んでゐるよ。スヰッチを切らないと電流が無駄ぢやアないか』

年中小言ばかりいつて居ります、家中の者は大困り。仲人に話をすると、

『それはお前さんが悪い。小言をいはれないやうに心掛けなければいけない』

といはれて、奥さん、ちやんと掃除をして待つてゐる所へ、御主人がお勤めから歸つて參りました。

主人『表が……綺麗に掃いてあるな……オイ〳〵下駄が――ちやんと片付いて揃へてあるな………』

妻『貴下お歸り遊ばせ』

主人『火鉢の上に……おや猫が居ないな。變だな、今日は猫の定休かな……火鉢に……火がおこつてゐて、湯が沸いてゐるな。こいつはいけない……オイ〳〵子供は……泣かないで、大人しくニコ〳〵笑つてゐるね――お前さんもさうだ、少しは髪……を結つて綺麗だな。なに、今日髪結さんが來て結ひました？ たまには湯へ……えゝ、今行つて歸つて來て、お化粧をしたばかりだ？ それぢやア私の小言を言ふ所がなくて困るぢやないか』

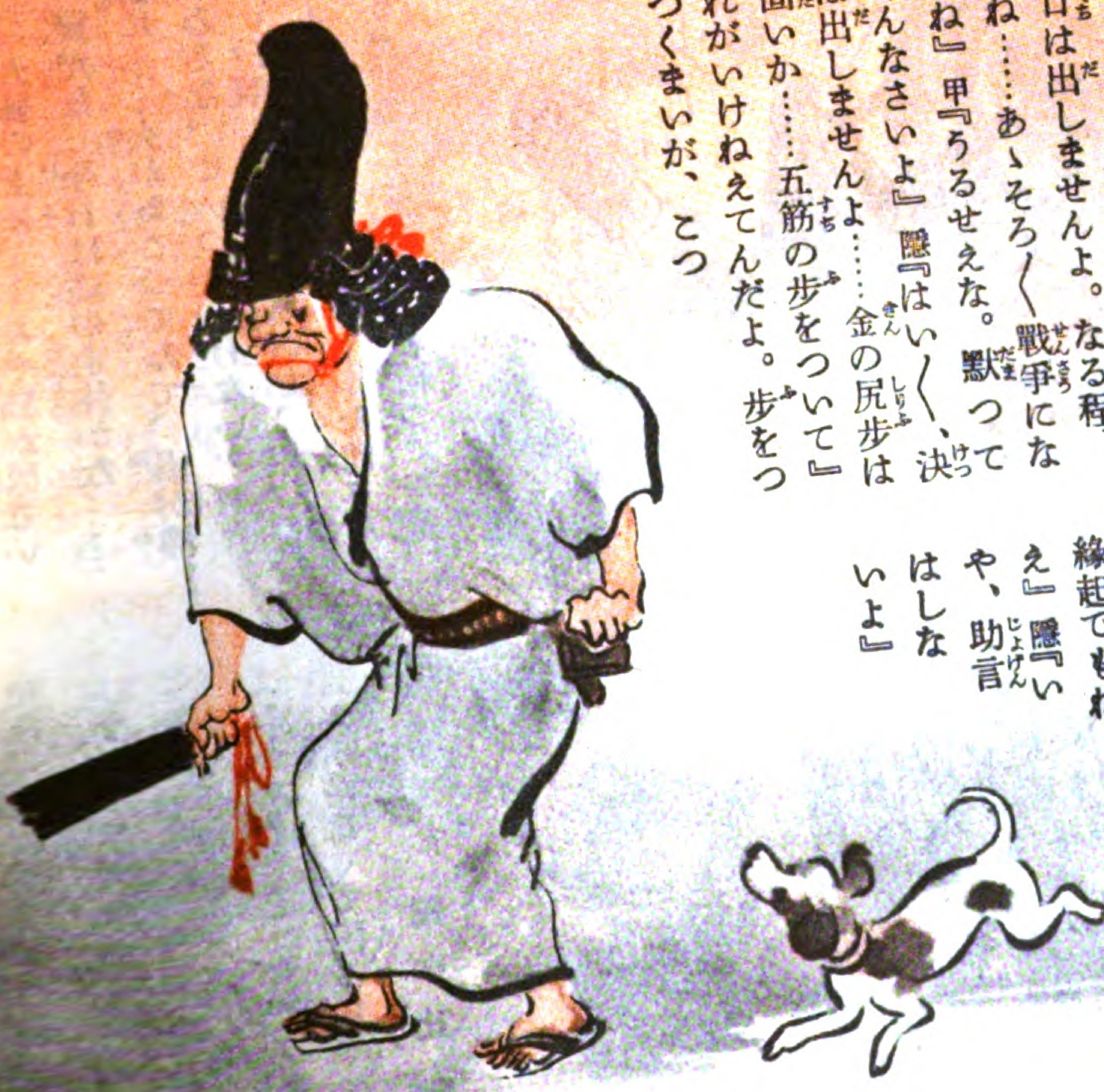


田中比左良畫

助言の兜

新門亭花柳

甲『さアこゝで始めようぢやねえか』乙『駄目だよ。こんな店先でやつてゐると、又横丁の隠居がやつて來て、口出しをしてうるさいぜ』甲『なアに、いゝ事があるんだ。今日は一兩づつの賭將棊なんだから、口を出したら毆るといふ約束をさせるんだ』乙『約束ぐらゐぢや駄目だ』甲『だからよ、口を出しア毆つてしまふんだ』乙『成程、毆られてまで口は出すめえ。ぢや始めよう』隠『おや、これは〳〵。やつておいでだね。いつもながら二人の將棊は面白いな』甲『ほら、やつて來た……え、隠居さん、今日は口を出しちやアいけませんよ。一番に一兩づつ賭けてあるんだから』隠『なに、一番に一兩？　賭合將棊なんぞはあまりしないがいゝよ』甲『まアたゞぢや張合ひがねえからね。だが、隠居さん、氣が立つてゐるから、口を出すと、今日は毆りますよ』隠『よしく、口は出しませんよ。なる程、相懸りだね……あゝそろ〳〵戰爭になつて來たね』甲『うるせえな。默つてゐておくんなさいよ』隠『はい〳〵、決して口は出しませんよ……金の尻歩は岩より固いか……五筋の歩をついて』甲『それがいけねえてんだよ。歩をつかうがつくまいが、こつちの勝手だ』隠『いや、さうでもあらうが……ウーム、これアどうも辰さん、少し旗色が……』乙『おい毆るぜ。一兩の一件なんだからね。旗色が惡いなんて縁起でもねえ』隠『いや、助言はしないよ』



乙『助言でなくても、うるせえよ。隱居さん、口を出すと、遠慮なくポカーツと毆るが、怒つちやいけないよ』

隱『あゝ宜しい。決して口を出さんことにする。だが、面白いな、接戰だね……あツ辰さん、飛車が危ない！』

甲『此奴めツ』隱『あツ痛ツ、痛いなアこれアどうも……いや、又來ます』

甲『ウフツ、たうとう行つちまやアがつた。これでうるさくなくつていゝ』

丙『もし〳〵、お前さん達ア飛んでもない事をする。何だつて、隱居さんの頭を打づんで』甲『だつて、約束だから仕方がねえ』丙『幾ら約束だからつて、餘り亂暴だ。あの隱居さんは、お前、もとお武士だぜ。よくも武士の面體を打つたな、覺悟に及べとか何とか云つて、一本打込んでやつて來ないものでもねえぜ』甲『なアに、大丈夫ですよ』

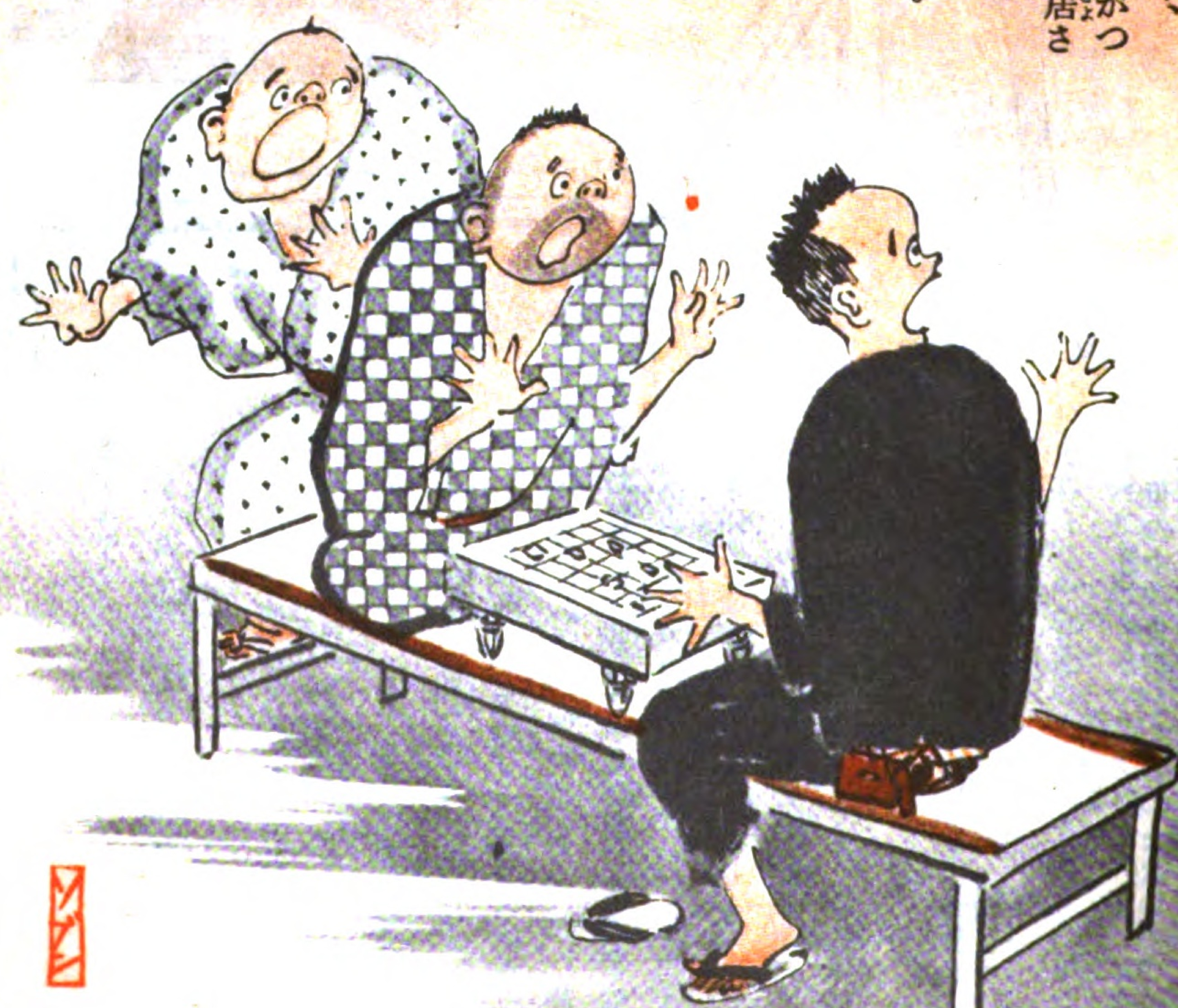
丙『大丈夫ぢやないよ……それ御覽な。言はない事ぢやない。あすこへ來たぢやないか。おや、鐵扇を持つてゐるぜ。あれでポカリやられちや堪らないぜ』

乙『なる程、はて何か冠つて來たね』

丙『あれアお前、兜だ』甲『おや〳〵、兜を冠つて來やがつた……どうも隱居さん、先程は失禮、ついその……』

隱『いや構はん。さアお始めなさい』甲『もうやりませんよ』隱『さう云はぬでおやりよ。今度は打たれてもいゝやうに、兜をかぶつて來た』

谷脇素文畫

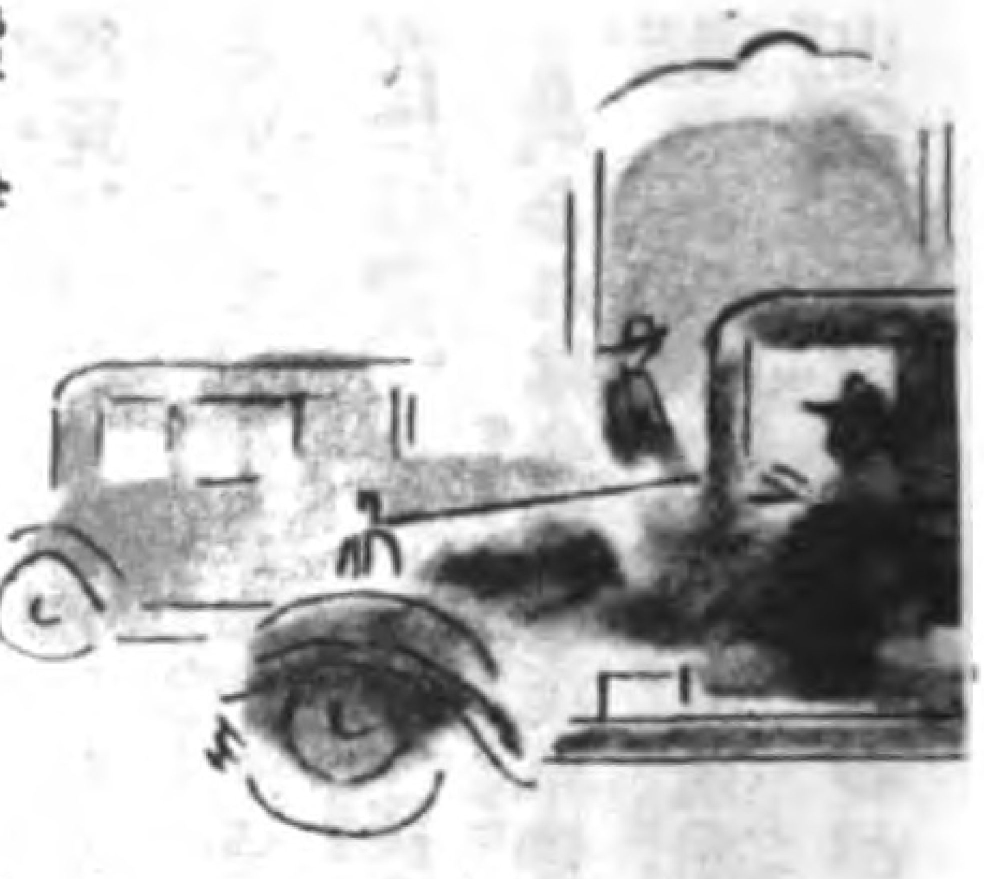




世辭屋

春廼家朧

世の中は世辭があるのとないのでは、大變其の人のうけが違ひます。といつ



て餘り世辭が好過ぎると、人間輕く見えますか、全く世辭のないのは困ります。そこで世辭のない人に賣らうといふので、世辭屋といふ商賣が出來ました。甲『オイ御免よ』○『入らつしやいまし、どうぞお掛け下さいまし。何か御用でございますか』甲『用がなけりやアこんな所へ來やアしねえ』○『ヘエ、御尤もさまで』甲『世辭を買ひに來たんだ、見せてくれ』○『御商賣は何でいらつしやいますか』甲『大工だッ』○『棟梁でございますか、宜しうございます。少々お待ちを……』大工の棟梁の世辭を器械にかけると、丁度蓄音機のやうなもので、お世辭が飛出して參ります。『おや、これは旦那樣でいらつしやいますか。御機嫌宜しうございます。御普請も立派に出來上りましたが、こんなに好い都合に行かうとは思ひませんでした。やつぱり旦那樣は御普請に馴れていらつしやいますから、御設計が上手でいらつしやいます。あの床の間の工合、お座敷の間取、私共商賣人はだしでございます。これから精々旦那樣に教へていたゞいて勉强いたします……』○『此の邊では如何でございます』甲『よからう、買はう』○『では此の丸藥を召上がりますと、直ぐあのやうにお世辭がよくなります』甲『さうか』と、ガブリ丸藥を呑む。甲『あゝ爽々した。どうも有難う。濟まねえ。何ね、どうも乃公はお世辭が惡くつて、ブツキラボーで、お店へ行つても、いつも旦那に叱られるんだ。どうか世辭がよくなりたい〳〵と思つてゐたら、これ〳〵と聞いて此方へ來たんだ、お前さん所の商賣は人助けだ。世辭の惡い人はどんなに助かるか知れねえ。幾だらい――えゝ安いなア、どうも有難う。旦那にもお内儀さんにも宜しくいつておくれよ。左樣なら……』世辭の惡い人がこんな風に直ぐ世辭がよくなつて歸つて行く。これが評判になつて世辭屋さん大繁昌。ところへ一人の男。

乙『ヘエ、御免下さいまし。どうかお世辭のいゝところを一つ賣つて戴きたいもので。お忙しい所を相濟みませぬ。大層此方樣は御繁昌ださうで。それもその筈、人間といふものは、どうもお世辭がないといけませんもので。はい。――此方樣は風通しが宜しくつて、お店が綺麗で結構でございますな。お掃除が行屆いて――どうかお世辭の宜しい所を戴きたいもので……』世辭屋の番頭さん、ドン〳〵店を片付けて、

○『ヘエ、手前共では仲間賣はいたしませぬ』

明石精一畫

山號寺號

杉廼家 繁

○『旦那樣、どちらへお出でになります』旦『これから成田山へ行くよ』○『成田山といふと何所でございます』旦『成田山を知らないのかい、新勝寺さ』○『新勝寺といふと……』旦『困つたな、成田の不動樣のことをいふのだ』○『あゝ成田の不動樣ですか。何だ詰らない。成田の不動樣といへば直ぐ分るのに、成田山だの新勝寺だのとおつしやるから分らないので』旦『分らない方が馬鹿なのだ、何所でも寺には山號寺號といつて、何々山何々寺といふのがあるのだ』○『へーえ、では淺草の觀音樣は……』旦『あれは金龍山淺草寺さ』○『成程』旦『義士の墓のあるのが萬松山泉岳寺、上野のお寺が東叡山寛永寺、芝にあるのが三緣山增上寺』○『なアんだ。そんなことなら譯はないや。私だつて出來ます』旦『お前なんかに出來るものか』○『出來たらどうします』旦『出來たら一圓上げる』○『一圓……有難い、



旦那、向ふに女が雜巾掛をしてゐやせう』旦『ウム』○『おかみさん拭き掃除―とはどうです』旦『なんだ、語呂だな。だが、なか〳〵面白い。まアいゝから

一圓上げよう』○『どうも有難う存じます……。旦那、向ふから盲人が杖をついて來ます、あんまさんもみれうぢ——といふのは如何で』旦『成程、うまいな。さア一圓』○『有難い……旦那、あすこを御覽なさい。蕎麥屋がございませう。そばやさん玉子とぢ——といふのは如何』旦『玉子とぢはよかつたね。ほら一圓』○『どうも有難う存じます——賑かですな。此所は上野の廣小路で、人だくさん廣こうぢといふのはどうです』旦『少し無理だが、上げるよ』○『有難う……旦那、向ふに大きな時計屋がございます。時計屋さんもう何時といふのはどうです。一圓、ヘエ有難う存じます』旦『ちよいとお待ち。よく出るね。私もやるよ』○『ヘエ』旦『今お前に上げたお金をみんな此所へお出し』○『ですが、これは私がいたゞいたので。取つちやいけませぬよ』旦『取りはしない。ちよつとお貸し。此のお金を私が殘らずから懐へ入れて、衣服の尻をはしよるだらう』○『ヘエ、成程』旦『旦那さんずゐとくじ——とはどうだね』といひながら逃げてしまつた。○『アツ、なむさんやりそんじ』



的場朝二畫

（ずゐとくじとは、逃げて跡をくらますこと）

吝ン坊

秋廼家清月

人のことは目に着いても、自分のことは分らないことが多いやうでございます。

主人『長松』長『へーえ』

主人『向ふの家へ行つて、棚を吊るのでございますといつて、金槌を借りて來なさい』長『へえ、畏りました』

小僧さん出掛けて行きましたが、間もなく戻つて來た。

長『へえ、只今』主人『どうした』

長『お向ふでさう申しました』主人『何といつた』

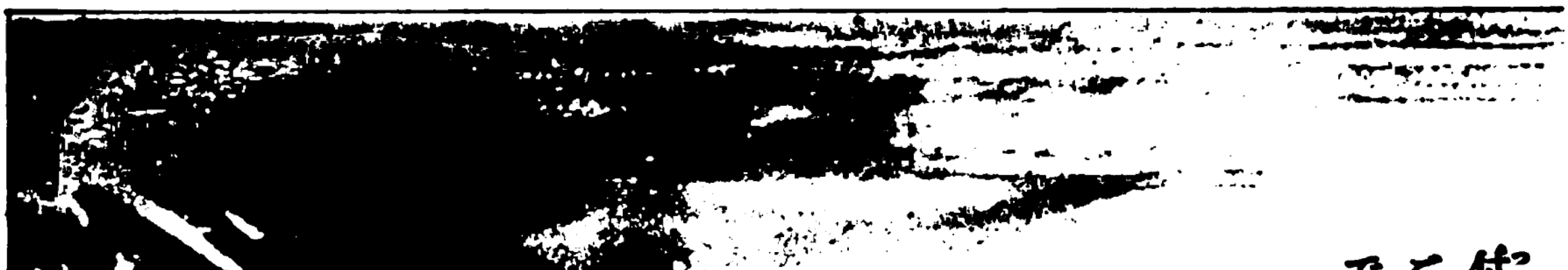
長『棚を吊るのはいゝが、物を載せるのか、載せないのかと聞きました』

主人『馬鹿にするな。物を載せない棚といふのがあるか。それからどうした』

長『物を載せるのだと申しましたら、それでは落ちないやうに丈夫に吊るのだらう、して見れば金の釘を使ふのだらうと、かう順序よく尋ねました』主人『何が順序よくだ。あたりまへぢやアないか、貴樣何といつた』

長『棚を糊





付けにしたのを見たことがございませぬ、大抵金の釘で打付けますといつたら、適れなことをいふ奴だ、そんなら貸せないと申します。それから私が其の理由を質問に及びました』主人『何といつた』

長『さうしたら先方の曰く、乃公の所の金槌は鐵だ、鐵で鐵を叩くと鐵が減るから貸せないと、から答辯をするので、私は成程尤もだと賞めて歸つて參りました』

主人『何をいやアがる、そんな事を賞める奴があるか。吝な奴もあつたものだ。そんなら家のを出して使ひな』

どつちが吝だか分りませぬ。

所へ、チヤン〱チヤン〱。『それ近火だ』といふうちにお向ふの家まで燃えて來たが、幸ひこちらへは移らないで消えました。

主人『どうも有難う存じます。ヘエ、危ない所でございました、風が變つたので助かりました。有難う存じます――オイ皆さんがお見舞に來て下さる。湯には及ばない。裏の井戸に水が澤山あるだらう。馬穴に二三杯汲んで持つて來て置きな。息の切れた時は水に限る。だが煙草は水ぢやアのめねえ、火の種がなくちあ――オイ〱わざ〱火をおこすには及ばない。そんな餘計なことをしなさんな――長松向ふの家へ行つてな』長『ヘエ、又金槌ですか』

主人『さうぢやアねえ、向ふの家は燒けてしまつた。十能を持つて行つて、山盛一ぱい火を貰つて來て、店と奥の火鉢へ入れて置きな』長『ヘエ……行つて參りました』

主人『どうした』長『向ふでさう申しました、大金を掛けた家を燒いて出來た火だから、差上げることは出來ないつて……』

主人『吝な奴だ、よし、貰ふな〱。何といふ吝な奴だ。乃公の家が燒けて見ろ。火の子もやらないから』



田中比左良畫

ねとぼけ

三勇亭琴月

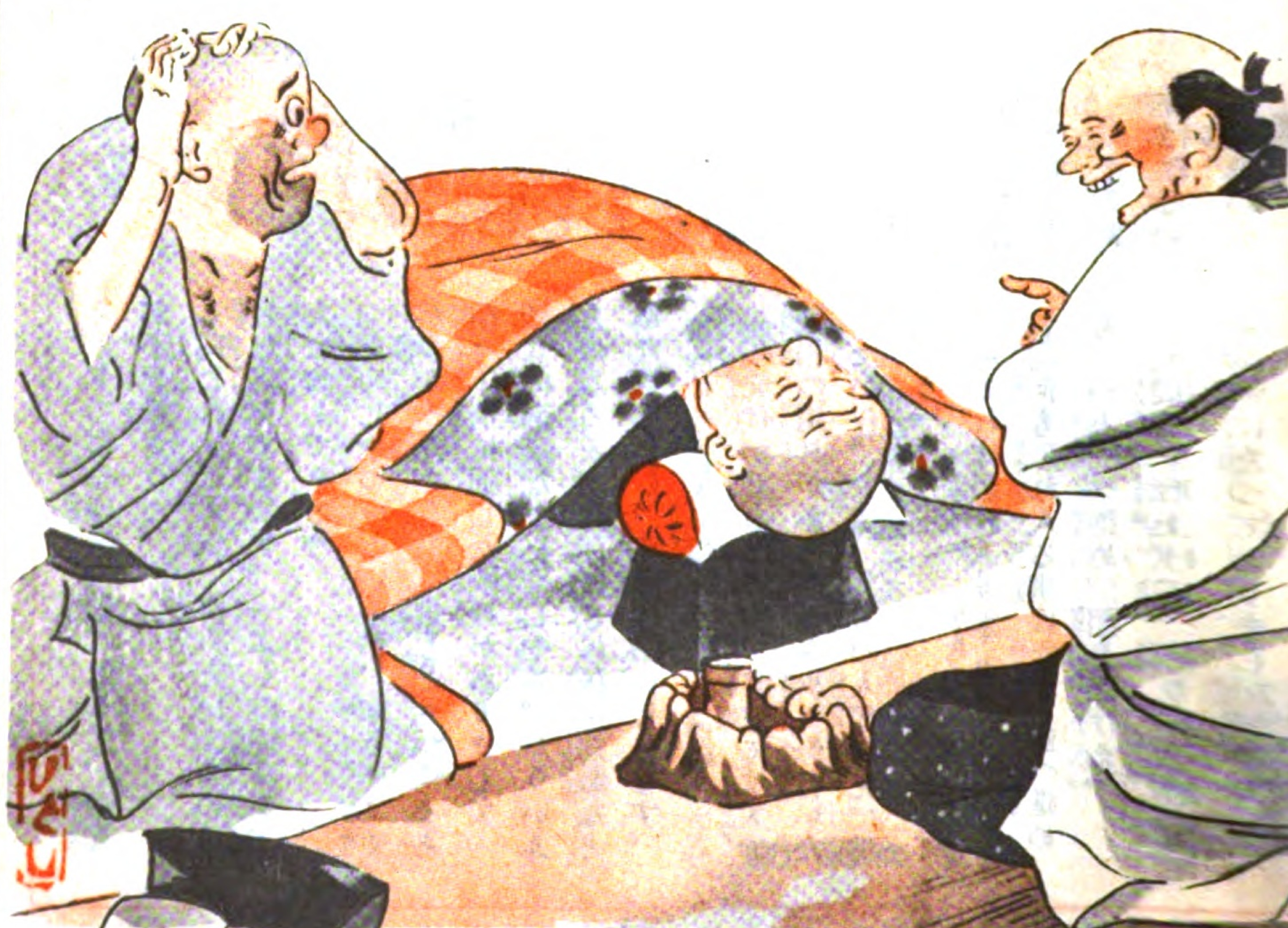
○『もし御出家さん、貴方も西の方へお出でのやうですが、どちらへ』坊『わしかな。わしは京の本山まで行きますぢや。お前さんは江戸の方のやうぢやが』○『へえ、かう見えても江戸ッ子なんで、だが旅へ出ると、から意氣地がねえんで、上方へ参りますが、どうぞ御一緒に願ひたいもんで……』坊『旅は道づれといつてな、一人より二人の方が面白い。時に御商賣は』○『へえ、床屋なんで』坊『床屋さん、それは何より、長い道中、時々頭をあたつて貰ふと都合がよいな』床『いや、お安い御用で、道具もかうして持つてゐますが、何しろ、少々そゝつかしいので、ちよいちよいしくじります』坊『といふと』床『なアにね、ついうつかりして、小鬢などを剃込みますんで』坊『へーえ』床『だが、貴方は髷がねえんで、譯アありませんや』坊『坊主けがなくてすみますかな』洒落た坊さんもあるもので。×『ああもし〳〵お二人さん、わしは百姓でござえますが、伊勢参りさいたしますだ。わしもどうぞ仲間に入れて下せえまし』床『そいつア何より、三人揃へば何も怖えこたアねえ』坊『二人より三人、旅は賑かな程よろしい』百『どうぞお願えいたしますだ』と、これから三人で道中をすることになりましたが、やがて日が暮れて宿屋へ泊まる。寢る時分になりまして、



床『どうもお二人さん、この宿は少し物騒ぢやごぜえませんか』百『わしもはア、心配してゐたところでがんす』坊『いかさま、さう云はれてみると、少々心許ない所もある。と云つて、寢ずにゐるといふわけにもならぬが』床『ぢやアどうでせう。三人が交代に不寢番をしては』百『それがえゝでがんす』坊『いや、それなら先づ安心といふものぢや。では、くじ引きで順

番をきめますかな』そこでくじを引いてみると、床屋さんが一番で、二番がお百姓、三番が坊さんといふ事になり、早速お百姓と坊さんはゴロリ横になる。起きてゐる床屋さんは手持ち無沙汰でしやうがございませぬ。床『二人ともよく寢るぢやねえか。横になつたかと思ふと、もうグー〳〵高鼾だ。だが、いくらお百姓だからつて、この頭はどうだ、いつ月代をあたつたんだか、まるで雀の巣だ。よし〳〵、退屈でしやうがねえから、一つ乃公が剃つてやれ』床屋さん、道具を出して頭をしめし、ゾリ〳〵やりだしましたが、例の粗忽者、小鬢を思はず剃込んだから、床『やアいけねえ、大事な所で動きやがるから、飛んだ事になつた。ちえツ面倒臭え。序にすつかり剃つちまへ』ひどい奴もあるので、たうとうお百姓を坊主にしてしまひました。草臥れてゐるので、正體もないお百姓、順番が來て起されましたが、まだよく目が覺めきれないところへ、ひやりとするので、ひよいと頭へ手をやると、頭に髪が一本もございませぬから、むツとしたお百姓、『床屋さん、何といふお前さんはうつけ者だアね。わしを起す筈の所を間違へて、何で坊様起しただ！』

清原ひとし畫



占ひの殿樣

新柳亭斜月



當今の華族樣と違ひまして、昔のお大名といふものは、下々の事はサッパりお分りにならなかつたもので、俗に大名馬鹿などと申しますが、御家來衆が寄つて集つて馬鹿にこしらへ上げてしまつたやうなもので。あるお大名がお物見から頻りに往來を見下してお在になると、丁度お物見下の處で町人が二人。

○『濟みませんが、一寸火をお貸しなすつて』

△『さアお點けなさい』

煙草の火を借りてゐる處を御覽になつて、殿樣が不思議さうに、

殿『これア三太夫、町人といふものは妙な事をするなう。一ぷくの煙草を二人で喫んでをる』

と仰しやつたといふが、斯ういふ方が多かつたやうで。併しどうかすると、種々下情に通じた殿樣がありまして、頻りに洒落などを仰しやる。かういふ方になると、退屈凌ぎに種々惡戯などをなさるから、家來は閉口をします。

殿『これ〳〵金彌』金『ハ、ッ』

殿『先代が好んだので、當家には大分觀相の道具がある。予も少々修行いたしたから、金彌、其方の人相を見て遣はさう』

金『これは恐れ入り奉ります』

殿『何も恐れ入る事はない。前へ進め。もそつと前へ進め。面を上げえ』

天眼鏡を取上げて、頻りに金彌の面を御覽になつてをりましたが、

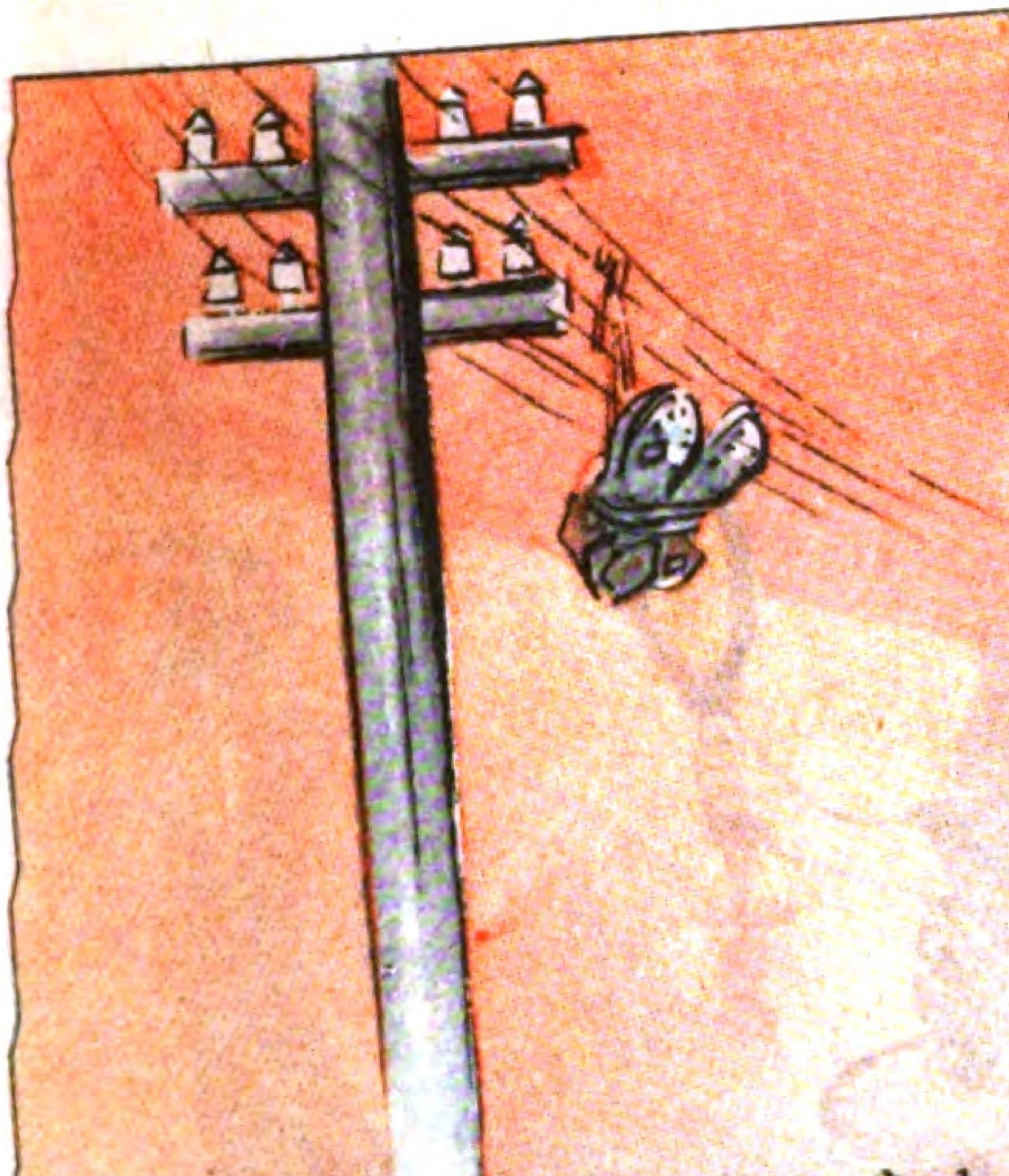


殿『ウム、金彌、其方には大層喜びの相が出てをる』
金『へエ』
殿『これはどうも好い相ぢや。喜び事があるぞ』
金『それは有難い事にございます』
殿『近々其方に加増があるな』
金『私に御加増……どうも有難う存じます。御加増は何日頃にございませうか』
殿『左様、來月の一日頃ぢやな』
金『有難い事にございます』
金彌は喜んだ。トをなさるのが殿様、御加増をなさるのが殿様、これは外れッこはない。金『誠に有難き仕合せ、早速立歸りまして、親共はじめ親族朋友をも喜ばせまする事でございます』
殿『これ〳〵待て〳〵、左様に喜ぶな、まだ觀て遣はす處がある』
金『ハッ』
殿『喜び事もあるに相違ないが、又災難が見える』 金『へーえ、如何な災難で』
殿『來月の一日に加増にはなるが、二日に門前拂ひになる』

的場朝二畫

デンポウ

竹廼家雀



○『太郎作どん、何を考へてゐるだ』太『何の、今東京へ行つてゐる悴の所から、デンポウといふものが來ただ』○『何だね、デンポウといふのは……』太『私も分らないから、村長様の所さ行つて聞いたら、何でも往來に柱が立つてゐて、それに針金が張つてあるだんべえ、あの針金を字が傳つて來るだとよ』○『はてね、字が針金を傳つて來るかね、やつぱり切支丹の魔法だんべえ』太『さうかも知んねえ』○『何と書いてあつた』太『靴買ふ至急金送れといふことが書いてあるだ。金を送るべえ思ふだが、どうしたらよからうと思つて考へてゐるだ』○『それだつたら、東京からあの針金を傳つて來たのだから、此方もあの針金にのせて送つたらよからう』太『成程、お前さま智慧があるだね』○『あるともさ。乃公の智慧のあることを今知つただか。楠正成様が來ようと、眞田幸村様が來ようと、乃公には敵はねえだ』太『そいつは豪儀だ。何しろ、いゝことを聞いただ。それでは直ぐにあの針金で送ることにしべえ……。だが待てよ。金をあんな所へぶら下げて置いて取られてしまふといけねえ、靴を買つて、ぶら下げて置いてやるべえ』と、親父さん、新しい靴を買つて來て、紐でいはひて、電信柱へのぼつて、針金へ其の靴をぶら下げて置きました。

ところが、惡い奴があるもので、そこを通りかゝつた二人の若い者。甲『オイ、あれを見ろ、靴がぶら下がつてゐるぜ』乙『やア新らしい靴だね』甲『有難い。丁度おれの靴が惡くなつた所だ。あれと取り替へつこをしてやらう』電信柱へのぼつて行つて、其の靴を下ろして、古い方の靴を紐でしばつて、元の通りに針金へぶら下げて置きました。

そんなことは知りませぬから、あくる朝、親父さん來て見ると、古い靴がぶら下がつてゐる。太『アッ、もう悴の所へ新しいのが届いて、古いのが向ふから返つて來た』



谷脇素文畫

原稿募集

◇子供に聞かせたい話◇

こんな話は是非子供達に聞かせたいとお考へのものを、少年倶樂部を通じて、全日本の少年達に御發表下さるやうお願ひいたします。感心な少年の實話、感激感動の事實談、科學の新知識、少年常識物語、冒險探險實話、洒落頓智物語、名人神技物語、その地方で評判の珍談奇談……この他いろ〳〵とお持ち合せの事と思ひます。

明るく面白く爲になる雜誌を作つて、少年達を立派な日本人に育てあげたいといふのが、少年倶樂部の大念願です。日本の少年達の爲めに是非御力添へを頂きたく、御投稿を切望いたします。

長さ　四百字詰原稿用紙　四枚以內。

程度　少年倶樂部の讀者、即ち尋常四五年生から中等學校一二三年生までによく解る程度。

〆切　九月三十日。

宛先　東京市本郷駒込、少年倶樂部編輯局（必ず「子供に聞かせたい話應募原稿」と朱書のこと。原稿にも住所姓名を御明記願ひます）

發表　少年倶樂部十二月號。

賞金　掲載の分に對し金貳拾圓宛、佳作篇に對し金五圓宛贈呈。

少年倶樂部編輯局



胃腸衰弱者を救ふ新榮養劑の話

病氣によつて榮養劑にも適不適があります。胃腸の弱い人や食慾のない人には酵素榮養劑が適します、それに高價なものは連用に適しません。

一記者

榮養學の近頃の進歩はまことに目覺しいもので、わが國立榮養研究所長、佐伯博士は『榮養上の手段によつて、生物の生活現象を構成する各種の機能を一つ〳〵自由に矯正、助長、改變することが出來る』と斷言せられました。これはつまり榮養素の攝り方によつて、體質の改善はもとより

大概の病氣は癒せる

といふ意味であります。

それで病人や身體の弱い人が、只榮養劑や滋養物でありさへすれば何でも構はず攝るといふのは、舊い時代おくれのやり方で、今日では病氣の原因と性質をきはめ、それに適合した榮養劑を選ぶのが合理的であります。

例へばヴイタミンBの缺乏からは脚氣が起り、同じくAが缺乏すれば鳥目となり、結核に罹り易くなりますから、それらの病氣にはそれ〳〵缺乏してゐる榮養素を與へなければなりません。これがもし選擇を誤りますと

病氣に效がない

ばかりでなく、却つて害となることが屢〻あります。例へば腎臟病には蛋白質やエキス分が惡いため、アミノ酸製劑や肉汁を服用すると、病勢が增惡しますし、胃腸の惡いものが鐵劑や肝油などを服用しますと、下痢や食慾不振が一層甚しくなることがあります。

今日榮養劑と名のつくものは隨分澤山ありますが、これを服んでみて案外豫期したほどの効果がなく、失望を經驗した方は尠くありますまい。それ〳〵專門家が創られたにも拘らず、どうしてそんなに効かない事があるかと、甚だ不審でありますが、それは從來の榮養劑の成分が餘りにも片寄り過ぎてゐて、生體一般の完全な榮養に適しないためもあります。

例へばヌクレインは活細胞の核を構成する貴重の榮養分だからと云つて

ヌクレインばかり飲んで

も、ヌクレインだけが不足した病人には効くが、一般の衰弱者には何の役にも立ちません。丁度脚氣だけの患者はヴイタミンBを服用すれば癒るが、胃腸とか其他の隨伴症を伴つた脚氣には、ヴイタミンBのみでは治らぬといふ理由と同一です。

また、も一つの重大な缺點は、大概の病人は胃腸の衰弱を伴つてゐるため、榮養分ばかりいくら立派でも、消化、吸收する力がないので、たゞ

腹の中を素通りする

だけといふ結果に終ることが澤山あります。

ところが榮養學の進歩は、つひに右の缺陷を救ふ立派な榮養劑を生み出しました。しか

もそれがわが榮養學界の耆宿で、本誌上でもお馴染の深い、東京帝國大學名譽教授澤村眞博士の苦心によつて成就せられましたのは、まことに會心の極みであります。

不老長生の效がある

博士が發見の動機は、獨逸に昔からとして珍重せられたヘーフエといふ一種の黴菌があります。最近各國の學者によつて研究せられました結果、それに含まれてゐる榮養素は人體構成に必要なあらゆる有效成分を網羅してゐることが解りました。即ち精肉や牛乳等に含まれてゐると同等の優良な蛋白質、それが一段消化された形となつてペプトンやアミノ酸、消化容易な中性脂肪、腦神經に特效あるフイチン、レチチン等の有機性の燐酸、細胞の新生に必要なヌクレイン、牡蠣や鮑の有效成分なるグリコーゲン、それからヴイタミンにはA、B、D、E等があり、就中脚氣の特效成分たるBは、

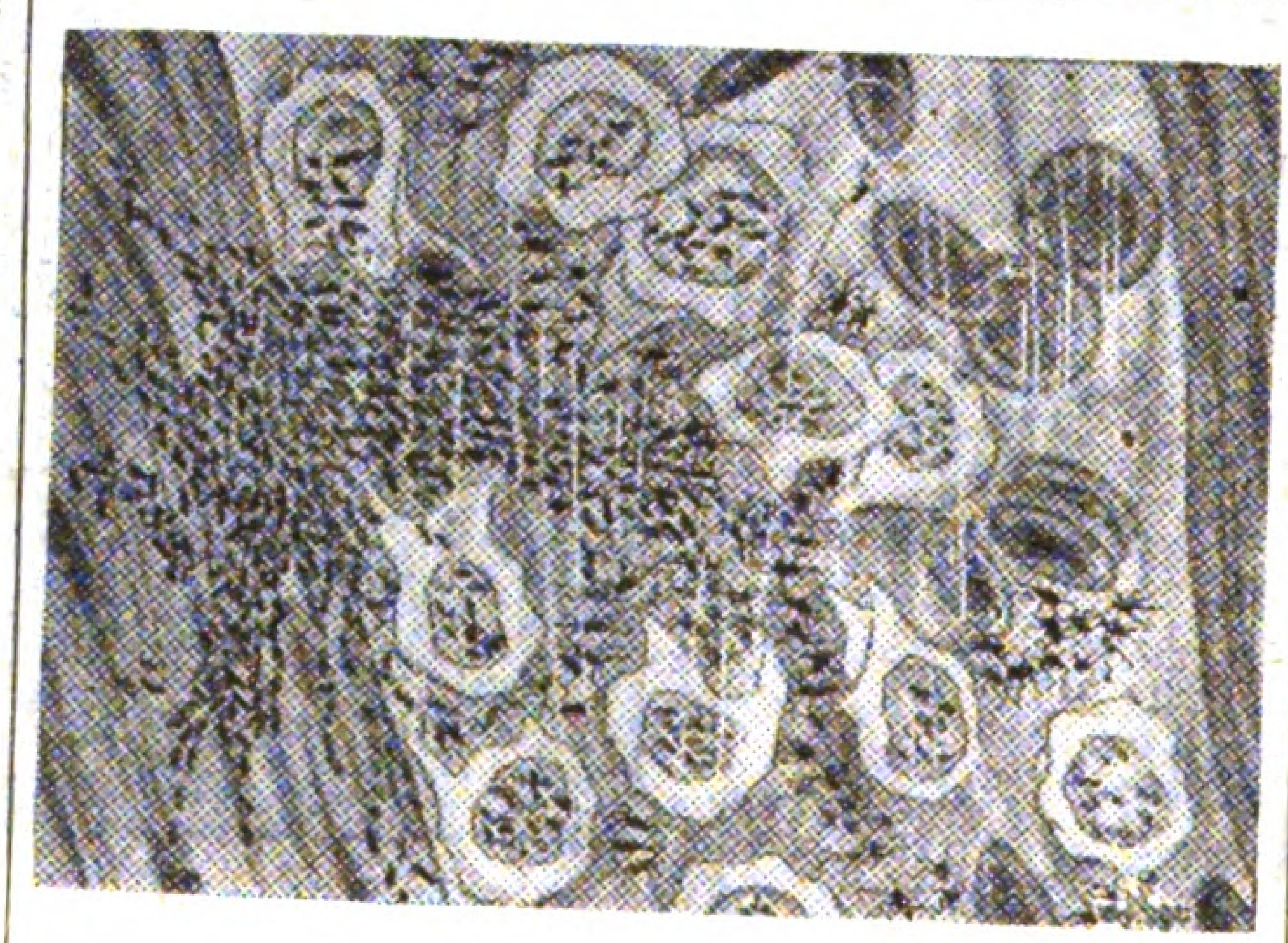
生物界で第一の含有量

で、遠く專門の脚氣藥を凌駕して居ります。

殊にもつとも價値の多いのは生命の原素ともいふべき各種の活性酵素を澤山含んでゐて膵臓ホルモンなるインシユリンやヴイタミン等と相俟つて、非常に胃腸の機能を旺盛にし食慾をすゝめ、消化を促す作用が強大であることであります。

奮闘する白血球

これは人間の血管の中に侵入したチフス菌を白血球があたかも一箇の生物のやうに活動して、旺んに自分の體内に呑込み、殺してゐる有樣を擴大して示したものです。このやうに白血球がチフス菌のみならず、結核菌其他の病原菌を捕食する作用を白血球貪食作用といつて、人間の自然に備はる病氣治癒力でありますがヘーフエを服用するとこの作用が非常に増大することが學者によつて報告されてゐます。



澤村博士はこのやうなすぐれた效果をもつてゐるヘーフエの全成分を巧みに製劑化し、これに米の胚芽から、弱い

胃腸に有害な纖維

を除き、有效成分のみを抽出したものを併せ

我國に、唯一の酵素榮養劑を完成せられました。**酵素榮養劑とは榮養劑であつて消化劑の役目もする、即ち榮養と治療の二重作用を持つといふ意味に當ります。**本劑は米胚芽と酵母の『わかもと』といつて、本誌はじめ、婦人倶樂部其他の大新聞雜誌で色々の奇蹟ともいふべき治療成績を報道せられてゐます。

實驗報告はすでに二千を越えて居りますがその應用の範圍は極めて廣く、**胃アトニー、胃擴張、胃酸過多症、胃潰瘍、急性慢性の胃腸加答兒、常習便秘、乳幼兒消化不良、綠便、などの主なる胃腸の障碍はもとより、結核、肋膜炎、腹膜炎、カリエス、神經衰弱、脚氣等に用ひて、病苦から健康へ、再生の喜びに浴した人々は實に數へ切れません。**

さうしてこの樣な大家の一大發見藥が、一ケ月一圓六十錢といふ至廉さで、一般大衆の健康増進を目的とした『榮養と育兒の會』から發賣されたことは、社會に一大衝動を與へ各方面から非常に感謝されて居ります。

米胚芽と酵母の『わかもと』は本社代理部でお取次す、價格は粉末一月分一圓六十錢、三月分徳用四圓五十錢、粉末最大瓶家庭徳用八圓五十錢、錠劑二三〇錠入一圓六十錢、大瓶八〇〇錠入五圓、送料内地十二錢海外四十五錢、東京本郷駒込、講談社代理部（振替東京六六二九番）か、發賣元、東京市芝公園十一號地子號『榮養と育兒の會』（振替東京壹七〇〇番）へ御送金次第急送します。

文覺上人と蕨

侯爵　小村欣一



小村欣一侯

煩惱地獄に墜ちて、過つて自分の愛する袈裟御前を殺した北面の武士遠藤盛遠は、そゞろ浮世を歎じて、佛門に入り、修行錬磨の後名僧文覺上人となつた。

文覺は、僧生活に入つても、一個の熱情家であつたことは、種々の古文書に散見するところである。

壇の浦にて、平家沒落の後、小松の三位の

是だけは知つて置きたい

○西村伊作

船車の中の禮儀についてはよく言はれて居ますが、今でもなか〳〵改まつてゐない樣です。特に心得べきは身體から色々な音を出すことです。會食中に汁を音を立てゝすすつたり、口をペチヤペチヤ鳴らしたり、ゲツプをしたり、洗面の時に舌こきを使つてゲー〳〵と家中ひゞく音を立てたりさう言ふ無作法のないやう心得べきだと思ひます。心得て居ない爲に日本人から笑はれる位のことはかまはないとしても、不作法だと、外國人から笑はれるのみならず輕蔑されるのは堪へ難い不愉快で、國の不幸です。

○大橋圖書館長　坪谷水哉

一、洋食の場合に、スープの次の魚肉には、鋼鐵のナイフとホークでは味を損じやすいので、特に

中將維盛の北の方は、若君六代御前と姫君とをつれ、他に乳母女房達と一緒に、京都の嵯峨、大覺寺といふ山寺の北の菖蒲谷といふ所にかくれてゐた。

その頃、鎌倉の頼朝は、平家の子孫と思はるゝ者は、男の子は一人も殘さず殺して仕舞ふ爲に、代官として北條四郎時政を彼地に遣はしてゐた。

平家の嫡々である六代御前が菖蒲谷にかくれてゐることを、はしたない女の告口で知つた北條時政は、すぐ家來を引具して菖蒲谷に赴き六代御前を六波羅に引立てたのである。

六代御前はその頃、年十二歳、いたいけな年配である。しかも、六波羅に連れて行かれた以上、いつ首を斬られるか、明日をも知れぬ露の生命である。

○

その頃、高雄といふ山寺の住職をしてゐた文覺は、これを聞くと、すぐその足で六波羅に驅けて行き、北條時政に會つて六代御前に逢はして貰つた。

六代御前は、二重織物の直垂に、黒木の數珠を手にぬき入れて、おとなしく坐つてゐたが、みめかたち優しく、女の子のやうに美しい少年であつた。

文覺は、六代御前を見ると、この人を殺させてはならぬといふ人間愛が油然として起つて來た。すぐ自分は鎌倉に行つて、頼朝に許しを乞ふから二十日の間、猶豫を貰ひたいと北條に頼んだのであつた。

文覺はそれから早馬で鎌倉に馳せた。頼朝はきかない。それでも熱心に頼朝に頼み、那須野の狩場にまで頼朝の後をついて廻つて六代御前を許して貰ひたいと頼み込んだのであつた。

○

一方、京都では、二十日を過ぎたけれども鎌倉の文覺の方からは何の便りもない。北條はあまり時を過しても鎌倉の咎めを受けてはならないと、いよ／＼鎌倉に下ることにきめ

別な形の魚肉用ナイフとホークを附てあるのにそれを用ひずして、普通のナイフ等を用ひる人々を多く見受けます。是は折角料理方の注意を無視し、併せて自分の無識を暴露して恥を知らぬことになる故、改める樣にしたいと思ふ。

○　青柳篤恒

朝な夕なの往き來に、自身のことばかりでなく、今少し他人のことも考へてくれる樣にしては…………と思ふことが、度々あります。

電車の中の座席の整理――ドッカリと坐りこんだり、横を向いてゐたりしてゐるのが、それです。他人にも不愉快な思ひをさせ、自身も沒常識漢として笑はれます。またそれを知りつゝ、注意もしない車掌に至つては、驚き入ります。公私ともに、義務を完全に果すほど、愉快なものはありません。

○　武田鶯塘

一、日本人は他人の家を訪問する

て、六代御前を途中で殺すことに心を決めたのであつた。

四の宮河原をすぎ、關山を打ち過ぎ、大津、粟津ヶ原も過ぎ、駿河の千本松原といふ所でいよ〳〵六代御前の乘つてゐる御輿を下させて、因果を含めて首を斬らうとした。

狩野工藤三郎親俊といふ侍が斬手に選ばれた。彼は刀を拔いて、いざ六代御前の後ろに立つたが、あまりの無慙さに斬ることが出來ない。

『拙者は迚も出來申さず、他人に仰せつけ下され。』と言つて辭退した。

他の侍が何人も選ばれたが、何れの武士も斬れない。昔の武士も、恁ういふ時には殊の他人情があつたやうである。



さうして、誰彼と斬手を選んでゐる中に、遠くの方から、墨染の衣を着けたる一人の僧が、月毛の馬に打乘つて、笠を振り〳〵驅けて來た。

文覺である。彼は、賴朝の許し狀を持つて來たのである。北條時政は、賴朝の許し狀と判とを檢分して、賴朝のものに違ひないとたしかめると、

『神秘でござる。』と言つて六代御前を許したのであつた。文覺は、六代御前を母に逢はせる爲に、それから夜を日についで京都に急ぎ歸つた。

○

文覺の恁うした幼きもの、いたいけなものに對する愛は、人間に對すると同じやうに、植物にも及んだと言はれてゐる。

文覺は、相州三浦郡の

のにとかく時間をかまはない惡習があります。夜分晩くとか、食時の時間は愼しむべきだらうと思ひます。

二、公園などに行きまして煙草を飲まうとマッチを出しかけた時、隣りに腰かけた人が親切に出して與れました。その場合自分のマッチを出さないのが好いと思ひます。

○　久布白　落實

交通の激しい昨今是非皆で心得たいこと、

一、停車場は、都會も地方も、國の玄關、何とかしていつでも綺麗にして置き度い。

一、汽車の中をブタ小屋に仕度くない

汽車は旅行中の客座敷。。。

この氣持ちで氣をつけ度い。

○　井箆　節三

私は神社の前を通る時には、たとへ電車や汽車に乘つてゐて

神武寺といふ山寺の住職をしてゐた時の話である。(神武寺は今も逗子の名勝地になつてゐる。)

この山寺には、いつも春先には澤山の蕨が芽生えるのであるが、これは文覺がこの寺の住職の頃、納所たちがいつも春先の食膳に蕨の料理を出すので、

『これは何處から持つて來た。』ときいた。

『この山にいくらも芽生えて居ります。』と答へると、

『生ひ立つ若芽をとるのは無慙な行ひである。生ひのびるまゝにさせよ。』と弟子達を叱つたと言ふことである。

その爲か、いつも神武寺の山裾には蕨が澤山に出來る。逗子に住んでゐた德富蘆花は、小說『不如歸』の中に、伊香保の山の蕨狩のことを書いてゐるが、伊香保まで行かずとも、逗子でも、この神武寺まで來れば佳い蕨狩が出來るのである。



○

文覺が六代御前の爲に東西遠路を早馬で驅馳したのも、六代御前が平家の嫡流であるし、高貴な身分であるからといふ理由からよりも、これから生ひ立つ若芽の如きいたいけなものを殺すに忍びなかつたためであると見るべきであらうと思ふ。（終）

○

片膝は寢た子にかして蕨かな　梅雪

こゝかしこ親鳥のなく燒野哉　湛熊

母の手で仕立てゝ着よく袷哉　成續

父君に嫁見せ申す寒さかな（墓參）　子規

必ず禮を捧げます。また神社や佛閣に限らず、人の家にしても、すべて門内では帽子を取ることにして居ります。宮城や御所の前を通る時に脫帽すべきは勿論であります。佛教やキリスト敎の人も寺院や教會の前では相當の禮を捧ぐべきだと思ひます。

○　鳩山春子

應接室又は食堂に於て饗し又は食するに當りテーブルの上に手を置くべからざる事、食事するに可成音を發せぬ事。舌打ちをせぬ事。銀のナイフとフオークは魚の時に用ふる事。食事終りたらばナイフとフオークを揃へて皿の一端に置く事位は何人も心得ねばなりません。

淑女に交はることの稀にして、接待の爲めに雇はれたる女性にのみ最も多く接する日本男子は、殊に此點に注意することが極めて必要であります。



キング講座

禿と白髪の話

醫學博士　賀川哲夫

禿の惱みと誇り

世にも哀れを止むるものは、頭蓋骨を包む皮膚の上に生えてゐるべき頭髪が三分の一乃至三分の二程脱けてしまつて、殘黨の三分の二乃至三分の一を率ゐてその禿げた部分を隱さうとする一種特別の心理狀態であらう。

彼等は一斉に百人が百人まで各自の個性を發揮して頭腦の天邊に獨特の美容術を施す。恰も緣日の夜店のステツキのやうにその一本々々を一糸亂れず整然と梳いて、或は右側から或は左側から、時としては後頭部の遙か縁に殘つてゐる林を延長して天邊の禿山を覆ひ隱さうとする。彼等の苦心は傍の見る目も痛痛しいにも拘らず、隱すより現はるゝは無しの原則に彼等は絶えず惱まされてゐる。

しかし世の禿頭者よ、これを以て直ちに悲觀するには當らぬ。嘗て英國の或る有名な裁判官が『自分は四十年の永い在職中に禿頭の重犯人に未だ逢つたことがない』と告白したやうに、禿頭者には概して善人が多い。その上禿頭者は外觀愛嬌ある如く心も愛嬌あることは萬人がこれを認めてゐる。

或年、米國のクリブランド市に共勵會の大會が開かれた時、幹事ショウ氏が演壇に立つや否や、數千の青年男女が一斉に笑ひを爆發させた。それはショウ氏がひどい禿頭だつたからだ。

するとショウ氏は突然、

『諸君、女に口髭の無い譯を知つてゐますか』

と途方もないことを叫んだ。この不意の質問に遇つて流石の滿堂が靜まると、氏はやをら口を開いて、

『女に口髭が無いのは、女といふものはいつも口を過度に使ふからです。それと同じやうに、私の頭が禿げたのは私が共勵會の爲めに熱中し過ぎて毎日頭を使つたからであります』

とやつて又大笑をさせた。この話などは禿頭の愛嬌を遺憾なく發揮した好實例といふべきであらう。

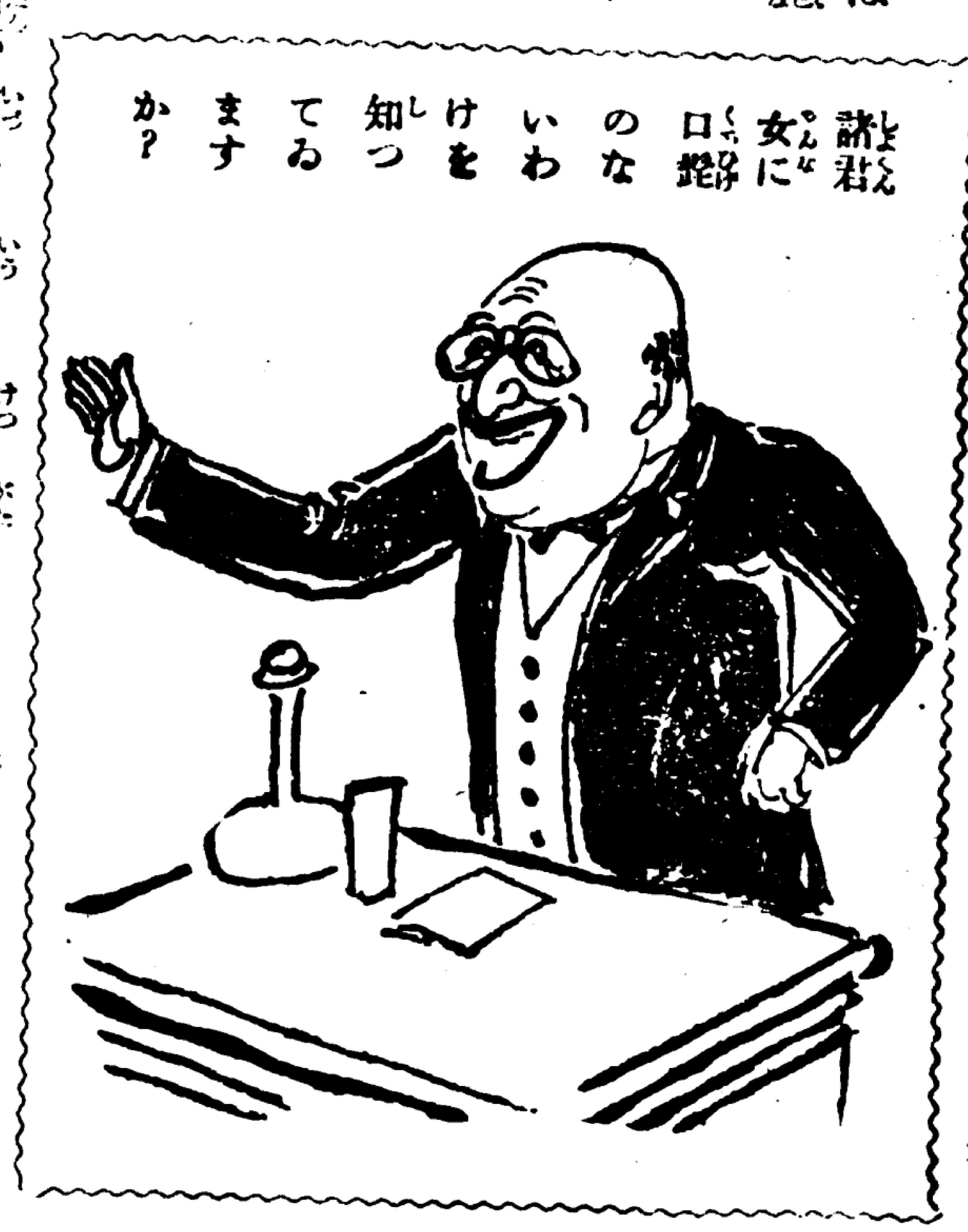
造物主の皮肉な悪戯

ところで人間年を取ると、頭が禿げる以外に今一つ、頭髪の白變に見舞はれる。人生四十、ゴマ鹽になりかけると、誰しも氣にかゝつて來る。しかし禿頭に比すれば白髪の人は悩みが深刻でない。

禿頭は愛嬌的であるが、白髪は上品である。年長じて雪白で綺麗なのは、何となく威厳さへ加はつてよいものである。それに白髪は長壽の相を表はし、高砂の尉姥は白髪だ。『貴方百まで私や九十九まで、共にしらがの生えるまで―』などいふ歌もある。

頭禿は活動的であり、白髪は思索的である。禿頭に大政治家大實業家多く、白髪に大宗教家大藝術家が多い。禿頭と白髪――一長一短、何れを優とも決し難い。

たゞ玆に最も同情に價するものは、若禿げ、若白髪といつて、まだ二十代、三十代の若さに於て既に堂々と禿げたり、矢鱈に頭髪が白變する人だ。老齢者に於て頭が禿げたり乃至は白髪になることはどうで免れられぬ生理的現象であるから諦めもつかうが、若禿げ若白髪に至つては、他人から年齢を不當に評價されるだけでも少からぬ悩みの種と云はねばならぬ。



それにしてもまだ白髪の場合は、近代の進歩した白髪染めで胡麻化しもつくが、男の若禿げばかりはまさか女のやうに鬘を被る譯にもゆかず、始末のつけやうがない。それにまた白髪は男よりも女に早く來るにも拘らず禿頭に限つて男が女より多く見舞はれるなど、自然の法則も考へて見れば皮肉に出來てゐる。

そこで出來ることなら禿頭と白髪の正體を掴んで、これを豫防したい人の參考に供し併せて一般世人に對し頭髪への注意を喚起することは決して無駄ではなからう。

何故頭が禿げるか

一體人間が老齢になると頭が禿げたり、白髪になつたりするのはどういふ譯か。

先づ禿頭といふ現象であるが、これは毛髪に一定の壽命があることと、老齢による皮膚の生理的機能の衰退から來るのである。

即ち毛髪にはそれぞれ壽命があつて、例へば頭部の生え際の短い毛は四ケ月乃至九ケ月、頭髪は二年乃至四年、睫毛は百日乃至百五十日である。ところが年を取ると皮膚が弛んで皺が出

來、濕り氣が無くなる。これは血液の供給が不充分なためで、延いては毛髮を養ふ血管も充分な養分を運んで來ることが出來ない譯である。皮膚の生理的機能の衰退といつたのはこのことであつて、その爲めに毛髮新生の力が著しく衰へる。

かゝる狀態に置かれてゐるから、頭髮が二年乃至四年に限られた壽命に達して段々脫けて行くのに、これを新しい毛髮によつて補充が出來なくなり、その上折角再生して來る毛髮は漸次纖弱で壽命も短いために遂に禿げるに至るのである。

それから若禿げの原因はどうかといふに、これは多く遺傳から來る。或る一家族中に若禿げの人を數人見受けるなどその證據である。尤も老人の場合に於てもその原因は主として遺傳から來るのである。或る人種、或る家族に禿頭老人が多いのはそのためである。

今一つ若禿げの原因で注意すべきは、頭皮の不衞生から來るものである。即ち頭髮や頭皮を不潔にしたり、毛根を傷めたり、帽子で常に頭を密包したり、或は榮養を不充分にしたりして、結局人爲的に禿頭を早めるのである。だから單に不衞生に因る禿頭ならば誰でも心掛次第で豫防が出來るのである。

毛生藥は何處まで效くか



ところで一旦禿げた頭に再び毛髮が生えないものであらうか。殊に毛生藥はどこまで效くものかに就ては一通りの說明を試みなければならぬ。

一體毛髮は皮膚の表皮が變化したもので、血管も神經もなく、爪と同樣に切つても痛みを感じない。毛髮は毛根と毛幹と毛尖とより成つてゐるが、毛根は表皮に包まれたまゝ稍深く皮膚の毛乳頭に密着して、そこから毛幹が斜めに延び毛尖に至つて終つてゐる。

毛髮が生えたり、また生えた毛髮の毛根に養分を與へてこれを生長せしめるのは一に乳頭の作用であるからなのだ。即ち毛乳頭の所に生ずる新細胞が毛髮に變じて皮膚面に伸長するのである。

曩に毛髮に一定の壽命があると云つたが、毛髮は壽命が盡きると自然に毛根は毛乳頭から離れて脫け落ちる。併し、毛乳頭は殘つてゐるからこゝから又新しい毛髮が生えて行くのだ。所謂「脫け替り」といふのはこれである。普通の健康體で頭髮の脫毛數は一日平均十八歲から二十六歲までは三十本乃至百本、五十歲から六十歲までは百二十本以上であるが、こんなに脫けても禿げないのは次から次へ毛髮が新生するからである。

また時に毛を抜いても禿げないのは、毛を抜いただけでは毛根までは取れるが、毛乳頭は何等影響されず、其處からまた新たに毛髪が發生して來るからである。

ところが右と少し趣を異にし、大火傷をしたとか、大きな腫物が出來た等によつて、毛根だけでなく肝腎の毛乳頭を破壞されたり、或は老衰や頭皮の病氣によつて、毛乳頭が本來の作用をしなくなつたのでは、幾ら藻掻いても再び毛髪が生える譯はなく、如何に卓効力ある毛生藥も些の効果をも顯はすことは出來ぬ。而し、毛乳頭がある場合は、毛生藥は刺戟と榮養分を供するから或程度の効果はある。

厄介な禿頭病の色々

禿頭の原因は右の如く單純ではなく、厄介なことはこの外に尚ほ禿頭病といふ一種特別の病氣がある。脂漏性脱毛症と圓形脱毛症が即ちそれである。

脂漏性脱毛症とは雲脂の多い人に往々見る病氣である。松の皮が剝げるのと同じ理で、濃厚な皮脂が表皮から剝脱する角層細胞と混合して粃糠のやうな雲脂となり、非常な搔痒を生じ毛髪に害を與へて遂に頭が禿げるのである。要するに頭髪に必要以上の皮脂分泌があるから起る病氣である。



圓形脱毛症は所謂臺灣坊主で、主として神經障害から來る。頭部の一局部或は數ヶ所に五十錢銀貨大の圓形の禿が生じ、それが漸次擴大して全部に及ぶのである。

この外梅毒による禿頭がある。これは頭部の後部に宛も指頭で捺したやうな楕圓形の禿が澤山に發生するのである。これは第二期梅毒の一徴候として診斷上に重要な所見である。

ところで生理的に頭が禿げる場合は、鬚髯などは却て増殖するが、病氣の場合は眉毛やその他の毛髪も共に脱け落ちることがある。

一夜で白髪になつた話

次に白髪はどういふ譯で出來るかと云ふに、これに就ては、心配の餘り一夜の内に頭髪が白變したと云ふことは隨分聞くから、神經に關係あることは事實である。

ルイ十六世の王妃が死刑宣告を受けた所、一晩中苦悶した結果翌日俄然白髪になつたのは有名な話である。

また佛國の或部會に於て一家屋が突然倒壞した際、その家の娘が辛うじて一命を全うしたが、その翌日に至り頭髪のみか睫

毛までも白變したと傳へられてゐる。

東郷元帥が日露戰役凱旋の時は、出征の時に比べて白髪が著しく增してゐたが、これも日本海大海戰を初め戰時中非常に苦心された結果である。

併し、白髪が出來るのは右の如く過度の心勞からばかり來るのではない。一體毛髪が黑いのは毛の養分中に色素があるからだが、老齢になると養分の供給が不充分になるにつれ毛髪の色素も段段減じ、その上色素の代りに毛髪の細胞內に空氣が侵入してそれが光線を反射するので、白く見えるのである。だから初めは灰白色を呈して胡麻鹽であるが、それが愈よ嵩じると遂に銀線を植ゑたやうに雪白となるのである。普通に老人の白髪は大抵これである。

また若白髪は老衰による白變と殆ど似た經過を辿るが、その主なる原因は、頭皮の榮養障害や遺傳と、前述した過度の心勞などである。一旦白髪となつては染色料で黑染するのが最も簡單な方策であるが、併し根本的ではない。病因を明かにしてそれに對する相當の方法を講ずれば根本的に治療することが出來る。



禿と白髪を防ぐには

さて最後に禿頭と白髪に對する豫防法であるが、兩者共にその原因が、殆ど共通であるから一方の豫防は直ちに他方の豫防にもなる。

その原因が似てゐるのに、人によつて禿げるのと白髪になるのと區別があるのは主として體質の相違から來ると見るの外ない。

豫防上第一に注意すべきことは、毛髪並に頭皮の愛護である。種々の不潔物は毛髪の發育上有害であるから、湯又は水でよくこれを洗ひ、頭皮と毛髪との表面を常に淸潔に保つことに努める。男は普通二三日に一回、女は一週乃至十日に一回洗ふのが適當である。洗つた後で油脂やポマードを適量塗るのはよいが、餘り多量に過ぎて頭髪內の通氣を惡くするのは宜しくない。

また毛根を傷めないことは禿頭の豫防に特に大切である。櫛の齒に餘り力を入れて梳いたり、ふけ取り香水や、ヘヤートニ

ツクなどを用ひて強い刺戟を與へるのは良くない。婦人が日本髪の結髪に際し根を強く引締めるのは感心出來ない。この爲に結髪禿といつて中老になると頭の天邊に鷄卵大の禿が出來る。雲脂は頭皮に慢性炎症がある證據であるから此の炎症を治療するのが第一の急務で、櫛で掻いたり、洗つたりしては、一時取れるけれども炎症は却つて重くなつて雲脂は益々ひどくなる。

なほ頭髪の手入れとして男は普通二週乃至四週に一回の散髪を行ふ。アイロンは今日非常に流行してゐるが、これが爲に毛髪の表面を包む角層が傷けられ、毛質は變化するから、毛の色が澁味を帶び、中斷されるやうになり、毛髪を甚しく損ずるものである。併しアイロンの熱度を適度にして巧に用ふれば左程の害はないものである。世間では散髪殊に毛を剃ると毛髪の發育を良くすると信じられてゐるが、成る程剃るために、毛根に刺戟を與へてその新陳代謝を促すから、毛髪の發育に幾らかの影響はあらうが、大局から觀れば大した影響はない。故に習慣に隨ひ幼児の頭髪を度々剃るのは廢めても一向差支へはない。

頭髪本來の使命は美容以外、頭腦に對し寒熱の刺戟を防ぎ、打撲を受けた際損傷を輕くする等、頭腦の保護を司るものであるから、これを常に剃つてゐることは寧ろ天理に背く所以である。

しかしこれらにも増して大事なことは、精神を常に爽快に持ち、萬事にクヨ〳〵せずいつも快活に暮すことだ。若々しい朗らかな心は顏面のみか頭髪にも表はれるものだ。

だから禿と白髪を防ぐ根本問題は、何としても心の持ち樣である。（終）



惜まれる死

高島米峰

不幸短命にして、未知數のまゝ死んでゆく人も少くない。壽長くして辱多しといふやうな、氣の毒な人も無いではない。個人的に言へば、一日でも餘計に生き延びて、この急テンポの時代、目まぐるしいほどに進歩し變化してゆく世相を、心ゆくまで見聞するといふことは、愉快なことであらう。しかし、又、十の人生を七まで生きて、誰からも彼からも、惜しんで惜しんで惜しみぬかれるといふ死に方は、如何にも華やかであつて、死に甲斐があるやうにも思はれる。

だからと言つて、自殺するものがあるならば、その愚を憐まざるを得ない。

眞實と愛

井上康文

子供を心から愛し、子供に僞はりをもたなければ、その子供は純情に、美しく賢く育つてゆく。一本の草花でも、その草花を愛して、心から手をかけてやれば、美しい立派な花を開く。仕事に對しても、凡てに對して、眞實と愛がなければならない。

登山家の言葉

戸川貞雄

山登りをするには、登る時には絶えず降りる場合の準備を心に怠らず、また降りる時には登る場合の準備を心に配つてゐなければならぬと、登山家の友達が語つたのを聞いた。これはなか〳〵味ふべき言葉である。

自ら娯む

薄田泣菫

明の文徴明は能書で聞えた人だつたが、字を作るに工夫に工夫を重ねて苟くもしなかつた。ある時卓に對ひ紙をのべて、頻に苦しんでゐるので、側にゐる人が訊いた事があつた。

『何をそんなにしてゐられます。』

『手紙を書いてゐるのだ。』
『手紙だつたら一寸走り書でもなすつたら……
……』
それを聞くと、文徴明は容を更めた。
『さうぢやない。自分はかうして滿足がゆくまで幾度か書き直す事によつて、自ら樂んでゐるのだ。他人が見て、どう思はうと、夫は問題ではないのだ。』

ガリレオを懷ふ

安成二郎

私達は、晝夜自轉して休まざる此の地球の上に生を託して居つて、少しもその事に氣がつかない。ガリレオが發見するまで、誰もそれを知らなかつた。時代の潮流も亦、地球の自轉の如く、抗すべからざる力を以て常に默々として推し移りつつあるが、人間は何時の時代に於ても、それを正確に理解し、判斷し、行動して來たと果して言ひ得られるであらうか。

今の日本が如何なる時代であり、如何に動きつつあるかに就いて、正しく斷言する一人のガリレオの無いのを私は寂しく思ふ。

青葉

三木露風

青葉の美は、花時にも勝る思ひがする。山の青葉、森の青葉は更なり、賤が家の木々の緑もよく、垣根の瑞木の如き、さゝやかなるものでさへ、よい感じがするのだ。殊に小鳥が來て、青葉の中をくぐつてゐるのは、情景の美を添へする。男性的の美を青葉にはなぼえしめるのである。人の知らない深山幽谷に覆ひかぶさつてゐるのは、殊に目覺むる心地がするではないか。洵に青葉の美は夏の華であると私は思ふ。

無題

濱田四郎

居常失敗せぬ樣に注意する事は處世の第一義と信ず。世には成功に急にして却つて失敗するものあり。石橋をたゝきつゝ渡るものに誤ちなし、誤ちなくして一生を過し得るとせばこれ以上の目出度事あるまじ。萬金の儲けを夢みるよりは、今日一錢の無駄遣ひをせぬ事也。

あの男

鹽野新次郎

春淺き一日、山陰線の三等車は鮨詰だつた。私の前に掛けた八字髭の肥つた男、鞄に一人前を占領させて他人禁制と悠々收つてゐると、『ちよつと御免やす』、商人らしい、髭は忌々しげに眉をよせたが、でも半人分程ゐざつた、鞄は其儘で。『濟みまへんな、大けに』。慇懃な商人は辛うじて尻の後半を掛け得た。突如！　髭が立上つた。と思ふと、窓外に向つてパチ〳〵、拍手、合掌、何やら言うて三拜した。森の上には赤い鳥居が見えてゐた。

釣技斧秋

佐藤惣之助

僕は釣りをもつて日本特有のスポーツにしたいと思つてゐる。秋日澄明、京濱間の水邊

に押出す釣者は一千人を算する。これを二派に分類して海鳥派と野猫派と觀る。海鳥派は船で飛ぶ。野猫派は所謂岡つ張り。この一日の競技は秋冬この上もないスポーツではないか。

窓のつゝじ

三宅やす子

亡き母が水をそゝいで育てた鉢植のつゝじが、いつか枯れたやうになつたのを、それでも捨てゝ他の花と植ゑ替へるのに忍びないで、二三年、枯木のやうな鉢植を庭の隅に置いてあつたが、去年から葉が出はじめ、ことしは蕾を持つて來た。

で、思ひ出したやうに、朝々水をやつて、私の部屋の窓にのせたら、赤い蕾が一つ、二つ、三つ、四つ、まあ九つも花が咲いた。

連日の梅雨で外にも出られない私の窓に、夏のつゝじが紅に笑つて、一しきり病と死の事許り考へたり、恐れたりして居た私に、『光、空氣、水』とさゝやいてくれるのである。

英雄と名花

中山久四郎

一年の好時節、櫻花の盛時に當りて聯想するのは、英雄と名花との類似である。英雄は猶名花の如し。花の美は爛漫の盛りに於て之を觀るべし。盛りを過ぎては名花も其美を誇ることが出來ない。英雄も其全盛的活動の時に於て之を觀るべし。其不運逆境になつた時之を批難するは酷評である。源九郎義經や楚の項羽やナポレオンの如き、其全盛と末路とには非常の相異がある。其人物評論は注意すべく、盛衰の多い現代人の評論も亦同樣と思ふ。

展覧會といふもの

中川紀元

展覧會は繪を批評的に見る場所で、鑑賞をする所ではない。展覧會が大きくなればなるに從つて、個々の作品に對する注意は散漫になる。好きな人とは他人を交へない四疊半でしんみり對坐するに限る。繪は手に取つて味ふのが本當だ。

昔々の銀座

小川芋錢

銀座を始めて見た時（明治十四年頃）都會と云ふものは奇麗な箱で、その箱の中で生きて蠢動して居るのが都會人だと云ふやうに思つた。眞夏の日の夕暮、瓦斯燈の點火夫が忙しく右往左往して居る煉瓦地は、撒水の溜に燈が映つて美しい、その上を走る圓太郎馬車も滑稽に面白い。街路樹の柳は炎熱の一日を凌いで埃に塗れた葉を振ひながら夕風に吹かれてゐる。その柳の根方に細竹を半圓に曲げて垣を作り胡瓜が一本植ゑてあつた、胡瓜は花を持つてゐた、丁稚が二つ程の子を背負ひながら如露で頻りに胡瓜に水をやつてゐた。

たしなみ

岡田三郎

或る婦人が、喫茶店をひらいた。彼女はほとんど世間周知のロマンスの持主である。勿論美貌の女性である。とりわけその二つの眼は清らかに澄んで、精神的の魅惑に輝いてゐると同時に、女性としての嬌艶をもたたへてゐる。

彼女の容姿もまた端麗で、客と相對して語る言葉も高き教養に培はれ、およそ尊敬の念をすら起さしめられる。その服裝も彼女の高き趣味を見せて、奥床しさに充ちてゐる。

が、私は何氣なしにテーブルの下に眼をやつた。そこに彼女の白足袋が、親指のところにあてたつぎがはがれ、色も鼠色に、かつ皺くちやになつてゐるのを見て、彼女に對するあらゆる尊敬も愛慕も、一瞬にして消え去るのを感じなければならなかつた。

途上

河井醉茗

途上に生活を思ひ、馬上に人生を思ふ。地上に人類を思ひ、石上に歴史を思ふ。山上に聖域を思ひ、湖上に女神を思ふ。船上に運命を思ひ、海上に自由を思ふ。車上に時代を思ひ、機上に人間を思ふ。枕上に山水を思ひ、床上に死を思ふ。

ある良人に

相馬泰三

賢い園藝家は、枝ぶりや花に見とれてばかりはゐないもんですよ。そのかはりに、とかくはびこりたがる周圍の雜草をとり除き、根や幹につく病氣や害蟲について細心の注意をします。わかりましたか、根や幹につく病氣や害蟲についてゞすよ、とかくにはびこりたがる周圍の雜草を取りのぞくことにですよ。

春來自花開

花園兼定

春が來れば、花が咲く。花が咲いてくれては困ると思つても、自然に花が咲いて了ふ。時候といふものには、かなはないし、「種」といふものほど不思議なものはない。人間は、これを、どうすることも出來ないのだ。胡瓜の種に、糸瓜の花は咲きはしない。糸瓜の種があれば、必然的に糸瓜の花が咲く。凡て因縁だ。

形式主義の説

中河與一

此頃「形式主義」といふものが流行してゐる。生活に於ても、何事に於ても、形式が最も大切だといふ主張である。

從來は形式といふものを極端に輕蔑して來た。然し現代では、益々形式といふものが重要視されつつある。

彼等は云つてゐる。『人が悲しいのは、悲しい心があるから悲しいのではなく、悲しい事實（形式）があるから悲しいのである』

彼等形式主義者は、心よりも事實を重んじる。

彼等は又云ふ『實際禮儀正しくしなければ、幾ら心で禮儀を考へてゐても、それは禮儀にはならない』

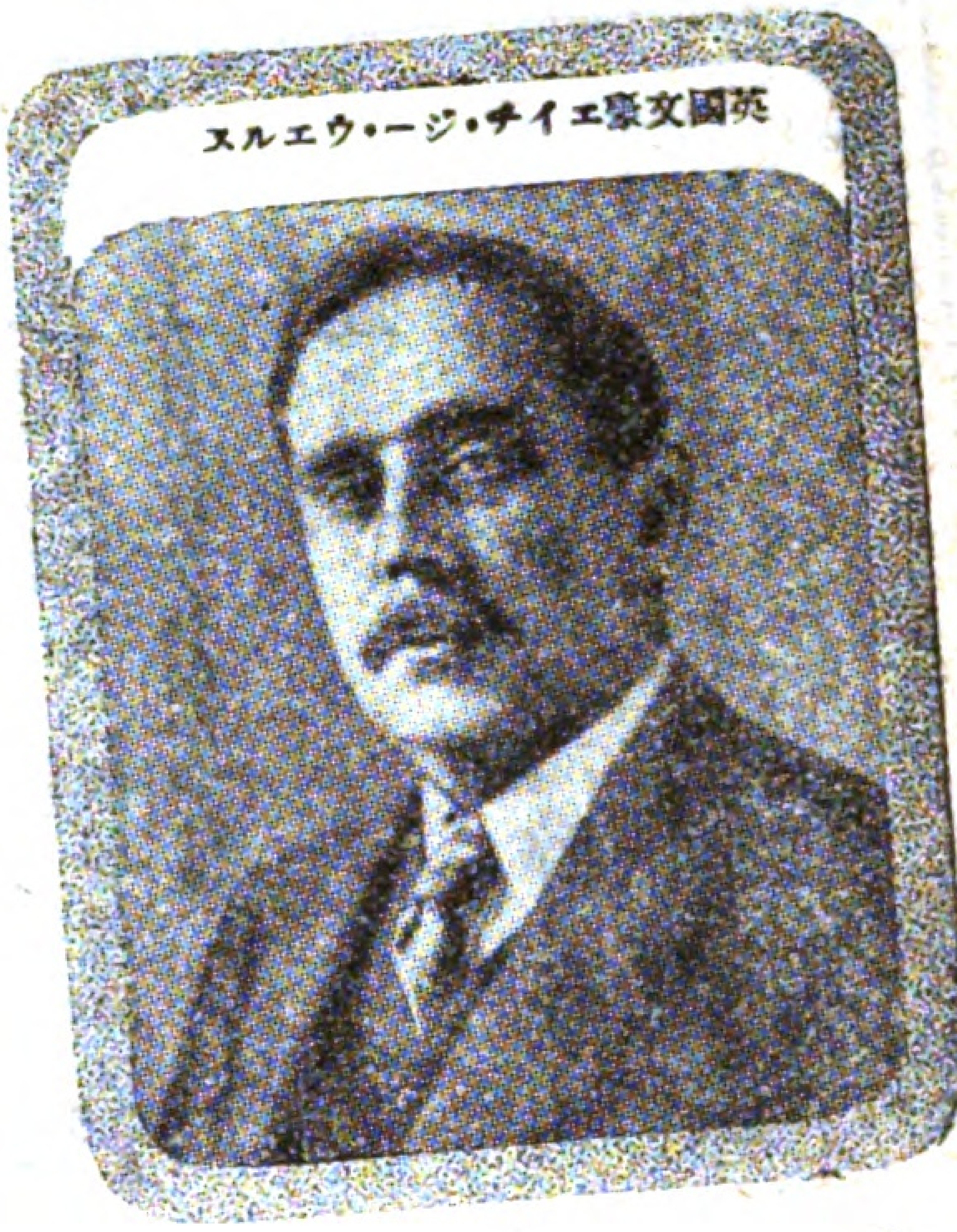
形式主義の主張にも、確かに一面の眞理がある事を吾々は理解しなければならない。

名作物語

ポリー君の歴史

鶴見祐輔

挿繪　橋本邦助


英國文豪エイチ・ジー・ウエルス

一

文藝の士といふものは、時代が生むものだ。だから偉大な時代には、きつと偉大な文藝家が現はれる。平安朝の全盛期に紫式部が現はれ、徳川の黄金時代に近松門左衛門が出た。英國でも、一番偉大な時代は、エリザベス女王の治世であつた。ゆゑに其の時代にシェークスピアーが出てゐる。

いま我々の生活してゐる二十世紀の初頭は、また不思議な時代である。必しも偉大と言はざるまでも、少くとも不思議な、今迄にない珍らしい時代だ。今日の我々の日常生活の豐富なる、我々の精神生活の波瀾に富める、到底これを今までのどの時代と較べても、較べものにならない程だ。ことに民衆一般の生活が、おしなべて向上したといふ點では、今までにないことだ。

それでは、かゝる前代未聞の時代は、どういふ文藝的天才の頭腦に反映して、どういふ作品が出てゐるか。

今日の生きてゐる文藝作家にして、かゝる民衆の脈搏に觸れてゐる人々を求めるならば、少くとも英語國民のうちに二人の天才がゐる。その一人は劇作家のバーナード・ショオで、もう一人は小說家のエーチ・ジー・ウェルズだ。

ショオはシェークスピア以來の大家として、其の位置はもう早や確定してゐる。しかし、小說家ウェルズの位置はまだそのやうに安定してはゐない。しかし私は、ウェルズは、ディケンズや、ユーゴーと同じやうに、後世の人々から永久に二十世紀初頭の時代を物語る天才として記憶せられるであらうと考へてゐる。

そのウェルズを、小說家として不朽にした名品が二つある。一つは、トノ・バンゲーで、いま一つが、このポリー君の歴史

である。私は、トノ・バンゲーを、雑誌「現代」に翻案したことがあるから、此處にポリー君の歴史を概説して、我々の生活してゐる現代世相を眺めてみよう。

二



ポリー君は、三十七のときまで、洋服屋をしてゐる。洋服屋といつても、裁縫師ではなくて、出來合ひの着物を店にならべて賣つて居るのだ。

英國の小さい町、フォッシバーンといふところだ。

その町も平凡、その商買も平凡、その生活も平凡、その主人公も平凡、その妻君も平凡、何もかも平凡づくめで、これといふ變つたことは何一つない。

たゞ世間は不景氣で、品物は賣れず、妻君の手料理がまづくて、ポリー君の胃腸は、しじうごろ〱鳴つてゐる。町の人々の交際は月並で、何一つ面白いことはない。そこで、ポリー君の顔は段々、蒼白くなつて、三十七といふのに、心細いことには、頭の毛が次第に拔けてきた。四十を越したら大分禿げてくるだらう。おまけに運動不足のため少し肥えてきた。おつつけは、でぶ〱なおやぢになるかも知れない。どう考へて見ても、世の中が面白くない。

つい妻君と喧嘩をする。そんな日

彼は、お客にも不愛相で、品物が賣れない。かうしてゐれば、胃病で死ぬか、不景氣で破產する外はない。つまらない世の中だ。

それが、三十七歳のときのポリー君の生活であつた。さうしてそれが、當時の大勢の英吉利の小商人の生活であつたのだ。

三

ところが回顧して見ると、ポリー君の青年時代は、そんな平凡なものではなかつたのだ。

彼は七歳にして母に別れ、よその家に預つて育てられ、小學校を出てから、着物屋の丁稚をしてゐたが、二十二のときに父親が死んだ。

死んで見ると、あとに現金三千五百五十圓といふものが、郵便貯金として殘つてゐた。

そこで、ポリー君の生涯が一轉したのだ。

若うして、三千五百五十圓の金持ちとなつたのであるから、彼はすつかり愉快になつてしまつた。

これで何をしよう？ 急ぐことはない。先づしばらく旅行でもして、悠々と人生の方針を考へよう。

そこで彼は、一臺の自轉車を買ひこんだ。今から三十年も前のことで、丁度英國では、自轉車の流行つたころだ。この自轉車に乘つて、二十二歳のポリー君が、身も心も輕く、春の英吉利の野邊を逍遙ひ歩く。野邊には若草が萌え、樹々には駒鳥が囀づつてゐる。

「愉快だ。人生は愉快だな。」

さう思つてポリー君は、毎晩、田舍の宿屋に旅裝を解き乍ら、獨り微笑むだ。彼の衣嚢のうちには近刊の小說など入つてゐた。

さうして、彼は獨身であつた。

獨身といへば、これから戀をしてもいゝのだ。親はないし、金はあるし、仕事は定まつてゐない自由の身の上だ。

ポリー君が、毎晩寢る前に、輕く口笛を吹きながら自分の顏を、鏡に映して、にこりとしたのも無理はない。彼は二十二であつたのだ。

四

ある夕方、女學校の柵の內と外とで、ポリー君と一人の少女とが、淡い戀をする。ポリー君は、ぞく／＼する程うれしかつた。

ところが、話は急轉直下する。

このポリー君に、叔母さんがあつて、この叔母さんに三人の年頃の娘がある。さうして、叔母さんは、ポリー君が三千五百五十圓の遺產を引繼いだことを睨んでゐた。

この家へポリー君が、自轉車に乘つてつくと、この叔母さんは、下にも置かぬやうな歡待だ。三人の從姉たちは、爭つてたかつて、はしやぎ廻る。

ポリー君たるもの、得意たらざるを得ないではないか。

とゞのつまりは、ポリー君が、この叔母さんの姪にかゝつて、二番目の娘のミリアムと結婚するのだ。

さて結婚して見ると、さあ大變だ。その夢に描いた新婚生活なるものが、初めの日から詰らない。趣味もなく教育もないミリアムが、すること、なすこと、みんなポリー君のロマンティックな夢をぶちこはしてしまふ。

その家の中の飾りつけの惡趣味。さうして、その手料理のまづさ加減はどうだ。一月たゝないうちに、ポリー君が、胃病になつてしまふ。

洋服屋の店を出してはみたが、千客萬來の夢は破れて、打ちつゞく不景氣、どうやら、飯は食つてゐるが、毎日毎日の生活の不愉快はどうだ。



ぶつ／＼、言ひ乍ら、ごろ／＼いふ胃を抱へて、十五年は、流るゝごとく去つて、さてこそ本年三十七歳となつたのだ。

ところが、こゝにポリー君の一生に大變化が起つたのだ。

五

こんな詰らないことをして、生きてゐたつて、仕樣がない。いつそ死んでしまはう。

自殺、と決心したときに、ポリー君は、大きに愉快になつた。どうして、今まで氣が付かなかつたらう。自殺してしまへば、このいやな妻君からも逃げられる。この小うるさい町からも遁れられる。この胃病もなくなる。しめた！と彼は思つた。

そこで、日曜日の午後、妻君の留守を窺がつて、自殺にとりかゝる。

先づ剃刀で、…、のどを切る

ことに決める。
なるべく痛くないやうに切らう、といふので、剃刀を丁寧に研ぐ。研いだ剃刀を、横に置いて、それから、ランプに火をつけて、穴藏に降りてゆく。
といふのは、喉を切るのは痛いから、穴藏でランプを落して、火事にして燒け死なうと、氣が變つたのだ。
首尾よく、ランプは落して火事は初まつたが、その瞬間に彼は、隣家の三階に居る、聾で八十になる老婆のことを思ひ出した。この人が燒け死んではわるい、と思つて、穴藏から大急ぎで走り出して、
『火事だ！　火事だ！』
と叫び乍ら、隣家の三階に走り上つて、この老婆を救ひ出す。この火が擴がつて、この町の大半は燒け失せたが、ポリー君は、命を賭して老婆を救つた廉で、近隣の大評判になる。
おまけに火災保險金が取れて、少々手許が樂になる。

六

ところが、ポリー君の一生に大變化が起る。
それは既に自殺と決心して、この現狀から脫却するといふ決意を一度決めて見ると、人生が全然變つてしまつた。成程、なにもこんな詰らない現狀に、いつまでもしがみ付いて居なくもよいのだ、といふことに氣が付いた。
そこでポリー君は、死なゝいで、現狀から逃げ出すことを考へた。
それは、この町と家とを捨てゝ夜逃げをするのだ。
その決心がつくと、ポリー君は、別人のやうに愉快になる。この厭やで、厭やでたまらない妻君ミリアムから逃げてゆけるのだ。さう思つて彼は心が浮き立つた。
そこで、彼の策戰は、先づ入水して死んだやうに見せかけることにするのだ。すると、妻は生命保險金が取れる。この間の火災保險金と、この生命保險金が手に入れば、ミリアムは一生食ふには困らない。どうせ自分を好いてゐるわけではないのだから、金が取れて、自分が居なくなれば、ミリアムは大喜びだ。あの薄穢い姉と妹とを呼びよせて、この家で一緒に商賣して暮すだらう。それでよし。
そこで、自分は、家にある現金のうちから、二百十圓だけ失敬して持つてゆく。さうして、廣い英國を、ふはり〳〵とぶらつき歩いて、どこそこで、勞働でもして、氣樂な獨身者の生活に歸る。さうだ、それがいゝ。さう決めてから、ウェルズの本文が下につゞく。
『それから一と月ほど後、横肥り、やゝ禿げ氣味の放浪人が、如何にも太平樂な顏に、埃だらけの風で、兩手を衣嚢に突つ込み、唇をしかめて、口笛を吹きながら、アッピンドンよりポットウェルに通じる川沿ひの土堤を、悠々と歩いてゐるのが見受けられた。美しい春の初めの日であつた。人の世に未だ嘗てありしことなき程の新綠が――（實は每年さうなん

だが、みんなが忘れてゐるのだ—、これも未だ腐つて無かりしやうなはつきりした樺色の土を背影に光つてゐた。と、この男は、一寸立ち止まつた。口笛も吹くのをやめてゐる。一心に何か見てゐる。それは小川の中の洲に、小さい水鼠が出てちう／＼遊んでゐるのを見てゐるのだ。と、その水鼠がざんぶと水の中に跳り込んで、一寸泳いでまた水の底にもぐつてしまつた。その跡の小さい波が消えると、始めてポリー君は、また考へ深さうな顔をして、どこといふあてもなく歩き出した。

十數年この方初めて彼は、人間らしい健康な生活を初めたのだ。毎日戸外で暮して、一日に八時間から九時間もかうして歩いて、食物もほど／＼に喰べながら、あちらこちらで、少しばかりの手傳仕事などして、かうして今日まで暮してゐたのだ。景氣、不景氣の心配もなく、店の仕事の面倒もなく、悠悠と彼は村から村へと歩いてゐたのだ。さうして、ある晩生れて初めて北極光をも見た。』

彼は懐中に、二百圓の金を入れて、絲の切れた凧のやうに、春の英吉利の田園を逍遥ひ歩いてゆく。

この邊の描寫は、簡素にしてしかも、詩情横溢し、ウェルズ六十卷の小説中の神品と讃へられてゐる。

それから、ポリー君の身の上に、色々な事件が起つて、とゞのつまりは、ある美しい川沿ひの料理店の後家さんのところへ住み込んで、料理屋の世話と、川魚釣りをしながら、氣樂な一生を送るといふ話の筋である。

七

この一篇が、當時の英國の社會に持てはやされたのは、純文藝品としての優れたる價値の故であることは勿論であるが、一方には、それが二十世紀初頭の中産階級の生活をまざ／＼と描き出したからである。小商人の張合のない暮し、ことに現代の社會の結婚制度の不備を指摘したのである。ロマンティストであつたポリー君が、誤つて月並な現實主義の妻君を貰つて、人生を苦しみぬく有様を活寫したのだ。小うるさい社會の束縛から、どうかして抜け出したいともがき苦しんでゐる大勢の貧しき人々の心持ちを、彼が誇張なき且つユーモアに富んだ筆で、映し出したのだ。

この世の中には、小さいロマンティストが大勢ゐる。否大ていの人は、みんな小さい理想主義者なのだ。大ていの人はみんな小さい詩人なのだ。それが、今日の社會制度に縛られて、身動き出來ぬ苦しみに苦しみながら、ついうか／＼と五十年を空消して、さうして、頽然と老いてゆくのだ。さうして、淋しく死んでゆくのだ。

たゞポリー君だけが、思ひ切つて、自分の生活を革命して、小さい詩人として、小さい自由人として、復活したのだ。さうして、初めて、三度の食物をうまくたべて、落付いた心持ちで、一日々々を送つていつたのだ。

（をはり）



探偵事實物語

蠟燭の燃えさし

大井松太郎
挿繪　吉邨二郎

コナン・ドイルの探偵小説の面白いのは、主人公のシヤーロック・ホームズが科學的の推理によつて、下らない物や思ひもかけない手蔓から、事件の成行及び犯人の何者であるかを判斷し、しかもその判斷が事實にぴつたり符合するといふ點にある。ところが、實際に於ける犯罪の捜索は、ドイルの小説のやうに科學的に行はれるものでなく、また科學的の推理ばかりで犯人が押さへられるものでもない。が、こゝに一つ、恰もドイルでも書きさうな驚くべき事實譚がある。

或殺人事件

フランスのアーヴルといふ港の、とある町に、マリー・バロといふ中年の女が、小さな二階建の家に獨暮しをしてゐた。數年前にマルセーユから此所へ移住して來たといふのだが、いろいろの點に於て疑問となるやうな變つた生活をしてゐた。第一に彼女はもう女盛りの時代を過ぎてゐるとはいへ、まだ可なり人目をひく佳い容姿を持つてゐるにも拘らず、夫もしくは知人と思ぼしき男が、彼女の家へ出入するのを見たものがない。第二に彼女は隣近所の人々と交際もせず、いつも戸や窓にはしつかり鍵をかけて、あまり外出したことがない。たまに外出する時は晝間に限つてゐて、しかも何用で何所へ行くのか、さつぱり分らなかつた。しかし、アーヴル港に出入する船舶の乘組員の間には相當知られてゐるらしく、彼女の名が酒場などで水夫達の口に上ることも稀ではなかつた。

『酒や煙草の密輸入をやつてゐるんぢやないかな』

警察官がかうした疑ひを抱くやうになつたのも無理はない。で、ある時、不意に彼女の家を襲うて家宅捜索を行つたが、何一つ證據は擧らず、警官はたゞ彼女の口からいやといふほど嘲弄の言葉を聞かされたのみで、すご〳〵と引揚げた。

時は一九〇九年の十月、ある夜晩くなつて、一人の憲兵が欠伸をしながら機械的に町々を巡回してゐたが、マリー・パロの家の前まで來かゝつた時、何心なくその眠い眼をその方へ移すと、いつも閉つてゐる筈の表の戸が開いてゐた。不思議な事もあるものだと思つて、近づいて聲をかけてみたが、何の返事もない。

『いよ〳〵これは變だぞ』

さう思ひながら、家の中へはいつたが、中には燈光もつけてなく、眞暗であつた。携へてゐる提燈の光ですかして見ると、マリー・パロは一つの卓子の前に坐つたまゝ、兩手をひろげて其の上に俯伏せに眠つてゐる樣子。またその傍らには杯と壜があつて、壜は空になつてゐた。

『さては酒を飲んで、醉つたまゝ眠つてしまつたに違ひない』

憲兵はつか〳〵と彼女の側へ寄り、片手をかけて搖り起してみたが、何の應へもない。よく〳〵見ると、驚いたも道理、彼女は死んでゐる。

『やアこれア殺されたんだな』

察するに、突然背後から何か重いもので強か頭を打たれ、そのまゝ死んでしまつたものらしい。しかも彼女の肉體にまだ溫味が殘つてゐるところからみると、この殺人罪が行はれてからまだ多くの時間が經つてゐないことは明らかである。

憲兵の報告によつて、時を移さず、檢事をはじめ所轄警察署長、刑事、巡査の一團が現場に駈けつけて、死體の檢査や犯人の手掛りについて檢べた。ところが、戸棚が開けつ放しになつてゐて、その中の物が掻きまぜてあるので、犯人は物取りであることだけは判つたが、兇器は無論、犯人の所持品と覺しきものは何一つ遺してなく、指紋もはつきりしてゐなかつた。で、何を手掛りに犯人を搜し出してよいか、ちよつと見當がつかず、事件は迷宮に入るかと思はれた。

左利きの男

丁度その頃、このアーヴルの港に、ライスといふ有名な學者が滯在してゐた。この人は多年刑事事件の研究に從事し、これに關する多くの著書もあり、ローザンヌ大學では久しく犯罪學の講座を受持つてゐる大學の敎授であつた。

こゝの警察署長は、豫ねてこの學者の令名を聞いてゐたし、この事件の解決が頗る困難であることを豫想したので、ふとこの學者の事を思出し、これは一つ應援をたのんでみてはと云ふので、早速使者を走らせて現場の臨檢を請ひ、その意見を求めることになつた。

ライス敎授の方でも、いゝ研究の材料を提供されたわけであるから、すぐ需めに應じてやつて來た。で、一應刑事達から被

警察について彼等の知つてゐる事や、この犯罪の發見の始末、その他について聽取した後、敎授はまづ街路に面してゐる表戸を擴大鏡をもつて綿密に檢べはじめた。すると、署長が、

『あゝその戸は無理にこじあけたとみえて、錠前が壞れてをります。それに指紋も捜してみましたが、殘念ながら見つかりません』

さう云つて、一應の說明を試みた。敎授は肯づいて聽いてゐたが、やがて檢査もをはつたか、署長の方に向き直つて、

『いかにも指紋は見つかりませんが、この戸をこじあける時に、犯人は何所か怪我をしたに違ひありません。御覽なさい。戸の木の裂けた所に血がついてゐます。犯人が滑つて轉ばうとでもしたのでせう』

まづ一つの發見を物語つた。それから敎授は、その戸口から犯罪のあつた室までの通路を四つん這ひになつて調べだしたが、暫らくするといかにも滿足氣に立上つて、ハンケチで汚れた其手を拭いた。

『判りましたよ、ある點だけは。この犯人は左利きの男で、左の手に怪我をしてゐます』

これには署長もさすがに驚いた。

『どうしてそれがお分りになりました？』

『御覽なさい。この通路の左側に、血で少し汚れた點が三四ケ所あります。あの戸の木の裂けた所に血がついてゐたので、犯人が怪我をしたことは分りますが、この通路の左側の血痕で、それが左の手であつたことが明らかになります。それから今度は通路の右側を御覽なさい。蠟がたれて汚れた所が幾ケ所もありませう。これは蠟燭からたれおちたものに相違ありません。まア想像してごらんなさい。まづ犯人が物取りの目的でもつて押込んだとしますね。眞暗だから、燈光がいるでせう。それから見つけられた時の用意に、何か武器を携へてゐたに違ひない。普通の人なら、右の手に武器を持ち、左の手に燈光を持つところですが、血痕と蠟のたれた跡とで判斷しますと、丁度その反對であることが明らかで、おまけに被害者の受けた傷の位置から考へても、犯人が左利きの男であることは確かではありませんか』

さう言はれてみると、署長も成程とうなづかざるを得なかつた。それから二人はマリー・パロの殺された室へはいつたが、そこは事件發生の當時のまゝにしてあつたので、ライス敎授は遺憾なく取調べることが出來た。

敎授はまづ卓上の杯と酒とを檢べたが、その判斷によると、女がしたゝか酒に醉つて眠つてゐる時に犯人が忍び込み、その物音に眼をさまして振向かうとしたところを背後から一撃を與へて殺したものであるといふのだが、これは既に警官達が考へた通りであつた。

敎授は尙も仔細に室內を檢べて、戸棚の前に蠟がたれてゐることを知り、その結果、二つの結論を得た。即ち、その一は犯人がこの室に忍び込んだ時に、この室に燈光がついてゐなかつたといふこと。もし燈光がついてゐたならば、[illegible]をつけて



おく必要がなかつた筈である。今一つは犯人が戸棚を捜したのは、女を殺した後であるといふこと。それは蝋のたれた跡が今度は左側の方についてゐるので、犯人が左の手に持つてゐた武器を捨てゝ、その手に蝋燭をもつてゐたことが判るからである。

二本の毛髪と蝋

ライス教授はつゞいて室内を隈なく検べてゐたが、ふと室の敷物の上に何かを發見したか、急にその眼を輝かせながら、その手に取り上げたものを見ると、それは二本の短い髪の毛であつた。

『どれ〳〵』と云ひながら、教授はそれを婦人の髪の毛と比べてみたが、色と太さの違ひから、それが被害者のとは別人のものであることは一目で判つた。

『これは有力な手掛りになりますよ。犯罪の現場に落ちてゐた毛髪が、犯人の捜索に役立つた例は決して珍らしくありませんか

らね』

教授はさう云つて、この發見された二本の髮の毛と垂れおちてゐた蠟の削り取つたのとを大切さうに紙に包んだ。顯微鏡で檢べてみるためである。

やがて一同は現場を引揚げた。それから一時間の後には、ライス教授はもう立派な報告を署長の前にもたらした。

『犯人は近頃シシリー島にゐたことのある左利きの船乗りで、左手に負傷をしてをり、しかも鼻下に赤い髭のある男である』

こゝまで判れば、もう犯人の目星はついたといつてもいい。それならどうして教授がこの斷定を得たか。まづ顯微鏡で二本の毛髮を檢べてみたが、それによると、これは鼻下の髭の切れたものであるが、それが敷物の上に落ちてゐたのは、犯人が兇行を遂げた後で、昂奮した場合などよく人がするやうに、この犯人も我知らず鼻下の髭を捻り取つたものだと推定したのである。又犯人が船乗りといふことは、被害者の平生から推察せられる上に、削り取つた蠟を檢べてみた結果、それが更に確實となつたのである。蠟燭の製造には種々の材料が用ゐられ、場所により又使用の目的により、その分量が違ふものである。教授が顯微鏡によつて檢べた結果、現場に垂れおちてゐた蠟の主成分はステイアリンといふ脂肪質の物で、この種の蠟を用ゐた蠟燭は、シシリー島のみで製造されることを、教授はよく知つてゐた。それに蠟燭などといふものは、人が長く持つてゐる品でないから、犯人が近頃までシシリー島にゐたものであるといふ斷定が下されたわけであり、且つ犯人が船乗りであるといふことも明らかになつた次第である。



警察署では、ライス教授の推斷を根據として、直ちに犯人の捜索にかかつた。すると、ドン

ナ・マリヤといふ船が二日前にシシリーから入港したといふことが、間もなく判つた。そこで二人の刑事が同船に出張して、乘組員を調査したところ、そのうちに赤い鼻下髭を蓄へてゐる男が一人居ることを見出した。

その男は小柄な、しかし屈強な體格で、丁度甲板の上で働いてゐたが、刑事はつか〱と近づいて、一人が背後から彼れを抱きしめてゐる間に、一人が素早く彼れの兩手に手錠をはめてしまつた。

『何をしやアがるんだ。おれは縛られるやうな者ぢやねえぞ』

その男は腹立たしげに怒鳴つた。刑事はそれには構はず、暴れまはるのを二人掛りで引立てながら、兇行の現場へと連れて來た。

そこにはマリー・パロの屍體がまだそのまゝにしてあつて、署長とライス教授が待つてゐた。そしてライス教授はまづ手錠を外させて、すぐ訊問に取りかかつた。

面白い訊問



『まづお前の名前と職業と、それから何處で生れたか、それを言ひなさい』

『おらアシシリー生れのフォルファラッツオといふ船乘りだ』

『よろしい。ちよつとこれを手に取つて見なさい』さう云つて、ライス教授が一枚の紙を差出すと、其男は左の手を差し伸べてこれを取つた。かくと見ると、教授と署長は意味ありげに見交はした。

『こりや白紙ぢやねえか』と、其男は怪訝さうな顔をした。

『全くその通り。だが、お前は左利きだね。時にお前はこの婦人を知つてゐるだらう』と云つて、マリー・パロの屍體を指さした。其男は一目その屍體を見て、ちよつと顔色を變へたやうであつたが、直ぐ平氣を裝うて、

『知らねえよ。全く見ず知らずの女だ』と、いかにもとぼけた

樣子。

『さうかね。では、ちよつとお前の左の手を見せてくれないか』

これには其男も困つたか、躊躇してゐる樣子だつたが、警官の一人が怖い顏をして、つか〳〵と寄つて來たので、彼れは不承々々にその手を差し出した。見ると、たしかに左の掌に生生しい傷があつた。

『この傷はどうしたのだ』

『船で細工物をしてゐる時に、ナイフで切つたんだ』

『では、戸をこじあけようとした時に受けた怪我ぢやアないんだね』

フォルフアラッツォの顏には、又もや暗い影がさした。けれども、あくまで彼れは强情にしらを切つた。

『一體全體、何でおれを調べるんだ』

『なアに、この婦人を殺したといふ嫌疑さ』

さう云つて、教授も空嘯いてゐる。

『飛んでもねえ。ぢやア何か證據でもあるのか。證據がありや見せて貰はう』

フォルフアラッツォは昂然として言つた。彼れは何等犯罪の證據をも殘さず、又何人にも見つけられなかつたと信じてゐるので、飽くまで自白さへしなければ、當然免れるものと思つたからである。いろ〳〵と訊問されるのは、役人が鎌をかけて自白させる手だと甘く見てゐるので、何處までも知らぬ存ぜぬで徹さうといふ肚とみえた。



ライス教授も亦フォルフアラッツォのさうした肚の中は見てとる事は出來たが、さてこの男の言ふ通り、何も具體的の證據といふものはない。この男が犯人とは判つても、要するにそれは推斷で、的確な物的證據はないのである。教授もこれには

ツたと困つたが、暫らく考へた後、署長に彼れの身體檢査を行ふことを要求した。

これを聞くと、フオルフアラッツオはにつこり笑つた。彼は贓品を身のまはりに持つてゐるほどの初心者ではなかつた。

『いくらでも搜してみるがいゝや。證據なんぞあつたら、お手拍ち喝采だ』

さう云つて、彼れはせゝら笑つた。やがて身體搜索が行はれたが、出て來たものは何れも船乘りが身の廻りに持つてゐさうな品ばかりだつた。と、最後に一本の蠟燭の燃えさしが現れた。ライス敎授の目は欣びにかゞやいた。敎授がこれを取上げて仔細に檢査した結果、

『この蠟燭は、犯行の時につけてゐたものと同一のものである』

から斷定した。これで現場に於ける訊問は終つた。やがて犯人は公判へ移されたが、彼れはあくまで犯行を否認した。しかし、ライス敎授の條理整然たる論理と疑ひなき證據のために、到底免れる途はなく、有罪と確定し死刑の宣告が下された。いよ〳〵生命を助かる見込みのない事を知つた彼れは、こゝで一切の罪狀を自白するに至つた。その自白はライス敎授の推斷が一々正確であつたことを示した。

彼れはマリー・パロとは豫ねての知合ひで、彼れは屢々密輸入の酒を彼女に賣つたことがあり、彼女が小金を蓄めてゐることを知つてゐた。彼れは又彼女が大の飲酒家である事を知つてゐたので、彼れは犯行の日まづ彼女に強い酒を贈り、その夜彼女が恐らくそれを飲んで醉ひつぶれてゐるであらうことを豫想して、遂にこの犯行を敢てしたのであつた。その際、用意として鐵の大きな彈丸を布に包んで携へて行つたが、犯行の經過はライス敎授の推定と些の相違もなかつた。



かくて幾週間かの後、ある陰慘な朝け、フオルフアラッツオは絞首臺上の露と消えたが、丁度その朝、ライス敎授はローザンヌ大學で學生達に犯罪學に就ての講演をしてゐたのであつた。

（終）



日本の誇！ 英米の特許局を驚ろかした 色白くする専賣特許の脱色素法

日英米の専賣特許美顏料

むかしから、『色の白いは七難かくす』といはれてゐます。その素顏が、磨きあげた大理石のごとく肌目こまやかに純白で、しかも、ほんのり紅味がさしてゐる——これだけの自然美が漲つてゐれば、眼鼻立の恰好などを超越して、眞に綺麗な印象をあたへます。

色を白くしたい——といふ切望は、黄色な皮膚だといはれる、私ども東洋人ばかりでなく、白皙人種と呼ばれる西洋人ですら、より以上に白い皮膚を求むるに焦つて、變質劑の砒素を飲んで落命した婦人があつたとさへ傳へられてをります。

『色を白くする美顏料』なるものは、東西古今どんなに多くの人々の憧憬の標的でありましたらうか……でも、ラヂオが深山の奥にまでひかれるといふ昭和の文化は、遂に、こゝに御紹介するやうな、珍しい理想的な美顏料の發明を見るにいたつて居ります。

この美顏料は、英國と米國の特許局から、製造工程の専賣特許權を獲得してゐます（日本でも既に三箇の特許を得てゐます）而して、各國特許局の特許條文中に、皮膚の美白作用を公認せられてゐる點は、全世界の化粧品界を通じて恐らく本品だけが占有する獨自の誇りであらうと思ひます。

短時日に色白となる

本品を溶かして、鐵や銅に載せて置くと、酸化力で浸蝕します。これほど強烈な漂白瓦斯を發生すればこそ、白美艶麗となるのは當然でありますが、特に本品の誇る可き點は、斯く金屬に影響するまでの、化學作用を有しながら、人體の皮膚に對しては、絶對無害にして、しかも荒肌を滑澤にする、榮養調節をも兼ねてゐます。流石に我國のみならず科學の進歩した英米までの特許權を獲得した價値があります。

シワは美貌の大敵である

石鹸や洗粉を濫用するために、顏面の皮膚が早く老衰して、シワを寄らしむる原理は、美容家の熟知せる、問題でありますが本品には、美白作用ばかりでなく、肌を荒さぬ特殊の石鹸質を配合し、且皮膚の新陳代謝機能を、促進さす作用をも併せ持つて居りますから、本品を常用すれば、皮膚の老衰を防ぎ、永遠に青春の美を享受することが出來ます。

ニキビ、ソバカス迅速除去

美を欲する、若人に取つては、ニキビソバカス、諸吹出物等は、常に大なる惱みの因でありますが、本品の偉大なる、コロイダル・サルファーの働きに依つて、極めて迅速に見ぐるしき禍根が除かれ、すが〳〵しい地肌となります。

日ヤケの手當に最良品

前述のごとく强烈な漂白力が發生して、皮膚を根本的に美白ならしむる力を持て居りますから、日ヤケ等には、何の造作もなく偉効を奏することは更めて説明を加へるまでもありません。

× × ×

以上で大體本品の効用は、お判りの事と考へますが、如何なる化學的操作に據つて、皮膚の美白作用を遂げるかといふ、主要點に就き、次に特許條文中の一節を轉載して、御參考に供することは、兼義ある讀者方に對して、徒勞ではなからうと存じます『特許條文は賣藥の誇大効能等と異り、絶對に虚僞虚飾なき事と、斯く本文の如く、内容を公開し得る品は、他に絶無なる點に御注目あれ！』

特許條文の拔萃

英國特許、第一一七〇六〇號
米國特許、第一二七八五一八號
日本特許、第三一九〇八號、第三八一一九號、第四一六〇四號

(前略)…右ヲ溫湯ニ於テ使用スル時ハ、極微細ノ狀態ニ混和セル硫黄ハ石鹼膠泡沫中ニ薄ク散布シ『コロイド』硫黄ニ近似セル働キヲナスト共ニ、石鹼膠ノ加水分解ニ伴ヒテ苛性曹達ト結ンデ硫化曹達ヲ生ジ、普通ノ硫黄泉ニ於ケルト同樣ノ效能ヲ發揮スルニ至ル。此ニ成生セル硫化曹達ハ一部分分解ニ依テ生ズル有機酸又ハ酸性鹽ニ觸レテ、硫化水素ヲ發生スル事アリト雖モ、石鹼膠乳中ニ散布セル『ワゼリン』膜ニヨリ、水分ヲ遮斷セル過硼酸曹達ガ此際石鹼膠溶解ニ從ヒテ水分ニ觸レ、過酸化水素ヲ放チ、此分解ニヨリテ生ゼル强力ノ酸素ト樹脂石鹼ノ『レジネートドライヤー』ニ類スル一種ノ接觸作用ノタメ新鮮ノ傾向ヲ帶ビタル附近ノ酸素ニ依リ概ネ直チニ酸化サレテ新鮮硫黄ニ復シ、一層强力ニ作用スルニ至ルヲ以テ、殆ンド硫化水素ヲ發散スルニ至ル事ナク、(中略)多量ノ極微硫黄ヲ遊離シテ美白ノ效果ヲ一層有力ナラシム。(下略)

毛髮を赤くする心配無用

前記の特許條文を讀むと、(レオン洗顔クリーム)の美白作用は、本品を容器からほんの少量をとり出し掌にのせ、湯か水にとかして、洗粉をつかふやうにして、顔面や手を二三分間輕く摩擦します刹那に於て、はじめて新鮮なる漂白瓦斯が發生して偉効を奏する如き、化學的裝置に、つくられてゐます。これでこそ理想的の美白作用が營まれる道理であります。しかし、發生期の漂白瓦斯のために、頭髮や眉毛を赤くする場合を憂ふる方もありませうが、その點は、まつたく心配無用であります。本發明は、毛髮と皮膚の組織の相違まで研究して、眞に合理的に、完成せしめてあります。今日まで數多の實驗者が一人も毛髮に影響を受けた例がありません。

註文の方法

レオン洗顔クリームはその特殊な效果を認め各雜誌社の代理部でも取扱つてゐるが、發賣元たる東京神田區小川町ビルデイング四階**レオン商會**(振替東京七四九一一番)へ送金あれば直ぐ嚴重小包で郵送します。價格は比較的に安價で徳用大瓶金三圓四拾錢(送料内地十八錢海外五十五錢)は賣藥より遙かに多量で凡そ二月以上の使用量となり石鹼や粉まで節約し得るので頗る經濟である。また御都合で普通瓶金一圓四十錢(送料内地十二錢海外四十五錢)を申込まれてもよろしい。いづれも廣告を見た雜誌名を記入下さい。但し代引送料は少し割高な事を御承知置き下さい。或は本誌發行所東京本郷駒込坂下町講談社代理部(振替東京六六二九番)へ御申込下さい。

注意

本品は化學的作用が極めて微妙なため永久保存が至難故、全國卸賣は不可ですから、直接發賣元へ御申込が御便利です。但し、東京銀座松坂屋藥品部、東京新宿ほてい屋藥品部、大阪心齋橋筋泉勘化粧品店で御取次いたします。



ヌッと、暗から一本の手が現れた、そして……

最後の扉は開かれた！
暗い、冷たい、地獄へつゞく運命
の扉は遂に開かれた!!

噫無情

天狗太郎

齋藤五百枝畫

公判廷にて

人間違ひをされて無期懲役に處せられようとする哀れな老人、マテイを救はんがため、苦心慘憺、はる〲モントルイユからアラスに馳附けてまゐりましたるマドレーヌ市長のジヤン・バルヂヤン、幾度か躊躇はいたしましたが、眼には見えねど鐵のやうに力のある手、運命といふものに導かれましてドアーを開きました。一歩前に出て機械的にそれを閉める。いよいよもう法廷の中に立つたのでございます。

ドアーの音を聞きまして、その場に横に並んでゐた人々が路を開いてくれる。裁判長も後方を振返つてみて、マドレーヌ市長だと知つて恭しく會釋をする。特に檢事、公務のため度々モントルイユに出張して行つたことがありまするのでよく知つてゐる、同じ會釋の中にも自慢らしい馴々しさを含ませてゐるといふ有樣。これによつてみましてもかねての德望の程がうかがはれます。

取敢へず後方にあつた一つの椅子へ、人目に隱れるやうに腰を下す。そこは裁判長の斜後方、一段高い特別傍聽席、公判廷は丸見えでございます。とはいへマドレーヌ市長のジャン・バルヂャン、どのやうに決心はいたしてをりましても、自分の全生涯を牢獄の闇の中へ抛たうとする瞬間のことでございますから、見れども見えない。聞いても聞えない。滿耳滿目、たゞぼんやりと霧の中にでもゐるやうな氣持がいたしてをりましたが、それも暫時、滿廷の注意が自分から去りますると、心も次第に落着いてまゐりまして、はじめて周圍を見まはすだけの餘裕が出來ました。

すると不思議、別に探しもしないのに、ちやんとそこにその男がゐたことを知つてをりましたかのやうに、裁判長の左前の木の腰掛に、二人の憲兵の間に挾つて腰掛けてゐた一人の老人が第一に眼に着いた。これぞ人間違ひをされてゐる被告、マテイであります。

見ると、幾本かの蠟燭の光りがこの姿を照し出してゐます。なる程間違へられるも道理、顏こそ同じではございませんが、態度、樣子、逆立つてもじや〱に亂れた頭髮、荒々しい不安な眼付き、垢染みたぼろ〱の着物、恰度、今から八年前、ミリエル僧正に救はれるまでの自分自身の年老つた姿ではございませんか？　思はずぶる〱と身慄ひいたしまして、

ジャン『あゝあ、おれもまたあんな哀れな姿になるのか…………？』

怖しさのあまり一時は眼を瞑りました。然し、流石にこゝまでやつて來たほどのことはございます。同時に、胸の奥の方から魂の聲が叫んでをりました。

ジャン『いゝや、それはおれ自身の當然うけねばならぬ運命だ。』

傍聽席はぎツちり一杯、溢れるばかりに詰つてをります。だんだんと審理は進行いたしまして、辯護士の辯論があり、それに對して檢事の華々しい、辛辣な駁論がありまして、案の定、無期懲役の刑が請求されました。

裁判長は被告マテイに起立を命じまして、

裁判長『なほ、ほかにその方の申立てすることはないか？』

容恍けてをりまするのか、愚鈍なのか、被告は一向合點の行

かね様子。手に持つた汚い古帽子を指で弄んでをりましたが、再三注意されてやうやくわかつた。今度は支離滅裂な言葉で爆發するやうに喚きだして、

マテイ『私アかういひてえんだ。私ア若い時からパリーのパルー親方の家で車大工をしてゐたんだ。車大工はひでえ仕事で、いつでも外で働くだ。冬なんか鐵を扱ふのは辛いもんだですぐ弱つて年を老つてしまふ。四十になれアもうおしまひだ。それに私ア五十三になつて、みんなに老耄れだといはれて勤まらなくなつたんでクロシエの田舎に歸つて來たんだ。パルー親方は知つてる。親方に訊いてみて下さい！』

裁判長『その車大工の親方パルーなる者は、召喚いたしたが出頭しない。破産して行方不明になつてゐるのぢや。ついては最後に今一度訊くから本官のいふことをよく注意してゐるがよい。第一に、その方はピエロン果樹園の林檎を盜んだか、否か。第二は、放免囚人ジャン・バルヂャンであるか、否か？』

被告マテイ、何かいひかけたが、適當な言葉が出なかつたとみえて默つてしまふ。檢事は立上つて、

檢事『被告、注意せい。その方は審問に答へないが、ジャン・バルヂャンであること、林檎を盜んだことは最早明白であるぞ！』

三人の證人

驚いて飛上つたのは被告マテイ、口早に、

マテイ『旦那は惡い人だ、旦那は！　私アはじめからいひたかつたが、どういつていゝかわからねえんだ。盜んだんぢやアねい。ひでえ夕立の後で田舎の道を歩いてると、林檎のなつた枝が折れて落ちてたんだ。こんな面倒なことになるたア知らずに拾つて食べて、それが原因でもう三月も牢屋へ入れられてる。ジャン・バルヂャンだ、ジャン・バルヂャンだと仰有つても、私ア一向そんなものア知らねえだ。私の戸籍面にはなんと書いてあるか見たこともねいで知らねえが、子供の時は「この餓鬼」と呼ばれ、親方には「この阿呆」と怒鳴られ、今では「この爺」といはれても、手紙はちやんとマテイで來るといふこツた。私ア泥棒したでねい。パルー親方のとこにもゐたし、家を持つてたこともある。それを、旦那方は何故さう譯もわからぬことをいつて虐めようとなさるだかね？』

立上つたまゝでゐる檢事、

檢事『裁判長閣下、被告はかくの如く曖昧なる、而も至つて巧妙なる否認を試み、白痴として押通さんといたしてをります。これこそ犯罪上怖るべき天才を有するジャン・バルヂャンのジャン・バルヂャンたる所以でありまするが、しかしその手に乘るものではない。本官は最後に今一度四人の證人の召喚を請求いたし、果してジャン・バルヂャンとマテイと同一人なるや否やについて尋問いたしたいのであります！』

裁判長も一應は頷きましたが、

裁判長『しかし證人のうちに警視ジャベルは、先刻證言を濟ましたる後、公用のため法廷を去つてゐませぬぞ』

検事『左樣であります。しかし本官は、ジャベル警視が二三時間前、この法廷に於て陳述したる證言を繰返すことが出來ます。ジャベル警視は誠に職務に忠實なる男でありまする。そのジャベル警視は、「私はこの男を充分見知つてをります。マテイといふではなく、怖るべき徒刑囚ジャン・バルヂャンであります。ツーロンの監獄に看守してゐました際、脫獄の名人としてしばく見掛けたのでよく記憶いたしてをります」と申述べてをります。この證言が殘つてゐる以上、再びジャベル警視を召喚せずとも遺憾はないだらうと思ふのであります！』

そこで裁判長、守衛に命じて三人の證人を呼出させる。第一に現はれたのが牢番のブルベ、この男は以前は囚人でございましたが、今では出世して牢番になつてをります。何事にも出世といふものはあるもので。

裁判長『被告、起立をせい！』

マテイはふらくと立上る。裁判長は嚴肅に、

裁判長『これ、ブルベ、よく見るがよい。被告がその方の昔の監獄仲間ジャン・バルヂャンであるか否か、良心によつて申立てるのぢや。重大な場合であるから、誤解だと信ずるならば前言は取消し得るぞ！』

ブルベ『はい、裁判長樣、最初にジャン・バルヂャンだつてえことに氣が着いたのはこの私で、今でも變りはございません。千七百九十六年にツーロンに入り、千八百十五年に出ました。私はその一年後に出ましたが、なかく監獄では狡猾い男でがした。今馬鹿な樣子をしてゐるのは、多分老耄れてしまつたからでせう！』

裁判長『よろしい、席に着け。被告は立つてゐるのぢや。次はシニルデ！』

赤い獄衣に青い帽子、これは無期徒刑囚のしるし、今度はシニルデといふ男が出て來た。ブルベにいつたと同じ言葉を繰り返した裁判長、なほ被告を知つてゐると主張するかと訊ねます。

失笑したのはシニルデ、

シニルデ『知つてるかでがすツて？　私共ア五年も同じ鎖を引張合つてた仲でさア。なア、兄弟、どうせお前も今度は終身だらう。早くツーロンに戻つて來なよ。また一緒に鎖を引張合つて仲よく暮さうぜ！』

なつかしげにも、また嬉しさうにいふ。どうもかういふ親友はあまりどツとしないものでございます。

次に呼出されたのはコシパイ、この男もやはり青い帽子に赤い獄衣、無期徒刑囚の正裝を凝してをります。その申立てによりましていよく確定する譯でございますから、一層愼重な態度をとつた裁判長、言葉も莊重に、

裁判長『これ、コシパイ、その方の一言によつて身の破滅を來すかも知れない男もあるのぢやぞ。よく考へていふがよい。この被告に確と見覺えがあるか？』

コシ『ありやすとも！　此奴ア起重機のジャンといはれたジ

ヤン・バルヂヤンです。恐しい力の強い男でさア！』
異口同音とでも申しまするか、證人が三人共、ジヤン・バルヂヤンに間違ひなしと認めました。本人のマテイ、ますます譯のわからない顔をして、ぼんやりあちこちを見まはしてをります。



『私こそジヤン・バルヂヤンです！』
『エッ！』一同はビックリして思はず市長の顔を見つめました。

この顔を見よ

どこの國にも妙な趣味を持つた人間がをります。公判の傍聽が三度の飯より好き、芝居や相撲よりよツぽど面白いとあつて、晝間から押掛けて來てぎつちり鮨詰になつてゐる傍聽人達、證言が被告に不利になるにつれてだん〱動搖めいてまゐりました。

○『だからいはないこつちやない。私ははじめからちやんとジヤン・バルヂヤンだといつてゐるんだ！』

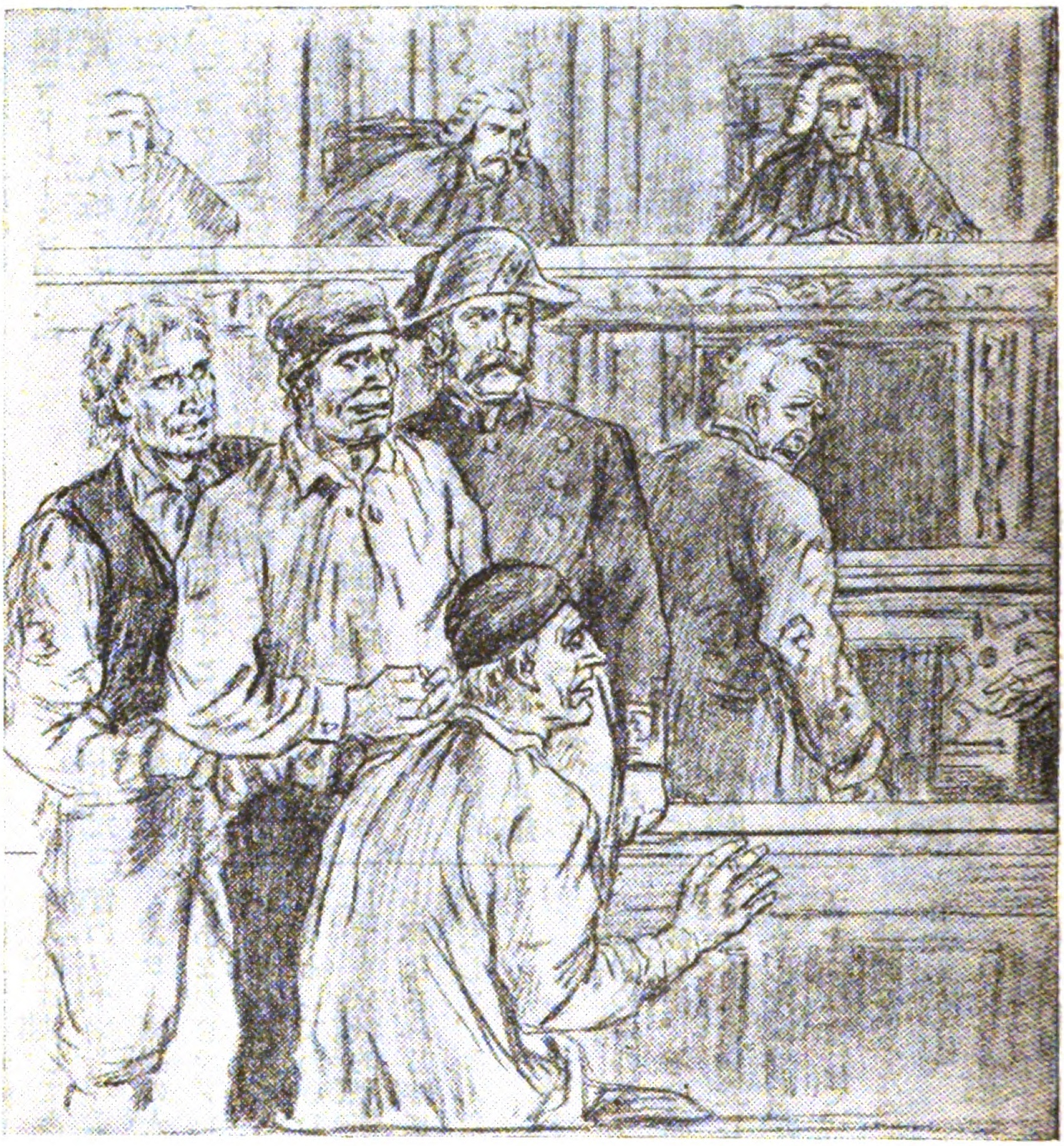
△『もし〱、それアお言葉ですぜ。間違ひなしといつたのは私の方が早いので！』

○『一體、お前さんは、いつさうお言ひなすつた？』

△『捕つた話を聞いた時に！』

○『それア遲すぎる。私はあの男がまだ生れないうちに言つた！』

詰らないことを言ひあつてゐる。裁判長は改めてマテイに向ひ、



裁判長『被告、たゞ今聞いた通りぢや。ほかにまだ何かいふことがあるか？』

マテイ『へえ、なる程……』

相變らず薄ぼんやりしてゐます。傍聴人の喧騒は陪審員にまで及びまして、

陪甲『最早明白ですな。無期は脱れられないところでせう！』

取沙汰にあまり騒がしくなつてまゐりましたので、裁判長は嚴に、

裁判長『守衛達、場内を取鎮めよ。本官はこれより辯論の終結を宣告する！』

と命じました。待構へてゐた一同、

傍聴人『さアいよ〱判決だ！』

ぴたりと鳴りを鎮める。

と！　この瞬間であります。裁判長のすぐ傍で何かもの〻動く氣配がいたしまして、一つの叫び聲が起りました。

×『證人のブルベよ、シユニルデよ、コシパイよ、みんなこちらを向きなさい、この顔を見なさい！』

高くもなかつたが、聞いたもの〻胸は凍りついたかと思はれるほど悲しげな、恐しい聲で、よく徹つた。裁判長、検事、辯護士、陪審員、一同が驚いて振返つ

てみまするとゝ法廷と特別傍聽席との境の半戸を押開いて、一人の男が廣間の眞中に來て突立つてをります。その人物を知つてゐる人達は二度吃驚、

一同『マドレーヌ氏だ!』

事實、その人物こそジャン・バルヂャンのマドレーヌ市長だつたのでございます。書記席のランプに照出された姿を見ますると、フロックの釦は正しくかゝり、服裝にはすこしも亂れたところはありませぬが、ひどく蒼褪めて慄へてゐます。アラスに着いた時にはまだ半白でありました髮の毛も、今は全部眞白になつてゐる。そこにゐた一時間ばかりの間に白くなつたのであります。

暫く、滿場は啞のやうに默つて、誰もなんにも一言もいはない。それもその筈、譯がわからないのです。第一、あれほど痛烈な、恐しい聲を出したのがその落着いた人物だとも思へませんでしたし……言葉で云へない光景でございましたが、それもほんの數秒、守衞や憲兵が金縛りにあつたやうに棒立になつてゐる間を分けたマドレーヌ市長のジャン・バルジャン、證人席の前へまゐりまして、

ジャン『お前達はこの私をよく知つてゐるだらう?』

聲を掛けられてブルベ、シニルデ、コシパイの三人、吃驚して見上げましたが、相手は立派な老紳士、わづかに首を横に振つていや〳〵をいたします。知らないといふ意味でございます。

これでは仕方がない。やをら法官と陪審員の方へ向直りましたるジャン・バルヂャン、落着いた靜かな聲で、

ジャン『判事諸君、どうぞ被告を放免してやつて下さい。代りに私を捕縛して頂きたい。裁判長閣下、お探しになつてゐる人間は決してあの老人ではなく、この私です。私こそ眞實のジャン・バルヂャンです!』

あツと滿場の人々が、もう一度驚愕いたしました。何しろ德望あまねきマドレーヌ市長のこと、信じようにも信じられない。中にはてつきり哀れなマテイを救つてやるため身代りにならうとしてゐるのだと解釋したものもある。いづれにいたしましても宗教的恐怖とでも申しまするか、何事か非常に偉大なことがなされる時に感じまする一種の尊嚴な、嚴肅な氣分に打たれまして、みんなは息を呑んで默つてしまひました。

羨むべき幸福

墓場の中のやうな沈默の中から、やうやく自分に返りましたる裁判長、その顏に氣の毒さうな同情の色を浮べた。檢事と何事か合圖をいたし、陪席判事ともひそ〳〵と低聲で囁きあつてゐましたが、やがて誰にも自分の心持がわかるやうにみんなの方を向ひまして、

裁判長『どなたか、傍聽席の中に、醫師の方はおいでになりませんか?』

といふ。檢事も立上りまして、

檢事『陪審員諸君、本官は、今この意外な、不思議な出來事の

いよ〱發賣！早く御覽！

（四六判百七十餘頁）定價二十錢

これが世渡りの呼吸である。出世成功の急所である。
一身の幸福、一家の繁榮には、ゼヒ之が必要である

と確信されたもののみでありまして、言々句々胸に響き、魂を打つものがあります。

人物本位、實力本位の現代に
スグ役に立つ絶好の活指針

之を知ると知らぬでは、やがては千里の差が出來ると、私共社員一同は確く信じて日々熟讀して居ります

極めて平易に、面白く說いてありますから、少年少女にもよく分ります
悉く體驗から生れたものですから、一々成程と、胸に響きます

▼裏面に目次掲載――ゼヒ御一覽下さいま


野間社長近影

野間社長は、各方面の熱心なる慫慂によつて、報知新聞社長に就任されました。

小社九大雜誌と、大報知を提げて、世の中を明るく淸く正しく――の標語の下に文字通り不眠不休の活動を續けて居ります。

ために、法廷事務の進行が妨げられたることを遺憾に思ふものであります。しかしながら諸君は、尠くとも名譽あるモントルイユ市の市長マドレーヌ氏のお名前はかねてお聞及びのことゝ信ずる。法廷事務の進行を妨害するものに對してはそれ〲所分の法律はありましても、不幸にも昂奮のあまり、一時的に發作狀態に陷られたるこの紳士に對して、通常の場合と同一視するに忍びない。本官も裁判長閣下同樣、もし醫師の方がおいでになるならば早速手當を加へて送り屆けて頂きたいことを願ふものであります！』

實際、誰しもマドレーヌ市長が發狂したものと思つたのでございますが、ジャン・バルヂャンはみなまで言はせなかつた。穩かな中に權威の籠つた調子で檢事の言葉を遮つて、

ジャン『みな樣の厚意には感謝いたしまするが、私は決して發狂したのではありませぬ。私こそ問題の罪人で、事實を語つてゐることは在天の神が見てゐられる。私は違つた名前の許に身を隱して富を得ました。市長になつた。力の及ぶ限り善を行ふことに努めて來ましたが、事實は事實です。八年前、ミリエル僧正の家で泥棒を働いたのは私であります。少年の銀貨を奪つたのも私です。この私を、ジャン・バルヂャンを捕縛して、あの哀れな老人を放免してやつて下さい！』

沈痛な、憂鬱な中に親しみの籠つた態度には、却つてひどく感動してしまひました。裁判長も、檢事も、到底信じられない

といふやうに、たゞ頭を横に振るばかりでございます。

ジャン『あゝ、みな様はお信じ下さらないのですか？ ジャベル君のゐないのが甚だ殘念です。あの男ならすぐに私を認めてくれたのでせうに……！』

當惑したジャン・バルチャン、暫く考へてをりましたが、やがて三人の證人に向ひ、

ジャン『おい、ブルベ、お前は忘れても私の方で覺えてゐる。ツーロンの監獄では、始終市松模樣のズボン吊を自慢にしてゐたぢやないか？』

愕然と顏色を變へたブルベ、恐る〳〵頭から足許まで見下してゐる。ジャン・バルチャンはつゞけて、

ジャン『シニルデ、お前は右腕の入墨を消すためにわざと火傷までしたが、まだ殘つてゐるではないか。どうだ、その通りだらう？』

仰天したシニルデ、飛上つて、

シニル『えいッ、その通りで……！』

ジャン『それからコシパイ、お前の左腕にはナポレオンがカーヌに上陸した日附「千八百十五年三月一日」と彫つてある筈だ。腕をまくつて見ろ！』

いはれる通りコシパイが腕まくりをした。一人の憲兵がランプを差出す。滿廷の視線が悉く一點に集つて、みると果してその通り日附の入墨がありました。

再び法官達の方を振返りましたるジャン・バルチャン、靜かに微笑を浮べまして、

ジャン『裁判長閣下、これでよくおわかりになりましたでせう。私こそジャン・バルチャンです！』

その微笑は、勝誇つたやうで、同時に非常に絶望的で、見たものゝ眼に深い〳〵印象となつて殘つた。後々までも思ひ出す度に刺されるやうな心の痛みを覺えたといひます。

最早、この時には、法廷には、裁判長も、檢事も、憲兵もゐません。みんなは、一言も質問しないでも、誤られて刑に處せられようとしてゐる一人の男を救ふために敢然と身を投出した立派な行爲をすぐに了解いたしまして、魂を捉へられたとでも申しませうか、太陽のやうに燦く感動を前に、職務も何も忘れ果てゝ、たゞ〳〵恍惚と醉つたやうになつてしまつたのでございます。

こちらはマドレーヌ市長のジャン・バルチャン、あまり沈默がつゞきますので、

ジャン『私はこれ以上法廷を亂したくない。まだ命令も下らず、用事も澤山ありますのでひとまづ引取りますが、しかし必要な場合にはいつでも捕縛して頂きます。いつでも結構です！』

いひ終ると、靜かに出口の方に向ふ。誰一人聲を出すものもなければ、手を出して遮るものもない。途中に立つてゐるものは叮嚀に頭を下げて路を開く。それほどその時のジャン・バルチャンの中には、神聖な、犯すことの出來ない何ものかゞありました。特別傍聽席のドアーのところまでまゐりますと、振返

つて傍聽人に向ひ、

ジャン『みな樣、定めし私を憐れな奴だとお考へでせうが、一旦かうと決心した。私は幸福です！』

この間に誰かしらドアーを開けてくれた。一躍してその中に消えると、また見えぬ手が閉める。それから一時間ほど經つて、法官達はマテイを一切の起訴から釋放いたしましたが、この老人、はじめから、終りまでなんのことやらすこしもわからず、とにかくみんな氣狂ひだと考へ、相變らずぼんやり歸つて行つたといひます。

捕縛が來た

さて、その翌朝、こゝはモントルイユの慈善病院の中、恰度夜が明けかゝつてゐます。ファンティーヌ附の看護婦が薬局で薬の調劑をいたしてをりますると、何やら背後で人の氣配、振返つて見てあッと輕い叫聲を立てました。いつのまにかジャン・バルヂャンのマドレーヌ市長がやつて來て幽靈のやうに佇んでをります。

看護婦『まア、市長さま……！』

ジャン『可哀さうなファンティーヌの容態はどうですか？』

看護婦『たゞ今のところではそんなに惡くもございません。でも、私共は大變心配いたしてをります……おや、市長さま、どうなされました、お頭が眞白でございます！』

ジャン『眞白に？』

不思議に思つた看護婦、鏡を取出して與へる。それに映して眺めたジャン・バルヂャン、

ジャン『ほゝう、なる程……！』

わづかに異様な微笑を洩したばかり。ファンティーヌにちよツと會つてやつては惡からうかと訊く。とみ、かう見した看護婦、

看護婦『市長さま、アノ、子供はお連れにならなかつたでございますか？』

ジャン『いや、連れては來るが、いろ／＼用事があつてまだ一兩日かゝる。私は急いでゐるので……？』

看護婦『それでは、どうぞ！』

お連れにならないならお會ひにならない方がいゝでせうといひたげな樣子をしたが、やむを得ない。看護婦は、恰度今眠つてゐるからはひれといふ。病室のドアーの開閉にも深い注意を拂ひましたるジャン・バルヂャン、跫音を殺して寢臺の傍に立ちました。

胸の奥から洩れて來る悲しげな寢息、微かに震へる全身、明らかにファンティーヌに最後の近附いてゐる事がわかりまするが、それにしてもなんといふ安らかな樣子でせう。蒼褪めてゐた顏は今は眞白になり、頰だけに鮮かな色が上つて、將に死なうとしてゐるといふより、寧ろ見えぬ翼を開いて翔去らうとしてゐるかのやうな有樣。思はず溜息を吐いたジャン・バルヂャン、さま／＼感慨に打たれたがらいつまでも／＼暗然と瞶めてゐる。思へば不幸な二人でございます。

ふと、そのファンティーヌ、長い、美しい金色の睫毛を開けた。そこに佇んでゐるジャン・バルヂャンの姿を認めまするとにツこり微笑んで、

ファン『あの、コゼットは』

すこしも疑はない、信じきつた悅びの色を見ますると、どう答へていゝか言葉がない。ジャン・バルヂャンが默つてゐますので重ねて、

ファン『私、あなたがそこにゐられるのを知つてゐました。いゝえ、夜通し眼であなたの後を追つてゐました。あなたのまはりには天の人達が澤山ゐました。ですが、どこにコゼットはゐるのでございますの。早く、早く連れて來てこの手に抱して下さい！』

この時、報知を受けた醫師が運よくはひつて來た。ジャン・バルヂャンの當惑を察して引取つて、

醫師『まアお靜かになさい。子供はあちらにゐますが、あなたにはまだ熱がある。落着かねば連れて來る譯に行きません！』

ファン『いゝえ、先生、私は癒つてゐます、癒つてゐますといふのに！』

醫師『そうら、その通りあなたはまた昂奮する。すぐに熱が上る。そんな有樣では私は子供に會ふことを反對しますよ！』

ファン『先生、ご免下さい。私、あんまり待ちおねてゐたも

のですから、つい……でも、ご覽下さい。私、この通り靜かになりましたでございませう、この通り……！』

哀れな母よ！　ファンティーヌは、コゼットに會ひたいばかりに一生懸命おとなしく見せようと努力をはじめましたが、その間にも咳ははげしくつゞいてをります。

診察が終つて醫師は去る。何かいふためにこゝにやつて來たのではありまするが、今はなんとなく躊躇される。そのジャン・バルヂャンの沈默のさ中に、表で遊んでゐる門番の子供の笑聲を聞付けたファンティーヌ、

ファン『あ、コゼットが！　コゼットの聲です！　私はあの聲を覺えてゐます……三イ、四ウ、五ツ、六ウ、もう七つになりますわ。あと五年もしたら白いベールを被せて、透いた靴下をはかせてやりませう。さうなれば一人前の娘さんのやうに……』

樂しげに笑つてゐましたが、突然、何を認めましたのか、惡魔にでも襲はれたやうに顏色がさつと變つた。驚きましたジャン・バルヂャン、

ジャン『どうした、ファンティーヌ？』

返事の代りにファンティースは半身を起し、顫へる指をあげて怖しげにドアーの方を指さしました。徐ろに振返つたジャン・バルヂャン、見るとそこには、警視ジャベルが傲然と仁王立に立つてゐます。

悲しき最後

一目ジャベルの姿を見たジャン・バルヂャン、早くも逮捕の命令が下つてやつて來たのだと悟りましたが、ファンティーヌの方はまた自分が捕縛されるのだと誤解いたし、顏を兩手で隱して、

ファン『あれツ、助けて下さいませ、マドレーヌ樣！』

ジャン『安心なさい。ジャベルが來たのはあなたの ためではないのです！』

立上つたジャン・バルヂャン、落着いたやさしい聲でいつて、それからジャベルに、

ジャン『君の用事はわかつてゐる！』

ジャベ『さア、早く！』

そのジャベルの眼は氣違ひ染みた荒々しさに燃え、聲はまるで獸の咆哮みたい。何しろ相手が相手、部屋の樣子を見極めた上でつか〳〵と眞中まですゝんで、

ジャベ『貴樣、來ないかッ』

いきなりぐッとジャン・バルジャンの襟首を捕へた。吃驚したのはファンティーヌ、

ファン『あツ、市長さまを何するのです！』

『默れ！』　ジャベルは、恐しい恰好に齒をすッかり剝出して、

ジャベ『なんだ、市長だと？　もうこゝには市長なぞいふものはゐないぞ！』

フロックの襟を掴まれてゐるジャン・バルヂャン、頭を垂れ

たまゝ静かにしてゐたが、やうやくにして、

ジヤン『ジヤベル君……』

ジヤベ『なんだ、ジヤベル君だ？ 無禮だ。警視殿といへ！』

ジヤン『あなたに内々お願ひがあるのです。是非……』

ジヤベ『おれは知らん。裁判所へ出てから吐かせ！』

ジヤン『三日の猶豫を……この哀れな女の子供を連れて來る時間です。費用は拂ふ。一緒に來て下すつてもいゝのです！』

ジヤベ『馬鹿ッ、笑はせやがる！ そいつの子供を連れて來るためだと？ 何故逃げるための猶豫だといはないのだ。あはゝ、結構なことだがその手には乘らぬぞ！』

大聲で喚いたから耐らない。聞咎めてぎッくりしたファンティーヌ、

ファン『え、私の娘を連れて來るために？ では、では、コゼットはこゝにゐないのですか？ 市長さま！ マドレーヌ様！ どこにコゼットはゐるのでございます？』

『來ないかッ……』と、ジヤベル警視、いきなりぐつとジヤン・バルヂヤンの襟首に手をかけました。



ジヤベ『えいツ、うるさい！ 前科者が市長になつたり、賣春婦が貴婦人同様の看病を受けたり、世の中は逆様だ！ だが、これからはさうは行かないぞ。これ、よく見ろ。もう市長も、マドレーヌさんもない。泥棒のジヤン・バルヂヤンを今このお

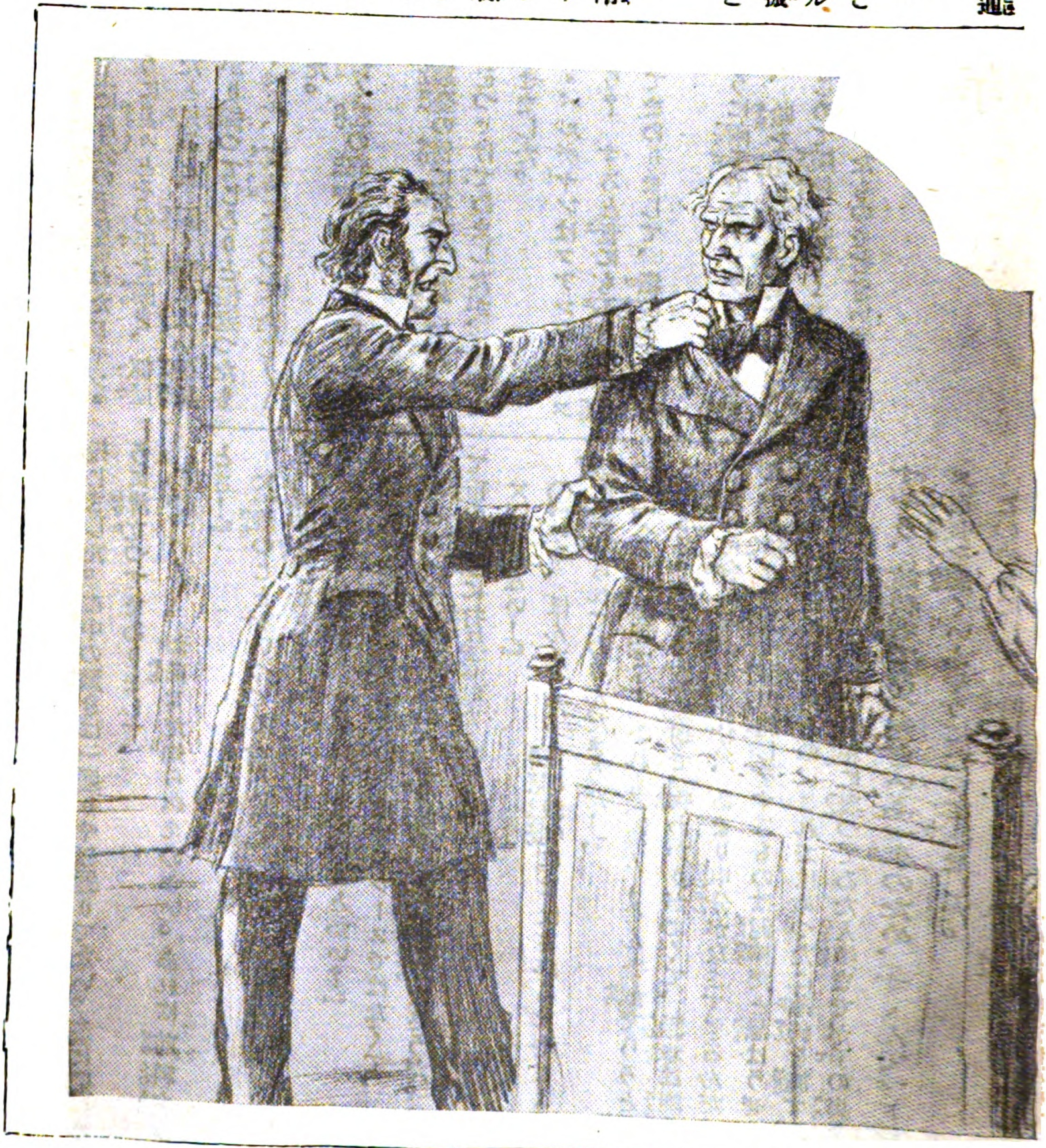
れが捕へたんだ。この通りだ！』

足ふみ鳴したジャベル、ファンティーヌ睨附け、これみよがしにジャン・バルヂャンの首筋を締附けて振りまはす。その憎々しさといつたらありません。

と見たファンティーヌ、我破と撥起き、骨張つた兩手を差延べまして暫くジャン・バルヂャンの顔を瞶めてをりましたが、それが最後でございました。何かものいひたげに唇を慄はせ、再びがツくりと後方に倒れて、そのまゝ息を引取つてしまひました。

ジャン『君はこの女を殺したな！』

ジャベ『早く片附けよう。おれは理窟は聞きたくない。護衛のものが階下に



ゐる。すぐ行くか。手錠か？』

無言で捕へてゐる相手の手の上に自分の手を重ねたジャン・バルヂャン、赤兒の手を開くやうに易々とその手を開き、部屋の隅にある古い寢臺の傍に寄つたと見ると、瞬く間に太い鐵棒の一本を拔取つた。それをしつかり握つてじろりと振返つたものですから、忽ち慄上つたジャベル、眞青になつてたじ〳〵と五六歩ドアーの方へ退りました。

ジャン『生命が欲しかつたら暫く私の邪魔をしてもらひますまい！』

いひ棄てゝファンテイーヌの寢臺の傍に行つて跪いた。暫く、憐み深い眼附で眺めて默想をつゞけてゐましたが、やがて身を屈めて亡骸の耳に何事か囁きました。

一體、何を、氣の毒なジャン・バルヂャンはファンテイーヌの死骸に語つたのでございませう？　すると世にも不思議、俄かにファンテイーヌの顔が燦いてまゐりまして、微笑さへ浮べたやうに思はれます。

次に母親が子供にしてやるやうに兩手でファンテイーヌの頭を枕に乘せ、着物の亂れを直し、瞼を閉してやつたジャン・バルヂャン、靜かに立上つた。はじめて鐵棒を棄てゝドアーを背に立つてゐるジャベルの前に來ていつたものでございます。

ジャン『さア、もうどうにでも！』

窓から出た手

直にジャベルはジャン・バルヂャンをモントルイユの監獄に投じました。市中の驚きは一通りや二通りでない。眞に鼎のやうに沸立つてまゐりまして、

○『おい〳〵、お前まだ知らねえのかい。あれは前科者だとさ！』

×『誰のことをいつてるんだい？』

○『市長のことさ！』

×『えツ、市長？　マドレーヌ氏のことかい？』

○『さうだよ。なんでも彼奴はマドレーヌではなくて、ペチヤンとか、ボジャンとかいふ名前の恐しい强盜ださうだ。捕つて市の監獄に打込まれたんだ！』

×『擔ぐない！』

○『いや、ほんたうだ。重罪裁判にまはされるまでこゝの監獄に入れられてゐるんださうだ！』

×『へえ、道理で！　おれもかね〴〵そんな奴だらうと思つてたんだ。だつてさ、親切で、物わかりがよくて、勳章は謝る、餓鬼共に會へば金をくれる、あまり申分がなさすぎるんだ。これから後は、人に澤山施しをするものは泥棒だと思はうぜ！』

とんだことになつたもの、これではめつたに慈善を施す譯にもまゐりません。日頃善根に與つてゐた人達までが手の裏を飜すやう、前科者であつたといふ一事のため、すゝんでマドレーヌ市長を惡くいふやうになつて來ました。

このやうにして一時はモントルイユ市の誇りでありましたマ

ドレーヌ市長の名聲とその功績は、たつた二時間ばかりで幻影同様に消去つた、としか思はれなくなりましたが、しかし人の誠實がそんなに早く失はれていゝものでせうか？　いや、ほんの數人ではありましても、いつまでも〳〵忘れずにゐるものもある。邸宅の門番の婆さんもその中の一人でございます。

その晩のこと、この忠實な婆さんは、掻挘られるやうな悲しい胸を抱いて、しよんぼりと門番部屋の中に坐つてをりました。工場は朝から閉され、正門には閂がさゝれて、路にも人通りもない。家の中にはファンティーヌの亡骸が運んで來られまして、二人の尼僧が傍で通夜をしてやつてをります……。

をかしなことに、この婆さん、その晩も、いつもの時間が來ると習慣的に立上り、部屋の鍵や、手燭を毎日おくべき場所にちやんと揃へておきまして、いつマドレーヌ市長が歸つて來ても差支へないやうに、歸つて來ることを信じて疑はないやうに待構へてゐたものでございます。それから二時間ばかり經つとやうやく氣が着きまして、

老婆『おやまア、どうしたといふのでせう、いつもの通りお部屋の鍵を釘にかけておいたりして……！』

獨言をいふ言葉の下から、最早二度とお歸りがないのだと考へると、またしても胸が迫つて來ます。思はずはら〳〵と涙を滴しまして、

老婆『昨日の朝、お出掛けになる折りに、いつになく冗談を仰有ると思つたが……あゝ、どうなされてゐられるのだらう。もういつもお部屋でお寢みになつてゐる時刻だのに、今頃はさぞ……』

呟いてゐましたが、不意にぎよッとして言葉をきりました。この時、恰度この時でございます。眼の前の硝子窓が靜かに開き、一つの手が出て來て鍵と手燭をいつもの場所から受取り、別の蠟燭の火で手燭の小蠟燭に火を移すではありませんか！

老婆『あッ……！』

危く咽喉元まで込上げて來た叫聲をわづかに抑へた。その手、その腕、そのフロックの袖口にもはツきり見覺えがあります。紛れもないマドレーヌ市長でございます。

おッ魂消てしまつた婆さん、全くのところ暫くは口も利けなかつた。やうやくのこと自分に返つて、

老婆『まア、旦那さま、私はあなたが……』

牢屋にゐらッしやるとばかり思つてゐましたといはうとしたのでありまするが、この婆さんにとりましては、ジヤン・バルヂヤンは今でも變らぬ市長さまであり、旦那さまでございます。躊躇していひ淀みますと、その足りないところを補ふやうに、

ジヤン『牢屋の中にゐると思つてゐたのだらう。その通りだよ、婆さん。しかし日が暮れたから、私は鐵格子を破つて、屋根を飛下りて歸つて來たのだよ。居間に行つてゐる、サンプリス尼僧を呼んで來ておくれ！』

サンプリス尼僧はマドレーヌ市長に非常に心服し、またこち

らでも同じ信頼を拂つてゐる道徳堅固な修道女でございます。ファンティーヌの通夜をしてをりましたので、門番の婆さん、いはれる通りにいたしました。

聖女の僞言

どうしてジャン・バルヂャンが、門を開けさせもしないで庭内にはひつて來たか、これは後々までも長く疑問とされてをります。門番の婆さんにも、默つてゐても備つてくれることを信じきつてゐるやうに一言の注意もせず、そのまゝ居間にはひつて行つて、第一に燈火が外に洩れないやうに窓の雨戸を下しました。



『ジャシ・バルヂャンをお見かけになりませんでしたか？』

『いゝえ！』

部屋の中は、いつもの通り整然といたしてをります。これは婆さんが整へてくれましたのでございまして、急がず、騒がず、そはそはもしてゐないジャン・バルヂャン、戸棚から自分の古シャツを取出して幾つにも裂き、それでもつてあのミリエル僧正から貰つた二つの銀の燭臺を包んで荷造りする。この間にパンを噛る。これは脱走の時に監獄から持つて來たもの、後で警察から捜索に來て、床の上に落ちてゐたパン屑でそのことがわかりました。

さうかうしてゐるうち扉が低く叩かれた。サンプリス尼僧が青褪めた顏をしてはひつて來た。ペンを取上げたジャン・バルヂャン、一枚の紙に何事か認めまして、

ジャン『これをどうぞ敎會の司祭さんにお渡し下さい。ご覧になつてもいゝです！』

と差出す。受取つたサンプリス尼僧、讀んでみますると、

こゝに殘す一切のもの中より、訴訟費用及び

本日死去せる婦人の埋葬費御支拂ひの上、他は全部貧しき人々へ御施し下され度候

とある。サンプリス尼僧、何かいはうとするがいへない。やうやくのこと、

サン『市長さま、最後にもう一度あの可哀さうな女を見ておやりになりませんか？』



ジヤン『いや、私は追跡されてゐるのです。あの部屋で捕るばかりです。さうなると却つて安らかな魂を倒すことになりませう！』

いひも終らず階段にはげしい物音、大勢の人間が驅上つて來るのでございます。門番の婆さん、それを遮つて、出來るだけ高い、鋭い聲で叫びます。

老婆『あれ、二階には誰もおいでになりませんといふのに！私は一度も門を離れたことはありませんが、晝も、夜も、一人もはひつたものはありません！』

○『それでもあの部屋に燈火が見える。お上のご用で調べるのだ。退け！』

ジヤン『あれはジヤベルの聲だ！』

口のうちで呟いたジヤン・バルチヤン、ふツと手燭の火を吹消す。サンプリス尼僧は卓子の傍に跪きました。

この時早く、どツとドアーが開かれた。何人かの聲と、門番の婆さんのいひ張る聲とが廊下で聞える。ジヤベルがズイとはひつて來ました。

暖爐の上に立てられた一本の蠟燭が、部屋の中を佗しく照してゐます。いくら見まはしてもサンプリス尼僧一人きり、ジヤベルは狐にでも撮まれたやうにぼんやりとなつてしまひま

した。

さても奇怪、確かに睨つて來たのにゐないとは！　しかしそんな筈はないので、

ジャベ『サンプリス尼僧、少々お訊ねいたします。この部屋にはあなたお一人ですか？』

生れてこのかた一度も嘘をいつたことがないといふサンプリス尼僧、それだけジャベルにとりましてもその一言が重大な意義を持つのでございます。聞いてゐた門番の婆さん、哀れにも氣が遠くなりました。

恐しい一瞬間、サンプリス尼僧は靜かに眼をあげて、たつた一言、

サン『はい！』

ジャベ『私の職務です、執拗く訊くのをお許し下さい。あなたは、今晩、脱獄逃走したジャン・バルヂャンといふ男をお見掛けになりませんでしたか？』

サン『いゝえ！』

この聖女が、重罪犯人のために嘘を吐いたのでございます。生れてはじめて、躊躇もせずに、而もつゞけて二度も！　最早決定的なものだと知つたジャベル、部屋を搜索しようともせず、吹消されたばかりの手燭がまだ卓子の上で煙つてゐることさへも氣着かずに。

ジャベ『失禮いたしました！』

叮嚀にお辭儀をして出て行きました。その後で、開くとドアーの影になる闇から姿を現しましたるジャン・バルヂャン、一時間ほど經つと、木立と靄の中を、身には粗末な仕事着を着け、一つの包を抱いて、パリーの方をさして急いでゐました。どこでその上着を手に入れたかと申しますると、數日前に一人の老職工が病室で亡りまして、たつた一枚の上着しか殘して行かなかつた。多分それだらうといふことでございます。

（つゞく）

さあジャン・バルヂャン果して逃げおほせるでございませうか？　哀れなるコゼットは今どうなつてゐるでございませうか？　悲慘、崇高、壯烈を極むる『噫無情』の物語は、これからいよ〳〵本舞臺に入ります。次號を樂しみにお待ち下さい。尚この感激にみちた世界的物語は、是非全日本の方々に、男子といはず婦人といはず、殊に青年男女、少年少女の方々には一人殘らず讀んで頂きたいものです。御家庭の方々は勿論御知合の方々に是非御吹聽を願ひます。

滿天下熱狂の聲！

○記者樣、どうぞ哀れなファンティーヌを救けて下さいまし。子を思ふ母の情けにすつかり泣かされました（横濱、木村富子）

○マドレーヌ市長がジャン・バルヂャンとは驚きました。マドレーヌ市長が自首すると否とに拘らず、私はジャン・バルヂャンの幸福を祈ります。（福岡、永川俊子）

○噫無情！　かねてその名は聞いて居ましたがこんなに面白い物とは知りませんでした。之を講談にして紹介して下さつたキングに感謝します。（北海道、笠太郎）



一癖

劍道範士 島谷八十八

劍道の極意に、『雲慶能面の作』と謂ふことがあります。

これは――雲慶が、能面を作るときの呼吸を云ひあらはして、それを劍道の修業にたとへたのです。

雲慶が能面をつくるには、先づ大まかな形をつくる。そして、鼻と耳を大きくとる。それから目をとる。口をとる。さうして、大體の形をとると、目の恰好をよくし、口と目と鼻との釣合ひを見て、今度は大きくとつてある耳の形を、他に合はして小さくして、最後の一點、眼球を入れる。かうして完全に、能面が出來上るのです。

劍道に於いても亦これと同じで、最初は、すこしボンヤリしたやうな大まかな技から、漸次に釣合ひがとれるやうに進ませるのが、指導者のつとめであります。

たとへば能面に於て、目も、鼻も、口も、耳も、最初から釣合ひがとれるやうに刻んで行くと云ふことは出來ない、それでは、目をもう少し大きくしようと思つても、最初にとつた釣合ひを破ることになるから、出來ないことになります。



癖――耳と鼻を大まかにとれば、その能面に癖がある。しかしこの癖は、段々にとることが出來る。同樣に、劍道でも、所謂心、氣、力の三者が、最初から釣合ひがとれてゐると云ふことは、なか〳〵困難で、若しさう云ふのがありとしても、それは大した上達は見られないものです。

徂徠先生の言葉に、『人材とは、何ぞ癖のあるものなり』と云ふことがあるさうですが、劍の道に於ても同樣のやうに考へられます。

癖は、その劍の長所です。

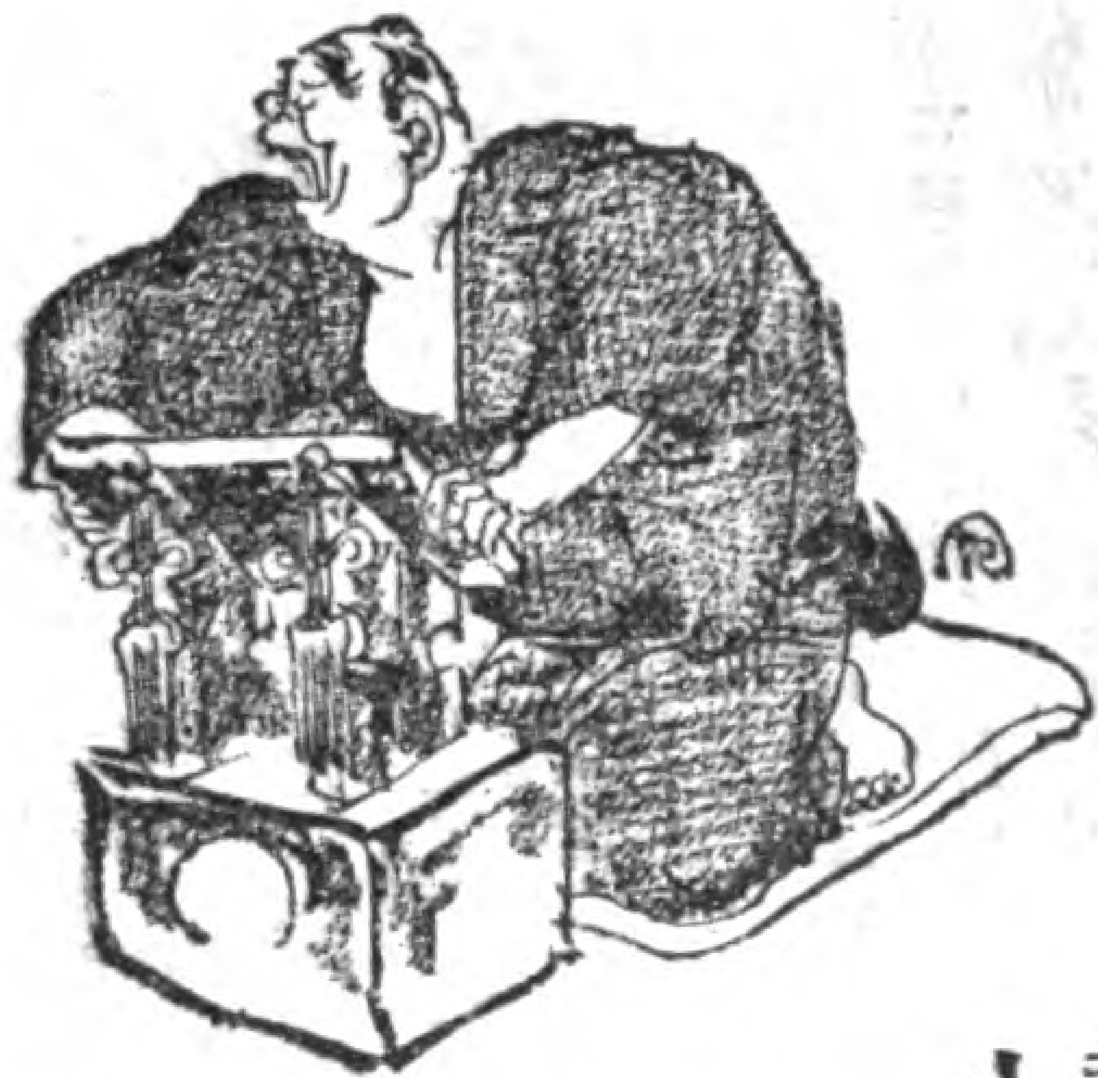
ですから、多少その癖が、定石に合はず、釣合ひがとれてゐないやうなものでも、それを長所として伸ばして行き、さうしてゐるうちに、他に立派な長所が出來たら、その時、これまでのかたよつた癖を直すやうにして仕上げて行く――それでいゝのだと思ひます。

癖は一概に排斥することは出來ません。私は、かう云ふ態度で、修行者に對して居ります。

――寫眞は島谷範士――

諧謔小説　ガラマサどん

佐々木邦
細木原青起畫



一國一城の主

『やあ。』

と言つて西洋間へ戻つて來た社長は果して獨りきりだつた。

『いつまでもお邪魔申上げてゐます。』

と中島さんが私達の心持を表現してくれた。

『お待たせしたね。』

『何う致しまして。』

『一寸吸入をしてゐたものだから。』

と説明して、社長が席につく途端、私は松本君と顔を見合せた。社長は本式に義太夫を語る前に必ず吸入をする。

『はゝあ。』

と中島さんが受けて、

『赤石さんはもうお歸りになりましたか？』

と訊いた。

『もう先刻。』

『それではあの自動車の音が然うでしたな。』

『うむ、三十分ばかり前だ。』

『……』

『あの男は人のものにケチをつける名人だが、今夜丈けはアッと言つたよ。』

『はゝあ。』

『天狗丈けあつて、目が利いてゐる。一々無條件で感服して行つた。』

『お急ぎになつたんぢやないでせうか？』

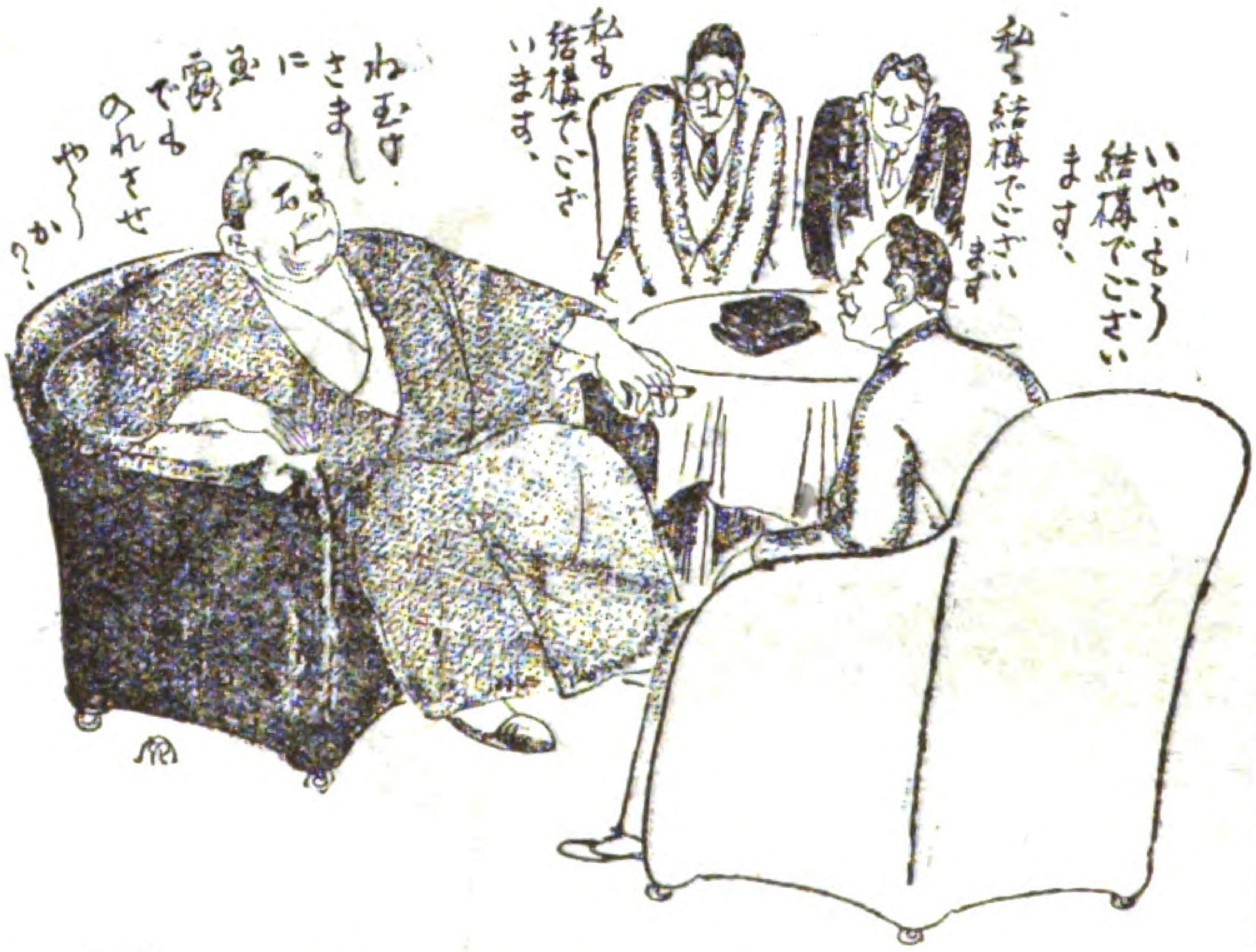
『まさか。』

『非常な養生家で夜分は十時きつかりにお休みになるんださうですから。』

『成程。』

『いや、九時ださうでございますよ。』

と松本さんが口を出した。
『ハッハ、、。それぢゃ一杯食はされた。』
と社長は額を叩いてゐた。
『ハッハ、、。』
と私達も覺えず笑ひ出した。社長にはこの通り間の抜けたところがあるから、叱られる時は口惜しくても、後から直ぐに好感を持つ。
『ところで何うだね？』
『はあ？』と中島さんが構へた。社長の「何うだね？」は普通の人の「何うだね？」と違ふ。肚の中で豫定を拵へて置いて、それに同意を求めるのだ。例へば社長室で仕事をしてゐて、丁度お晝頃だとする。
『松本君、ところで何うだね？』
『食堂へお供申上げませう。』
『行かう。』
と思ふ壺なら御滿足だ。
『松本君、ところで何うだね？』
『雲切れがして來ましたから、お天氣になりませう。』
『何を言つてゐるんだ？』
『はあ。』



『先刻の手紙は出來たかと訊いてゐるんだ。』
『あゝ、然うでしたか？』
『相變らず頭が悪いね。』
『しかし社長は唯今お天氣のことを仰有いましたから。』
『天氣と仕事と何方が大切だ？ 窓から雲切れなんか見てゐるから捗らない。』
と直ぐ御機嫌を悪くしてしまふ。この邊、中島さんは心得たもの。テッキリ義太夫と覺悟をしたやうだつたが、早まつて叱られては詰まらないから、一應猶豫を求める爲めに、
『はあ？』
と返辭だか質問だか分らない受け方をしたのである。
『睡氣ざましに玉露でも入れさせようか？』
と社長は未だ義太夫でなかつた。しかし確かにその下拵へだつた。
『いや、もう結構でございます。』
『松本君は？』
『私も結構でございます。』
『熊野君は？』
『私も結構でございます。』

『皆同じくか？』
『もう大分晩うございますから。』と中島さんは時計を出して見た。先刻から幾度も出して見て、十時過のことが分つてゐた。
『十時十一時は我輩の宵の口だよ。』
『社長は相變らず精力絶倫でいらつしやいますな。』
『そんなこともないさ、年が寄つたよ。』
『私達少壯連中の迚も及ぶところぢやございません。』
『君達は然う直ぐ諦めるからいけない。』
『人間は心の持ちやう一つだよ。睡いと思へば睡い。睡くないと思へば睡くない。』
『はあ。』
『我輩は赤石君と行き方が違ふ。赤石君は養生の爲めに九時に寢るさうだが、君、寢てゐる間は死んでゐるのも同じことだよ。』
『無意識だからですか？』
『うむ。寢てゐる間は頭が働かない。醉生夢死、不自覺也で、生きてゐても勘定に入らない。』
『成程。』
『九時に寢て何時に起きるのだらう？　赤石君は。』



『さあ。』
『五時きつかりださうでございます。』と松木さんは又知つてゐた。
『九時から五時といふと何時間だらう？』と社長は指折り數へて、
『八時間だね。我輩は四時間だ。見給へ。我輩は半分しか寢ない。』と夕食後一時間ばかり微睡むことは棚へ上げて、大に主張した。
『はあ。』
『赤石君よりは毎日四時間長生をしてゐる。』『然ういふ勘定になりますな。』
『毎日八時間死んで長生をしよつてのは料簡が分らない。』
『成程。不老長壽法にも自家撞着がございますな。』と中島さんは要所々々を決して外さない。
『算盤に乘らない長壽法は駄目だよ。』
『しかし社長と赤石さんは一緒になりません。赤石さんが社長の眞似をなされば一週間で參つてしまひます。』
『ハツハヽヽ。』
『社長は特別でございますから、一般の標準になりません。』

『いや、それが心掛け一つだ。我輩は元來こんな頑健な人間ぢやなかつた。自敍傳にも書かせてゐる通り、實は月足らずで生れて來て、育つか何うか疑問だつた。君、熊野君。』
『はあ。』
と私は頷いた。
『熊野君は職務柄我輩の日常を研究してゐるから、何でもよく知つてゐる。この間中は二人で毎晩首つ引きだつた。熊野君もナカ〳〵元氣旺盛だよ。』
『何う致しまして。』
『勇將の下に弱卒なしでございませう。』
と中島さんが調子を合せた。
『我輩の感化を受けて、昨今は欠伸をしなくなつたね。熊野君。』
『いや。時々お小言を頂戴致します。』
『我輩は自分が睡がらない方だから、欠伸をされるのが一番厭だ。』
『…………』
『欠伸は頭の中の發條が弛むでゐる證據だよ。』

『はあ。』
『會社でも幹部丈けは流石に緊張してゐる。重役で欠伸をするものは一人もない。尤も赤石君のやうに八時間も寢れば、賴まれても出來まいけれど。』
『ハッハヽヽヽ。』
と私達の笑つた聲には悲壯なものがあつた。これから語つて聽かせるから欠伸をするなといふ警告である。日本間の方ではお師匠さんが待ち草臥れてゐるのか、三味線を彈き始めた。社長は無言のまゝ、それを指の先で合せてゐたが、忽ち、
『ところで何うだね？　中島君。』
と頭を擡げた。
『一段拜聽させて戴けませんか？』
と中島さんは正解した。尤もこれを履き違へるやうなら庶務課長は勤まらない。三味線が紛れのない註釋を加へてゐる。
『何だい？　義太夫かい？』
と社長は押しが太い。所望されて據ろなく語る形式にしたいのだ。
『はあ。』

『これは驚いた。』
『もう晩うございますかな？』
と中島さんも巧者、あはよくば禮儀丈け盡して逃げ出さうとする。
『今も言ふ通り、十時十一時は我輩の宵の

口だよ。』

『御迷惑でございませんければ、久しぶりで一段。』

『所望とあれば後には引かない。彼方へ行かう。』

と社長は直ぐに立つた。

日本間へお供をすると、お師匠さんは悉皆支度をしてゐた。私は時々聴かされるので見知り越し以上の間柄だ。私も同情してゐるが、先方でも同情してくれる。松本君は古いから私よりも懇意だ。社長は、

『中島君、これは兜太夫。』

と簡單に紹介した。

『太夫さん、暫くでございましたな。宜しくお願ひ申上げます。』

と松本さんは特別念入りに挨拶した。お手軟かにといふ意味らしかつた。

『會社の忘年會でお目にかゝりました。』

と中島さんも努めた。

『お引き立てにあづかりまして。』

『我輩と同じやうに瞬がらない太夫さんだよ。』

と社長が言つた。



『何う致しまして。ヘツヘ、、、』

と太夫さんは顔中を皺だらけにして笑つた。

『この太夫さんの豪いところは瞬きをしないことだ。』

『………』

『中島君、瞬きをしないことだよ。』

『はゝあ。』と中島さんは慌てゝ應じた。

『我輩もしないが、太夫は堂に入つたものだ、矢張り藝の力つてものは恐ろしい。』

『成程。社長は滅多に瞬きをなさいませんな。』

『瞬きは神經衰弱の徴候さ。』

『圖星でございますな。私なぞは至つて頻繁です。』

『先刻も見てゐたが、續けさまにして、それでも間に合はなくなると目を瞑るよ。』

『これは〱。悪いところを御覧に入れてしまひましたな。』

『ハツハ、、、。』

『しかし魚なんかと違つて、人間ですから、絶對に瞬きをしないではゐられますまい?』

『無論比較的の話さ、瞬きをしちやならんとは言はない。しかし人間、一生懸命の時は目を見張つてゐる。精神が緊張してゐれば瞬きをすることが尠い。』

と社長はこれも自慢の一つだ。欠伸を封じた上に瞬きをしないで拜聽しろと仰有るのだから助からない。松本君が何んな顔をしてゐるかと思つて、密つと横目を使つたら、先方も私の顔を見てゐた。

『矢張り陣屋をお語りになりますか？』

と太夫さんが社長に訊いた。打ち合せがしてあつた。

『うむ。同じやるなら、あれが宜い。』

『少しお長くはございませんか？』

『何あに。今日は聲がタツプリだから。』

『へい〳〵。』

『諸君、一谷嫩軍記熊谷陣屋の段を語る。』

『はゝあ。』

と私達は緊張した。

『社長さんの熊谷は天下一品でございます。』

と太夫さんも心得たものだ。

『そんなこともないが、あゝいふ荒武者は柄に合つてゐると見えて、やり宜いんだ。』

『私共が致しますと、幾ら大聲を張り揚げても、熊谷になれません。下司は情けないものでございますよ。』

『…………』

『そこへ行くと社長さんは斯うして默つて坐つていらつしやつても、そのまゝ熊谷次郎直實でございます。肚が出來ていらつしやるから敵ひません。人格の力は恐ろしいものでございますな。』

『…………』

『その人になり切るのでございます。熊谷ばかりぢやございません。猿廻しの與次郎になれば如何にもその日暮らしの憐れでものらしく、お俊になれば矢張りお俊らしく、夫れ〳〵御工夫をなさいます。藝事でも何でも詰まるところは頭でございますよ。私はお師匠さんとして毎度お稽古に上りますもの、實は私の方が教へられて、感心して歸ることが度々ございます。』

『おい〳〵。口上はそれぐらゐにして置いて、始めた〳〵。』

と社長は上機嫌だつた。

前彈きの間、社長が目を瞑つてゐたのを幸ひに、中島さんは思ひさま瞬きをした。溜置きの積りだつたらう。

『奥へつれて行く。相模は障子押し開き、日もはや西に傾きしに、夫の歸りの晩さよと、待つ間程なく、熊谷次郎直實……』

とこれは先頃から稽古中のもので、私は二度聽かされて、非常に長いものだといふこと丈け頭に殘つてゐた。氣をつけて時間を計つて見たら、一時間と二十分かゝつた。その間、欠伸をし

て昇給を棒に振つては溜まらないから、私達は固唾を吞むで身動きもしなかつた。

『……有為轉變の世の中やと、互に見合す顔と顔。さらばく おさらばの、聲も涙に掻き曇り、別れてこそは出て行く。』

『テ、ン。』

とお師匠さんは彈き終つた。私はいつもこのテ、ンで愁眉を開く。

『何うも有難うございました。』

と中島さんが代表してお禮を述べた。

『大汗だ。』

と社長は直ぐに肌を脱いた。女中が 恭しくタウルを捧げる。もう一人は後ろから拭く。

『今晩は素晴らしいお出來でございました。』

と太夫さんが褒めた。

『聽き手があると調子に乘るからね。』

『へい。』

『何處が好かつたね？』

『何處も彼處も申分ございません。』

『そんな無責任な批評は御免蒙る。特別好かつたところを言つて見給へ。』

と社長は素より好いに定めてゐる。

『十六年も一昔。』

『うむ。』

『あゝ夢であつたなあと。あの邊が如何にもシンミリとお出來になりました。』

『得意のところだもの。』

『私共は熊谷ほど悟り切れませんから、彼處が迚もあゝ参りません。何うしても苦情らしくなります。何しろ女房に相談なしに頭を圓めて出家をするんですから、筋が無理でございますよ。』

『無理なことはないさ。』

『へい。』

『その時の熊谷の心持になれば悟れるんだ。』

『なれませんよ。後で女房が困ります。』

『馬鹿だね。ハツハ、、。』

『ヘツヘ、、。』と太夫さんは頭を掻いた。

『しかし實を言ふと、我輩も熊谷ぢや少し食ひ足りない。』

『何と仰有いますか？』

『あの時代に生れ合せれば、一國一城の主になつてゐる積りだ。』

『お大名でございますな？』
『うむ。』
『唯今でも御財産から申上げれば立派なお大名でございます。』
『何うもお前は賤しくていけない。』
『へい〳〵。』
『一國一城の主にしてからが、我輩の性格では何うも終りを全うしさうもない。光秀だらうね、差詰め。光秀を語ると我輩の本領がそのまゝ現れる。』
『太功記は社長さんの十八番物でございますな。』
『何うだね？』
と社長は太功記を語りたいのだつた。
『へい。』
『草臥れたかね？』
『そんなこともございませんが……』
と太夫さんはお辭儀をしながら私達に訴へるやうな目使ひをした。
『社長。』
『何だい？』
と中島さんも慌てたやうだつた。



『もう十二時半でございます。』
『明日の仕事に差支へるかね？』
『はあ。これから歸ると一時過になります。』
『惜しいけれど仕方がない。又出直して來給へ。』
『はあ。』
『金曜の晩はいつもこの太夫さんか三味線の人が來てゐる。君の課のものを引きつれて來給へ。』
『有難うございます。』
『今晩は御苦勞だつたね。』
『何う致しまして。』
『君あたりが中堅だ。若いものゝ爲に氣を利かしてくれて、眞に好都合だつた。』
と社長は流石に中島さんを犒ふことを忘れなかつた。
私達は太夫さんとも四人、社長の自動車に乗り込むだ。私は一番近いので、前の席を占めた。門を出切つた時、
『あゝ〳〵、あゝあ。』
と中島さんが大欠伸をして、
『ひどい目に會つた。』
と呟いた。

『本當に御苦勞さまでございました。』

と太夫さんが同情した。

『いや、何、太夫さんこそお草臥れでせう?』

『私は商賣でございますから。』

『お宅は何處ですか?』

『淺草です。』

『大變ですな。』

『何あに、斯ういふ便利なもので送つて戴きますから。』

『いつもこんなに晩くなるんですか?』

『へい。一時二時のこともございます。今晩なぞも、もう一段お始めになりますと、極く早く仕舞つても二時でございませうな。』

『危いところでしたね。あゝ、あゝ。』

『あゝあ。』

と松本さんも欠伸をして、

『感染しますな、欠伸は。』

と隣りの中島さんの所爲にした

中島さんは眞中に乘つてゐた。

『もう一段語られたら逆せ上つてしまふ。』



『眞正面だからひません。』

『あゝあ、實際草臥れた。』

『しかし中島さん、一段拜聽させて戴けませんかなんて、御所望をなすつたのは一體何方でしたか?』

『何だつて?』

『御所望をなすつた張本人ですよ。』

『冗談言つちやいけないよ。』

『はあ?』

『君は一體誰の爲めに僕が出て來たと思つてゐるんだ?』

と中島さんは怕つてしまつた。

『恐れ入りました。』

『赤石さんから一時間以上骨董の講釋を聽かされた上に、又一時間半だぜ。』

『はあ。』

『瞬きをするの何のつて叱られてさ。』

『申譯ございません。』

『少しは察してくれなければ困るよ。何も醉狂で所望したんぢやないんだから。』

『全くお蔭さまです。飛んだ失禮を申上げました。』

と松本さんはあやまる外なかつた。

ました。』

と私も言葉を添へた。喉元過ぎて熱さを忘れる。夕刻中島さんの家を出る時は悄げ返つてゐたけれど、無事に首が繋がると共に、もう好い氣になつて、お禮さへ碌々言はなかつたのである。しかし中島さんは、

『もう宜いよ。』

と直ぐに機嫌を直して、

『時に太夫さん。』

とお隣りへ話しかけた。太夫さんはお歴々と同乗した積りで恐懼してゐる。そこへ首の問題なんか持ち出しては氣が利かない。

『へい〳〵。』

『大將の義太夫は何んなものですか？』

『へい。』

『あれで巧いんですか？』

『さやう。』

『駈引のないところ？』

『學のあるお方でいらつしやいますから、理窟の方はナカ〳〵仰有います。』

『實際の方は拙いんでせう？』

『何う致しまして。ナカ〳〵お耳が肥えていらつしやいます。』

『自分で語る方は何うですか？』

『もう隨分長くやつていらつしやいますから。』

『多少堂に入つてゐるんですか？』

『私が先の師匠に代つてから五年でございます。先の師匠は私の師匠で近頃にない名人でございました。これに十年もおつきになつたんですから、御研究は充分積むでいらつしやいます。』

『長いことは分つてゐますが、見込があるんですか？　ないんですか？』

『すべて藝事といふものは一生涯修業でございますよ。』

と太夫さんは明答を避けた。

『要するに拙いんですな。』

『いや、何う致しまして。』

『太夫さんもお骨が折れませう。』

『へい。』

『結局、持て餘しものだと仰有らないばかりぢやありませんか？』

と私が笑つた時、太夫さんは目をパチクリさせて、私を指で差した。

『何ですか？』

『後ろ。』

『え？』

『運轉手。』

と太夫さんが囁いた。成程。これに聞かれて社長へ筒抜ければ、太夫さんも立場が危い。

『矢つ張り長くやつてゐられる丈けあつて、好いところがありますね。』

と中島さんも氣がついて、大きな聲で話し始めた。

『現に角、その人になり切ります。熊谷なら熊谷。』

『成程。』

『與次郎なら與次郎。』

『成程。』

『お俊ならお俊。一寸これは柄にないやうですが、巧いものでございますよ。』

と太夫さんは改めて褒め出した。

『お俊傳兵衛ですな？』

『へい。』

『一遍拜聽したいものですな。あゝあ。』

『肚の出來たお方ですから、時に玄人跣足のところがございます。』

『あゝあ。あゝあゝあ。』と中島さんは欠伸が込み上げて來た。

『あゝあ。』と松本さんも負けてゐない。

『僕はもう直ぐだ。』と私は窓外へ注意を拂つた。

『家へ土産に持つて歸るのかい？』

『うむ。』

『しかし君は始終接近してゐる丈けに修業が積むだね。』

『欠伸でございますか？』

と太夫さんが首を伸した。

『はあ。』

『私もあれでは困り切りました。』

『小言を仰有るでせう？』

『へい。しかし近頃は工夫を致しました。』

『はゝあ。』

『三味線を彈きながら鼻で致します。』

『そんなことが出來ますかね？』

『出來ますとも。斯ういふ具合でございます。一寸變な顏になりますけれど元來こんな顏でございますから。』

『成程。』

『ヘッヘヽヽ。』

『ハッハヽヽ。』

と一同笑ひ出したので、運轉手が振り向いた。

『その角のところで一寸止めてくれ給へ、御苦勞さま。』

と私は丁度好かつた。

翌朝、會社で顔を合せると直ぐ、松本さんと私は庶務課へ出頭して、中島さんにお禮を申述べた。

『こゝ當分特別に氣をつけ給へよ。』

と中島さんは注意してくれた丈けで、もう愚痴をこぼさなかつた。

『熊野君。』

と庶務課の奥の宣傳部から畑君が私を見かけて出て來た。

『お早う。』

『一寸々々。』

『何だい？』

と私は引つ張られるまゝに隅の方へついて行つた。

『宜かつたのかい？』

『何が？』



『これさ。』

と畑君は自分の首を叩いて見せた。

『無事に繋がつた。しかし君はよく知つてゐるね？』

『評判だぜ。』

『ふうむ。』

『エレベーター事件といつて昨日から持ち切つてゐる。』

『驚いたね。』

『秘書が二人首になると言つて、皆溜飲を下げてゐる。』

『道理で今朝僕の顔をジロ／＼見る奴があつた。』

『氣をつけ給へ。』

『心配してゐたのかい？』

『當り前さ。傍目の見るところ、君は昨今調子に乘り過ぎてゐる。』

『これをこゝの親方からも言はれたんだよ。一時は一寸脈がなかつた。』

『危い／＼。』

『こゝの親方に口をきいて貰つて、昨夜一晩がかりでお詫が叶つた。』

『まあ／＼、宜かつた。これに懲りなけりやいけないよ。』

『以來大に愼む。しかし一體何處から洩れたんだらう？』

『エレベーター・ボーイさ。可哀さうに、首になつたぜ。』
『いや、來てゐるよ。』
『然うかい？』
『矢つ張りお詫が叶つたんだらう？　それぢや失敬。種々と御心配有難う。』
と私は畑君の好意を謝した。以前宣傳部に机を並べてゐて最も懇意の間柄だ。
廊下へ出たら、販賣課長の栗柄さんに行き會つた。
『お早う。』
と聲をかけると同時に、
『何うでした？　エレベーター事件は。』
と來た。
『お灸丈けで事濟みになりました。』
『それは宜かつたね。皆心配してゐたよ。』
『有難うございます。』
『熱かつたらう？　お灸は。』
『はあ。』
『中島君から赤石さん、赤石さんから社長と、どう／＼めぐりをしてゐる中に夜が明けたらう？』



『それほどでもありませんが、よく御存知ですな。』
『ハッハ、、、。』
『ひどい目に會ひました。』
『少し強藥の必要があると言つてゐたもの。』
『はゝあ。誰ですか？』
『天機洩らし難い。』
『矢つ張り豫定でしたかな。』
『一段聽かされさうなことだと思つて案じてゐたが、何うだつたね？』
『聽かされましたよ。』
『ハッハ、、、。』
『失禮致します。』
と私は逃げて來た。
『何うも變だよ。』
と松本さんが一足後れに入つて來た。
『何處へ行つてゐたんだい？』
『竹内さんに捉まつて、散々冷かされた。』
『僕は今栗柄さんに捉まつた。』
『何と言つてゐたい？』
『あの人のことだから、何うせ碌なことは言はない。考へて見ると、昨日のことはあんなに心配しなくても宜かつたらしい。』
と下司の智惠は後からで、私も一晩寢て起きて漸く分つた。

『僕も然う思ふんだ。懲らしめのために、大將と中島さんの間に豫め打ち合せがしてあつたんだ。』
『悉皆引つかゝつたよ。』
『矢つ張り敵はない。』
『それと覺つたところであやまりに行かなければ危いんだからね。』
『所謂長いものさ。』
『捲かれろ〳〵か？』
『それにしても誰も彼も知つてゐるには驚いたよ。清水君にも會つたが、エレベーター事件は何うでしたつて訊くんだもの。』
『そこが懲らしめの爲さ。僕達の肩身を狹くしようつてんだ。』
『實際肩身が狹い。この二三日はこゝに閉ぢ籠つてゐて餘り出て歩かないことだね。』と松本さんは元氣がない。
社長はいつもの通り十時に出勤した。
『お早うございます。』
と私達は手のものを置いて出迎へた。
『お早う。』
『昨晩は失禮申上げました。』
『何うだね？』
『はあ？』
と松本さんは猶豫を申入れた。
『何うだね？ 旅野君。』
『エレベーター事件でございますか？』と私は朝からそればかり頭にあつたので、つい口に出してしまつた。
『何を言つてゐるんだ？ 寢が足りなかつたと見えて頭が惡いね。』と社長はもう意に介してゐないやうだつた。（つゞく）

◎佐々木氏のガラマサどんは實にうまい。社長、重役、社員、全く現實そのまゝだ。人情の機微、世相の裏表、かゆい所へ手のとゞくやうに描いてあり、面白い中にいろ〳〵敎へらるゝところがある。こんなのが本當の小說といふべきであらう。（德島、森安律太）
◎ガラマサどんに出て來る人物は悉く善人で、讀んでとても氣持がよい。私の宅ではお祖父さんも、お父さんも、兄さんもガラマサどんが大好きです。（京都、大角忠助）



ユーモア小品

或百貨店の賣場の主任、重役の所へ來て、『店員の中に一人困つた男が居まして……』
『何ういふ男だね。その店員は』
『風采も立派ですし却々美男子なンですが、何をやらしても駄目なンです。只もうコクリコクリ居眠りばかりして居て全で役に立ちませんので……』
重役は暫く考へて居ましたが『では今からその男を今度賣り出した寢衣の特賣場へ廻したまへ。そして、かういふ文句を書いたビラを、その男の胸へブラ下げて置くんだ』
斯う言ッて重役はスラ〳〵と用箋へ二三行。

此の當店特製の寢衣をお召しになりますと、毎晩實によくお寢みになれます。現にこれを販賣中の店員ですら、これ此の通りであります。

貧血・肺結核に＝

山內醫學博士の業蹟

ブレー

血液の素

細菌學病理學の世界的權威たる醫學博士山內保先生は、帝大卒業後直ちに獨、墺、英、佛、に留學十有餘年、其間有名なる巴里パストール研究所に於て不世出の碩學メチニコッフ博士の片腕となつて、博士の物故さるゝまで研鑽十年、遺言により博士の遺骸を解剖せられしも吾山內先生であります、先生が在歐中種々の新研究を發表して學界に貢獻せられしことは遍ねく知らるゝ所でありますが、更に其の傍ら深遠なる薀蓄を臨床治療の實際に試みて、幾多の患者を起死回生せしめられたのである、殊にブレーヴロールは其の光榮ある業蹟を代表するに足るものであつて、數千の肺結核貧血等の治療成績に於て動かすべからざる確信を得られたる卓效藥にして、今や先生の嚴格なる監督の下に製劑せられ、恩惠の博大なる民間藥として頒たるゝに至りたるは、醫術最後の目的を達成されたものである。

何ぞ迷へる人の多き

治療法の解決は簡單＝明瞭である

醫學博士 山內保先生談

世間の人は誰も皆同じ様に常に結核菌のある空氣を呼吸して居るのに、肺病に罹る人があり肺病に罹らぬ人もあるのは何故であるか？身體の强健な人は、良い血液に富んで居るから、血液中の抗毒素により抵抗力が强く、又白血球が病菌を喰ひ滅ぼすから、肺結核患者と寢食を共にしても肺病に罹らないが、體質の虚弱貧血の人は、食菌作用をなす白血球が乏しいから結核菌が侵入し易くて肺病に罹り

斯界に類を絶した

◉特長

ブレーヴロールは、今日までの學者が未だ考へ及ばざりし卓見と、又多くの學者が既に試みても到底至難なりとせられて居た醫化學上の難關突破とによりて、左の三ッの目的を併せて完成を告げたものである。

一、神經系統を復活し生理機能を亢進する特效劑を巧みに配合してあるから、單に榮養分だけを幾ら攝取しても、素通りする衰弱胃腸も、目覺めるが如く機能活潑となり吸收が敏活になる。

一、生に必要なる幾多複雜の成分を、極めて精密なる合理的比率によつて集成され、而も消化を要せずして、飲むもの全部が迅速に吸收同化され易い狀態に置かれてあるから、如何に重篤絶食の病人でも本劑を與ふれば、幾日間でも榮養には少しも心配のない程貴重なる眞價を有するものである。

一、芳香美味榮養價値多き葡萄果汁を基礎材料とし、如何に食思を失ひたる場合でも、本劑だけはウマイと思つて嗜好的に愛飲され、食慾を誘進し便通を整へる。

故に本劑を服用すれば、血色素、白血球、抗毒素に富みたる新鮮の血液を朝に晩に增生して、神經組織を養ひ肉を造り體質を强壯ならしめ、治癒力旺盛なる健康細胞を新生殖するので、やつれたる病人も目に見えて血色よくなり身體が力付き元氣を增進し、闘病全治の根本力たる自然療能の强調は、對症藥より遙かに勝りて益々著るしく病苦症狀を輕快ならしめつゝ、意外の短日數間に根本的に健康を回復し、病床を拂ふて愉快なる活動の一新生涯に感謝する人々數ふるに遑なく、殊に一般病人の夏負けを憂慮すべき暑中より、ややもすれば病狀の革まり易き秋口にかけて、一層信頼すべき命の綱として御すゝめ申上ます。

ヴロール

適應症
肺結核。肺尖加答兒。肋膜炎。病後恢復期。貧血症。榮養不良。神經衰弱。腺病質。

◎說明書進呈

結核菌より發生する毒素に對しても抗毒素が弱いから直ぐ發熱、咳嗽、盜汗其他の症狀が募り、身體の弱い人ほど病勢が進行し易く、貧血衰弱の極は、遂に病に負けて再び起つ能はざるに至るのである貧血虛弱の腺病體質を肺病素質と稱するのも之れが爲めである。それで肺病の病原體は結核菌であつても、肺病の眞の原因は貧血虛弱の體質である、是れは誰も理解し易い極めて明白なことである。

先づ此の道理が分かつた以上は肺病、肋膜炎（肋膜炎も十中八九は結核性である）を如何にして治療すべきかと云ふ問題も、竹を割るが如く節を逐うて直ぐ解決されるのである。

貧血虛弱の體質が原因となり下地となつて罹つて居る病氣であるから、此の弱い身體を無暗に藥攻めにするのは却つていけない、新らしい血液を殖やし體力を造り虛弱體質を强健化するのが、回復の唯一の基調である。

治療の法則は此の如く簡單明瞭であるのに、本を忘れて末に走り、解熱、鎭咳、制汗の如き對症藥によつて根本的回復を望むのは大なる迷ひである、か丶る對症藥の多くは一時の病苦を忘れても、副作用の爲め却て身體をます〱惡くするから、全治の目的から見れば寧ろ有害無益である、須らくその眞の原因に目覺めて根本的治療法に立返らねばならない。

元來肺結核は比較的治り易い病である、又世人が青春期の肺病は進行し易く治り難い樣に思つて居るのも大間違ひで、年の若い程全治率が多く十二歲前後が最も治り方が早いのである、肺病は治ると云ふ斷言を一番明確に證據立てるのは解剖の結果である、澤山解剖をして見ると、七十八十の天壽を全うして終つた人の肺臓中に、肺結核の完全に治癒して居る痕跡を見出すことが屢〻ある、それは何う云ふ樣に治癒して居るかと云へば、結核病竈の周圍に結締組織が生じ、結核菌の繁殖を絕つた病竈をスッカリ包み込んで所謂固まつた狀態に於て完全に治癒して居るのであつて、肺結核が治るのは、かかる狀態に治癒することあるのみで、他には絕對に治り樣がないのである。

新鮮なる良い血液が増生して、肺臓へ密布せる血管網へも十二分に循環すると、血液中の白血球は如何なる藥物を如何なる方法で用ひても効力の達する能はざる肺臓病竈内の結核菌を、微妙なる食菌作用によつて滅亡せしむると同時に、血液中の抗毒素は、結核菌より發生しいろ〱の病苦症状を惹起して居る病毒に抵抗して之れを撲滅するから、發熱、咳嗽、盜汗、喀血などの症状も、最も力强き自然療能により、對症藥以上に速やかに輕快ならしめ、血液の榮養により健康的細胞は病竈の周圍に結締組織を新生し、病竈を包み込んで完全に治癒するのであるが、新鮮血液を増生し、體質を强健化し、治癒を早めるのに、ブレーヴロールの右に出づるものなきことは、自分が學理的研究の上に於て、極めて精密に最善を盡くせるのみならず、既に數多の臨床實驗によつて決定的確信を有する所である。（文責在筆記者）



□ブレーヴロール
定價　一瓶金貳圓八拾錢（約三百瓦入大人凡十日分）＝送料金卅錢、新領土五拾錢
＝代引廿錢增＝

販賣店
東京、大阪、三越藥品部
東京、名古屋、松坂屋藥品部
白木屋、松屋
ほてい屋、灰吹屋
中田支店、齋藤滿平
資生堂、横濱櫻井
（其他全國有名藥店に有り　品切の節は直接發賣元へ）

本舖　東京市京橋區具足町五番地
山内製藥所營業部
電話京橋(56)七〇〇〇番　振替東京三五五五七番

特約店
東京　玉置　大木
大阪　高橋　丹平



どういふ譯でせうか

質問歡迎（用紙ハガキ。〆切九月二十日。宛名……キング編輯局）



問 **物價に高低の出來るのは、どう云ふ譯でせうか**

答 凡そ物價の高低には三つの主なる原因があります。

第一は需要供給の關係です。例へば米作が豐年だと供給が增して、これを需要しきれず、米が有餘る結果その値段は下ります。反對に凶年だと、米が足らぬため値段は高くなります。

第二は生產費の變化です。近頃のやうに製造の規模が大きくなり、機械の利用その他によつて製造技術が進步すると、品物を生產するに要する費用が廉くてすむから從つてその價格も廉くなる譯です。



第三は貨幣の增減です。即ち國內に貨幣が增加すると、品物に對しお金の量が多いので物價は高くなります。反對に國內に流通する貨幣が減少すると、物價は安くなります。

なほ、右以外に輸入品に稅金を課するとそれだけ値が上るし、酒などに消費稅をかけると酒が高くなる。等々、政府の方針でも物價が高くなつたり廉くなつたりいたします。

問 **ラムネやソーダ水などを飲むと胸がすくのはなぜでせうか**

答 ラムネ、ソーダ水、サイダーなどは、淸水に炭酸ソーダ及び果汁や砂糖のやうな味を加へ、更に多量の炭酸瓦斯を壓力で溶かし込んで堅く詰めたものです。栓を拔くと泡立つのは、壓力がとれるた



め水に溶かし込んだ炭酸瓦斯が水から離れ出る證據です。だからこれを飲むと、水と共に胃の中に入つた炭酸瓦斯が、そこで泡となつて胃から勢よく口中へ出て來ます。その時胃の中に閊へてゐた他の瓦斯をも一緒に連れ出すので、ゲープとおくびが出て胸がすき清涼の感じが起るのです。

問　**猫はなぜ暗い處でも目が見えるのでせうか**

答　凡て人間でも他の動物でも、物を見るには光がなければなりませぬ。猫でも光の絶對にないところでは、物を見ることはできませぬ。たゞ人間とちがつて、猫は目のシボリ——寫眞機のシボリと同じものが目にあるのです——を非常に大きく開くことができますから、光が多く眼に入ります。それがため割合に暗いところで、人間の目に入る光が少なく、物の見えないやうなところでも、猫の目には割合に澤山光が入りまして、物が見えるのです。猫の目が暗いところで光るといふのも、少しばかりの光が目に集つて、それが反射して見えるからで、まつ暗なところでは決して光りませぬ。



問　**人間はなぜ死ぬでせうか**

答　人間の死ぬ原因の最も大なるものは、病氣です。今日では、人間の知識や生活狀態が進歩して、昔のやうに餓死したり、殺害されたりする事が尠くなつたから、生來の病弱か、或は奇禍に逢はない限り一般に自然の壽命を全うすべき筈です。しかるに矢張り今日と雖も天壽を全うする人は誠に寥々たるものです。

動植物の生活は極めて自然であるが、人間は不自然なことをして、自ら病氣を招くことが多い。例へば、空腹でないのにやたらに食物をたべ、美味しい物で食慾をそゝり、消化器官に餘計の仕事を押しつけて、胃や腸を疲れさせるといふ不合理を敢てしてをります。



吾々は動物の知りもしない酒といふものを

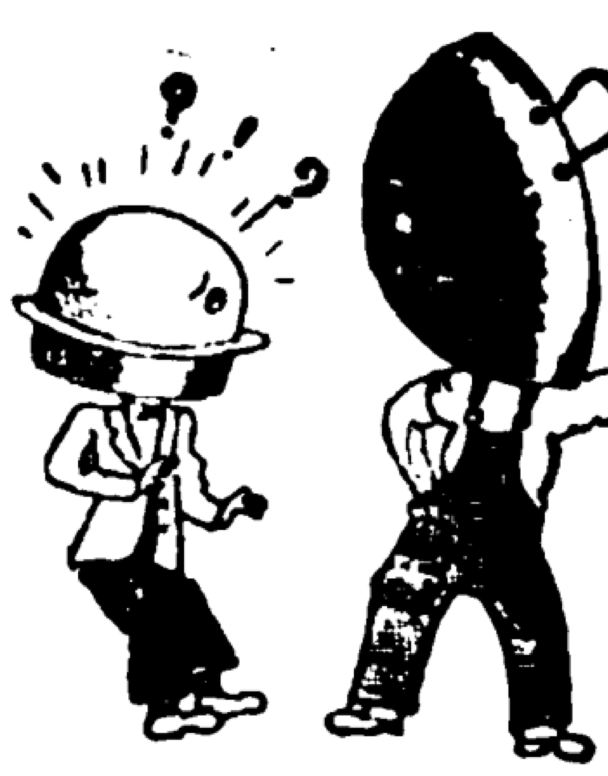
作つてそれを飲む、そして身體を惡くしてをります。動物は新鮮な空氣と日光の中で伸び伸びと暮してゐるのに、吾々は光線を締切り、不潔な空氣の中に住む。或は煙草を製造してはそれを喫つて神經をいためてをり、その他いろ〳〵の馬鹿なことばかり行つてゐます。病氣はとりも直さず、それらの罰であつて自業自得と云ふべきです。

どんな人間でも結局は死ぬのですが、たゞ異る點は、早く死ぬか遲く死ぬかといふに過ぎません。また、死ぬものは人間ばかりでなく、有ゆる生物は悉く死ぬのです。

若し生物が、古いものが死んで、新らしいものが生れるといふことがなかつたら、太古の下等動植物が進化して今日のやうに高等な動植物と成ることが出來なかつた筈です。吾々の生命にしても、死あり生ありで、段々進化して行く譯であります。

問　**鍋や釜の底を磨くと惡いといひますが、それは何故でせうか**

答　世間には鍋や釜の外側の底に附着した煤が見苦しいとて、これを綺麗に磨く人を見受けますが、愚も亦甚だしいことです。鍋や釜の底が光つてゐると、ガスや炭を燃やして



出來た熱を吸收し難いから、中の煮物に熱を傳へるのに餘分の時間を要し大變な不經濟です。

これに反し底が煤で黒くなつてゐると、熱量を多く吸收するから煮物も早く煮えます。實驗によると、銅鍋では水を沸騰させる時に底を磨いたのは、磨かぬものに比べて約二倍の燃料を要します。最近賣出しの鍋釜に、初めから底を黒く塗つてあるのは右の理由によるのです。

問　**眼が二つあるのはどう云ふ譯ですか**

答　眼は一方だけでも物が見えるから、二つの眼は餘分のやうに思はれますが、試みに片方の眼をふさぎ、コップに茶をついで御覽なさい。見當が外づれて、コップの外に茶をついでうまくゆかぬものです。こんな例は片目の人によく見受ける事です。

二つの眼は、左右の異つた位置から物を眺める、そして吾々の眼は、その二つの位置

感激のあまり

◎ハワイ、ヒロ市函五六　堤　順吾

一昨年來幼年倶樂部を長男弘美、次男敬一に與へし處二人共同誌の記事に勵まされ一ヶ年間無缺席にて、去る六月二十一日の卒業式には優等賞並に精勤賞を授與され、二人共限りなく喜んで居ります。又當地には日本語學校もありますが、時間が少い爲め我國固有の修身教授の十分ならざるを常に遺憾に思つてゐたのですが此點幼年倶樂部に依つて完全に補はれつつある事を此上なく喜んでゐます。

◎甲府市琢美尋常小學校　尾澤　巽三

教育は學校のみで授けるものでないと思ひます。教科書以外にも兒童の興味をそゝりつつよき教育を植ゑつけたい、それには兒童本來の生活にピッタリ合つた課外讀本の幼年倶樂部以外にないと信じます。

（記者）　**以上はほんの一端ですが今や幼年倶樂部賞讃の聲は天下に充ち滿ちて居ります。どうぞ愛するお子監方に御安心してお與へ下さい。**

から見た姿を受入れるため、その物の距離を判斷することが出來ます。つまり、遠近の關係をはつきり知ることの出來るのは、吾々に二つの眼があるお蔭です。



普通の寫眞機は丁度片目で物を見ると同樣に、一つのレンズを通して物を寫すのであるからその寫眞は平面に見えます。

しかし吾々の兩眼と同じく、寫眞機のレンズを二ヶ所の違つた位置におき、兩樣の寫眞を撮影して、それを兩眼で眺めると、物の姿に奧行きがあつて、浮出して見える、これが謂はゆる實體寫眞といふものです。最近この理窟を應用して、實體映畫が試みられてをります。

O・Kに就いて

前號にO・Kの解説を紹介しましたところ、各方面から御好意あるいろ〳〵の御注意を下さつたことを感謝します。念の爲、こゝにアキスリング博士の談を御紹介します。

東京林營　聯盟總務　アキスリング博士談

私の記憶から呼起すと、米國では既に三十年前に於て、日常會話に用ひて居りました。

無論俗語ですが、今日では正規の英語以上に實用に便利を得て居ります。で、スタンダード・デクショナリー（標準辭典）などは、O・Kの二字を一の熟語として登載してゐる位です

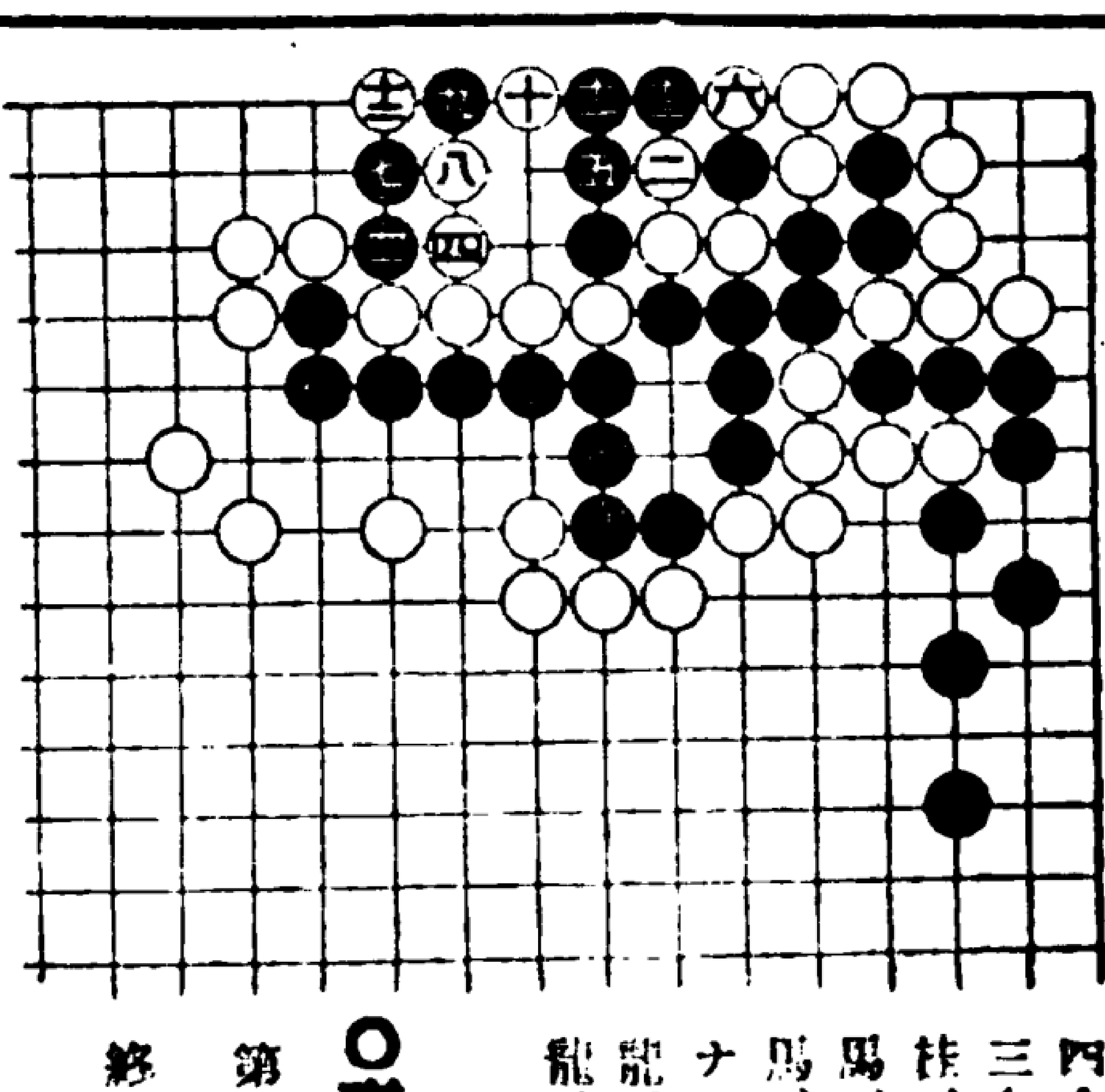
O・Kの意味は、無論オール・コレクト（all correct）で、「間違ひなし」とか、「其の通り」とか、「規則通り」「註文通り」「仰せの通り」とか、又は使用の場合に應じて「校正濟」「檢査濟」「無事通過」「合格」など、あらゆる方面のオール・コレクトの意味に通ずるので、時間節約の見地から萬事「O・K」の二字で濟ますこと〻なつてゐる次第です。故にO・Kは今や熟語であるとか、正規語であるとか、俗語であるとか、面倒な語原、語義を糾す必要もなくなつた一ッの實用語であるといふが適當でせう。但し、之が英國生れの英語でないことだけは明白の事實です」と。

因に、前記のスタンダード・デクショナリーには、O・Kの二字を記載し、all correct の發音は Oll korrect であるので、この發音の頭字であるOとKとをとつたものであると説明して居りますが、all correct の文字そのまゝの頭字をとるとA・Cとなり、このA・Cは別に紀元前といふ意味に使はれてゐるので之と區別するため發音のO・Kをとつて符號にしたものだといふ説もあります。

娯樂室解答（本文〇〇〇頁）

○詰碁解答

黒先活



○詰將棋解答

六三銀、同玉、六四金、七二玉、六三金、同玉、七五桂、五四玉、六五馬、四四玉、五五馬、同玉、三五飛ナル、五四玉、四五龍、六四玉、六五龍、以上十七手詰

○聯珠解答

第一圖

終局（廿）迄（廿一）から『いろは』に『』の四追勝

變化

△（廿）反對は（廿一）から『（廿）にイロ』の四追勝

△（十四）反對は（十五）から『イハ（十四、十七、十五）』の四追勝

△（十二）を（ろ）は第二圖

第二圖

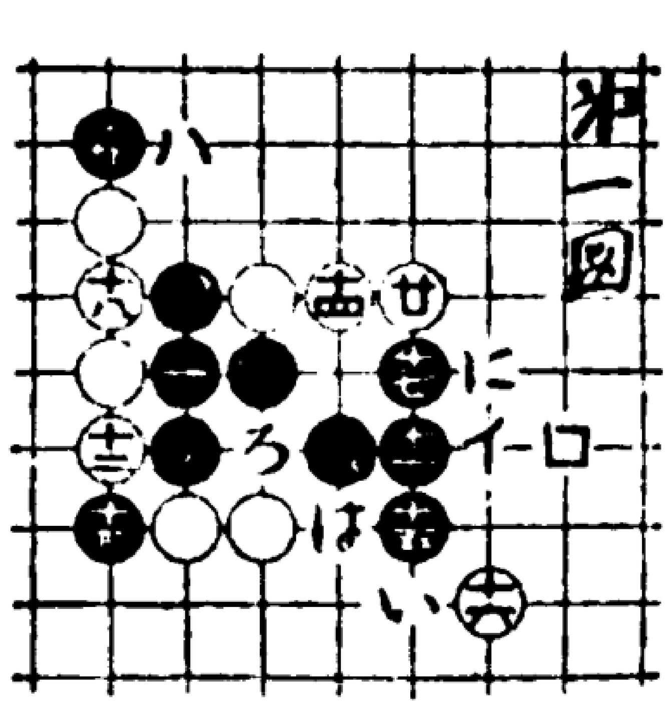
終局（十五）と打つ次『甲』と『乙』と『丙』の三所勝

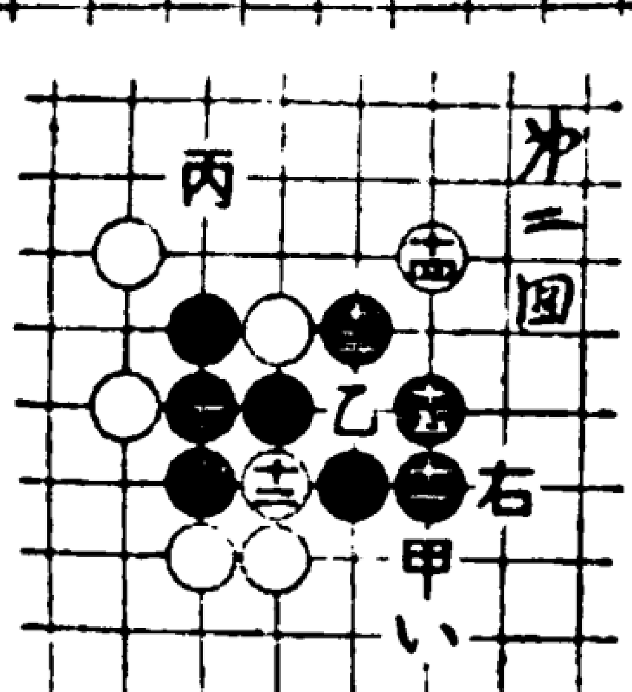
變化

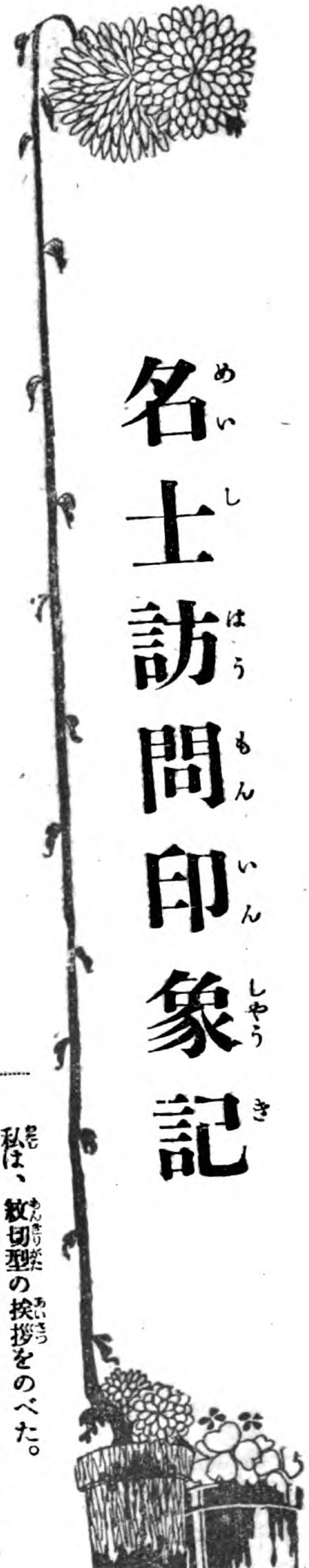
△（十四）反對は（十五）から『（十四）甲（十五）乙』の四追勝

△（十二）を（右）なら（い）に打つて次『甲』と『十二』の兩勝

（完）







名士訪問印象記

フーヴァ氏を訪ふ

白木屋重役　香月芳

フーヴァ氏に會へる！

たゞそれだけで、私の心は、柳の葉のやうにふるへた。なぜつて、其の頃の商務卿フーヴァは、ひとり米國のみでなく、世界の人氣男だつたからで。

時は、大正十一年の秋、處は商務省の應接間、さうして米穀取引所から派遣された私は、食糧政策の教を請ふのが目的だつた。

『フーヴァは誰にでも喜んで會ふ、といふのは、何時、誰が名案を有つてくるか分らぬので、訪問客のえり好みはしない』

屢々、さういふ噂を聞いてゐたので、私のやうな者にも、快く會つてくれるだらうと、實は秘かに期待してゐた。

『どうぞ、此方へ』

秘書官に案内されて、さて室に通ると、フーヴァ商務卿は、儼然として控へてゐた。顏は大きく眉は蓬々としてゐる、じつと人を見るあの瞳には、深い理解力が閃いて居る。

『閣下はお忙しい御身だと承知して居りましたので、お目にかゝることが出來るかどうか、實は心配して居りました、然るに本日、御面會をおゆるし下さいましたことは、私自身にとつて非常な光榮で厶います』

私は、紋切型の挨拶をのべた。

すると、商務卿は、『ム』といつたきり、ぶッきら棒な態度を示した。

はてな、フーブア氏は、こんな方ではなかつた筈と、私も意外に感じた。で、思直して、

『私共は、日本に居りましても、歐洲大戰前後、閣下が生活費暴騰を目前にひかへて、フーヴァ主義一點張で、此の問題を解決された事は非常に愉快に思つて居りました』

お世辭をふりまいて見た。ところが、ますます雲行が險しくなるらしい。

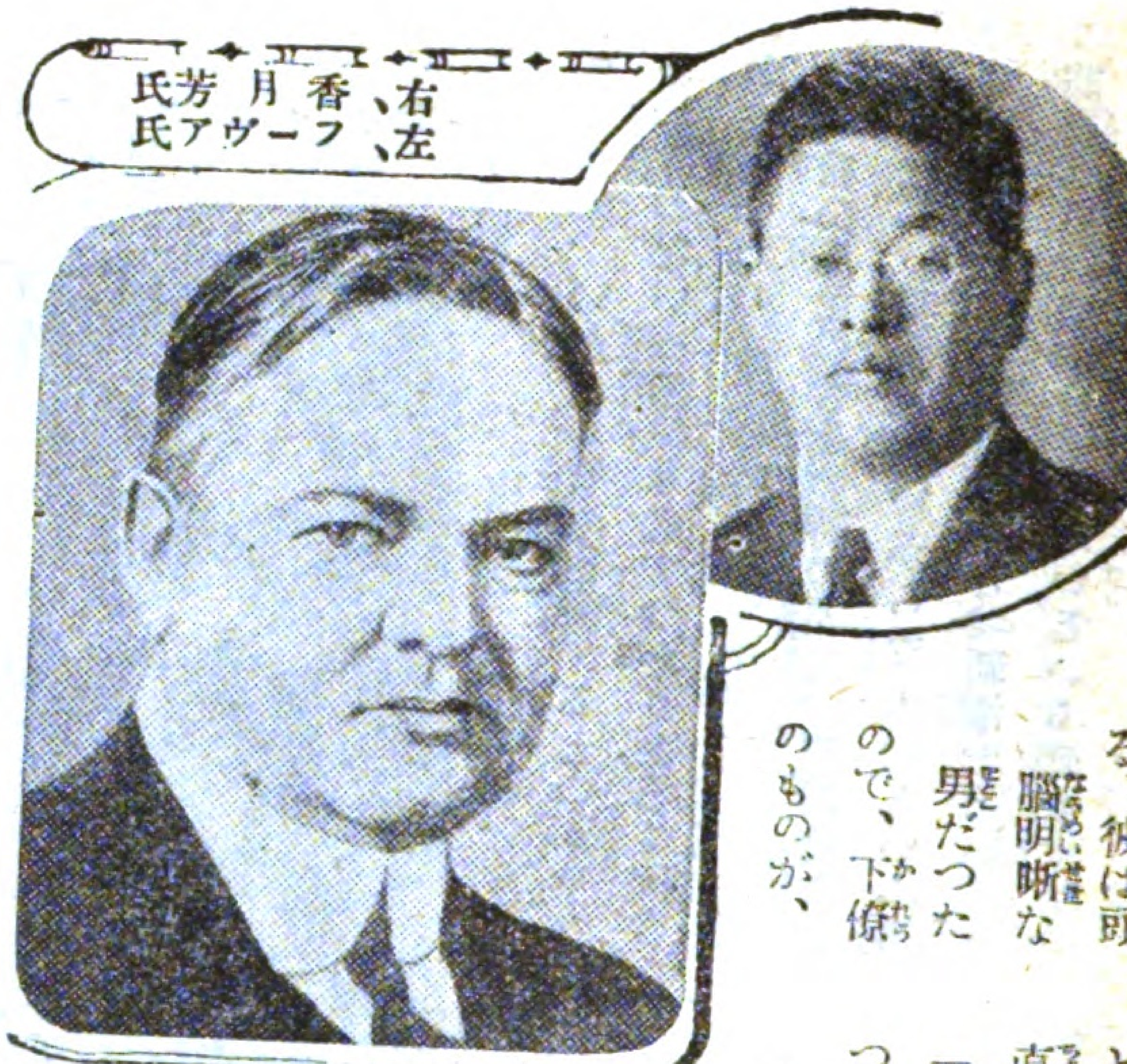
商務卿は苦り切つた表情をして、横ずつぽうを向いて了つた。

『これは困つた！』

私は何とかして御機嫌を取り結ばうとしたが、うまい考へが浮んで來ない。――この時ふと思ひついたのは、大村釜二郎のことであ

る、彼は頭腦明晰な男だつたので、下僚のものが、往復文書を拜啓から始つて、早々頓首まで讀み上げると、大層不機嫌で、苦虫をかみつぶしたやうな顏をして居た。といふのは、手紙の前書と後書とは、必要がない、中味の用事の處だけよめば、それで十分事務はとれるからである。

ハーン、フーヴァ氏もそれだな、日本流に長々と挨拶をのべたのが氣に入らなかつたと見えるな、——そこへ氣づいた私は、單刀直入、からりと調子をかへた。



右、香月芳氏
左、フーヴァー氏

『實は閣下、私の用事は、食糧問題の解決について御示教を仰ぎたいのですが……』

此ういふと、フーヴァ氏は、やをら全身をねぢ向けて、自分の椅子を私の膝につきつけるやうに乘り出して來た。

『そのことならば申上げます』

待つてゐましたとばかり、滔々數千言、得意の食糧政策を語り出した。私は全身を耳にして聽き入つたが、殆んど息をも吐かせぬ雄辯である。

そして、つけ加へていうた。

『尙詳しく御調査の必要があるならば、調査部長を御紹介いたします』

局長の方へ私との會見を讓つて、その上、止めを刺すやうな最後の一言。

『お互に忙しいのですから、これで失禮いたします』

主人の方からサヨナラの挨拶だ。

成る程、ハーデイング內閣に入つて、米國一の人氣者となつた彼である、身が二つあつても三つあつても足らぬ位多忙な彼である。肝心の用件を其方退けにして、御世辭や無用の挨拶をのべてゐた私の態度は、齒痒かつたに違ひない。——私は、その時彼から好い教訓を得たと思つて、今も尙秘かに感謝して居る。

池邊三山先生

加藤武雄

もう二十年も前の事です。僕は、その時分雜誌『新潮』の訪問記者をしてゐましたが、『現代青年の進む可き道』といふやうな題目で、諸家を訪問し、談話筆記をとつた事があります。澤柳政太郎氏を、一つ橋の高商の校長室に訪ね、即座に快諾を得て滔々たる數千言のそのまゝ立派な文章になるのに感心しながら筆記したのもその時の事でしたし、德富

蘇峰氏を國民新聞の社長室に訪ねて、談話はして貰へなかつたが、いかにも青年を愛するといふやうな如才のない應對振りにすつかりよろこばされて歸つたのもその時の事です。三宅雪嶺氏にお會ひしたのもその時の事で、三四度お訪ねしたが、都合が惡いから又來いといふ事で、四度目にお訪ねすると、『新潮』といふ雜誌を知らないから話せないといふ御返事なので、田舎出の一本氣な靑年であつた僕は大いに憤慨して、取次にお出になつた花圃夫人と一と論判してゐたところ、そこへにこ〳〵笑ひながら雪嶺先生が出て來られ、直ぐに請じ入れられて、あの、ぽつり〳〵と豆を嚙むやうな調子で、短いが、かなり實のある話を下すつたのでした。あの茫洋たる風丰――矢張この人はえらいと、おのづと頭が下つた事を覺えてゐます。


右、加藤武雄氏　左、池邊三山氏

が、忘れられないのは、矢張、その時にお訪ねした池邊三山先生の事です。朝日新聞の、狹い應接室の小さい椅子に大きな身體を投げかけてゐた三山先生は、冬瓜のやうな大きな顏から、しづかな眼眸で僕を見迎へられましたが、ことわられるのか知ら？と思つてゐるうち、何の前置もなく、提出した題目についての談話を初められました。かなり長い談話を、三十分ばかりかかつて話してしまはれてから、禮を述べて歸らうとする僕を呼びとめて、

『君は何處の新聞記者かね？』

と訊かれるのです。

『新聞記者ぢやありません。雜誌記者です』

『雜誌記者か？』

云ひながら、先生は、僕の顏と、僕が先刻さし出した僕の名刺とを等分に見くらべて居られる。僕の名刺には、名前の左下に、小さい活字で、『新潮記者』と刷つてある筈です。先生は、それを新聞記者と誤讀されたのらしい。

『あ、さうか？　新潮記者？　新潮といふ雜誌の記者なんだね？』

『さうです。さうです』

『新聞記者――どうも可笑しいと思つたよ』

先生は、さう云ふと、冬瓜のやうな大きな顏に眼を細めて笑はれました。

新聞記者――とだけ刷つたうさんな名刺を持つて談話を取りに來た男に、三山先生は、それだけの話をして呉れたのだ。何の新聞かとも訊かずに――。うさんな奴だ。だが、此の男はひどく困つてゐるらしい。おれの談話で、いくらかでも此の男が助かるならまあ話してやれ！　といふほどの大どかな氣持で、三山先生は、僕に話して呉れたのだ。

僕は然う思つたのです。そして、三山先生の無頓着を裏附けてゐる寛容さに、感謝の涙

た感じざるを得無かつたのです。勿論、これは、僕の思ひ做しだつたかも知れません。しかし、いろ／＼の話を通じて知つた三山先生の人格から、僕は、此の思ひ做しが、單なる思ひ做しでは無いやうな氣がしてならないのです。

百貨店王セルフリッヂ翁

岩崎英祐

現代に於て眞の米國魂——敗けじ魂の權化を求めらるゝならば、私は躊躇もなく倫敦の百貨店王ブルドン・セルフリッヂ翁を推す。

翁は本年取つて六十七歳、四十六歳の時米國より英國に赴いたのであるから、本年で二十一年の歳月を倫敦に送る譯になる。

現在でこそ、英米兩國間の國交も軍縮會議等に依り、幾分は親善の度合を加へてをるやうであるけれども、心底から融和されてをらないのは事實だ。元來が喧嘩別れをした本家と分家との間柄である。感情の面白くないのに加へて、今日は全くその位置を顚倒して、本家の英國は過去の榮光に充ちたる殘骸を辛うじて横たへてをるに反して、分家の米國は隆々として黄金の殿堂を建設して、世界の覇權を握つてをるのであるから、英國人が米國人に對して嫉妬の感情に燃え、その結果として米國人を極端に嫌惡して居るのは左もあるべきだ。

この英國人より極端に嫌惡された米國人が、四十六歳にして漂然として渡英し、獨立孤高、倫敦の銀座街に開いた小雜貨店を根城にして、遂に今日では英國一のセルフリッヂ百貨店を建設し、更に歷史に古いホワイトレー百貨店をも買收したる外、倫敦近郊には約三十有餘軒の食料品專門の小賣店をも經營するに至つたのである。之が卽ちブルドン・セルフリッヂ翁である。

一日私は翁を訪うて、社長室に對談した。

『あなたは多年英國内にて營業をしてをるのに、何故英國に歸化しないのですか。種々の不便不利がありませう……か』

『その理由は簡單です。私は米國人たることを誇りとしてをるからです。外に何等の理由もありません』

『あなたが短日月の間に成功した秘訣と一貫した經營方針を承りたいですが……』

右、岩崎英祐氏　左、セルフリッヂ翁



奉仕と奮闘の精神を商店經營の上に實現させたことが成功の要素です。それから何人よりも早く新聞廣告に着眼して、之を活用したことでせう。殊に倫敦タイムスの一欄は開店の翌年から──二十年間毎日連續して私の意見を掲載してをりますが、確に間接直接の効能はあります。新聞や雜誌を活用しないでは到底大きな仕事は出來ません』

更に私は話題を屋上に翩飜たる各國の國旗に就いて質ねて見た。曰く、

『屋上に各國の國旗が飜つてをることは、貴店が國際的の大商店たることを自ら標示してをつて甚だ心地がよいが、唯一點不思議に堪へないことは米、英、佛、伊の四ヶ國の國旗のみは大國旗を掲揚して居るのに反して、他の國家は小國旗を掲揚せることである。これでは小國旗を掲揚せられたる國家の人々は、來店の際に不快の念に打たれ何となく愉快な感情を持てますまい。餘りに差別待遇のやうで國際的に考へても、面白くはないですね』

と單刀直入的に攻め入つた。

『左樣です。然し商業は現實に立脚してをります。勿論商業にも理想は必要だが、現實を凝視することは一層必要なことです。弱小な國家は一日も早く强大な國家になることが最も必要です。弱い國家を强い國家と觀ることは舊式の阿諛的商策です』

と翁の寸鐵的逆論理は鋭く突進し來る。

『あなたの論法は一面の眞理を含んでをるが、然し米英兩國と共に世界の三大强國の一たる我が日本の國旗が掲揚されてをらぬのはどういふわけですか』

と突込んだ。處が翁は──間髮を容れずに、

『果して日本は世界の三大强國の一つでせうかね』

『然り』

と私が應酬すれば、

『然らば問はん。日本は何處に米、英と比肩するに足る實力がありますか。僅に軍隊の强いことだけではありませんか？』

日本の强いのは軍隊だけだ──それは內地でもよくいふ言葉ではあるが、斯うした偉人に面と向つて詰問された瞬間には、さすがに私も背中にヒヤリと冷水を浴びせかけられたやうであつた。セルフリッヂ翁は私の言を容れ、間もなく英、米、佛、伊と共に、樓上高く大日章旗を掲ぐることになり、倫敦滯在中の我同胞の面上一脈の明るさを加へたのであつたが、實際、日本に對し『英米と比肩する實力ありや』とは齊しく歐米人の抱く赤裸々の考へであり、我々のよく〳〵反省すべき點である。正宗白鳥氏の歸朝感ではないが『何人も歐米を漫遊して始めて故國の有り難味と實力を知る』のだ。

面倒な玄關

中村武羅夫

志賀重昂氏を訪問した時のことである。約二十年ばかり前、夏の暑い眞盛りで、日がカン〳〵と照りつけた、日中のことだつた。玄關に立つて案内を乞ふと、取次ぎが出て

來た。僕は、『新潮』の訪問記者をしてゐた



右、中村武羅夫氏
左、志賀重昂氏

時代たつたので、名刺を出して面會を求めると、取次ぎの書生は暫らく僕の名刺を眺めてゐたが、

『初めてゞすか？』と問うて、僕の顏をぢつと眺めた。

『初めてゞす』

『では、どなたかの紹介狀をお持ちではありませんか』

書生は、また問ふのであつた。

『イヤ、僕は、紹介狀なんか、持つて來ませんでしたが』

僕は、紹介狀がなくては會はないと、斷わられはしないかと、びく／＼したが、さう答へざるを得なかつた。

『それでは、一度、電話をお掛けになつてから、改めて入らして下さいませんか』

『電話をかけるんですか？』

『初めての方で、どなたかの紹介狀をお持ちにならないと、一度、電話をかけて頂くことになつてゐますから』

『では、今から直ぐでも、電話さへおかけすればいいんですね』

『結構です。いつだつていいんですから、とに角、一度、電話をおかけになつてから、入らして下さい』

僕は、妙な習慣があつたものだと、不思議に思ひながら、仕方がないので、引つ返して、再び、日のカン／＼照りつける、白い路がしんとした表に出た。そして、どこか、この附近に自働電話がないかと思つて探して步いてゐると、志賀氏の屋敷から二町ばかり離れた町角に、自働電話を見つけることが出來た。

志賀氏の電話番號は、先刻の取次ぎの書生に聞いて置いたので、直ぐにかけると、やつぱり、先刻の書生が出て來た。それは、聲で分つた。

『僕は、只今伺ひました中村ですが、これから伺つて、先生にお目にかゝつて頂けるでせうか』

『どうぞ、お待ちしてゐます』

さういふ書生の返事に、僕は、再び引つ返して志賀家の玄關に立つて案内を求めると、また、以前の書生が出て來て、今度は直ぐに、應接室に通された。

直ぐに、五分刈りの頭の毛の白い、童顏の赭ら顏で、でつぷり肥つた志賀氏が、にこにこして出て來た。

『やあ、どうも失敬。なアに、君ならわざわざ電話をかけてもらはなくても好かつたんだが、何しろ素性の知れない訪問者が多いものだから、煩さくてね。あつはゝゝ』と、志

賀氏は行きなり大きな聲で言つて、快活に笑ふのであつた。

僕は、初めは、どうも面倒くさい手數をかけさせられるものだと、多少の反感を抱いてゐたが、志賀氏のちつとも蟠りのない風貌に接し、その朗らかな聲や言葉を聞くと、そんな反感なんか、どこかへ消し飛んでしまつて、實に、いい感じを持たずにはゐられなかつた。

そして、僕は、その時志賀氏に求めた問題に對して、十分に志賀氏の談話を得ることが出來た上、フランスから直接取寄せた古い葡萄酒を、氷で冷たくしたのを、ウンとご馳走になつたのであつた。

笑の大王チャップリン

劇作家 水谷竹紫

『おゝそれがあなたでしたか』

と云ひたい様な輕い驚きが、チャーリーチャップリンに對する最初の印象であつた。

チヨビ髯のだぶだぶズボン、帽子をちよつと横被りに、膝を横に曲げて蟹のやうに歩いて出る、滿場のドヨメキ、微笑快笑哄笑……人を笑はせる爲の存在のやうに日本の女子供にまで、汎く知られたチャップリンが、今や私の眼前三尺のところに現はれた。

秘書役兼支配人の高野虎市氏が、私達を日本のこれこれだと云つて紹介してくれる。チャップリン氏は唯一語、『オー』と云つたまゝ手をさしのべた。

『おめにかゝつて悦ばしう存じます』と云ふと、彼はいとも謹嚴に、

『サンキユー・サア』と來た。

ハリウッドに來てからもう一ケ月あまり、可なり方々の撮影所を見て廻り、多數の俳優や監督連に會つたが、言葉と云つたらいづれも我雜なヤンキー流で『イエース』と云ふ場合も『ヤー』とやつてのける、『サー』なんか叮嚀な言葉は薬にも聞かなかつたので、何だか勝手が違つたやうな感がその刹那に動いたものであつた。

『オヤオヤ、この人がチャーリーだつたのかしら』

人違ひでもしたやうな思惑外れが輕い驚きとなつて、自ら此の初對面の印象を鋭くした。



右、水谷竹紫氏 左、チャップリン氏

スクリーンの中での笑の大王は、スクリーン以外ではまるつきり東洋の禪僧とでも云つ

た趣がある。言葉は少い、いやむしろ無言に近い、そしてどこまでも叮嚀に謙遜で、絶えず何かを思索して居る樣に見える。

ものの半日もその撮影を拜見しながら、御邪魔して居る間に、物を云つたのは最初の挨拶の一二言と、こちらから質問に答へての二三言に過ぎなかつた。いや私にばかりではない、御自身の御仲間の從業員に對しても、矢張りさうであつた。そしてそれが、饒舌快活の助監督や俳優達と格段の對照を呈して居た。

『恐ろしい氣難しい人でしてね、氣に入らぬときは一日でも默つてるときがありますよ、今日なんか非常に機嫌がよいので、精々あなたがたを歡迎して居る積なのですよ……』

と高野氏は云つてくれる。

成程さう云へばさうらしい、彼はわざ／＼自分の腰掛けて居たスターの椅子を、八重子の爲に自ら持つて來て薦めてくれた、撮影中の忙しい間に二度までも記念撮影の中に這入つてくれた。スタヂオ内のやかましい規則と、英吉利風の嚴肅な正しい禮儀の中で、出來るだけの便宜と好意と親切とを示してくれた。しかしその面には微笑はあつたけれども快笑は見當らない、まして晴々しい出鱈目なヤンキー流の哄笑は全く影だにも認める事は出來なかつた。

『此の人がチヤツプリンだつたか……』

私は再び輕い驚を新にして、彼の珠玉の樣な笑の藝術が、深き惱と鋭い思索の後に出來上つたものである事を感得しつゝ、自ら頭の下るやうな氣持で彼のスタヂオを辭し去つた。

大正十三年の夏、訪米の際の忘られぬ印象である。

案外な張作霖

大倉桃郎

稍楕圓形に周圍四里の外城に包まれ、更に方形に一里半の高壁をめぐらした内城、その奉天城内の官衙に、怪傑張作霖を訪問したのは、大正九年の初夏だつたと記憶する。

張氏は非常に身邊を警戒してゐたので、外來者には容易に會はぬのであるが、奉天の滿鐵公所長鎌田氏には親しみをもつてゐたので、私たち七人は前以て許しを得て、鎌田氏に連れられて、高い煉瓦塀續きの、棟反りのした大きな門を入つた。

その奧の門に近く兵士の詰所があつた。前にかゝると兵士たちは庭に整列して捧げ銃の敬禮をした。日本の兵士に比べると、姿勢が緩んでゐる。

門内にまた庭がある。樹木はない。四方は建物に圍まれて、前面が應接室である。大きな構へであるが、入口は割の方にわりあひに小さい。中は石疊になつて、教會堂めいてゐる。入つて右に向いた方が正面である。そこには壇があつて上は硝子圍ひになつて、紅白の珊瑚樹や骨董品の數々を飾つてある。裝飾窓に似てゐるが、古典的な色彩が深い。その前にずらりと椅子が並んでゐる。

張氏の居室は何處かわからなかつたが、餘

り待たせずに入口まで護衛兵に送られて來たのか、その人であつた。

最初私は大きな體軀と威嚴を備へた肥えた容顔とを豫期してゐた。馬賊から出て支那大陸一方の覇權を握り、東三省の王者たる風雲兒であるからである。

だがその想像は全くはづれてゐた。

現に見る張氏は、支那人としては大男ではない。顔も小さい。皺は殆んど無いのだが、



右、大倉桃郎氏
左、故張作霖氏

それでゐてしなびた感じがある。皮膚の色も青白い。目口も柔和さうな瘦男である。

案外であつた。

それが羽毛つきの黒帽を戴き、何か模様のある黒の支那服を着けてゐる。上等の織物であらうが、そんなものに無知識な目には、ただの黒服としか映らない。

奉天の町でよく見うけるあたりまへの中老の商人姿とさして異らない。

起立して迎へると彼は、じつと私たちへ順順に注目しながら拱手の禮をした。それから靜かに、少し猫背の姿を遠慮深さうに進めて、正面に面しては右側の椅子に着席した。

私たちの名刺は鎌田氏が取次いで、

『日本で一流新聞の東京大阪の記者たちである』と、紹介した。

張氏は名刺を一々見てから會談に入つた。

それがお座なりの日支親善の辭令の交換に過ぎないであらう事はわかつてはゐた、それにしても強く深く言葉の一つ二つは得られさうに思つてゐたが、話はやはり平凡であつた。實の入つた問題はあちらで避けてゐた。のみでない。張氏は絶えず私たちから視線をそらして、癖のやうに片手で唇邊を蔽ひ、何を答へるにも眸は、通譯者の瘦せて背の高い青年か、又は鎌田氏に向けられたまゝであつた。

稀にこつちを向いても瞼は愼み深げに下に垂れてゐた。それが如何にも眩しげである。

英雄らしい眼光は塵ほども見受けられない。

『張氏はよほど親しい人にでなければ、顔を見ては話さない』ことが、後で鎌田氏の話でわかつた。

會談が終ると初めの如く拱手の禮をして、靜かにもとの入口から去つたが、私たちの顔を正視したのは最初と最後の拱手の禮の時だけであつた。

私の印象に殘つた張氏の風貌は、おとなしやかな村長とも云ひたい、爺さんであつたが、それが幾年の後風雲を叱咤して支那大陸政治の中心となつた英雄であつたのである。（終）

○天下を動かさんとするものは、先づ自ら動くべし。　ソクラテス

○忍耐は苦しい、然し其の實は甘い。ルツソー



パナマ帽と泥棒

池部鈞

僕の懐には今金が百圓許りある。大分氣が大きくなつて居る。勿論此金は、汗水たらして得た、月給ぢやない、ボーナスと云ふ氣まぐれ物なんだ。こ奴を、郵便局に持つて行けば女房も喜ぶし、政府は低利に之を、民間に貸出して、小商工業者を賑はす事が出來るかも知れないが、今の場合、僕の百圓は、首を左右にふつて、イヤ〱をして居る。

僕は銀座をブラ〱歩きながら、さうだ〱、こんな時に、素晴しい、パナマ帽を買つてやらうと考へついた。僕の身分ぢやーもつての外の贅澤だ、濱口さんが聞いたら、國賊位に罵倒するかも知れない。

○

帽子屋へ入つた僕は、『オイ飛び切りのパナマを見せろ』と、店の椅子に、フンゾリ返へツた。番頭奴、變な顏をして、二十五圓と云ふ奴を持つて來た。

『コンナンぢやーイケナイ、モツと好いのを見せろ』と云つたら、番頭奴、ニヤ〱笑ひながら、そんな上物買ふ金持つて居るかと、云ひたさうな顏をして、米國製の、金五十圓と云ふ、此店の最上品を持ち出した。僕は、だまつて、ポーンと、五十圓出してサツサと買つて來てしまつた。ザマー見やがれ。

○

爾來僕は、得意になつて、金五十圓の帽子を被つて、友人間を横行した。さあ話はこれからである、或眞夜中、どう間違つたか、僕の家へ泥棒が一人舞ひ込んだ、さうして、懐からピカ〱するものを、出したり引ツ込めたりしながら、『オイ、金を出せ』と紋切り型の凄文句筋書通り、並べ立てた、無い程、平氣な事はない。

僕『オイ〱、君、君は、飛んでもない家へ、やつて來てしまつたなー氣の毒だが、錢はロクにないよ』

泥『無い事はなからう、五圓でも十圓でも、よこせ、出さないと、爲めにたらねえぞ』

僕『オイ、君、無理を云つちや――、いけないよ、今錢はないが品物なら、いくらでも有る。と云つて黄金の延棒や、珊瑚の玉が有るとは云はないが、相當の道具類も有るから、持つて行つたらどうだい』

泥『道具類は荷になつて駄目だ』

僕『さうか、そんなら、其處の釘に、掛けてある、乃公のパナマ帽を持つて行け、之は乃公にとつて、一番の金目のものだ、金五十圓のパナマ帽だ』

泥『フーン、ナール程、こ奴はナカナカ、

たいした代物だ、お前さんにしちやー、少々贅澤な帽子だ』

僕『どうだ恐れ入つたらう、其をやるから被つて行け』

泥『コンナ物、貰つて行つたつて、錢にや、ならねえ――』

僕『それだから、馬鹿だと云ふんだ。オイ君泥君、泥的君、よく考へて見ろよ、人間て奴は、自分の裝身一つで、品見の變るものだ、裸一つで居る時と、羽織袴で、キチンと、かしこまつた時と、其心持ちには、大變な距りが有るものだ』

泥『ソリヤーさうだ』

僕『サウダラウ、お前の樣に手拭ひの頰冠りなんてーケチなものを被つて居るから、泥棒なんかする根性になるんだ、僕なんかは身分不相應かは、知らないが、常に金五十圓のパナマ帽を頭に頂いて、己を高く置いて居るんだ』

泥『…………』

僕『世界の帝王を見ろ、みな黄金や珠玉の冠を頭に頂いて居るではないか、人間にとつて一番大切な頭を保護するには、それ相應のものが必要だ、お前なんかも、此五十圓のパナマ帽を被つて居れば自然に、泥棒稼ぎなんかは、イヤになる、人間泥棒なんかする事は決して罷めた事ぢやないぞ、どうだ、一ツ改心して、乃公の五十圓の帽子を被つて眞人間に成る氣はないか』

泥『恐れ入つた、全く恐れ入りました、あなたは本當に好い事を敎へて呉れた、改めます〳〵きつと改めます』

僕『さうか、本當に改めるか、ソンナラ、其帽子を被つて早く歸り給へ』



こんな會話のあつた後で泥棒は、僕の五十圓のパナマ帽を被つて裏口から退散してしまつた。

○

話は未だそれ丈けでは、すまなかつた。約一ケ月許りたつて、某警察署から、明朝九時迄に出頭相成度しと云ふ呼出しがかゝつた。警察へ呼び出される樣な惡事もして居ないが兎に角、出頭した。

警部『あなたは此パナマ帽子に覺えが有りますか』とパナマ帽を目の前に置いて尋問された。何んで覺えがない所か、銀座の○○店で大枚五十圓出して買つたパナマ帽だ。然も、先月之は泥棒に、怪しげな敎訓と共に、呉れてやつた、パナマ帽ぢやないか。

僕『之は私のです、確に、以前は私の帽子でした』

警部『此帽子をあなたは盜難にかゝつた覺えは有りませんか』

僕『有りません』

警部『では誰かに與へた覺えが有りますか』

僕『有ります』

警部『何んと云ふ人間におやりになりました』

僕『名前は判りませんが先月の夜、二時頃見ず知らずの男が僕の家へ、入つて來ましたので、修養談を一席聞かせて、其印にと、やりました』

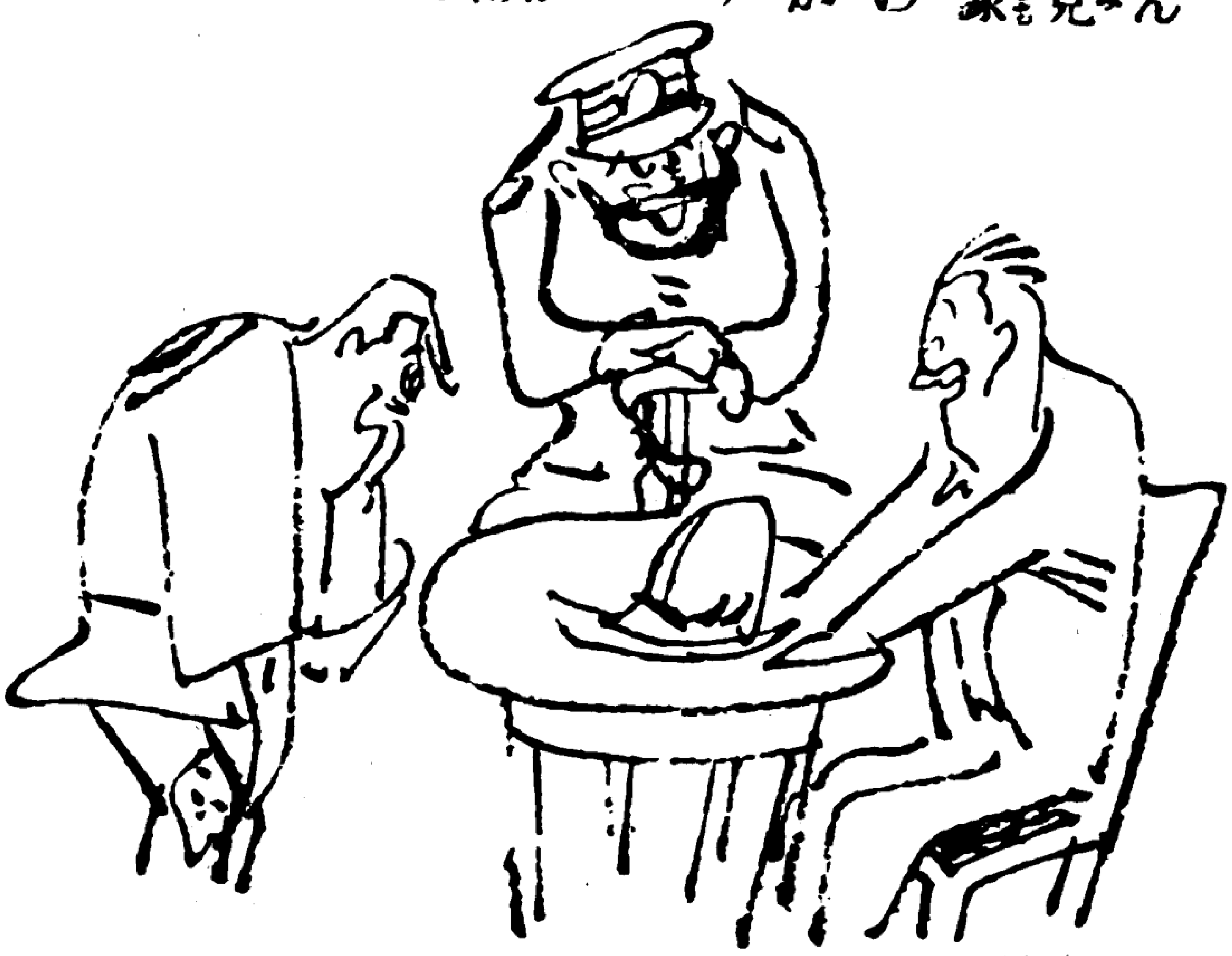
警部『深夜未知の男が侵入したとすると、其人間は泥棒ぢやーなかつたんですか』

僕『多分さうでせう』

警部『アヘヽヽヽ、氣樂な事を云つて居ちやー困ります。其れぢやー矢張り其泥棒に此帽子を盗られたんでせう』

僕『いや、確に、私が承知で與へたのです』

警部『どうも、さう、嘘僞を云つて下すつちやー困りますなーでは、其泥棒本人を此處へ連れて來ますから……』



○

やがて、例の泥的が、ボンヤリと巡査に連れられて入つて來ました。

泥『旦那、暫らくで御座います、旦那から帽子を頂いてから、スツカリ意見を改めまして一生懸命土方を、稼ぎ出したが、此帽子を刑事の旦那方に、見つけられまして、身分不相應の品だ、怪しいと、とう／＼、拘留されて、さん／＼、しらべられました。矢張り旦那、わつちには五十圓のパナマ帽は職過ぎやす、矢張り手拭ひの頬冠りの方が身に合つて居ると見えます、之は、失禮ですが御返へしいたします』

それでやつと、事情は讀めた。

僕『折角、やつた帽子を乃公に返へして、又泥棒をする氣か馬鹿野郎、乃公の心づくしを、無にする氣か』

泥『旦那、飛んでもない、決して／＼そんな量見は御座いませんが、五十圓の帽子が、頭につかつて居たばかりに又警察の御手數をかける樣な事になりましたから、御返へしいたしたいと思ひます』

話はスツカリ判つた。署長さんも、大變喜んでよく、五十圓の帽子をやつて、意見をなさつた。又よく五十圓の帽子を貰つて改心する氣になつた。双方御引取り下さいと、云ふ事になつて泥君と僕は警察を出た。さうして其泥君は僕が世話をして職を與へ、今日尚僕の家へ出入りして居る。

（終）

ちよつと待つて　―笑話―

夫『まだ御飯は出來ないのかね。早く出來ないなら俺は料理屋へ行くよ』

妻『あなたちよつとまつて』

夫『出來たのかね』

妻『いゝえ、あたしも御一緒しますわ』

キング笑話集



◇利き過ぎ

寶石商『新聞の廣告が覿面に効くのには今度といふ今度こそ吃驚しましたよ。』

相手『へえ、さうですかね。』

寶石商『何しろ私の店で夜警人用の廣告を出したら、もうその晩に泥棒が這入りましたからな。』

◇これはく

ミル夫人『夫が、私の誕生日に何を贈らうと申しますから、何でもいゝから驚かして下さいつて云ひましたの。』

チル夫人『あら、そしたら?』

ミル夫人『そしたら私、ほんとに驚かされちまひましたわ、だつて何も贈物なんか呉れないんですもの!』

◇充分資格あり

紳士『僕は非常に用意周到な自動車の運轉手が欲しいンだがね。』

その應募者『はい、私は非常に用意周到でありますから、お給金も先拂ひでないと働かない位で……』

◇立派

小說家『先日御送りしました拙著「花の夢」は如何でしたか?』

老主人『はい、有難うございました。なかなか立派な書物なので、簞笥の奥に大切にしまつてありますよ。』

◇なるほど

ウイリー『お父さん、許婚の女と結婚した女とは何う違ふの?』

母親『結婚した女と云ふのは一人で色々の苦しい仕事をしなければならない人のことですよ。』

父親『ウイリー、お前は默つて居なさい!』



◇敵は本能寺

『どうもこの頃の郵便局の怠けやうつたらありやしない。僕は一つ申告してやらうと思つてゐる。』

『ほう! 何かそんな不都合なことでもやつたのかえ?』

『やつたとも! ほら! 君がこの前、爲替で送ると云つた金ねえ、あれがまだ屆いてゐないんだよ。』

◇逆夢

妻『昨夜はいやな夢を見ました。』

夫『なアに、氣にせいでもよい。夢といふものは、いつも逆さまになるものだ。』

妻『さうなら結構です。私は新しく着物を仕立てるので、百圓下さいといひましたら、あなたはいけないといふ夢でした。』

◇兄と弟

父親『おい、こら、太郎！ お前は勉强をよして何處へ出掛けるんだい？』
太郎『齒が痛むから拔いて貰ひに齒醫者へ行くんです。』
父親『お前は何處へ行くんだい。次郎？』
次郎『僕も齒醫者へ行くんです。』
父親『お前も齒が痛むのか？』
次郎『いゝえ、僕は兄さんが泣くのを聽きに行くんです――。』

◇待つてました！

主婦『私は一體くどくどしく喋ることが嫌ひなんだからね、用がある時には手で合圖をするから、其時は來るんだよ！』
新來の女中『はい、私も矢つ張り餘計なことを喋るのが大嫌ひで御座いましてね、若し、私が頭を振つたら、行かないものと御考へ下さいまし！』



◇收入が減る

若い醫者『おい。君。ちよつと見たまへ！ 向側の步道を急いで行く美人があるだらう？ あれはもう二年も前から僕が心に愛してゐる婦人だよ。』
その友達『ふうん。さうかい。二年も前から愛してゐながら何故結婚を申込まない？』
若い醫者『だつて、あの婦人は僕の醫院へ通つて來る一番いゝ御得意患者だからね。』

◇何と氣の毒な

――その後山田に會つたかね。
――昨夜會つた。
――どんな恰好をしてゐたね。
――着物も着ずにゐたよ。
――そりやあ可哀さうに。何處で會つたんだね。
――錢湯で會つたんだ。

◇御都合で―

父親（電話をかけて）『お前は近頃、すつかり學校をなまけてゐると云ふ話しだが、また、惡い遊びでもしてゐるのぢやないのか？』
息子『よく、聞えないんですがねえ？ お父さん』
父『近頃、惡い遊びでもしてゐるのぢやないか、と訊いてるんだよ？』
息子『屹度、電話がどうかしてゐるんだ。少しも聞えないんですがねえ。』
父親『ぢや、別に金も要らないのかえ？』
息子『あつ！ 早速五十弗ばかり送つて下さいな。』

◇若過る

老紳士『どうだね、わしは百萬弗持つてゐるが、もう六十八だ。お前には老人過るかな？』
若い妻『そんなことありませんわ。むしろ十ばかり若い位だわ。』



冒險實話

猛獸巣窟の野營

マレー半島の猛獸狩實記（其三）

陸軍大尉 吉井信照
挿繪 嶺田弘

義憤に起つ

マレー半島に於ける私の猛獸狩の實記も、これで第三回目である。前に猛虎と鬪つた話、次に野象と鬪つた話。こゝに引續き猛野牛と鬪つた話をしようと思ふ。

これより先、私は英人の狩獵家で、馬來地方に有名なサヤー大尉が、最近手負の野牛の爲に、無慘な死を遂げたといふ報を聞いた。

それは猛り狂つた猛野牛が、同大尉を其の巨大な角に引かけるや、ドッと三十尺ばかり毬のやうに抛り上げ、落ちて來る所をグサッと胸部を芋刺しにし、更に一振り振つて大地に叩きつけ、無慘の最期を遂げたといふのである。

「畜生、よくもあの大先輩のサヤー大尉を突殺したな、よし俺が一つその敵討をやつてやるぞ！」

私は奮然として起つた。

元來、野牛といふ奴は、平常は極めて小心な動物であるが、一度怒れば猛虎と雖も其の威力に敵し難い猛惡性を發揮する。象は首が短いから急に方向をかへることが出來ないが、野牛はそれがズッと自由である。動作敏活、あの巨大な體軀で一躍四間も飛ぶ。古來狩獵家で野牛の爲に生命を失つた者は意外に多い。流石の名狩獵家サヤー大尉も此の猛惡さには敵し得なかつたのであらう。

『ですがお氣をつけなさらぬといけませんよ。白人でさへもあの失敗をしたのですから……』

私の野牛狩と聞いて、知人の土人や白人が親切に忠告してくれた。實際野牛狩は今までも殆んど白人に限られてゐた。その白人でさへ失敗したのだから、私を危ぶむのは無理はないが、さうなると日本男兒として私はいよいよ癪にさはらざるを得ない。

『よし、そんなら必ずあの獰猛な奴を一發の下に斃して、日本男兒の腕前を見せてやるのだ！』

義憤に燃えた私は、既に猛野牛の巨體が眼前に髣髴として横はるを覺え、勃々たる勇氣の湧き立つのを禁ぜられなかつた。

足跡を追うて

さて、この野牛には色々あつて、印度、阿弗利加にゐる野牛はバツフアローと云ひ、阿米利加にゐるのはバイソン、茲に云ふ馬來の野牛はセラダンと呼ぶ最も獰猛な種族である。身體の大部分は暗黑色で、四肢の膝から下は黄白色。角は畜牛より彎曲し、その長さも三尺に近いものもある。常に數頭群生し、休息する時は必ず一二頭監視の役を勤めてゐる。その爲め、之に接近するのは頗る困難だ。敵の足音を聞けば逸早く遠く姿をかくして了ふ。のみならず萬一にもこの野牛群が怒つたとなつたら先づ狩獵家の命はないものと見なければならぬ狩獵家は彼等の中の一匹せいぜい二匹が、その群を放れてさまようてゐるのを狙ふより外ない。

十一月初旬、私はシンガポールから海路バンダーマハラニを經て、ムーア河を溯つた。

一行は、熟練無比のトラツカア（足跡追跡者）マサー、ほか八人の人夫。

途中二泊にして、ラツク村に天幕を張つた。此處が本據。グツスリ寢た。

露營の夢は醒むるに早く、天幕を出づれば曉の風は冷え冷えと面を撫でて快云ふばかりなく、天高く氣澄みてさながら祖國の初秋にも見る颯々の心地。萬綠露を含んで、生色まさに溢らんとし、四邊の風物は寂として聲なく、時に落つる木の葉の露の音さへ、この寂寞を破るに充分である。——熱帶の森林に見る曉の風景はまた一入の情趣だ。

やがてマサーを先頭にして、密林を押し分け進むこと二時間餘。目ざす野牛の足跡を發見すべく、一寸とした地の窪みにも極度に神經を尖らしつゝ進んで行くと、

『あつた！ あつた！』

マサーは一行を顧みて叫んだ。

『ナニ、あつた!?』

矢庭に走り寄つて見ると、小丘の麓に何さま野牛の足跡。後脚の蹄は前肢よりも小さい。正しく野牛だ。

『旦那、これはまだ通つてから五六時間しか經つてゐませんぜ』

マサーは注意深く足跡を調べてゐたが、如何にも嬉しさうにして云ふ。

『さうか、ではまださう遠くは行くまい、よし、追跡だ！』

そこで直ちに追跡に移り、羊齒や有棘植物の密生する密林を衝いて進んだ。野牛は象と同じくどんな場所でも構はず蹈破する。その跡を我々はのがさぬやうに追跡するのだ。と、漸く竹や雜草の繁茂してゐる小山に出でた時、恰度正午。

『オイ、時分はいゝぞ、奴等の睡眠時間だ。屹度この小山の中に寢てゐるに違ひない。警戒しろ！』

私は命令を下して置いて注意深く伺ひ寄つた。見ると彼の足跡は山腹の切り立てたやうな急斜面に通じてゐる。が人間には迚も通れない急斜面――それを彼は平氣で蹈破してゐるのだ。一行はその急斜面を避けて他の方面から登りつめた。竹の繁茂は益ゝ密度を加へて來る。

『一寸、こゝで待つて……』

マサーは小聲で云つて一行を止め、一人足音を忍ばせながら竹藪の中をそつと伺つた。

『どうだ……？』

私は彼の後へそつと忍び寄つて小聲で訊いた。マサーは振返つてツイ間近を指さす。と見れば、ある、ある、野牛の寢たあとが――草木のうちにクツキリと、そして彼が樹根を枕にして臥した形跡が歷然として殘つてゐるのだ。

『え？　どうです？　早い奴ぢやありませんか、奴め、我々の足音をきゝつけて逸早く逃げ出したんです』

『ふむ、殘念だつたなア……もう少し早ければ……』

舌打ちして殘念がつたが仕方がない。更に追跡を續けた。小山を越え、森林をくゞり、沼澤を渡り、河を過ぎた。

『アー旦那、御覽なさい。もう直きです。まだ三十分とは經つてゐない足跡です。その邊にゐるに違ひない』

『ウム、足音を忍ばせろ』

と、ときめく心臟を抑へつゝその密林に入つたが、樹木が欝蒼としてゐて十數間の前方さえ透かし見ることが出來ない。仕方なくそつと這入つて行くと、ガサ〳〵ガサ〳〵と云ふ音、夥しく小枝が地に落ちてゐるので足に踏まれる度にそんな音がするのだ。

『チエッ！』

互ひの眼に警戒をしめし合ひつゝ、出來るだけそッと足を忍ばせて進んだ。

と、あゝ殘念！　何たる悲運ぞ！　マサーがとある小枝の下を潜らうとした時、はしなくも山蜂の巢にふれたので、サア大變！　猛烈な山蜂の群が一時に襲撃、流石のマサーも『アッ！』と叫んで後退する、勢あまつた一群は私を目がけてやつて來る。顏といはず手の甲といはず、脊中の上から着物を透してまでも刺すといふ有樣、とても堪り兼ね、そこにひれ伏すと、バサ〳〵とその音に驚いたか、突然、前方二三十間の處、

『ド、ド、ド、ヽヽヽ！』と覆るやうな地響、

『オや、居たぞッ！』

と、銃を擬する間もあらせず、ワリ〳〵〳〵ッ、ドドドド、ドッ――野牛は樹枝を突破しつゝ遮二無二逃げるらしい。

『しまつた！』

マサーは口惜しさうに叫んだがもう後の祭り、最早や逃足の早い彼には追付かない。

蜂にはさゝれる、敵には逃げられる。時はもう三時過ぎてゐ



るから此上追撃すると歸りが危い。その日は一先づ打切つてすご〳〵根據地に引とることにした。

猛獸の巣窟に露營

だが、私は何としても殘念でたまらない。そこで、歸途偶然コバン（野獸の遊園地、水溜りの場所で夜間獸が來て遊ぶ所）を發見したのを幸ひ、最近考案した釣籠を試驗すべく樹上に夜籠りして野獸を待撃することに決した。で、一行は一先づ露營地に歸り、食事や水浴をした後、私は二人の人夫に荷物を運ばせてコバンに行つた。そして適當な巨樹を選んで籐の梯子を掛け、二間半許りの高所に釣籠を吊した。内には銃と毛布と懷中電燈と、若干の食料とを持ち込み、籠の外部には防水布を纏つた蚊帳を張つた。

『それでよし、君達は歸れ、そして若し夜中に銃聲を聞いたら來て呉れ、さもなければ明日の朝迎へに來て呉れ』

私はさう云つて人夫を歸し、一人釣籠の内に殘つた。

太陽は森林の彼方に落ちた。塒を急ぐ鳥も已に見えなくなつた。蒼然たる暮色は露を載せて刻一刻と樹枝から樹枝を罩めて來る。月は未だ昇らぬ。蝙蝠や夜鷹の類であらう。羽音高く林間を渡る。大蜥蜴はキッキッと奇聲を上げて樹幹を上下する。ホー〳〵と鳴くは野猿の叫びか、夜の森林の凄味は刻一刻に迫つて來る。無人の森林の然も樹上唯一人眠る物凄さは云ふばかりない。

『若し樹の下に猛獸が群れ集つた時、籠を釣してある籐蔓が切斷して落ちたならば……』

流石の私も、それを思ふとゾッとした。

『何に大丈夫、覺悟の前ではないか』

と思ふ。が、萬一に――の不安はなか〳〵去らぬ。と云つて、今更籠を降りて露營地に歸るのは籠の中にゐるよりもつと危險だ。

『俺も日本男兒だ！　惡びれるな！』

私はそこに始めて大和魂を腹の底に籠めて度胸を定めた。

やがて月は現はれた。長天萬里を照す月は密林の枝葉を潜つて私の釣籠にも淋しい光を投げて呉れる。

『もうそろ〳〵獲物の出て來る頃だぞ』

ギーギーと籠蔓の鳴る音を氣にしながら、私は銃を確と握つてぢつと籠の中に蹲踞り、只管耳を聳て猛獸の來るのを待つた。

それは恰度十二時頃だ。俄然荒々しく雜草を踏拉ぐ音、樹木に觸れ響が聞えて來た。

『さてこそ怪敵ござんなれ！』

と、籠の縁に眼計り出して窺へば、忽ちドドッ、バタ〳〵ッと泥濘を捏ね廻し跳ね飛ばす音。

『象だな！　いや野牛か？　それとも豚か？』

恐らくその中の一つであらうが、近寄れ、一發で刺止めて見せるぞ！　と私は銃を構へながら待つた。が、生憎く籠から二十間ばかり向ふを過ぎ去つてしまつた。眼を皿のやうにしても月の位置が悉く樹木が邪魔になつて見えない。

と、また、メリ〳〵、ドドツーと荒々しい足音。今度こそ見屆けてやらう――と刮目して窺つてゐたが、これまた籠の下まで來ずに過ぎて了つた。

『えゝ忌々しいな？　何とかして一發でも見舞つてやりたいも

のだが』

私は切齒して殘念がつた。が、その折しも、ポツリ、ポツリ――と降り出した雨、と思ふ間もなく、ドッと車軸を流すやうな大雨。かうなると最早や猛獸の待撃どころの騷ぎではない。防水布を整へて命より二番目の貴重品たる鐵砲を勞りながら猫背になつて只管雨の怒りを恐れ、瞑目して霽を祈るうち、何時か晝の疲れに睡魔が襲うて來て、私は釣籠に搖られる心地よさに何時か夢路に辿り入つた。

猛虎猛牛の格鬪

幾時間過ぎたか――遽かに、ドドドツ、バタ〳〵ツ、ウオーギヤアーッと云ふ天地も裂けるばかりの物凄い音と喚聲に夢を破られた。

『おッ、大變だ！ 何事だらう!?』

慌てて起き直つて俯瞰せば、密林中それとは判らぬが、コバンより四五十間も隔てぬ邊り、正しく二匹の猛獸が噛み合ひ吠え合ひ大格鬪を演じてゐる樣子、聲より察するに正に虎と野牛らしい。

樹木の折れる音、泥濘のハネ飛ぶ音、怒號、叫喚、天地鳴動してその物凄さは筆舌の外、私の耳はガーンとして、手足は意氣地なく震へて來た。五分、十分、格鬪の勝敗は容易に決せぬ模樣――眞に必死の活劇。定めて血痕は淋漓として地上に散亂してゐることだらう。

と、『グワー』

と一聲、叫聲が高鳴つたと思ふと、

ドドドッ！ メリ〳〵ッ！ と云ふ樹木を踏み碎く音がして、一方がドッと彼方に逃げ出した。と同時に一方は物凄い唸り聲でこれを追ひかける。

一頻り叫聲相交つて四邊を轟してゐたが、やがて次第に遠のいて行つた。

『ホーッ……』

深い溜息をついた私。危ふく數度籠から落ちさうになつた自分を顧みて、今更ながらその無事を喜んだのであつたが、一時は全く生きた心地もなかつた。

かくて一夜はマンジリともせず、いつまでも胸の動悸に苦しめられつゝ明した。

間もなく夜明と共にマサーとアゴンは私の安否を氣遣ひながら急いでやつて來てくれた。私は釣籠を降り夜來のことを語り早速、其處を點檢した所、五六頭は野牛で、次は大鹿、最後は正しく野牛と虎の大格鬪驚くべし、一面に雜木をへし折り打ち倒

し、血！血！葉にも幹にもベタ〱と鮮血が散つてゐる。流石に猛獸狩に狎れたマサーも之には一言もなく、只々吐息をついて見守るばかりであつた。

『うむ、此の調子なら必ず野牛の奴かどちらか此の近くにヘタばつてゐるに違ひないぞ』



私はそこに目ぼしをつけたので、すぐさま、血の跡を辿つて彼の跡を追ふことにした。

蠻人に逢ふ

密林は彼等の猛鬪に踏みしだかれた跡が可なり長くつゞいてゐたが、行くこと七八町、そこにある小沼のところで止まつてゐる。點検するに野牛は沼を渡つて向ふ岸に上り、虎はその上の鬪爭を思ひ止まつて沼の右岸に沿うて何處へか行つたものらしい。一行はどうしたものか暫く躊躇したが、思ひ切つて沼の左に沿うて大迂回をなし、野牛のみを追求することにした。豫想に違はず野牛は向ふ岸に上り、そのまままズン〱殆ど一直線に進んでゐる。

『如何に猛烈な奴でも昨夜あれほどに鬪つてゐるから、既に十分疲れてゐる筈だ。それに彼等の休息時間たる午も近くなつたから、何れ何處かに寢るに相違ない。もう少しだもう少しだ』と一行は強行した。

行くこと三四哩、一行も疲れて來た時、突然眼の前に現はれた異樣の怪物、蠻人四名、半裸體だが容貌骨格、まるで人間ばなれしてゐる。物凄い眼をギョロツカせて此方を見て

居る。

『オイ、マサー。アレ何だ？　アレ……？』

『え？　ア、あれはサカイ族の一種です』

『何？　サカイ族？　それにしては獰猛な……まるで獸みたいな奴等ぢやないか』

これが所謂ワイルド・サカイ族で、昔から喰人種と云はれた



蠻人。古來、深山にばかり住んでゐて、全く世間と隔絶し、猛獸毒蛇のうちにまじつて全く自然そのもの丶生活。

と、マサーはツカ〳〵と彼等に近寄つて行き、何かゴタ〳〵喋舌つてゐたが、

『おゝ！』と異樣の叫びを擧げて私を振返り、

『旦那、この先で野牛の逃げるのを見かけたさうですよ、この連中が』

『ヨシ、急行だ！』

我等は、蠻人の指さす方向に向つて歩を急いだ。

急行一哩、一寸開けた處に出た。そこは一面に背を沒する程のララン草原で、向ふの丘まで續いてゐる。丘の一隅にこんもり茂つた密林がある。仔細に見ると、ある！　ある！　向ふの前森に向つて足跡が歷然としてゐる。

『今度こそ逃がしちやならん。氣をつけろよ！』

しづかに……しづかに、身を潛めつゝ足音を偸んだ。丘の片端まで來ると、果して足跡は向ふの森の中に消えてゐる。

恰度幸ひ、そこに屈竟の隱れ場所――小高い蟻の塔があつたのを幸ひ、一同はその塔のかげに身を隱した。そうツと顏を出して林の中を窺ふと、パツと眼に映つたは眞黑な動物！　よく

よく見れば、オリーブ色の素晴しく立派な角を持つた巨大な奴！

私は照準を定めて時を待つた。と、恰もよし、彼はクルリと身をひねつて横向きになつた。

『こゝだ！』

思ふや否や轟然一發！　狙ひは心臟！

パット硝煙のあとをすかして見ると、確かに手答へがあつた筈だが……イヤ心臟をうつた筈なのに……かの大野牛は、ヂーツと此方を睨めながら、傲然として突立つてゐる。逃げようともしない。

『ウーツ！』天地もゆるぐ物凄い唸り！

さては急所をはづれて——彼は怒つたのだ。怒つたのだ。スワ一大事！

『此奴！』

私は膝を屈する暇もなく、第二彈！　今度こそは！　若し失敗つたら此方がやられる。生きるか死ぬかだ。まさに引金を引かうとした。瞬間、敵は體をねぢつた。胸部が半ば樹幹にかくれた。

がもう、寸毫の猶豫もならん！　早くうたねば此方へ飛びかかつて來る。

『ダツ！　ダダーン！』

が、その時、彼はもうわが眼前五間の地點に猛進して來た。彼の動きの方が、わが第二彈より一瞬早かつたのだ。

私はパツと蟻の塔に身をかくした。彼は疾風の如く、私のわきを驅けぬけた。私の姿に氣がつかなかつたのか、それとも、後方にゐた土人等の姿が彼の眼に映つたのか。イヤたしかにさうだ。彼は土人達に向ひ、まつしぐらに首を下げて突つぱしつて行く。胸のあたり、ダラダラッと血が流れてゐる。

『アツ！』

逃げおくれた二人の土人はそれでも野牛を避けることを心得てゐたのか、敵をホンの近くまで待ちうけておいて、飛びかゝつて來る出鼻をクルリ横に避けて、やり過し、一散に私の方に走つて來た。

ハズミを食つた野牛は、六七間も行き過ぎたが、漸く勢ひをとめて廻れ右した。これ屈竟の機！

『右胸部！　心臟！』

ダッと第三彈をぶつぱなした。

ばたッ！　と彼は前方にのめつた。

『しめたツ！』

もう一彈、と用意する時、彼はガバと躍り起きさま、向ふの密林を目がけて彈丸のやうに突走つた。

『逃がしてなるか！』

撃てば一瞬、敵の軀は逆立ちしたやうに躍りあがつた。無論命中したのだが、而も敵は遮二無二密林の中深く、ドドヽヽドツと突き入つてしまつた。

『何處まで逃げるか！』

私は突嗟に追跡しようとした。

『旦那、もうおやめなさい。かういふ時の追跡ですよ、手負ひの野牛にやられるのは……一先づ引揚げて、明日あの屍體をさがしませう』

『屍體?』

『さうですとも、如何に大野牛でも、昨夜大怪我をした上に三發も喰つてゐちや、迚も生きられません。今夜のうちに死にます。引揚げませう』

土人等も頻りに引揚げをすゝめる。いかさまもう日沒に間もない。『では引揚げるとしよう。屍體搜索を明日の樂しみにして』――と、一同と共に先の木據に引揚げて來た。

あゝ危ふかりし活劇よ、目ざす野牛は辛うじて擊ちとめたらうが、私の第三彈がもう一瞬おそかりせば、既に生命はないのだつた。

終日の活動にグツスリ眠つたその翌日、血痕を追うて探して行くと、約一哩の密林のうちに、野牛は豫期の如くうづくまつてゐた。

土人は、『うまい肉が食へる』と無性に喜んだ。(をはり)

次號の猛獸狩は何?

號を逐うて白熱的の大好評を博しつゝ、吉井大尉の冒險實話はいよいよ最高潮に達しました。次號には如何なる壯烈の場面が展開さるゝか? 乞ふ刮目してお待ち下さい!!

羅馬法王に謁見す

松岡新一郎

私は、遙々東の方から送られたる平和の使者として、わが大日本雄辯會講談社の客員として、羅馬法王に特別謁見を賜る光榮を有した。

法王ピオ十一世猊下には、王冠を頂き眩きばかりの法衣をまとうて、王座に直立して居られる。私は、鞠躬如として、御前に進み、片膝をついて、法王の右手に接吻の禮を奉つた。

『遠々の處をよくぞ訪ねて來られた、……結構な書籍類は、有難く御請けいたします』

法王は、先づ、さう仰せられたので、私は面をあげて、御顔を見奉つた。今年七十四歳の高齢と聞いたが、日本でいふと舊素封家の大旦那といつたやうな、いかにも穏やかな、伸びやかな、落ちついた。やさしい音容である。

『吾、日本からは、御國へ支倉六右衛門といふ武士が參りまして、法王グレゴールさまに謁見いたしました。もう三百七十年程前でございます、ですから日本と法王廳との關係も、隨分古いものでムいますが。一雜誌社の使者として、猊下に敬意を表する爲に參つたのは、私が始めてムいます』

から申上げると、法王は莞やかな笑をたゝへられて、

『おう、その通りである、實は、昨日此の書籍を頂いた際、早速一見したが……』と、御傍に高くつみ上げた本社發行の九大雜誌を始め、百數十部の出版物の上に、御眼を止めさせられて、その中から講談全集を一部御手に載せられた。

『日本の武士道精神を鼓吹した書籍といふのは、確かこれであつたな』

式部長官に御訊ねになる。

『はい』

式部長官が、さう答へると、今度は私に向つて、

『松岡君よ、貴國の明治天皇は、此の武士道精神をもつて、立派な國家をつくりあげ給うたと聞いて居る、……自分は、此の偉大なる陛下の御尊影を拜し奉つて、云ひやうのない感激を覺えました』

『と申しますと……』



羅馬法王ピオ十一世

私は、一寸不思議に思つた。

と、法王は、今度は、特別裝幀の「明治大帝」を抽き取つたので、ハ、アとうなづけた。

『見なさい』

法王が開き給うたのは、口繪寫眞版、軍裝を遊ばされた御尊影なのであつた。

『自分は、始めて陛下の御尊影を拜したわけであるが、一見して、英主であらせらるゝことが想像される……この御寫眞を見てゐると、非常な魅力に引きつけられる』

じつと御尊影を見乍ら、明治天皇の御事蹟を追憶さるゝので、私も、謹嚴な口調で、陛下のことを一二、申上げた。すると、耳を傾けてゐた法王は、力強くうなづかれた。法王は世界大戰當時はポーランド大使として活躍した外交官としての經歷を有して居らるゝので、話をそれからそれへと展開させてゆく處は、手に入つたもの。瞬く間に彼是三十分經過して了つた。

最後になつて、法王。

『この九大雜誌は、總發行部數五百萬部に達するといふことだが、して見るとこれを主宰する野間清治氏は日本の國民と密接な關係を有つて居る、……御訊ねするが、野間氏は基督教徒か』

『いや、さうでは厶りませぬ』

『それなら、何か心の中に強い信念を有つて居るに相違ない、でなければ、此ういふ大事業を完成し得られるものでない、……自分は、三億五千萬のカトリック教信徒の精神を支配すると見て居られるので、自分自身としては、朝な夕な重大な責任を感じて居る、多數の讀者の精神を支配する野間氏も、定めしさうであらうと想像するが、どうか、歸國の上は、野間社長、その家族、並にその事業關係者一同に對して、自分が祝福を祈念して居ると傳へて下さい』

心から喜んで居られた容子である。金屬的の快い響を有つた法王の聲は封じられた。で、私は御前を退出したが、後で式部長官に聞くと、普通獻上の書籍は、目錄だけお目にかけて、圖書館に納入することになつて居る、然るに我社の獻上圖書は、特に法王の思召で、此日、暫らく王座の前に飾られる名譽を荷つたのである。

趣味と實益

家庭セクション

忘れ得ぬ母の言葉

櫻井女塾々長　倉辻ふき子



母（故櫻井ちか子女史）がいつも繰り返し繰り返し申しまして、深く腦裡に刻みつけられてゐる言葉は、

『凡て人に爲られんと欲ふことは、己またその如くせよ』

といふ聖句で御座います。母は私だけにでなく人にもこの言葉をよくすゝめまして、母自身も身をもつて、この聖句の上に活きて居りました。私も母の記憶とともにこの聖句の上に生きたいと思つてゐます。

また母は『私共は常に取り越し苦勞をしてはいけない、取り越し喜びをすべきだ』と申して呉れましたのを、今だに覺えてゐて毎日晴れやかな明るい心持で暮されるのも、全く母の言葉の賜と感謝して居ります。（寫眞は倉辻女史）

茶殼の效用

○

廊下を掃除するとき、茶殼を撒いて掃きますと、埃もたゝず、きれいになります。

○

乾かした茶殼を便所の壺に入れますと、臭氣がなくなります。

○

また乾かした茶殼を蕎麥殼代りに枕に入れますと、仄かな香氣があり、氣分が爽快になります。

○

蠅が澤山來て困るときは、乾いた茶殼を火鉢で燻しますと、忽ち退却してしまひます。

家庭川柳　女房百態

出迎への笑顏に靴のぬぎ心地



女中さんの縮尻日記

月　日　晴

朝まだお二階の掃除の濟まぬうちに來客があつた。困つたなアと思つたが今更悔いても及ばない。旦那樣がお二階へと仰言るので、早速言はれるまゝにお通しする。何でも急用で見えられた方らしい。座蒲團や茶菓をおすゝめすると、今度は大急ぎで應接室のお掃除に取りかゝつた。すると、階下から上つていらした旦那樣が『一寸お待ち！』と目顏で合圖して、『お掃除は後でしてね』とお止めになられたので、そのまゝ階下におりた。

奥樣にお訊ねすると、お客樣のある時は、箒をつかふものではない。昔から、はき出すと云つて、先樣には非常な失禮に當るとのこと



社交禮法

椅子につき方

—こんなことでまごつくことはありませんか—

洋室は出入口に近いところが下座で、窓のそばとか、ストーブのあるところが上座であります。

案内されて室に入つたときは、主人の出て來られるまで、出入口に近い椅子にかけて待ちます。

主人が出て來られたら早速立ち上つて挨拶をし、それからすゝめられた椅子につきます。すべて椅子につく時は、椅子の左側から入つて腰をおろすのが、禮法ですが場所が狭くて左側から入れぬ場合とか、左側から入るには廻らなければならない場合には右側から入つてもさしつかへありません。

椅子は餘りにふかくかけるのもいけませんが、といつて、端の方へチョコンとお尻をのせたやうなかけ方もいけません、膝の七分位までかゝる位にかけます。

足は目上の人の前ではつま先をそろへてかけますが、普通は男ならば足の間を四五寸開いて、あまり窮屈に見えぬ程度がよろしいのです。ピンと卓子の下に伸してふんぞり返つたりするのは甚だ無禮です。といつて後に屈めてゐるのも見苦しいものです。和服の婦人は膝頭の開かぬやう注意して、つま先もそろへてかけると、淑かに見えます。

挨拶するとき、または他の人を紹介するときは、必ず、椅子の左傍に出て起立してするのが禮儀です。

日本人はよく椅子にのけぞつて、椅子の脚を上げたり下げたり、または坐つたまゝ、椅子を動かしたりする人がありますが、これは下品でもありまた大變失禮なことです。こんなことをすると敷いてゐる絨毯に損傷をつけてとんだ迷惑をかけます。

これは便利！

○堅い木に釘をうつときは、釘の先に油をつけてうつと、曲らずにうてます。

○生れて間もない赤ん坊が、鼻くそがたまつたときは、リスリンを脱脂綿につけて鼻腔につめておくと自然にとれます。

○天ぷらをあげるとき、油のいやな臭ひを消さうと思へば、最初に古生姜一切を揚げます。さうすると、あとで何を揚げても、油のいやな臭味がつきません。

○糠味噌がいやな臭氣を發するときは、辛子を少しづつ、度度上にふつておきますと、日ならずして臭味を去ります。

ださうである。お客様のある時にはその次の室へ行くことすらも遠慮すべきだとのことだつた。

何て愚しいことをしたのだらう。朝から申譯ないことをしたと思つた。

月　日　雨

夕方市場へ行つて大根を買つて來た。奥様が『お葉は？』と仰言るから『向ふで除つてくれました』と申上げると、『今度からお葉のところも一緒に貰つていらつしやいね。



きざんで鹽で揉んで、強く壓して置くと、大阪漬といふ美味しいお漬物が出來るのですよ』と仰言つた。

私はどこでも損をして來る、どうしてから氣が利かないのだらう。



お母様大學（育兒の巻）

よい習慣は赤坊のときから、つけねばなりません。大小便のときには、必ず眠りをさますものですから、それに氣をつけてゐて、用をさせてやりますと、後には自分から教へるやうになり、めつたにおむつを汚すやうな事がなくなります。

○

赤坊がそろ／＼手をお口に持つていつたりするやうになりますと、よく爪で顔を引つかいたりして、それが原因でおできになることがあります。赤坊の爪はうすくて伸び易いものですから、注意して手まめにきつてやるやうにせねばなりません。

○

よく赤坊に口淋しさをまぎらすために、空乳首をふくませておきますが、あれは不衞生であるばかりでなく、赤坊の口中をあらしますから、用ひぬ方がよろしうございます。



○

赤坊がそろ／＼藝を覺えたりして可愛くなりますと、いろ／＼なことを次から次と、教へたがりますが、過度にならぬやう氣をつけねばいけません。神經質の赤坊などは、ひる間あまり刺戟をうけますと、夜驚症になることがあります。

○

這へばたて、たてば歩めとは親心でせうが、やつと立ちだしたばかりの赤坊の手をひつぱつて、『あんよはお上手』などといつて歩かせますと、扁平足になつてしまふことがあります。可愛さあまる親心から、弱い子供に無理させることはつゝしまねばなりません。

▲食慾をそゝる食物▼

鷄の雜物と野菜の汁

これは誰にすゝめてもことごとく喜ばれる。四五人の家内とすると、雜物は二十錢も買へば澤山だ。それで晝と晩と二度位は食べ

これがあるので「玉に瑕」（男女癖さま／＼）



何でもない事に直ぐ頭を掻く癖。



隱居然と腰を落してペチヤンと坐る癖。



話しながら鼻をクス／＼鳴らす癖。

られる。玉葱と、馬鈴薯と、人參と、若葱とを適宜に用意し、適宜に切り、馬鈴薯も人參も、皮を剝く必要なんかない。原始的なところに美味と、榮養價とが籠つてるのだ。先づ玉葱と、馬鈴薯と、人參とを、なるべく深い鍋(御飯蒸しの器など殊に調法)に入れ、たつぷり水を入れて充分に水煮する。いゝ頃に鷄の雜物を入れて、材料が皆煮えた時分、食鹽で薄味をつけ、最後に若葱を入れて、それの半煮になつたところを、椀に盛つて熱い中にすゝめる。外の調味料なんか不必要、たゞ酒を若干加へると、ぐつと味にやはらぎがつく。椀に盛つてから、好みによつて胡椒、または七色蕃椒をふり込む。



ものは言ひやう
挨拶さまぐ

女子高等師範學校講師 岡 初野

松が枯れると其の家に不吉な事がある

松が枯れると其の家に不吉な事があると申して氣持ち惡るくする人がありますが、知人の家で年古るい大切な庭の中心になる松の木が、下枝から段々に枯れ始めました。丁度其の頃其の家の主人が相當の大病に罹つて居りましたので、家族はすつかり氣持ちを惡るくし、主婦の如きはそれのみを氣苦勞して居りました。見舞に來る人々も、よく松の事を話題として同情して歸りました。

ある日知り合ひの老婦人が、見舞に來ました。その時も、主婦がしきりに松の事と病人の事とを合せて心配して語りましたところ、其の婦人は、『おや、お宅樣の松もですか、今年はあちこちのが弱つて居るやうですよ』

其言葉で、主婦は何だか味方をでも見出した樣に元氣に、『それでは外樣のもさうで御座いますか』

『えゝ春以來非常に雨が少なく、松によほど無理がかゝつたものと見えまして、すつかり枯れたのなども見受けました。宅のも弱りかけましたので、早速酒やするめをやつて元氣をつけましたのですよ』などと松の手當法など敎へましたので、その病人の家族もほつとしたやうな氣持になり、『何と今日はよいことを伺ひましたこと』と悅んで早速松にも手當をし、病人の看護にいそしみました。

このやうに一寸した物の言ひやうから、相手の氣を引立てたり落したりするものですから注意したいものです。

▲兒童は父母の行爲を映照する鏡なり　**スペンサー**

▲節約は大なる歲入なり　**シセロ**

他人の品さへ見れば定つて値を聞く癖。



少し馴れ親しむと直ぐ小錢の借金を申込む癖。



相當教育があるのに『今日は佛滅』『明日は友引』と直ぐ暦を持ち出す癖。





相手を見る際に上目遣ひをする癖。

大日本雄辯會講談社ニュース

今秋の大計畫
いよ〱發表！

是は面白い事受合の『評判小説』

滿天下に大評判を博した小説を選んで、本社の名に於て世に推奬するといふ新しい試み、その方法も全集と異つて申込金もなく第何巻でも各々好きなものを選んでお求めになれるといふ便利な方法です。

評判小説 第一巻 富士に題す　佐藤紅綠先生著

皆様御承知の通り、これは嘗て講談倶樂部に連載されて、非常なる好評を博した紅綠先生二十年來の大傑作です。

（定價 金貳圓、九月初旬發賣）

飛切り最上萬人必ず歡迎の
評判講談全集

嘗て本社の大事業として刊行した『講談全集』は、皆様から大好評大歡迎をうけまして、お蔭様で素晴しい大盛況を收めることが出來ました。又最近その分賣に際しても非常な好成績をあげつつありますが、この種の飛切面白い内容を持つ全集を、是非もつと刊行せよといふ聲が、絶えず四方から集りつつありますので、本社に於てもこの御熱望に何とかしてお添ひしたいと種々苦心に苦心を重ねて居りましたが此度準備が整つたので來る九月二十日いよ〱發賣の運びになりました。

申込金一圓（第十二巻の代價に當ること）

九月二十日より全國書店にて取扱ひます。

定價例により大格安の金一圓

何卒又々大御援助下さる樣特に御懇願申上げます。

第一巻　条平内　大島伯鶴師演
**　　　　落花の舞　松林伯知師演**

大計畫はまだ〱續々發表致します
次は何？　其の次は何？
刮目して待たれよ！

天覽武道試合の優勝者
持田範士野間道場に專屬す



昨年の宮中に於ける天覽武道大會に優勝して、日本一の榮譽を擔はれた持田盛二範士は、今回野間本社々長の懇請によつて、遙々朝鮮より上京、小石川野間道場に專屬して、毎日本社少年社員一同に教授されることになりました。その神技は、高邁なる人格と相俟つて、帝都武道會に一大進歩を促すものと非常に期待されて居ります。因に音羽本邸の道場は、唯今大增築を行つ

て居りますから、今秋には更に一段と宏壯なるものとなる筈。

野間社長の精勵と報知新聞の大發展

野間本社々長は、去る六月末報知新聞社長に就任以來、小社發行出版物御愛讀の方々より御祝ひの御言葉や御激勵の御言葉が毎日山の樣に本社に到着致します。社長は一々之を拜誦されて非常に感激致されこの上は自分は身を犧牲にしてもこの御同情御熱誠に御報い致さなければ相濟まぬと、この炎暑の中にも拘らず全く寢食を忘れて精勵勤勉早朝より夜は午前三時四時迄も全身全靈をあげて各方面の改善に熱烈なる盡力を致されて居ります。從つて同紙は最近紙面の改善は勿論毎日曜の「日曜報知」の無料添附を初めとして、各種の大計畫を續々と發表して、急激なる發展を遂げつつあります。殊に最近一週間に數萬の増加を示したといふ驚異的記錄は之全く平素から本誌を御愛讀下さる皆樣が、御聞き傳へになつて、ぞく／＼同紙を御愛讀下さる爲と心から感激感謝されて居ります。

社員 齋藤寅之助氏逝く



本社々員齋藤寅之助氏は兼ねて病氣療養中の處、去る七月十八日心臟瓣膜病にて林町の自宅に永眠されました。享年五十三歲。氏は大正九年二月本社に入社以來、宣傳部に在つて十年一日の如く精勵恪勤衆望を擔つて居りましたが病あらたまり遂に逝去せらる、社内一同その訃を聞き愕然自失の有樣でした誠に痛惜に堪へません。こゝに謹んで氏の冥福をお祈り致します。

社員 根津康久氏逝く

本社々員、根津康久氏は、昨年八月以來病を得て休職、郷里新潟縣に歸られて加療中の處、去る七月三十一日藥石効無く遂に永眠なされました。享年三十三歲。昭和三年一月入社以來出版部に勤務、大いに精勵され殊に大日本史の編纂に當つては盡力する處多大で前途大いに屬望されて居りましたが、惜しくも壯くして長逝されました、洵に哀悼に堪へません。一同謹んで其冥福をお祈り致します。



又！又！大歡迎をうけつつある『體驗を語る』の第二篇『處世の道』

野間本社々長の『體驗を語る』は、滿天下の大共鳴を得まして、出版界未曾有の大盛況と言ふ素晴しい記錄を殘し、今尚續々と増刷しつつありますが、前號本欄に精細御報告申上げました如く、今回又々四方よりの御熱望に依り尚又出版報國の趣旨から第二篇「處世の道」（前號「處世雜話」を變更）の犧牲的大出版を致しました其内容は嚴選に嚴選をした物丈に第一篇より更に充實した物との評判で目下各方面に異常なる大歡迎を受て居ります。



貧乏村の義人

亡び行く村を復興し、僅々八十戸で年産額二拾萬の副業

靜岡民友新聞記者　內野啓三



農林省農産課長　岡部彰

農産製品價格の下落によつて、目下の農村は眞に疲弊困憊の極にある。然し、凡ての産業が始終變らぬ好況を保つ事は望む方が無理である。況んや農業方面に於ては、霜害もあれば風害もある。不況や天災に面して、今更の如く狼狽しても駄目だ。不況ならざる時に於て、二宮尊德翁の「推讓の德」により生産の幾部を貯へて、不慮の災害に防へることが肝要である。

この記事は以上の心掛けを體得した好適例であつて、キングがかうした農村繁榮の實例を掲載されるのは、洵に時宜に適し、世を益するところ莫大なるものがあると思ふ。

無上の光榮

昭和五年五月二十八日から六月三日まで、聖上陛下には畏くも靜岡縣下へ行幸遊ばされた。一縣行幸は今回が初めてのこととて、駿遠豆三州の天地は文字通り名譽と光榮とに輝き亘つたのは云ふまでもない。

其折、陛下には同縣下の産業狀態を具さに御觀察遊ばされたが、中でも茶と蜜柑の産地として聞える庵原郡庵原村大字杉山へ特に御使を差遣はされ、且、同地の素封家庄平九郎左衛門翁を親しく御用邸に召されて御陪食を賜ひ、種々御懇篤なる御下問を賜うたことは、縣民等しく聖恩の洪大なるに感涙に咽んだのであつた。

元來同地は不毛の地、殊に明治維新後文化の波に置去られて既に一村餓死にも瀕する有樣だつたのを、村民一致苦心慘憺の後、遂に縣下有數の模範村として更生したその努力の程が畏くも上聞に達した爲である。と同時に、九郎左衛門翁は、その父信明氏が同地開拓の爲に身命を賭して盡瘁された遺業を繼いで、今日まで獻身努力された多年の功勞を嘉されたものである。

實に杉山の部落が今日に到るまでの庄平信明翁父子の努力は血と涙の記錄。

亡び行く村落

駿洲路や花橘も茶のにほひ

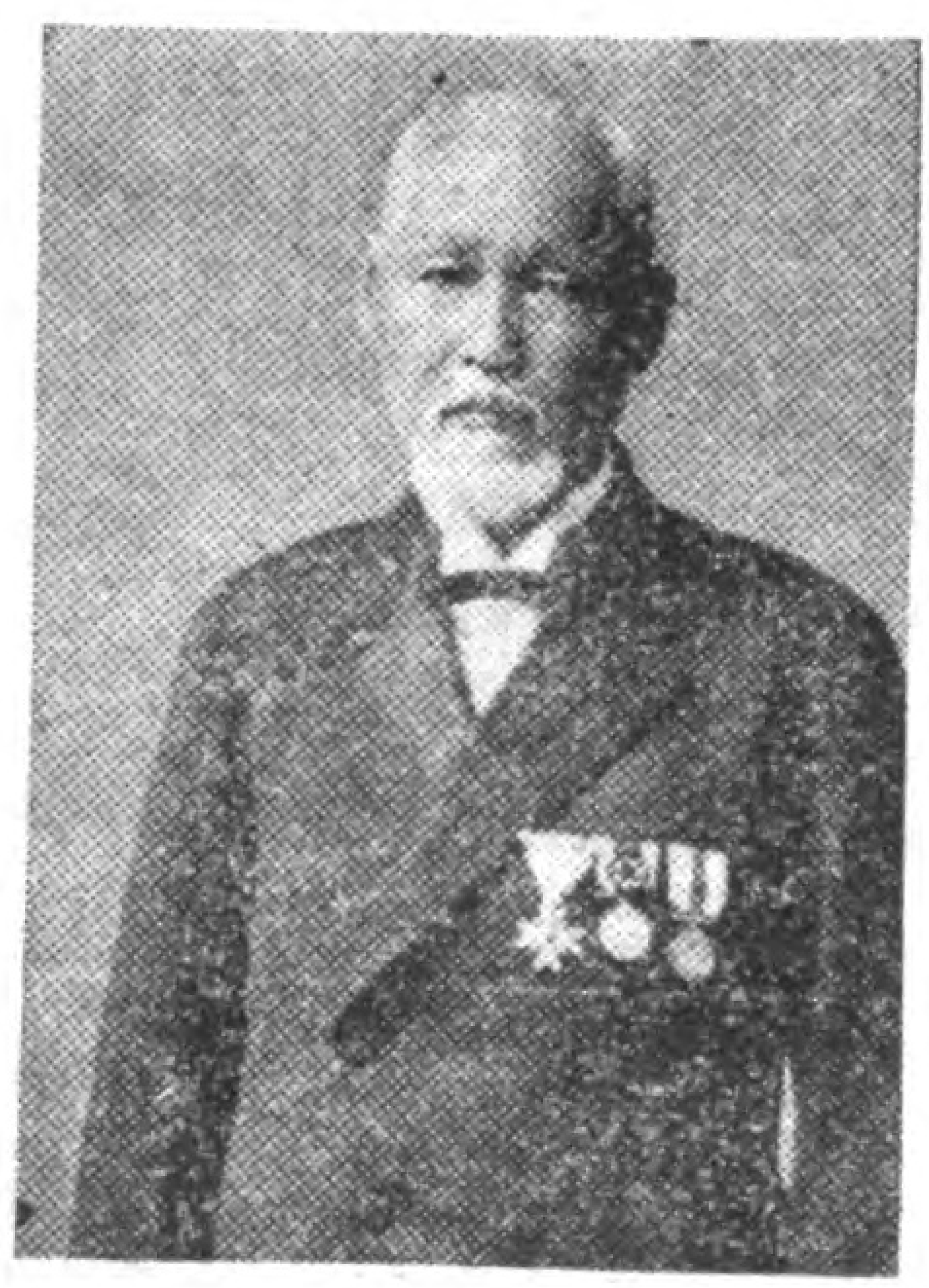
今でこそ駿洲路を行く人々の眼の前には如實にそれが展開されるが、その昔、殊に庵原村杉山の如きは見る影も無い一寒村だつたのだ。

此處は山と山との峽に在る戸數八十戸（現在）ばかりの部落。田畑の面積は極く少い所から、村民は昔から山仕事で漸くその日の糧を得てゐたのであつた。

所が、何時の頃からか山に『毒荏』の栽培が流行り出した。毒荏といふのは、木は下駄の材料となり實は桐水油の原料となる、山間の仕事としてはふさはしいもの。部落の人々は秋になるとそれを江尻や興津邊へ運び出して賣り、僅かの賃金を得てゐたのである。

が、時勢は行燈の時代からランプの時代と變つたので、桐水油はすつかり廢つてしまひ、從つて杉山の人々は仕事を奪はれ生活の道を失つてしまつたのである。

庄平信明氏が奮起したのは此の時である。信明氏の家は代々庄屋を勤めた家柄、氏もまた二十四歳で立派に名主を勤めたほどの人物である。決して並々の人間では無かつたのだ。



杉山村の恩人
信明翁の令嗣九郎左衛門氏

復興の動機

氏はつくづく考へた。

『これは此の儘にはして置けまい。何とか早く救濟の道を講じなければならぬが、先づ第一に毒荏に代る仕事をさせることだ。それには色々仕事もあるが、長く掛つて儲るやうな仕事では眼の前に迫つた急場には間に合はない。――何がよからう？』

結局、氏は茶の栽培に眼をつけた。茶ならば生長も早いし收穫も多い。これに越す適當なものは無い。と、思ひ立つや氏はすぐさま村人を呼び集めて説いた。

『村の衆よ、いつまでも毒荏に未練を殘してゐても詮ないこと、いつそ一時も早く思ひ切つて毒荏を伐り倒し、あとを開墾して茶畑としたらどうだらう』

村人は成程と思つた。然し、何分にも老人は舊習に囚はれてゐる。いざとなるとひどく躊躇してゐる。それに茶を蒔くと死ぬ――などいふ迷信を擔ぎ廻る者もあつた。そしてそれが案外に力があつた。流石の信明氏もこれには弱つた。

『これは駄目だ、こんな人達を相手にしてゐては折角の分別も腐る、よし、そんなら青年達を相手にしよう』

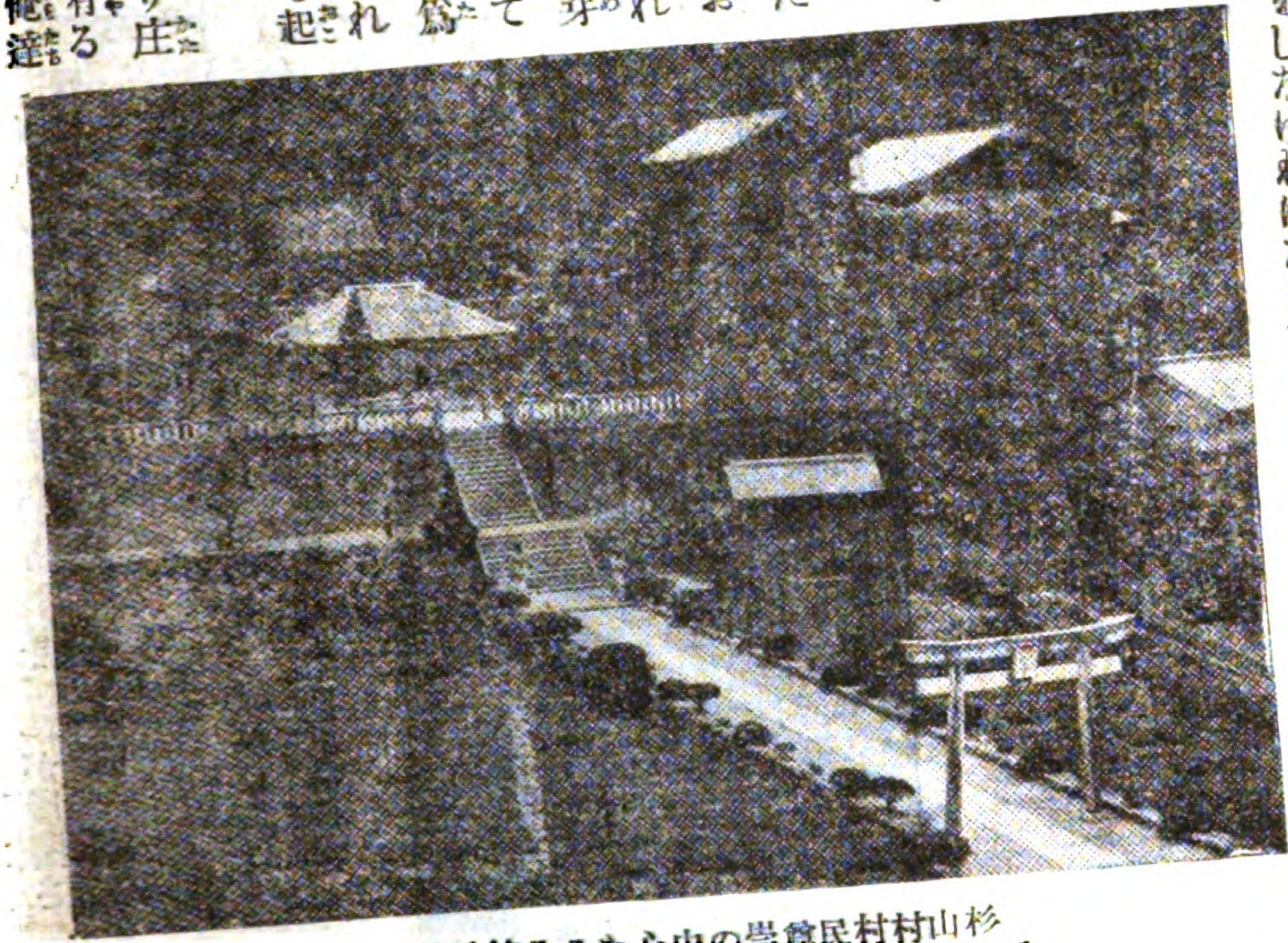
そこで早速青年の指導に掛つた。

青年達は純眞である。信明氏の熱意を聞くや忽ち感激、成程、これは迷信などに惑はされてゐる場合では無い。一時も早く村の建てなほしをしなければならぬ、とすぐ一致協力して新事業に力を注ぐことになつた。

そこで信明氏は自ら金を出し茶の種を買入れて彼等に分けてやつた。叢荏を伐り倒したあとにどし〳〵お茶の種子が蒔かれた。間もなく新芽は青々と芽生えて來た。然もその爲め病人も出なければ不祥なことも起つては來ない。

『あゝやつぱり庄平の旦那の仰有る通りだつた、俺達が間違つてゐたのだ』

老人達は始めて迷の夢から覺めた心地、いよ〳〵仕事に精を



杉山村民尊崇の中心たる八柱神社

出すやうになつたのであつた。信明氏も奬め甲斐があつたと大いに喜んで、茶種を買ふ資本、芽を摘むまでの費用、これらをすべて無利子で融通してやり、益々奬勵に努めたのである。

再度の危機

かうして杉山の部落は日に月に隆昌に向つて來た。春闌の頃には、山の畑から茶摘唄がのどかに流れて來る。家々の窓からは新春の匂が香はしく洩れて來る。見違へる程の變りやうだ。

が、此の儘に行けば何事もなかつたのであるが、しかし好事は兎角魔多しの譬へ、明治七年頃になるや、俄然杉山には第二の危機が襲つて來た。

それは製茶の大暴落だ。といふのは粗製濫造の結果、信用を失ひ、賣行がパッタリ止つたのである。

由來日本商人にはよく此の惡い癖がある。お互ひに愼まねばならぬことだが、杉山のみならず一般製茶業者は海外輸出の好況に慣れて、何時かこの無謀を敢てしてゐたのである。輸出は杜絶える、値段は下る、手も足も出ぬ慘狀が疾風迅雷的に杉山の部落へ押寄せて來たのであつた。

然も明治七年から八年九年と三年越しに打續いた下落――杉山の村民はひとたまりもなく參つて、果ては村の面積二百十二町歩の中、三分の一は他町村の人の手に渡り、殘る三分の二も唯名ばかりの所有、七重八重に借金のカタにとられ

て手もつけられぬ有樣。

杉山の危機は目の前に迫つて來た。

これを見、これを聞いた信明氏の驚きと落膽は云ふばかりない。すぐさま八方奔走、寢る目も寢ずに骨を折つて見たが、病氣ならばもう死にかけてゐる病人、何んと悔んでもとても追付きさうにもない。困じ果て、苦しみ果て、最早や此上は殘念ながら匙を投げるより外はない、と既に諦めようとした――折も折、氏は偶然『富國捷徑』といふ報德教の著書を手にして豁然と悟り、膝を叩いて驚喜した。

その『富國捷徑』の中には、先づ何よりも人の心を改善して行くのが第一だ。人の心を改善してこそ物産も豐にならうし、村も榮えて來る――さうした意味の言葉があつた。

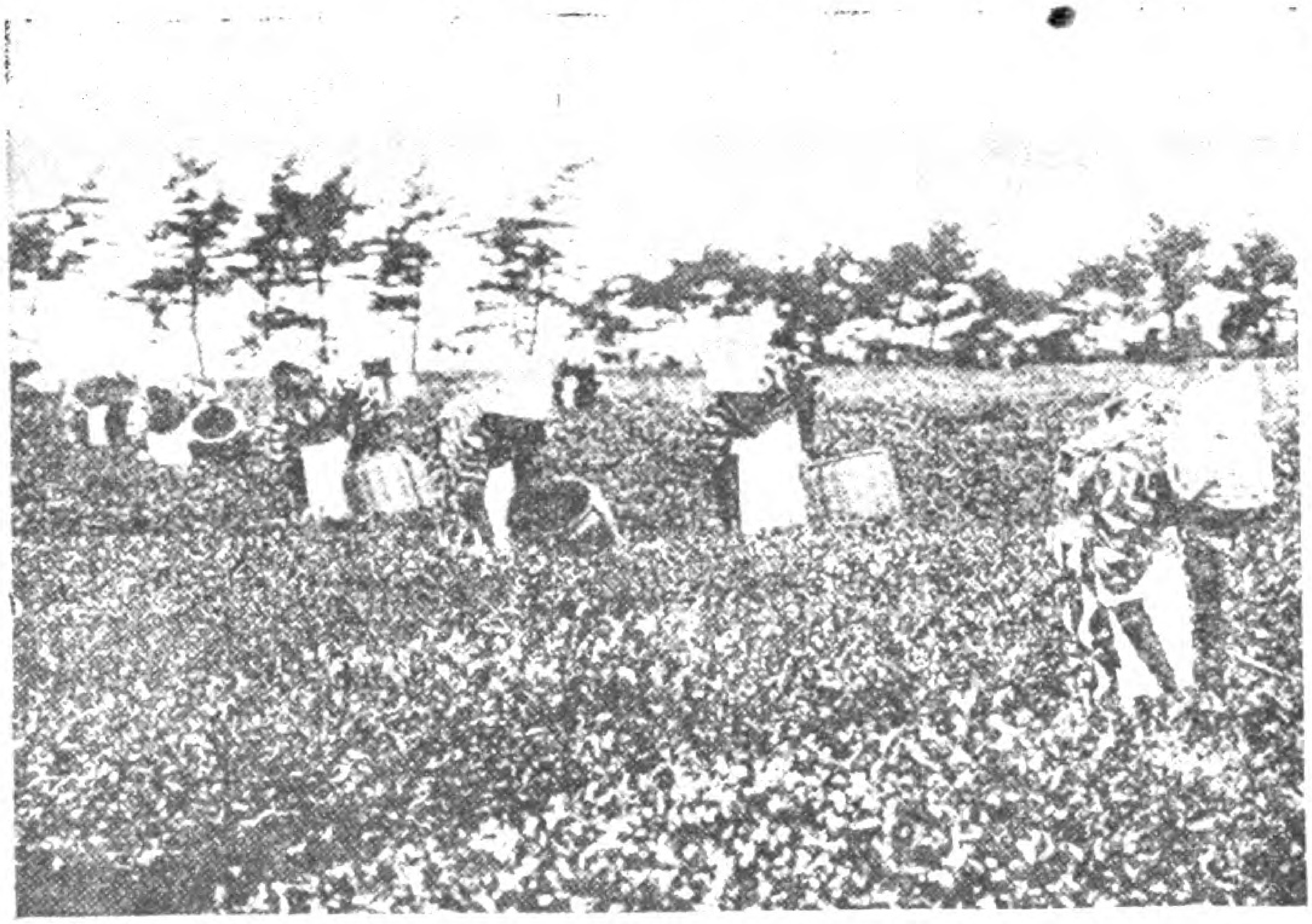
『これだ、自分は唯杉山を富ませたい一心から物産の增殖にのみ努力して來たが、それは根本から間違つてゐたのだ』

信明氏にとつてはこれこそ天の啓示、杉山の村にとつては實に救世主とも云ふべきものだつた。

報德聖者の出現

恰度此の時分、隣村加原村に柴田順作といふ聖者が居た。代代苗字帶刀御免の庄屋で、後庄屋を辭し、報德教の祖二宮尊德翁を野州物井村に訪ひ四年間師事して歸村、爾來報德教を說いて專ら勤勞淳朴の風習作興に努力してゐた人である。

茶摘みの實況



信明氏はすぐさま翁を訪ね、具さに杉山部落の窮狀を語り、報德の教へに依つて村勢の復興を懇願したのであつた。もとより、近頃の時勢と杉山の窮狀とを憂へてゐた柴田翁、一も二もなく快諾して、直ちに來村、諄々として村民に說いて呉れた。

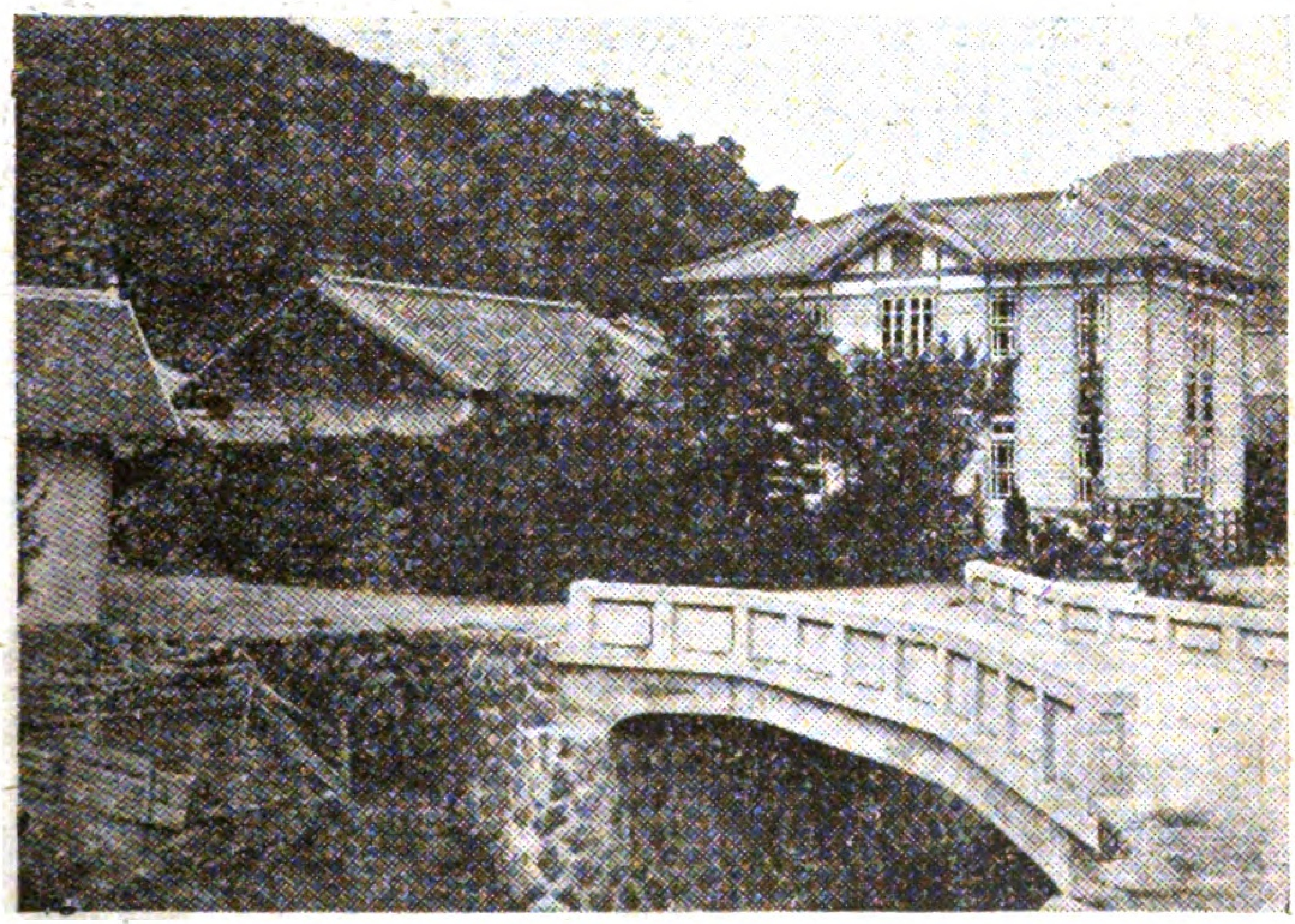
『村の衆よ、報德の教へは決してむづかしいものではない。要するに眞面目に働き、出來るだけ儉約して行けば自然と家も豐になつて來るし、從つて村も繁昌し國も富んで來る――これが根本の趣旨である。杉山の村を恢復させるには先づこれを實行しなければならぬ』

と、誰にも解るやうに語る。これに續いて信明氏も、報德の

教へをよく守つて、お互ひに一致協力し、此處十年の間に失つた信用を恢復して杉山を復興させようではないか、と、眞に血を吐く思ひ、村中の一戸一戸を訪ねて情理を盡して說き諭したのであつた。

眞心はいつでも人を動かす。兩氏が身を忘れ家を忘れて只ひたすら村を想ふの眞心は、どうして村民の心を打たずにゐよう。十年と云つたその一年も經たぬうちに、續々村人は報德教に歸依するやうになつて來た。然もその數、全戸數五十五戸のうち實に四十二戸――この大成功に大いに力を得た兩氏は、そこで直ちに杉山報德社を組織し、明治九年十二月二十四日、鎮守八柱神社の神前に正心誠意今後村の爲めに力を盡さうと決心書に調印をした。

その決心書は今尙ほ八柱神社に殘つてゐるが、これこそ杉山復興の一大動機、その眞劍さはまことに懦夫をも起たしむるものがある。



信明翁の起される杉山報德社の現在

苦心、遂に事業完成

杉山報德社員の大努力はいよ〳〵始まつた。

彼等は先づ、その昔二宮先生が野州櫻町に下つて改革された時、第一に神社の修築に手を染められたのに倣つて、八柱神社の修築をした。

續いて報德主義の主なる要件である貯蓄の精神から善種金の積立を始めた。善種金といふのは、各自相應の寄附をして公共用の資金を積立てることである。が、何しろ貧乏の折柄、八柱神社の修築でさへやうやくに爲し遂げた程だ、善種金の積立はなかなか實行されない。數ケ月經つてもまだ集らぬ。一年經つてもまだほんの少しばかりだ。

信明氏はそこで更に考へを廻らし、村民が一ヶ月三十日間にする仕事を、二十八日で仕上げさせ、あとの二日を自分の家に傭うて賃金を與へ、その賃金一日三朱のうち一朱を善種金に積立てることを勸めた。

果せる哉この結果は至極良好、數ヶ月經たぬうちに村民も競

ろく醵多額の善種金が集つた。

勤勉は光明を與へ、努力は良果を齎す——これに加へて、其頃から次第にお茶の景氣が恢復して、村民の懐具合は日増しに良くなつて來るし、信用はすつかり恢復してしまつた。早くも十ヶ年を經過した明治二十一年には、隣村兩河内村から十三町歩、三十三年には小河内村から六十四町歩の共に山林を買入れてこれを杉山報徳社の社有とすることが出來た。

失つたものが取戻せたばかりではない、更に又多くの山林が手に入つたのだ。村民はこれに力を得て益々奮鬪努力する——此の有様に勢ひづいた信明氏は、更に第二段の計畫を思ひ立つた。

それは蜜柑の栽培である。豫てお茶の次には蜜柑の栽培と考へ、此處數年來ボツ〳〵奬めて來た氏は、いよいよ實行の時機が來たと、極力栽培を奬め出した。

もとより信明氏の奬めを待たぬでも有望な仕事と考へてゐた村民、一も二もなくこれの栽培を始めたが、勤勉努力に慣れた人々、間もなくこれをやり遂げた。

山には黄色く熟れた蜜柑が花のやうに連つて來たし、畑には青々と茶の新芽が伸びてゐる——豐に惠まれた大産物は到る處で彼等の努力を讃へるやうに見えて來た。

かうして、信明氏の努力は日に日に實現して、杉山の基礎は一歩一歩固められ、遂に今日の如き隆昌をみるに至つたのであるが、信明氏は明治三十一年十一月六日、村人に惜しまれつゝ此の世を去られた。

大正七年、畏き邊に於かせられては、特に氏の功を嘉し從五位をおくられ、更にまた今回氏に優るとも劣らぬ努力を以て今日まで盡された九郎左衞門氏に、破格の恩命を賜つたのである。多年の辛苦報はれてこの光榮——庄平一家のみならず杉山部落の名譽はこれに過ぎるものはない。

× × ×

今や杉山報徳社は創立以來五十餘年、基礎は益々強固、治績はいよ〳〵擧り、村民いづれも和氣藹々のうちに家業を勵んで他町村にその比を見ぬ立派な村となつた。昭和四年度同村の茶、蜜柑等の生産高は年十五六萬より二十萬圓、平均一戸二千數百圓の多きに上つてゐる。而して全戸數は八十二、人口六百二十八人、村としては極く微々たる一小部落に過ぎないが、かうした物心二つの調和は杉山をして今日の如き偉大なる理想郷たらしめたのである。

我等は全國到る處にかゝる模範的人物、優秀なる村々の多數出現を待望してやまない。(終)

キングポスト

□展望台

○断然、天下の寵兒となつた漫畫家の比左良氏に頭痛の種がある。といふと諸君は定めしファン達からの手紙攻めと御想像たらうが——それが頗る變つた表札の盜難攻めであるから面白い。掛けかへても掛けかへても後から盜まれる。スツカリ閉口した比左良氏、當分表札は掛けまいと放つておくと、今度は警官が來て出せといふ。そこで今度はこれなら大丈夫と名刺を貼つて安心してゐると、間もなく通りかゝつた一學生、『はゝん、比左良さんは此家か、頂戴して行かう』と又も失敬。人の良い比左良氏も悲鳴を上げ

□御願ひ

經つて見ればわけもない夏でした。早くも涼風の秋です。皆さんには彌々御清適のことゝ慶び上げます。小誌も益々元氣潑溂、愉快な發展をつゞけて居ります。これ偏に皆さんの絶大なる御高庇の賜に他ありません。『キングはよい讀者を持つて幸だ』と他の編輯部から羨まれて居りますが、實際、毎日皆さんから頂戴するお手紙の數は大したものです。激勵の御手紙があるかと思へば御親切な忠告のお手紙——洵に有難いことゝ謹んで感謝して居ります。賞めて頂くのも嬉しいが御叱言は猶喜ばしい。唯、遺憾な事は時々御住所御姓名の明記されてないのがあつて、御挨拶出來ないことです。何卒將來は姓名を必ず御明記下さつて澤山とお手紙賜はります樣一重に御願ひ申上げます。

謹　告!!

キング案内小冊子、諸賢の熱烈なる御同情により申込大殺到、用意の部數忽ちなくなり度々増刷いたしましたがそれでも間に合はず發送を遲らせた向も出來、甚だ恐縮に堪へません。然し、今度は充分に用意を致しましたから御申込次第早速お屆けすることが出來ます。どうぞ、キング大發展の爲續々御申込みを願ひます。御一人廿部まで差上げます。

◇—編輯餘談—◇

「今度の感話集には趣味の清談を蒐めよう」と編輯會議で決まつてから間もなく、文豪幸田露伴先生に「釣」の話を貰はうと傳通院の宅を訪問したFとY記者、一足ちがひで、先生に淺間山の別莊に行かれ、悄然と戻つて來た編輯室、困つたなア……と意氣甚だ振はぬ兩人の會話をきき込んで編輯長、「オイ君！「お前とならばどこ迄も……淺間山……」と云ふ事もあるぢやないか、何もキング百萬の讀者の爲だ、欲しいとなつたら千里も一里さ。元氣一番、行つて來たまへ」

流石は編輯長、身體の如く云ふ事も大きい。が、人が聞いたら氣狂と云ふだらう。さて、そこで枚數にすれば僅かな原稿の依頼に、大の男二人其翌朝、上野驛から淺間を指してすつ飛んだ。小諸驛で汽車を降り登山口を小十町も上つたかと思ふ頃、見上ぐれば淺間の

『チェッ！　僕ア一體、怒つてよいのか、喜んでよいのか？？』

○

ところが、比左良氏のこのゴシップを漫畫にしようと同じ漫畫家の素文氏に依賴すると、話を聞いて笑ひ出した素文氏『いや僕も屢々盜まれるので氣をつけてゐると、或る日パリ〳〵と門で音がする。サテこそ怪漢！　と飛び出して見たに――何んとその怪漢は見るも美しい女學生だつたから驚いた。追つ駈けて叱つて聞いて見ると、女學生仲間では、人氣作家や畫家の表札を盜んでくると試驗の時に魔よけになるといふ馬鹿な迷信が流行るんださうで、それで盜みましたと眞赤になつてわびて行つたが、比左良君もその迷信に祟られてゐるんだ。また若くて美男子で今人氣の頂上にある比左良君だ、試驗に惱む女學生へ功德の爲に折角盜まれてやるサ。はつはゝゝゝ』



○

農科大學の藤井節三氏の話。

――先頃滿洲へ視察に出掛けたが、旅中無聊でたまらぬ。そこで評判の『キング』でも讀んで見ようと大連で一書店へ買ひに行つたが既に一冊もない。書店の主人の話では、毎月八百册しか送つてくれないので、それが全部月極めの讀者のところへ屆けると一部も殘らぬことになり、ひどくお客樣を失望させてゐる。少くももう三四百册送れと嚴しくいうてやるが、仲々送つてくれない。どこの店でも斯う賣れ過ぎるので容易に植民地へまでは手が廻り切らないのだらうが、困る、と云つて……旦那、若し講談社を御存じだつたら御歸京の節、電話でぜひこの樣子をお話し願ひたいものです。と、飛んだことを賴まれて來たよ。



――遙々やつてきた我等の苦心。外には暴風雨の音いよ〳〵凄まじく吹き捲つてゐる。

×　×　×　×

一筆得るにもこの苦心、――手前味噌の編輯餘談、讀者幸ひに諒とせられよ。

山嶺、密雲深くとざして天候頗る險惡を思はせる。雨も前途は遼遠、心細きこと限りない。やがて果せる哉、一陣の風は雨を呼び、豪雨は沛然とやつてきた。丁度これから急な坂道にかゝらうといふところで、幸ひにも一軒の農家があつた。雨に惱む旅の者、憐れと見てか、眞新しい傘を二本迄も貸してくれた。聞けば懐しやキングの愛讀者、水光社といふ農場で、淺間通ひの馬力迄雇つてくれる深切振り。勇ゝ鼓して雨の中を馬力の上の人となる。

『蠅の群がる馬力にのつかる、これも誰ゆゑ、讀者故』上るは急峻淺間の山道、ガタン、ビシンと尻を叩かれるさへ我慢が出來ぬに、雨にグッショリ濡れ鼠、命からがら漸く辿りついた別莊は赤松と白樺の木立も深い一軒家。

流石に驚き迎へた先生、

『この雨によく來たなア、書く書く、』と直ちに快諾。

嗟乎、この一言をきゝたさに



うまい物漫談

本山荻舟



食物のうまい秋が來た。秋刀魚が出ると按摩が引込むといふ。人間が健康になるからだ。その代り胃腸疾患に罹る者が多いのもこの秋口だ。季節の變り目に注意を怠ッたり、うまいとばかりで食過すからだ。先年探檢王のアムンゼンが日本へ來た時、『日本人は朝から晩まで、食ふことにばかりかまけてゐる』といッた。到るところの歡迎攻めに、うんざりする爲の皮肉でもあッたらうが、いはれて見ると痛いところを、ぐさりと突かれたやうな氣もした。事實この探檢家は、頑強な二食主義者で、また至ッての小食であッた。

しかし日本人だからとて、昔から食ふことにばかりかまけてゐたわけではない。元來はやはり朝夕の二食で、武家時代のいはゆる一人扶持米五合も、朝夕二合五勺宛の分量として給せられたのだが、百姓や職人等の激しい勞役に從事するものは、とてもやり切れぬとあッて、いつの間にか間食をするやうになッた。それが一般に及ぼして、朝晝夕の三食となッても、晝飯のことを中食といふのは、もと間食であッた證據だ。するとまた三食の外に、小晝食ともおやつともいふ間食、夕飯の外に夜長などといふ夜食をするやうになッた。なるほどからなると、日夜食物にばかり汲々としてゐるといはれても仕方がない。

もッとも支那料理などを見ると、支那人は日本人以上に大食らしい。日本の間食の中に、『硯水』または『點心』などと、ひねッた名稱の殘ッてゐるのに見ても、支那の影響を受けたことはわかる。往昔咸陽宮を造る時、あまり高いので硯の水が凍る、酒を入れると凍らないところから、常に酒を用意して置き、殘りは番匠のホマチになッた。慰勞の間に

娯樂室



漫彫　わが尻はいはずたらひなかき　長澤もとゐ作

◎酒落五つの音色

○羅宇屋さん、近頃の景氣は？
●ピー〱でさア

×

○號外屋さん、威勢がいゝね
●勇氣リン〱さ

×

○巡査さん、蟒蛇をお買ひ下さい
●ガチャ〱なら持つとる

×

○花火屋さん、君の啖呵は凄いね

食を硯水と呼ぶのは、そこから起ツた言葉だといふ。點心は佛家の稱で、通俗には茶の子といふ。食前食後に拘はらず、退屈して欠伸でも出さうなところへ、虫おさへに輕いものを攝る。空心に點ずるから點心である。いづれにしてもさうした間食は、專門家が唱へ、實例が物語ツてゐる。が、保健の途でないこと

牛飲馬食、鬪飲鬪食の會は、昔から行はれ、今も行はれる。『水鳥記』で有名な、江戸大塚の地黄坊樽次と、武州大師河原大蛇丸底深との酒合戰は、慶安年間と傳へられるが、それよりもずツと古い延喜の昔、宇多法皇の思召で、時の酒豪八人を亭子院に召され、二十盃を限ツて競飲せしめたもうたところ、大抵六七杯で醉潰れいづれも醜體を極めた中に、右兵衛佐藤原伊衡がたゞ一人、纔かに亂れなかツたといふので、駿馬一頭を賞賜されたが、しかも十盃を越えなかツたといふから、よほどの大盃であツたと思はれる。文化年間に江戸で行はれた大酒大食の會では、三升入の盃で六盃半飲んだといふ記錄があり、飯の方では茶漬茶碗で六十八杯、また盛蕎麥六十三杯などといふのもあるが、最も馬鹿氣てゐるのは、水一升、醬油一升、酢一升、酒一升を、三味線に拍子を取らせながら、舌皷を打ツて飲んだのはいゝが、間もなくコロリと參つてしまツた。



備後福山にも大食會といふのがあツたが、社中の者は皆早死し、ひとり殘ツて長生した醫者は、早く悟ツて脫會したからだといはれてゐる。筆者なども若い時分には、隨分暴飲暴食したものだツた。正月の雜煮などでも、中國筋のは丸餅で、東京の切餅よりはずツと大きいのを、六歲の正月から年の數だけ食べ上げ、二十歲の春には二十四食ツた後で、さら〳〵と茶漬をかき込ん

●あ、ポン〳〵云ふよ

○自動車屋さん、お腹も立たうが……

●私だつて、ブウ〳〵言ひたかありませんがね

◎滑稽月見曰く集

○番頭曰く『おや好い名月だ。旦那の留守の間に物干臺に立つて眺めよう』

○耶蘇信者曰く『おゝ！ 神樣は天上を煌々とお照しになつた。まるで樂園に咲く向日葵を見るやうだ。アーメン！』

○俳諧師曰く『名月や池を廻りて夜もすがら、と翁は仰有つた、どれ不忍池でも廻つて來ようかな』

○漢學先生曰く『酒一壺友三五、イデ東郊に遊はん。さしづめ我輩は今李白ぢや』

○モダンボーイ曰く『月なんて見るのは止して、今からダンスホールへ行かうか』

○ブルヂョア曰く『月がなんだ。

だ。鍋燒饂飩を十杯位はぺろりで、柏餅を三人で百食ツたのは、二十五歳の夏だツた。その上一升酒は平氣で、二升位の記錄はあツたとおぼえてゐる。不攝生の限りを盡して來ながら、現在人並以上の健康を保ツてゐるのは、性來の强壯では決してない。三十前から注意しはじめて、麥飯と、野菜と、小魚の骨とを、つとめて攝ツて來たお蔭だと信じてゐる。といッたからとて、急に『まづい物漫談』をはじめたわけではない。實際麥飯はうまいのである。新鮮な野菜位食指を動かしめるものはない。また小魚の骨をしやぶる味を知らないものは、美味を談ずるの資格がないといッていゝのである。飯は一食に輕く三杯、むろん二食である。そして間食はほとんどしない。酒もなるべく節することにして、晩酌小なから（二合半）を超えぬことにしてゐる。そして一本の入齒もなく、健康である。



秋の味は松茸からである。『燒松茸に橙酢』これが本格の味である。新鮮な松茸の石附だけ削ツて、暫く食鹽水に浸けるのは、殺虫の爲である。むしろ虫などのついてゐないのを、最初から選ぶべきである。丸のまゝ濡紙に包んで、熱灰の中に埋め、蒸燒にしたのを割きながら食べる。橙酢には醬油を加へて二杯にする。砂糖は淸新味を失はしめる、邪道である。豆腐と松茸のすまし汁、吸口に柚子皮を一片入れた風味、これはいづれも先刻御承知、その外にはフライパンにバタを溶かして、好みに割いた松茸を、さツとソテージしたバタ燒、卸し際にぱらぱらと食鹽を振込んだ味、新しがツた意味でなく、案外乙なものである。牛鍋鳥鍋にさくさくと入れる、一般大衆向として、うまいことはダンゼンうまい。この場合東京の牛尾あた

あんな月は幾らでも金で買つて遣る。オイ、誰かゐるか、ゐるなら電報でフォードへ自動車百萬台注文してくれ』

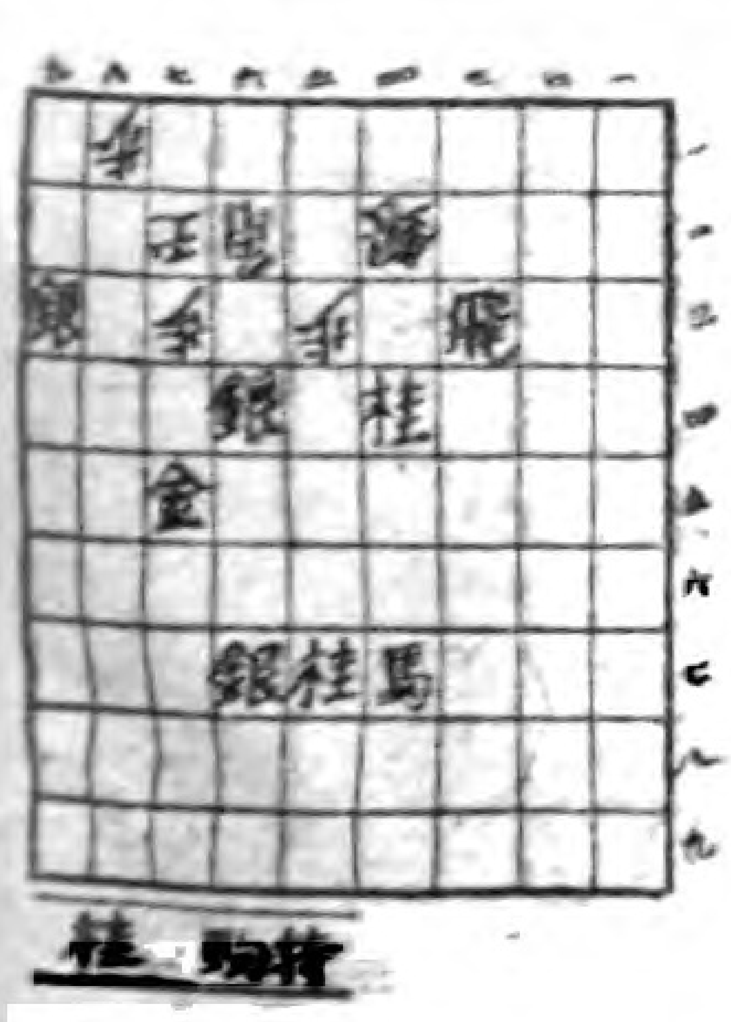
〇百姓曰く『俺アハア月見ても面白かねえだ。掘たての芋とチギリたての柿でも食ふべえか』

W.C.　十人十色　これは何？

△小學生はダブリユー、シーだと思ふ
△樂天家は歡迎だと思ふ
△驛員は便所だと思ふ
△野球狂は早稻田倶樂部だと思ふ
△不良少年はワシントンカフエーだと思ふ
（大池　錦並恭一）

〇詰將棋新題

八段　金易二郎出題





りては、奇麗ごとに表皮を摺剝いて出すが、あれは大異端で、折角の香味を半減する。

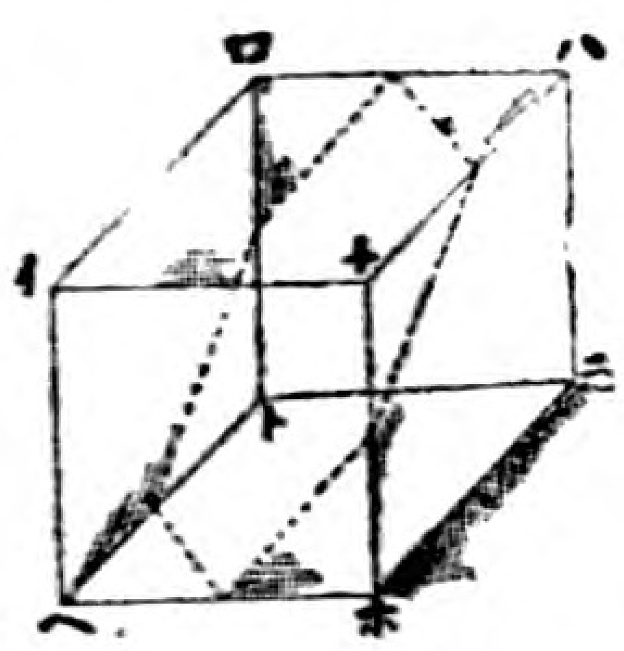
松茸飯は鹽味に限る。松茸だけ別に味をつけておいて、飯は仕かける時食鹽を加へ、上にダシ昆布を載せて炊き、噴いて來たら手早く昆布を引上げて、代りに松茸を入れ、充分蒸らして移す時攪まぜる。香味ゆたかにあッさりとしたところを賞玩である。その他の過たる加工料理は、われ等の取らぬところである。

松茸の旬は十月の初中旬である。その頃が一等うまい。ハシリ〲と先走りをすると、いつでもまづいものばかり食べてゐなければならぬ。

智慧くらべ解答
（本文一二四頁）

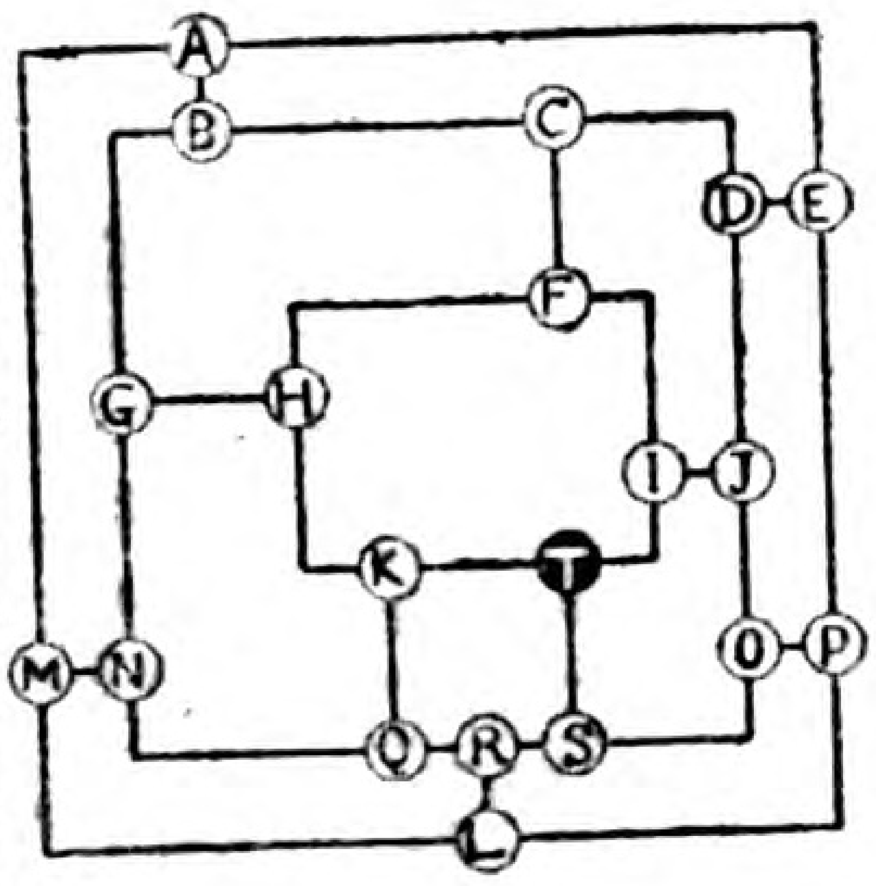
一、影。

二、圖中ロハ、ハチ、チホ、ホヘ、ヘト、トロの各邊の中點を定め、點線通りに庖丁を入れると、切口は六角となる。

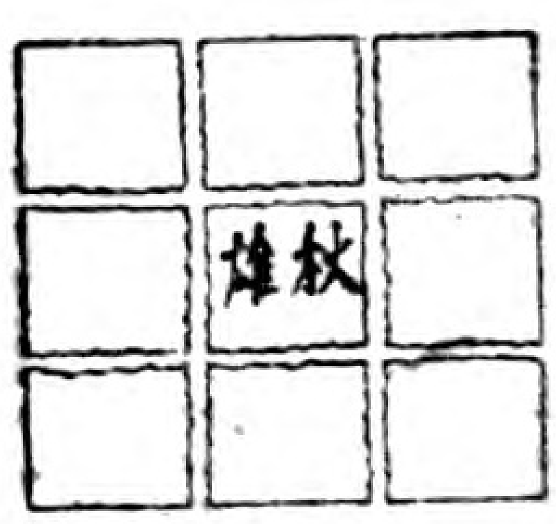


三、男十二人、女四人。

四、TSR LMAEPOJDCBGNQ KHFIT といふ順序で廻ればよい。勿論これと反對に廻つても少しも差支へはない。



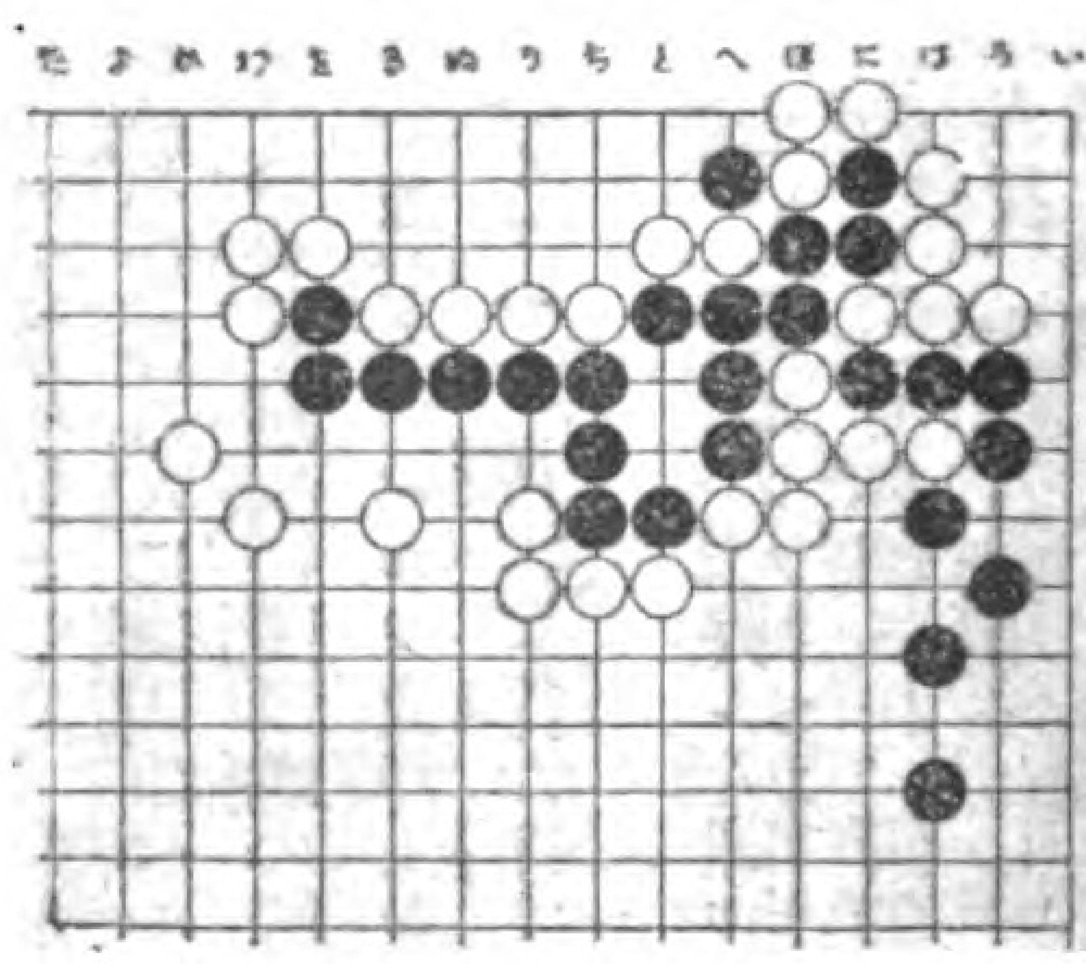
五、手で切取つた九枚の紙片中、四邊に多少のギザ〲あるのが名前の書いてある紙片である。



珍奇絢算術の解

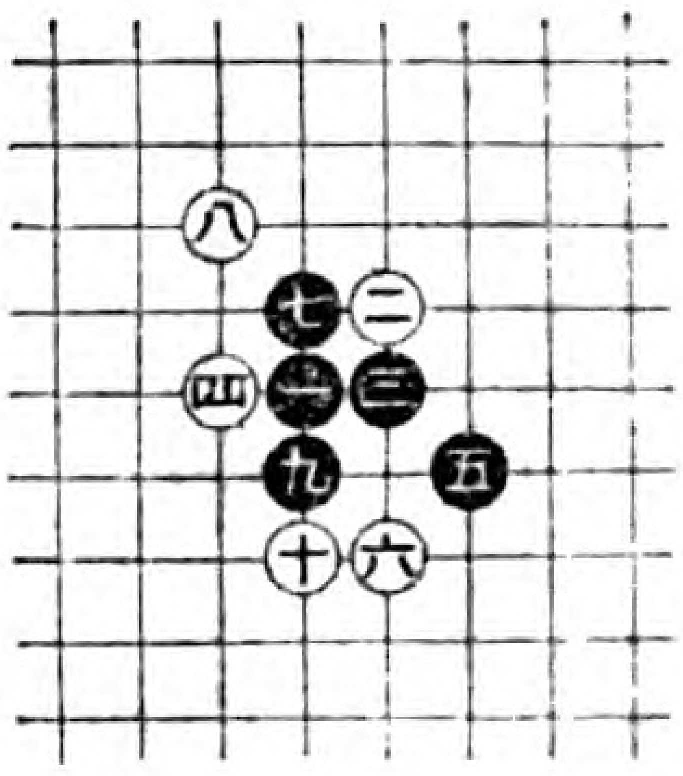


○詰碁新題
七段　瀬越憲作出題



黑先結果如何

○聯珠新題
珠叟　清水吾石出題



○此題は黑十一から追手詰で勝つのですが、どう打つたら最も確實に簡單に勝てるでせうか。うつかりすると白に乘せられます。

（本欄解答は三二一頁にあり）



研究中のホフマン博士

日本醫學總會で發表された病毒と體毒の完全治療法

獨逸ボン大學教授 ホフマン博士談

近き將來に病毒全滅期が來る

第八回日本醫學會總會は去る四月大阪中央公會堂で開催されました。之は世界大戰以來中止となつてゐた萬國醫學會の前提をなすもので、國際的の色彩濃く今日に於ける事實上の世界醫學最高會議であります。

その內、最も斯界の興味の中心をなしたものは、ホフマン博士の『病毒の完全治療可能說』でありました。ホフマン博士は、二十五年前に黴毒の病原菌スピロヘータを發見し、人類の惱みを解決し、今では全世界から花柳病退治の神樣と仰がれてゐる、現代醫學界の第一人者であります。

氏の發表された說の要點は、サルバルサン單獨療法の不完全な事と、治療手當の可及的迅速論とでありました。そしてその二十年來の蘊蓄は大きな刺戟と誘導を與へました。

其の一節に、弊店のベルツ丸の主藥が黴毒治療に最も古くより卓効あるものとして發表され、又統計上から日本でも歐米諸國でも黴毒患者は表面的には多少減少の樣に見えるが、それは外症患者丈けであつて、潜伏性のものは反つて多くなり現在ではその三割が外部症狀のもので他の七割近くまでが潜伏性のものである故に我等の大なる責務は潜伏黴毒を完全に治療する事であると大阪每日新聞に發表されました。

ホフマン博士の先輩の遺業

偉人なり人格者なりは必ずしも突如として出現するものではありません。例へば加藤清正、福島正則等の俊傑が尾州中村に出現する動機は豐臣秀吉の存在であり、維新の元勳高杉晋作、伊藤博文、山縣有朋は吉田松陰に師事し、その松陰は佐久間象山の下から生れてをります。

ホフマン博士の先輩先覺として、末永く醫學界に光輝を放つてゐる人に同國のベルツ大博士があります。寔や醫學の國獨逸の持つ最大の誇でございませう。ベルツ大博士を生んだ獨逸は、今又ホフマン博士を得た理であります。

令名世界に洽いたベルツ大博士が明治初年日本政府の懇請によつて來朝され、爾來三十年間帝國大學教授、宮內省御用係として活躍された事は有名な事實であります。そして博士は人類救濟の一念に盡瘁され、極めて多忙な間に種々苦心研究された數種の良藥を我が

日本藥局方に殘されました。

東京衛生試驗所發表

＝女四割に男は二割の恐ろしい有毒者＝

ニキビ吹出物の除去は簡單
梅毒と體毒を治癒し

美體にする家庭藥「ベルツ丸」の偉力

世の諺にも『自惚れと瘡氣のない人はない』と云はれて居る程で、私達の身體中には、この恐るべき瘡毒が何時とはなく、親から子へとしみ透つて居るものと見做す事が出來ます。

然し病氣が病氣である丈けに、男でさへ醫者に診て貰ふ事が何となく恥かしくて嫌なものですから、時に御婦人方は心配し乍らもつ



ベルツ博士

い其まゝになるのが常であります。又此の病氣には、專門的に六〇六號注射と水銀劑注射の外に治療法がなかつたのと、相當の費用が必要の爲め自然有毒者が多いのではないでせうか？　所が、「ベルツ丸」は梅毒や體毒、難症のニキビ、吹出物などに確効ある唯一の内服家庭藥でありますから、自宅で仕事をし乍ら、安々とどなたでも治療が出來ます。

梅毒、體毒、下疳、梅毒性リウマチス、ひえ毒、梅毒性ニキビ吹出物、又は梅毒性にて頭腦惡しき方や常に便秘性にて苦しむ方、其の他梅毒性から來た婦人病、痔疾等の諸疾患に思ひ當られる方は、『ベルツ丸』を服用すれば切らず注射せず手輕に徹底的に體内の諸毒を大小便に依つて體外に排泄しますから、是非試みに四五日連服してごらんなさいませ。直ちに心身の氣力を恢復して頭腦は輕くなり食慾は進み出し、容態が良くなる事がすぐ感じられます。そして知らず識らずの間に血液や淋巴液は淨化され、日ならずして恐るべき業病から全治の悦びに達する事が出來ます。

尚服用後一應血液檢査をすれば如何にベルツ丸が偉大なる効力を有するかゞ窺はれます。

＝高木博士が推奬して頑固なニキビ全快＝

岐阜縣海津郡　大川　保人

拜啓貴所愈々御盛榮の段奉大賀候　陳者先般御願ひ申上げ候通り愚息事顔一面にニキビ吹出物續出し困り居り候處偶々内科醫の診察を乞ふ必要ありとて伊勢羽津山病院に行き種々診察の結果、高木博士に『ベルツ丸』を推奬せられ早速御送藥煩はしたる次第に御座候　其の後連服いたし居候處約半量にて全治致し候へども殘量は後日の爲めと連服いたさせ居り候、斯る顯著なる効果を得しは偏に『ベルツ丸』の御蔭と存じ家内一同喜び居り候。嬉しさのあまり亂筆乍ら取敢へず御禮の御挨拶申上候　敬白

因にベルツ丸御希望の方は、發賣元たる東京市日本橋區濱町三ノ四鈴木日本製藥社（振替東京一〇五）番又は東京市本郷區駒込坂下町四八大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）番へ御申込み下さい。

藥價は輕症用三圓、重症用五圓、頑固用十圓、常服根切用二十圓、特別大徳用三十圓

送料内地十八錢、領土四十五錢、代金引替は切手三十錢封入の上御申込み下さい。

血ろくろ傳奇

土師清二
岩田専太郎畫



悪計の渦巻

一

事態は急迫しました。

三十郎は辨左衛門の命令に従つて朋友久世森藏を斬り殺しました。

と、その隙を狙つた辨左衛門が無聲殺刀の一擊、あはや……三十郎、辨左衛門に斬られたかと思ふとさうでなく、鍔で受止めて刎返すや否や殺氣滿々！

『汝！ 寄れッ、逃ぐるか……』

と三十郎、ジリジリ辨左衛門を追ひ詰めて行くいです。

『待て……待つてくれ！』

後へ〳〵退りながら辨左衛門は必死の聲を振り絞つてゐる。

『え〻……往生際の惡い奴！　かうなりや汝……森藏の仇だ！』

『モ、……森藏はお前が斬つたのぢや。俺は……俺は眞逆お前が……』

『え〻、うるさい！　覺悟せい！』

『い〻や！　眞逆お前が森藏を斬らうとは……俺は思はなんだのぢや』

『汝が、斬れと云つたから斬つたのだ。なんの譯も理窟もあるものか』

『いや！　さうぢやない……』

『まだ汝……そんなら汝は、何故俺に斬りかゝつて來たのだ。この上は斬るか、斬られるか、二ツに一ツだ。い〻加減に覺悟をしろ』

『いや……待つてくれ！』

『畜生……！』

『詫びる！　謝る！　貴公は俺の味方ぢや……大切な味方ぢや』

『味方を、なんで不意打に掛けようとしたのだ！　世迷ひ言を吐くなッ』

『そ〻……それは、豫て……豫て……』

『ウム、豫て――どうした？』

と三十郎は怒鳴るのです――あまり敵手の哀れな有樣に少々滑稽になつて來たと見えて、稍ゝ餘裕を與へて調弄つて、それから斬らうと方針を一變したらしい。

『さア、豫て、どうした？』

『ドレ……ドレほど強いか、貴公を、試して見ようと思つてゐたのぢや……』

『馬鹿ッ。ナニを云やアがる！　飛んでもねえことを！』

『まつたくだ！　待つてくれ……』

『たは言はソレだけか。もうい〻、覺悟をして前へ出ろ！』

叱咤して三十郎は、大刀を把直つたま〻半歩前へ刻み足に迫まる。

と一層脅えて辨左衛門はその僅の一歩後へ退さるのです。退さりながらもまだ、

『許してくれい！　やる！　金、刀……金をやる……なんでもやる！　やるから待つてくれ……許してくれい！』

『汚い奴だ！』

『なんでもよい……なんと云はれてもよい……俺は死にたくない……今、今お前に斬られては、水の泡だ……これまでの苦心が水の泡になる！　それが殘念だ……』

『まだ世迷ひ言を……』

いよ〳〵忌々しさうに、舌打をしたが三十郎、踏込まうとはしないのです。

三十郎の腕前で、もう一歩踏込めば一刀兩斷、辨左衛門の老骨を斷つこと容易なのだ。それだのに三十郎はソレ以上踏込ま

うとしないのです。

やつぱり――敵手を死地に追ひ込んで置いて、少時娯まうといふ三十郎一流の慘忍な遊戲なのか――遊戲とすれば他人の生命を弄ぶのだからそれほど痛快な遊戲はないのです。

だが、如何に慘忍酷薄な三十郎であらうとも場合が場合だ、一瞬も早く辨左衛門を斬伏せて此家を出て行きたいのです。

では、何故三十郎は跳躍一番、眞ッ向から割付けないのか？

いふまでもなく三十郎は、辨左衛門の後の襖から半身をのぞかせて、三十郎の眼を見、呼吸を計つてゐる甚之助の尺蠖ノ氣合を看破つてゐるのでした。

相變らず腑抜けた顏をして、三十郎と辨左衛門の死鬪をボカンと見てゐるが、もし三十郎が最後の一刀を辨左衛門に向つて斬り下せば、間髪を容れずして甚之助の手から何が飛出すか知れたものでない……。



三十郎は、それを慮つて今一歩といふところで踏止まつてゐる……從つて三十郎の迫氣が充分でなく、淡れ挫かれて來るやうです。

『な、な、三十郎……待つてくれい』

とまだ辨左衛門は必死の聲を嗄らせながら油斷なくジリ〱退いて行く、途端に襖境の閾に踵が掛つたので、思はずホッとしたと同時に必死で三十郎に背を見せたかと見る、とタタ、、……次の間から次の間へ轉げるやうに逃げて行く辨左衛門！

『チヨッ！』

三十郎は舌打をし、床の間の前に斃れてゐる久世森藏の死骸に近づくと、羽織を掴んで大刀に拭ひをかけるとピッタリ鞘に納めるのでした。

その時まで三十郎をボカンと見てゐた甚之助も、鞘に納まつた大刀の鍔音を聽

くと一緒にクルリと向直つて廊下を離座敷の方へ、ブラ／＼歩み去つて行きます。

『畜生！ 贋氣狂ひ奴……』

と思はず呟いた三十郎――その三十郎は、先刻からの様子でいよ／＼甚之助が贋氣狂ひであつたと知ると同時に、何時ぞや鳴田敬之助の隠れ家に、現はれた黒装の怪劍士も甚之助であつたに相違ないと知らねばならなかつたのです。しかも劍技に於いて甚之助は三十郎より數段上にあるといふことも知らねばならなかつたのです！

何處で、何時修業鍛練したか玄妙不可思議の劍技を體得してゐる贋氣狂ひの生田甚之助――此奴を討取るには、正面からかかることはできない。いや、できても愚だ！ 瞞つて討つに限るのだ！

おゝ……吹矢ノ淺右衛門！ 此奴の鐵砲を使ふに限る……。

三十郎は、突嗟にさう思案を定めるのでした。

今や三十郎にとつて、生田辨左衛門も敵、甚之助も敵、鳴田敬之助は素よりのこと、阿波屋徳右衛門も、犬飼ノお豊も敵でした。味方と云つては吹矢ノ淺右衛門一人です。しかし三十郎のことだ、淺右衛門とて氣に入らねば何時ズバリと殺らぬとは保證の限りでないやうです。



『永居は無用だ、そろそろ歸つてやらう』

と氣が付いたのか三十郎はそのまゝ廊下から庭へ降りようとしたが、又引返して久世森藏の死骸の懐中に手を入れ探つて取出したのは、ヅシリと重い革財布。そいつをふところに入れると庭へ、降りて行きます。

まだ曉闇で、足もとが暗い……。

さすが大きな邸内で、先刻からの陰慘至極な出來事を知らなかつたものゝやうに、シーンと靜まり返つてゐる……。

三十郎は庭石づたひに植込みを拔け、勝手裏へ出て行きますと、内側から開き戸が音もなく開いたので、敵が待伏せしてゐ

るのかと思はず大刀の柄に手をかけたが、通り庭の闇の中を先方へスウツと動いて行つた人の氣配を覺ると、そのまゝ通り庭に踏込みます。

三十郎は、コレは俺の前に廻つてゐる者があつて、俺が表へ出られるやうに戸締りを開けて行く奴だ――と見當をつけたのでした。

その見込は的確だつた。

間もなく通り庭の突き當りにあたつて戸の開く音がしたかと見ると、闇の一角を切りぬいたやうに戸外の薄明りが行く方に映し込んで來ました。

三十郎は立停まつて、身の近くを見廻しました。こゝら邊に水瓶でもないか……と思つたのでせう……。

二

三十郎が立去つて行く――と見て取つて離座敷に引返した甚之助は、火鉢の横のかげにナニやら光つてゐる物があるので、手に取つて見ると、それは先刻までこの部屋にゐたおてるの簪から外れて落ちたと見える銀のヒラヒラでした。

少時それを掌に載せて弄んでゐましたが、紙入の中に入れて、そのまゝ手枕の轉寢です。

と、それから少時……甚之助は、土の音だなと氣が付いてパツチリ目を開けました。

確に川岸に向つた塀の根方と思はれる場所から土を掘り返してゐるらしいドスン……ドサツといふ鈍い物音が聞えて來るのです。



『はて、死骸を埋めてゐるのか？』
と甚之助は、起き上つて雨戸の透し棧を引き、物音のする方を見るのでした。
鍬を振り下してゐる人影と、その傍に立つてゐる人影と、足もとに轉がしてある空俵のやうなものが、こちらから見える……しかしそれは曉闇の中に投げ出されてゐる死骸であることは、仄白く轉がつてゐる顔と手と足の白くのびてゐるのとで、一目で死骸とわかるのでした。しかも人相こそ見えぬが、その死骸が三十郎に斬られた久世森藏の死骸で、傍に立つてゐるのは阿波屋德右衛門、鍬を揮つてゐるのは下男であると察しられるのです。
三十郎が去つた後、辨左衛門と德右衛門が相談して何でも手早く久世森藏の死骸の始末をしようと掛つたものと見えます。
猶も見てゐる甚之助の背後に誰やら近づいて來た氣配がするのを、甚之助は知らぬ振りで、透し棧に喰付くやうに凝ッと外を見てゐました。
『甚之助……甚之助樣』
まさしく辨左衛門の聲です。
『辨左か』
と甚之助は、ケロリとした顔で、辨左衛門を振向いて見ました。
『どうか……あちらに』
と辨左衛門は、極めて慇懃な態度で、正座へ、甚之助を招じるのです。先刻の死鬪に漸く虎口を脱がれたもの丶、まだ去り切らぬ恐怖のためか、顔色蒼白、唇も褪せ、聲も震へを帯びてゐます。



甚之助は忽ち樣子を變へて、辨左衛門のいふま丶になつて正座にピッタリ坐りました。銀燭の光の中に白皙秀眉の貴公子甚之助、端然と坐してゐる樣子は、もう贋氣狂ひでもなく、阿波德の娘お鶴を相手に痴呆の狂態を盡してゐた遊冶郎甚之助でもない。凛然たる貴公子甚之助でした。
疊に兩手を突いて、小時首垂れてゐた辨左衛門、漸く顔をあ

げると、兩眼からハラ／＼落涙です。
甚之助は、默然として辨左衛門を見てゐるのです。
これが眞實の父親なのか？　自分の父なのか？
この極重惡人が、
俺の身内に脈搏つてゐる血は、辨左衛門の身内に通うてゐる血と同じ血なのか？
甚之助は、辨左衛門を見てゐるうちに、今更のごとく、いひやうのない苦しい心地になつて來るのでした。
阿波藩中の者悉く、自分を二十五萬三千石の御隱居蜂須賀大炊頭重喜とその愛妾お伊勢の方の間に生れた甚之助だ――と思つてゐるだらうか？
阿波藩中の誰も彼も、自分を生田辨左衛門とお伊勢の方の間に生れた不義の子だと知つてゐるのではないか……？
何時ぞや俺をお鶴と一緒に攫へて行つた怪しい勇肌の鴫田敬之助は、俺を不義の子だと知つてゐた……しかも辨左衛門とお伊勢の方が謀叛を企てゝゐることまで敬之助は知つてゐた。……謀叛のカラクリの種は俺を――この甚之助を、飽くまでも大殿重喜侯のお胤として正式に當主治昭侯の弟御に直さうと企てゝゐるのだ。
それを敬之助は知つてゐた。阿波屋徳右衛門も共謀になつて、辨左衛門一派に黄金を貢いでゐるといふ事實……みんな敬之助は知つてゐたのだ。
辨左衛門は子の俺が、ナニも知らぬと思つてゐるのか……。

甚之助は、今自分の眼の前に兩手を突いてゐる父親辨左衛門を見ながら、さう思つてゐるのです。
仕儀に依つては父でも構はぬ……この場を去らさず討果して割腹しよう。それが切めての主家への申譯である！
父と母が藩公の目を偸んで不義密通を働いた大不忠の償ひだ……。
甚之助は、さう思つてゐるのでした。
甚之助がそんなことを考へてゐると知つてか知らずにか、辨左衛門は漸く涙の流れてゐる顔をあげて、しげ／＼と甚之助の顔を見るのでございます。
『父上……』と甚之助。
『はゝツ……畏多うござりまする！』
と辨左衛門は、殊勝にも首垂れました。父上と呼ばれて勿體ないといふやうです。
『畏多いとは、誰に仰有るのです？』

『なんと……仰せられまする。申上げまするまでもなく貴方様は、大殿重喜侯の御次男に渡らせられまする……御主命とは申しながら大殿様より、當分其方の子として育てよとの仰せを蒙り……今日までの御成人。最早この上は、大殿様と御親子の御名乘、また御當主治昭侯と御兄弟の御名乘……以上二ツ。これを果さねば貴方様に對し、この辨左衞門全く申譯もない次第なれど……如何なる御都合か、まだその運びとなりませぬ。これ全く一重に辨左衞門が忠義の足らぬところ、申譯次第もござりませぬ……それに就けて思はずも不覺の涙……辨左衞門も年老いて、意久地無しになり果てました……お笑ひ下されませ』

辨左衞門は、さういふのです。なんといふ取繕ひの出鱈目なのでせう！

あまりの芝居上手に、さすがの甚之助も呆れるばかりでした。しかもこの芝居の上手な極悪人が自分の父親なのか……と思ふと憤怒とも情無さとも云ひやうのない心地に陷ちてゆく甚之助の心持は、どんなでせう？

『今日只今の御様子を拜するに就きまして辨左衞門奴……御賢慮の並々ならぬを漸く覺りましてござりまする！』

『と、仰有るのは？』

何を云ひ出すか——と甚之助は、悲痛の中にも思はず苦笑ひを浮べるのでした。

『何時ぞや、曲者に誘拐され遊ばして以來、俄に氣狂ひ……亂心の御様子となられましたのは、貴方様に深い御存念がおありなされた……それとも知らぬ辨左衞門、眞の御亂心としてお手當を申上げましたること、面目次第もござりませぬ。お許し下されませ……』

辨左衞門は、飽くまで恐入るのです。なんといふ空恍けた云ひやうなのでせう！

甚之助は、この上空々しい口上を聞いてゐられなくなりました。

一撃の下に、この化の皮を引ツ剝がしてやりたい！

しかし如何に不忠不義の辨左衞門でも自分のためには實の父だと思ふと、先づ諫めて後に……と又悲痛にも思ひ返すのでした。

『父上の、仰有ることは……よくわかりました。では、私が申上げます』

と漸く甚之助は、口を切つたのです。

『はゝ……何事なりとも、仰せ聞け下されませ』と辨左衞門。

『父上は、曲者のために私が誘拐されたのは、何のためだとお思ひになりまする？』

『はい、それは……？』
『甚之助は、不肖乍ら鏡巻流免許皆傳でござります。それなのに喑々と曲者に向つて抵抗一ツせず誘拐されてやつたのは……』
『おゝ……さうだ、貴方様は眞柄七郎左衛門々下の達人中の達人でゐらせられた！』
辨左衛門は、兩手を擧げて褒めそやさんばかりの様子を見せるのです。追從輕薄の限りを盡さうといふのでせう。
『私は、父上を狙つてゐる奴の秘密を知りたかつたのです』
甚之助は、きつぱりといふ。
『えツ……あの不敵な聟勇肌……怪しい勇肌の秘密を！　左様でござりましたか！』
といよ／＼意外、いよ／＼嬉しくて堪まらぬ顔をする辨左衛門。――思はず一膝乘出して來るのです。
『しかし……私は、怪しい勇肌の秘密を嗅ぎ出す前に、私の身邊に絡まつてゐる秘密や父上の不義の秘密を知りました……知らなければならなかつたのです！』
『えツ……俺に……いや私に不義の秘密！……不義の秘密とは……一體？』
『父上ッ』
『えツ……？』
『まだ……まだお惚けなさるのですか！』
『俺は……俺は、わからん……』
『貴方の僞れてゐる勇肌は正義、誠忠の侍でございました……貴方の不義の秘密を天日の下に曝さうと身命を賭してゐる忠義の男ノ子でござりましたぞ』
『ナ、……ナニを云ふのぢや……ナニを仰せられるのぢや……アツ……アハ、、、……ナニを仰せられるやら……アハ、、、……お若い、お若い／＼……アハ、、、……アハ、、、、』
腹を押へて辨左衛門、俄に正體もなく笑ひ伏すのです！
甚之助は、俄に笑ひ上戸になつた父親辨左衛門の情無い有様を凝ツと見てゐましたが、見るに堪へなくなつたか、スツと座を立つて雨戸一枚引き開けて眺めるともなく庭を見やるのでした。涼しい雨眼は、どうやら涙で曇つてゐるやうです。
戸外はすツかり夜が明け切つて、清々しい微風が庭の木々にうごいてゐます。
と、その庭の一隅の黑塀の下に新しい土肌が見えてゐるのは、三十郎に斬られた久世森藏の死骸を埋めてある場所と見えます。
またか／＼と思はれるほど獨りで笑ひつゞけてゐた辨左衛門は、やがて立上つたかと見ると又甚之助の背後へ、そろり／＼近づいて來ました。
甚之助が、それと知つて振向くと、
『甚之助様……よく御思案をなされて下されませ……貴方様は、阿波藩二十五萬三千石の御當主治昭様の弟御様でござりますぞ……輕はずみなお考へは、御無用になされませ。おわかりでございませうな』

と意味ある言葉を、吹き込むやうに云ひ、甚之助を凝ッと見つめてゐたかと思ふと——その時、何か云はうとした甚之助の言葉を遮るやうに、

『アハ、、、……アハ、、、……』

笑ひつゞけて、そのまんま甚之助の部屋を出て行くのでございました。

三

甚之助の離座敷から母家に引上げて來た辨左衞門の顔を見ると、待ち構へてゐた阿波屋徳右衞門は、驚いて、

『生田様、どうなされたのでございます……まだお顔の色が、お惡いではございませぬか』

『さう見えるか、お互ひに寢不足の所爲だらう。俺はあちらで笑つてゐたのだ。まアよい。徳右衞門、後の事を頼む。俺は一先づ屋敷へ歸へる』

『こちらで少時お臥み遊ばしては如何でございませう』

『歸らう。御用もあるでな。甚之助様に氣を付けてくれ』

『はい、畏りました』

『脱け出されぬやうに、張番を付けて置いてくれ。駕は、待つてゐるかな?』

『はい。昨夜からズッと待つて居りまする』

『では、歸る。甚之助様を頼むぞ』と念を押して置いて、辨左衞門は駕に乘り、本所の阿波屋敷へ引揚げて行く。

戸外は、すッかり朝で、路には打水、屋敷街には箒目が美しく立つてゐます。

駕に揺られながら辨左衞門、遂にこれまで覺えぬ不安に苛はれてゐるのでした。

甚之助はナニもかも知つてゐるらしい……。

先刻父上と云つた甚之助の言葉に含んでゐた響き……あれは確に肉親の俺を呼びかける言葉だつた。これまで假りの父子として育て丶來た甚之助故、俺に父上と呼びかけることはこれまでとて珍しくはない。しかし先刻の父上といふ言葉の樣子は、今までとは異つてゐた。確に肉親の響きを持つてゐた……。

『父上の不義の秘密』と云つたからには、お伊勢の方と俺の間に生れた子だと覺つてしまつたのかも知れない……。

俺は突嗟に佯笑ひをして、あの場は有耶無耶にゴマかして來たが……一體これから先きは、ドウなるのだ?

甚之助に俺等の秘密を云ひ聞かせたに相違ない怪しい勇肌が、まだ生きて何所かにゐる……。

昨夜の一件から、すッかり敵に廻つてしまつた道岡三十郎がゐる……。

味方は老中の余田伊豫守とお伊勢の方だけではないか。

これでは、甚之助を蜂須賀家の家門に祭り上げた上で、存分に蜂須賀家二十五萬三千石を料理しようといふ俺の苦心の目的は、ドウなるのだ?

それはかりではない。

たとへ密謀が成就しなくとも、このまゝ秘密が保たれてゐれば俺は依然として阿波蜂須賀家の江戸家老として威權を揮つてゐられるが、若し密謀露見となれば自滅しなければならない。

密謀を遂げるには、今後如何にすればよいか。

密謀の秘密を秘密として永久に葬り去るには如何にすべきか。

辨左衞門は、あれよこれよと思案を凝らすのでした。

そのうち駕は、藏前に差蒐つて來る。

と、駕の中から辨左衞門、

『待て』

『へい』ピタッと駕が止まる。

『引返して清淨庵樣へやつてくれ』

『畏りました』と駕は、藏前から引返して黑船町から並木町、左へ曲つて傳法院前を寺街へ、上野山下の清淨庵の表玄關へ橫



付になる。

取次ぎに出て來たのは執事の丈右衞門です。早速庵主慶了院お伊勢の方に通じて置いて辨左衞門を客間に通します。

『微行で參つた故、駕を、物陰へ廻させて置いてくれ』

『畏りました』と丈右衞門は玄關へ出て行きます。

間もなく切髮に紫の被布で、お伊勢の方が淑やかに現はれました。

『これは生田樣、早朝から……』

『少々內談の筋があつて來ました』

『御內談？』

お伊勢の方は、膝を進めました。それを皮肉な眼でジロリと見て辨左衞門。

『密謀露見でございますよ』

『えッ……ナニを仰有ります。お戯れを……？』

『なんの、戯れるものか……この辨左衞門は覺悟をしてゐる、捕へられて恥をうけようより腹を切る！』

『そゝ……それは眞でございますか？』

見る〳〵お伊勢の方は[illegible]色土のごとく[illegible]、ブル〳〵[illegible]らせ

ます。

『そなたと俺との間に生れた甚之助を、蜂須賀家の家門に祭り上げ、一旗擧げようとした企謀も今は無駄ぢや……無駄どころか腹を切ることになつた。今更云へば愚痴になるが、甚之助を切めて三千石か五千石……あはよくば蜂須賀家の主にしたいと云ひ出したのはお前様だつた』

『はい……』

『俺も、吾が胤だと知つては甚之助が可愛いゝ。また他に考へもあつて今日まで幕府の老中に手を廻し、金も費ひ、智慧も使つて來たが、モウ駄目だ』

『……』

『お互ひに覺悟をする時が來た。謀叛人らしく立派な死態をする――このほかに途はない』

辨左衛門は、凝ッと双腕を組んで、眼では鋭くお伊勢の方を見てゐる……。

お伊勢の方は、首垂れてゐます。肩から脊へ波立つやうに見えるのは、全身を恐怖が、絶望が、驅け廻つてゐるのでせう。

『加賀の大槻傳藏は、俺達と同じやうに藩公の妾と通じて生れた子を加賀百萬石の藩主にしようとして失敗した……俺とお前様とは丁度一緒だ。俺が傳藏、お前様は眞如院だ。その傳藏は土牢で死んだ、眞如院は斬られた……俺は捕へられるまで待つては居らぬ、切腹して自分の始末をつける。お前様も覺悟をなさるがよろしいぞ。俺はソレを云ひに來たのぢや。おわかりになつたか』

『ハ、……はい』

『おわかりなら歸ります。さらばぢや……お互ひに夢を……悪い夢を見てゐたと諦めるのだ。悪い夢を……』



胸中に如何なる計謀があつてか、如何にも悲痛な言葉で、それだけいふと辨左衛門は徐かに立ち上りました。

『モシ……待つて……下さいまし……』

と涙ながらに取縋るお伊勢の方のその手を、ヂッと辨左衛門は握つてやるのです。

『企みが大きかつた、大きいだけに失敗すれば死だ。わかりましたらうな!』

『アイ……』

『では、さらばぢや。俺も見苦しい死態をしたくない。これから歸つて用意を急がう……』

『少時……少時お待ち下さい！　どうして……誰が……誰が訴人……裏切つたのでございます。其奴の名を、其奴の名をお聞かせ下さい……聞かして下さい！』

『それを……聞くは無益ぢや。この期になつてナニを云ふのぢや』

『いゝえ！　聞かねば、死ぬにも死に切れませぬ……死に切れませぬ！』

お伊勢の方は、さすがに女心の愚痴と恨みから裏切り者の名を聞いて死にたいと見えて、懸命に辨左衛門に取縋るのでした。

『俺はソレを聞かせまいと思つてゐたが……では聞かせてやらう。その裏切り者の名は……』

『はい。誰でござります？』

『誰あらう甚之助だ！』

『えツ……あの子が……』

『お前樣も覺えてゐる筈ぢや……あの子は醫氣狂ひになつてからお前の顏を見ると、小唄のやうに、生田辨左の女房ぢやないか……と甚之助は唄ひそやしたものだ。この小唄こそ甚之助が何もかも知つてゐて、お前樣と俺を嘲り笑つてゐた證據ぢや。間違ひもなく裏切り者は甚之助だが、強ひて云へば甚之助の良心が裏切りをさせたのだらう……ハ、、、……甚之助の良心か……ハ、、、……甚之助の良心のために我等甚之助の兩親が自滅するのか……ハ、、、、……ハ、、、ハ、、』



又辨左衛門は、笑ひ出しました。さうして絶望的な呪ひに滿ちた消え入るやうな笑ひ聲を殘して、辨左衛門は猶も笑ひつづけて……尾を曳くやうにハヽヽひつゞけてフラリ〳〵、お伊勢の方の前を去つて行くのです……。

取殘されたお伊勢の方は、あまりの心の激動に堪へ兼ねたか、辨左衛門の姿が見えなくなるのと同時に、

『ウン……』
と叫んだかと見るとそのまゝ仰向け様に打倒れてしまひました。

さうと知つてか知らずにか、こちらは辨左衛門、待たせてあつた駕に乗つて清淨庵の門外へ出ると、心中ペロリと長い舌を出したのでした。

『あの女、死ぬだらうな。あの女に生きてゐられては今後の邪魔になるでな……なんの俺が死ぬものか！』

と、ニヤリと悪魔の笑ひを洩らすのでございました。

辨左衛門の胸中では、先づお伊勢の方を自殺させて密謀の證據を――有力な生き證據の一ツを無くして置かうと企んで芝居を演り、お伊勢の方を自殺に導びいて行く手順を運んで行つたと見えるのです

辨左衛門の駕が門の外へ出るまで見送つてゐた執事の丈右衛門は、常ならば庵主様が玄關まではお見送りになるのに、これは訝しいと思つたと見えて、そのまゝ奥へ引返して來ると驚いた！



仰向けになつてゐるお伊勢の方を、膝の上に抱きあげてゐる立派な武士の姿！　見るより、

『ア、……あッ……』

丈右衛門は、腰を拔かしてヘタ〳〵と坐つてしまひました。

四

『丈右衛門』

『ハッ……へ、へゝ……』

『辨左衛門は出て行つたか』

『へ、……』

丈右衛門は、漸ッと首肯くのです。

『水を持つて來い。靜かに持つて來い。家中の者誰にも知らせるなよ。竊に持つて來るのだ。わかつたか……聲を立て、騒ぐとコレだ』

と云ふや否や、左手に大刀を引寄せる。

『ヘッ……畏りまし』

怖しさと驚きとで、腰が立つたものか丈右衛門はヒョロリと立上つて、水を取りに行きます。

武士は、腰から印籠を外し小粒の丸薬三四粒摘み出して待つてゐる。そこへ漸く丈右衛門が急須に水を汲んで來ました。

『コレに汲んで來たか、心得たものだな』

『へゝ……』

思はぬところで褒められて、丈右衛門はガタ〱震へてゐます。途端に、

『エイッ』

聲こそ低いが、鐵桶をも透す起死活法の氣合！

『うッ……』と呼吸を、吹き返したお伊勢の力の口を割つて丸藥を含ませ、

『さ、水』と武士の力強い聲です。さうして急須の口を含ませてやるのでした。

お伊勢の力は、我に返つて、眼を開けました。

と、見馴れぬ男の膝に抱かれてゐるのですからハッと驚いて飛び除かうとする！　それを、

『靜かに！　靜かになさるがよろしい』

と云はれて漸く膝から辷り落ちたお伊勢の力は、そこに丈右衛門がゐるのに氣付いたのです。

『オ、……丈右衛門！』

『はい……はい？』

『このお方は誰方ぢや？』

『誰方樣か存じませぬで……ござりますが……私奴は存じませぬが、貴女樣は御存じでござりませうに……』

『えッ、お前知らぬ……？』

『はい』

『私が知らう筈はない……？』

激動の中にも、混亂し切つた頭腦を纏めるためか、お伊勢の力は凝ッと兩眼を閉ぢるのでした。

一體コレは夢なのか……？

いや、さうではない！

私の傍にゐる若いお武家は、何所から來た人なのだらう？

お伊勢の力は、亂れた頭腦の中で漸ッとそれだけ考へることができました。けれども唯それだけでした。一切が疑惑と恐怖でした。恐しい渦の底へキリ〱巻き込まれて行く心地です。

『少しは落着かれたやうだ。では、私の用件をお耳に入れませう。おわかりでございませうな？』

凜々とした聲です。力強く壓倒するやうな音聲だ。

『はい……』

とお伊勢の力は、微かに首肯きました。さうせずにはゐられないやうに……。

『丈右衛門』

『はい……』

『お前に用はない。あちらへ退つて居れ。だが、誰にも他言するなよ。この部屋の模樣をな。わかつたらう！』

『へッ……』と丈右衛門は、お叩頭をして恐る〱部屋を出て行きます。

『さ、眼を開けて俺の顏を、よく見るがいゝ。確に思ひ出す筈だ。お前が俺の顏を忘れてゐる筈はない。さ、見てくれ』
と云はれて、お伊勢の方は恐怖の裡にも勇を鼓して若い武士の顏を見詰めました。
眼尻に皮肉な微笑を含み、嘲るがごとくこちらを見てゐる……顏……この顏は……この顏は……？
『思ひ出せませぬか？』
『はい……』
『貴女達には邪魔者の鴫田敬之助だ』
『え……鴫田樣とは？』
『まだ、おわかりにならぬか』
『はい……？』
『贋勇肌だ！』
『あッ……ハツ……ハツ……』
と、大きく瞳を開き、唇を開き、膝と手とでジリジリ……後へ／＼、お伊勢の方は身を引くのです！
『お驚かせしましたナ。しかし、この私が、此所へ斯く現はれたのは、貴女を殺さうとしてゐるのではない……わかりましたか。殺すどころか生かして置くためだ。自殺なさるのはまだ早い。貴女はまだ／＼死んではいけないのだ』
『は……はい』
『殺してよければ、唯ツた今、殺して行く。しかし私は、殺すかはりに生かして進ぜた。そして猶當分生かして置かうとしてゐるのだ。生かして置くのだ！』
何といふ命令的な言葉だ！　自信に滿ちた音聲なのだ！　さうして颯爽として武士らしい鴫田敬之助の姿態なのだ。
端然と正坐して、左側に大刀を引き付けてゐる樣子を見ると兩足の疵も癒え切つたに相違ない。お豐が身も心も投げ出した介抱――その効驗が現はれたのです。
凝ツとさし俯向いて敬之助の言葉を聞いてゐるうちに、お伊勢の方はこれまでの生活に依つて培はれた權高がチリ／＼頭を擡げて來るのでした。
フン……この下卑下郎が、何を云ふか！
私はこれでも阿波二十五萬三千石の主の寵を享けた身だ……下卑の分際で私に何を命令しようといふのだ！
さう思返して見ると、今の先刻まで怖しいと思つてゐた敬之助が、痴れ者にさへ思へて來る……。
『生かして置かうと仰有つても……さうはなりますまい』
打つて變つてハッキリと云つて、お伊勢の方は敬之助を嘲るやうに見返すのです！
『なるほど、死ぬのは貴女の自由だと仰有るのか？』と敬之助。
『はい。さうですナ』や〻昂然たるお伊勢の方です。
『しかし、このまゝなら犬死をなさる――貴女は犬死をなされるのだ』
『え……犬死？』

『さうです。辨左衛門は恐らく切腹はしますまい。辨左衛門は貴女の死骸に一切の嫌疑を脊負はせて、自分は涼しい顔をして生きてゐる肚だ――それが、貴女にはおわかりにならない。混亂してゐる貴女にはおわかりにならなかつたのだ。その證據を見たければ今日、明日、四五日辨左衛門の樣子を見てゐるのだ。辨左衛門が死ぬか死なぬか見てゐるがよい。この庵室に凝ッとしてゐられても、辨左衛門が死ねば知れる。如何に惡黨でも辨左は阿波藩の江戸家老です。死んだ? 死んだといふ噂が立つ。此所まで聞えて來る』

プツリ、プツリ一句々々と明晰を極めた口調で、敬之助は云ひ聞かせて置いて、微笑んだか見ると、

『辨左が切腹したとわかつてから、お死なすッて、遅くはない』

と云ふのでした。

お伊勢の方は一旦反撥したものゝ、それを聞いては打挫がれ、又首垂れるのでした。

『それにまだ一ッ、貴女は先途を見ねばならぬ人がある。甚之助が生きるか死ぬか……この一大事が片付いてから死ぬのだ』

『甚之助が……』とお伊勢の方。

『生きるか……死ぬかだ』と敬之助。

『生きるか……死ぬかとは……あの子……あの子だけは……許して下さい! 許して……あの子は何も知りませぬ……あの子は……』

だうとう泣き伏し身悶えをするお伊勢の方を尻目にかけて敬之助、

『誰も彼も、みんな最後の審判を待つのだ。その時こそ一切が解決するンだ!』

と叱咤して矗くと立上り、床の間に續いた押入を引開けるのでした。

そこから取出したのは深編笠と八幡黒緒の雪駄草履。そのまま表玄關へ……。

五

『お鶴樣……へゝ……お鶴樣』

繩付の一升徳利に飯茶碗、大胡坐を搔いて淺右衛門は一ぱい飲つてゐるのです。

『また、お人形ごッこですかい』

舌舐ずりをして、生きてる方の片眼を細くしてゐる淺右衛門……。

講談全

一冊一圓

美裝函

此の全集に集めたものは
本社獨特の方法により、之を世界の名作に求め
或は古今の傳說を探り、社會の事實により、
戀愛、武勇、探偵、滑稽、美談、等々……
小說と云はず芝居活動と云はず
ありとあらゆる面白いものを

悉く講談化して

トテモ面白い

老人にも外國の名作が面白く讀め
青年にも古來の名講談が新鮮な筆
に生かされ
日本一面白く日本一明るい讀物と
して、非常に吟味精選せる內容尙
又裝幀の如きも新式ソフト表紙の
製本見るからに上品なもの

輕快瀟洒！

携帯に便利

集

入

電車の中でも汽車の中でも、或は寝轉びながらでも、樂に讀めるやうに、活字にも印刷製本にも充分の心をこめて作りあげました。

近く實物が本屋に出ます！

此の全集ある一家は樂しく

此の全集讀む人は榮える！

どなたもぜひ御備へ下さい！　此の如き名全集は二度と出るものではありません　御見逃しなく！

内容の詳細は裏面を御覧下さい

そんなことは一切感じないらしいお鶴は、何を思ひ出してかニコ〳〵笑つて、

『よくおいでなさいました。まアそんなこと……イヤでございます。アレ……』

一人で云つて嬌態を作るのでした。さうしてまた手文筥の中から姉様人形を二ツ三ツと取出して壁に凭せかけるのですが、なか〳〵うまく坐らない。それを根氣よく幾度も〳〵取上げては坐らせようとするのでした。

『へゝ……馬鹿の一念、といふ奴か。根氣のいゝことだ。ドレ俺が手傳つて姉様を坐らせてあげませう』

と云つたかと見ると淺右衛門、やをら腰をあげてお鶴の側に寄つて、

『さア、俺が手傳つてあげる。ソレ……からすれば、姉様はチヤンとお坐りだ』

と一ツ二ツ三ツ並べて坐らせてやる。

人形が坐つたのを見て嬉しいのか、お鶴はニコ〳〵笑つてゐます。

『お鶴様、笑つてますね。可愛い顔だ……よく肥え太つて、のんきなものだ。これが氣狂ひの氣安さか……氣安さといへば三十郎、何所へ行つたらう。昨夜で二晩歸らずだが、こゝの旦那と一緒だから、深川あたりへシケ込んでゐるのかも知れねえ』

淺右衛門は、此家の主久世森藏に頼まれて今日で二日留守番とお鶴の見張をしてゐるのです。

家の者と云つては森藏と飯炊婆、それに氣狂ひのお鶴の三人、三十郎はゐるかと思へば出てゆく。毎晩歸るかと思つてゐると三日も歸らないと云つた亂拍子で家族の内には數へられない存在です。そこで森藏は家を明ける時は仲間の浪人者か、淺右衛門を留守居にすることにしてゐるのでした。

淺右衛門は少時、お鶴の樣子を見てゐましたが、また一升德利の側に戻つて、飯茶碗に注いで茶碗の縁を舐めるやうにチビリ〳〵とやりながら、何か知ら身内にムク〳〵動いてゐるものを覺えて、思ひ出したやうに片目を上げては、お鶴を見るのです。

この肉附いて、健やかに發育してゐる肉塊のお鶴……。

へ、へ、……三十郎が怒るだらうな……

しかし、彼奴は俺におてるをくれる約束なのだ。

おてるは賢くて美しい……此奴は氣狂ひだ……氣狂ひだが奇麗だなア。三十郎は飽きツぽい男だのに、どうし一このお鶴だけ、放さねえのだらう……？　お鶴が氣狂ひで、まともの女でねえだけに……面白えのかも知れぬな……さうだらう！　三十郎といふ奴が、第一氣狂ひ染みてゐやアがる……さういへば、この間だつて此家で久世の旦那を斬らうとしやがつた。怖しい奴だ……彼奴……。

だが俺ア三十郎からおてるをこツちへ取るまでは、三十郎に食つ付いてやる。金輪際放しツこ無えのだ。

かうやつて馬鹿が日和を見てゐるやうに、お鶴の番をしてゐるのは、お鶴さへ見失はなくば三十郎が歸つて來る……と見透してゐるからだ……しかし、今日も歸えらねえのかな……？

『モシ、お鶴様、お鶴様』『え……あたし？』

『わかりますかい』『お客様？』

『へい、左様でございますよ。道岡、道岡三十郎様がお歸りになりました』

『さう……』と云つたが、心に響くものがないのか、お鶴はケロリとしてゐるのでした。

『あゝいけねえ〳〵。お鶴様』『あい』

『お客様でございますよ』『アレ……誰方？』

『生田様の若様、甚之助様が、ソレ甚之助様がお越しでござります』『ア、……甚之助様！』

『甚之助様です。甚之助……ソレそこにおいでですよ。ソレ……ソレ』『甚之助様……』

とお鶴は、前や後、右、左。くる〳〵體を廻はすやうに、戀しい甚之助の幻を追うて探し求める哀れさ！　それを、

『コレこゝに！』と淺右衞門。『え……？』

『コレこゝに〳〵甚之助様がゐますわい。いゝ男の甚之助様がゐますわい』と煽り立て、淺右衞門は自分の顔を突出し、指ざしてお鶴に見せるのです。

淺右衞門の老耄れた、しかも片目の醜い顔が貴公子甚之助に見えよう筈はない……それだのに、戀ひに狂ひ果てたお鶴の眼には、甚之助に見えたのか、

『まア……』と云つたまゝ、少時呼吸もせず淺右衞門の顔を見つめてゐたかと思ふと、ソッと振袖で顏をかくして、肩から膝を浪のやうにうねらせながらチリ、……チリ、……淺右衞門の方へ、にじり寄つて行くのです！

『ほウ……』さすがの淺右衞門、思はず吐息で、呆れたやうにお鶴を見てゐましたが、やがてゴクリ唾を呑む……。

お鶴は、だん〳〵近づいて來ます。淺右衞門は、膝の前にあつた繩付の一升德利をソッと横へ取除けました。さうして、

『久しぶりですね』と俄か作りの聲色を使ふのです。だが、その聲は咽喉が粘つて嗄れてゐる……。

さうしてまた、膝の前の酒を注いだ飯茶椀をソッと取除けるのでした。

お鶴はドウなる……？　（つゞく）

一行博士

○騒音防止は世界の問題だが、慶大教授隈川博士は甘蔗の殻の纖維を利用しその防音板を發明した。

○梅干の殺菌力は驚くべきもので、大腸菌は四日、チブス菌は一日、コレラ菌はもつとたやすく斃れる。

○西藏では高貴の人に對した時は、口を大きく開いて舌をペロリと出すのが最高の禮式となつてゐる。

○人間一人（約十五貫目）の構成分―蛋白質、脂肪、水分、燐酸石灰等の價は合計三十五圓位しかない。

○海苔は肝油の代用となる外、又玄米同樣のヴイタミンBを含有するので脚氣の豫防や治療に役立つ。

○現在地球上で利用の可能性ある總水力は四億二千五百萬馬力、其内で我國のものは五百五十三萬馬力。

○南米の珍魚ゲオフアグスの仔魚は危險が迫ると一目散に親（雄）の口の中へ逃込んでしまふ。

○雷雨の際に電燈が明滅したら決して手を觸れてはならぬ。戸外の線に故障の起つた證據だ。

○米國C大學教授フアーキン女史は多數の猫につき智能試驗をし、雌よりも雄の方が斷然優秀と發表した。

○牛乳は小量宛流し込む樣に飲むと消化吸收もよいがガブ〳〵やると胃腸の弱い人は往々下痢を起す。

○京都の梅小路機關庫の岡主任は汽車の煤煙遮止裝置を發明した。簡單で安價で便利だと鐵道省で早速採用。

○海外在留邦人の故國送金額は一年約五千萬圓、母國觀光や家族呼寄せ等で持歸る分は約二千四百萬圓（昭和三年度）

○陶器に穴を開けたい時はお灸を三つ四つすゑ上から釘を當て金槌でコツ〳〵やる。但し手加減がいる。

○靜岡縣では飛行機を使つて魚群を搜索し、中には一網一萬二千餘圓の大漁をしたものもある。

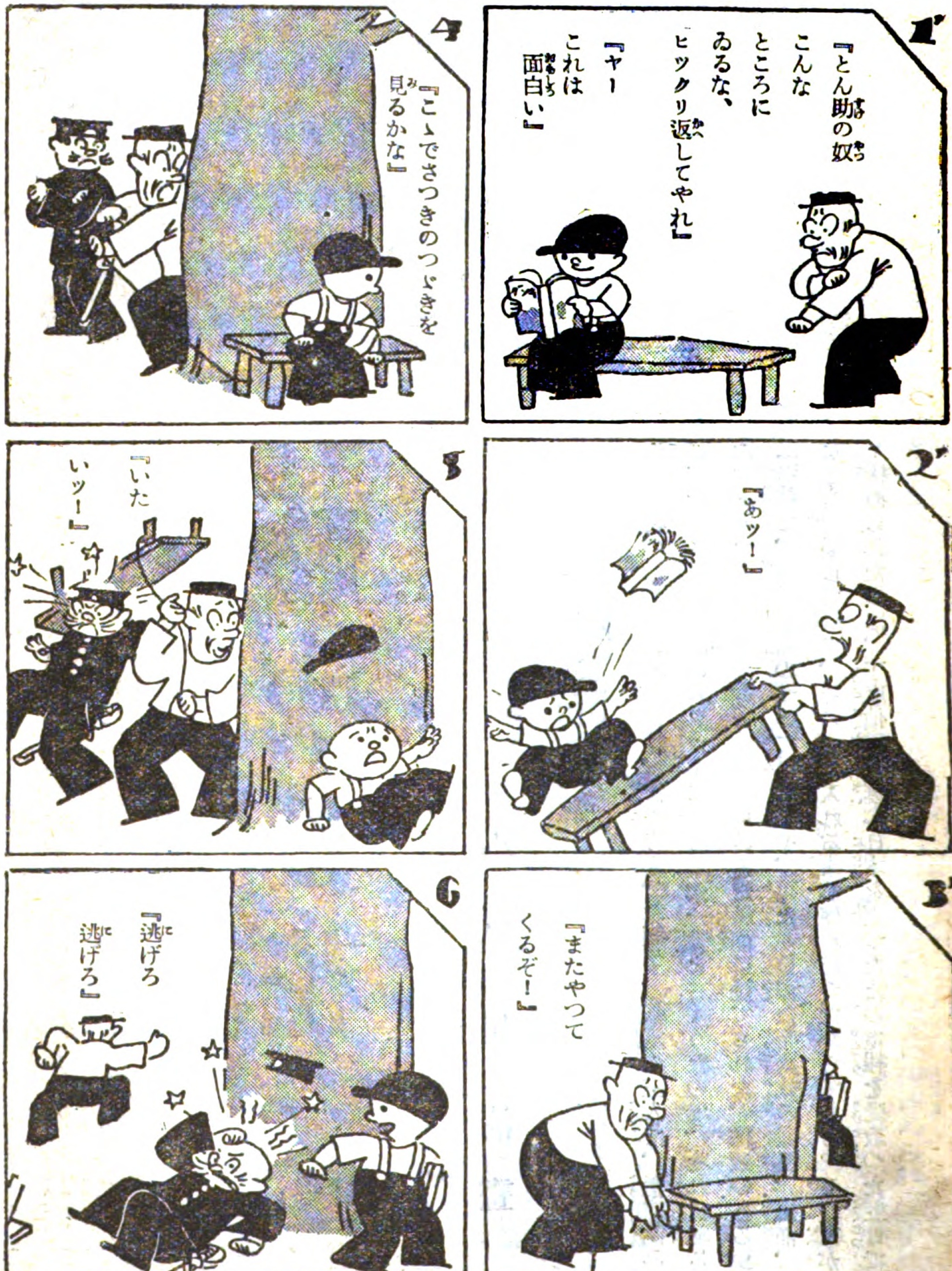
○此頃獨逸や英國の男子間には無帽主義が大流行、伊太利の酒落者は冠らずに腋下にかゝへて歩く。

連載漫畫 トンチ


1
『いゝかい？ 投げるよ』
『出來るともいくらつよいたまでもうけとるよ』
2
『サー來い』
『とんすけ奴お金落したなどれ拾つてやれ』
3
『ヤッ！
これはしまつた
『あいた！』
4
『やい！ よくも……いたいかいたくないかお前に投打つけてやる』
5
『あッ！おまはりさんにあたつた』
6
『こ、こ、このやつめ』

トンスケ

清原ひとし


1
『とん助の奴こんなところにゐるな、ヒックリ返してやれ』
『ヤーこれは面白い』
2
『あッ!』
3
『またやつてくるぞ!』
4
『こゝでさつきのつゞきを見るかな』
5
『いたいッ!』
6
『逃げろ逃げろ』



もう斯うなつては是が非でも愛の勝利者とならねばならぬ——さうした慾望が、遂に芙蓉子の胸に湧上つた。來るべき時は遂に來たのである！

燃ゆる花

菊池幽芳
小早川清畫

危險な遊戲

信重の兩親のための借家探しは、壽子夫人、芙蓉子、信重の三人で、數回試みられたが、やはり最初の話のパツシーにある家が一番よさゝうなので、それに極る事にした。トロカデロに近く、セーヌ河に臨んだ斜面に建てられた、雅致のある獨立した二階建で、自動車庫のついて居る事や、可なり贅澤な帝國式の家具、掛額、ピアノなども附屬して居て、そのまゝ入れる事が便利だつたからである。この家がいよ〳〵極められたのは、丁度伯爵夫妻が日本を立つたとの電報を受取つた翌日であつた。

時は夢のやうに過て行く。レヴエヨン、そして耶蘇降誕祭、そして新年、巴里の外觀には何の變化もなければ、歳末の慌ただしさも見られない。若し大使館に在留日本人の重なる人々を招く新年のレセプションがなければ、新年といふ事も忘れて過すであらうほどに、巴里の新年は淋しい。松尾伯爵夫妻はこの二十日に、マルセーユに着く筈なので、信重は出迎ひのため、前々日の汽車で旅立つた。

日本郵船は豫定の通りの時刻にマルセーユに入つた。信高と賴子夫人はわが子の出迎ひに、この上もない滿足の樣子に見えた。外國語を話せる中老人の執事と、賴子夫人のお氣に入りの上女中が、キモノ姿で隨行して來た。この女中は女學校を出た女なので、アドレスの横文字や單語位は讀めるのだつた。

稅關の面倒な手續を濟した上、一行は信重がこの前乘つた同じ汽車で、巴里に向つたので、翌朝十時に里昂驛に着いた事も同じである。大使夫妻と芙蓉子孃が出迎へて居た事はいふまでもない。

手荷物の處理のために、信重と執事が後に殘り、伯爵夫妻は大使夫妻に導びかれて、改札口を出た。驛の廣場には伯爵夫妻のために、數ケ月間を契約されてある美事な自動車が待受て居た。一同はこの自動車と大使の自動車とに分乘して、すぐパッシーの新邸に向つた。

パッシーの新邸は、數日前より綺麗に掃清められ、作りつけのやうな模範的の門番、腕利の料理人、氣の利いた女中が既に雇ひ入れられて居り、今日の晝の食事にはコルドン・ブルーのお手前を見せるだけの準備が整つて、一行の入邸を待構へて居たのである。

伯爵夫妻はこの新邸に一方ならず滿足した。そして大使夫妻の卒のない心遣ひを感謝するのであつた。一わたり邸内を見て廻はり、やがてサロンで話の花を咲かして居るところへ、信重が執事を連れて歸つて來た。

主客打寬ろいでの食事は、全く巴里の美食家を滿足させるに足るほどのものだつた。伯爵夫妻は久しぶりで、純粹の巴里料理に舌鼓を打つた。巴里へ着くと驛には、もうちやんと自家用の自動車が待つて居り、始めての新邸に落つけば、すぐ打寬ろいだ會食に、珍味を味ふ事が出來るといふやうな事は、全く思ひも設けぬ不意打で、その滿足が大きかつたゞけそれだけ、大使夫人の拔目のない用意に、どれほどのお世辭を雨ふらしても、足りない事を伯爵夫妻は感ずるのだつた。

○

兩親がパッシーに住む事になると共に、信重も一先リュー・ド・ドームを引拂ひ、兩親と同居しなければならなくなつた事は、當然の成行と云つてもよからう。自分だけやはりパンショ

ら、聰明な彼女が、兄に對する甘えた愛以外に深入して來る筈はないと安心しても居たのである。惠美子の來るまでの間、せめてこの純な清い友情を享樂する事を、なぜ差控へなければならない理由があらう。危險のない遊戲は許されなければならぬと、自から道理づけて、彼は噴火山上に踊つて居たのである。

芙蓉子が極めて無邪氣に見える朗かな快濶さを持つて居る他の一面に、社交界の貴婦人らしい聰慧とウヰットを持ち、且つ話題に富んで居る事が、彼女との交遊を極めて愉快なものにした事も事實である。さまざまの談話の機會に見出される彼女が、近代婦人の心理をよく摑んで居る頭のよさも、彼を驚ろかした程である。冷たい理性と叡智を以て、公然男性の放埓を振舞ふギャルソンヌの出現の問題についてさへも、彼女は極めて現代的の、少しも囚はれない批判を下して居るのである。それ等の談話を通じて信重は、彼女が舊道徳に對し、多大の叛逆心を持つて居る事と、性の解放について、可なり突進んだ考を持つて居るのではないかと想像するのだつた。否、彼はさう信じて間違はあるまいとさへ推測するのだつた。が、正直な信重は芙蓉子が故意に彼に對してさういふ幻覺を起させようとして居るのだといふ事には、ちつとも氣がつかないのだつた。



美しい壽子夫人と芙蓉子は、社交界の寵兒である事は、既に説いたが、大使や大使夫人の紹介で、信重も社交界に出入するため、壽子や芙蓉子の姿を見せる華やかな夜會の席には、多くの場合信重の姿も見え、彼が芙蓉子のパートナーとして踊る機會がいよ／＼頻繁になつて居た。それだけに危險はます／＼加はつて居た譯だつた。目まぐるしい音樂の旋律、潑剌たる動き、過度に熱せられた蒸れた空氣、異性が放散する香氣、互

ひに感ずるはずんだ呼吸、暖たかな肉の感觸、そしてそこに醸し出される陶醉の心地は、單にそのまゝでは滿足の出來ない、本能的の慾望を刺戟せずには措かなかつた。それはさながら不可抗的の磁力に、ぐん〳〵惹きつけて行かれるかのやうに。若し人目がなかつたら、二人の唇と唇とは、狂熱的に接觸したであらうやうな場合が屢々あつた。

彼は危險な遊戯を意識しながら、なほそれを享樂するやうな心理狀態に、だん〳〵移つて行つて居た。が、いつも惠美子の上を考へる事によつて、辛くも手綱はひきしめられるのだ。なアに大丈夫だ、戀ではない、遊戯だ、いつでもこの遊戯は止められる――さうも考へるのだ。



彼は芙蓉子が自分と同じほどに、この遊戯の危險性を知りぬいて、して居る事を感じて居る。お互ひに自覺しながら遊戯をつゞける事に、危險性は緩和されると、彼は考へた。遊戯は危險なほど興味は深い。

併し、あまりにもその危險性が迫りつゝあることを感じ出した時に、彼はそれを避けるため、殆んど何を顧慮する暇もなく、スザンヌに走つたのだ。スザンヌが一時は彼を救つたやうに見えた。が、結局それは彼の神經を鈍磨させる以外、何の護符にも役立たない、愚かしいものである事を、彼は程なく悟らなければならなかつた。

匿名の手紙

兩親が巴里へ來てから、芙蓉子との接觸の機會はいよ〳〵加はるばかりであつた、社交界においても、家庭においても。

芙蓉子はパッシーの新邸が、自分の家であるか、大使館が家であるか、分らない位の程度に、殆んど新邸に入びたる事となつた。信重はどうにでもならばなれといふやうな捨鉢な氣分にさへなるやうな場合に、何度か襲はれるのだ。それはもう自分の罪ではないと思ふのだつた、少なくとも芙蓉子が自分に妻のある事を承知の上で、この遊戯を享樂して居る限りにおいて。

彼が激しい熱病のやうな誘惑から、兎も角も踏こたへる事の出來るのは、一週間若くは十日目位に來る惠美子からの手紙のためだつた。惠美子に對する戀しさは、少しも變つては居ない、と彼は考へる。たゞやるせない惠美子の戀しさを忘れるために、芙蓉子との遊戯に耽つて居るのだ。惠美子の手紙によると、彼女も淋しさを紛らすために、さまぐの交友を作つて居るらしい。ロジニ氏もこのごろでは毎週一度づつ鎌倉へ通つて來てくれるし、多くの崇拜者が彼女の傍に引よせられて尋ねて來るらしい。彼女は賑やかな生活を送つて居るのだ。丁度自分もその通りの事をして居るに過ない、と、彼は道理づけるのだつた。

彼は今惠美子の身邊に對しては、何の不安をも感じて居ない。始め出發前、自分の出立後の留守を利用して、母が惠美子に對し、何等かの手段を取りはしないだらうかを、惠美子が氣にして居たので、彼自身も多少不安を感じてゐたのだつたが、兩親の到着と殆んど同時に屆いた惠美子の手紙によつて、それは杞憂で、何事もなかつた事が明白となり、そんな母ではないとの自信が裏書されたやうに、彼は朗かな氣持になつて居たのである。

で、惠美子の身の上については安心しきつて居り、たとへ彼女がその周圍にどんなに多くの崇拜者を惹つけて居ようとも、彼女に對して絶對の信頼を拂つて居る彼だつた。ところが或日信重は惠美子からの書面と同時に、他の一通の誰からとも分らぬ、日本からの手紙を受取つたのである。

惠美子の手紙には、この程帝國ホテルで音樂の夕べの催ほしがあり、それに出演を餘儀なくされた事と、當夜は、止んごとなき貴賓の臨席さへあり、出來榮がよくて面目を施した事が書いてあつて、實はその出演のための練習にロジニ氏のところへ通ひつめたり、また來て貰つたり、何かに多忙だつたので、つい手紙を書く間がなかつたといふ暫らく手紙の途絶えた辯解が記されてあるのであつた。

次の書面を開封して見ると、誰とも分らぬ女文字で、異様の事が綴られてあるのだ。その手紙は次の通りである。

無躾な手紙を差上げます。

私は公會の席上であなた樣に一度お目もじした事がございま

すが、當分名を秘して置く事だけをお許し願ひます。たゞあなた樣と惠美子樣の御幸福を祈る事において誰にも劣らぬものである事を御記憶下さいませ。 私も惠美子樣のほんとの意味の崇拜者で、時々鎌倉のお宅には伺はせていたゞいて居ります。また惠美子樣のお噂も、始終私共音樂愛好者の間の話題に上るので、どういふ微細な事まで噂されて居るかといふ事もよく承知して居ります。 私はこんな事を申上るのはほんとに厭な事ですし、たゞ傍觀して居ればいゝ事かも知れませんが、どんなに惠美子樣を愛し、惠美子樣のお名を惜んで居るかも知れない私として、たゞ傍觀して居るのは不忠實の極みであると考へましたので、思ひ切つて申上るのでございます。それはロジニ樣と惠美子樣の間に、全く聞捨にならない噂が立つて居る事でございます。私はそれが噂に過ないものである事を、少しも疑つては居りませんが、あまりにその噂が烈しく、今に問題として表面に現はれさうに思はれますので、この上もなく痛心して居る次第でございます。 尤も西洋人の慣習を知らない日本人の間に、そんな噂の立つといふ事は、無理もないと思はれる節が、私の目で見てもないではございません。ロジニ樣はあなた樣がお立ちになつて後、あまりに頻々と惠美子樣をお尋ねになります。私共日本人の目から見れば、全く目に餘るやうな事も平氣でなさいます。そして惠美子樣もそれを許しておいでになります。併し惠美子樣に何もやましい事のないのは、私が申すまでもない事でございませう。たゞこんな噂が烈しく立つて居る以上、それが新聞に乘るやうな日がないとどうして申せませう。私は惠美子樣をお救ひするのは今の中だと存じます。そしてそれはあなた樣以外には出來ない事なのでございます。それでこの書面を差上ましたので、私の目的はたゞお節介に世間の噂を申上てお氣を惡くするといふのではございません。實はあなた樣に



すぐ惠美子樣を巴里へお呼よせになる事をお勸めしたいためなのでございます。あなた樣を熱愛して居らつしやる惠美子樣が、斷んでそれに應じぬ理由がどうしてございませう。それが今日では惠美子樣の名譽をお救ひする唯一の途だと考へるのでございます。どうかあなた樣方お二人の幸福を切にお祈りして居る私の無躾な勸告をお容れ下さる事を切望いたします。それにつけても私は噂の内容を詳しくは申上られない事を悲しみます。どうか私を信じて一刻も早くあなたの惠美子樣をお救ひ下さいませ。いづれ其中私から重ねて御通信を申上る機會があるかも知れません。今日はこれで筆を止めます。

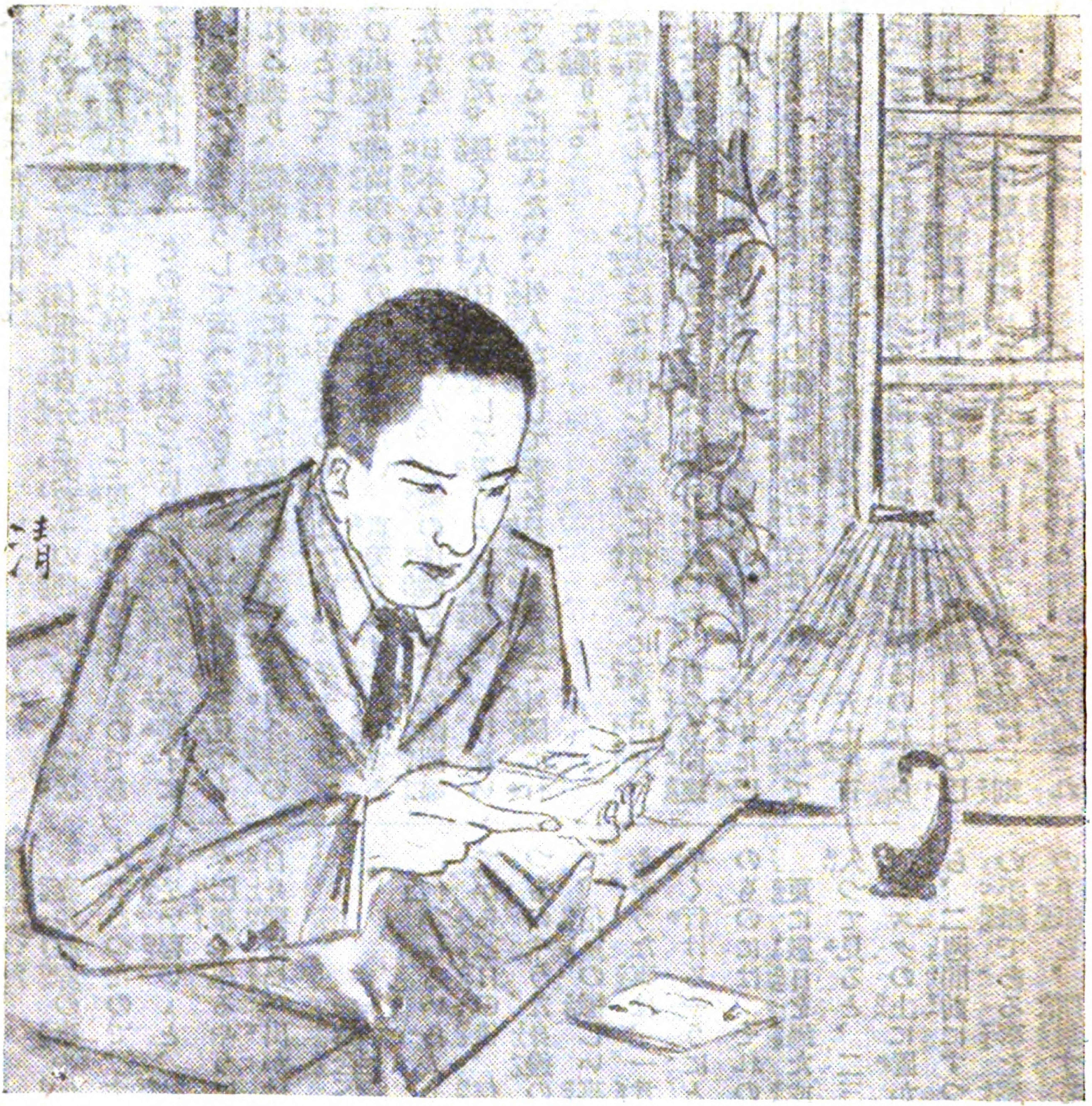
意外なこの手紙が、ひどく信重を昂奮させて了つた事は當然である。併しそれはこの手紙によつて惠美子を疑ひ出したといふのでは決してない。かういふ手紙を自分によせた匿名の女性に對して、制へ切れない怒りを感じたのである。彼はそれが根もない噂とは云つて居るけれども、噂の内容がもつとひどいもので、それが事實であるらしい事を仄めかして居ると取れる以上、斷じて中傷であると考へるのである。

併し此女は何のためにそんな中傷の手紙を書いたのだらう？この手紙を書いた〻めに、どんな利益があるといふのだらう？彼は幾ら考へて見ても分らなかつた。その中次第に頭が冷靜になつて來ると、秩序立つた思索に入る事が出來た。

この手紙には二ツの場合を考へる事が出來る。それは何か爲にするところがある中傷の場合、この手紙にある通り、事實噂がひどいので、惠美子の上を氣遣ふあまり、好意の勸告を自分によせたと見る場合。

第一の場合を假定して、自分の感情を惠美子から引離して、利益を受けるものは、今日本には誰も居ない筈である。だからただ想像し得る事は、惠美子の崇拜者の間の無益な競爭から、ロジニを遠ざけようとする苦肉の策を弄して、匿名婦人を使用したと見る事だ。それは必らずしも有得ない事ではないが、それにしては惠美子をすぐ巴里へ呼よせさせようとする意味が分らない。從つて中傷とのみ見る事は、適切な判斷ではなささうにも思はれる。

第二の場合を假定して見ると、尤もな解釋が成立ちさうである。ロジニに關する噂のある事は事實かも知れない。すべてに大まかな目で見る歐羅巴と違ひ、他人の私事に立入つて、何でも問題をでツち上げなければ承知しない、小うるさい事にかけて、どこの國にも勝つて居る日本で、大陸の慣習をそのま〻行つて居るに違ひないロジニと惠美子の間の誤解されるといふ事は有得る事である。それは無論噂だけのものに相違ない。そんな噂なら勝手にさせて置けばい〻のだ。時がすぐ解決してくれ



るではないか。馬鹿々々しい。そんな事を疑ひ出したら、歐羅巴の社交界などでは、一日も過しては居られない。

が、併しロジニは、妻に對して少しフラートを仕過ると、彼は思ひ續らすのだ。それは外人の慣習だとも云へるけれども、ロジニは事實妻を戀して居ると、これまで思はぬではなかつた。たゞ彼が妻を信じて安心しきつて居たゞけだ。人妻に對する戀の遊戲を除いたら、歐羅巴の社交界に何が殘るだらう。さうした空氣の中で洗禮を受て來て居るロジニであり、惠美子である。自分が居ないとすれば、ロジニは大膽にもなり得るであらうし、妻はそれを興味を以てあしらつて居るかも知れないのだ。併しただそれだけでも、日本では噂の種となるに充分であらう。だから噂のあるといふ事は事實かも知れない。ロジニに賴つて居る妻としては、寄らず觸らぬ態度で受流して居るだらう。たゞ妻に間違ひのない事だけ

は、最後まで信賴し得る。

さうも考へる一方、信重は自分と芙蓉子の間に演ぜられて居る遊戲を思ひ出す。自分が妻を戀して居る中は絶對のものであるにも拘はらず、この遊戲に耽つて居る同じ心理が、惠美子にも働らかないとどうして云へるだらう。それは芙蓉子を見ても知れる通り、從來男のみに許された遊戲を、女も今は自分達の權利として、實行に移して居る世の中ではないか。ギャルソンヌの出現は佛蘭西のみの問題ではない。惠美子は日本の女でありながら、日本の女ではないのだ。大戰の洗禮を受けた歐洲婦人なのだ。長く只一人日本に殘して置くといふ事は、いけない事であるに違ひない、外人が決して妻を只一人殘して外國に行かぬ通りに。

信重はだん／＼不安になり出した。兎に角すぐに妻を巴里へ呼よせる方が、兩爲であると考へるやうになつた。自分も間違ひがなくて濟むし、惠美子に取つても萬全の策だ。六月中に巴里へ來るやうにとは、二人の間に豫め打合はされてある事ではあるが、六月に來るも三月なり四月なりに來るも、五十歩百歩で、どうせ六月まで待つても兩親はまだ巴里に居るのだから結局は同じ事だ。兩親に隱して妻の隱れ家を作る事も、この巴里では大して困難な事ではない筈だ。――さう思ふと彼は一刻も早く惠美子を呼よせる事に、なぜ氣がつかなかつたと悔まれる位だつた。

妻の旅劵の事や何かの世話は、外務省の友人に、出發前内々頼んであつたので、すぐ手續をしてくれるに違ひなかつた。手紙は早い程いゝと、彼はせき立てられるやうな慌たゞしさで、すぐ巴里へ來るやうにと、惠美子にあてゝ手紙を書いた。そして自身郵便局へ出かけて行き、書留にして送つたのである。

惠美子の姙娠

何かしらいら／＼しい日が過ぎた。彼が惠美子へ手紙を出してから數日の後、信重は惠美子の手紙を受取つた。それにはいつものやうな身邊の消息があり、相變らずロジエ氏の事があつて、信重の戀しい事も書いてあるが、巴里へ早く立ちたいといふやうな事は、一言も書いてないのだ。始めのころの手紙には早く行けるやうにと祈りの言葉が必ず記されてあるのに、最近のものには、それのない事が、彼の心をます／＼不安にした。

更に數日を過た或夜、他出先から歸つて來て、自分の寢室へ入つて見ると、二三通の郵便物と共に、日本からの手紙が、一通デスクの上に置かれてあつた。彼はその手紙の封筒と筆蹟から、二週間前にすつかり彼の心を攪亂して了つた例の匿名婦人の手紙である事を感じた。彼は自分の敵とも味方とも分らぬこの手紙を、開封する事を躊躇したが、結局開けずに居られない

誘惑に騙られて、すぐ手紙を破つて見た。それには次の通りに認められてある。

私から二週間前に差上げた書面を、御受取下すつた事と存じます。あのやうな根據のない噂話などを申上げて、私も只今は後悔いたして居ります。それで今日はおわびかた〴〵最後の書面を差上る次第でございます。惠美子樣から最早お手紙があつて、御承知になつて居らつしやる筈だと存じますが、惠美子樣は生憎と巴里へお立になる事がお出來にならないさうでございますね。なるほど只今妊娠四ケ月のお身體では、長い汽車旅は勿論、船旅もお出來にならない事は、御尤もでございます。そんな事はちつとも存じませんでしたので、あんな手紙を差上げて、餘計なお勸めをいたしました罪をお許し下さいませ。この上は内地で充分御靜養の上、玉のやうな赤ちやんを御分娩遊ばす日をお祈り申上ます。あなた樣も嘸お喜びの事でございませう。たゞそのため近く巴里に惠美子樣をお迎ひ遊ばす事のお出來にならない點に御同情申上ます。この上は私から何を申上る事がございませう。これを通信の最後といたします。

この手紙は晴天の霹靂の如く信重を打のめした。彼の頭は全くめちや〳〵にひツ搔まはされて了つた。手紙を信じて了つたといふのではさら〳〵ない。信じはしないが烈しい混亂の種を蒔つけられて了つたのだ。この手紙も中傷であらうか。無根の事實を誣たものであらうか。が、妊娠して居ないものを、妊娠したとどうして云へる？　すぐ後から剝げる嘘を、云ふ事にも事を缺いて、妊娠などと誣る筈もない。妊娠といふ事はひよつと事實かも知れないのだ。が、もし事實なら、なぜ惠美子から云つて來ない？　今までの手紙に、いや現に最近の手紙にさ

へ、それを匂はせるやうな文句は一ツもないのだ。姙娠したものを良人に隠す理由がどこにある？ 姙娠といふのは嘘だ、斷じて嘘だ！

それも姙娠といふだけなら兎に角、彼を戦慄させたのは四ケ月といふ文字だつた。六ケ月とか、或はせめて五ケ月といふなら、彼の心にこんな混亂は起させなかつたであらう。この手紙の日付から繰つて見て、彼が日本を立つてからやがて五ケ月になる。五月といふのでさへ、不安なものがあるのに、まして四ケ月と云へば不義の子だといふ事を、裏書して居るやうなものだ。この手紙の眼目はその四月の二文字にあるに相違ない。何といふ恐ろしい手紙だ。

よし姙娠が事實であるとしても、四月といふ筈は斷然ない。姙娠も全く事實でないに違ない。四ケ月位の姙娠は醫者でない限り、他人に分る筈もないものを、赤の他人の匿名婦人にどうして知れる？ それは有得ない事だ。間違もなく中傷の手紙だ。こんな手紙をよこす位の女だから、今度目には辻褄を合はせるために、墮胎したとでも云つて來るかも知れない。こんな手紙に昂奮したのは何といふ馬鹿げた事だ。惠美子の姙娠は有得ない。それは中傷の作り事なのだ。

侶重はさう判斷する事によつて、心の平靜を恢復しようとした。が、それは駄目だつた。一度注射された毒は、全身の血管を循環せずには居ない。それが無根の事實であればあるやうに、無ければないやうに、ハツキリ確かめたい心持が、彼を物狂はしいまでにした。その後の數日は彼の生活は全く悲慘そのものだつた。それを家人に悟られまいとして、何でもないやうに振舞ふ彼の苦痛は、言語の外だつた。

懊惱の一週間が過ぎた。待設けて居た惠美子の手紙が届いた。が、この手紙によつて安心を得たいと思ふ期待は無益に終つた。その手紙にはいつもの通り身邊の消息以外に何ものもなく、姙娠の事などは少しも書いてないのだ。自分の疑ひを解決したいと思つて居た彼に取つて、全く物足りないものだつたが、たゞそれによつて消極的の安心を味ふ事だけは出來た。この手紙にも何もないからは、姙娠の事はいよ／＼事實無根なのだ、それに違ひないと、どうやら極めがついたらしく思はれる事、それだけだつた。それでも彼はほつとした。この上は決して姙娠であつてくれるな、あつてはならないと、彼は祈つた。

無論姙娠して居るとすれば、第一に自分に云つて來る筈なのに、今度の手紙にさへ何もないのだから、事實無根である事に間違ひはない。姙娠のために日本を立てないなどといふ事は全く有得ない事だ、すぐ日本を立てと云つてやつたあの手紙の返事さへ來れば、すべての疑惑は一掃されるのだ。無論惠美子は二ツ返事で立つと云つて來るに違ひない。

彼は一刻千秋の思ひで、妻の返事を待つた。すぐ返事を出しさへすれば、もう來る筈だと思ふのになか〳〵來ない事が、だんだん彼を焦立せた。

その中にやつと惠美子の返事が届いた。大使館から歸つて、自分の書齋へ入つて見ると、今日もデスクの上に置かれてあつたのである。

急がしく開封する彼の手が震へて居るのでも、異常に彼の感情の昂ぶつて居る事が察せられる。手紙は次の通り——

お手紙拜見いたしました。早速お返事を差上る筈ですが、醫者に相談したり何かのため、四五日後れまして濟みません。私が一日も早くお傍へまゐりたいと願つて居る心の中は、御存知の通りでございます。五



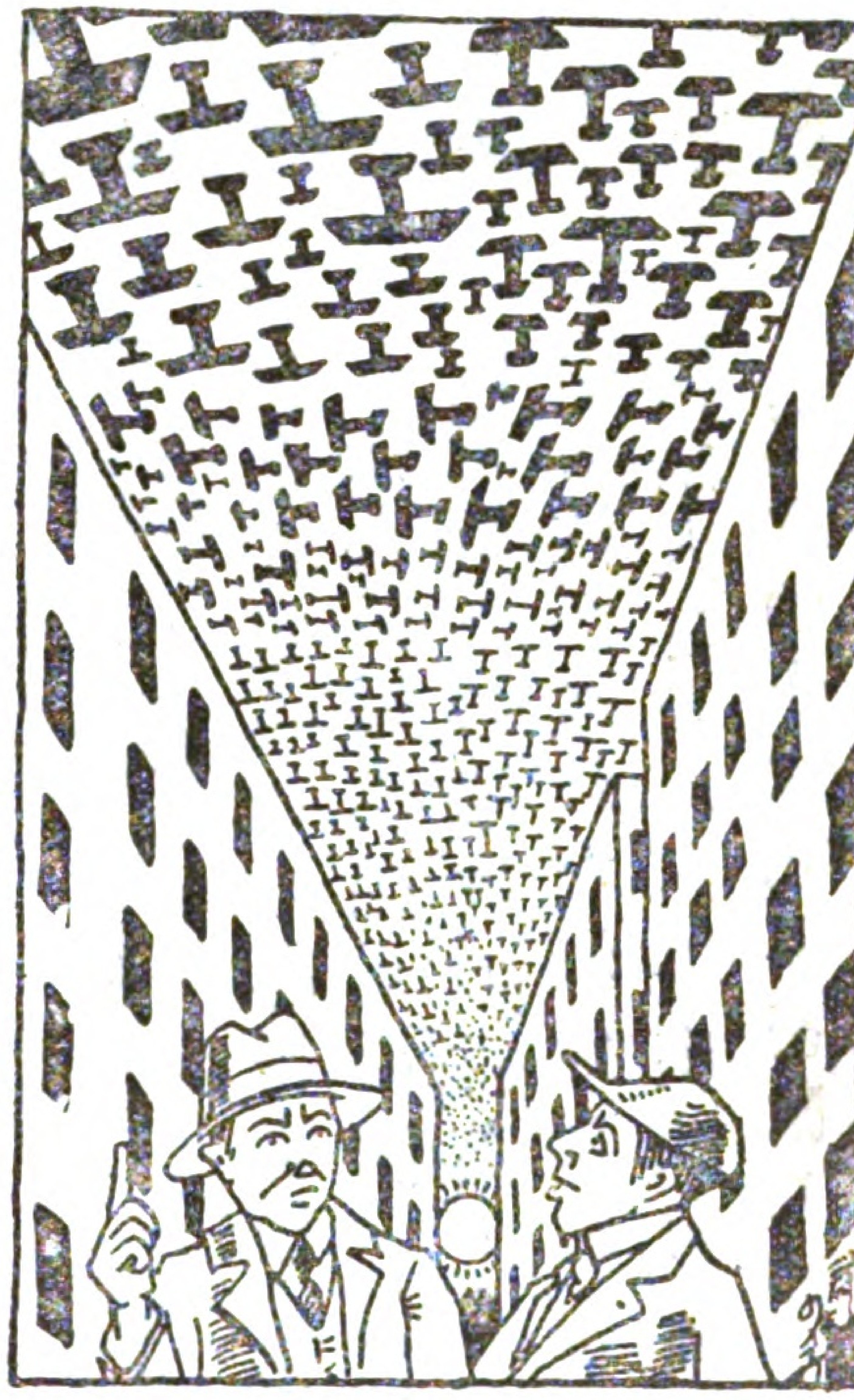
月末ごろに立つやうとの最初のお打合せだつたので、どんなにその日を待設けて居た事でせう。それにお手紙には五月を待たず、すぐ立てとの事なので、私が飛立つほどの思ひになつた事はお察し下さるでせう。それだのに私は巴里へ立てなくなつたと申上たら、どんなにかお驚きになる事でございませうね。私ほんとに當惑して居りますの。それは只今姙娠中だからなんでございます。かねぐ〵赤ン坊を欲しいと仰しやつて居らつしつたあなたは、きつと喜んで下さる事とは存じますが、たゞ時期が悪いんでございますわ。私、ほんとにどうしたらいゝでせう。

あなたのお立になつた月には、ほんの少しばかり見るものは見たのですが、次の月から全く無くなりまして、何だか變だと思つて居ましたが、これまでもどうかすると、一月無つたりする事があつたので、あまり氣にも止めずに居りましたの。ところがそれからはずつと無くなつて、この一ケ月ばかり前からは、何だか身體の調子も變なので、醫者に見て貰ふと、どうも姙娠らしいと申されたぢやアありませんか。その時申上て置けばよかつたんですが、でもまだ不確かな事なんですし、いよ〳〵それと極れば佛蘭西に立てなくなりはしないかと、そんな不安も手傳つて、あなたに無益の御心配をかけてもと、ついお知らせせずに、延び〳〵になつて居たんでございますの。それがいよいよお手紙を頂だく四五日前、また診察して頂だくといよ〳〵姙娠だと言渡されましたので、すぐお手紙を差上げようと存じながら、生憎の時に姙娠したので、あなたが喜んで下さるよりも失望なさりはしないかなどと、いろ〳〵の取越苦勞に、手紙を書澁つて居るところへ、あのお手紙なんでございますわ。それで私の佛蘭西へ行きたい心が、また矢のやうになつたものですから、迚も旅には出られぬと斷されては居ながら、なほ念のため外の醫者にも相談したり何かで手間取つたのですが、やつぱり長旅は絶對にいけないと云はれて了ひましたの。それも七月八月にもなれば却つて心配がなくなるが、現在旅立つ事は此上もない冒險だと申されたんでございます。私、ほんとに困つて了ひましたの。でもあなたがそれでも立てと仰しやれば立ちますけれども、どうしたらいゝんでございませうね。私はやつぱり夏休みに御迷惑でもあなたに歸つて頂けたらそれが何よりだと存じますが、お願ひですからさうして下さいません？兎に角お差圖を待つ事にいたしますわ。いろ〳〵申上たい事もありますが、筆が廻りませんから、今日は取急ぎ、これだけを申上ます。私の健康はこのごろでは平生と少しも變りませんから、決してお案じ下さいますな。

恐れて居たものは遂に來たのだ。信重は土のやうに蒼ざめて、手紙をデスクの上に叩きつけた。（つゞく）

漫畫俱樂部

漫畫募集。締切毎月末日。採用篇に薄謝進呈。宛名【キング、漫畫俱樂部】



今日は野外演習

鈴木平丹



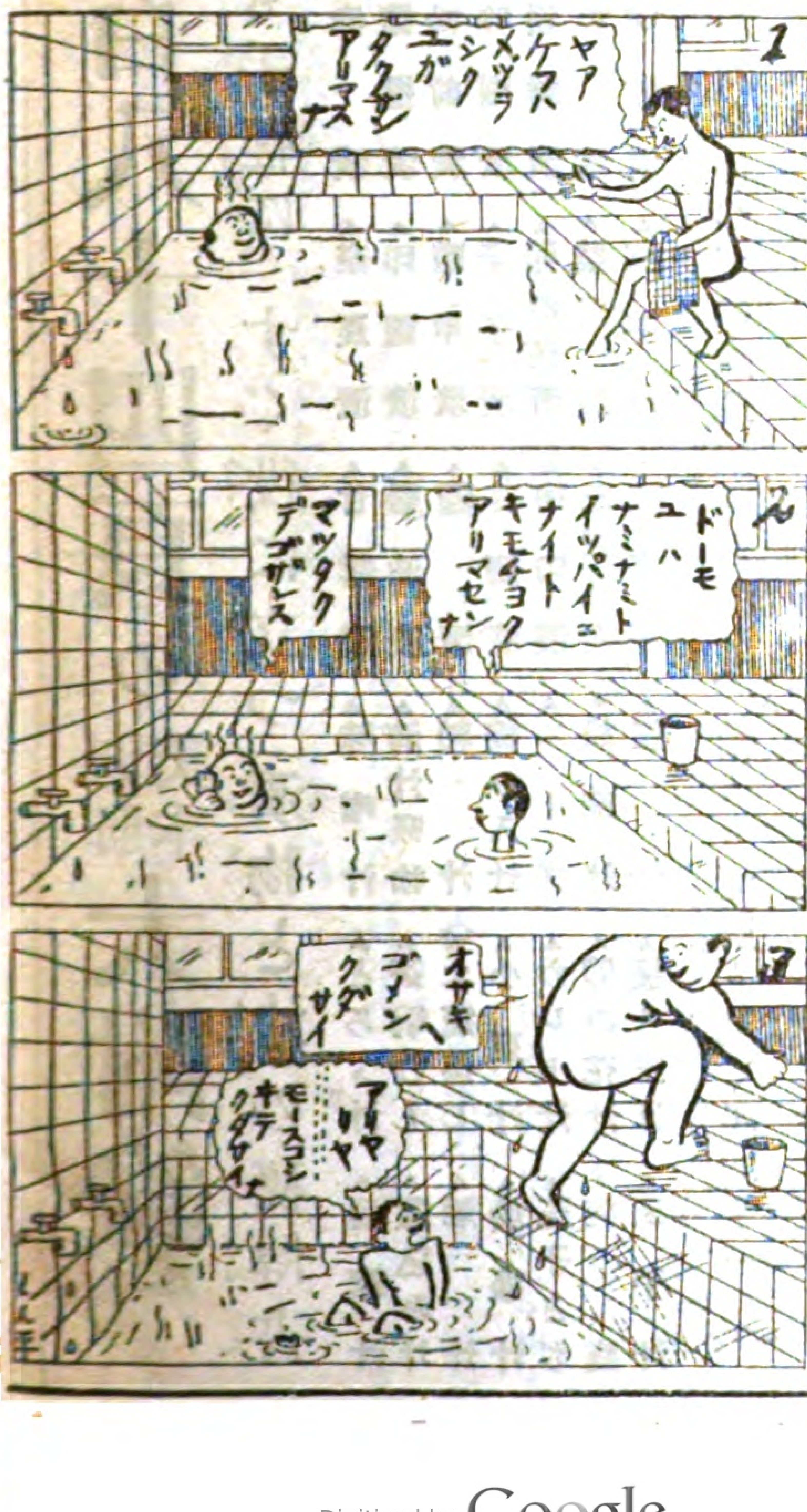
(右)五十年後の朝の挨拶

大友群雀子

【お早う!】
【お早う。相變らず鬱陶しい飛行機で・・・】

太った人が湯を出たら

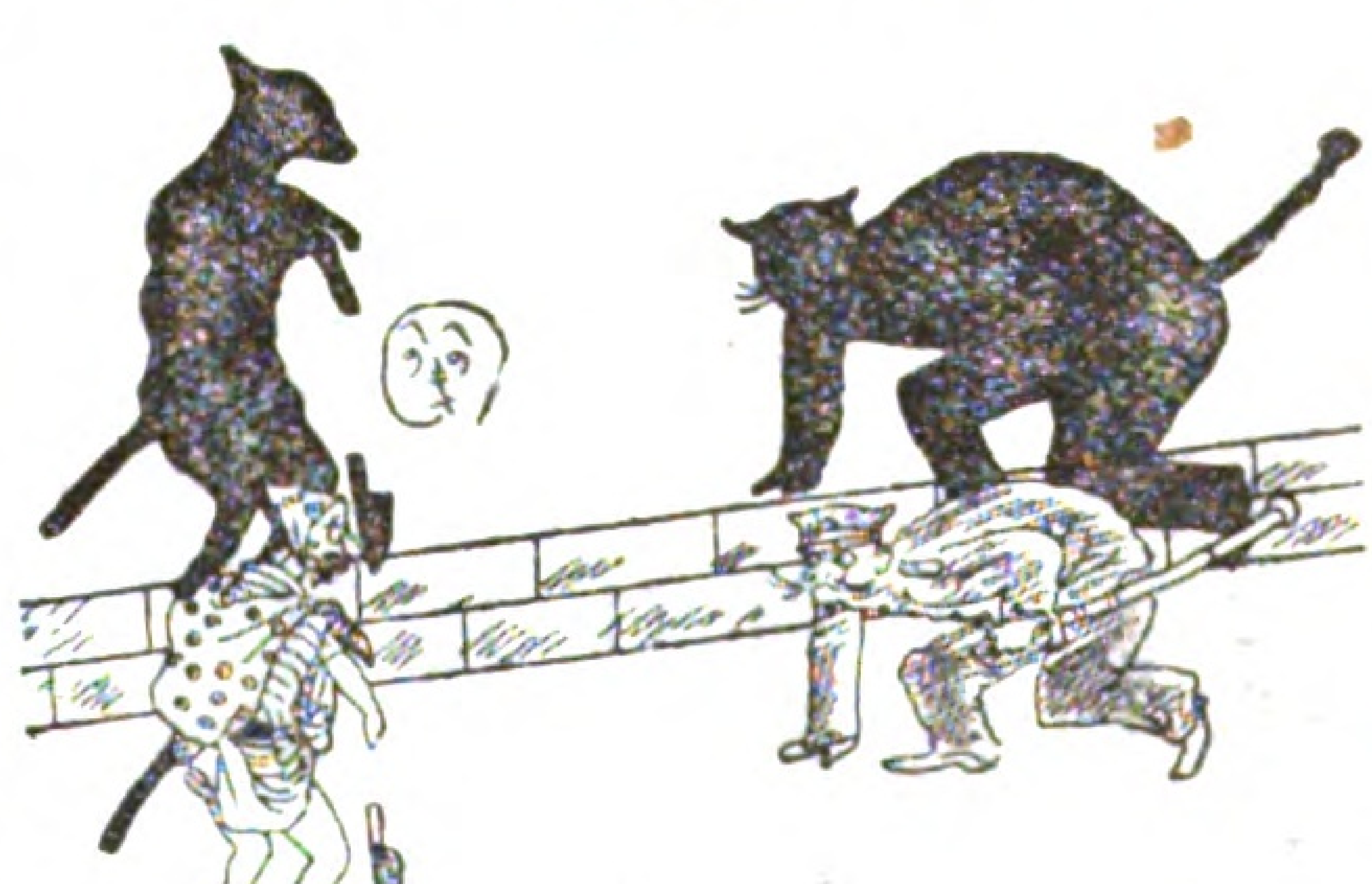
廣瀬しん平

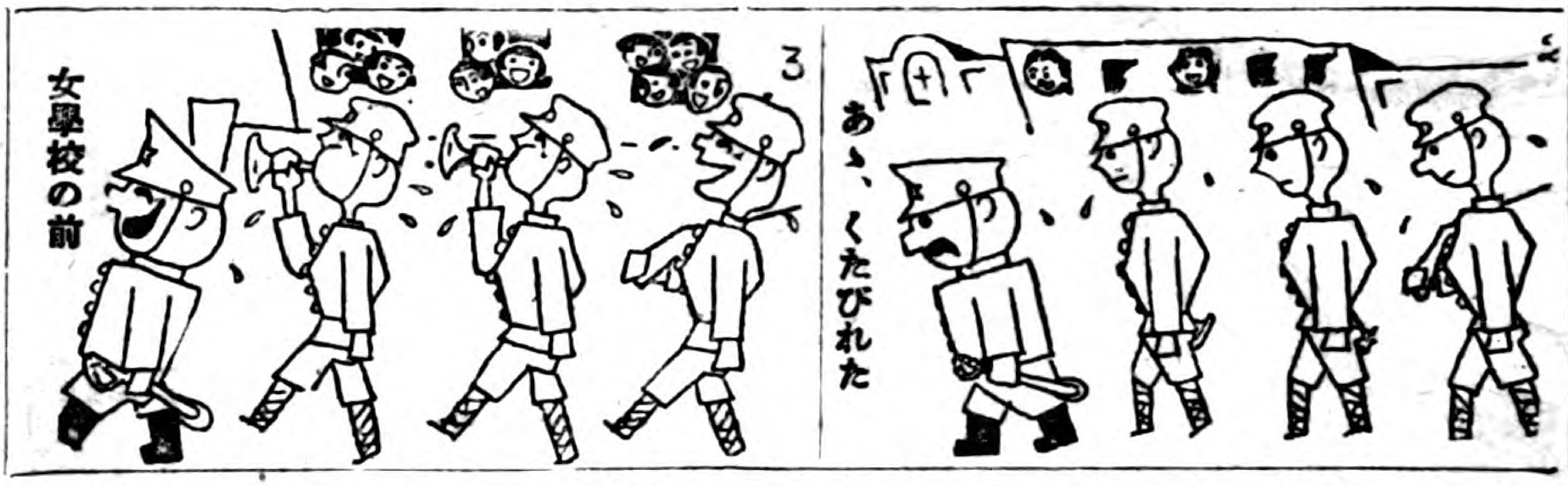


猫と鼠

辻政一

巡査さんと泥棒の影繪





理想と現實

小谷莊一



一、理想では――スポーツマンとして活動してやらう、その内に段々と有名になり、終には世界選手權のレコード・ホルダーとして世の中の奴を驚かしてやらうと云ふ、理想を持つてゐる青年も……



二、現實では……いつも何か喧嘩でもあると直ぐとび出していつて、近頃ではもう近所の者は、唯一人知らない人はない喧嘩の選手權保持者である。



三、理想では――將來は文筆を以て世界的に名を馳せ、執筆を頼みに來ても安々とは書かぬことにしよう、と大文豪を夢みてゐる文學青年も……。



四、現實では……そこらの安カフエーに入つては友達と五錢のコーヒー一杯で一時間も二時間も泡を飛ばして、菊池がどうの、佐藤紅綠がどうの目的意識がどうの、と文學論に夢中になつてゐる。

町内一の子福者の錢湯ゆき

鷲尾京子



大醜女物語（おほしこめものがたり）

本田美禪
磯田長秋畫



戀の間諜、間諜からの密書

清正は一わたり勅使迎接の場所を検分してから、自分の居間へ引き取つた。

居間には加藤清兵衛以下、庄林隼人、飯田覺兵衛、小代下總守等が詰めてゐた。その側には四名の小姓が、主人清正の着ける甲冑その他物の具を取り出して、主人に着けさすべく用意してゐた。

從來清正が着用をした戰鬪用の甲冑は、紺糸縅しの大鎧に、



烏帽子形澁紙叩きの兜と極つてゐたが、清正にも芝居氣はある、殊に今日は大明國から派遣をされた勅使に會ふのだ。日本武將の武者ぶりを立派に見せなければならぬので、豫め小姓に命じて、渠の秘藏の朱具足——金小札を朱縅にした眩いやうな派手な鎧と、銀の梨打の兜と、土佐うつぼ、太刀、鎧通し、毛沓等を取りそろへ、出させるやうにして置いたのである。

『殿』清兵衛がまづ主人にいつた。『お留守中に吉良殿が見え、何か火急の用とかで、お次でお待ち申して居ります』

『然やうか、是れへ呼べ』

『は』暫くすると案内されて、其所へ雅樂之介が入つて來た。

『おゝ、吉良殿』清正は見迎へながら、『明使接見の場所の用意、まづあんなもので十分じや、大儀であつたの』

『恐れ入ります』
『而て何か急用とのこと、どんな事だな』
『憚りながらお人拂ひを』
『いや』清正は頭を振つて、『躬の家の子は清正の心腹同樣な者のみじや、遠慮は入らぬ』
『では申し上げますが……是れをまづ御覽下さい』と雅樂之介は紙片を捧げた。其れは今し方渠の宿舍の、障子の破れ穴から投げ込まれた密書で、彩雲から來たものである。
『難かしい文字のみで』清正は苦笑しながら、『躬には一向に分らぬが、何ういふ文じやな』
『例の彩雲がたつた今……』
『もう來たか』清正は鬼髯の渦卷く頰ににんわりと會心の笑を湛へていつた。
渠は昨日彩雲を迎ひにやつた部下の者から、その復命を聞く際に思ひもよらぬ話說を聞いた。其れは彩雲と雅樂之介の間は少し可異いやうだ。殊に彩雲の雅樂之介に持つ好意は深いやうである。その證據には斯々だつたといふ密告を受けたのだつたが、武邊一方のやうに見え、その實佳なり智略にも富む渠は心中で占めたと思つた。で、彩雲には二王子の女官の中に立ち交り、間諜としてわがために働くやうにいひ含め、別館の方へ送ると同時に、吉良雅樂之介を密かに招いて、或る密計を授けて置いた。其所へこの有樣なのだ。總に役せらるゝ者共の、その行動の機敏迅速、端倪すべからざるものゝあるには、さすがの渠も一驚したのだ。と、同時にいたく滿足したのだ。
周圍の者も聞くとひとしくその黑い顏を見合つて笑つた。
雅樂之介は赤面しながら、『その捷さには拙者等も驚いたので御ざいましたが、然し拙者等にも讀めませんので、仰氏の許へまゐつて見てむらつたので御ざいます』
『成程!』と清正は頷いた。
『と、仰氏申さるゝには、是れは朝鮮語と漢文とごつちやに取り交ぜて書いてある。文意はよくは分らぬが、大體から推讀すると、二王子初め別館にゐる人達は將軍の仁義に深く感じて居られる。で、將軍から付けられた自分は皆の者から愛され、持てはやされてゐるために仰せになつた大役も案外樂に勤めてゐられる。今日來る明の勅使といふのは決して贋僞のものでない。其れは一昨日王子の許へ平壤方面から遣された密使の持つて來た消息をお側の者から聞いたものだが、其れで見ると明への本道、平安道へ向はれた日本の軍勢は見苦しく大敗したといふ事も本當らしく思はれる。李如松といふ豪傑を大將とした明軍が四十萬人南下して大攻擊を初めたといふ事もまた本當らしい。で、兎も角も其んな事情で、勅使は遣されたものだから、そのお積りで御會見あそばすやうに願ひたい。本來は自身にまゐつて言上せねばならない筈だが、其れでは人の眼褄が煩さい。其れでわざと貴方に宛てゝこの書を大急ぎで認めた。寸時も早く將軍に言上するやうにしてほしい。尙ほ內々でいろ〱と申し上げたい事がある。今晩そつと二王子の館の裏手までお

出で下さい――としてあるんださうで御ざいます』

『案の定小西めが大敗北をしをつたな！』清正は躍り上つて痛快さうに叫んだが、氣がついて口を噤むと、左手をもつて鬼髯をまさぐりながら眼を瞑ぢた。その眞黑な長い顏には慚愧の色が現はれてゐる。

仲の悪い小西の敗北、其れは實に渠に取つてはこの上もない快事だが、私情をもつて重大なわが太閤の軍勢の敗れた事を苟も味方の大將の身をもつて欣ぶといふ法はない――と渠は氣がついたからである。其れに明の援軍が南下、猖獗を極めてゐるのが事實とするとわが手をもつて平定をした北道の朝鮮人も默つてはゐぬ。所在蜂起してわが軍に抵抗するに相違ない。

『一大事になつて來たわい』然う思ふとさすがの渠も、今、立つてゐる大地の底から搖らついて來たやうな感じがしたのだ。

『殿、本當で御ざいませうかな』庄林等は左右から不安な顏をして詰め寄つた。

『然うらしい』清正は眼をくわつと見ひらき、『昨日明使の許へまゐつて、筆談をして歸城した春齋老の話説の模樣で、躬も大方は察して居つたが、是れで見るといよ〱事實だ』

『では當道の傳への城（連絡をとつた守備兵所在地の事）へ、早速その由を急報し、要慎するやうにいたさせましては』

『いや』と覺兵衛が遮つた。『其れよりは一手に集めて、永興より山越しに安州邊へ討つて出で、平壤にある明軍を不意に後から攻めては什うだ。卑怯者の小西行長、臆病風に誘はれて京城さして逃げた跡には、必ず明の援軍が入つて居るに相違ない』

『然うだ、勅使などは斬つてすて、その門出の血祭りにしてのけた方が好いかも知れぬ』

『其れにその文意で見ると、朝鮮王は平壤の附近に居るに相違ない。所在を篤と聞き正し、序に行つて生捕つて二王子と共に日本へ送らう』

『喃う殿』と庄林等は主將に迫つた。

『いや』清正は微笑しながら、『その考へも悪くはないが、兎も角も明使と會つて、模樣を見てからの事にいたさう。其れに別に考へもある』

『申し上げます』衛門番兵の取締、淺尾藤右衛門が慌忙しく其所へ入つて來て主將にいつた。『明使の一行、唯今見えまして御ざいますから、仰せのとほり東の屋方へ案内をして置きました』

『もう來たか』

『は、正使馮仲纓と申しますのは、四十そちこちに見うけられます。副使徐承勲と申しますのは、六十ほどの老人で、案内役として朝鮮人崔遇と申す者もまゐつて居ります。一行すべて二十八名、みな憎いほど傲慢な面構へをして威張つて居ります』

『好し』頷きながら清正はやゝ怒氣を帶びた調子でいつたが、『兎も角も珍客じや。隼人、お身行つて鄭重に――粗忽のないやうに應接して居れ』

『畏まりました』

庄林は立つて出て行く。

『具足を是れへ』と清正は朱おどしを見た。小姓等は手傳つて右、左から着せてやる。名槍片鎌を小姓に持たせて、名譽の朱具足、其れを着けて弓を持ち、悠々として清正は接見の場へ出かける氣なのだ。

日に一萬づつ首を斬る

『は、は、は、は！』床几に腰を掛けた清正は兜を搖つて哄笑をした。

卓を隔つて、正使馮仲纓、副使蘇承應が椅子に倚り、明風の衣冠した姿勢を少し反り氣味に、大納まりに納まつてゐる。その後には隨員と、案内者として付いて來た朝鮮人崔遇が同じく椅子に倚つてゐる。主客の間には二名の通辭が鼻を突き合せて着座してゐる。日本側の通辭の傍には儒生倜春齋もゐる。茶禮は既に行はれ、交付された明帝の勅書の內容は春齋の譯讀を經て清正の耳にしつかりと納まつてゐる。主客の談論は曲折頓挫し、其或時は激烈に、また或時は平穩に、問題によつて異なる態度で應酬されてゐるのは無論だ。

勅書の內容は左のやうな四項の條件から成り立つてゐた。

第一、二王子を返還する事。

第二、二王子の女官中にある六名の美人を引渡す事。

第三、清正はすぐ兵を纒めて、釜山浦まで引揚げる事。但し清正は仁義の名將、渡鮮以來無辜を屠らず、敵としては天朝の宥恕に値するものがあるゆゑ、特に明國の兵船をもつて日本へ送り還へす事。

第四、もし當國に止まつて、明に臣事する心があるなら、朝鮮半ケ國の王に封じて、子々孫々にいたるまで社稷を傳へしむる事。

斯んな內容、斯んな勅書だ。勿論一も清正の肯がふ筈のものではなかつた。殊に最後の件中にある明に臣事する云々の一句



を聽いた時のごときは、渠は赫怒して二勅使の面をはたと睨みつけて、弓籠手をかけて右手をもつて卓の一端を拍ちながら、『何を痴けた！』と覺えず怒鳴つて、その雷のごとき激しい音吐に、滿座の者をぎよつとして震へあがらせたくらゐであつた。

が、今は既に颱風一過、悠揚として迫らぬ態度で、應酬の語を進めてゐるのだ。

『仰せのごとく平壤の』と渠は續けた。『小西は敗北をしたかも分らぬ。渠は元來が藥種屋で、丁稚奉公をしてゐた頃から、宗（對馬守義智の事）



と共に朝鮮へ來て貿易などをいたして居つた。で、當國の地理にも精しく、事情にもよく通じて居るので、今度外征の案内者として渠も召連れてまゐつたわけだが、軍事には經驗はない。無論日本太閤殿下の麾下の武將とはいはれぬ下郎じや。然れば小西宗の徒輩が、貴國李將軍の大軍に會ひ、臆れを取つたのは當然で、異といたすには足らない事じや』

何といふ強辯だらう――通辭は驚いたがそのとほりまた勅使側の通辭に通じた。

窓外にあつて聽いてゐる庄林以下の連中は地を蹈み鳴らして欣んでゐる。

と、清正は言葉を續けた。『憚りながら太閤殿下の麾下の本當の武將とは斯く申す豐臣清正、並びに小早川隆景以下、十數名の者をいふので、その他の者は武士らしく鎧うてゐても雜兵同樣、論ずるに足らぬ者等ばかりじや』

通辭から清正の所論を受取つた二勅使は『成程！』といふやうに頷いた。元來が横着な、譎欺をもつて外交の本領とする明の勅使は、初めて勝つた平壤の勝利を誇張して威張つてゐるが、碧蹄館の一戰に如松四十萬の大軍が敗れた事は秘してゐるのだ。

『然うだ、その時の賊の主將は、たしかに小早川隆景だつた』

さう思ふと清正の出たら目にいつた廣言を肯定しないではをれぬのだつた。

『然し當方へ李將軍四十萬人の大軍が、潮のごとく寄せて來たなら、いかな貴將軍も什うにもなるまい』正勅使馮仲纓は外交家らしい態度で續けた。『何にせよ今申したとほりに、大敗をした貴國の軍は、みな釜山まで落ちのびてゐる。當方面への後詰は勿論、もはや朝鮮の領土にあつては、戰爭をする力のないほど士氣は阻喪してしまつてゐるのじや』

聞き了つた日本の通辭は、譯してそのとほりに主將に通じた。

『は、は、は、は』清正はまた哄笑してから、『各道の味方の將士はたとへ什うなつて居らうとも、清正斯くてある以上、退却など思ひもよらぬ。もし本當に李將軍四十萬の兵が當地へまゐれば、清正はこの先の險阻によつて待ち受けて皆殺しにして御覽に入れる。彼所の嶮は道路狹隘、四十萬の大軍は一度に通るわけにはゆかぬで、假りに一日に一萬人づつ進軍し得るものとして片端から首を刎れば、四十日にして四十萬人一個も殘さずに討てる道理じや』

『殿らしい廣言だ』

『痛快々々！』窓外にある清正の家の子共は喝采してゐる。

通辭によつて聽き取つた勅使は顏を見合せて、たゞ直呆れに呆れてゐたが、暫くすると副使が初めた。『では什うしても天朝の仁慈から出た勸說を貴將軍にはお容れにならぬか』とやゝ威嚇的な調子でいつた。

が、清正はあつさりと答へた。『仰せまでもない』

『では二王子も美人等も矢はりお返しにならぬ積りか』

『然れば。二王子は幾度も繰返しては申したとほりにお返し申

すわけにはゆかぬ』と清正は斷乎と答へた。『餘人は知らず、清正は、出陣の際太閤殿下に誓つたとほり朝鮮を取り、尙ほ明國へ攻め入つて、四百餘州を斬りなびけ、太閤殿下を明國へお移し申し上げざる限りは、歸國は勿論、戰爭は止めぬ積りでをるので、折角生捕つた二王子を敵國の手に返さうなどとは夢にも思ひまうけぬ事じや。が、然し日本の武士は、女色を好まぬを本領とする。で、二王子の官女等を當陣中に止めてあるのは、王子の用を足さすため、他に野心あるわけではないゆゑ、この一儀だけは欣んでお應じ申す積りだが、仰せのやうな艶色は當陣中の女官の中にはないかのやうに思はれる』

『其んな事はない』馮仲纓は斷言をした。『王子供奉の女官の中には、六人の美女が居る筈だ。披見を經たる勅書の中には、精しい譯は記してないが、朝鮮王今回の天兵（明軍の事）南下を請ふについては、表をもつて種々の珍器を獻ずるやうに奏上してある。その中に王子づき六人の美女も入つてゐるので、六人の名の紅玉梅蕊、寶釵幽蘭楚雲花英といふ事も分つてゐるのじや』『然やうか』と清正は口を噤んだ。降伏勸告などといふ聞くも腹立たしい敵使に對して、塵一本でもおめ〳〵と持たして返す渠ではないが、美人だけは我を張つて返還することを拒むのは渠の潔癖が許さないのだ。それに今明使からいはれてふつと氣がつくと、その六人の艶色は永興にある直茂（鍋島加賀守）の手許に置いてあるのであつた。其れは渠が兀良哈から引ッ返して來て直茂に預けて置いた二王子初め、捕虜の一團を受け取る時に、直茂が請ふに任せて、託して置いて來た女性等なのだが、然し渠は心の中では直茂の意圖を看破してゐた。『横着者めが、躬の生捕つた國色を、わが名をもつて太閤殿下に獻ずる料見に相違ない』苦々しくは思つたが、渠自身では百萬の明の大軍を向ふに廻はして武勳を立てる自信があるので、美色などで太閤の歡心を買ふ必要はない。で、直茂の請ふに任せて、六人の美女を永興へ其のまゝ置いて來たのであつたが、今明使から要求されると、或る考へが浮かんで來たのだ。おめ〳〵返すつもりはないが、この際其れを口實に或る斷乎たる處置を執り、後日の災を除くべく渠は決心をしたのであつた。

『は、は、は』朱おどしの鎧の袖がさら〳〵と鳴るくらゐに體を揺つて渠はまた哄笑しながら、『陣中の多忙に紛れてつい失念してゐたが、六美人は仰せのとほりに慥に捕虜の中にある』

『では潔よくお還し下さる』馮仲纓は喜色を湛へた。

『無論お返し申し上げるが、その六名は永興の朋輩の手に預けてあるゆゑ、使をやつて呼び寄せるまでお待ちのほどが願ひたい』

『永興までは二百里（六町一里）足らず、往復六日はたしかにかゝるが、其れまで待てといはれるか』

『然やう』清正は大きく頷き、『強ひて連れ歸る思召なら其れより外に道はあるまい』

『……』二勅使はまた面を見合つた。六日間も安閑としてゐ

ることは本意でないが、然し提出した條件殘らず、拒絕をされた渠等に取つては、六名の艶色だけでも受取ることは大事であつた。其れに嚴寒中風雪を冒して遠く來たのであるから、數日間はゆる〳〵と逗留をして休養したい。然う思ふと淸正の言葉の噓でない限り、待つても好いやうに思はれて來た。

『其れに僞りはないのであらうな』副使が屹とした調子で訊ねた。

『貴國人は什うか知らぬが、日本の武士はいかなる事にも二枚の舌は決して使はぬ』

『ではお待ち申すといたさう』

『其れは祝着』淸正は滿足さうに、『遠來の使君に對して、思はぬ御無禮をいたしたが、旣に用談の了つた以上は、もはや聊かも敵意は抱かぬ。御本國に居られる積りで、ゆる〳〵御逗留が願ひたい。失禮ながら粗酒を獻ずる。これよ、申しつけたとほりに是れへ』次の間へ命令しながら、初めて渠は戴いた銀の梨打の兜を脫ぐと、後にひかへてゐる小姓に渡した。

暫らくすると鄭重な酒宴は其所に開かれた。杯盤の間を周旋するのは二王子つきの官女であつたが、その內には人の眼を惹く佳人彩雲も交つて居つた。二勅使の案內者たる朝鮮王の嬖臣崔遇はかの女の顏をじろ〳〵と意味ありさうに頻りに見てゐた。

宴たけなはなる頃淸正は小袖を取り出して勅使に贈つた。其れはどんな小袖であつたか、わが朝の史籍には徵すべきものは一もないが、明國の文獻(列朝詩集)の中には左のやうなものが載せられてある。明人王思堅の作である。

觀馮生所藏倭錦袍歌

馮生示我倭錦袍。腥風凜凜森毛髮。天吳紫鳳恍惚是。水底鮫人親自繰。倭王昔日乘潮入。箕子城頭鬼夜哭。(中略)當時淸正酋中雄。偏師坐擁千旗紅。葛巾直往恣談笑。一言未畢意已通。倭國亦有天。倭人亦有心。對君指心與君語。戴天願如滄海。臨別慇懃重回首。西望長途酹杯酒。征袍自解錦雲鮮。贈君剛及西風後。(後略)

是れで見ると戰袍を贈つたやうだが、淸正家傳には小袖としてある。孰れにしても淸正が馮に贈つたのは本當らしい。征袍自ら解けば錦雲鮮かなりの一句、文字の國の詩人だけあつて却々巧く歌つてある。男の着る日本の衣裳に金襴などはないのであるから、事實とすると戰袍を贈つたものであるかも分らぬ。

× × × × ×

この夕暮のことである。武裝した數多の騎士が、海岸線に沿うて北へと通ずる國道中に配置してある傳への城の一個々々へ、主將淸正の軍令を急報すべく飛んだのは。

夜に入ると淸正は、物頭格の者すべてを招いて、或る重大な軍議を開いた。

然うとも知らぬ勅使等は、旅館にあつて淸正の好意を深く欣びながら、夜の更けるのも知らぬげに、酒宴に興を催ふしてゐた。



傳統的の性情發揮

二王子の居所としてある北の別館の裏手には土と丸石とで築かれた塀が曲折して立つてゐる。その一隅に小さく切られた長方形の門がある。非常時の出入口だ。夜は既に三更を過ぎ、あたりは一面に暗いのだが、雪明りがあるために、その開戸のある口は凹んでぼんやりと見えてゐる。風はある、寒さは激しい。何にしろ積つた雪は、晴天の日でも少しも解けずに其のままであるくらゐの所だ。積つた雪は練塀の裾を二尺ほど埋沒してゐる。

と、觀ると黒影がひそかに雪を踏んで來る。かち／＼になつた積雪に足を突ッ込んでは前進するので、容易に歩度は捗取ら

ないが、暫くすると黒影は、非常口の開戸の前へ辿りついて停んだ。吉良雅樂之介は彩雲に會ふべくそつと身拵へして、宿舍を脱けて來たのであつた。

渠はとん／＼と戸を打つた。

内から直に返事があつた。聞き覺えのある女の聲だ。

『彩雲か』

『はい……』

開き戸が内から開くと、倚りかゝつてゐた積雪が大きく割れて内へと崩れた。

『お寒かつたで御ざいませう』いひながら戸をぴたりと閉てた。

『うん、雪が深いので閉口をした』

『濟みません。什うぞ此方へ』と彩雲は先に立つ。

被衣をすつぽりと被つてゐるので、その全顏は分らぬが、わが妻に肖た眼鼻のあたりは、白くぼんやりと見えてゐる。氣のせゐか歩きつきさへ小雪そつくりに思はれる。

塀の内は美しく雪は掻き取られてしまつてあるので、歩きづらい事は少しもなかつた。

『何所へ連れてまゐるのだ』

『好いところへで御さいます……』と語尾を微らす。

『昨日來たばかりのお身にもう其んな許が見つかつたのか』

『……』彩雲は答へずに、ひつそりとした後園をぬけ、窓を漏れる燭の灯を手頼にして屋方を廻ると、納屋のやうな建物の前へ停んで低聲で初めた。

『是れは料理人の部屋ですが、中へお入り下さいますか』

『無論入る』雅樂之介は微笑しながら、『この夜中、殊にこの酷い寒さに、外に置かれては耐らない』

『でも……』彩雲は耻らふやうに、『兩個きりでお話說が願ひたいもので御ざいますから、料理人夫婦の者には、避けてむらつたので御ざいます』

『其れは倚ほ幸ひだ』

『では……』彩雲は戸を押すと、また先に立つて内へ入る。

溫突の火は焚かれてあるので、内は春のやうに暖かい。その暖かい取附の部屋へ入つたとき彩雲は被つた物を脱ぎすてた。

雅樂之介は淸正から或る內訓を受けたので、今夜はわざと具足を着けず、常の服裝で來たのだが、渠もまた彩雲が被衣を取ると殆ど同時に、防寒用の毛皮の上衣を手早く脫いで小脇に抱へた。その間に彩雲は次の間との中間にある戸を開けて内房の中に入つて行つた。

中には誰もゐないのである。

『どうぞ此方へ……』彩雲はまた低聲でいつた。

で、雅樂之介も續いて入ると、渠は部屋の一隅に、料理人夫婦の用ゐるらしい一組の寢具が積まれてあるのを見認めた。其れは料理人程度の者の部屋には有りうちの有樣で、特に置かれてあるわけではないのだ。日本のやうに押入や戸棚の附いてゐない部屋にあつては然うするよりは仕方がないのだ。が、何故に

しろ場合が場合で、話説をするに邪魔になる夫婦の者は避けさせてあるやうにさへ彩雲は恥らひながらいつたのである。雅樂之介としては餘りに手捷く、餘りに用意周到であるかのやうに心ひそかに考へずには居られなかつた。

『さて話したい用事といふのは』雅樂之介は徐ろに座を占めながら口を開いた。『一體どんな事なのだ』

『其れは澤山に御ざいますけど……。今朝さし上げたお手紙はお役に立ちましたで御ざいませうか』

『うん、禮を申すのを忘れて居つたが、忝けなかつた。大將にも御滿悅、會うたら好きに申してくれと沁々と仰せなすつたくらゐだ』

『では今夜お越しになるやう願つた事も大將樣は御存知なんで御ざいますか』

『うん、否や』

雅樂之介はちよつと慌てた。知つてゐると斷言するのも工合の惡いところがあるが、知らないと曖昧にいふのは尚と工合が惡い。で、據なく正直に告白すべく決心しながら、『實はあの手紙には、難かしい字が澤山あるので、據なく陣中の學者に讀んでむらうたのだよ』

『まア！』と叫びかけたが、その實はかの女自身も豫期して居つた許らしく『然うで御ざいましたか』

『で、一切のことが大將のお耳に入つてしまつたわけだが、然し心配する事はない。あゝ見えて大將はなか〳〵粹でゐらつしやる』

『其れは王子樣のお附の衆もみな然ういつてゐらつしやいます』

『殊に大將はお身については、非常に興がつてゐらつしやる』

『まア何うしてゞ御ざいます』

『其れは當國の者でゐながら、日本贔負といふ事が大そう御意に召された樣子で、彩雲の申す事なら何でも聽いて取らせるが好い。些細なことで父親は輕に處せられたとの話説だが、深く愍然に思ふと涙を零されての御意だつた』

『まア其程にわたくし風情を……』

『うん、大層御贔負の樣子に見受ける』

『お嬉しう御ざいますわねえ！』

『而て今晩の用事といふのは』

『そ、其れは……』といひかけて面を垂れると、その艶やかな頰の邊から耳の附根まで燒くやうな羞恥の色が眞赤く上ろ。

一體支那や朝鮮の女性は不斷嚴重に幽閉されて異性とは沒交渉な生活を强要されてゐるためか、一旦斯うと思つた異性を心に持つと極端とおもはれるほどの行動を執る。其れは實に熱烈で、且つ勇敢で盲目的だ。日本の處女に見るやうに計畫的にぢりゝ〳〵と接近などはしてゐない。尤も其れは昔の話說で、日本でも小說などにはよくその例を散見するが、支那朝鮮の女性には殊にその例が多かつた。

彩雲は日本へも來て、解放された生活を暫く行つてゐたのだ

が、原來が朝鮮人だ。
殊に今は清正に信任されて二王子の女官の中に加へられ、或る重大な任務を帶びて活躍をしてゐるのであるから、その清正の家來同樣、陣中にあつて働いてゐる男に戀をするぐらゐな事は何でもないと思つてゐるのだ。
が、然し直面すると、心の中の勇氣は挫ける。羞恥の情も自然と起つて、腹の立つほど舌までが自由を失つて來るのであつた。
『其れはでは分らない』
雅樂之介は揶揄するやうに其の有樣を見ながら續けた。
喃うどんな用事があるのだ』
『今段々とお話說しますが……、貴所！　お寒くは御さいませんか』
『夜中、雪を踏んで忍んで來たのだ。無論寒いには極つてをるが、然し』
『ちよつと……』といふかと思ふと、彩雲はつと起つて、次の廚房へと入つて行つたが、暫らくすると酒肴を載せた杯盤をもつて再び出て來た。

酒力を藉つて熱情を說く

『ほう、酒を飲ましてくれるのか』と雅樂之介は笑顏を作つた。
『はい、失禮とは存じましたが、夜中ではあり、お寒くはありませ……。其れにわたし自身でも、少しお酒でも頂戴しないと、思ひきつてお話說が出來ないもので御座いますから』
『どんな重大な話說か知らぬが、俗もまた酒は好物だ。ほう大層な馳走だのう』
『ではお一つ』
『ある〳〵』雅樂之介は注いでむらつた金屬製の酒杯を一氣にぐつと飲みほした。
『もう一つお重ねなすつて……』
『而て返杯をと申すのか』
『ほゝ！』
『お身は酒がいけると見えるな』
『其んな事は御さいませんが――雖有う、もう十分で御さいます』
『遠慮をいたすな。其れに兩個きりの酒盛りだ。どんなことをしても人に笑はれる心配はない』
『笑はれたつて構ひはしません』或る決心を面に見して男の顏をちらりと見てから、杯中の物を盡さうとしたが、その實毫もいけぬのらしく、含むと共に彩雲は咽んで續けさまに咳をし出した。その眼の中には淚が出てゐる。
『いかんのう然う無理をいたしちや』
『でも苦しいんで御さいますもの』
『氣管の方へ飲んだのだ』雅樂之介は手を伸べて、苦しんでゐる彩雲の背中を輕く打つてやる。いふまでもなく、剛毅の態はく

ツつくほどに接近してゐる。

と、彩雲は體を捻つて雅樂之介の手に犇と縋つた。

『これ何するッ』

『お願ひが御ざいますので……』

『はゝ、話説がお願ひになつたのか』

『でもわたし……』

彩雲は熱した息を男の顔に吹きつけながら

『王子様から大事なことを頼まれたので御座いますもの』

『何、王子から大事なことを？』

『えい』

『どんな事をの』と雅樂之介は姿勢を正した。

が、彩雲はしつかり捉へた男の腕は放さなかつた。

『鬼將軍は仁義の大將、この上ともに好いやうに取扱うてはくれると思ふが、明の援兵が南下して、不壞方面の倭軍は大敗、延いて當地へも勸降の勅使が見えたほどだから、淸正殿の出やう一つで什ういふ事にならうも知れぬ。今日勅使への返答も、漏れ聞くところでは十中九分まで手切のやうに思はれる。で、自然當地へも明の大軍が寄せるとなると、生捕られてゐる我々の命のほどは測られぬ。既に亡國の君の子だ。命は決して惜まぬが、出來ることなら今一度父王の顔を拜して死にたい。豪勇無双の鬼將軍、何百萬の明軍が押寄せたとて萬が一にも敗北される道理はないが、もし誤つて敗衄を招かれるやうな事があつても、我等兄弟の首だけは斬らずに置いてむらふやう汝からよきに頼んでくれとの御意だつたので御ざいます』

『成程、無理もない仰せだのう』

『その代りには汝の望みは必と何なりと聽いて取らせる。今朝近侍の一個から、汝が聞き取つて鬼將軍お側の衆に内通をした不壞方面の消息も、勅使に會ふに先立つて將軍の耳に入れておく必要があると思惟してわざ／＼汝に漏らすやう我等が計らつて置いたのじや。汝に手柄を立てさせてやるやうにして置いたのじや。どういふ考へで將軍が汝を遣したのか將軍の眞意は夙に推察してゐる。だが汝も我等の臣民、國亡びて敵將の手に囚はれてゐる我等の心を憐れむことは知つとる筈じや。必ずよきに計らうてくれ。近侍の者の話説によると、汝は將軍のお側の衆に相思の人があるさうじや。もし然うならばその人に哀願してと仰しやつて……。喃え、其んなわけであの文は差上げる事が出來たので、お越しがもしも願へましたら――と思つてお待ち申してましたの』

『成程、其れでよく事情が分つた』

『けど王子様の仰しやつたやう、相思の人などといはれては貴下は御迷惑で御ざいませうねえ』

『……』雅樂之介はたゞ笑つてゐる。

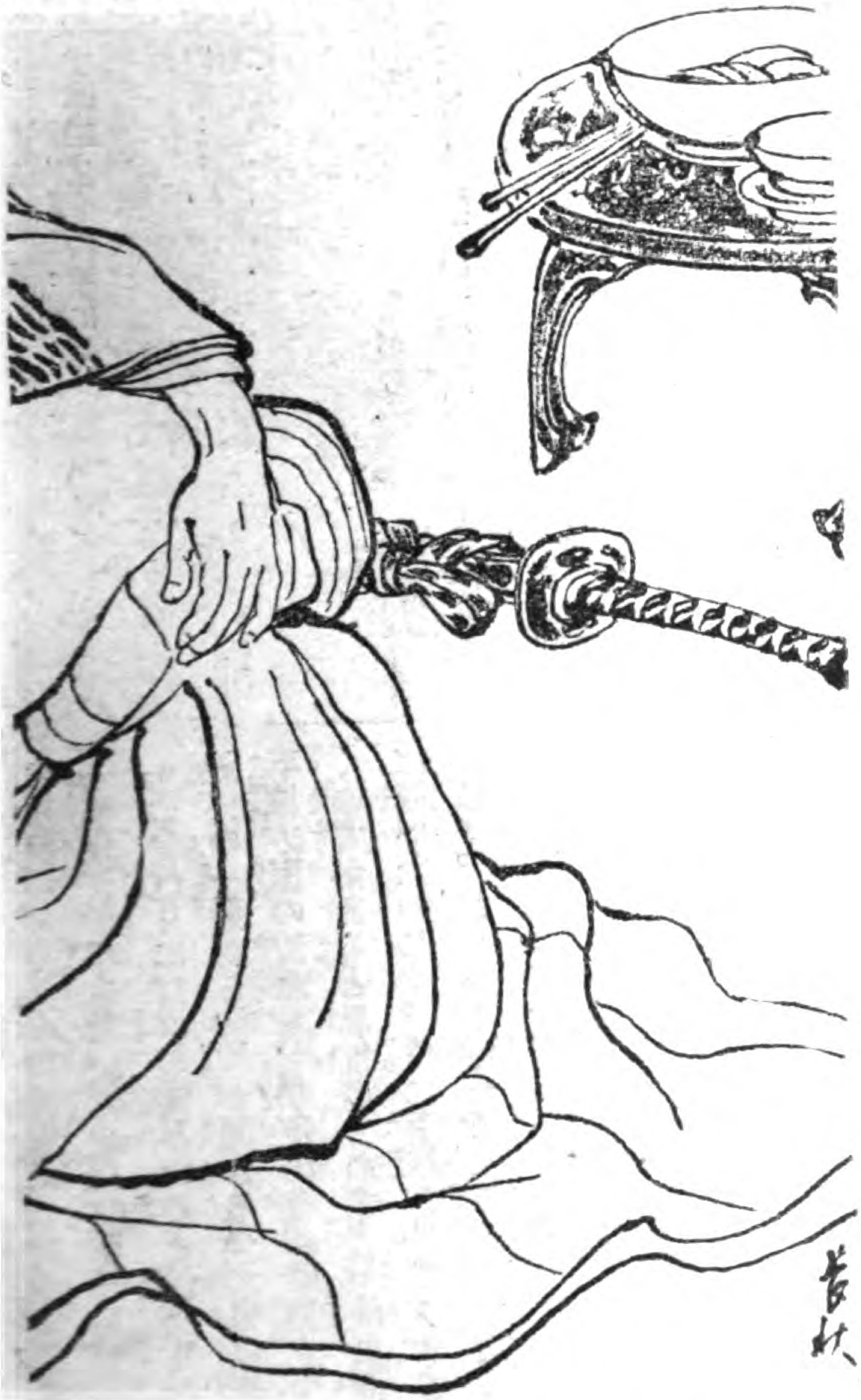
『喃え、正直に仰しやつて……。わたくしだけは祖父の許で一昨日お目にかゝつた時から、もう一生涯夫と冊づく……總ての物を捧げるお方は貴下の外にないものと覺悟を極めてゐたのですけど、喃え吉良様！　凱旋する時は日本へ連れて歸つてやる

とまで貴下はあの日仰しやいましたね、わたくしはよく覺えてゐますわ』

『其れは加地がいうたのだ』

『否え、戀に國境はない。必ず連れて歸つてやると、貴下は屹と仰しやいましたわ』

『其れも加地がいうたのだ』雅樂之介は否定をしたが、然しその心の中では、淚も憎いとは思つてゐない。周圍の事情が許すものなら、連れて歸つて妾として寵愛したく思つてゐるのだ。が今はまだ太閤から公然勘氣御赦免の御沙汰を蒙つてゐないばかりか、清正陣中の客將といふのもほんの名ばかりで、其の實は居候ふ、大きな顏の出來ない身分だ。今夜内命を蒙つて、かの女に會ひに來たとはいひでう、純眞無



垢のかの女の操を奪ふてのける事などを吩咐けられて來たのではない。其れに他の將士への思惑もある。然う思ふと憎くないかの女の要求も納れられないのだ。

『否え嘘です』と彩雲は頭を振つた。

『口では然うは仰しやらなくても、然う仰しやつてゐらしたことは、其のお眼の色で分つてゐました』

『無理な事を申す奴だな』

『でもわたくしは命がけです』彩雲は流れる淚を其のまゝ狂はしい調子で續ける。

『もしわたくしの願ひが愜はず、貴下を此のまゝでお歸し申せば、王子樣のお願ひも愜はぬものと見なければならない事になるのですもの。什うして貴下うつかりと貴下のいふ言をそのとほりお聽き申す事が出來ませう。もし本當にわたくしを心にかけてゐらしつて下さらぬので御



ざいましたら、この場においてお殺し下さい。さア什うぞお殺し下さい』

『迷惑な事を申す奴だな』雅樂之介は殊更に怒つた狀を粧ひながら、『考へても見るが好い。二王子のお命を、助ける助けぬといふやうな重大な事は清正殿さへ一個の御意見では極められないのだ。日本に在す太閤殿下の御指揮を仰がねばならぬのだ。況て躬の一存で…什うして其んな返事が出來よう』

『でも然ういつて突ツ刎ねられると、わたくしはもう王子様にも、お側の衆にも明日から合はせる顔が御座いませんのに、命がけのお願ひまでも肯いて頂けんので御ざいましては……分りました、好う御さいます。さア什うぞお殺し下さい』

『厄介な事を申す奴だな』雅樂之介は當惑したやう、摺りつけられた肩越しに女の泣きぬれた白い顔を暫くじつと眺めてゐたが、やがてまた姿勢を正すと、女の肩をぐいと摑んで自分の方へ的面に向かせた。『では汝は其程に王子の事と躬の事を……?』

『えい、王子様は國王の御子、父を殺された怨みはあつても、其れは郡守めが悪いので、王子様も王様も御存知ない事で御さいますから、當國民の一個としては、今御不幸にも敵將の手に囚はれてゐらつしやるあのお悼はしい御境遇には同情しないではゐられませんです』

『尤もな考へだ』

『また貴下には祖父の所で――』
『もう好い』
雅樂之介は覺えず遮ぎり、『では、朕も本心を汝に話すが、朕もまた汝を想うてゐるのだ』
『まア本當で御ざいますか』
『無論だ』燃ゆるやうな兩個の瞳は噛み合ふやうに強く見合つた。
『其れに二王子の件についても、朕は陰ながら周旋をして、もしもの事のあつた時にはお助け申す積りで居るが、その二王子が今一度會ひたく思召してゐらつしやる父王は何所にゐらつしやるのだ』
『そ、其れは……』
彩雲はどきりとしたやう、面の色を少しく變へたが、すぐ氣がついて然あらぬ顔して、『わたくしには勿論の事、王子様にもお側の衆にも分つてゐないので御ざいます』
『然うではあるまい』
『否え本當で』
『平壤にあるわが軍の敗れた報を逸早く受取つたほどの二王子に、父國王の所在地の分つて居らぬ筈はない』
『でも王子様もお側の衆もみな御存知がないやうですもの……
……』
『嘘をいへッ!』
『でも……』
『もう好い』雅樂之介は腰から取つて片はらに置いた大刀を右手で取りながら中腰となり、『然る水臭い心の女と未來を契るわけにはゆかぬ』
『ま、待つて下さい』
『否や』
取り縋つた彩雲を右足を揚げて蹴仆しながら、『もう何も聞く事はない。う、煩い! 放さぬか其の手を』
『放しませぬ、放しませぬ』泣きじやくりながら彩雲は兩手をもつて愛人の袴の裾を執つた儘を、狂人のやうに愛人の足のあたりへ小摺りつけては悲痛な聲で叫び續ける。『今いふとほり苦しい願ひが貴下に聽いて頂けなければ、この場ですぐに彩雲は死ぬ考へでゐるんですもの』
『では何故實を告げんのだ』
『……』
『朝鮮王の今の所在を――其れさへいへば汝の願ひも、また二王子の助命の件も、朕が好きやうに計らうて取らすといふてゐるではないか』
『……』
『考へ違ひいたすでないぞ』雅樂之介は少し優しく、『今はもう以前と異り、朝鮮王の所在を知つても什うする事も出來ぬのだ。明の四十萬の援軍が破竹の勢ひで寄せて來て、殘念ながらわが軍は大敗北を取つてゐるのだ。汝の口から國王の所在が露へ分つても、孤立の地位に置かれたるわが軍の手で何が出來

よう』

『あゝ成程！』初めて其れと氣づいたやうな心の色が彩雲の蒼白めた顔にちらりと動いた。

『たゞ明使との應對に、清正殿が知つて居らんと都合の惡い事があるので、娘が今夜汝に會うたら、訊ねておいてくれいとの仰せがあつたゝめに汝に聞くのだ。外には何の仔細もないのだ』

『よう分りまして御ざいます』

『いうてくれるか』

『はい……』

『何所に居られる？』

『義州にお在あそばしますとか』

『とかでは可ん、しつかりいうて聞かしてくれんと』

『義州に相違御ざいませんです』

『忝けない！』雅樂之介は再び坐ると、片手をもつて女を引き寄せ、片手をもつて泣きぬれた女の眼の縁を拭いてやる。

外には風は吹き止んでゐる。

夜は既に四更を過ぎて曉方近くならうとしてゐた。（つゞく）

尊き一言の物語

少年西園寺公

小久保喜七

慶應三年十二月桑に大政奉還を奏上し大阪に引き揚げたる將軍徳川慶喜は其の後の薩長兩藩の處置が不都合なりと云ふので之れを質さんとして會津桑名の兵三萬を率ゐて京都に立ち向つた。之れを聞いて在京の薩長兩藩の兵は之れを鳥羽伏見の二道に防がんとしたが薩長の兵纔に三千でありました。

宮中は上を下への騷ぎになつて急に參與の會議を開いた。愈よ會議が始まると參與の一人が斯う云ふ論を唱へた。即ち薩長の兵僅に三千、慶喜の率ゐた會津桑名の兵三萬、之れをどちらが官軍で、どちらが朝敵であると云ふ事を、ここで明にして了ふと他日迷惑が朝廷に懸る樣な事がありやしないか寧ろ之れは會桑と薩長の私鬪と看做すが宜からうと唱へた。而して之れに二三人が直ちに贊成した。

すると參與中の最年少者（年十九）の西園寺公が儼然として云ふには、

『若し此の戰を私鬪とするが如き事あらば大事忽ち到る』之れを聞いた當時豪傑を以つて世間に嘖々として稱讚されて居た岩倉公は膝を打つて『小僧克く云つたわい。其の通り其の通り』と贊意を表したので議忽ち決した。

朝廷は直に慶喜を以つて朝敵とし薩長兩藩の兵に討伐の命を下したのである。

慶喜は朝敵たりとの命下りしを聞くや水戸家累代の家憲並に父烈公の遺言が油然として胸に浮び、直に旗を卷いて大阪に退き、大阪より船に乘じて江戸に歸り、上野東叡山に蟄居して謹愼恭順の意を表した。茲に維新大改革の端緒が開けたのである。

此の西園寺公の言葉こそ、一言にして天下の事を定めたと云ふのであらうと思ふ。

讀書界のマスコット

佐々木、谷、谷脇

特色ある三先生の名著



古い文句だが、燈下親しむべきの候、讀書のシーズン、秋は物なつかしく我等の机邊に訪れる。

不景氣、緊縮、失業、爭議等々忌はしい生活苦から脱れて、靜かに新しい書物のページを開く時、むせぶが如きインクの香に、恍惚と陶醉する心地よさ。懐かしき書物、樂しき書物、精神の糧となり、生活の侶伴となる數々の書物。藥も時に毒となり、毒も用法に依つては藥となるが如く、この書物も亦その選擇を誤れば讀んで更に益なく、寧ろ身に害毒を及ぼすの甚だしいものさへある。が、左に掲げる三先生の著書の如きは全く有益無害、天下萬人、誰人が讀んでも面白く愉快に得る處の多い良書である。この特色ある三先生の名著、目下評判の快著二三を左に紹介する。

佐々木邦先生

謹嚴無比の大學の先生で、輕妙洒脱な滑稽小說の作者、我が佐々木邦先生こそは近代日本が生むだ偉大なるユーモア文學者である。

先生の小說は、どれを讀んでも面白い、倦まず飽かせず、心が明るく氣が輕くなる。中にも今賣り出しの『新家庭双六』は、家庭に、學校に、どこへ行つても大評判。樂天家で暢氣者の里見君と、その新妻德子さんの樂しい新家庭の、まま事に似た日常生活を鏡のやうに活寫したもの。皮肉諷刺、一讀吹き出さずには居られない程辛辣な夫婦生活暴露小說。定價は一圓七十錢、送料十二錢。

『脫線息子』は大學出のお坊ちゃん新太郎君と、快活でスマートな令孃秀子さんの戀愛を中心に、突飛で剽輕な人物が續出大活躍をする快小說、腹を抱へて轉げまはるやうな滑稽百出、全く面白い天下一品の滑稽小說。定價二圓、送料十二錢。

傑作中の大傑作『愚弟賢兄』は、今夏劇化せられて帝劇で上演、大喝采を博したもの、賢兄貢一君と、所謂愚弟貢二君とを主人公として、富豪名家の家庭が面白可笑しく描寫されて居る。賢兄なるが故に貢一君は貢二君の世話をやく。貢一君の愛妻貞子さんは、賢兄の內助者だけに一としほ聰明で且つ怜悧。愚弟貢二君も年頃となつては戀をする。この貢二君が白羽の箭を立てたのは果して何人？

讀み出したら止められぬ天下無比の諧謔小說。定價は二圓、送料十二錢。

此の他先生の著書としては、主權妻權（定價二圓二十錢）親鳥子鳥（定價二圓）世間相人間相（定價二圓三十錢）等數多あるが、孰れも大好評、賣れ行き百パーセント。

谷孫六先生



突如、彗星のやうに現はれて、忽ち百二十四版といふ稀有のレコードを作つた『岡辰押切帳』の著者、谷孫六先生は引續いて『孫六錢話』をものされた。前者は世界に類の無い金儲けの面白い指導書。貯金利殖、金儲の秘策公開と銘打つたもの。內容は悉く實地で叩き上げた斯道の達人岡辰老人の口傳。月給取もかうすれば金が溜る。商人は斯うやれば金が儲かる。資金なしで家が出來地面が買へる。貯金にも利息の二重取法がある。千圓貯金物語。空手四百圓。豪勢成金物語等面白い中に自ら金儲の秘訣が會得される肩の凝らない經濟書。一擧百餘版を突破した所以も、一讀すれば成る程と肯かれる。定價は一圓八十錢、送料十錢。

續いて上梓された『孫六錢話』は、面白くて爲になる日本唯一の金儲け讀本。金を貯めたい人、金を儲けたい人、金を使ひたい人等の必讀の指南書。すら〳〵とやさしく讀めてスグ役に立つ金錢常識讀本。學者にも文豪にも、まだ嘗て何人にも道破せられぬ獨特の境地を開拓した大快著。諷刺諧謔皮肉滑稽相次いで頤をはづすばかり。笑ひ乍ら金持ちになれるのはこの本の讀者ばかり。直ちに一讀をおすゝめする。定價は一圓五十錢、送料十二錢。



谷脇素文先生

『川柳漫畫うき世さま〲』は谷脇素文畫伯の名著。古今の名川柳千五百餘句に獨特の名漫畫を配して、諷刺あり、滑稽あり、洒脫輕妙、世態人情の機微を穿つてハチ切れさうな興味たつぷり、一見溜飲の下るを覺えしめる天下の奇書。執務に疲れた時、研學に倦んだ時、書齋に、應接間に、この一書を備へれば無聊と退屈を忘れ、淸新潑溂、和氣藹々たらしむる事請け合ひの定評あるもの。定價は二圓三十錢、送料十二錢。

この姉妹編として此度新刊されたものに『川柳漫畫、いのちの洗濯』がある。川柳に配するに名漫畫千二百餘。これに川柳大家選句入色刷口繪十六頁、中扉八頁といふ淸麗なもの、賣り出し早々重版をするといふ素晴しい人氣。失業や不景氣を託つ前に、先づ本書を一見せられる要があらう。定價は一圓八十錢、送料十二錢。

天下熱狂、大評判となつた大傑作小説のみを刊行する

「評判小説」愈々出づ！

興味津々、而も一讀感激の涙を湧かせ、これを味讀すれば精神の慰安となり、智識を増し修養となる良書こそ、我々の求むる良師良友であります。面白くて感激に富んだ評判の名小説をのみ選び、本社はこれを「評判小説」の名に於て滿天下に提供しようとするものであります。

評判小説は全集ではありません。一册づつ自由に求められます。しかし、これこそ永遠に生命ある名作を續々出版するもの、是非お讀み下さる樣おすゝめ致します。

内容は定評ある最高の傑作、定價は極めて低廉、全く奉仕的大出版！

評判小説の第一に選ばれた名篇

富士に題す

佐藤紅緑先生快著

……今日の日本にとつて、これ程意味深き小説はない……

……本篇こそ昭和文壇に聳え立つ劃時代的傑作である……

構想雄大、描寫深刻、壯重森嚴、熱筆よく人の肺腑を抉る。洵にこれ萬人必讀の大快著である

彼の大トルストイの『戰爭と平和』の壘を摩する不朽の世界的名作として評判が高い。

○かの日露戰爭が、日本にとつて凡ての意味に於ける切斷の一線であり、東海の一孤島を世界的に湧出せしめた尊き事實である以上、この一篇は日本人にとつて忘るべからざる至寶である。

○題材を日露戰爭前後にとり、當時の混沌たる世態人情、政治、戰況を精細に描き盡し、如何にしてわが日本國民があの大國難を切り拔けたかを目の邊りに展開して遺憾がない。

○永く秘められたこの驚くべき當時の事實は今再び我等の胸に甦つてく來る。

見よ、靈峯富士の雲表に聳ゆるが如く嶄然として興味の最高調に立つ大力作



佐藤紅綠先生

曾て從軍記者として親しく砲煙彈雨の裡に活躍した熱血の國士。―現文壇の耆宿たる著者が、二十餘年の長年月に渉つて如何に肝腦を碎いたか。

『モデル』は總て實在、――最近物故し或は現存する世間周知の人士である。

篇中活躍の人物を擧ぐれば、圓轉滑脫の妙を謳はれた大政治家あり、至誠謹直ために頑冥と罵らるゝ武斷的元老あり、愛孃と二十萬金とを取代へて危くも華族の面目を保つ老子爵あり、才貌一世の視聽を聳動せる女流教育家、國難を喰物にして巨利を占めたる老猾なる大富豪、盡忠報國家を棄て、愛人を棄てゝ戰線に佇るゝ若き騎兵中尉、父の爲家の爲に悲しき運命を辿る美しき麗人、正義と愛國の熱情に燃え立つ青年新聞記者等々。

こんなに面白く、讀み應へある小說はない。この莊嚴なる劃期的大名作こそ日本國民一人殘らずに讀んで頂きたいものであります。「評判小說」の第一に敢て選びし所以、是非一刻も早く御熟讀下さい。

◉定價 **金貳圓** 送料十四錢 （木村莊八畫伯裝幀 渡邊審也畫伯挿畫 四六判・函入美本）

東京本鄉 **大日本雄辯會講談社** 振替東京三九三〇



脫毛料の正しい知識

◇どんなものを選ぶべきか◇

醫學博士　奥津盤氏談

□美容と脫毛□

此頃のやうにクリスマス・ケーキそつくりな文化住宅や、オールバックにワンピースの奥様ぶりが流行となつて勢ひ婦人の服裝が皮膚を露はに出す部分をだん〳〵多くするために、美容上の必要から腕や腋の下、襟あし或は頸すぢ、その他手足のムダ毛を除くに脫毛料が盛んに用ひられてゐるやうであります、なる程婦人が髮の毛の房々としたのは美しいが、手足や顏にムダ毛の簇々と生えてをるのは色を黑く見せるばかりでなく、あたら麗人をも臺無しにしますから、トルコでは浴槽に脫毛料を入れて頭髮を除いては全身に一毛も殘さぬ習慣があり、トンガ人やユダヤ人、或は回教信者の間には整美の目的又は迷信から脫毛粉や脫毛膏をば盛に用ひてゐます、わが國でも德川時代には伊達好みから俠客とか、いはゆる通人の間には生え際や眉毛のムダ毛などを拔いたものであります。

□脫毛の方法□

一般に不用の毛髮は刈るか剃るのが普通でありますが、これが刺戟となつて、どうしても生え方が速くなり、濃くなる傾きがあります。

又剃刀では具合の惡い腋の下や、恰好の付けにくい生え際とか衿あしなどは、完全な脫毛料であれば却つて簡單で便利であります。

脫毛の方法としては、(一)『レントゲン』光線照射による法、(二)電氣分解による法、(三)藥物による法の三種を擧げることが出來ます。

(一)『レントゲン』照射法は一時に廣い面を脫毛することが出來ますが、直ぐに生えて來ますから繰り返し行はねばなりません、機械を要しますにより家庭で簡單に行ふには適しません。

(二)電氣分解法は根本的に脫毛します、先づ平流電氣の陽極の方を手に握つて、陰極に針を繋いでこれを毛穴に刺して數秒間電流を通じますと毛穴に小さな空處が出來ます。その時透かさず毛髮を引きますと易々と拔けますが、何分にも一本づつ拔くといふ手數が掛かりますから、廣い部面に應用するには困難であります。

(三)藥物による方法　支那では生石灰に硫黃を混じて用ひたやうでありますが硫黃は毒性がありますから常用には如何かと思ひます。普通には、カリウム、カルシウム、ナトリウム、ストロンシウム、バリウム等の硫化物に亞鉛華澱粉などを混じて作つたものが用ひられますが、元來が多少の刺戟性をもつ上に、純雜の度に甚しい差異のあるものや、配合の度合ひ、用ひる時間の程度によく注意して用ひる必要があります。

□之なら安全□

藥物による方法は最も簡便であり各人が必要の都度に直ちに廣い部分でも短時間に目的が達せられますが、以上述べたやうな缺點がありますから選擇を誤らぬやうにせなければ

なりません。それには大體次の條件に適てはまるものを用ひたならば、剃刀の使用のために起る毛穴が擴つて橙々の皮のやうに見苦しく硬張る虞れもなく、毛は七日か十日經てば又生えますが、しかし剃刀とちがつて毛根に及びますから再發はだんだんおそくなり、繰返して用ひる間には毛根が弱つてくるから毛は細くなり滑らかになる丈けでも充分に美容の目的が達せられます、それには、原料が精製されたもので刺戟が特異性皮膚でない限り殆んどなきこと、惡臭の少ないこと、適度の粘滑性物質を含んで適度に皮膚面を保護するものなること、陳腐でないこと、肌を荒さぬものなること、以上に注意して作られたものならば安心して用ひられます、最近『クリームハール』といふクリーム狀の脱毛料を試みましたが、これなどは刺戟性もなく、しかも著しい效果があります、その品質に於て外國品に比べて決して遜色なく、新鮮さに至つては到底彼地のもの丶及ばぬ利益があり恐らく脱毛料としては最も良いものと思ひます。

□博士の言葉から□

右の興津博士の實驗推奬にかゝるクリームハールは常に多毛に惱まれる方、いろいろの脱毛料に不安をもち又は滿足されなかつた方、毛が固く濃く生え方の速いのにお困りの方、效くが惡臭には困るといふやうな方には最も理想的なものであります。既に三越、松坂屋、白木屋その他信用ある大百貨店あらゆる階級の方々の間に愛用されて、る位であります。本社代理部（振替東京六六二九番）では既に發賣匆々からお頒ちしてゐますからお希望の方は代金一個二圓（送料内地十八錢その他五十錢）を添へてお申越くだされば お送り申上げます。猶粉末ハール試用分一圓七十錢、德用分三圓二十錢（送料各内地十八錢その他五十錢）もあります。今やハールと申せば高級安全脱毛料を代表し、脱毛料と申せば「ハール」の名は知らぬ方のない程著名になつてゐます、粉末ハールは使用に際して小皿樣のものに小出しして水で練りますとクリームが出來ますそれを脱毛したい部分にお用ひ下さい。

本當に救はれたと
心から感謝される
わきがに特效する新クリーム

秋の日ざしはゆるやかになつてもわきがの惡臭は未だ〳〵立退らといたしません。

かつてキング誌上に發表いたしまして以來御蔭で本當に助りました救はれました、と各地多數のわきがの方々から御滿足のお言葉を頂きましたオスミドールは實にわきが藥として百パーセントの效力を有する最新の效果的特效藥であります。

殊にオスミドールは單にわきがの惱みを忘れるのみでなく、高貴な香料を用ひてありますから芳香馥郁としてどんな場所に出ても汗臭い恥しい思ひもせず何處となく品位を高める事にもなる一種特別のわきが藥です。然もわきがは癒り難い痼疾の樣に思はれて居りましたが、このオスミドールを用ひますと至極手輕に然も殆んど人に氣づかれないで忘れた樣に癒りますので一度發表以來大好評を受けて居ります。御困りの方はお早くお試し下さい。

價は卅回料一圓八十錢、五十回料三圓、送料内地十八錢、領土四十五錢、御申込は本社代理部（振替東京六六二九）へ御願ひします。



人を惹きつける目の魅力！

近代的の美人か不美人か？は眼の美醜で決定されます

俗にいふ「目千兩」

人の容貌のうちで、先づ第一番に人を惹きつけるのは眼です。昔から、俗に「目千兩」といはれるほどで、どんなに輪廓を美しくしても、大切な眼が、晴れやかで冴え〴〵して居なかつたら、人に良い感じを與へることが出來ず、女としての出世成功は望めません。

それと反對に、パッチリと澄んで、如何にも涼やかな美しい眼は、人柄を理智的に氣高く見せ、他に多少の欠點があつても、非常な魅力をもつて人を惹きつけます。

これ程大事な、眼のお化粧を多くの御婦人方は忘れて居られます。あれこれとお化粧には苦心されながら一番大事な眼のお化粧をお忘れになるとはどうした譯でせう。

どうしたら眼は美しくなるか？

これが何の手數もいらず、而かも眼のために何のさはりもなく、使つて實に清々と氣持よく、それで見違へる程眼が澄んでくる美眼液が發明されて居るのだから文明の恩惠は有難いではありませんか。

それは美眼液パミールです。パミールは帝都復興の恩人ビアード博士夫人が、『科學の一番發達したドイツでも、世界の文明を一手に握つてゐる米國でさへも、眼を美しくするといふ事が、發見されて居らない今日、日本で美眼液パミールが發見されたといふ事は驚喜です。私も實驗してその効果に驚きました』と、[illegible]推奨の手紙を寄せられ、日本女[illegible]

界の第一人者、日本女子商業學校長嘉悦孝子先生が、

『私は藥化學に就ては、何にも知りませんが、パミールの効果には驚きました。七日つけたら鏡をごらんといふお化粧品はありますが、五分たつたら鏡をごらんといひたい効果の早いのには始めてゞす。早速丸ビルのリ・スの事務員たちにもさしてやりました所、まるで瞳が浮き立つ樣に美しくなり、みんな大喜びです』





云々と云はれた通り、全く世界一の美眼液で、今や社交界は勿論、歐米各國にまで非常な勢で愛用されて來ました。殊に舞臺に立つ男女優の間では非常に重寶がられ、殆ど愛用しない人はないといふ有樣です。

一滴！たゞの一滴で
見違へる樣に美しく

實に、パミールの發見は、眼のみにくい人には天來の福音とも申すべき妙液で、たゞ一滴で五分經つか經たぬ中に、ションボリ濁つた眼でも、鈴を張つた樣にパッチリと、黑眼がちに美しく澄んで來ます。それこそ小兒の眼の樣にまつたく天成の美しさに返らせるので、之を御愛用になつて居れば、何時でも晴れ／＼とした美しい眼の持主となつて居られます。

七つ道具の一つに

伯爵夫人　小笠原貞子

何時のことでしたか、婦人俱樂部誌上で、眼の美しく綺麗になるといふ記事を拜見して これは珍しい、ぜヒ一度試して見たいと思つて居りましたが、つい忙しいのと、忘れつぽいのでその儘になつて居りましたが先日酒井樣（貞子夫人のお里で酒井伯爵家）にお伺ひした時、その話が出ましたので、早速買つて見ました。

家に歸つて、伯爵を始め、明子、春枝、富士子、まり子、などに點じてやりましたところ、見る／＼ハッキリとして、瞳は凜と涼しう、大變美しくなりました。私も用ひましたが、非常に爽快を覺えました。パミールは、婦人の七ツ道具の一つに入れたいと思ひました。

兎角、かうしたあまり効果の早いものには、副作用が伴ふものですが、パミールには、絶對その心配はありません。それは、內外醫學藥學界の大家の等しく推奬して居るところです。有名な佐藤學士は、

『從來多くの眼科醫が用ふる藥の中にも、パミールに似た効果ある藥品はあつたが、それ等は何れも劇藥か毒藥かで度々用ふる時は、中毒する等の副作用があつたが、このパミールを實驗して見るに全くその樣な危險がなくて誰でも安心して用ひられる。而も度々用ふる時は、眼がいよ／＼冴え澄んで活々とした美しさとなる事は、美容學上實に偉大な發見といふべきである』と云はれて居ります。

パミールは約百五十回量が壹圓八十錢、約三百回量貳圓八十錢、約八百回量六圓、送料內地十八錢、臺灣滿鮮外國五十錢です。どうぞ、ぜヒ御愛用の上、美しい近代的の眼の持主とおなりなさいませ。尚パミールは、三越、白木屋、松坂屋、松屋、高島屋等の大デパートを初め、全國有名な藥品店、化粧品店で販賣して居りますが、いよ／＼評判になりますので、近頃パミールを眞似た類似品が出來て居りますから、お求めの節はよく／＼御注意を願ひます――東京市本鄉區駒込坂下町

大日本雄辯會講談社代理部（振替東京八六二一九番）



喘息病の征服に
喘息エキス

既に定評ある

五年十年の慢性痼疾も夢の樣にケロリと鎮り、
發作の前兆ある時用ふれば奇妙に豫防出來る。

◇効力注射以上と實驗者悉く驚嘆感謝!!

最早大衆的合格品

『喘息エキス』が本社の雜誌に發表されてから早くも六ケ年の時日を經過しました。その間絶えず實驗成績を報道し絶對確信をもつて御推奬して參りました。事實『喘息エキス』は他の一時的の鎮靜藥や一時は押へる事は出來ても習慣性になる類のものとは、全然その性質を異にし眞に効力の著しい事から喘息藥中随一の名聲を博し、其の愛用者は全國津々浦々にまで及び最早社會的試驗の合格品であります。

前九州日報記者古賀誠氏は十數年來難治の頑強な喘息持ちで醫者も藥もないと諦めて居た程でしたが、本社の喘息エキスを試みられてから全く鎮靜して、今では喘息のゼの字もなくなり煙草も酒も平氣で飲めるしマラソン選手そつちのけの健康になつたと心から感謝を寄せられて居ります。又澁澤子爵堀内中將閣下を始め、その他知名の士にこの『喘息エキス』を愛用されて居る方も少くありません。

百餘本の注射も今は夢

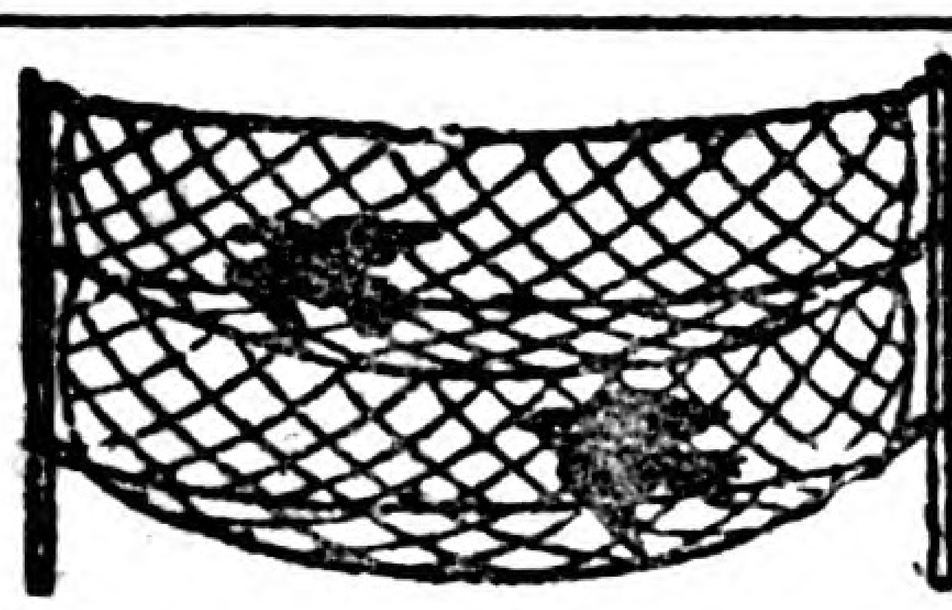
千葉縣の渡邊某氏は書を寄せてアドリナリン注射を百五本も要せしものが本劑を用ひ始めて以來忘れた樣に治つたと御通知がありました。又殆ど横に臥して寢る事を得なかつた愛知縣小坂井町市川氏はわざわざ來社され本劑により今や全く喘息の征服が出來たと禮を述べられました。

面白い程よくとれる

捕鳥用具

―我が國特有のカスミ網―

△一擧に數十羽以上樂々とれる
△用法が頗る簡單で取扱ひ輕便



圖の樣に張つて置くだけで、雀、アヲジ、頬白、目白、鶯、ノジコ、其の他同類の小鳥が、面白い程よく捕れる、手數がかゝらず取扱ひが簡單で銃砲の樣に面倒がないから、都市の庭園内でも自由に使用することが出來ます。細い絹絲で編んだもの故、疊めば六間の網でもポケットへ入る位の輕量になりますから携帶にも誠に輕便であります。獵期が來ました、早速お試し下さい。

定價	
長さ三間(高さ六尺)	四圓二十錢
長さ六間(高さ六尺)	八圓四十錢

送料	
内地	拾八錢
領土	五拾錢

東京市本郷區駒込坂下町
講談社代理部
振替口座東京六六二九番

申込次第說明書進呈

死を覺悟した患者が

茨城縣片根氏は從來如何なる方法も奏効せず絶望の餘り、本劑を試みる最後のものとし若しそれで効果のない時には死を覺悟せる旨深刻な書に接しましたが幸ひ本社の滋藥が著効を奏し、今では酒を呑んでも發病せず全快同樣との感謝狀に接しました。

廣島市の安宅某氏は三十餘年間の慢性喘息で廣島市中の殆ど名醫及び大學醫科で治療を受けたが終熄せず、閉口してをりました處本劑により昨冬より全然發作を見ないとの御手紙を頂きました。

報告者總數百三十一名中

尚最近(本年八月中)本劑製造元に寄せられた愛用者からの御報告は、次の如く異常の成績を擧げてをります。

▽喘息エキスにより著しき輕快者……二四
▽使用以來發作せずと云ふ者……一五
▽全治と報告ありし者……七
▽相當效果あり愛用すといふ者……七八
▽不變若しくは無効といふ者……七

合計百三十一人でありますが、喘息エキス數萬の愛用者を思へば更に〳〵、どれだけの全快輕快者を出してゐるか分りませぬ。

喘息エキスの効く理由

前記のやうな好成績は、從來の喘息藥に徴すれば實に異數と云はねばなりませぬ。これは本劑が最も喘息の病理に適合してゐる實證に他なりませぬ。

由來喘息(氣管支喘息)は氣管支筋に於ける發作性の痙攣でありまして、素人が考へてゐるやうに決して咳嗽の病ではないのであります。故に舊式の所謂たんせき喘息の藥の類では、浴びる程服んでも激烈な發作を鎭靜せしめる効力はないのであります。然るにこのエキスは直接喘息の本體たる氣管支筋の痙攣を鎭靜消失せしむる新製劑でありますから猛烈な發作が起つて息苦しくなつた場合この喘息エキスを一匙か二匙服みますと不思議や大抵は大風が凪いだ樣にケロリと治り、又發作の前兆ある時に服用すれば奇妙にその苦しみを避けて了ひます。

その効果は實に覿面服用後直に頓挫的に現れ同時に喘息原因である處の氣管支痙攣に直接作用して之を鎭靜せしめますから所謂根本的治療を促進させる事になります。

喘息治療の秘訣

要するに喘息根治の秘訣は輕い中に治療することであつて少しでも發作の氣味があつたら一刻も早く猶豫せずこの喘息エキスを御用ひになり發作を押へ〳〵して行く内に何時か忘れる樣になり根治させることが出來ます。

色々な痔疾に最も確實な原因療法

難治の重病や痼疾にも根本的治効する

歩行不能の重症者も一週間て快癒する

橋井堂　松本浦太

塗布挿入薬のみては治らない

或る專門家は統計の結果我國民の半數は痔疾者であると言ふことを發表して居りますが全然架空の說として否定する事は出來ません

何故そんなに痔疾患者は多いのでせうか？それに大いなる理由があります。痔疾は局部には苦痛は甚しいが、肺結核などの如く直接生命に關することが少ないと言ふ所から一般に輕く見る傾向があつて苦痛の時は手當をするが喉元過ぎれば暑さも忘るで一寸良くなれば、直ぐ治療を怠るから時々再發遂に慢性狀態となつて仕舞ふと言ふのと、もう一つは治療方法の上に多くの缺點があつたからでありました。即ち在來の療法は悉く對症的所謂、膏藥貼り式の方法であつて、痛みがあれば其所に藥をつけて痛みを鎭め、腫脹があれば出血があればと、夫々その症狀にのみ對して、手當をして居たのに過ぎず何等其の原因を究めて療法を施すと言ふことをしなかつたから、一時は苦痛がなくなつても直ぐ再發すると言ふ譯でありました。

效果的確の原因療法

又多大の苦痛を忍んで多額の費用を投じて結紮法とか切除法とか燒灼法とかの手術を受くる人もありますが、一年も經ぬ内に再發の患部を切斷手術を繰り返しても再發と言ふ様な例が多いと言ふのは矢張り方法が對症的であるからではないでせうか？結局從來の對症療法では一時の部分的苦痛を緩和する丈で決して根本的には治らぬので、

どうしてもこれは原因療法は成るべく簡單なものでなくてはならぬと言ふ說が近時多くの專門諸大家間で盛に唱へられる様になつて來ましたが、玆にその目的に適ふ而も頗る効驗著しい「ヘモール」なる根本的治療藥の見出されたことは痔病に呻吟する人々にとつて大いなる福音であり又行詰つた痔疾治療界にとつて喜ぶべき報道であります。

歩行不能の重病者も一週間て

元來痔疾は人體の血液中に或る特殊なエネルギーを供給してゐる不思議な臓器即ち痔靜脈の一部が鬱血し停滯不通となる病毒素が生じる爲め起るのであつて其處に結果として種々の症狀例へば痔核、出血疼痛、掻痒裂傷等となつて現はれるものでありますからその原因を除けば如何なる頑固な痔疾でも根本から徹底的に治癒させることが出來ると言ふ、理論に立脚し更に醫學博士松本經常先生の處方を基礎とし研究創製されたのが此の痔疾内服藥「ヘモール」であります。

永い間多數の痔疾患者に實驗した結果痔疾に根本的治効のあること、實に意想外の効果あることが認められ現に歩行も不能であつた重病者を僅か一週間の服藥で全治させたと言ふ樣なことから更に非常な評判となつて居ります。これは服用しますと痔疾の病原である痔靜脈に作用して鬱血停滯を除き病毒素を全部排泄して仕舞ひますからどんな症狀のものも全く根本から治療されるので同時に粘膜收斂消炎の三ツの作用によつて痔核の如きはスツカリ消え出血は止み疼痛痒みその他不快な痔疾の症狀は悉く除き去つて五年十年と惱んだ重い痔疾でも此の「ヘモール」にて助かつた例が少なくないのであります。

偉効を立證する實例

▲四十五歳の男子で內痔核症の爲めに全く歩行することも出來ないと言ふのに此の「ヘモール」を用ひさせた處、三日目に至り大便があり出血は止んで苦痛はなくなり五日目には自由に歩行が出來る樣になつて、痔核はスツカリ除かれ八日目には全快仕事には何等差支なくなつた。

▲三十七歳の婦人痔核でこれも歩行不能に陷り苦悶呻吟して居たがこの「ヘモール」四日間の內服で不思議の樣に全快。

▲ひどい脫肛に惱んでゐたのが「ヘモール」を十數日の連服で嘘の樣に全快。

▲肛門裂創痔が十二三日の服用で拭つた如く快癒。

▲痔核化膿症で永い間苦んで居た税務官吏の方がこの「ヘモール」數日分で忘れた樣に全治し今日に到るも何の異狀も起らないと言ふ實例は未だ隨分澤山ありますが中にこれ迄どんな方法でも治らなかつたものが之で容易く全快したと言ふ例の少くないことは誠に「ヘモール」が在來の塗布藥挿入藥の及ばない偉大な藥効があること極めて合理的な治療法であることを證據立てゝゐるものと言へます。

極めて簡便有效な療法

この「ヘモール」を内服すれば痔疾が根本から治療されると言ふのみでなく一時的對症療法の樣に不快を感じながら藥をさし込んだり膏藥貼りをする等の手數も全くなく單に内服藥を用ふるのみで何等の手當を要しない、ですから治療上どれ丈便利であるか知れません故に之は痔疾に唯一の簡易療藥として推奨し得られるのであります。

勿論何等の副作用を起すことはないので却つてこれを用ひれば胃腸の作用を調導し便秘を整へますから妊産婦授乳婦も用ひて極めて良結果を納めて居ります。痔疾に困惱される人には切におすゝめいたします。

食餌の仕方一つで……必らず

胃腸病は治癒する

記者

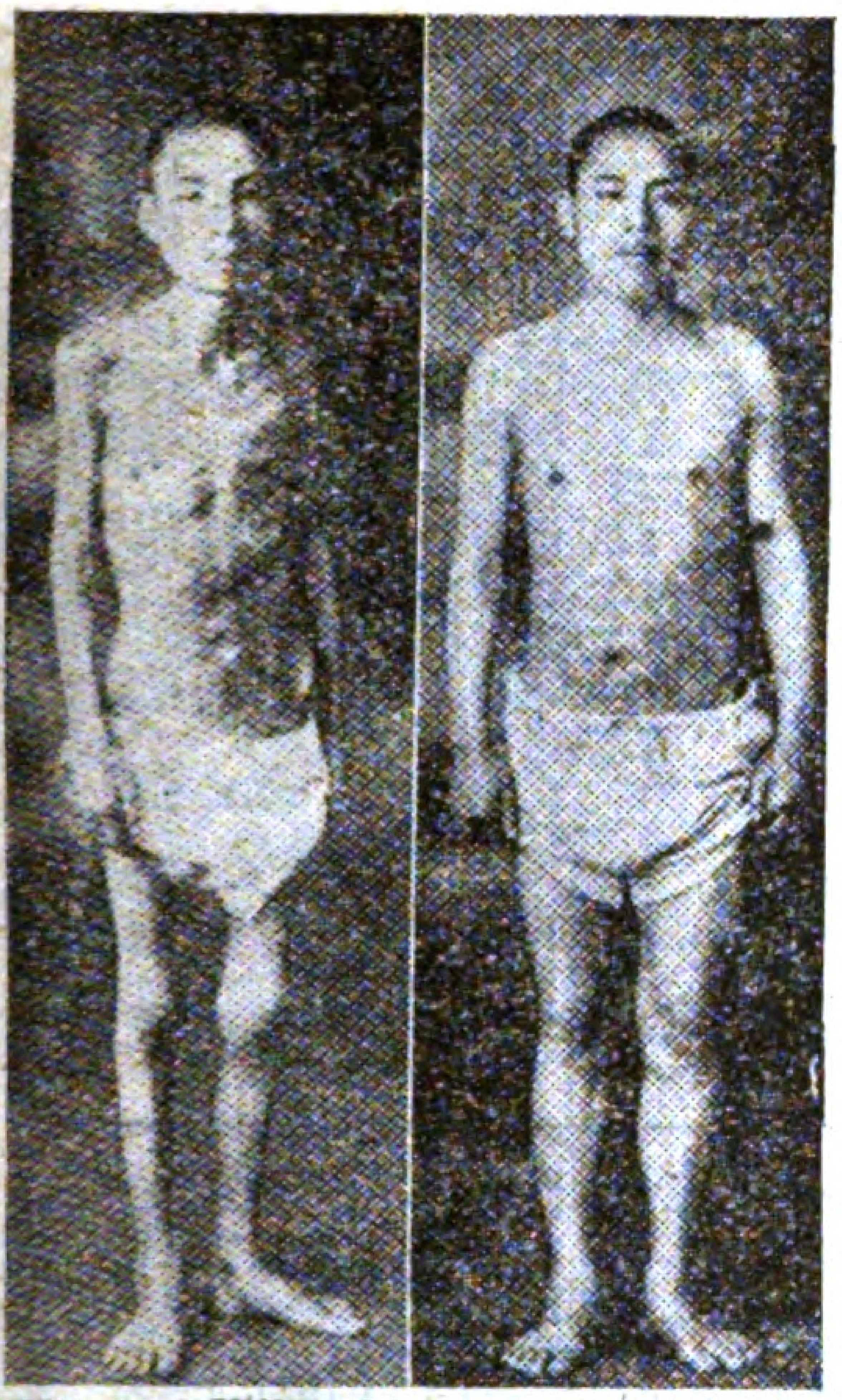
正しい食餌法を行へば胃腸病ぐらゐ治り易い病氣はないのに、多くの人は醫者や藥にばかり頼つて、治し得る自體の能力も胃腸に元氣づける工風も忘れて居るのは本末を誤つて居ると謂はねばならぬ、それが爲に直ぐ治る可き病氣も慢性になり、十年も廿年も苦しんでの揚句、遂には諸病を併發し再び起つ能はぬ樣になる例も少なくなくそこで

根本療法

たる正しい食餌法とは何かと云ふに、從來の樣に胃腸病患者が粥やスープで衰弱し乍ら寢込んでしまふ消極療法と正反對に病中も普通食を平常通り食べ運動や仕事し乍ら積極的に病氣を征服する方法で、理想的で安全、そして誰にも行ひ易い爲、近來非常な勢ひで實行され驚く可き

治病率を

示して居る其治療方法は過般中村醫學博士が動物試驗の結果、醫學的に折紙を付けたラヂウム溫灸器で臍の上から腹を溫めて、衰へた胃腸の機能を健康者同樣に力づけ、普通食を食べるので、昨日迄お粥も消化できぬ樣な病體が、治療一回後から鰻丼でも洋食でもドシドシ消化し榮養分が悉く吸收されて元氣づき次から次へ空腹を感ずる樣になり二三日後には



胃下垂及胃アトニー症と診斷され醫師に藥餌に凡ゆる方法も効なく八年間惱み通し遂に死を宣告された重症患者がラヂウム溫灸使用十日目に離床し（左）二十餘日目頃から食慾盛んとリメキ〳〵恢復し五ケ月目（右）に五六貫の體重を増し醫師な[illegible]驚かした[illegible]の金澤市上柿木畠廿一の本多由雄氏

健康體に

恢復する等誠に嘘の樣な事實である。此の療法は最初醫學界でソンナ理想的に行くものかと問題にされず中には馬鹿げた話だなどと言ふ者も有つたが絶對的の實際効果は遂に醫學界賞讃の的となり、全國各地多數の醫院病院の採用となり今では、廿餘名の醫學博士や數十名の醫學大家から効力證明書や推奬狀まで寄せられて居る。又至極簡單に誰にも出來るので

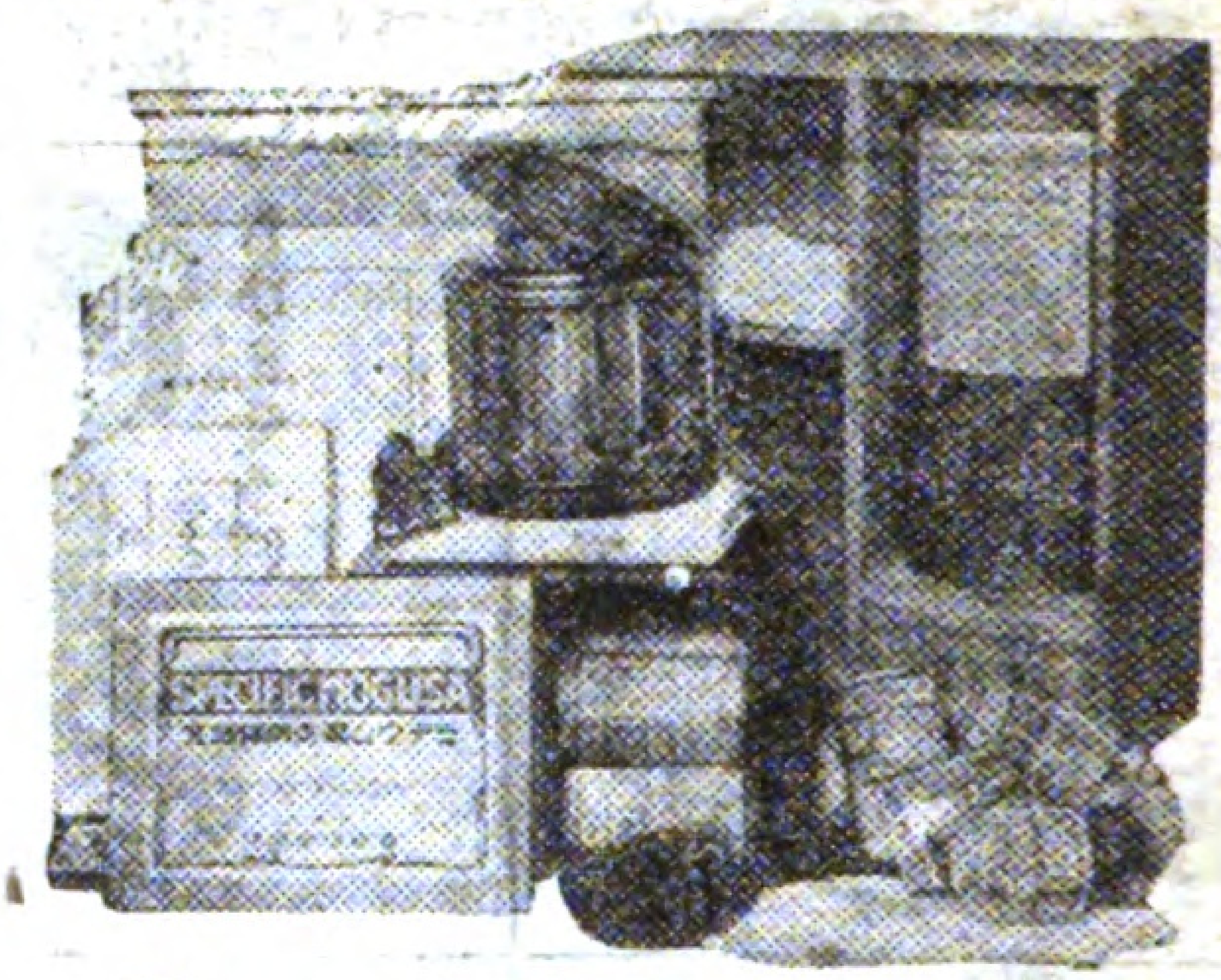
家庭療法

として上乘のものであることは勿論このラヂウム溫灸器の出現により世界に於る胃腸病國たる日本も、遠からず胃腸病患者の絶滅が出來得ることも敢て架空の推測でないことを附言しておく。

特に推奬する所以

專賣特許ラヂウム溫灸治療器は三菱の佐藤博士の如きも自身の胃腸病に用ひて理論より効果の偉大なるに一驚され會ふ人毎に吹聽して居るほどで、その効果に就いて之以上詳し

特製温灸器一揃



本器に集る感謝の聲

病體を癒し易々肥滿した人々

× 午後毎日二回宛使用致し候處逐日體量相增し、三ヶ月程の間に十三貫五百匁の體量が十八貫匁と相成り各症狀も忘れてしまひ、健康體と相成り誠に驚き居り候。玆に厚く感謝の意を表し申候。 岡山縣林野町 中山恒三郎氏

× 五年間病み通して骨と皮ばかりになり、近所の人から肺病だかと言はれた九貫の體が治療二週間で全快し三ヶ月で七貫匁も肥りました。 山口縣萩町奧玉江 田原直政氏

× 小生は去年より胃腸病にかゝり今年の一月から病院發見のラヂウム温灸療法を行ふ樣になりました。そして三月迄引續き治療しました處、十四貫から十六貫二百匁迄體重增加致しました。 盛岡市馬場小路 駒木五郎氏

× 病中七貫迄減つた私の體が温灸二ヶ月で十三貫になり、兩親は泣いて喜び近所の人も驚いて居る。 神奈川縣澁谷村 柏木千代氏

× ミイラの樣になつた肺病の私がラヂウム温灸器使用約四十日間で二貫匁肥り、全快した歡喜は到底筆舌には盡されません。 姫路市橋本町 上野本次郎氏

× あらゆる病院と大ていの藥で治らぬ胃病と肋膜炎が治り四貫匁も肥つて全快何と感謝の言葉もない。 東京府下下高井戸 明瀬富美子氏

× 小生事兩親の反對を斷然退け温灸治療を開始したる處約六日間にて十二貫九百匁が十三貫六百匁に增加し盲腸手術による腸カタルで衰弱し切つて居た身體も日に見る如く元氣を快復したので、先に反對した兩親始め近隣の人まで本器の偉大なる効果に驚歎して居ります。 埼玉縣北葛飾郡高野村 藤城精氏

× 僕は無病だが肥り度いから温灸を行ひ樂々一貫五百匁肥つた。 市外世田ヶ谷鶴ヶ岡 船津完一氏

× 私は温灸のお蔭で近頃大層元氣になりました、體重も八貫位でしたのに四五ヶ月間に十二貫餘になりました。厚く感謝して居ります。 大連礪津町八一 赤羽文子氏

い說明を必要としないが只この温灸が胃腸病に卓効を奏すること如斯であるばかりでなく其の治病範圍は極めて廣く特に今日までに目立つて好成績を收めましたのは、慢性胃腸病、婦人病、神經痛レウマチス、血行障害、體質虛弱者、新陳代謝機能障害、冷え症等で、各種の病氣治療中體の衰弱を防ぎ營養を旺にする意味に於ては實に治病上の大發見なりと斯道の大家口を極めて激賞して居ります。殊にこの温灸療法は舊來の灸術とは全然別種の療法で熱くもなく痕の出來る心配もなくて頗る氣持よく、且効果の著しい事から目覺しい流行を來し、今日では政界財界あらゆる上流家庭から大歡迎を受け、到る處温灸熱が沸出來ました。またそれ丈け似寄りの機械も澤山出來ましたが實際的効果と器械の精巧な特質艾とラヂウム發法裝置を施し然も價格低廉な點に於てこの專賣特許ラヂウム温灸治療器こそ、自信をもつて天下百萬の愛讀者諸氏に推奬致します。」

ハガキデ申込次第百卅頁の美本

說明實驗錄を進呈

定價

藥及特效艾五週間分付 特製桐箱入一揃 拾參圓
荷造送料 內地八十錢 領土一圓

補給用藥品及艾五週間分 三圓五十錢
荷造送 內地三十錢 領土六十錢

尙神經痛リユーマチ肩のコリ其他慢性諸病の局所療法としては至極簡單な特製懷中型があり、之はポケツト中でも旅行中でも使用出來ます。

藥及特效艾五週間分附 「製桐箱入一揃 拾圓
送料 內地三十錢 領土一圓

補給用藥及艾五週間分 二圓七十錢
送料 內地三十錢 領土六十錢

發賣元 大日本雄辯會講談社代理部
東京本鄉駒込 (振替東京六六二九)

キングと家族

大野利一郎案　秋風畫



御注文の仕方

○本社發行の書籍雜誌は、お近くの書店でお求め下さい。若し品切で御手に入らぬ時、又は近くに書店のない方は、直接本社へ御注文下さい。

○本社への御注文は前金に限ります。

○御送金は振替貯金が一番安全で且送金代が安くすみます。振替貯金の用紙は郵便局にあります。その使ひ方も局でよく敎へてくれます。

○郵便爲替や郵便切手代用でも結構ですが、郵便切手代用の時は必ず一割增に願ひます。

○爲替や切手を封入した郵便物は、ぜひ書留郵便に願ひます。

○代金引替と集金郵便は一切扱ひません。

○御注文書には必ず書籍名なり雜誌なら雜誌名と何月號からといふ事をハッキリお書き下さい。

○御住所と御名前とは、ぜひ楷書で願ひます。

○御注文は大日本雄辯會講談社營業部宛に願ひます。振替口座は東京三九三〇番です。

○代理部への御注文は大日本雄辯會講談社代理部宛に願ひます。代理部の振替口座は東京六六二九番です。

○本誌へ廣告掲載御希望の方は大日本雄辯會講談社廣告部宛御照會下されば、詳細御報知御相談に應じます。

定價表

册數	國内及滿洲支那（送料共）	諸外國（送料共）
一册	金五拾參錢五厘	金六拾八錢
三册	金壹圓五拾錢	金壹圓九拾五錢
六册	金貳圓九拾四錢	金參圓八拾四錢
十二册	金五圓六拾四錢	金七圓四拾四錢

◎特大號で定價を上げた場合は、その增した分だけ右表の外に頂くことになります。但し前金にて數ケ月分お拂込の方は、そのお預り金の中より差引計算致しますから、其の都度御送金には及びません。

昭和五年九月三日印刷納本
昭和五年十月一日發行　第六卷第十號

毎月一回
一日發行

編輯兼發行人　淵田忠良
印刷人　中田福造
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍

東京市本鄕區駒込坂下町四十八番地
發行所　大日本雄辯會講談社
振替口座東京三九三〇
電話小石川（八六）一三二四・一三二五・一三二六・三一一五・三二二一・八六〇一・八六〇二・八六〇三

元取次店　東京堂・東海堂・北隆館・大東館

Published monthly by the Dai Nippon Yubenkai Kodansha. Tokio, Japan. Entered as second class mail matter at the P. O. at Los Angeles, Cal., U. S. A.
KING 大正十三年十一月二十日第三種郵便物認可 昭和五年九月三日印刷納本 昭和五年十月一日發行（毎月一回一日發行）

